

ありふれた職業で世界  
最強（女）と文字使い  
（ワードマスター）

アルテール

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『金色の文字使い　く勇者四人に巻き込まれたユニークチートく』の小説が少ないから書きたい！そして『ありふれた職業で世界最強』も書きたい！

←  
それじゃあ勘違い系に挑戦してみよう!!

←  
でもそれじゃあヒロインはどうする？できればハーレムにしたいなあ

……

←

ハジメ君が邪魔だからハジメちゃんにしてメインヒロインしよう！

← ← 主人公は丘村日色の言動と容姿、そして文字魔法を持った主人公にしよう！

← ← 結果この小説、反省はしているが後悔はしていない。

基本的は息抜きに投稿です。

この小説は原作キャラTS要素があります。

矛盾点？無視しちまえよそんなもの。

よろしくお願いします。

# 目次

前日談〜異世界召喚前〜

文字使い日記① | 1

八重樫雫（幼少期）兄を知る |

24

文字使い日記② | 41

僕の大切な友達（↑ここ重要）前編

60

僕の大切な友達（↑コレ重要）後編

73

文字使い日記③ | 90

ヤンデレに萌え要素？ねえよそんなも

んby赤ローブ | 111

幕話 ありふれた少女の恋愛事情

132

文字使い日記④ | 152

文字使い日記⑤ | 164

白崎香織は恋敵を知る | 172

原作開始〜フラグだらけの異世界巡り

文字使い日記⑥ | 199

本は神聖なもの異論は認めないby本

バカ | 211

魔法陣ってロマンあるよなby文字使

い | 223

話があまり進まないからタイトルが思

いつかない！の回 | 235

ステータスプレートが何の材料で出来  
ているか気になる俺氏 by 赤ローブ

トラップは主にバカ共のせいで引つか  
かる

247

たとえ命を懸けてでも 上 | 398

文字使い日記⑦

265

たとえ命を懸けてでも 下 | 421

無能ちゃんは今日も頑張る

273

奈落の底で少女は叫ぶ | 460

ステータス差

290

少女の本質 | 487

南雲ハジメという少女とは 上

魔王の生誕 | 516

301

怨敵との再会 | 537

南雲ハジメという少女とは 中

怨敵との決着(ただし一人は寝ぼけて  
いる模様)

310

560

南雲ハジメという少女とは 下

幕間 少女達は想いを胸に歩き出す

323

587

月下での決意

343

文字使い日記⑧ | 614

何故封印されているヒロインは大半、 裸なの？by神代	—————	642
封印の化物の登場（ただし難易度はべ りーハードな模様）	—————	659
少年少女は語り合う（ただし一人は口 リババア）	—————	696
幕間 かつての悪夢がもう一度	—————	714
少女達は仲が悪い	—————	741
最奥での死闘①	—————	772
最奥での死闘②	—————	806
幕間 帝国の使者と勇者達	—————	844
反逆者の居場所と謎の記憶	—————	860

日色君のギリギリ一線を越えないお仕 置き!?(白目)	—————	889
旅立ち	—————	905
▼やせい の ウサ耳 が 現れた	—————	923
!	—————	923
シアの事情と帝国兵	—————	949
ハルツエナ樹海	—————	979
長老会議と交渉(脅迫)	—————	1003
忌み子の謎	—————	1034
ララシーク・ハウリア①	—————	1051
ララシーク・ハウリア②	—————	1067

## 前日談く異世界召喚前く

### 文字使い日記①

■月■日

日記が持てるようになったことと、ペンを買ってもらったことを記念に五歳から日記を書いていくことにした。

いや、まあ、別に見る人なんていないと思うが単なる気持ちの整理程度にしか書いていないため適当なのはご愛嬌だろう。

では、吾輩は転生者である、現在は五歳、名前は神代日色という。

やっぱり名前の無い猫風に言ってしまうと何やらペンが進まなくなってしまう、普通に話そう。

俺は転生者だ。ある日、アボーンと殺されて、神々しい雰囲気(笑)の女性(神w)に特典をアボーンと渡され、アボーンと転生された哀れな転生少年Aである。

前世の記憶はあるが死ぬ瞬間は覚えていない。

女神に転生してもらおうわーと言われ、ファンタジーの小説の世界にレッツゴーや的な

ことを言われたんだわ。

モチのロン私は拒絶した、転生してもらうことは感謝している、だが平和な世界にしてくれと。

それを言った神様はこう一言、

「え？嫌ですけど」（意識）

思い出すだけで腹立たしくなってきた。やはりあのクソ神は死ぬ、氏ねじゃなくて死ぬ。

閑話休題

そんなわけで俺が貰った特典（強制）は『文字魔法』というものだ。

『文字魔法』  
ワード・マジック

それは『金色の文字使い／＼勇者四人に巻き込まれたユニークチート／＼』というラノベに出てくる丘村日色という主人公の能力だ。その能力は簡単に言えば書いた文字の意味の現象を現実を起こすという能力だ。



例えば地面に『硬』と書けば地面が一定範囲硬くなったり、刀に『伸』と書けば『13kmや(ドヤア!!)』ができたりするのだ。……まあ、流石にそこまで伸びないと思うが。

とまあ、異世界に飛ばされなければ嬉しい特典なのだが、異世界にはどれだけ頑張っても必ず飛ばされるらしい、おい、ふざけんな神様。

飛ばされる異世界は神が世界を支配している『トータス』というものらしい。

わかっただろうか？ 『ありふれた職業で世界最強』の世界である。

ああ、なるほど神はもう一度死んで来いと言っているらしい。

H A！H A！H A！救いないじゃん！無理じゃん！俺絶対生き残れる自信がないよ！?

とまあ、そんなわけで俺は生き残れる可能性を1%でも上げるために前世では行っていなかった運動を積極的に行うことにした。

——が、ここで問題が発生した。

特典の影響なのか、元からコミュ症な俺だからなのか神様が俺の肉体に細工をした。

わかりやすく言えば、容姿が丘村日色になり、言動が鋭くなってしまうのだ。

つまり、言葉をオブラートに取り繕うことができず、他人をイラつかせてしまうのだ。文字魔法で治せるかなと思っていたが——そもそも文字魔法が使えなかった、は？と言いたくなり、気づいた。そう、文字魔法とは魔力を使って文字を書き、その意味の効果を起こすものだ。

つまり、魔力がないから使えませんが、異世界まで待てよバカヤローらしい。

結果、友達がない。(涙目)

……ちよつと泣いていいですかね？

(・▽・)月(・ω・)日

原作に備えて運動能力の向上と異世界から戻って来た後のために毎朝起きて、ランニングをし、夜は勉強。

まるで小学生がやることではないと思うがまるでゲームキャラを育てているみたいで楽しかった。

一応大学を卒業していたが抜けていた知識があったり、わからなかった所があった為、やるたびに「へーなるほどな」となることが多かったし。

こっそり親父の本や、お小遣いを貯め高校生専用の勉強の本を買ったりし、小学生一年生の頃にはもう高校一年生までの勉強は完璧にマスターしていた、だが、これで安心してはいけないなぜなら記憶とはいつか忘れてしまうものだと前世の隣のおばあちゃんが言っていた気がする、このまま復習を続けていくことを決めた。

運動は朝のランニングでは足りないと思い、母親に相談してみたところ選ばれたのは剣道だった。

いや、なんで？え？近くにやっっている道場があるから？  
初めてお母さんを殴りたくなったような気がした。

(「・0、」)「月？(／／▽／／)？日

剣道を初めて数ヶ月が経った。

剣の腕は上達していると思うのだが、常にある問題に頭を悩ませている。

察しただろうか？

そうです、言動です。

どんな人が相手でも一切変わらない言動が、相手からしては喧嘩を売っているように見え、よく剣道に先生に怒鳴られることがあるのです。

メンタルが少ない俺は内心絶叫、だけど表情は鋼鉄の様に変化ナツシング。

辛い、心底辛い。

それでも、生き残るためだと考え、真意に取り組んだ、昔からそういう地味な作業には慣れているのだ。

継続は力なり、だ。

ブラック企業で生きてきた俺の實力を舐めるんじゃないやねえ!!三日間徹夜なんて当たり前なんだぜ!?

何度も基礎を繰り返し、ネチネチと影から聞こえる悪口に内心号泣しながら頑張ること数ヶ月、初めて全国大会で優勝した。

泣いた、本当に泣いた、号泣したよ内心はな!!地域大会や地方大会を勝ち進むたびに

強敵と出会い戦うたびに自分の成長が感じられた。

あれ？俺そんな戦闘狂だっけ？違うよね？どうして剣道にハマっちゃたの俺？

確かにジャンル違いに気づいたのは全国大会に優勝した後だった。

本当に、どうして異世界なんか飛ばされるのか？飛ばされなかつたらいい人生を送れるのに。

これも全てあの神のせいだ、エヒト神よりタチが悪いのかもしれない。

いや、まあ、こんな神様ボディを作ってくれたことには感謝するが……一里ぐらい。

(\*、▽、\* ) 月 | ϕ ( ? | ? ) 日

本当に思うのだが、剣道で女子に面！するの辛くね？え？辛くない？そうっすか。

目の前にいる胴衣を聞いた少女の面を体勢を半歩ズラすだけで避け、紙一重で避ける。

しかし少女は止まらず、胴、籠手、面、多種多様な攻撃を放つが俺は時に竹刀で剣戟の軌道をつらし、首を傾けることで避け、足をずらし体の重心を動かす事で滑らかにヌルヌルと動き続ける。

うん、月を7割がた蒸発させたタコ型生命体の気分だ、ヌルフツフツフ!!

さてとそろそろ反撃ですかね。

襲いかかる胴をわざと竹刀で受け体勢を崩れさせる。

「……………面ッ!!」

その隙を逃すまいと上段で面!と襲いかかる少女に合わせるように俺も竹刀を上段で振るう。

竹刀と竹刀がぶつかる直前、竹刀を動かし、襲いかかる竹刀の機動を変え、そのまま彼女の頭に面を取る。

これは面打ち落とし面というらしい。

「面!」

俺の掛け声と共に少女に面を決め、立ち会いが終了する。



「……………フウ」

胴衣を脱いで、暑苦しい空気から解放される。

最近思ったこと、剣道は強敵との立会いは楽しいが暑い。

俺、暑いのは苦手なんすよ、おやびん。

そう内心ではっちゃけていると、隣に一人の少女がやって来た。

「……何の用だ、ポニー」

「何？私が隣にいたらダメなの？あとポニーは止めなさい、私には八重樫雫という名前があるのよ」

そう言いながら俺の隣にスपोर्टドリンクを飲みながら座った八重樫雫。  
本当にどうしてこうなったのだろうか？

### 八重樫雫

それは原作のキャラで主人公南雲ハジメのヒロインの一人だ、剣道を習っており、主人公たちの始末に巻き込まれる苦労人系ヒロインだ、通称オカン。

祖父に剣道を進められていたために可愛らしいものが欲しい欲求を幼初期から殺し続けていたために女性らしさがパツと見では無いが本当は可愛らしいものが大好きな少女だ。

そんなギャップ萌えを引き起こしてくれるようなヒロインのだが自分からすれば死亡フラグが迫ってきてきているような気しかない。おい、誰か南雲ハジメか天之河光輝を連れてこい。

そう、俺が通っているのは八重樫流の道場なのである。

ええ、出会いましたよパツチリと。

そして俺の首が斬り裂かれる姿を幻視した。ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアア!!!死亡フラグだああああああああああ!!!と内心絶叫した俺は悪くない、お、俺は悪くねえ!

とは言っても俺は関わることはしていない。

有無肖像の一人として認識してくれればいいなと思って過ごすことこの頃、ある日、立会いで八重樫さんに勝ったときに言った台詞が問題になった。

「可哀想な奴だなお前」

言語——————!!!!

この言葉のせいで彼女に攻め寄せられ、いろいろと口出す事になってしまった(ちなみに恐怖で何を言っただかは覚えていない)

まあ、途中で泣かれたため嫌われたならそれでもいいかと思っていたのだが、その後彼女がよくこちらに絡むようになった。

ああああああああああああああああ!!!絶対恨んでるよこの人!!(恐怖)

俺が行けば、後ろに付いてきて、俺が休めば隣に来る。

コイツっ!確実に俺を精神的に追い詰める気だ!(愕然)



いや、普通の少女だったらまだいいのだ、妹や子供の扱いをして日色言語で話せばなんとかなるし。

けどさ、けどさ！『ありふれ』で最強とも言える剣士にそんなことを言ったら首が切り落とされるだろうが!!!

一度勇気出して断つたことはあつたよ！けどそうすると捨てられた犬のような雰囲気を出しちゃうんだよ!!!

そんなの、精神年齢が最低でも60歳超えている俺にできるわけないじゃないかあ！  
(絶叫)

それがこれまでの経緯だ。言語は八重樫さんのことをポニーと呼んでいるが絶対これポニーテールから来たよな。

「それにしても、どうして勝てないのよ。私、これでもあなたより長い期間やっているのよっ。」

「ハツ、やる気の差と才能だな。俺だから出来るに決まっているだろう」

うわあ、言語の豪語不遜さが出まくりだあ、俺の命も風前の灯だあ。

「お前も、稀には自分の欲望に正直になつたほうがいい」

「……無理よ、私はそんなこと……出来ない」

そんなことを少し沈んだ声でいう八重樫さん、なんだか黒い沈んだオーラが出ているというか、八重樫さん、可愛らしいものが好きじゃなかったっけ？これも親のことを考えすぎているから欲望を押さえ込んでいるんだよなあ。

子供なんだからもう少し、我儘になってもいいと思うけど。

………おかしい、最近思考が老人になつてきている気がする。

いや、まあ、精神年齢が50歳を軽く超えているから当たり前のことなのだが。

「ま、どうするかなんてお前の自由だ。好きにしろ」

そう言い、俺は飲み物を飲む、一応言っておくがこれは言語が言っていることなので俺は関係ないからね？

「まあ………そのせいで女らしくなくなつてサムライ女や筋肉女なんて言われないうにしろよ」

「余計なお世話よッ!!」

次の瞬間、真っ赤な顔になった彼女の拳を左手で防いだのだが、かなりジンジンと衝撃が残ったのは覚えている。

ちなみに内心は

(死ぬ!!マジで死ぬ!!一瞬拳がぶれたんですけど!、チリつて空気が摩擦で燃えた気がしたんですけど!!!)

かなり絶叫していた。

Σ(。D。111)月(●、ω、●)

ある日いつも通りに道場で剣道の練習をしていると、道場に天之河光輝が入ってきた。

まさかの勇者(笑)の登場である。

あのアンちゃんダメだわ、どうしようもねえレベルでダメだわ。

八重樫さんに「君は俺が守る!」とか普通に言っちゃうんだぜ!?クサイよ!マジでクサすぎるんですけど!!!

道場仲間の喧嘩に殴り込むな馬鹿、騒ぎが大きくなるだけだろうが!

いや、いいよ!?八重樫さんが天之河に連れて行ってもらえれば、勇者パーティ(笑)が出来上がるし、俺の死亡フラグも減るからいいんだけどね!?

本当にお前の思考はどうなっているんだよ、正義とか悪とか知らないけどさ、この現代でそんなもの求めるなよ。

いや、待て、落ち着け俺、大丈夫だ。これを持ち切れば、八重樫さんは天之河について行き、俺から離れていくはずだ――

――筈だったのになあ。

どうしよう、八重樫さんが離れていかないんだけど。

いや、俺も彼女から距離を取ったよ!? だけどさ、普通についてくるんだよ!!

え? 何!? 俺なんかした!? 「今までよくも私に迷惑をかけたな」的な意味で嫌われてるの?!

君がこつちに来るとセットで天之河も来るんだよ!? そして「余り彼女に迷惑をかけるんじゃない!!」とか言われるんだよ!?

かけてねえよ、むしろこつちがかけられてるよ!

天之河とは剣道の手合わせぐらいでしか関わらない様にしてたのにさ、君が来たら強制的に関わってしまうじゃん!!

そのまま行けよ! ついて来なくてもいいじゃん!!

試しにそんな事を言ってみると彼女、捨てられた子犬の様な顔になるんだよ!? なんだか俺が悪いみたいじゃん!!

俺が彼女に距離を離すと、それにつられて彼女が距離を縮めてくる。ええい! 犬か八重樫さんは!! 未来のオカン属性は何処に行っただよ!!

別に天之河も八重樫さんも嫌いではないけどさ死亡フラグだから関わりたくないだよ!!!

(、・ω・、) 月 (\*、▽、\*) 日

母親に仕事の関係で少し遠くに引越すと言われた。県外に行くわけではないが道場から離れるために行き帰りが難しくなるらしい

ここら辺が潮時だろうか?

お母さんが申し訳なさそうにしているが道場に行く原因になったのはお母さんだつてこと忘れてない?

まあ、剣道仲間ですら初めて、友達、友達!、友達! ができたのだ名残惜しいといえば名残惜しい。

まあ……約2名、最終的には合う奴がいるんだが。

(、・ω・、) 月 ● 日

「とういうわけで、引越しすることになった」

「何が『と、言うわけで』よ！聞いてないわよ!？」

そう言いながら襲いかかる拳を受け止める。

翌日、道場が終わったあと、近くの公園で事情を説明すると、プレゼントされたのはグーパンチである。

涙を浮かべながらこちらを睨みつける八重樫さんに俺はどれだけ嫌われているんだと気になるわ。

「なんで、いつも……突然そんなことを言うのよー」

服を捕まれ勢いよく揺さぶられ目が回る、あく星が見えるんじやー。

「仕方ないだろう、昨日言われたしな」

そう言うのと、八重樫さんは静かに手を離し、彼女の頬に涙が流れていく、どうやらもう喜びの涙を耐えるのに限界らしい。

ハア、どうやって彼女をなだめようか、あ、そういえば買っておいたブレスレットがあつたな。

ポケットにある買っておいた紫色の石が嵌っているブレスレットを取り出し、ポイツと投げ渡す。お別れの品という奴だ……そこまで高い物ではないが。

「ほらよ」

「え？あつ、ちよっ?!?!」

ワタワタときせながら何とか受け取る八重樫さん、少しほっこりするがそれは後だ。

「それ、くれてやるよ。どうせ、可愛らしいものを一つも持っていないんだろ？」

「ツ！そ、そんなこと……ない……わ……よ……」

「徐々に声小さくなってるぞ。ま、別に捨ててもいい物だしな」

ツンデレ八重樫さんカワイイ。

そう思ったあと、俺は彼女から背を向け歩き出す。フツ、去り際もかっこいいぜ……

なんだかナルシストみたいだな……止めよう。

そう思いながらさらに歩を進めると突如背後から声をかけられた。

「ねえ！」

今にも泣き出しそうな、甲高い声。突然の大声に顔を微かに歪めながら振り向くと必死に泣かないように堪えている八重樫雫の姿があつた。

「なんだ？」

「また、会えるよね?!」

………そりゃあ、会いますよ。異世界に飛ばされるんだもん。

そう思いながら微かに苦笑し、言葉を掛ける。

「ああ、きつと会えるさ」

俺の死亡フラグとしてな!!!

(?\_?) 月「(´\_`o´)」曰

これで八重樫さんとの関係がなくなる——

——わけではなく

昔、八重樫さんとの連絡先を教えた為か彼女との関係は切れることはなかった。あの頃の俺、何故連絡先を教えてしまった!?

そんなわけで彼女とのメール交換を行いながら数年 中学生になった俺は近くの本屋に来ていた。というか八重樫さんメール多くないか? 毎回返信するのが怠いんだが。

え? 何のためか? 読書の為だよ、せっかく『ありふれた職業で世界最強』の世界に転



生したんだぜ？

是非ともラノベなどを読みたいじゃないですかー。

そう思いながら来てみるも、ラノベの本の種類がありすぎて困ってます……（汗）

いや、どれも面白そうだけどさ。お小遣いにも限りがあるからできるだけ面白い小説を買いたいじゃん？

そう思いながら近くの本を物色していると視界の端に同じ制服の生徒が視界に映った。

制服からして女子らしいがラノベのコーナーで真剣に近くのラノベ本を見比べたりしている。

え？何あの子？オタク女子？

厨二病のような人だったら距離を取りたいがこの場合は話は別だ、人気なラノベに詳しくそうなため教えてもらおうかな？

「すまん、ちよつといいか?」

「ひえっ!は、はい!な、なんですか?え?!神代さん!」

少女はビクンツ!と驚きこちらを振り向くと驚くような視線でこちらを見つめた。

えー、俺。何かした?

うーん、この子どつかで見たことがあるような気がするなあ?……確か同じクラスだったけど名前が思い出せないな……

「……君が持っている本はその……ラノベ本だよな?」

「えっ?あ、は、はい。そうですが?」

ふむ、決して厨二病の人ではなかったな、それじゃあこの人に済まないと思うがオススメを教えてくださいか?

「君は、こういう系の本に……詳しい方か?」

「う、うん、結構?」

よし、決定。教えてくださいましょう。

「そうか！すまないが、人気な本を教えてください！こういう本に興味があったんだがどれがいいのかわからなかったんだ」

彼女の手を掴み、顔を近づける。

うん、やっていることはただの変態だが仕方がない。読書ができるならばそんなものは関係ないからな、本は正義ナリー！！

「ひゃ、ひゃい。ぼ、僕のお勧めは——」

しかもまさかのボクっ娘だと!?実在したのか!?

まあいい、この子とは是非オタク友達になりたい！そのために自己紹介をしなくちゃ  
!! (興奮)

「ああ、ちょっと待ってくれ。自己紹介をまだしていなかったな、俺は神代日色だ」

「は、はい、知ってますよ。最近僕のクラスに転校してきた人ですよね」

「同じクラスだったのか？そうか、それじゃあお前の名前を教えてください」

きつとこんな言動がクソな俺に教えてくれるんだ、一体なんて名前の人なんだろうか

「ぼ、僕の名前は——」

その言葉を理解することを俺はすぐに理解できなかつた。

居るはずのない名前、居るはずのない存在。

そう、ありえないのだ、姿もちよつと違うし性別も違う。

そう、この物語の主人公なんて名前が出るはずがない。

だけど、俺の聞き間違いでは無いと言うならば、彼女はこう言つたはずだ。

「南雲ハジメです」

.....え？

俺の知っている物語の歯車が狂いだした。

これは、この物語は、俺、神代日色と彼女、南雲ハジメの異世界巡り物語だ。

## 八重樫雫（幼少期） 兄を知る

彼に出会ったのは小学生の頃の剣道の道場だった。

久しぶりに新たに入ってきた門下生は一言で言い表すなら傲慢や唯我独尊とでも言うべき人だった。

同じ門下生には堂々とタメ口で聞き、決して自分を偽らず、ズカズカと土足で他人の心に入ってくるようなそんな人。

神代日色

それが彼の名前だった。

流石に先生にはタメ口で聞いたりはしないが言い方からして決して尊敬しているようではない。

初めて見た時私は彼は剣道に長続きしないだろうと思っていた、当たり前だ先輩の門下生にも敬語を使わず、知った事かと一蹴していく彼に一体誰が剣道に長続きするだろうと思うのだろうか？

しかし、彼は違った。一日また一日と時間が経つ度、まるで別人の様に剣道の腕前が上達していく。一を知れば十を知る様に、十を知れば百を知る様に、先生の教えを吸収

し、まるで砂漠の様にその技術が衰えることはない。

嘗てユラユラとブレブレな型の構えは今では美しく構えられ、遅い竹刀の振るう速度は今では風を切り裂き相手に反応すらさせず一本取ることもある。

才能が違った。

私は彼を見るたびいつも思う。

ああ、気に入くない。

彼を見るたびに、胸がざわめき苛々する。

この感情を私は知っている。

『嫉妬』だ。

私は妬んでいるのだ、私が努力した道のりを、ぶつかつた壁を彼が関係なしに踏破していくことに。だから、私は神代日色が嫌いだ。あんな、自分の努力を無下にして行く奴のことが大っ嫌いだった。

ある日、私は彼との立ち会いをすることになった。

グングンと伸びる彼の實力に先生が私と試合させ、さらに努力させようとしたのだらう。

これはチャンスだ、と私は思った。ここでアイツをコテンパンで負かしてやれば胸に溜まる嫉妬も和らぐだろうと。

私の努力はアンタなんかには負けないと、そんな才能だけしか取り柄のないやつなんかには負けるわけがないと思ひ、胴着を着て、手に持った竹刀で目の前の神代へと斬りかかった。

そして——負けた。

自信を持っていた、決して油断などしていなかった。

だけど、八重樫流の剣術を使つても全て、いなされ、躲され、弾かれた。

そして、気がつけば胸に襲いかかる竹刀の衝撃と共に敗北した。

負けた、負けたのだ。

才能しかない、あんな奴に。

その事実には絶望する私に、彼は私を横切る瞬間、こう言った。

「可哀想な奴だな…お前」

は？、と思考が止まった。

彼は一体何を言っている？



私が可哀想な奴？どう言うこと？

そのまま着替え室へと向かう彼に、私は怒りの感情に支配された。

ふざけるなツ!!!私のどこが可哀想な奴なのよ！剣道を弱音も吐かず努力し、親を喜ばせるために勉強だつて行つていると言うのに!!

私はその怒りをなんとか抑え、道場の終わりに彼に話があると言い、道場の裏に彼を誘つた。日はもう沈みかけ私や彼の足元には長い影が伸びている。

「で、俺に一体何の用だ？八重樫零」

まるで刃の様に鋭利な目つきに何の感情も浮かばせない氷の様な黒い瞳。そして黒い眼鏡をかけ、無表情でこちらを見つめている神代。

私はそれに対抗するかのように彼を睨み、口を開く。

「……今日の言葉はどういうこと？」

「…何の話だ？」

まるで訳がわからなくてもいう様な彼の態度に私の怒りが増大していく。

「今日の試合、終わった時に私に言った言葉をどういふことつて言つてるの!!」

苛立ちで声が強まり声を荒げてしまう。その言葉を聞くと彼はああ、なるほど。とで

もいう様に頷いた。

「別に何も？そのままの意味だ」

「ふざけないでツ!!」

遂に怒りが私の沸点を超え、感情のままに彼の胸ぐらを掴み上げる。

「貴方なんかは何がわかるのよ！何!?!同情でもしてるの!?!めいっばい努力して、頑張つて、頑張り続けて、その道のりを何食わぬ顔で乗り越えて言つた貴方なんか!!可哀想?ふざけないでツ!!アンタなんか私の気持ちかわかるもんですか!!」

勢いよく、何度も何度も声を荒げ、彼をまくしたてる。お前に何がわかると、わかつてたまるかと。

暫くまくしたてたことで私は荒い息を吐きながら呼吸を整える。

これでいい、彼は愕然としているだろう、そう思い顔を上げ——硬直した。

何故なら彼の表情は怒りでも恐怖でも驚きでもなく——哀れみの表情だったからだ。

「やっぱり、お前…可哀想な奴だな」

「……………何…言ってるの?」

彼は胸ぐらを掴まれているのにも関わらずまるでいつもの様な声色で、いつもの様な無表情でこちらを見つめていた。

「本心を抑え込んで、親の顔を見て機嫌取り。ハッ、笑えるなまるで悲劇のヒロインだ」  
「だから……何を言っているのよ!!」

声を荒げて聞き返すと彼はハア、と目に見えるようにため息をつき「だから…」と呟いてこう言った。

「そもそもお前は剣道なんか好きじゃないだろうが」

呼吸が止まった。

その言葉がまるでカチリと何かの錠を外した気がして、つい胸ぐらを緩めてしまう。

胸の中から何かの感情が湧き上がってくる。私はそれを無意識に押さえつけ、神代を睨みつける。

「何………言ってるのよ………そ、そそんなわけないでしょう!？」

「そうか? だったらどうしてお前は道場で一度も笑っていないんだ?」

やめて。

「………き、気のせいよ」

「嘘をつくな、お前と同じクラスの門下生に聞いてあるぞ。お前は学校では楽しそうに笑っているってさ」

それ以上言わないで。

「予想してみるに……お前、親に勧められたんだろ？ 剣道の才能があるから」  
「……………黙りなさい」

それ以上言われたら、私は。

「本当は別の事がしたい、もっと自分らしくしたい大方そんなところか」  
「……………黙れ」

もう——

「だから言っている。可哀想な奴だと、自分を偽り、空っぽな気持ちで竹刀を振るうお前が哀れでな」

「だ、まれええええ!!」

もう——我慢できなくなる

私の中で何かが砕けた音が聞こえた。

無理矢理彼の胸ぐらを掴んで力任せに、壁に叩きつける。

「わかってるわよ、そんな事ぐらい!! 剣道が嫌いな事だって、もつと女の子らしくしたいなんて自分が何よりもわかってる!!」

涙が溢れ、視界が歪む。喉がはち切れそうな程叫んで次第に嗚咽へと変わっていく。

祖父に剣道を勧められた時から、思っていた。もつと女の子らしくしたいと、もつと可愛いものが欲しいと。

だけど——

「だけど！出来るわけ無いじゃない!! 祖父が、両親が、私を期待の目で見るのを裏切れるわけないじゃない!!」

祖父も祖母もお父さんもお母さんも私を期待の目で見ていたから。貴方はできる、貴方にはその才能がある、八重樫流を全て受け継ぐ様な才能が、と。

「楽しくなくても……グスツ……好きじゃなくても、両親が……グスツ……喜んでくれるなら別に構わないと思つたのよ……！私だつて——」

私はああ、と思い、気づいた。私が彼のことを『嫉妬』していた理由を。

才能に嫉妬したわけではなかつた。ただ、私は憧れていたんだ。

自分を偽らず、堂々としている彼のことが、自分の本心を吐露できる彼のことが。

彼の様に、なりたいたいと思つて、彼のことが羨ましくて、次第にそれが嫉妬へと変わつていった。

私だつて——

私だつて——

——貴方の様になりたかつた。

「私だつて、女の子らしくしたいわよ………つ」

「………そうか」

彼のその言葉がどうしようもなく優しく、私は彼の胸の中で静かに泣いて、泣いて、泣き続けた。

◆  
そこから、彼との交流が始まった。

最初は彼を呼んだことを謝って、それから初歩的な会話をする様になった。

挨拶から、好きなもの、趣味や小学校のこと。決して彼からは話しかけてくることはなかったけど決して嫌がったりはしなかった。

そのうち私は彼を日色君と呼び始め、彼は私を『ポニー』という可笑しな渾名で呼ぶ様になった。私はいつも雫と呼んでと言っているのだが決して変えようとしな  
い。……というかこれ確実に私の髪型からとったわよね。

いつのまにか私が可愛いものが好きな事を知られ誕生日の日に可愛いウサギの人形を渡されて恥ずかしさと嬉しさが合わさってつい殴ってしまったのは仕方がないことよね。……顔色変えず止められたけど、止められたけど！

いつしか彼に抱いていた嫌悪は親愛に変わり、私にとって彼の隣にいることはありふれた日常になっていた。

もし、兄がいたらこんな気持ちになるのかしら。

私は彼を追いかけようとするたびにいつもそう思うのだ。

日色君が全国大会に初優勝してから一ヶ月後、新たな門下生が入ってきた。名前を天之河光輝というらしい。

あれは驚いたわ、いきなり「雫ちゃんも、俺が守ってあげるよ」なんて言われるんだもの。

……なんというか死んだ目で天之河君を見つめていた日色君がとても印象的だった。

彼はあらゆる問題ごとに持ち前のカリスマと能力で解決していかこうとする正義感のある人なのだけど、なんというかご都合主義思考が激しかった。

日色君が私に迷惑をかけていると思いついで注意したりしてくるため、いつしか彼と日色君の仲は険悪になっていった。……まあ、大半は注意してくる天之河君を日色君がいなし続けるだけなのだけど。

そんな彼らの争いを私はいつも見ているのだが見るたびに天之河君と日色君は性格が似ているようで全く似ていなかった。

彼らの共通点は人助けなのだろうけど在り方は全く違っていた。

日色君の場合、門下生同士の問題があつた時はその者たちが仲直りできる様に影で支え、彼へと指導を教わりに来た者は誰であろうと懇切丁寧に付き合つて教えてくれる。

そして自分の事を悟らせず、相手の成長を願ひ、そのキツカケをこつそり作つてくれ



るタイプの人だった。

決して目立たないように、その人が自信を持てるように手伝い、自分は決して他人のふりをし続ける。

日色君は、口は悪いのだけど、決して優しくないわけではない。むしろ最も他人を思っている。

天之河君以外の他の門下生もそのことに気づいてるし、感謝もしているのだけど決して自分が行ったことを認めないひねくれている日色君に言っても「なんのことだ？」と言われるだけなので言わないのだ。

対して天之河君の場合は直接止めに行くようなタイプだ。

自分の思い込みによる行動で物事に関わろうとするので基本的に私が後始末を行わなければならないため、正直言って私からすれば傍迷惑でしかないのよね。しかも、持ち前のカリスマと才能のせいで決してその行動を直そうとしないため苦労が絶えない。だから私はそんな日色君に憧れ、いつしか彼と並べるような技量を持てるようになるとうと今日も剣を振るっている、彼との剣道は……あまり嫌いではないのだから。

そんな私の幸福な日常は――

「というわけで、引越しすることになった」

「何が『と、言うわけだ』よ！聞いてないわよ!?!」

ある日公園で彼の何気ない言葉により粉碎された。

つい勢いで拳で殴りかかるがパシツ！と右手で受け止められる。

彼は言う、家が引越しすることになり道場が遠くなるため通えることができなくなると、しかもその近くに剣道を行う道場がないため胴着やトロフィーも全て道場に返すとのこと。

つまりもう彼とは会えないということだった。

突然だった、あまりにも突然すぎた。

「なんで、いつも……突然そんなことを言うのよ!」

彼の胸元を掴み、何度も揺さぶり、声を荒げる。彼は無表情で静かに呟く。

「仕方ないだろう、昨日言われたしな」

手に籠っていた力が抜け、胸元を掴む手が緩む。

頬に涙が流れ、嗚咽が溢れてしまう。

嫌だった、離れたくなかった。涙が止まらず、嗚咽が止まることを知らなかった。

そんな泣き続ける私に彼はハアとため息をついてポケットから何かを取り出し——私に放り投げた。

「ほらよ」

「え？あつ、ちよつ?!？」

慌てて受け取ると綺麗な紫色の珠が嵌っているブレスレットだった。

「それ、くれてやるよ。どうせ、可愛らしいものを一つも持っていないんだろ？」

「ツ！そ、そんなこと……ない……わ……よ……」

「徐々に声が小さくなってるぞ。ま、別に捨ててもいい物だしな」

咄嗟に声を絞り出してみるが、凶星を突かれたことにより、徐々に声が小さくなっていく。

彼はその言葉に小さく苦笑し、私から背を向けて去っていく。私にはその去っていく背中を止めることができず、無様に眺めてしまうしかない。

まだ伝えたいことがたくさんあった。教えてもらいたいこともたくさんあった。だけど、それでも彼は止まらない。

嫌だ、声を出せと、理性が命令を出す。

彼に絶対伝えたいことがあるのだから。

「ねえ！」

今にも泣きそうな声が出る。

伝えなきゃ、伝えなきゃと胸から這い出てきた熱い灼熱の感情が体から噴出していく。

私は、貴方のことが――

「なんだ？」

だけど、振り向いた彼を見てしまうと私はその感情を搾り出すことができなかった。

「また、会えるよね?！」

違う違う!!私はそのんことを言いたいんじゃない!!私は――

彼は笑う、まるで微笑ましいものを見るように。優しく、そして小さく、笑った。

「ああ、きつと会えるさ」

その表情は、その顔は、私が見惚れてしまうほどのカッコいい笑顔だった。

私は彼に自分の思いを伝えることができなかった。



それ以来、私は携帯を持ってから彼とメールのやり取りによる交流が多くなった。

流石にやり過ぎたかな？と思ってしまうほどのやり取りのメールの総件数であり、今見てみれば送信数が300件を超えていた。

彼に貰ったブレスレットはいつも腕につけており自分が可愛らしいものが好きだったこともあってかいつしか大切な宝物となっていた。彼がお別れの品にくれたものなのだ、決して無くしたくない。

彼と別れて、約3、4年、私は彼と再会した。彼と同じ高校に進んだから当然といえば当然なのだが彼と再び笑い合える時が来ると思うと自然と頬が緩んでしまう。

そうして出会ったのが少年期よりも引き締まった肉体に整えられた容姿、昔より鋭い目つきになった瞳に黒く輝くメガネをかけた彼、神代日色。

一応、私も再会したときは女らしさを意識してみたけど彼は何一つ変わらず声をかけてくれた。

小さい時の彼とは少し低い声に更に鋭くなった容姿にむしろこちらが驚いたりした。

高校の最初の一年は天之河君に付き纏われることもあったが彼と共にいたあの頃に戻ったようで楽しかった。

だから、私は決意した。

今度こそ、私はあなたに告白する。

私は貴方のことが好きです、と。

だけど私は二年にあがるとすぐに私は後悔した。

どうして私は、あの道場から去っていく彼に伝えることができなかつたのだと。

悔やんだとしてももう遅すぎた。

それを悔やんだ時、彼はもう――

――異世界『トータス』で私の目の前から迷宮の崖から落ちていった時なのだから。

## 文字使い日記②

(?▽?)月(▽、\*)日

はい、皆さんこんにちは！みんなのアイドル、日色だよー☆

何を日記に書いてんだ俺は？最近ストレスが溜まっているせいか日記に書く文字がハツチャケてしまっている、首○パッチじやあるまいし賢者の心を取り戻さなくては。

さて、前回書いたのはどこまでだったかな？そうだったそうだった。

南雲ハジメ(女)に出会ったところまでだったな。

結論から言えば俺は南雲さんと友達になった。

いや、うん、本を買う↓読む↓再び買いに行く↓南雲さんに出会うの無限ループにより自動的に親しくなっちゃったよ。

南雲さんと友達になる⇨原作に関わるという図式になってしまっているがそもそも八重樫さんに出会っちゃってしまっている以上強制的に勇者パーティや魔王ハーレムに関わってしまうのだろう。

というか、その場合ハジメハーレム達による百合的な展開が起こってしまうのだろうか？

……そんなことはお兄さんが許しませんことよ!!

薄い本が厚くなる展開は断固拒否しなければ。少年向け小説が大人用に変わってはダメなのである。

……まあ、だからといつても自分が出て来ることなどほぼ無いのだが。

いや、だって俺そこまで強くないし? せいぜい役に立つのは文字魔法ぐらいだし? それも現在は全く使えないんだよ?

それに対して魔王を見てみる。

敵だったらドパンツ!!、ウザかったらドパンツ!!、とりあえずドパンツ!!だぜ!?

お、恐ろしい……!! (偏見)

目の前にいる少女もいつかそうなってしまうのだ。あ、でもそんな南雲さんも見てみたいな、原作を知っている身としては、かっこいいぜ兄貴とか言いそうになるだろう、まあ表情に一切変化はなく、せいぜい内心で叫ぶしかないのだが。

そう思いながら机の向かい側で数学の問題に頭をひねっている南雲さんを横目に歴史の勉強を行う。

て、あれ? そこは――

「……南雲、その問題はその方法では無理だ」

「ええ?」



俺はそう言いながら、彼女のノートを取り、数学の問題に南雲さんが解けるようなヒントを彼女のノートに書き、シャーペンを指示棒代わりに使い、説明する。

「——という訳だ、後は分かるだろ？」

「う、うん」

どうやらわかってくれたらしい、俺はフウ、と溜息を吐き、再び歴史の勉強に戻る。しかし、どうしてこうなったんだ？

事の発端は中間テストだった。

現在は大学生までの勉強を完璧にマスターしている俺は中間テストなど只の早く帰宅出来るイベントの様なもののだが、歴史だけは前世とは違う為何度も覚え直している。

いや、うん、前世の日本との歴史が違うからね、うろ覚えなら歴史の得点が大変落ちてしまうのだよ。

そう思っているとHR終わった為に教室を出ると同じく教室を出た南雲さんが暗いオーラを醸し出しながらトボトボと帰っているではないですか。

「おい、南雲。お前なんでそんなに落ち込んでいるんだ？」

「……あ、神代さん…実は中間テストで平均点以上を取らないと暫く遊んではダメだと親に言われてしまつて…」

目に見えるレベルでドヨンとなつている南雲さん。なんかあれだな、デジャヴ感じるな。八重樫さんと引けを取らない鬱オーラを放出させている。ば、バカな、何だこのオーラ量は!?(困惑)

しかし、南雲さんと暫く遊べなくなるのは困るな。俺、基本的ポツチだし……やめよう自分で言つて悲しくなつてきた。

ん? だったら、彼女の点数を上がるように俺が教えたらいいんじゃない?

ナイスアイディアだ、俺!

「……南雲、勉強手伝つてやろうか? (訳: 南雲さん、俺と勉強会をしませんか?)」  
て、バカ! 俺のバカ! 言動が変換されたにしてもその言い方はなんだ!!

どれだけ上から目線なんだよ!!

「……え?」

……見てくださいよ、兄貴。南雲さんの表情が驚き一色だぜ。

ああ、終わった、南雲さんとの関係はここで終わりだ。

きつと南雲さんも「うわー、何この人何様なの? 頭が少しいだけで調子乗るなんてマジ引くんですけどw」などと思ひ俺から距離を離すだろう、変な噂を広げられたら号

泣する。

あれ？おかしいな？涙腺から液体が出てきそうだよ……な、泣いてなんか無いもん！日色君は泣かないんだもん！

「だから、お前の点数が上がるよう教科ごとに教えてやろうか？と言っているんだ」

……ああ、言動が勝手に変換されるー！

その事に若干苛立った表情をしてしまうが、それどころではない！

泣きたいです、本当に。ねえ、もう誰か助けて！変わってくれい！！

そんなことを言ったとしても助けは来ないんですけどねー！！（達観）

そんな悲鳴を内心上げていると、南雲さんは希望の光を見る目でこちらを見つめてきた。

ま、眩しい！まるで某波紋使いの山吹色の波紋疾走を出したような瞳だ。

「い、いいの!?!」

あれ？南雲さん？顔ひきつってね？怒ってる？ねえもしかして怒ってるの!?!

ど、どうしよう……そ、そうだ！ダメもとでも謝るしかない！と、友達なら許してくれるよね……!?!（震え声）

「ああ、オタクで馬鹿で、『趣味の合間に人生』を座右の銘としているもはや現代社会で

生きようとすることを諦めているゾウリムシに匹敵するようなお前だが……………」

「ぐふっ!？」

バカー……………!!!

どうしてこんな状況でそんな言葉が出せるの!?というか、今確実に俺が言おうとした言葉とは全く別の言葉に変換されたんですけど!!おい神様!特典が故障してるんですけど!

南雲さん見てよ、もうノックダウンだよ!!やめて、彼女のライフはもうゼロよ!!!

「…………一応、友達だからな。友に助けを出すのは当然だろう」

え?もしかしてデレ?この言動はデレてるの?

…………いやいやいやいや、おい、何やっている言動。勝手にデレるな、どんな表情をすればいいかわからないだろう!?

「あ、ありがとう」

ほら、南雲さんが困ってますよ!?!どうしろって言うんだよこの状況!?

俺は第三者から見れば自業自得な状況に内心頭を痛めていた。

これがこれまでの経緯だ。うん、完全に原因は俺だね。

俺は祝日の日に南雲さんとの勉強会を約束し、結果現在に至っている。自業自得とは

このことだろうか？

いや、まだいいんだよ、ここまでは。問題は――

俺が南雲さんに勉強を教えていると部屋の扉からコンコンと戸を叩く音が聞こえた。

すると、扉が開きそこから南雲さんの面影を持った女性が現れた。

「ハジメ、日色君、お菓子ここに置いておくから勉強頑張つてね」

「母さん……わざわざ来なくても僕が取りに行くのに……」

「すいません、わざわざありがとうございます」

――ここ、南雲さんの家なんだよなあ。

えー私こと神代日色は、現在魔王の家にあります。やばい、命の危機が半端ない、頑張れ日色！ミスったら殺されるぞ!!

南雲さんの母親、南雲董さんは南雲さんの部屋の俺たちが座っているテーブルの横にトレイに乗っている菓子類とジュースが入っているコップを置きニコニコと廊下へと去っていった。

「……時間も時間だし休憩にするか」

「う、うん。そうだね」

俺と南雲さんは鉛筆を置き、勉強を止め少し休憩にすることにした。

ふう、とため息をついた後、董さんが置いてくれたジュースを一口飲む、味はオレン

ジジュースでした。

「すまないな、本来なら俺の家でやるはずだったんだが……」

「ううん、むしろこちらこそごめんね。母さんと父さんが友達と勉強すると言ったら是非うちに誘ってきてなんて言うものだったから……」

そう、本来なら勉強会は俺の家でやるはずだったのだが今日はお父さんが家に新しい家具を買ったらしくそれを入れるために暫く家で勉強するのは止めてくれと言われたのだ。いや、父さん、テスト期間中にそんなもの買うなよ。

それにキレたお母さんがお父さんにO☆HA☆NA☆SHIを実行、おそらく今頃帰ってしまえば真っ赤なケチャップが天井や床に付着しているため、南雲さんの家にお邪魔してもらっているのだ。おのれ！お父さん、俺に一体なんの恨みがある！魔王城に幽閉された気分になるんだぞ、背中に冷や汗がドパドパと分泌されております。

訪れた時は大変だった、董さんと愁さんが涙を流しながらこちらに出迎えに来たのだ。

ええ、一瞬思考が停止しましたよ。

その時の表情は苦笑いしていたんじゃないだろうか？

それにしても、と俺は南雲さんの俺が持ち出してきた問題集をコピーした用紙を眺める。

南雲さんの学力、普通なんだよなー。

そう彼女の点数、どれか突出しているのかな？と思いついてみると普通だった。

いやマジで、本当に普通だったのだ。平均が全て65点台、数学が中でも最も低かったがそれでも頑張ればなんとかなるレベルだ。

さすが主人公、ドパンツ！する前は特筆する点が全くないわ。

「ごめんね、神代さん」

「ん？何がだ？」

そんなことを考えていると唐突に南雲さんから声がかかった。何ですかね？まさかもう用済みだとか!?

「僕のために、こんな時間を作ってくれて」

「気にするな、生憎とお前とは違って予習は完璧だからな」

ああ、もうこの言動に自分が慣れてきてますわー。もう末期かな（白目）  
「凄いね、神代さんは、僕とは違って勉強も運動もできるから——」

え？何言ってるのこの魔王は？

運動？——将来、神様に喧嘩売れるほどの力を持っている魔王が言うことか？

勉強？——概念魔法を付与できる奴が何言ってるの？しかもトータスから帰ってきた時に楽しく大学生生活できんだろうが!？（怒）

俺は南雲さんへと怒りのデコピンを食らわす。我が怒りを思い知れ！（激怒）

「——ッ!?!?」

ズドンッツ!!と南雲さんの額から俺の必殺のデコピンが炸裂し南雲さんは額を抑え、暫く痛みに悶えてしまう。

▼ 効果 は バツグン だ

俺は手に持ったビスケットを食べた後、涙目になった南雲さんへと呆れた視線を向ける。

「い、いきなり何を……」

「バカか、お前は？その自分とは違いますねオーラを出すな、鬱陶しい。第一、俺とお前が違うのは当たり前だろうが」

「……え？」

ただの凡人と魔王ですよ？格が違うんだよ！格が！一瞬で殺される未来しかないだろうが!!

ああ、見える、俺が南雲さんの一撃で殺されるイメージが……

もうダメだーおしまいだー（ヤケクソ）

「お前にできないことを俺ができるのは当たり前だ、同一人物じゃないんだからな。そんな自分と他人を比べた所で何かが変わるわけでもないだろうが」



だからこそ、と俺は付け加える。

「お前にしかできないことは必ずあるんだよ、才能が違う？アホか、万能な人？バカか、なんでも出来る人間なんていない、そう見えるだけだ。個ができることなんてたかが知れているだろう？俺はただお前より少し優れていることがあるから教えているだけだ」  
うっわ、クサ。なにこれ、何してんの言動、南雲さんを慰めるための言葉がなんで哲学を語ってんの？絶対南雲さんに嫌われるって。

南雲さんはその言葉を訊くと顔を俯かせ、何やら沈黙していた。……………あ、怒らした、絶対怒らしたよね！

そんな内心を見ず知らず、口はだから、と紡ぎ出す。

「いつか、俺が困った時お前が助けてくれ。これは貸した、絶対忘れるなよ」

その一言で、哲学じみた話が全て台無しだよ!?どうしてこんなところでギブアンドテイクを出すかなあ!?

そんなことを思っていると、南雲さんが唐突に立ち上がった。

え?もしかしてグー!?グー出すの!?ついにそこまで嫌われた!?暴力沙汰になっちゃった!?

「ん？どうした？」

「……ごめん、ちよつとお手洗いに行つてくる」

彼女はそう言ったあと、何も言わず無言で廊下に出て行つた。

ついにきらわれた！！？

わ  
 —————  
 う

!!!  
 俺の数少ない友達がああああああああああああああああ!!!

そんな感じで内心絶叫していると、コンコンという音が聞こえ、扉から董さんが現れた。

「……失礼するわ、日色君」

あるえー？どうしてお母様がここにー？あれ？オワタ!?これオワタなの!?

あ、もしかしてよくも南雲さんに危害をくれてくれたな、みたいなの？

／＼(・o・)／オワタ

内心が絶望に染まるが外側は一切表情は変化せず、「……どうぞ」と会釈する。

「どうしたんですか？」

「ええ、ハジメがいない内に、彼女の話をしようかと思つてね♪」

「は、はあ」

「やっぱり！怒つてますよね！すいませんでした、はい！」

「ハジメはね、私の漫画やハジメのお父さんのせいでオタク知識を多く知っていたわ」  
「ええ、知つてますが」

漫画家とゲーム会社の子供だからね、オタク文化に詳しいのはある意味当然だよ。

そう思いながら聞いていると董さんの表情に影が差した。

「ハジメはアニメや小説が大好きでね、たくさんの物を買つて見ていたわ」

だから、なのかしら、と董さんは呟く。

「そのせいであの子は、人と関わるのが苦手になつてしまったのよ」

「……コミュ症ってことですか」

「……ええ、日色君はこんなことをズバツと言うのね」

「……元からこんな性格なんです」

すいませんね本当に。

「いつしか、あの子から人が離れていったわ。昔はイジメもあつたし、オタクなんてと言われて馬鹿にされたこともあつたしね」

今はもうイジメは無いけどね——と董さんは悲しそうに言う。

「そして、あの子はいつしか一人になってしまったの」

「ボツチですか」

「……ええ」

若干董さんは顔が引きつった気がしたが気のせいだろう、気にしてはいけない。

「だから……久しぶりに見たの、ハジメが心の底から笑ったのは」

「……」

え？何言ってるの？南雲さんなんて基本的、いつも穏やかに微笑んでるよ？あんたいつも南雲さんの何を見てんだよ。

「驚いたわ、ハジメは帰ってきて私たちの前で笑顔でこう言ってたの、『友達が出来たよ

！』てね」

「……………そうですね、良かったですね」

そう俺は眩くと、董さんは突如、俺の肩に手を置いた。

はひい!? な、ななななななななななでしゅか—————!?!?!

「……………なんですか董さん」

「ねえ、日色君。お願いがあるの」

そ、そそそそそそそそそ、その前にに、顔を離しししてくくくくささいいいいい!!!ち、ちちちち近いです!!!

「これからも彼女の、ハジメの友達でいてくれないかしら」

こんな状況で何言っているのあなた!? 私のメンタルはもう虫の息なんですけど!?

「……………俺は、あいつの過去なんかに興味はありません。あいつがいじめられていようが、嫌われていようが、所詮他人です」

こんな状況でその台詞をよく言えるな俺え!!

見てよ!董さんを!さっき「……………そう」って悲しそうに眩いていたよ!?

ここは慰める台詞だろうが!!

その内心を汲み取ったのか、言動さんが「……………ですが」と言葉を紡ぐ。

何だ!? まだあるのか!? もう勝手に変換しないで下さいよー!!

「俺は彼女が望むなら友達であり続けたい」

うわー、またまたクサイ言葉を言いますねー（白眼）

というか、お願いだから董さん今すぐ離れてくれええええええええええ!!俺のメンタルが死ぬうううううううううう!!!

内心絶叫しながらこの気持ちよ伝われと董さんを見つめるがそれを聞いた董さんは微笑んで――

「……そう、ありがとう――」

「……母さん!?!……何………してるの?」

不意に扉を見ると、そこには魔王こと南雲ハジメが立っていた。

あ、ハジメが帰って来た。

◆ その後一悶着あったが割愛させていただこう、あまり思い出したくないし。

その後日が沈みかけるまで勉強を教えていたが、そろそろ夕焼けが沈む為、董さんに

お家に帰りなさいと言われた。

「ごめんね、夜遅くまで付き合ってもらって」

「いや、気にするな。お前の底辺な学力を上げる為だ」

いとも簡単にさらつと毒を吐く俺に南雲さんは「はは、そうだね……」と苦笑する。

……天使や、天使がおるぞ。

え？何この人優し過ぎんだろ!?絶対癒し系の部類に入るって!!何でこの人は今までに友達が居なかったの!?

そんなことを思いながら勉強道具が入ったりユックを持ち、玄関に置いてある靴を履く。

外を見ると空は暗がりに包まれてかけ太陽は沈みかけている、このぐらいに帰らないと親も心配するだろう……ま、余り魔王の家に居たく無いっていう本音も混ざっているけどね!

「それじゃ……」

「うん、今日はありがとう。じゃあね、日色」

.....

あれ?





ハジメさんはその言葉を聞くとハッと目を見開き、すぐに微笑んだ。

「うん…バイバイ、日色」

その表情は一瞬見惚れてしまうほど、可愛かったと記述しておく。

ちなみに、家に帰宅すると笑顔の母さんと簀巻きにされ宙吊りにされている父さんがいたがいつもの事なので割愛する。

## 僕の大切な友達（↑ここ重要） 前編

いつからだろう、心の底から笑わなくなったのは…

いつからだろう、世界に色を失い、空想の世界に逃げようとしたのは…

いつからだろう、涙を流さなくなったのは…

そして、いつからだろう、それら全てが戻って来たのは…

決まっている、僕は何度確かめても確信できる。

僕の世界が変わり始めたのは、『彼』との出会いが始まりだったのだから。



キーンコーンカーンコーン！

登校時間のチャイムが鳴り響くと同時に僕は教室の扉を開ける。

開けると共にクラスメートの視線が一瞬僕へと集中するがすぐさままたいつもの喧騒へと戻っていく——が、微かにボソボソと話している人たちがいた。

何を——とは言わなくても分かる。僕の悪口だろう。

嫌われ者、頭のおかしい奴、インキヤ、オタク、そんな言葉が似合う僕は一言で表すと孤独だ。

別に僕は返事をしない訳でも、相手を苛立たせるようなことをしたことなんてない、声をかけられたら応答はするし、相手のことを気にして、言葉遣いも気をつけている。だけど、オタクというものは嫌われるもので最近では裏で悪口を囁かれている。

が、これでもまだマシな方だ、昔はイジメなどもあり、殴られもしたのだから。

僕はそう思いながら、自分の机へと向かい席に座り、持ってきたラノベを取り出した後、湧き上がってきた眠気により欠伸を一つ。

昨日は夜遅くまでゲームしていた為、どうやら眠気は完全に取れてはいないようだ。……いやまあ、夜早く寝たとしても眠気が完全に取れたことはないが、自分の座右の銘は『趣味の合間に人生』である以上、早寝することはもはや不可能と断言していい。

そんなことを思っていると、教室の扉を開けて、先生が入ってきた。それを合図に喧騒が止み、ホームルームが始まった。

僕は半ば作業のように挨拶を行い、机にグツタリと崩れ落ちる。後は、先生の話を聞くだけだ。

そうやって先生の話に耳を傾けていると――

「今日は、転入生が来ます。皆さん、是非仲良くしてね」

は？ 転入生？

僕の思考は一瞬停止した。

いやいや、なんで？ どうしてこんな時に転校生が来るの!?

周りの人達も僕と同じらしくガヤガヤと騒いでいた——あ、男子一人が手を挙げた。

「先生！ 転入生は男子ですか？ 女子ですか？」

「男子です」

次の瞬間、女子達がきゃあああああ!! と歓声を上げ、男子達がくそおおお!! と苦悶をあげる。

いや、そんなに女子転入生であって欲しかったの!?(動揺)

先生が教室の扉へと「入って来なさい」と言うと、扉がガラガラと開き、そこから一人の少年が現れた。

僕は、少し期待しながら現れた一人の少年を見て——意識が釘付けになった。

少年の容姿は艶のある黒髪に黒く輝くメガネを掛け、瞳は黒水晶のように澄んでいて、かつ、鋭い刃の様な目つき。顔つきはとても整っていて、俗に言うイケメンといふべき人だった。

少年は先生の元まで歩いた後、此方を僕達生徒を見て——

「……神代日色です。引越しのついでにこの学校に転入しました、よろしくお願います」

『……………え？』

生徒の大半が疑問の言葉を呟いた。

え？いや？ちよ、え？

かみしろひいろ？神代日色！？何でそんな人がこんな学校に来るの！（困惑）

神代日色、オタクな僕はあまり知らないけどれっきとした有名人だ。

最年少で剣道の全国大会に優勝——どころか三連覇し、前代未聞の無敗を誇っている天才少年。

入ってから僅か2年で全国大会を優勝し、数々の記録をいとも簡単に塗り替えた人物。

そんな将来を約束された彼は突然、表舞台から姿を消し、行方を眩ました。（ニユース抜粋）

そんな人がどうしてこんなところに！！？

そんな大混乱が僕の内心で巻き起こり、周りのクラスメートも大混乱が起こるといふカオスな現状が出来上がったが、良くも悪くもそれが後に異世界で伝説として語り継がれる僕、南雲ハジメと『彼』神代日色の出会いだった。



「…うーん」

転入生が僕らのクラスに入ってから数日、僕は近くの大きな本屋で頭を捻らせていた。

右手にはファンタジー系のラノベ小説、左手には日常系のラノベ小説、そう現在僕は悩んでいた。

母さんにお小遣いを貰った僕は新作の小説の発売日ということでも本屋へ直行、いざ、買おうかという時にとても興味を惹かれるファンタジー系の小説を見つけてしまったのだ。

財布に入っているのは新作のみ買う予定だった為700円しか入っておらず、両方も買う為には一度戻らなければならぬ、しかし二つとも人気小説であり、残りの在庫は二つとも後一冊、戻っている間に売り切れにでもなったら笑えない。

僕はハア、と溜息を吐いた後、片方の日常系のラノベ小説を買うことにした。本来の目的を忘れてはいけない、人気小説ならばすぐに再び入荷されるはずだろうその時にまた買えばいい。

そう思い、ファンタジー系の小説を戻そうとして――

「すまん、ちよつといいか?」

「ひゃ、ひゃい!」

突然背後から声をかけられた所為で小説を落としそうになった。

慌てて受け止め、声のかげられた方向へ向くと――

——そこには無表情で此方を見つめている神代日色がいた。

★○←∴▽◎☒∟※▲×◇ツツ!!??

ナンデ!? ナンデコンナトコロニ神代日色ガイルノ!?

あまりの驚きで声が溢れてしまい、それを聞いた神代さんは眉を顰める。

が、すぐに元の表情に戻り、何の感情を浮かべているか分からない瞳がこちらを見据える。

「……君が持つている本はその……ラノベ本だよな?」

「えっ? あ、は、はい。そうですか?」

突然聞かれた質問に咄嗟に答え、自分の持つているラノベ小説に目を落とす。

よかった、数分前の自分を評価したい、こんな時に変な小説を持つていたらきつとゴミを見るような目で見られていただろう。

「君は、こういう系の本に……詳しい方か?」

「う、うん、結構?」

て、バカ! 僕のバカ! そんな馬鹿正直に答えるなんて引かれてしまうだけじゃん!

そう思ってしまうが時すでに遅し、言葉はもう紡ぎ出されている。彼は俯いたままなので表情は見えないが恐らく引かれているだろう。

その後、自分から距離を離し、陰口を囁いたり、いじめを行ったりするのでろう。それは仕方がないことだ、人間は異分子を嫌うように自分の様なオタクは嫌われてしまう。

だから、自分の周りには誰もいない、世界が灰色に染まり、白と黒のモノクロでしかない。

そういえば……自分が心の底から笑ったのはいつだったのだろう——

そう、思考が別の方向に行きそうになった時、突如肩を掴まれ神代さんの顔が一気に近づいた。

「そうか！すまないが、人気な本を教えてください！こういう本に興味があったんだがどれがいいのかわからなかったんだ！」

え？

思考が停止した。

彼の表情は嫌悪は無く、喜びの表情で。その瞳は嘘偽り無く僕を嫌っていないかった。「ひゃ、ひゃい。ぼ、僕のお勧めは——」

咄嗟に返答するが、内心は驚きを隠せない。久しぶりに見たのだ、親以外で自分を嫌悪する様な表情ではなく、まるで友達のように自然体で話す彼のような表情を。

彼は突然、ハツツとしたかと思うと僕の顔を再び凝視し、口を開いた。



「ああ、ちよつと待ってくれ。自己紹介をまだしていなかったな、俺は神代日色だ」

「は、はい、知ってますよ。最近僕のクラスに転校してきた人ですよね」

「同じクラスだったのか？ そうか、それじゃあお前の名前を教えてください」

神代日色、その名前を僕は胸に刻みつける。例え、この時だけの関係だけとしても忘れたくはないと思ったから。

「僕の名前は——南雲ハジメです」

ところで、僕の名前を聞くと神代さんは目を見開いていたがなんだったんだろう？

その真相は永遠に僕はわかることはなかった。



時が過ぎていく。

僕が学校帰りに本屋に行く時、神代さんと会うことが多くなり、不思議な関係が続くようになった。

彼は学校では成績優秀、運動神経抜群という完璧に完璧を重ねたような人で、性格や言動が少し悪いけど僕のことを決して嫌ったりしなかった。

片や学力学年首位で運動神経抜群、性格には少し難があるが決して他人には迷惑をかける優等生

片や運動神経も学力も平均であり、オタク知識などによる趣味によりクラスからハブ

られている平凡な少女

そんな二人が話したりしていればクラスからの圧力が増えるだけだと神代さんはい、学校では不干渉でいてくれて、放課後や休日には友人として接してくれた。

決して無理に距離を詰めようとせず一定間隔で接し、付き合ってくれた。だけど、彼と接するたびに思ってしまうのだ。

自分・は・彼・の・迷・惑・を・か・け、足・枷・と・な・つ・て・い・る・だ・け・で・は・な・い・の・か・？と

一度抱いてしまった疑問は消える事なく膨らみ続ける。

そう、僕が彼に何かをしてあげたことがあっただろうか？

あるにはあるだろう、だがそれは自分が好きな小説を教えているだけで只の趣味の範  
囲でしか無い。

でも、彼が僕にしてくれたことはなんだ？

勉強を教えてくれた、友達になってくれた、一緒にゲームをしてくれた、ラノベ小説を語り合ってくれた。

つまり、僕はただの彼の金魚の糞でしか無いのだ。

これほど悲しい関係があるだろうか？僕はただの役立たずでしか無いのだ。

頭のいい彼のことで、神代さんはきつとその事に気づいているはずだ。

だけど、縁を切ったりしらないのは単純に優しいからなのだろう。

彼は不器用ながらも口には出さないけども、他人を思いやり、助ける優しさを持つて

いるのだから。

対して僕はなんだ？クラスでは嫌われ者、学力も平凡、誰かを助けることすらできな

い只の少女だ。

何が友情だ!?何が友達だ!?そもそも僕にそんな物が築けるはずが無いだろう!!

こんな平凡で嫌われ者な僕が万能で完璧な彼との友達なんて関係を維持する力なんてあるわけが無いというのに!!!



HRが終わった為、僕は溜息をつきながら教室を出る。どうしてこんなに黄昏ているかという中間テストが近くなっているからだ。

ええ、一定ラインまで点数が超えなければ遊びに行くのを禁止されましたよ。最近は学力が低くなっていったから仕方がない事だけ……遊びに行く事を禁止されるのは流石に辛いなあ…。

僕はしばらく遊べなくなる事を諦め、大人しく帰路につく事にした。

うう、勉強するのは嫌だなあ

そう思いながら、トボトボと帰っていると突如後ろから声をかけられた。

「おい、南雲。お前なんでそんなに落ち込んでいるんだ？」

声の主は神代さん、眼鏡をクイツと片手で上げ、もう片方の手でバックを持って、此方を感情の見えない瞳が見つめていた。

「……あ、神代さん……実は中間テストで平均点以上を取らないと暫く遊んではダメだと親に言われてしまっ……」

ハハツ、と僕は誤魔化しの為に曖昧に笑う。まあ、雰囲気がいまいせいか逆効果かもしれないけど。

それを聞いた神代さんはフム、と首に手を置いたあと意を決したように口を開いた。

「……南雲、勉強手伝ってやろうか？」

「……え？」

一瞬間聞き間違えかと思った。

え？え？神代さんが勉強を教えてくれる？あの神代さんが!?あの学校一の唯我独尊の神代さんが!?!?

「だから、お前の点数が上がるよう教科ごと教えてやろうか?と言っているんだ」

「いい、いいの!?!」

一筋の希望の光が暗闇を照らした瞬間だった。僕は驚いて声を荒げてしまうけど、神代さんはコクリと頷いて――

「ああ、オタクで馬鹿で、『趣味の合間に人生』を座右の銘としているもはや現代社会で生きようとすることを諦めているゾウリムシに匹敵するようなお前だが……」

「ぐふっ!?!」

――さらつと吐いた言葉の刃が僕に突き刺さった、効果は抜群だ。

ううゝ否定したくても否定できない：べ、別に大丈夫だからね！お母さんの少女漫画やお父さんのゲームクリエイター、どちらも即戦力としての技術はあるんだから！未来設計はちゃんとしているから!!

彼は少し躊躇した後、続けるように言葉を零した。

「……一応、友達だからな。友に助けを出すのは当然だろう」

どうしよう、断つてしまうべきだろうか？

……いや、当たり前だ。僕は彼に迷惑しかかけていない、これ以上彼に迷惑を掛けるわけにはいけない。

だから、断ることが最も良い答えだ。そう思い口を開き――

だけど

どうしてだろう

そうするべきだと

分かっているはずなのに

「……あ、ありがとう」

僕は何故か否定の言葉を出すことが出来なかった。

## 僕の大切な友達（↑コレ重要）後編

カリカリと無機質にシャーペンが紙に文字を書いていく音が僕の耳に聴こえてくる。

僕と彼の境をテーブルが仕切り、手を動かす度に削る音がBGMとなり静かな空間に響き渡っていく。

彼の勉強会に何故か参加してしまう事態にいくら思考してもどうしてあの時断れなかったのか分からない。僕がただただ押しに弱い小心者だったか、それとも別の理由か……

今更そんな事を考えても仕方がないと思うけど、疑問は未だに胸の奥に居座っている。

いけない、いけない、集中しなきゃ。えーと、この問題は――

数学の問題を見て、手を付け始めるが……

ムウー、解き方がわからない。問題にウンウンと唸っていると、

「…南雲、その問題はその方法では無理だ」

「え？」

突如、神代さんがにゅつと僕のノートにスラスラと書き、問題の説明をしてくれた。

その内容は僕でも分かりやすく、懇切丁寧に教えてくれて、その時のコツすらも説明してくれる。

シャーペンを指示棒代わりに使いながらも教えてくれる彼をふと見つめると少し穏やかな気分になる。

艶のある黒髪に黒塗りの眼鏡、瞳は黒水晶の様に美しく、顔つきはよく整っている。

恐らく渋谷などを歩いたら10人中9人程は振り向くのではないだろうか？

それはそうだろう、彼は学校でクールキャラとして『毒舌ながらも他人を思いやる心を持った優しい人』として人気だし、学校で影で囁かれている彼氏にしたいランキングを常に王者である為、一部ではファンクラブが出来ている程だ。

こんな自分が本来なら関わらない天の上の人なのだ。

「——という訳だ、後は分かるだろう？」

「う、うん」

とと、彼を見つめるのに夢中で忘れていたが彼は勉強を教えてくれたのだ。試しにもう一度解いてみるとスラスラと解けた為、一応理解はしているのかな。

歴史の勉強に戻った彼を見ながら僕も再び数学の問題に立ち向かう。

が、何時になっても僕は胸に渦巻いている『何か』が晴れることはなかった。





そうしてしばらく経った頃、部屋の扉からコンコンという音が聞こえ母さんが入ってきた。

「ハジメ、日色君、お菓子ここに置いておくから勉強頑張つてね」

「母さん……わざわざ来なくても僕が取りに行くのに……」

「すいません、わざわざありがとうございます」

そう、僕は現在、神代さんを自宅に招き入れているのだ。勉強会を本来なら神代さんの家で行うはずだったのだが親の事情でできなくなったらしく代わりに僕の自宅ですることになったのだ。

母さんはトレイに乗っている飲み物と菓子類を置いたあとニコニコと扉を出て行った……チラツと一瞬だけ僕を見て。

え？何？母さん？どうして今、振り向いたの!?

そんな疑問を視線で訴えるが母さんは微笑みを返すだけで何も語らず、そそくさと去っていく。

「……時間も時間だし休憩にするか」

「う、うん。そうだね」

僕はどうして母さんが振り向いたか疑問に思いかけるが神代さんの声に正気に戻り

勉強を止める。

神代さんは母さんが入れたオレンジジュースを飲みながら僕がやっていた問題集を見る。

眉を顰めている辺り、僕の学力の無さに呆れているのだろう。

自分なんか時間に時間を費やしてくれるのだ、友達だからという理由だけで。だけど僕は何も彼の役に立ったことはない、ただの役たただ。

そうして、なお一層胸の中で渦巻き続ける『何か』を僕は理解した。

「ごめんね、神代さん」

「ん？何がだ？」

それは

「僕のために、こんな時間を作ってくれて」

「気にするな、生憎とお前とは違って予習は完璧だからな」

僕は彼の言葉に笑う、小さく、儚く、悲しい声で、彼とは全く別で何も出来ない役立たずな自分を嗤った。

「凄いね、神代さんは、僕とは違って勉強も運動もできるから——」

それは 『嫉妬』

自分が出る事など何もない、全て彼は自分で成し遂げることができるのだから。

だから、

だから、

もう、

僕なんかの為に

自分のことを犠牲にすることを

止めてよ

もう、

僕に関わらないで

口は動く、言葉を紡ぐ。あなたにもう迷惑をかけたくないと僕は彼との縁を切ろうと  
言葉を零し――

ズドンツツ!!という音と共に額に激痛が走った。

「――ツツ?!?!」

咄嗟に僕は額を抑え痛みに悶えてしまう――つて本当に痛い痛い痛い!!!!

痛みが全く治まらない、ヒリヒリと痛む額を抑え涙目になりながら彼を見ると神代さんはビスケットを食べながら呆れた視線をこちらに向ける。

「い、いきなり何を……」

「バカか、お前は？その自分とは違いますねオーラを出すな、鬱陶しい。第一、俺とお前が違うのは当たり前だろうが」

「……………え？」

彼はなぜわからないとでも言うように此方を見ながら言葉を紡ぐ。

ピキリッ

自分の何かに亀裂の入っていく音が聞こえた。

「お前にできないことを俺ができるのは当たり前だ、同一人物じゃないんだからな。そんな自分と他人を比べた所で何かが変わるわけでもないだろうが」

言葉が出せなくなった。

ピキリッ！ピキリッ！

再び音が鳴り、何かの亀裂が奔る。

「だからこそ——」

彼は続ける、言葉を紡ぐ。

「お前にしかできないことは必ずあるんだよ」

呼吸が止まった。

「才能が違う？アホか、万能な人？バカか、なんでも出来る人間なんていない、そう見えるだけだ。個ができることなんてたかが知れているだろう？俺はただお前より少し優れていることがあるから教えているだけだ」

割れていく、崩れていく。

灰色の世界が、絶望の世界が、幻想のように、夢だったかのように。

そして、そして、

「だから——」

彼は言った。

「いつか、俺が困った時お前が助けてくれ。これは貸しだ、絶対忘れるなよ」

世界が木っ端微塵に破壊された。

灰色の世界が色彩のある鮮やかな世界へと変わり、僕は俯いてしまう。

嬉しかった。

僕は足でまといではないと言われて。

今までの自分が恥ずかしくなってしまう、何が役たたずだ？何が金魚の糞だ？

彼はそもそも僕のことを信頼して、信用していたのに。

僕のことを自分よりも知っていてくれたというのに。

「ん？どうした？」

「……ごめん、ちょっとお手洗いに行ってくる」

僕は俯きながらそう言い、立ち上がって部屋から出て扉を閉め、少し離れている洗面所に向かう。

俯いていなければ涙を見せてしまうから。

誰もいない、静かな洗面所で鏡に映る自分を見て、蹲る。

そして錆び付いて、枯れていた涙腺と心の枷を外した。

「うあ、あつ、ああああ!!うわあああああああああああああああああ  
んツツ!!!」

涙が枯れない、止まらない。いくら声が張り裂けようと声は収まらず、泣き声は止まらない。

昔から泣いて、泣いて、泣き続けて、いつか枯れきつて、曖昧に笑うことしかできなかった仮面がついに限界が来てしまったことを自覚した。

これも、全て神代さんのせいだろう。彼に仮面が壊され、砕け、ぐちゃぐちゃに踏みつけられたようにもう、偽りの表情を作ることができなくなってしまっている。

僕は止まらない涙を零し、泣いて泣いて、泣き続けた。

だから、扉から微かに覗いている誰かに気づく事は出来なかった。



「うう……グスツ……グスツ……早く、泣き止まなきや……神代さんに……変に思われちゃう……グスツ……」

数分後、僕は鼻を赤くさせ、必死に涙を拭っていた。

というか、彼にこんな姿を見せたくないのだ。

そう思い、自分の部屋の扉へと向かおうとして――

「――に見たの、ハジメが心の底から笑ったのは」

――扉へと伸ばした手が止まった。

え？母さんの声？え？なんで!?

突然の出来事に混乱するがとりあえず耳を澄ませ、会話を聞き取ろうとする。

「驚いたわ、……メは帰って……私たちの前で笑顔で……言ってたの、『友達……来たよ！』てね」

「……そ……すか、良……たですな」

所々で聞こえなくなるがおそらく自分のことを話しているのだろう。

「……なんですか董さん」

「ねえ、日色君。お願いがあるの」

「これからも彼女の、ハジメの友達でいてくれないかしら」

ちよつと待って、母さんは一体何の話をしている？

勉強のこと？ 僕のこと？

まさか、僕の過去!?

慌てて扉に手を伸ばす、嫌だ、彼に僕の過去を知ってもらうわけには行かない!!

しかし、もう遅いだろう、おそらく母さんはもう会話的に僕のことを話してしまっている可能性が高い。

ドアノブに手をかけて扉を開けようとし――

「……………俺は、あいつの過去なんかに興味はありません。あいつがいじめられていようが、嫌われていようが、所詮他人です」

――開ける力が一気に無くなった。

「……………あ」

視界が真つ黒になった気がした。

他人

他人

他人

その言葉が僕に深く突き刺さる。

分かっていたはずだ、世界はそんな救われる世界ではないと。

分かっていた。

分かっていた。

分かっていた。

だけど、だけど、彼にそう言われることが何よりも辛かった。

何度もそんなことを言われていたのに、それらとは比にならないほど辛かった。

僕は扉を開ける勇気がなくなり、その場で立ち尽くしてしまう。

世界が再び灰色に染まりかけ――

「ですが……」

彼の言葉が聞こえた。

「俺は彼女が望むなら友達であり続けたい」

——今度こそ、消し飛ばされた。

そうだ、彼は言っていたではないか友達と、僕のことを友達と言ってくれていたじゃないか。

僕は一体、何を恐れていたんだろう、彼はそんなことするはずないというのに。

僕は勢いよく扉を開ける。

彼に感謝の言葉を投げかけるために。

そして——

扉の先には神代さんの肩に両手を乗せ、顔を彼に近づけている母さんがいた。

それは第三者から見ればキスシーンのような体勢だった。

では、何も知らないハジメちゃんが見ればどうなるのか？

「……………母さん!?!……………何……………してるの?」

世界が凍った。

その後どうなったかはこれを見ている君が想像して欲しい。  
まあ、ロクな事しか起こっていなかった事は言っておこう。



その後日が沈みかけるまで勉強を教えてもらい、神代さんの帰宅時間となった。

「ごめんね、夜遅くまで付き合ってもらって」

「いや、気にするな。お前の底辺な学力を上げる為だ」

彼の言葉にグサツつと突き刺さるがこれにはもう慣れたものだ。

僕は「はは、そうだね……」と苦笑する。

こんな事にさえ彼と話すと気分が良くなってしまふ。

「それじゃ……」

「うん、今日はありがとう。じゃあね、日色」

そう、彼に別れの挨拶をすると彼は怪訝な顔をして、此方を見る。何か変なことでも言ったかな？

「お前……今、初めて俺を下の名前で言ったな」

「え？……あーご、ごめん！つい……」

咄嗟に口元を押さえるが、彼はフツと笑う。

えつと怒っていないのだろうか？

「……えつと、嫌なら止めるけど……」

「いや、構わない。じゃあな……ハジメ」

日色はそう言った後、目に見える程に笑った。

僕はそれを見て、文字どうり見惚れてしまい――

トクンツ！

胸に、熱く、そして優しい『何か』が生まれた。

——ハッ！いけない、いけない。

「うん…バイバイ、日色」

僕もせめて笑顔でお別れを言おうと笑った。

その時から彼と会うたびに、胸が熱くなるようになった。

ちなみに、中間テストでは僕の点数の大半が90点台を獲り上位20台に入ると言う偉業を成し遂げ日色くんの凄さをさらに実感するんだけどそれはまた別の話。

## 文字使い日記③

— φ(?!?) ( ) 月 ( ) 日

黄昏の海岸で君の青い瞳を見た、どうも皆さん日色です。

最近返却された中間テストでハジメちゃんがニコニコ笑顔でテストの点数を見せてきた。

どうやら90点台を取れたらしく、学年上位20位台に入り、両親に大絶賛され遊べる様になったらしい。

よかったね、遊べるようになって。

え？俺？全教科満点ですが何か？（ドヤア！）

学年首位の座は譲らないのである、あ、ただし生徒会長とかは勘弁な。

— φ(?!?) ( ) 月 ( ) 日

今日は日記に親の紹介をしようと思う。

まずは我が母親こと神代香澄<sup>かみしろかすみ</sup>

フワフワとした茶色の長髪に優しそうな茶色の瞳、常にニコニコとしておりマイペースな母さんである。



職業は大手洋服会社の社長らしく頭脳明晰で容姿もかなり若く見え、一見完璧の優良物件に見えるのだが、あり得ないレベルで料理が下手な事とマイペースすぎる事が問題となっている。

次に我が家の大黒柱こと、かみしろれいじ神代零士

黒メガネをかけた少し天然パーマな黒髪黒眼、此方も穏やかな性格で優しいお兄さん(?)といった感じだ。

職業は大手クルマ会社(ト○タヤホ○ダみたいな感じ)の専務取締役、家事などでもき、母さんの代わりに朝は弁当や洗濯を行ってくれる主夫系の父親である。……まあ、夕食を作っているのは俺だが。

そんな家族の紹介が終わって現在、学校から帰宅すると俺の部屋にエプロン姿の父さんがニコニコ笑顔で来ていた。

「……で、親父何の用だ?」

「うん、日色。僕の代わりに買い物に行ってくれないかな?」

超嫌なんです、なんだ買い物って?父さんが行けよ車あるじゃん。

「嫌だ、親父が行けばいいだろ」

「そうしたいんだけどね、急遽会社に行かなくてはならなくなつたんだよ」

ああ、なるほど。だからその笑みか、フツ甘い我が父よ、前世高校までニートだつ

た俺の粘り強さをなめるなよ!!

「もし日色が断つたら——」

一週間カップラーメンで生きたこの実力(その後、吐き気が三日間止まらなかった)見るがいい!!

「——仕方ないけど、お母さんに買い物と料理を頼むことにするよ」  
「分かった、行ってくる」

即答だった。

行つて参りま——すツツ!!!!!!

即座に父さんから買い物袋と金を貰い、ドアへと走っていく。

母さんに買い物物を任せる?ダメだ、絶対ダメだ。

ハンバーグの材料買って来てと言つたら、薬屋と雑貨屋に行こうとする母さんに任せたら臨死体験を味わうことになる!!!

笑えるだろ?どんな材料を使つても料理の原型はあるんだよ………味は天国への片

道切符だが。

食べられるものと言う前提を粉碎してくる我が母には絶対に厨房を任してはいけないのである。

Q、米を研ぐために必要なものは？

A、クレンザー

それがうちの母の回答である。

\*分からない人のための補足

・クレンザー……主にケイ酸鉱物などの研磨材を含んだ食器や金属器を洗浄する為の洗剤、勿論洗剤なので米を研ぐ時に使うわけではない、その君は絶対に真似しないように。

クソツタレエえええ!!せっかくの愛しい自由時間がああああ!!!

俺は、背後で「いつてらっしやーい！」と声をかける父さんを背に、勢いよくドアを開けた。



「玉ねぎに人参……じゃがいもに………あぁ、今日はカレーか」

買い物袋に入っていた紙を見ながら、食材を集めていく。基本的に平日は朝食を父さんが夕食は俺が担当しており、休日は俺が両方担当する代わりに、父さんが昼食を担当する。……これではただの雑用じゃねと思う人もいるかと思うが、小さい頃からやってきたのだ、すぐに慣れましたよ。

それに、あの母さんの料理を食べると思うと寒気が……（恐怖）

今回買う食材で、父さんが作る料理を予測し、隠し味の調味料でも買おうかね？

決して自慢ではないが……決して！自慢では！無いが！自分は料理は上手いほうだと思っている（ドヤア）

前世から一人暮らしだったことも含め、父さん直伝の料理方法や、インターネットによる料理調べでかなりの腕と思うのだ、親にも美味しいと言われたし……建前かもしれないが。

俺は、いつか親父の『ゆき●ら』を受け継ぐんだ！（某お粗末系主人公）  
おっと、いけないいけない、思考が逸れた。

定員にお金を渡し、スーパーマーケットから出る、ハア、憂鬱だ。早く帰ってラノベでも調べよう。

そう思い、来た道に戻り始める。

——わ、見てみてあの人、スツゴイイケメンじゃない？

——え？どれどれ？きゃあ、ホントだ！カッコいい！！

と、俺の耳にそんな声が聞こえてきて憂鬱な気分が増してしまう、チツ！イケメンめ爆裂しろ、ついでにリア充も死ね！氏ねじゃなくて死ね！

そう思いながら帰っていると何やら裏路地で揉め事が起こっていた。

どうやら子供とおばあちゃんに厳つい男がぶつくさと罵っている。

あー、あれか。白崎香織が南雲ハジメに惚れてしまう原因となった出来事か。

子供が柄の悪い男にぶつかってしまい、クリーニング代を請求しているのだ。

恐らく近くにハジメちゃんや白崎香織もいるのだろう、だったら俺が何かする必要はないはずだ。

故に私、神代日色は何も見なかったことにしてスルーする、是非ともハジメちゃんが助け白崎香織を惚れさせて欲しい、いや、百合になっても困るけど。

、そう思い、その場から離れようとし――

アレ？原作にあの子供って絵本とか持っていたっけ？そんな描写なんて書かれていなかったはずだが。

あ、柄の悪い男が子供の胸ぐらを掴んだ。ドンマイ、少年。

持ち上げられた少年は、泣いて、手に持っていた物を落とし、おばあちゃんが子供を守ろうと庇おうとしている。

ん？ちよつと待て？

子供は今何を落とした？

気がついたら、柄の悪い男が背を向けて逃げていた。  
背後を見ると、子供が泣きかけになっていた為、頭を撫でてやり、何故か手に持っていた絵本を渡してやる。

「大丈夫か？ほら、受け取れ」

ついでに持参している飴（計23種類）の一つ、ぶどう味をポケットから取り出し、渡してやる。

子供は飴を食べると笑顔になり、「ありがとう、お兄ちゃん！」と言ったあとお礼を言ったお祖母ちゃんと共に帰っていった。

あー、ホントまたやつちまった。







彼が叫ぶ、希望が消える。

真の絶望が押し寄せた。



お、落ち着け俺、冷静になれ。

思考を止めるな、最適解を探り続ける。

でなければ、でなければ、

「別に、あの男が気に食わなかったただけだ」

殺される!!!

逃走経路、確保、対象白崎香織との距離約二メートル、逃走力おそらく現在では可能性アリ。

俺は彼女にそう言った後、彼女から距離を離して、裏路地から出る。……途中で何か聞かれた気がしたが気にしない

そして、道の角を曲がった途端、全力でその場から逃げ出した。

速く！速く！あそこから逃げなければ!!

その後全力で家まで帰り、家に閉じこもった。

今日は過去最悪の一日だった。

— φ(？ー?) 月 ■ 日

数日後、俺はデパートで自分の財布を片手に買い物をしていた。

そう、今日はラノベの発売日なのである。ついでに言えばハジメにも買うことを頼まれた為了承し、二冊買う予定なのだ。

そして、見事オタク達の闘いに勝利し、二つの目的の小説にその他の興味を惹かれた小説を買い取ったのだ。

つまり、現在の俺のテンションは最高潮である。ヒヤッファー!!

しかも、親に昼食も済ませておいでと言われ、美味しい食べ物を食べるとかなりノリノリである。

しかし、現実には悲しい、いいこともあれば悪いこともある。

そう例えばヤンキーたちに絡まれている白崎香織を見つけるとかさ。

うわー、超関わりたくねえ……

というわけで関わりません、買った小説を読みながら歩きその場から離れ——



心配そうに此方を見ているよ!?

「このオタク野郎が!! 覚悟は出来ているんだろぅな!!」

あ、ついに目の前のヤンキーがカンカンに起こり、拳を振るって俺の持っていた小説を叩き落す。

「あ?」

コイツハイマナニヲシタ?

次の瞬間、俺は首、鳩尾、腹に三度、殴った後、蹴りを股間に蹴り上げる。

ヤンキーが突然の激痛に痛みを悶える前に流れるように足、足腰、腕、手、を螺旋状に捻りながら運動エネルギーを消費させず、勢いよく踏み込み、右手をヤンキーにぶつける。

発勁！

「ゴフツ!!」

最近知った中国の拳法が直撃したため、目の前のヤンキーが胸を抱え、口から透明な液体を吐き出し、地面に沈む。

俺が与えた衝撃すべてが、身体を抜けず発勁により内部に直撃したのだ、手加減はしたがしばらくは気を失っているだろう。

落ちた小説を手に取り、パンパンと払ったあと、沈み込んでいるヤンキーを掴んで、ヤンキー達の前に転がしてやる。

「一度だけ言ってやる、……消えろ」

自分でも驚くほど冷たい平坦な声に驚くが今はそれどころではない、こちらとしては

是非とも立ち向かって欲しいのだ、本を大切にしない奴は死ぬと思ってるしな。  
『ひっ！』

ヤンキーたちは怯えて、その場から倒れているヤンキーを抱え、バタバタとその場から逃げていった。……チツ立ち向かってこなかったか。

せつかく楽しかった気分が台無しだ、ハア、とため息をついて憂鬱な気分になる。  
今日はもう帰ろうとしたとき――

「あ、あの……前に会いませんでしたか？」

あ、彼女のこと忘れてた。



さて、どうする俺。

現れるは目の前の死亡フラグ、選択を見すれば即座に死が確定する。

選択肢①

・その場から逃走する

駄目だ、そんなことをすればただの「自分をヒーローだと錯覚しているバカ野郎」になつてしまう。

選択肢②

・正直に言う

それもダメだ、死亡が確定し、奈落に落ちる未来が高まる。

そう、ならば第三の選択肢を選んでしまえばいい。それは！

「いえ、人違いです」

そう言つてその場から歩き出す。

そう！『人違いで誤魔化そう作戦』である!!

「ま、待つて！嘘だよな？絶対一度会つてるよね!？」

「いえ、気のせいです、人違いです。では私はこれで」



彼女の掛け声を無視して、そのまま歩いていく。

「待って！お礼をしたいの！」

「いえ、結構です。急いでますので」

よし、これで逃げれる！フハハハッ！これで俺の勝ち——

「あ、あの！今日限定の特別スイーツの店があるんです！一緒に行きませんか!？」

「.....何？」



現在俺とはある人気カフェの中にあるテーブルでも美味しそうな『スペシャルショートケーキ』とその隣にあるコーヒーがテーブルには置かれており、自分が座っている反対側には自分と同じケーキとオレンジジュースが置かれておりニコニコとしている白崎香織がいた。

ええ、見事釣られましたよ。お父さん、自分の欲望には勝てなかったよ……

コーヒーを手にとつてコクリツと一口飲んだあと、彼女をちらりと見る。

「そういえば、どうしてあんなことが起こったんだ？」

「え、えつと。新しい洋服を買おうとデパートに向かったら、絡まれちゃつて」

「ああ、ナンパか」

なるほど、ヤンキーは別にモテたりしないもんな、美少女がいたら誘いたくなる気持ちがよくわかる。……俺の前世は女性との関係なんて皆無だったからな!!（涙目）

「だから、あの時助けてくれてありがとう。私は白崎香織です、貴方は？」

「神代日色だ、別に気にするな」

そう言い、ケーキに手をつける。

フォークに突き刺すとプルンツという感触とともに突き刺さり、一息で頬張る。

そして――



やはり、幸福なことと不幸なことは均等に配分されているらしい、今回の事でよくわかったよ……

その後、ハジメにラノベを渡したら満面の笑みでお礼を言われたことにより癒されたことを言っておこう。

やはり、少女の笑顔は癒されるなあ……

## ヤンデレに萌え要素?ねえよそんなもんby赤ローブ

とあるカフェの店内にある一つテーブルと二つの椅子がセットで置かれている場所に二人の少女が座っていた。

片方は艶やかな髪を腰まで伸ばした少女、少したれ目の大きな瞳とスッと通った鼻梁に小振りの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧に配置されている容姿を持った少女、私こと白崎香織はニコニコと微笑みながらテーブルに置いてあるコップに入っているストローを使ってオレンジジュースを飲んでいた。

もう片方はポニーテールの長い髪型に切れ長な瞳、凜とした侍を彷彿とさせる引き締まった肉体に冷たいというよりカッコイイという印象を与える容姿を持ち、右手にはブレズレットをつけている少女、私の幼馴染八重樫雫は仏頂面でこちらを睨んでいる。

「それで、雫ちゃんは好きな人とどれだけ近づけたの?」

「……う、いつものようにメールのやり取りを……できるようなところまで……」

恥ずかしそうに言葉を零す雫ちゃん、何故こんなことしているかといえ、恋愛相談である。

小学校の頃、雫ちゃんと同じ剣道仲間の初恋の人（名前は聞いても顔を真っ赤にする

だけで教えてもらえなかった)がいたらしくその人とまた会えた時に告白したい為、女  
というか女子力を磨くためこうして私に相談してきているのだ。

なんというか、青春してるな〜と思う。学校ではお姉さまと慕われ、男子に告白され  
ているけど凛と断っているのにこの時だけ恋する少女になっちゃうのだ。雫ちゃん可  
愛い。

「もう！そんな弱気でどうするの、そんなのだったら誰かに取られちゃうよ！」

「うっ！で、でも……」

顔を真っ赤にしてアワアワとする雫ちゃん、なんというか学校とのギャップが激し  
い。

「引越した場所で可愛い女の子がいたりして」

「ウツ!!」

私の一言でビクンツと体を硬直させる雫ちゃん。

「その女の子が初恋の人に告白したりして」

「……ツツ?!?!」

ビクツビクツ！と更に体を震わせる。

「そしてその初恋の人が……」

「もう止めて！」

うー!と耳まで真つ赤になった頭を抱えて悶絶する雫ちゃん、どれほど初恋の人のことを思っているんだろう?

「もう!この話は無し!一旦終わりよ!」

「あはは、ごめんね。雫ちゃん」

やっぱり顔を真つ赤にする雫ちゃんは新鮮だ、いつも私が弄られるからなあ……

「そういえば、香織は気になっている人とかいないの?告白されたりするんでしょ?」

「うーん、そこまで気になる人はいないかな」

私には現在好きな人どころか気になる人すらいない、なんというか大体の男の子は私をいやらしい目で見てくるような気がするし。

「光輝とか……」

「えっと、光輝くんはちよつと……」

確かに光輝くんは私をそんな目で見たりはしないけど、ご都合的思考で物事を言ってしまうから。友達としてはいい人なんだけど……

雫ちゃんも「まあ、そうよね……」と苦笑する。

オレンジジュースを飲みながら、小さく思う。

はあく私にもいつか春が来るのかなあ?」

私は顔の見えない王子様を想像しながら雫ちゃんと話し続けるのだった。



ある日私は学校帰りに商店街に来ていました。

本来ならいつもの帰路で帰るんだけど、今日は気分が変わり、商店街に通ることにしたの。

ガヤガヤと聞こえる人々の騒音を振り切るように正面通りを歩んでいく。

——なあ、あの子めっちゃ可愛くない？

——ん？お、マジだ！おい、お前誘ってこいよ。

——嫌だよ、拒否られるのが目に見えてるじゃねえか。

そんな声が騒音に混じって微かに聞こえてくるがこれにはもう慣れたものだ。

もう自覚しているけど私の容姿は大変整っているらしく、事務所の人やナンパの人に  
よく声をかけられたりするのだ……大半は笑顔でお断りしているが。



だけど、来る日も来る日も私に如何わしい目で見てくるため、いつしか家や雫ちゃん以外に本心を打ち明けるようなことができなくなってしまうた。……光輝くんは私をそんな目で見たりはしないけどなんというかストーカー紛いのことをしてくるといかなんというか……とにかく本心を打ち明けることができない。

だから、私は雫ちゃんのように純粋に恋ができる人たちが羨ましい。

「……あれ?」

そう思っていると、どうやら裏路地が騒がしくなっていた。

慌てて人混みをかき分けて向かうと何やらお婆ちゃんが男の子を庇っていて、それを罵っている柄の悪い男性が正に怒り心頭といった様子でした。

どうやら察するに男の子が男性にぶつかっただけで服が汚れてしまったらしい。

——どうしよう

助けに行く?できない、私が行ったところで助けられない。

次第に恐怖で体が震え、動くことができなくなる。周りを見ても誰も助けに行くことはなく、見て見ぬふりをしていた。

——どうして?

そう思つてすぐに気づく、決まっている怖いのだ。あの柄の悪い男性に何をされるかわからないから。

ついに怒り心頭だといった感じに男性は左手で首根っこを掴み、持ち上げる。

「ああ!!?」

少年の悲痛な声が聞こえる。

そして、男性は右手で男の子を勢いよく殴りかかる。

——危ない!

私は次の最悪の出来事を想像して目を逸らしてしまう。しかし訪れたのは、打撃音でも少年の悲鳴でもなく——

——パシツという拳を防いだ音だった。

「……………あ」

私は無意識に吐息を零していた。

柄の悪い男性の拳を受け止めていたのは私の身長に近い背丈の一人の少年

艶やかな黒髪に黒色のメガネをかけ、大半の者が通り際に振り向きそうな整った容姿を持った少年が突き刺すような鋭い視線で柄の悪い男性を睨んでいて。

そして、次の瞬間――

――商店街に絶対零度の吹雪が訪れたかのように重く冷たい圧力が襲い掛かった。

「失せろよ、オッサン。ガキ相手にそこまでする必要はないはずだ」

「ひっ!!」

冷たく、そして重たい平坦な声が裏路地で響き渡る。そのあまりにも冷たすぎる声と圧力により柄の悪い男性は悲鳴をあげ、一步後ずさり――背を向けて逃げ出した。

男性が見えなくなると彼がフウとため息をつくと共にさっきまでの圧力が霧散した。

彼は少年が落とした本を手に取りパンパンと払い、突然柄の男性に落とされたことで涙目になっている少年に本を手渡した後彼は少年と同じ目線までしゃがみ込んで少年の頭を優しく撫で始める。

「大丈夫か？ほら、受け取れ」

それでも泣きかけになつてゐる少年にポケットから小さな飴玉を取り出して、少年の手に渡した。嗚咽を零していた少年は彼から貰つた飴を食べるとたちまち笑顔になり「ありがとう、お兄ちゃん！」と言つて、その隣にゐるお婆さんがペコツとお礼をして共に帰つていった。

手を振つてゐる少年に應えるように手を微かに振るう彼に視線を戻して——  
——微かに微笑む彼の姿に一瞬見惚れてしまった。

「……………ハッ！」

慌てて正氣に戻ると彼は未だに少年の方を向いていたため、私は話しかけることに決めた。ええ、決してあの笑顔に心を奪われたわけではないです。

「あ、あの……や、優しいんですね」

それが私が彼に初めてかけた言葉だ。その声を聞いてこちらに振り向いた彼の表情を見て——一瞬思考が停止した。

困惑そして嫌悪。

分かり易く言えば何だこいつ?とでも言うような視線でこちらを見てきたからだ。いや、これはどちらかと言えば当然の反応なんだろうけど、私にとつては新鮮だった。私だつて多分突然知らない人に声をかけられたらそうなるだろうけど、大半の男子達は私を見るなり背中に寒気が走るような変な目で見てくるからなあ。

「別に、あの男が気に食わなかっただけだ」

彼は私に関わることがめんどくさいとでも言うようにそう言うと早足で私から離れ路地裏から出て行つた。

「え?……あ、待って!」

慌てて追いかけてようと路地裏から出ると、商店街特有の人混みのせいで彼の姿を見失ってしまった。

まるでヒーローのように去っていくあの彼を思い出しながら思う。

「名前……聞いてればよかったな……」

◆ 数日後、私は近くのデパートに来ていました。

一応、新しい靴を買いに来ただけど、とある人気カフェの今日限定デザート無料券をお母さんにもらったからだ、お母さん曰く「彼氏と共に行ってきなさい♪」らしい……お母さん、私に彼氏なんていないよ……

雫ちゃんと一緒にいこうかと思っただけど生憎雫ちゃんは今日は用事があるらしい。

……光輝くんとも行くことも考えたけどそうした場合ろくなことしか起こらないからもちろん却下です。

そう思いながら定員からお金を渡し靴を受け取って、店から出る。

あとはもう、特別デザートを食べるだけかなと思っただけど、とあるに人気カフェに足を運ぼうとして。

「なあ、お嬢ちゃん。俺らと一緒に遊ばない？」

えっと、ヤンキーのような男性たちに絡まれました。どうしよう。

「ごめんなさい、急いでいるので」

「おいおい、少しぐらい付き合ってもいいだろ」

私はやんわりと断つてその場を後にしようとするが、強引に腕を掴まれてしまう。

「は、離してください!」

「いいから付き合えよ!」

有無も言わさない男性の言葉に私は顔を歪め、いつその事、大声を上げようと思いついた時――

「おい、てめえ。何俺らの前を通ろうとしてんだ?」

何やら声が聞こえた。私を取り囲んでいる人たちの端っこにいる男性が何やら話していた。ここからだと言われ男の身体に隠れて見えないがどうやら絡まれたらしい。

「ん?ああ、見えなかった。済まなかったな」

――あれ?

おかしい、この声にどこか聞き覚えがある。そう、それは――

「ハア?逃すわけねえだろ?おら、慰謝料に財布の中身を全て出してもらおうか?」

「ほう?お前みたいな存在が金を使う知能があったんだな?ああ、すまないこれは失礼なことをした、てつきり脳まで筋肉な脳筋だと思っていたよ塵芥」

男の身体に隠れていた者が明らかになる。

それは——艶やかな黒髪に黒色のメガネをかけ、大半の者が通り際に振り向きそうな整った容姿。あの時の私を助けてくれた少年だった。

喉が干上がるかと思つた。彼は助けようとしているのだ、見えなかつたなんて言つてゐるがそれは私を助けるための嘘なのだろう。

無茶だ、たつた少年一人が男達6人に勝てるわけがない。

私は逃げて、と言いたかつたそう思ひ声を出そうとするが恐怖で声を上げることができなかつた。

「このオタク野郎が!!覚悟は出来ているんだらうな!!」

彼と話していた男がついに怒り狂い、彼の持つていた本を地面に叩きつけ、そのまま彼の顔面に殴りかかる。

私は次の瞬間を容易く想像して、小さく悲鳴をあげ、目を瞑つてしまひ——

「あ?」

彼の重く響く冷たい音が聞こえ、ゴツ!!という鈍い音と何か重たい物が倒れる音が聞こえた。

ゆつくり目を開けるとそこには——



——床に倒れて気絶している男と地面に落ちた小説をパンパンと払い、悲しそうにしている彼の姿だった。

『……………え?』

男の人達の疑問の声が全員ハモって聞こえた。

目を瞑っていた香織の知らないことだが男達からすれば日色の小説を男が叩き落としたところから日色の姿がブレ、次の瞬間床に崩れ落ちる仲間の姿があったのだ、驚くのはある意味当然だろう。

まあ、そんなことを知らない香織は日色が無事なことにホッと一息着いたのだが。

彼は気絶した男の襟首を掴んで私や男の人達の方にポイツと投げ——

「一度だけ言つてやる、……消えろ」

冷たい声と共に数日前襲った冷たい圧力が再び襲い掛かった。

私も突然の圧力に体を縮こませてしまう。

『ひっ!』

男達は慌てて、倒れている男性を抱えバタバタとその場から逃げていく。

助けられた。

漸くたつてそのことに気づき、腰が抜けて座つてしまう。

慌てて震える体を奮い立たせ立ち上がると、彼はハアとため息をついて、心なしか落ち込んでいるように見えた。

私はこの機会を逃すまいと勇気を振り絞つて声を掛けることにした。

「あ、あの……前に会いませんか？」

その声にビクツと震え、振り返つた彼の表情は驚き一色で――

「いえ、人違いです」

次の瞬間、無表情に戻つた彼は、スタコラサツサと私から距離を離して歩いて行く。

え？

「ま、待つて！嘘だよな？絶対一度会つてるよね!？」

「いえ、気のせいですが、人違いです。では私はこれで」

慌てて声を上げるけどもすぐさま返答と共にスタスタと早足でその場から離れていく。

息をつく暇もない、とは正にこのことだろう。

「待つて!お礼をしたいの!」

「いえ、結構です。急いでますので」

どうしよう、一向に止まる気配がない。

えっと、えっと、彼を止めるような物は……

次の瞬間、ピカッと私の脳裏に何かが閃いた。

思い出されるのはお母さんに渡されたもの。

「あ、あの!今日限定の特別スイーツの店があるんです!一緒に行きませんか!」

スタコラサッサと歩いていた彼の進行が止まった。

「何?」

◆  
テーブルの上に乗っている二つの美味しそうな限定商品『スペシャルショートケーキ』にコーヒーとオレンジジュースが置いてあり、私の目線の先には手に持っている小説を片目に見ながらこちらを見つめている彼の姿があった。

彼に特別スイーツの話をするれば見事乗っかってくれて、一緒にお茶を誘うことができました。

これを機に彼と話せたらいいなあ、とは思っただけど、なかなか会話をする勇気が出てこない。

彼はコーヒーを一口飲むと、本を閉じて私に向けて口を開いた。

「そういえば、どうしてあんなことが起こったんだ？」

「え、えつと。新しい洋服を買おうとデパートに向かったら、絡まれちゃって」

「ああ、ナンパか」

慌てて答えると、ふむつと頷いて、再びコーヒーを一口飲む。

どうやら彼が言うにはあの時、少年を助けたのはあの子が持っていた本を男性が粗末に扱ったからだと言っているけど、本当は助けたかっただけなのだろう。

「だから、あの時助けてくれてありがとう。私は白崎香織です、貴方は？」

「神代日色だ、別に気にするな」

そう言つて彼、神代日色くんは、ケーキにフォークを突き刺して一口食べる。

私も日色君に釣られて、ケーキに手をつける。

優しい甘さといい酸味の苺が合わさつてとても――

「……美味い」

「美味しい！」

声と一緒にハモリつい笑いそうになつてしまふ。

日色君は微かに微笑んでいたが、その笑顔を見ると心が少し暖かくなる。

私はそれから、チャンスだと思つていろいろなことを話しました。

学校のことや自分の紹介、何が好きなかなどの他愛のない話をするのが半ちゃん

と話すときのように楽しかった。

彼は、少し呆れたようにしていたが自分のことを少しだけ話してくれた。

よく考えたらこれほど男の子と話したのは初めてだったんじゃないかなあ？

日色君はいふならば光輝くんとは似ているようで全く別の優しさを持つていた。

利益がなければ助けない、ギブアンドテイクを信条にしていると云つているけど、私

を助けたように他人を思いやる優しさを持つていた。

光輝君はご都合主義の解釈で物事を解決したりするけど、それは返って迷惑になったりする時があるもんなあ。

その後私はお別れの前に日色君に連絡先をナンパのような行為で知ってしまったけど別に構わないよね♪



『で、突然電話をかけてきてどうしたのよ?』

「う、うん。少し話したいことがあって」

その日の夜、私は自分の部屋で雫ちゃんに電話をかけていた。

『ふうん、香織が私に話したいことねえ……』

「むう、別に何か悪い?」

電話越しに聞こえてくる雫ちゃんの意地悪そうな声に私は少し不思議に思う。

何かおかしい事でもあったかなあ?

『まさか……好きな人ができたとか?』

「あ?」

雫ちゃんのエスパー的な直感にビクツと体を震わせる。

ど、どうして知っているの!?

『え……?まさか本当に出来たの!?!』

「えつと、うん……………好きな人ができたの…………」

今日の彼のことを思い出して……………は、恥ずかしい／＼

私は今日起こったことを雫ちゃんに伝えた……………あ、名前は伏せたからね!?

『ま、まさか……………香織の心を掴む人がいるなんて…………』

「ちよつと待つて雫ちゃん、あなたは私をなんだと思っているの?」

親友が自分をどう思っているか気になるところだ。

『まあ、私もそんなことが起こったらその人のことが気になるわね』

「そうだもん、私は普通の女の子だもん」

『ああ、はいはい。ごめんなさい』

しつかり反省して欲しい。

『それで、あなたの思い人は一体なんて名前なの?』

「えつとね!か——」

ちよつと待て、もしこれで日色君の名前を言ってしまうば不公平じゃないかな?

雫ちゃんも好きな人の名前を隠してるし…………

「やっぱり言わない!」

『もう!そんなことに意地を張らないで教えなさい!』

「いやー！雫ちゃんが教えてくれないかなければ教えてない！」

『そ、それはちよつと……』

「じゃあ私だつて教えないもん！」

慌てている雫ちゃんにそう言ったあと、通話をプツツと切る。いい気味である。

自分でも自覚している、私が日色君のことを好いていることぐらい。

「また、会えるよね……」

ベットの枕を抱きかかえながら、ケータイに載っている『神代日色』の連絡先を見つめる。

我ながら安い女だとは思っているけど、別に構わない。

大好きです、日色君♪

ただ、彼女は一つの可能性を見落としていた。

自分の親友の思い人が自分の恋した男だという可能性を



「ツ!?!」

自分の部屋で小説を読んでいた日色は突然の寒気に身体を硬直させる。



「……気のせいかな?」

(あるえ?どうして今心臓を鷲掴まれたような感覚に陥ったんですかねえ?ま、まさか!あの死の帝王と呼ばれる骸骨に『心臓掌握』グラスグハートされましたかねえ?終わった?終わちやった?まだだ!私はまだ死なんぞジヨジヨ!!)

やはり彼の思考は今日も平常通り残念である。

## 幕話 ありふれた少女の恋愛事情

南雲ハジメは困っていた。

あの時、日色に救われて以来、彼の顔を見るたびに胸や顔が熱くなる。

最初は風邪かな？と思いましたが温度計に記された数値は常に平熱、では日色に会うたびに発症する病があるのか？そんなわけがない。

最近では、顔すら見るのが難しくなってきた。

南雲ハジメは慌てていた。

別に男子に告白されたわけでもないし、美少女に声をかけられたわけでもない。

では何故慌てているか？

答えは簡単。

『ハジメ、俺の家に来ないか』

『……………あ？』

◆ ハジメの大切な親友、神代日色に家に誘われたからだ。

春が近づいてきた中三年の三月半ば、高校受験が終わり、今までの勉強した分思いつきり遊ぼうぜ！という期間。

彼曰く適当に決めた高校にハジメも行くために勉強し、見事合格した後、お祝いという理由で日色にハジメは自宅に誘われていた。

ハジメが彼と同じ高校に行こうとした理由は簡単だ。

『神代日色と離れたくないから』である。

簡潔に言えばハジメは日色に依存していた。

まあ、本心を偽り、親以外に拒絶されていた彼女を日色は救ったのだ。依存されるのは仕方ないだろう。

どっかのヤンデレ女神とは違って、日色からすればハジメは豹変するまではいい奴認定され、しかもハジメは決して他人に迷惑をかけない。

ただ、日色の匂いがすると落ち着く程度である。

## 閑話休題

そんなわけでハジメからすれば友達の家に行くということは一種の憧れとなっている。

親以外に拒絶されていたため恋愛面には疎く、「ウチ来る？」↓「今日は親はいないんだ」↓「アーツ!!」みたいな展開は知らないし、そもそも日色バカにそんな展開が起こせるわけがない。

だがしかし、ハジメにとって彼の家に行くことは胸の中にある『何か』が燃えているが故に簡単に言えば恥ずかしいのである。………決してPCで邪な物を見てしまつたわけでは無い、無いつたら無い。

そんなわけで現在、ハジメは日色の家のチャイムで押そうか押さないか行ったり来たりしていた。

(ううう、ど、どうしよう。やつぱり押せないよ、で、でもここに來て帰るのは……うう、な、悩むなあ)

とまあ、こんな感じ。まさに悩める少女である。

家のチャイムのボタンへと指が伸びたり引いたりして一分か十分後。

悩む少女ハジメに気づいた日色が家から出るが未だにチャイムを押すか押さないかで悩んでいるため、一切気づいていなかった。

「う、うう〜」

「で、いつまでそこにいるんだ？ハジメ」

未だに気づかないハジメに痺れを切らしたのか日色はハジメの首元を人差し指でチョンつと突くと突然の声と感触と共にハジメの思考に空白が生まれ、口からは甲高い声が射出された。

「ひゃひんツ!!」

ビクンツ！とまるで凍った秋刀魚のように硬直したハジメ、慌てて振り向くとそこに日色がいることによりやく気付いたようだった。驚愕により微かに青くなっていたハジメの表情が一瞬で真っ赤に染まり始める。

「い、いいいいいいいいいつからそこに!?!」

「2、3分前だな、なんか集中しているからほつといてやろうかと」

「言つてよ！なんだか恥ずかしいじゃん！」

うわあー！と顔を真っ赤にしながら悶えるハジメを無表情で見つめる日色。内心では『おう、なんだか小動物みたいだなー、萌えるわー』なんて思っていたりする。

「……………とこころで、まだ入ってこないのか？」

「慰めてよー！」

◆ ハジメが日色の家に入って真つ先に見たものは豪邸の玄関といった感じだった。

傷一つない木製の床に靴などを置いてある美しい白い石、一応ハジメの両親も裕福な家庭であるが流石にこれほど綺麗な豪邸に入ったことなどない……友達の家に誘われなかったためだが。

「す、凄い家だね。両親は何やっているの？」

「お袋が大手洋服会社の社長、親父が車会社の専務取締役だ。俺の部屋に行くからついてこいよ」

「ま、待ってよ」

そう言いながら廊下をスタスタと進む日色にハジメは慌てて靴を脱ぎ追いかけていく。廊下の壁には一定間隔で飾られている美しい絵や写真にハジメは目を取られてしまい――

「あ、あれ？日色？」

――彼を見失ってしまった。

家の中で迷子になるなんて笑うしかないが取りあえず彼が向かっていた方向へと足を運ばせると2階に続く階段と微かに開いているドアを見つけた。

「い、い、いかな？」

恐る恐る、僅かに開いているドアを開いてみるとそこには――

プチプチプチプチ

――日色の母親らしい女性が居間らしき部屋で割れやすいものを包むために入っているプチプチを無言で押ししていた。

「……………え？」

「……………おい、ハジメ」

目の前の光景に目を疑いたくなるが次の瞬間、背後からいつの間にかいた日色に引つ張られドアを強制的に閉められる。

ボタンツと閉められたドアに日色はまるで見られなくなかったものを見られたとでも言うようにため息をつく。

「……………全く、どうして迷子になるんだ？まあいい、さて、俺の部屋に向かおうか」

「え？でも、今のは母さ「気のせいだ、ハジメは幻覚でも見たんだろう」  
「で、でも「気のせいだ、いいな」……アツハイ」

有無を言わさない日色の声色にハジメは口を閉じてしまうと居間のドアからさつき  
の女性の声が聞こえてきた。

『あら？さつきまで12時だったのにもう3時になつてゐるわ』

どうやら3時間もプチプチで費やしていたらしい。

『仕方ないわねー、ご飯を食べてから続きをしましょうか』

しかもまだ続ける気らしい。

ふとハジメは心配そうに日色を見ると、日色は普段のような無表情が一転して苦虫を  
潰したような顔で顔をしかめていた。初めて彼のこのような表情を見たがなんという  
か苦労人のオーラを醸し出している。





途中下の廊下から聞こえてきた会話はハジメは聞かなかったことにした、普段の彼からは想像できない会話だったので彼の尊厳が音を立てて崩れそうだったからだ。彼の為にもあまりあの母親のことは聞くべきではないのだろう、どうやら完璧に見える彼も家では苦勞しているらしい。



「……………すまん、ハジメ。少し騒がしくすぎた」

「う、ううん。別に大丈夫だよ」

数分後、日色の部屋ではゼエゼエと乱れている呼吸を整えようと深呼吸を行い謝る日色にハジメはブンブンと首を横に振っていた。

「と、すまん、飲み物を持ってくるのを忘れたな。とつてこよう」

そう言って、え？とハジメが声を出す前に立ち上がってスタコラサツサと日色は部屋から出ていってしまう。

ボタンと閉まるドア。階段にトントンと降りていく音と共にハジメはようやく自分が一人で日色の部屋にいることに実感が湧いてきた。

（ひえっ!?ど、どうしよう!?日色の部屋に一人でいるなんて、うううは、恥ずかしいよ／＼）

どこに恥ずかしがる要素があるんだ?と思ったその君、そこはあまり気にしてはいけない。乙女の事情だ。

ハジメは一度日色の部屋をぐるりと見渡す。

日色の部屋はたくさんの小説や漫画が本棚に綺麗に整理されており、床や窓にはホコリ一つなくゲーム機などは綺麗に棚に入れられており、いわば普通の男の子の部屋とも言った感じだった。

中でもハジメの注意を引くものが一つ、それはベットに置かれている天日干しきれ、綺麗に畳んであるシャツである。

「……日色の……シャツ……」

まるで餌に吸い寄せられた虫のようにハジメは無意識にベットに近づき、シャツを手を取ってしまう。

そしてそのまま、シャツを自分の顔に近づけ――

「はっ！……僕は何をつ………？？」

次の瞬間、ハッ！、と正気に戻り、ハジメは自分の顔に近づけたシャツを慌てて遠ざけて――

遠ざけて――

「べ、ベットに戻さなきゃ……日色に変な奴だと思われちゃう……」

遠ざけ――

「ベットに……戻さなきゃ……」

遠ざけ――

「ベットに………」

徐々に再びシャツを自分の顔に近づけていく。おい、何やってんだ主人公。

そんな何処かの声を無視して、ハジメは謎の興奮と共に腕を自分に引き寄せて顔に日色が出来ていたシャツを近づけ――

――シャツを抱き締め、めいっばい匂いを吸い込んだ。

「……ん、スウ……フウ……スウ……」

天日干し特有の気持ちの良い太陽の匂いと微かに残った彼の匂いが混ざり合い、ハジメは吸うたびに落ち着きと幸福感が押し寄せて――

「ハジメ、何やっているんだ？」

「ピヤイツ  
!!!!」

――飲み物とお菓子を持って来た日色に見つかりましたとき、ちゃんちゃん。



「あー、見なかったことにしておいとくからさ。その、なんだ？元氣出してくれ、ハジメ」  
返事がない、ただの屍のようだ。をまさに実行したかのように、暗いオーラを迸ながら部屋の隅っこで体育座りで落ち込んでいるハジメ。皿にクツキーやケーキ等の色とりどりなお菓子を乗せて、二つのコップと炭酸飲料やフルーツジュースを持ってきた日色が慰めているがあまり効果がないようだ。

と、暫く声をかけ続けているとハジメが涙目になりながら微かに振り向き、一言小さく零した。

「……………怒ってない？」

「いや、何故怒る？」

逆に日色が聞き返すと、ハジメはホッ、とため息をつき暗いオーラが霧散し始める。

「まあ、見た時は若干引いたがな」

「どうしてそこで上げて叩き落とすの!!？」

無自覚に打ち出された上げて落とす日色の言葉のミサイルにハジメは悲しみの涙を流した。



「もう！ひどいよ、日色！」

まさに怒り心頭です、とでも言ったハジメに日色は一切変わらない表情で「すまん」と謝る。残念、全く反省していないようだ。

「日色！本当に分かって——」

「あー、はいはい。わかったからちよつと食え」

「——むぐっ!？」

未だに説教しようと口を開いたハジメの口にホイっ、と持ってきたクッキーを放り込む。

ハジメは慌てて口に入ったクッキーを飲み込み、再び日色に文句を言うために口を動かすと、サクサクとした食感にまろやかに広がる甘味、まるで高級なお菓子でしか味わえないような美味しさが口内に襲いかかり――

「(ゴクンツ) ……おいしい」

「おつ、そうか。作ったかいがあつたな」

再びもう一枚とクツキーへと伸ばしたハジメの手がピタツと停止した。

「……………え？これ日色が作つたの？」

「ん？まあな、基本的な料理は俺が担当しているからな。この程度はお前でもできるさ」

そんなわけあるか。

日色の料理の腕は軽く高級料理店に匹敵するほどの腕前を持っており、毎日両親を喜ばせている程だ。

決して日色のような腕を持った中学生など世界に数人しかいないだろう。

「ま、そんなことは置いておいて。ひとまず乾杯しようぜ」

「いや、僕にとつては重要なことなんだけど……」

料理もできる完璧クール系少年（バカ）の実力にはハジメは自分の無力さを嘆いた。

が、不屈の精神を備えたハジメにとつてそんなことなんてもう慣れたものだ。決して



泣いてなどいない、無いたら無い。

炭酸飲料の入ったコップを日色が掲げるとううくと声を零しながらハジメもそれに応じてコップを掲げ、ともにカシヤンと鳴らす。

「ほら、乾杯」

「……乾杯」

とまあ、自分の無力さに嘆いた少女と単なるバカのパーティーはなんとも締まらない感じで始まったのだった。



そんなわけで二人だけのパーティーは始まったわけだが特に特別なことをしているわけではない。

日色が用意したお菓子を食べながら、ゲームをするというだけとなっている。

カチャカチャカチャカチャとコントローラーを高速で押す音が部屋に響き、テレビの画面内で二体のキャラが高速で動き回っていた。

「ふはははは!!どうだ!ハジメっ!防戦一方じゃないか、このままくたばるがいい!!」  
「フツ!甘いね日色!このキャラによる逆転技を忘れてるでしょ!」

「なっ!しま……」

「もう遅い!これで終わりだア!」

「ぐわああああああああああ!!」

『GAME SET!』

とテレビから聞こえてくる音声と共にコントローラーを置いて両手両膝をついている日色と勝った!とでも言うように人差し指を立て片膝立ちで勝利のポーズをしたハジメが満面の笑みでいた。

「フッフ、これで4連勝目だね。日色」

「クソツ、次だ!次こそ勝ってやるよ!」

勝ち誇っているハジメに日色が悔しそうな表情でビシツと指を指す。

ハジメは「ふふ、いいよ」と再びゲームに取り掛かる。

彼と共に居るたびに楽しさが増し、よく笑ってしまう。

トクンツ!トクンツ!と彼と会うたびにハジメの胸は何度も熱くなる。

数年前までは一欠片も思わなかったようなことがハジメにとって今では自然のことになっている。

「そういえば……」

ゲームをしていると隣で日色に声をかけられた。

「どうしたの？ 日色」

「いや、何。ハジメは将来の夢はあるのかと思つてな」

将来の夢、それはハジメにとってあまりに気にしなかつたことだ。まあ将来のことが決まっているということもあるが、いじめに遭つていたハジメにとって未来のことはあまり考えない。現在が辛い彼女に未来なんてものはあまり考えたいことではないのだ。

「だけど、

今の彼女は違う。」

稀に見る自分の両親を見て、時々思つてしまうのだ。

自分の将来のことを、隣にいてくれる人のことを。

もし、

もし、自分の隣で共に歩んでくれる人がいたとすれば――

それは――

その時にいてくれる人は――

ハジメは無意識に、彼へと目を向けてしまう。

日色はハジメが自分を見ていることに気づいたのか、こちらを向き――

「――どうした、ハジメ？俺の顔を見て？」

「――ツ！？な、なんでもないよ！！」

「そ、そうか」

つい彼を見てしまったハジメは顔を真っ赤にして慌てて目を逸らし、ゲームに集中する。

思考を打ち切り、画面内のキャラを動かして日色のキャラを倒そうと動かしていく。

意識してはいけなかった。

思っではいけなかった。

もし、ハジメがそれを自覚してしまつては――

――もう、彼女は自分を抑えることはできないから。

彼女の恋の蕾はもう、今か今かと開花の瞬間を待っていた。

## 文字使い日記④

( ; ∇ ; ) 月 ( \* 。 ∇ 。 \* ) 日

舞い散る桜の花弁を見るとその散り様が自分の未来を暗示しているようで恐怖しているどうも、皆さん日色です。

中学生生活も終わり、今年からは高校生活を始める春休みだ。

ええ、原作が開始しますよ、ベイバー！

いや、頑張ったよ俺。高校の進路をちゃんとありふれたような高校を選んだよ？

だけど、だけどさ……

……どうしてハジメちゃんも一緒の高校を選んでるんですかねえ!?

こ、これが強制的に異世界に飛ばされるといふことの意味か!?!?どの高校を選んでもハジメちゃんがハッピーセットでついてくるといふこと!!?!?あれか、マ○ドか！

しかも、メールからは八重樫さんも白崎さんもその高校らしいんだぜ!?!?今すぐ高校を変えようかと思っただけど、時既に遅し、先生に提出した後だった。

ハイ、原作介入決定♪俺の死亡フラグも大増殖っど♪

死んだ。

( ; ∇ ; ) 月 ( ◇ ) 日

高校の試験に合格した為、ハジメと共にパーティーをした。

ええ、何故か母さんがプチプチに熱中していたり、ハジメちゃんが俺のTシャツを抱き締めていたりしたけどまあ、楽しかった。

ハジメに臭いなんて言われたらどうしようか？

あれか、反抗期か、「お父さんの洗濯物と一緒に洗わないで」とか言われる年頃だからなあ。俺の匂いが腐った卵の匂いがするなんて言われた日には1ヶ月ほど寝込みそう  
だ。

臭く、ないよね……？ (涙目)

( ? ∇ ? ) 月 ( ? ^ ? ) ヶ日

今日は待ち<sup>永遠に来ないでほしい</sup>に待つた高校の入学式。

試験の結果は見事に二位、問題から最も取れそうな人の点数の合計を予想しギリギリ届かない点数を取った。いやまあ、全教科を全て95点にして出したらカンニングされてんじゃないかと思われたのではないかとヒヤヒヤしたが、まあそんなことはなかったらしい。

というか、泣くな両親！どうして母さんも父さんも入学式のとくに号泣するんだよ！写真撮るときも泣き続けて、俺の肩に涙が落ちてくるんですけど！

おい、ハジメ！そこでこっそりと見てんじやねえ！苦笑すんな！助けてくれよ！



異世界召喚が近づいて来てとても憂鬱な件について。

もはや異世界に飛ばされるのは確定だが、一つ懸念があった。

それはいつ異世界に召喚されるかということ。

そう、原作にはハジメ達が転移した時は明確な日付が記されていないのだ。

しかも書籍と原作の場合とは転移する時間帯が違っており書籍では朝、原作では昼食の終わりとなっているのだ。

ここからは転移する可能性を書いていこう。

まず、前提条件は召喚する日がハジメが憂鬱だと言っていた月曜日だということ。

これは書籍版と原作も同じである為月曜日に転移する可能性が高い。

そして次、クラスの大半が17歳だったという事、おそらく異世界にいる間に誕生日を迎えていると考えると異世界召喚前は大半が16歳だったと考えるべきだろう。



また、書籍版では制服が半袖のような夏服では無く、またブレザーを着ていたということはまだ、暑い夏ではない。

つまり、これらを真実だと仮定して、考えると召喚される日はおおそ高校二年生の4月から5月の範囲で起こる可能性が最も高いということだ。

あと、恐らく一年か。後一年すればハジメちゃんの百合百合しい展開が起こるのかあ、やっぱりリア充は死ぬ、氏ねじゃなくて死ぬ。クリスマスで一人で過ごす悲しさを味わえ世界中のリア充めらが。

(?・▽?)月(・▽・)月

入学式の翌日、クラス発表があり新たな友達を作れる期間である。

……まあ、俺なんか作れるわけないけど。主に言語のせいだな！クソツタレ！

えーっと、クラスメイトを見るに——おお！最大級の死亡フラグである白崎香織がない！密かに内心でガッツポーズである。まあ代わりにハジメが居ない為俺の一年がボツチ確定したが。

て、あれ？どつかで見たことのあるような名前が……

「日色」

と次の瞬間肩をトントンと叩かれた。

……………え？

ギギギと後ろを振り向くとそこには長い髪をポニーテールにして、こつちにニコニコと微笑んでいる侍女こと八重樫雫がいましたとき。

アエエエエエツ!!? 八重樫!!? 八重樫さんナンデ!?

「なんだ、ポニーか」

「なんだ、つて何よ久しぶりに会った友達なのよ? というかいい加減雫って呼んでくれないかしら」

「断る」

というか、あんたとは毎度毎度メールでやり取りしているじゃん。知ってる? 君達のメールで携帯の容量が三十%埋まったんだよ? スマホに機種変更したから今は大丈夫だけど。つていうか近い! 近い! 胸が、胸が! 豊かな母性の象徴に目が行きかねないから離れてくれええええええええええ!!

制服越しに膨らんでいる巨大なサイズに俺に突き刺さる精神ダメージはクリティカルヒット!

▼ 片翼の女神の攻撃!

▼ 効果は抜群だ!

▼ 神代日色は力尽きた……

という口グが出てきそうだ。

久しぶりに八重樫さんと会話しながらチラツとクラスメイトが書かれてある表を見ると俺と同じクラスに八重樫雫の名前があるんですね。

HA! HA! HA! どうやら俺は八重樫と同じクラスらしい、死んだ。……遺言書でも書いておこうか?

俺の死亡フラグが留まることを知らないんだが。

(?▽?) 月(。・ω<) ぶてへぺろ♡日

こんちわ、震えるぞハート! 燃え尽きるほどヒート!! サンライトイエローオーバードライブ!! したい日色だ。

前回の日記から約一週間が経過した。え? 何をやっていたかって? 友達がいなくて図書館の本を読みまくっていただけだよ! (号泣)

同じクラスの友達なんて八重樫さんしかいないからね! 基本的迷惑をかけないように距離をあけているのさ! (キラツ!) 昼食などに必ず誘ってくるからあんまり意味がないけどなツ! 意味ないけどなツ!!

そのせいでハジメとの二人だけの時間は放課後ぐらいになってしまい拗ねられてしまった、どうしろって言うんですかね?

最近はこのそり盗んだ屋上の鍵を幾つか複製して、昼食の時屋上で静かに食べ、本を読んでいるためある程度溜まっているストレスを発散できるからいいけど、これがバレ

たら平穏な時間がまた無くなるからなあ。バレないようにしないと。

あ、あと今日、ハジメが初めて友達が出来たよ！と喜んで報告してきた。

……俺は友達じゃなかったのか（絶望）

そう思い絶望しているとハジメが慌てて弁解し始めた。どうやら初めての女の子友達だったらしい。……何だてつきり俺は友達じゃなかったのかと思つたわ。

名前を聞いてみるとハジメは満面の笑みでこう言つた。

「うんー！白崎香織さんって言うんだ！」

……………え？

(?▽?) 月(\*▽\*) 日

やっぱり世界は俺のことが嫌いなのだろう。

ありふれた今日の昼食、屋上へと向かおうとした俺は見事に八重樫さんに捕獲され、校庭で一緒に食べようと誘われた。いや、厳密には誘われたではないよアレ、世間一般では誘拐って言うんだよ？どうして俺の手を万力のごとく握り締めるんですかね？あれか？断つたら俺の手を握りつぶすつもりなの!?

そんなわけでほぼ引きづられるように連れて行かれる俺氏は八重樫さんにさあいざ

行こうという寸前で現れたのは天之河率いる八重樫さん除いた勇者一行。

「雫、俺達と昼食を摂らないか?」

ナイスだ! 天之河! お前はやつぱりこういう時に勇者だよな!

そんな彼に内心ガツポーズする俺、さあ行くがいい八重樫雫! お前を救ってくれる奴はハジメか天之河しかいない!

「せっかくだけど遠慮するわ。私は日色と食べるから」

なんでええええええええ!?! 行けよ! 天之河が俺を視界に入れると「雫にあまり迷惑をかけるなよ」と言っているんですけど!?! お前、それ剣道の時からずっと聞いている気がするんだが。

というか雫さん? あんた俺の意見ガン無視しているよな? 俺、一度もいいよとも Y E S と言っていないよ?

「い、いや。だが……」

「別にいいじゃない。第一、どうして光輝に決められなきゃいけないのよ」

あ、やばい。コレ、天之河が負ける気がする。が、さすがは勇者、未だに諦めず言い合い続けている。

これはチャンスだ、ちょうどよく八重樫も注意を天之河に向けているし。

俺はこっそりと気配を断ちながら、その場から逃走する。



「え、えっと、雫ちゃんと一緒にご飯食べようと思ったら日色君を見つけたから……」

「ポニ……八重樫なら天之河達と一緒に食堂で食べているはずだ、じゃあな……」

そう言つて俺はサツサと屋上へと足を踏み出そうとして――

「ま、待つて。どうして日色君は屋上に行つているの？」

再び手を掴まれて止められた、おのれ！どうやっても行かさない気か!?

「人が居ないからだ、静かな所が好きだからな」

「じゃ、じゃあ。い、一緒にご飯を食べていいかな？」

………は？待て待て待て、どうしてそうなった？会話が成立してないんですけど？

自分もおかしな事を言つていることに気づいたのか、白崎さんは顔を真っ赤にさせ、身体をモジモジとさせている。

さて、どうする？本なら断るんだが、これでもし先生にチクられたら――

白崎さんが先生にチクる

←

クラスメイト全員に知られる

←

クズやゴミなどと罵られ、仲間はずれにされる



異世界に飛ばされて奈落に落とされる

ガタガタガタガタ（恐怖）

やばい、この白崎さん、かなりの策士だ。ここで断れば俺を確実に殺す作戦を立ててやる。

な、なんて奴だ（愕然）

ハアとため息を吐く、なんというかこれぞ本当に一難去ってまた一難って奴ではないだろうか？

ああ、平穏な時間が「さよならー」と去っていくイメージが見える……

「ハア、わかった。いいぞ、一緒に食べても」

「ほ、本当!？」

さっきまでの赤顔を満面の笑みに変えて喜ぶ白崎さん、残念ながら俺からすれば死の恐怖しか感じない。

「ただし、この屋上の事は誰にも言うなよ。面倒くさくなる」

「う、うん!」

もう一度俺は溜息を吐きながら屋上へと足を踏み出す。

やっぱり世界は俺のことが大っ嫌いなんだろうなあ。



そう、思った俺は決して悪くないだろう。

ちなみに昼食は常に白崎さんに分解攻撃されないかヒヤヒヤでどんな味がしたのか  
わからなかった。

## 文字使い日記⑤

o (^▽^ ) o月m ( | | ) m日

ザ・ワールド！止まれい！時よ！したい日色だ。

日が経つほどに近づいてくる原作開始日に怯えるこの頃、図書室の本は大半を読み終えたが、異世界に飛ばされる前にやり残したものがなか搜索中である。

ほら、異世界転移って一種の処刑だし？遺言を残すのもアリかなって思うじゃん？異世界に飛ばされて「わーい、異世界だー(・▽・)」なんてことができるのは主人公だけだ。現実的に考えてみるよ、突然異世界に飛ばされて勇者として戦え？アホらしくね？無理だろ？命懸けで戦うなんて無理に決まってる。

やっぱり？どこにでもいる普通の一般人である俺は主人公のように誰かを無償で助けようとも思わないし、できれば戦いたくもない。

丘村日色の行動原理がよくわかるような気がするな。

と、というか異世界に飛ばされたらどうしようか？

うーん、ハジメが神様(笑)を倒すまでハイリヒ王国でイモリますかねえ？ほら、魔王ハジメはクラス全員地球に返してくれたし。

いや、ダメだ。王国には勇者（笑）にヤンデレ募らせた一途（重）な乙女『中村 恵里』がいる。流石にハジメを馬鹿にするモブ達の一人である『近藤 礼一』のように剣をぶつ刺されて、『YOU DIED』、「アイツはいい奴だったよ……」みたいなこと言われるのはまっぴらだ。

じゃあどうする？ 奈落に落ちるか？ もっと論外だな、命の危険が高すぎるし、第一、豹変したハジメに「よくも今まで馬鹿にしてくれたな」といった感じでドパンツ！されるのは嫌ですわ。

じゃあ、こつそり一人で王国から抜けるか？ これしかないような気がする、でもエヒト神（糞）に駒にされる可能性があるしなあ……。

あれ？ もしかして詰んでる？

（…∞…）月（\*）（\*）日

おかしい、最近、八重樫さんと白崎さんの睨めっこが多い気がする。というか何あれ？ 彼女達の目が笑ってないんですけど!? 背後にス○ンドラしきものが出ていますけど!! おかしいな、「オラオラオラ!!」と「無駄無駄無駄!!」という幻聴が聞こえてきている気がするんですけど!!?

ていうか、お前らとんだけ昼食を一緒に食べたがっているんだよ!! 毎日誘いすぎだつちゅうの!!

時々もう構ってられるか！と逃走をしているんだけど最近、彼女たちの敏捷性がありえないぐらい高くなっている。

気がついたら背後に回られるし、壁キックで追いかけてきたりする。おいパンツ見えてますよー（ニッコリ）

ちなみに最近の逃走経路は窓からの脱出だ、重力がかかる前にこつそり持ってきたフックで屋上の手すりにかけて逃げております。

え？何故逃げてるかって？彼女達に関わったら勇者チームにエンカウントするからだよクソツタレ!! 奴らに関わると奈落フラグが増築されていくんだよ!!

HELP！ヘルプミー!! 助ける、テンプレ勇者！またの名を対女神用人型使い捨て装甲板！君だけが俺の頼りだ!!

最近は一週間に二日のペースに校舎裏でハジメと食べるようになってる。え？屋上？白崎さんと八重樫さんにいることをバレてしまっているから最近はあまり使わないっすわ。

今日も作ってきた唐揚げを美味しそうに食べるハジメに癒されます。……しかしご飯を箸で直接ハジメの口にかけていくと顔を真っ赤にしているのはどうしてだろうか？高熱？熱中症？

そういえば最近別のクラスの檜山大介をリーダーとした小悪党組に目をつけられる

ようになった、いや、待てお前らはハジメに絡んできているんじゃないのか!?

特に檜山!なんでお前は俺を目の敵にしてんの!?白崎さんが恋してんのはハジメだろうが!!

(・・ω・・)月「(↑、o、)」日

最近、ハジメがクラスに敵愾心を持たれるようになった、原因はお察しの通り白崎香織だ。白崎さんは自分がハジメと話すたび、天之河やがハジメにグチグチと言っていた。

……無性に天之河をぶん殴りたくなってきたが、それはできない、ハジメに基本的学校では他人の振りをする約束をしまっているのだ。

ハジメは大丈夫だよ、気にしないでと言っていたが俺の気分は最悪である。ああ、なるほど何もできない無力さとはこういうことか。

あまりの苛立ちさに誰もいなくなった校舎裏で右腕を全力で壁にぶん殴り、壁に罅を入れた俺は悪くないと思う。

………あまりの痛さで泣きかけたのは秘密だ。

(・・ω・・)月(・▽・)日

今日は何故か天之河に絡まれた、あれだ「俺と久しぶりに剣道の試合しないか？」と決め顔で言われた。

あれかな？決闘状みたいな感じっすか？

ふ、もちろん断りましたよ、だって竹刀持ってなかったし!?もう剣道なんて辞めたからね!!

まあ、日色言語で言った場合――

「断る。俺にメリットがないだろう？第一俺はもう竹刀を持っていないしな」

バカアアアアアアアアアアア!!喧嘩売ってどうするつもりなんだよ俺は!!

クッ!と悔しそうにする天之河さん、そのまま帰れと思ったが、トントンと肩を押され、振り向くとなんとそこには竹刀を持ったニコニコ笑顔の八重樫さん。

「私が竹刀を貸すわ。それなら文句無いでしょ?」

……………あんた俺を殺す気か?

天之河光輝だぞ?あの天之河光輝だぞ!?あの大量の《暗き者》の軍団相手に一度も引かず守り続けた男だぞ!?(分からない人はなろう版の光輝アフター編を見てね♪)

骨も残らず殺されるに決まっているだろう!?(偏見)

「…………いや、だが俺にメリットが「もし勝ったら私が飲み物を奢ってあげるわ」…………チッ」

有無を言わさない彼女の表情に理解する。あ、これ無理なやつだ、と。はい、死亡確定です。

その言葉と同時に何故かクラスのみんなが騒ぎ出す。

——おい！あの神代と天之河が剣道の試合するってよ！

——きやあ！夢の対決だわ！

——クールな神代君対熱血な天之河君の女を巡っての対決よ！見逃せないわ！

きやあきやあ、わあわあと騒ぎ立てるクラスメイト達、あのね、君たち？凡人な俺がああ、あんなに勝てると思ってるの？馬鹿なの？死ぬの？俺が死ぬわクソツタレ！！

天之河キサマア！絶対あれだろ！！そんなに八重樫さんと白崎さんに振り向いてもらいたいのか!?今なら三十分以内にお電話頂いたお客様には送料無料で送ってやるよッ！！

◆ そんな悲鳴は誰にも伝わる事はなく、先生に許可をもらい体育館で試合することが決定したのだった。

◆ 剣道の試合が終わって私、日色は現在自宅で引きこもっております。

戦闘描写？日記に書きはしない。

まあ結果を報告すれば負けました。

いや、頑張ったよ？最初の二本はかなり粘って負けたけどさ、最後は一本取ったし。我ながらよく頑張ったと思う、しばらく剣道をしてなくてこの成績ならかなり優秀だと言えるよね。

これで白崎さんも八重樫さんも俺に冷め、天之河又はハジメに行くはずだ。いやまあ、白崎はもともとハジメ一筋だったけど。

いやはや、ホント今回は俺は頑張ったと思う。しかし、どうして最後は勝てたんかねえ？気がついたら終わってたからあんまり覚えていないんだよな。確か二本目を取られた時に誰かを見た気が……いや、止めよう。誰かを見たから力が発揮したとかどこの少年漫画だよ。俺はそんな妄想野郎でも主人公ではないんだから。ないんだからね!!（念押し）

まあ、十中八九キレたのだろう、記憶が曖昧になるのはキレた時だけだし。

試合が終わったあと、胴衣を脱ごうと更衣室に戻ろうとしたとき何故か観客の中にハジメがいたんですよ。

見ないで！こんな俺を見ないでツ!!（懇願）

なんて叫びたくなかったが、言語さんはそれを許してくれず、無言を貫くだけだ。

しかし優しいことにハジメは俺が気持ち悪い視線を向けていることに気がついたの



かハッ！と眼を見開いて、その後ニコツと微笑んでくれた。

ああ、癒されるわー（ほっこり）

……最近、自分は変態なんじゃないかと思うこの頃である。

## 白崎香織は恋敵を知る

私は中学を卒業した時、ひとつの高校に入学することができた。別にその高校に特別な思い入れがないというわけではないけど、そこには私の好きな人が通っているのだ。

その好きな人の名前は『神代日色』

これを機会に私はもつと彼のことを知って、いつか彼を振り向かせたいなと思いいこの高校に入ったのだ。……と、いうか絶対に振り向かせてみせる。

だから幼馴染な雫ちゃんも一緒にその高校に入学するなんて思いもしなかった。まあ、光輝君もわざわざこの高校に入学してきたのはどうしてかわからなかったけど。

クラス発表がされた時、私は真つ先に自分のクラスに日色君が居ないか探してみたけど残念ながら書かれておらず代わりに雫ちゃんのクラスに書かれていた。雫ちゃん、今すぐそこを変わってくれないかな？なんて言いたいけどもそんなことを言っても変わるわけがない。しかも同じクラスには光輝君がいて頻繁に私に話しかけてくる。

うん、そうだね。と返しながら周りを見てみるといつも見ていたポニーテールが目映った。

あ、雫ちゃんだ！と思いい、声をかけようとして雫ちゃんが笑顔を向けている者へと目

を向けて——思考が停止した。

艶のある黒髪に刃のような鋭い目つき、黒い眼鏡をかけ大変顔つきが整っている少年、私が好きな日色君だったからだ。

雫ちゃんの表情はいつものような苦労しているような表情などではなくまるで恋する乙女のようにどこにでもいるような普通の女の子の表情で微笑んでいた。

どうして？ だって雫ちゃんは好きな人が——

——好きな人？

再び高速で回転する思考を頼りに今までの思い出を思い出していく。

・雫ちゃんは小学生の頃、好きな人が出来ていた。

・その人は親の事情で引越して雫ちゃんとはしばらく会えなくなってしまうていた。

・雫ちゃんはそれを気に女の子らしくなりたいと私に相談してきた。

・その人は剣道で全国に行くほど上手だった。

どうして女の子らしくなりたいと思ったの？——もしかしたらその人が鈍い人だっ

たからではないか？

どうしてあんなに恋する乙女のように微笑んでいるの？——もしかしたらその好きな人が雫ちゃんのことをちゃんと分かってくれたからじゃないか？

思考が回って回って、ある記憶を思い出す。

かつて小学生の時、お父さんの真似をして新聞を読んだときに書かれていた剣道の記事のこと。

その題名は『神代日色、三度目の全国大会優勝』

繋がった、繋がってしまった。

彼女が好きだった人は、彼女が愛した人は——『神代日色』だったのだ。

——だけど、

私の胸に熱い『何か』が生まれる。

——だけど！

そう、だけど。例え親友の思いビトだとしても、私は、私は——

——日色君は渡さない!!!

彼のことを好きなのだから。

◆ 私が決意を固めてから、三日後、本屋で本を探していました。えっと日色君はよくラノベというジャンルの本を読んでいると言っていたからなあ、これを機に何かの本を買おうかなと思っっているんだけど……

「……うーん」

——どうしよう、どれを買ったらいいか全くわからない。

そう、大量の本棚の中でどれを読んだら日色君に近づけるのかわからないのだ。

ムーと、しばらく考えていると隣で私と同じ制服を着た少女が本棚にホイッと手を伸ばし、幾つかの本を取っていく。

ここで私にピコンツ！と名案が思い浮かんだ、そうだ、この人に聞いてみればいいじゃないかと。

それはどつかの馬鹿も同じ考えで行動したということ香織は知らない。

「あ、あの、すみません」

「ひゃ!?は、はい!な、なんですか?」

試しに私は少女に声をかけると少女はビクンツと驚き、此方を向く。

どこにでもいるようなありふれた顔つきの少女は私を見ると共にとても狼狽した。

「え!?白崎さん!?どうしてここに?」

「え？私のこと知ってるの？」

「知ってるも何も同じクラスメイトですよ！」

え？こんな子なんていたっけ？……あ、そういえばこの子の名前は確か――

「えっと、南雲ハジメ・ちゃん……だっけ？」

「は、はい。そうです、南雲です」

ペコッと頭を下げる南雲ちゃん、その表情は白崎さんのような女神に知ってもらって嬉しいですとでもいうような微笑みなのだが――

(……………っ、気のせい……………かな?)

どうしてか、私には一瞬彼女の瞳が昏く濁っている様に見えた。

慌てて私は目を擦り、改めて彼女を見つめるとその瞳の濁りは消えており、不思議そうな顔をした彼女だけだった。

「あの……………どうしました？」

「え？う、ううん、なんでもないよ。えっと、お願いがあるんだけどラノベ小説のオススメってないかな？」

私はさっきの違和感を気のせいだと思い、記憶の片隅に放り込み私は彼女へと声を掛けると南雲ちゃんは「え!?!白崎さんもラノベ小説読むの!!?」と驚いていたんだけどどうしたのだろうか？

「は、はあ。白崎さんがラノベをですか……」

「え、えっと、迷惑……だったかな……?」

「だ、大丈夫です!ちよつと、意外だっただけで……」

「やっぱり迷惑だったかな?」と思っただけで南雲ちゃんはハハハ、と曖昧に笑って大丈夫ですと言ってくれた。

南雲ちゃんはうーんと少し悩んだ後、そうだと手の平をポンツと叩いて、「着いて来てください」と本屋を案内し始めた。私は慌てて「う、うん、ありがとう」と言葉を呟き彼女の後ろを追いかける。

◆  
これが私と南雲ちゃんの初めての出会いだった。

◆  
それ以来、私は南雲ちゃんと交流を持つようになった。

基本的には同じクラスなのでアニメや小説の話をしているのだけど、最近では光輝君が入ってきて南雲ちゃんに何故か説教をしてくるから楽しく会話することができないの。

◆  
本当に光輝君はどうして関わってくるんだろう?そのせいで最近では憂鬱な時が多いなあ。

◆  
あ、でもいいこともあったんだよ?ある日、雫ちゃんが日色君を連れて(引きずって?)行くときに光輝君達と一緒に食事を誘っていたの。やっぱり雫ちゃん日色君のこと

が……つて絶望したんだけど、雫ちゃんと光輝君が話している間にこっさりその場から離れている日色君がいました。慌てて追いかけてみると鍵を掛けられている筈の屋上に入ろうとしている日色君の姿だった。

「え、えつと日色君？な、何しているの？」

慌てて声をかけてみると日色君はまるで見られたくない奴に見られたとでも言うようにこちらを振り向くと顔を歪めた。

「……何の用だ、白崎」

「え、えつと、雫ちゃんと一緒にご飯食べようと思ったたら日色君を見つけたから……」

冷たい彼の声色に慌てて言い返すと彼は面倒くさいとでも言うようにハアと溜息を吐き、私を微かに見て――

「ポニ……八重樫なら天之河達と一緒に食堂で食べているはずだ、じゃあな……」

——というと共に再び屋上へと再び足を踏み出そうとする日色君。というか雫ちゃんをポニー呼び!？」

「ま、待つて。どうして日色君は屋上に行っているの？」

その場の勢いでつい彼の手を掴んでしまったけどなんとか彼を止めることには成功



した。

が、香織は慌てて自分が彼の手を掴んでしまったことを認識してしまい、次の瞬間、香織の顔は恥ずかしきで真っ赤に染め上がった。

(あ、あわわわわわわわわっ! つ、つい勢いで掴んじやったよう……ッ!)

そんな香織の思考がオーバーヒートしている時、日色君は踏み出そうとした足を止め、静かに呟く。

「人が居ないからだ、静かな所が好きだからな」

私はその言葉を訊いたけど、彼の手を掴んでいることに頭がいっぱいでまともに理解することができなくて、つい口を開いたとき射出された言葉は全くの場違いで可笑しい言葉だった。

「じゃ、じゃあ。い、一緒にご飯を食べていいかな?」

私のバカア! どうしてこんな時にそんな言葉が出るの!? こんな時にそんな言葉が出てくる自分に私はバカバカと罵る。

ううう日色君に嫌われちゃったかなあ。

暫く何も言わない彼に嫌われてしまったのではないかと考えたけど次の瞬間、数瞬の静寂をハアという溜息が破った。

「ハア、わかった。いいぞ、一緒に食べても」

「ほ、本当!」

あまりの嬉しさに自然と頬が緩み、喜んでしまう。

「ただし、この屋上の事は誰にも言うなよ。面倒くさくなる」

「う、うん!」

ハアと溜息を吐きながら屋上へと足を踏み出す日色君のあとを追うように私は片手に持っているお弁当を落とさないように追いかける。

その後の彼と食べた昼食はあまりの恥ずかしさと緊張で味がわからなかった。



そんな出来事を思い出すだけで自分の顔がにやけてしまうのを感じた。

えへへへ、また一緒に昼食を食べたいなあ。

週に三回程、日色君とは昼食を食べているんだけど決して二人つきりというわけではなく雫ちゃんを含めた三人で食べているからなあ、たまには二人だけで食べたいよう。

日色君は時々、昼食を誘おうとする前に姿を消したり逃走したりするけど一体どこに行っているんだろう?

そんなことを考えていると昼食の終わり程クラスメイトからこんな声が聞こえてき

た。

「ねえ、ねえ知ってる？今日の放課後神代君と天之河君が剣道の試合するんだって

——うん、知ってるよ。クールな神代君と正義感の天之河君による夢の対決よね。

——どっちもカッコイイなあ！

「ねえ、ちよつと詳しく教えてくれないかな？」

私はつい話している少女たちに詳しく聞いてみるとわかったのは——

曰く、光輝君が日色君に剣道の試合を誘った。

曰く、避けられない男の戦いである。

曰く、一人の女の子を巡る戦いである。

うん、最後の一つを詳しく聞かせてくれないかな？（ニツコリ）

そう思ったけど、少女たちにはこれぐらいしか知らなかったらしく確かめるには放課後体育館に行くしかなかった。

うん、決めた。今日の放課後剣道の試合を見に行こう。……………決してその女の子が

気になるわけじゃないよ？ホントだよ？

◆

場所は一転して体育館。

どうやら日色君と光輝君の試合の話はかなり広まっているらしく、体育館に着くとそ

ここにはかなりの人数が集まっていた。私は必死に人混みをかき分けて進んでいくと、観戦場所でもいう場所の最前線に視界に見知った親友がいた。

「あれ？ 雫ちゃん？」

「え？ 香織？ どうしてここにいるのよ」

引き締まった身体にリンツと思わせる雰囲気を持ち、長い髪をポニーテールにした私の親友、八重樫雫ちゃんが此方を首を少し傾け、疑問を浮かべていた。

「えっと、日色君と光輝君がここで剣道の試合をすると聞いて……」

私は曖昧な目的を伝えて、本命の目的を伏せて話した。すると雫ちゃんはああ、なるほどとでもいう風に頷いて――

「ああ、彼らが一人の女の子を巡って試合をしようとしているなんて聞いたから確かめに来たのね？」

「ソ、ソソソソソ、ソソソコトナイヨ？」

「ア、シズクチャンハイツタイナニライツテイルンダロウ？ ワタシニハワカラナイナア？」

いとも簡単に暴かれた私の本命の目的に動揺してしまう。雫ちゃん、恐ろしい子……「凶星ってことね。香織、アンタの嘘はわかりやすいのよ」

「はい、その通りです……」

やれやれと頭を振りながら額に手を当てた雫ちゃんに（・ω・）シヨボーンと落ち込む私。

「安心しなさい、あんなのただのデマよ」

「ほ、本当!？」

私は雫ちゃんの言葉に咄嗟に彼女の肩を掴み、ガクンガクンと揺さぶってしまふ。

よかった! 日色君は決して恋人なんていなかったんだ!

「ちよ! 香織、少し落ち着きなさい!」

「あ、っ、っめん」

未だに揺さぶり続ける私を目を回しながら必死になだめる雫ちゃんによりなんとか感動の衝動を抑え、スーハーと一度深呼吸を行う。

うん、落ち着いた。

「じゃあどうして日色君達は剣道の試合を?」

「あー、それは——」

えっと、簡潔に話すと光輝君が日色君に剣道を誘い、日色君が剣道道具を持っていないというわけでそれを拒否——しようとしたけど雫ちゃんが竹刀を貸したことで試合することになったという。

「……えっと、それって雫ちゃんが原因ってこと?」

「……………否定できないわね（きつ）」

ジー、と雫ちゃんを見つめると彼女はシラーと目を逸らす。つまりこの出来事の元凶は雫ちゃんらしい。

「仕方ないじゃない、久しぶりに見たかったのよ日色の剣道を」

「そういえば、雫ちゃんって日色君が剣道をやってた事知ってたんだね」

「あれ、知らなかったの？彼はうちの道場に通ってたのよ？」

「え!? そうなの!？」

「ええ、だから私は日色の幼馴染というわけよ」

ふふーん、と鼻を鳴らしながら胸を張る雫ちゃん、というか胸を地味に強調しないで！私の方が……おつきいんだもん!!

「ふんっ！日色君に昼食を誘えなかった雫ちゃんとは違って、私は二人つきりで昼食を食べているんだからいいもん!!」

「な、なんですつて!!」

ぐぬぬぬぬ、と私と雫ちゃんは睨み合いながら、しばらくお互いに威嚇していると何やら馬鹿らしくなりお互いにハアと溜息を吐いた。

「止めましょうか、なんだか虚しくなってきた」

「うん、そうだね。それで、日色君と光輝君は？」

「ええ、それはあそこで——もう、始まっているわね」

そうやって雫ちゃんが指を刺した方向を見ると、そこには二人の剣道着を身に纏った者が竹刀を振るっていた。

雫ちゃんが「右が光輝で左が日色よ」という説明をしてくれたけど私にはその言葉があまり耳に入ってこなかった。

竹刀が振るわれ空気が薙ぎ払われる。打ち合うたびにパンツ、パンツ、と音が鳴るのだがその度に空間が震えるように感じ、その衝撃が伝わってくるような錯覚をしてしまう。

光輝が胴を狙い横薙ぎで振るうと日色は半歩下がることで竹刀との距離を数センチ残して避けるが、光輝は止まらず更に竹刀を振るう。

唐竹の一撃は片足を半歩下げることで避けられる、続けて放たれた胴は日色が竹刀を振り上げ、左斜め下から右斜め上へと逸らされ、反撃とばかりに胴の横風を日色が繰り出すがりぎり光輝は竹刀を戻すことで受け止める。

光輝は再び、突きを繰り出すが竹刀の柄頭で叩き落とされ、それでは止まらぬと胴を繰り出せばまたもや半歩下がることで避けられる。

「すい〜……」

目の前で繰り広げられる攻防に私は感嘆の息を零してしまう。

光輝君は剣道が上手いということは知っていたけどまさか日色君もこれほど上手いなんて……

だから——

「おかしいわね……」

——まるで、どうしてそうなっているかわからないとでも言うように顎に手を置き首をひねっている雫ちゃんのこと疑問を浮かべてしまう。

「ど、どうしたの？」

「……日色、全然昔のキレがないわ」

「そ、そうなの……?」

「ええ、動きのキレも悪くて、身体のしなりを生かした移動方法も使っていない……」

雫ちゃんの解説に私は何を言っているか分からず目を白黒させるけど、どうやら日色君は昔より動きにキレがなく、まるで疲労し、スタボロになった身体を動かしているような動きらしい。

『胴、一本!!』

つい、日色君達の方を見てしまうと、一際大きいパンツ!!という叩く音と共に審判の人が光輝君を示す白い旗を上げる。次の瞬間、体育館に大きい歓声が響き渡り、更に声援がヒートアップする。



私はそんな歓声を聞きながら、必死に日色君を応援する。必死に応援していると不意に耳にこんな会話が聞こえてきた。

——きやあ！天之河君が神代君に一本取ったわよ！

——神代君、大丈夫かな？数分前に先生がサッカーゴールの撤去を神代君に殆ど手伝ってもらったって言ってたんだけど……

——ええ？嘘!?!じゃあ神代君は休み無しで天之河君と戦っているの!?!

「……………えっ？」

思考が止まった。

え？日色君が先生の手伝い？撤去で体力を使った？

じゃあ、日色君は今、疲労しているということ？

「雫ちゃん、どうしよう！さつき同級生の人が日色君が光輝君との試合前にサッカーゴールの撤去で疲労してるって！」

「なっ！嘘でしょ!?!」

私の言葉を聞いた途端、雫ちゃんも瞠目し、バツ！と日色君達の方を見る。前方では光輝君が繰り出した突きをなんとか竹刀を振るって左に受け流し、距離を離す日色君の姿があった。

それをすぐに光輝が距離を詰め、上段による唐竹の一撃が日色へと襲い掛かり——  
 パァンツ!!

『面有り、一本!!』

日色はその攻撃を避けることができず、上段の唐竹の一撃は見事に日色を捉えた。



光輝は憤っていた。

今日の剣道の試合を求めた光輝だが、こんな戦いは望んでいなかった。

それは目の前にいる日色の動きが、拙く、鈍く、もはや息絶えだえとでもいうような動きである。

その動きは体感では光輝が日色と今まで戦った中で最も彼の動きは遅く、鈍い。

これは光輝が強くなったからか?——否だ。

さすがの光輝も理解している。

日色<sup>が</sup>手<sup>が</sup>加<sup>減</sup>して<sup>い</sup>る<sup>の</sup>だ、わ<sup>ざ</sup>わ<sup>ざ</sup>勝<sup>ち</sup>を<sup>光</sup>輝<sup>に</sup>譲<sup>る</sup>た<sup>め</sup>に。

(……ッ、ふざけるな!)

光輝は内心そう思いながら更に竹刀を振るうがそれをなんとか躲し日色は距離を離す。

面の胴具を被っているために完璧には見えないが汗をかきながら日色は変わらず表

情を感じさせない瞳で光輝を見つめている。

普通、剣道を行っている場合、表情や瞳は変化するものだ。緊張や興奮、恐怖などのように。

だが、日色の瞳や表情は何一つ変わっていない、無機質な無表情のままである。

まるで、お前など眼中にないと言っても言うように。その気になればいつでも倒せるとでも言うように。

——だから喜べ、わざわざ手を抜いてやろうとでも言うように。

(クソッ！)

自分は鍛錬を人一倍努力を取り組んでいたはずだ、途中でやめた日色とは違い、自分の方が努力していると実感している。だが、日色の三冠記録を塗り替えるどころか一度も全国大会で優勝することすらあと一歩で逃してしまった。

何が違う！どうして届かないッ！あんな人を見下す目の前のコイツにどうして俺は届かないんだ!!

距離を離れた日色の距離をすり足で一気に距離を詰め、怒りに任せて上段による唐竹の一撃を繰り出す。

しかし、目測を誤ったか微かに距離が足りない、このままでは竹刀は日色の前方を通り過ぎ決定的な隙を作り出してしまう。

そして、光輝を見た。

振り下ろした竹刀へと一步踏み出すことでわざわざ当たりに行った日色を。

「なッ!?!」

パァンツ!!という音が響き渡り審判を担当している先生が『面有り、一本!!』と白色の旗を挙げ、二本取ったことで光輝の勝利となった。

次の瞬間、体育館に歓客の生徒たちから歓声上がるが光輝はそのことすら意識が向いていなかった。

なんだこれは？

八百長のような戦いで、必ず勝てるように手を抜かれ、ましてやわざわざ当たらない攻撃をわざわざ当たりに来る。

達成感などないこんな試合に何の意味があるだろう？

フウ、終わった終わったとも言おうようにその場から離れようとしていた日色を光輝は声をかける。

「待て、神代!」

「……なんだ、テンプレ勇者？敗者に慰めの言葉でもかけるのか？」

光輝の言葉に日色は立ち止まるが振り向かず、淡々とした言葉が返ってくる。光輝はその言葉に顔をしかめるがそれがどうしたとも言おうように言葉を投げかける。

「もう一度、俺と勝負しろ……」

「はあ？何言ってるんだお前、試合はお前が勝っただろう？」

「ふざけるな！あんなのが試合な訳がないだろう！」

しらばっくれる日色に光輝は苛立ちと怒りの声色を無意識のうちに出してしまう。

その言葉に日色はハアとため息をつき、関わってられるかとも言うように「断る」と呟いて、その場から離れようとして――

「お前も――」

次に光輝が零した言葉に日色はつい立ち止まってしまった。

「お前も――南雲と一緒にだな……いつまで香織達に迷惑をかけさすんだッ……！」

「……………は？」

日色の言葉が小さく体育館に響き渡った。そう、光輝の言葉が日色の琴線に触れたのだ。

彼の足が止まり、日色は身体を光輝の方へと向き直し、氷のように鋭い瞳が光輝を映しだす――が、その瞳は普段よりも昏く瞳に光が映っていなかった。

「いいだろう、あと一本だけ勝負してやる」

そう言つて日色は再び竹刀を構え、光輝へと剣先を向ける。

光輝は突然やる気になった日色のことを不思議に思つていたがまあ、いいかと思ひ竹刀を構えながらチラリと審判である先生を見る。

審判である先生は少し躊躇してしたがすぐにコクリと頷いた、光輝の無言のお願いに特別に試合をもう一本行うことを許可してくれたらしい。

「行くぞー!」

「……すぐに終わらしてやるから早く来い」

そして、次の瞬間――

――二人は同時に踏み出した。



光輝は集中により時間の流れが緩くなるのを感じた。

自分と同時に踏み出した日色の動きを一片の油断もなく観察し、自分ができる最大の技を放つ。

八重樫流刀術――断零たちしずく

体の捻りを生かした体重移動により生まれた余分なエネルギーを全て右上から左下へと振り下ろす高速の斬撃。

日色との距離を完璧に見極め放たれた高速の斬撃は確実に日色の面を叩くだろう。  
日色はまだ動いていない。

勝った——と光輝は確信する。日色はまだ反応できていない、このままでは防御も間に合わず確実に叩きつけることができるだろう。

た・だ・し・

それは日色が並の剣士であればの話だが。

引き伸ばされる時間の中、少し遅れて日色が動く、竹刀を左腰へと動かし、左手で支え鞘と成し、右手の力を少し抜く。

それだけの行動が高速で行い光輝が振るった竹刀が五センチ動く間に行われ、抜刀の体勢が完了する。

そして——

——閃光が奔る。

左足を踏み出し、抜き放つは神速の抜刀。

右手の振りや腰の捻りの勢いを一切殺さないように抜刀し、踏み込みによつて起こる

加速と加重すら抜刀に乗せる超高速の斬撃。

日色が某人斬り抜○齋を目指して暇つぶしに行い、今では彼の、彼だけが使える、彼だけの抜刀術。

目指したのは『天翔龍閃』あまかけりゆうのひらめき、しかし彼は己の居合はそこには到れず偽物と思いその名を使うことを侮辱と断じた。

ならばその技の名はなんという？

そして彼は考えた。

『天翔龍閃と名乗るにはあまりに拙いから略せばいいんじゃないかね？』と

故にその名、その技名。

我流刀術——天閃てんせん

かつて全国大会の決勝の相手すら二撃目を防ぐことができなかつた神速の抜刀が光輝の振るう竹刀よりも何倍も早く胴へと襲い掛かる。

光輝にはその斬撃が閃光に見えた。

パアアンツ!!!

もはや常人には視認不可能な竹刀が弧を描きながら光輝の胴を的確に叩き、微かに遅れて音が体育館に響き渡る。



数瞬の静寂。

『え……あ……ど、胴有り一本!』

そして何が起こったかわからないと困惑している審判の声と共に爆発的な歓声が体育館に響き渡った。



「……凄い、ほんとに光輝君に勝っちゃった」

「全く、できるんだったら最初っからしなさいよ………心配したじゃない」

湧き上がる歓声の中、私は意図せず小さく呟いていた。最初はあんなに苦戦していたのに最後の光輝君との戦いでは竹刀が霞む程の速度で光輝君の胴を叩いたのだ。

隣で雫ちゃんが何か呟いていたけど日色君の剣道に夢中になっていた私は彼女の声が小さくてよく聞こえなかった。

日色君と光輝君の試合が終わると共に観客が一齐に拍手を送り、私もそれにつられて二人に拍手を送る。

ふと耳を傾けると観客達の歓声に混じって日色君達を称える声援が聞こえてくる。

—— やつぱり天之河君と神代君はかつこいいなあ！

—— 最初天之河君が推していたけどそこで返した神代君も凄いいよね！！

—— ええー、やつぱり凄いいのは天之河君だよ！

—— いやいや、神代君でしょ！

どうやら日色君派と光輝君派に明確に分かれており声援に混じって言い合いが発生しているらしい。え？私？もちろん日色君推しだけど？

試合が終わり、暑苦しいとでも言うように面を脱ぎ、更衣室へと退場する日色君に私はこちらに向いてもらおうと

精一杯手を振って——

—— 日色君がある方向へと微笑んでいることに気づいた。

—— え？

思考が、停止した。

日色君は朴念仁で無愛想だ。基本的、表情があまり変化することはないけれど誰かを思いやる優しさは持っている。前に一度、私は顔を真っ赤にしながらお弁当のおかずを箸で直接彼の口に持っていくと「ん、いいのか？」と言って顔色一つ変えずに食べたこともあるほどだ。

そんな日色君がまるでありふれた少年のように微笑んでいた。まるで——大切な人を安心させるかのような笑みを浮かべていたのだ。

つまり、つまりつまりつまり!!

——私や雫ちゃんとは別に彼にそんな表情をさせる人がいる？

慌てて日色君が向いていた方向を向いて、日色君が微笑んでくれた人を探すけど一向にそんな人は見当たらない。

再び日色君を見てみても日色君は元の無表情に戻っておりさつさと帰ろうとでも言うように早足で更衣室へと向かって行っている。

——気のせいかな？

私が見た彼の微笑みは気のせいだったのだろうか？いや、そうに決まっている。体育館の熱で自分が疲れてしまったのだろうか？と考える。

そうだよ、何を怯えているのだろうか？そんな新たなライバルなんていないはずだよ。ね。

ソウダヨネ、ヒイロクン♪

「ヘックション!!クソツ、最近風邪気味だ……」

(死期が近くなつてくると背中に寒気を感じるようになる)と聞いた事がある気がするけ

ど……大丈夫だよな？死なないよな？今すぐ十二<sup>ゴ</sup>の試練<sup>ド</sup>みたいな蘇生系の転生特典が欲しいんですけどおお!!うおおおお!!探せ!!ドラゴンボールを探すんだああああ!!!)

そして何も知らないお馬鹿が一人。

## 原作開始くフラグだらけの異世界巡り

## 文字使い日記⑥

(\*) ω、\* ) 月、( ; ∇ ; ) ノ日

やあやあ皆の衆、最近睡眠中によく目覚めることが多い日色だ。

いや、まあ原因は分かっている。原作が刻一刻と近づいて来ていることによる恐怖心だろう、起きたらいつも寝汗びっしより。おそらく第三者が見たらナニしたんだお前と誤解されそうである。

もう季節は冬が終わり、春が近づいてきているほどだ、最近では白崎さん（女神系死亡フラグ）や八重樫さん（斬殺系死亡フラグ）、あとはまあハジメとの駄弁りに疑問を持たなくなり、彼女たちが着いてくるのは仕方がないもんだと思うことにした。……うん、末期だねこれ。

まあ、だからといって彼女達から逃げるのを諦めるわけではなくさりげなく彼女たちを天之河や最近現れた檜山大介に擦り付けている。

そんな日常ももうすぐで崩壊すると思うと涙が出そうになる。

( ; ∇ ; ) 月 (\*、) (\*、) 日

高校二年生にレベルアップした。テツテレー!!  
生存難易度もアップした(絶望) テツテレー!!

学年が一つ上がったことでクラスルームも変わるので今までのクラスメイトとは別れることとなる。

じゃあ別のクラスへ行けたら召喚に巻き込まれない可能性がある!!という淡い希望を抱いたが見事にクラス発表を見ると自分の名前の欄にはハジメ達の文字がバツチリ書かれていますとさ。

ハイ、オワタ＼(´ω´) / 原作介入決定つと♪

自分に同じクラスに慣れてよかったね♪などと言ってくる白崎さんや何故か拗ねている八重樫さんに、俺の隣の席となったほぼ常に曖昧に笑っているハジメたち相手にあくはいいいとほぼ作業のように返すこの頃である。

まあもちろんの事、ハツピーセットで天之河や坂上龍太郎が現れ、俺やハジメにグチグチと言ってくるのをハジメは曖昧な笑いで俺は最近基本的無視している。いや、アレなんだよ、自分が口を開くと日色言語が射出されてくるからさ、じゃあ口開かなければいいんじゃない? などと思つた結果こうなつた。

毎度毎度白崎さんや天之河達のコントを死んだ目で見ながらラノベの世界へと現実逃避をする毎日である。

というか天之河、お前は中村さんの所へ行つてやれよ、彼女さ、偶に眼のハイライトが無くなったのを見たことあるんだよ？俺、嫌だよ？本性現してヤンデレ化した中村さんに殺されるのは……（恐怖）

……う、今夜の夢に出てきそうさ。

ちなみに偶に先生から手紙やプリントを集配するのを手伝う時があるが天之河にプリントなどを渡す時は基本的、中村恵里に渡している。天之河にあまり関わりたくないという口実を使つてな!!中村さんの恋には興味はないができるだけ火の粉は被りたくないのだ。

少し前に白崎さんにとつてもイイ笑顔でハジメとどういふ関係なのかと言われたので本でお互いに話し合う仲だと言つたら少し怪しまれたがハジメのフォローによつてなんとか助かった。……女子の笑顔つて怖いよね、稀に殺気を感じる時があるんだよ？ほら白崎さんとか八重樫さんとか。

ほんと、誰か助けてください……（涙目&懇願）

（.;▽.;）月（.▽.）日

異世界召喚に備えて、毎日日記を持っていく日色だ。

今日の朝、図書室で借りてきた小説を見ていると遅刻ギリギリでふらふらと教室の扉を開けてハジメが登校してきた。するとハジメが入つてくると共に大半の生徒から嫉

妬と侮蔑の混じった敵愾心を向けられ舌打ちやら睨みやらがハジメへと飛んでいる。しかもそれに追撃するように檜山グループが現れ、やれ変態オタクだの、キモオタ等と馬鹿にしてくる。その居心地の悪さにハジメが肩身を狭くしながら俺の隣の席へと向かってきた。

しかし向かう途中で白崎さんによりニコニコ笑顔で捕獲され挨拶（強制）を食らっていた。それに釣られてクラスメイトから「どうしてあんな奴が……」などと聞こえてくるけど俺はあまり聞かないようにしながらラノベで現実逃避を続ける。

いや、だってアレだよ？ハジメには顔見知り以上親友未満程の付き合いをしてくれと言われているから介入なんてしたらハジメの迷惑だし、第一、日色言語でそんなこと言ったら喧嘩になること待った無しだ。

今日だって自分が登校してきた時に檜山グループからなぜか俺にハジメと同じようなことを言われ、どうしてそういうことになったのかため息をつこうとしたら出てきた言葉はとて重く冷たい声で「——あ？」である。

なんでこの言語はこんな時に喧嘩を売ろうとするんですかねええええ!!?（涙目）

その言葉と共に檜山グループが何故か急に静かになり、席に着くことができたけど更にクラスから孤立したような気がするわ……

とまあ、そんなわけでなんとか自分の席につけたハジメと挨拶をすると再び白崎さん



が会話に入ってきて、続いてハッピーセットのように勇者パーティが現れた。

おい、わかってる？ 君たちの会話してる場所の中心は俺の席なんだよ？ なんなのお前ら？ どうして俺に本を読ませてくれないの？ アレなの？ いじめなの？ ついにハジメも混ぜた集団リンチ？

……ちよつと泣きたくなった。



そんなわけで時間は過ぎて昼食。

休み時間を使って日記を書いている——つて、おいハジメ！ コラ見ようとするな！ この日記は見せるわけにはいけないんだようおおおお!!!

そんな見ようとしてくるハジメを叱りつけると彼女はしゅん、と落ち込んだ為、仕方あるまいと慰めるついでに唐揚げをあげようとして——

——パクつと白崎さんが横から一口で食べられた。

微かに顔を真っ赤にさせながらもぎゅもぎゅと美味しそうに頬張る白崎さんに対し対照的にハジメはずーん、と落ち込んでいた。小さく「……唐揚げ……美味しい唐揚げが……」と呟いている。

そんなハジメを不憫そうな目で見ていると白崎さんが満面の笑顔でお弁当を持ちながら——

「日色君、南雲ちゃん、一緒にご飯食べようよ!」  
嫌です。

なんて特大死亡フラグには言えず彼女の顔は笑顔だが俺には『逆らったら殺す』とも言うような微笑みにしか見えなかった。ハジメももうご飯を食べ終わっているや天之河君達と食べたかどうかなどと言っているが一向に効果がないようである。ついでに言えば周りの圧力も倍増していた。

フフフツツ!!だが甘いなジョヨヨ!!俺がそんなのに屈するわけがないだろう!!こんな時に役に立つ優れた仲間がいることを忘れたようだなツツ!!

いでよツツ!!我がしもべ——

「香織。こつちで一緒に食べよう。日色や南雲はまだ寝足りないみたいだしさ。せつかくの香織の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ?」

——対女神用人型兵器天之河光輝!!!

爽やかに笑いながら登場したテンプレ勇者の気障なセリフに白崎さんはキョトンとする。別に俺は決して気持ち悪いなんか思っていないよ?うっかり「……一々言うことがクセえよ、テンプレ勇者」なんて言っていないからね!!

まあいい、行け!勇者!お前の力を見せてやれツツ!!

そんなクサイセリフが白崎さんへと襲い掛かり——

「え？ 何で、光輝くんの許しがいるの？」

華麗に弾き飛ばされましたとき、近くで「ブフツ」と吹き出す八重樫さんがすごく気になったがあまり気にしないほうがいいのだろう。天之河はそのことに困惑しながらあれこれ話しているがあまり効果がないようだ。

そんな光景にハジメは苦笑いして俺はため息を吐き――

……………っ？、おかしい、既視感を感じる。

そうまるでこんな会話を一度原作で読んだことがあるよう――（ここで日記は途切れている）



異世界「トータス」に飛ばされた。

決して逃れようのないことだと思っていたけどまさかこんなにも早く起こるなんて

……

泣きたい、心底泣きたい。

嫌だつてあれだよ？ 教室に魔方陣が包むと同時にイシユタルとかいうおっさんが現れたんだよ？ 金星の女神に変わってくれ、赤い悪魔でもいいからさ。

魔方陣により召喚されるとクラスメイトの一人一人が困惑や混乱し、中にはドッキリかとも思っている生徒もいた。え？ 俺？ 一人だけ場違いに長年の相棒である革製の

日記帳に異世界召喚魔法の魔方陣を必死に思い出して書き写していたよ、帰宅できる魔法を使える可能性があるかもしれないし……嘘です、厨二が再発しただけです。悪いか!! (逆ギレ)

その後、天之河のカリスマEXによつて混乱はある程度収められ、イシユタルの話がスムーズに進み、場所を案内するという事で十メートル以上のテーブルが幾つも置かれている大広間に案内された。

その部屋は召喚された場所と同じで煌びやかで素人目にも調度品や飾られた絵、壁紙が職人芸の粋のものが壁に飾られている。おそらく晩餐会をするような場所なんじゃないか? その部屋に案内されるまでに生徒達が騒いだりすることがなかったのは単純に突然のラノベ的展開に現実感が追いついていないからだろう。

取りあえずイシユタル(ブス)が入口から一番遠い席に座ると共にその近くからうちの担当の先生である愛子先生、光輝、雫、龍太郎……という順に学校の人気者つまりスクールカースト順に座り始めた。え? 俺? 最後尾付近を適当に座るとなぜか隣にハジメが座り、もう片方の席を白崎さんが何故か座った、何故し。というか周り見てよツ! 特に檜山! アイツなんか俺に憎しみのこもった視線を向けているんだけど!? だからお前の憎しみの矛先はハジメだろうが!! 俺じゃねえよ!!

そんな俺の恐怖心なんていざ知らずみんなが座った後まさかまさかのメイドさん達

が紅茶らしきものを入れたコップを大量にカートの上に置いて押しながら現れた。しかもそのメイド達全員、美女や美少女であるため男子生徒達はここで見なければ男が廃るとでも言うようにガン見して女子生徒達に氷点下以下の冷たい視線を男子生徒達に向けていた。俺の元にも銀髪なメイドさんが傍に来て目の前に飲み物を持ってきてくれたとき何やらいくつかの視線を感じたが無視である。

皆に飲み物が行き渡つたのを確認したイシユタルが話し始めた。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」

あのジジイが話したことを要約するところだ。

——この世界「トータス」には簡単に言うところの3つの種族に分かれているよ♪人間族、魔族、亜人族だね!!

——そんな中間族と魔族は仲が悪くてよく喧嘩するんだ!!かなり長い間喧嘩してきたんだけど最近魔族が

——ワルい動物である魔物を使役して苛めてくるんだ!それに困った人類の守護神エヒト様が異世界から正義の味方を召喚☆

——やったね、人間族!助けが来るよ♪

——だからおねがい!あの悪い魔族たちを懲らしめて!!!

そんな感じ、え？雑すぎないかだつて？知らん、イシュタルの恍惚な表情で吐き気がこみ上げてきて吐かないように必死だったんだから。

とまあ、そんなイシュタルの言葉にプリプリと断固抗議し始める愛子先生がいたが持ち前の背の低さと整った子供のよくな顔つきのおかげでその怒りが愛らしさに変換され全く怖くない為、全く相手にされてなかった。

しかもイシュタルに現状では元の世界に帰ることはできず自分たちが地球に戻れるかどうかは全てエヒト様のご意思次第らしい。

まあモチのロンその言葉に生徒たちは動揺し、口々に騒ぎ出した。

いや、まあそれは当たり前のことなだけど……あれ？ハジメ？どうして俺の袖を掴むの？どうしてそんなに震えてるの？君その気になつたら全員ドパンツできるでしようがッ！

しかし次の瞬間、その場を収めるように一人の少年が立ち上がった。そう案の定正義感だけで物事を考えるご都合主義の塊、天之河光輝である。

何やら世界の危機に俺たちは戦おうとか倒せたら神様も帰してくれるかもしれないとか、この世界の人々が危機に陥っているのだから放つて置いておくことはできないとか原作と同じような事をぬかしてくる。

……バカじゃないだろうか？そもそも情報が不足しているこの現状でどうして戦お

うとするのだろうか、もしかしたら魔人族が平和を望んでいるかもしれないのに。……そんなことはなかったけどなっ!!

大方、アニメやラノベのような展開に舞い上がっているだけなんだろうなあ、少年の心を忘れていない的な？

しかもそれに釣られて便乗する坂上龍太郎（バカ）や八重樫さんや白崎さんが立ち上がりそれに釣られクラス全員が賛同していく。

………やっぱりこいつら馬鹿なのかもしれない。

俺は無駄なカリスマによって戦争を決意した天之河達を諦めと達観した瞳で見つめた。



現在は召喚された聖教教会の本山である【神山】という場所からその麓である【ハイリヒ王国】の王城へと移動していた。え？移動方法？標高八千メートルを超える【神山】から王城までつながっている魔法で動くリフトのようなものだよ。ちなみに景色は壮大で綺麗でした。

そして到着した俺たちを待っていたのは【ハイリヒ王国】の国王であるエリヒド・S・B・ハイリヒに王妃であるルリアナ、第一王子であるランデルそして将来魔王の嫁のひとりになる王女であるリリアーナという王族の勢揃いである。

エリヒドがイシュタル（プス）を立てて出迎えたり、大臣や騎士達の紹介したり晩餐会でランデル王子がしきりに香織に話しかけたり、何故かランデル王子に睨まれたのでスルーしたり……

その後、王宮で一人一室用意された部屋に現在、俺は休んでいるのだが如何せん眠れない。

いや、まあこれから命を賭けた戦いが始まるのだ、死の恐怖ですぐには眠れないのだろう。

生きるためには人を殺す事もある為、ある程度心構えしているが、本当に自分は殺すことができるのだろうか？

あー、クソツ。鬱になってくる。『自分の為に殺す、誰かの為などと言いつくさない』これを信条に生きていこうと決意しているがこれからのことを考えるだけでその決意が揺らいでいく。

もういや、日記の裏にはメモ帳というべき場所に『ありふれ』の今後の展開が書かれているため寝る前に見直しておこうつと。

そう思いながら俺はベットにダイブし意識を闇へと落としていった。



## 本は神聖なものの異論は認めないby本バカ

月曜日。

それは一週間の中で最も憂鬱な始まりの日である。きつと大人数のものが最も天国だった日曜日の名残を惜しみ、これからの一週間を考え、溜息を吐き月曜日という存在に世界を呪うだろう。ちなみに月曜日が祝日だった場合は火曜日がとぼちりを受け。哀れ、火曜日。

そして、その月曜日を恨む会のひとりである南雲ハジメも今日からの一週間を考え憂鬱な気分になる。但し、ハジメの場合は単に面倒であり、そんなことするよりもハジメが大好きな彼と居たい等という問題ではなく（いやまあそれはそれで問題なのだが）学校の居心地がすこぶる付きで悪く、それ故の憂鬱さが大半を占めていた。

そんなハジメはいつものように徹夜でフラフラな体を引きずりどうにか遅刻ギリギリで登校し、教室の扉を開けた。

次の瞬間、男女合わせた大半の生徒達に睨みや舌打ちを頂戴してしまう。一部の生徒達の視線は侮蔑や嫉妬が籠っており、そんな視線に哀れな子羊ハジメは肩身を狭くしてトボトボと自分の席へと向かうしかない。

「よお、キモオタ！　また、徹夜でゲームか？　どうせBLエロゲでもしてたんだろ？　腐女子だしな！」

「うわっ、キモく。BLエロゲで徹夜とかマジキモイじゃんく」

そんな声が聞こえてくるがハジメは持ち前のスルースキルで聞かないことにする。さつきゲラゲラと笑いながら馬鹿にする男子生徒達は最初にハジメを馬鹿にしてきた者が檜山大介ひやまだいすけ続けて右から齋藤良樹さいとうよしき、近藤礼一こんどうれいち、中野信治なかのしんじの三人である。合計4人がハジメに絡んでくる小悪党グループである。

別にハジメはオタクという分類に入るのだが決して容姿も言動も見苦しいというわけではない。髪は少し短めの短髪だし、寝癖も無い。どこにでもいるような一般女子高校生Aである。おとなしくもきちんと受け答えはするし陰気は感じさせず、単純に創作物、漫画や小説、ゲームや映画というものが好きなだけだ。

世間一般ではオタクに対する風当たりは確かに強くはあるが、本来なら嘲笑程度はあれど、ここまで敵愾心を持たれることはない。

では何故これほど大半の生徒に敵愾心を持たれているのか？

その答えが彼女だ。

「南雲ちゃん、おはよう！　今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ」

ニコニコと微笑みながら一人の女子生徒がハジメの下に歩み寄った。このクラス、い

や学校でもハジメにフレンドリーに接してくれる数少ない例外の一人であり、この事態の原因の一人でもある。

名を白崎香織しらさきかおりという。学校で二大女神と言われ男女問わず絶大な人気を誇る途轍もない美少女だ。腰まで届く長く艶やかな黒髪、少し垂れ気味の大きな瞳はひどく優しげだ。スつと通つた鼻梁に小ぶりの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧な配置で並んでいる。常に微笑を絶やさず、非常に面倒見がよく責任感も強いため学年を問わずよく頼られる。それを嫌な顔一つせず真摯に受け止めるのだから高校生とは思えない懐の深さである。

そんな彼女はよくハジメとあの彼に構うのだ。休み時間や昼食時間、暇があれば彼女は必ずハジメとあの彼の近くにおりニコニコと接している。生徒達の中では徹夜のせいで居眠りの多いハジメや彼は不真面目な生徒と思われており、生来の面倒見のよさから香織が気に掛けていると思われている。

決してハジメは馬鹿ではなく、基本的な学力は平均点であり、時々それ以上を取っているのだがそれを知っているのはごく僅かである。

ちなみに極一部だけが香織がそっち系の人ではないかと言われているのは余談である。

ハジメはそんな彼女が苦手だった。初めて本屋で出会った時は優しくいい人だと

思ったが、人目を気にせずニコニコと関わってこれると生徒達の妬み等の怨念で祟られるのではないかと思うほど注目を浴びてしまうからである。

決して彼と二人だけの時間が少なくなつたから、苛立っているわけではない。

「う、うん。おはよう、白崎さん」

ファ!?!これが殺気!!?と一層深まる殺意と嫉妬の眼光にハジメは人知れず冷や汗を流す。ニコニコしている香織など意識する暇すらないようだ。

そんな眼光に晒されながらもハハハ、と曖昧に笑いながらなんとか足を動かして自分の席まで辿り着く。

すると隣で本を読んでいた少年がハジメに気づき、本をパンツと閉じてハジメの方へと振り向いた。

そう、今ハジメの目の前にいる少年こそが出ていた彼であり、ハジメに敵愾心を向けないもう一人の例外でありハジメの親友とも言える存在。

「ああ、おはよう。ハジメ」

「……うん、おはよう。日色」

艶やかな黒髪をさっぱりとした短髪に切り揃え、瞳は氷のように無機質で刃の如く鋭い、容姿は大変整っており黒色の眼鏡をかけてクールさを醸し出している。身体は無駄なく鍛えられ、細マッチョとでも言うような体型であり、まるで二次元から現れたよう

にイケメンだった。

かみしろひいろ

彼の名は神代日色、学年成績は常に一位、運動神経は最上位、容姿は大変整っており、二大王子の一人と言われている（ちなみに日色は知らない）クール系完璧男子である。

女子達に常に彼氏にしたいランキングで二位と一位を上下し、軽く神聖化しかけている。

性格は少し難があり言葉を偽ることはせず鋭いのだが言葉の所々に隠れた優しさが込められておりその捻くれ度が女子達に人気となっている。

そんな彼もハジメが生徒達に敵愾心を持たれる原因（主に女子から）である。理由は少し時が遡る。

ある日、日色とハジメが学校終わりに本屋に向かっているとそれに気づいた香織がわざわざ追いかけて日色達にどのような関係か聞いたのだ。……ちなみに香織は笑顔だったが背後には般若が立っていたと後にハジメは語っている。

日色は顔色ひとつ変えず、「ハジメは俺と本を語り合う友達だ」と言い、ハジメのフオローによってなんとか香織は納得し彼女のスタンド？は消え去ってハジメと日色の命の危機は去ったのだ。

——近くにこっそり聞いていた同じ学校の女子高生がいなければ。

ハジメが日色の友達であるという事実は瞬く間に広がり次の日、登校したハジメは圧

倒的殺意と嫉妬の波動に意識が一瞬飛びかけたらしい。

そんなわけでハジメは男子女子両方に敵愾心を抱かれていた。

しかしハジメがもし生活態度を改善したり香織ほどではなくともこのクラスの担当である可愛いちびっ子癒し系に分類される愛子先生程の容姿を持っていたら文句を言う者たちはいないだろう、しかしハジメの容姿は極々平凡程度であり、<sup>〃</sup>趣味の合間に人生<sup>〃</sup>を座右の名としていることから態度改善も見られない。

男子達はハジメだけではなく香織がよく接している日色にも敵愾心を抱いてはいるものの整えられた容姿に生活面でも運動面でも完璧な日色に文句をつけられず鋭すぎる眼光で「——あ？」と言われてしまった場合大半の者が竦んでしまうだろう。

まあ、日色は肝心の性格に難があるため結局は敵愾心を向けられているのだが。

つまり檜山グループがハジメを馬鹿にしたたりするのは単純に日色に最も親しいからであり、日色の眼光に竦んでしまった為の八つ当たりである。つまりとぼっちり。

女子達はいわずもがなハジメが平凡な容姿をしているくせに日色に最も親しいため敵愾心を向けられている。が、ハジメはそれだけは絶対直そうとはしないだろう。……日色に依存しているし。

そんなハジメは荷物を机の横に置き、ニコニコと日色とハジメの場所に来る香織をみて、数秒後の展開を想像してハア、と内心ため息を吐く。

「そういえば南雲ちゃん、日色君、昨日——っていう本を見つけたんだけど……」  
 「ああ、あの本か。あれは割と読みやすいぞ、題材がかなりシンプルの癖に描写がわかりやすいからな」

こんな状況でよく話せますねっ!?!とハジメは増幅している殺気を孕んだ眼光を浴びながら顔色ひとつ変えず会話する日色達にハジメは内心驚愕する。というか白崎さん、いい加減この恐ろしい眼光に気づいてくださいっ!!

ハジメはどうやって会話を切り上げようと眼光に羊のように怯えながら考えていると三人の男女が近寄ってきた。

「日色、南雲ちゃん。おはよう。毎日大変ね」

「香織、また二人の世話を焼いているのか？ 全く、本当に香織は優しいな」

「フンッ、そんなやる気ないヤツらにやあ何を言っても無駄やえがしと思うけどなあ」

三人の中で唯一朝の挨拶をした女子生徒の名前は八重やえがし樫しずく。香織の親友だ。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークである。切れ長の瞳は鋭く、しかしその奥には柔らかさも感じられるため、冷たいというよりカツコイイという印象を与え、百七十二センチメートルという女子にしては高い身長と引き締まった身体、凛とした雰囲気は侍を彷彿とさせる——というのがクラスメート達の認識であるが本当は違う。

彼女は日色と居た時のみ女らしくなり、分かり易く言えば顔が一瞬でゆで卵になった

り、偶に日色に熱を額を置いて測られた時、非常に女の子らしい声を出したりする。

ハジメは後輩の女子生徒から熱を孕んだ瞳で「お姉さま」と慕われ、正しく凛々しい印象を与える彼女のイメージが日色によってあつという間に懇切丁寧に破壊されたのはかなり最近の記憶である。

日色とは昔剣道で知り合った幼馴染らしく剣道の腕はかなりのもの、美少女剣士として雑誌に載っており日色に「本当にサムライ女って言われるようになったな」と言われグーで殴った思い出がある（ちなみに片手で何食わぬ顔で受け止められた）

次に、些か臭いセリフで香織に声を掛けたのがあまのがわこうき天之河光輝。如何にも勇者っぽいキラキラネームの彼は、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人だ。日色曰く通称『テンプレ勇者』

サラサラの茶髪と優しげな瞳、百八センチメートル近い高身長に細身ながら引き締まった身体。誰にでも優しく、正義感も強い（思い込みが激しい、これ重要！）。小学生の頃から日色と同じく剣道の道場に通っておりよく衝突していたらしい（八重樫雫談）全国大会に行くほどの猛者らしいのだが日色に一度も勝てたことがなく、あつたのはあの日色が手を抜いた試合だけである。

二大イケメンの一人であり、ダース単位で惚れている女子生徒がいるそうだが、いつも一緒にいる雫や香織に気後れして告白に至っていない子は多いらしい。それでも月



二回以上は学校に関係なく告白を受けるといふのだから筋金入りのモテ男だ。

ハジメから見ても日色と光輝の性格は全く合っていないように思え、怒りに燃える光輝を「だからどうした？」と日色が冷たく逸らすだけである。

ちなみにハジメが日色に光輝のことを聞いてみると「アイツは自分が正義だと思いが激しいただのガキだ、誰かを助けたいという考え方は嫌いじゃないだが……方法が馬鹿すぎるんだよ、価値観もクソだしな」らしい。

最後に投げやり気味な言動の男子生徒は坂上龍太郎さかかみりゅうたろうといい、光輝の親友だ。短く刈り上げた髪に鋭さと陽気さを合わせたような瞳、百九十センチメートルの身長に熊の如き大柄な体格、見た目に反さず細かい事は気にしない脳筋タイプである。日色曰く『ただの馬鹿』

龍太郎は努力とか熱血とか根性とか『もつと熱くなれよお！』とかそういうのが大好きな熱血系の人種なので、ハジメや日色のように学校に来て寝てばかりの熱血という言葉が辞書に収められていない日色やハジメは嫌いなタイプらしい。まあ日色の場合する必要がないからしていないだけなのだが。

そんないつも通りの三人にハジメははは……と乾いた笑みを浮かべながら挨拶を返した。ちなみに日色は三人を一瞥した後、すぐさま本へと視線を戻した。関わりたくないらしい。

「おはよう、八重樫さん、天之河さん、坂上くん。はは、まあ、自業自得とも言えるから仕方ないよ」

雫達に挨拶を返すハジメだが「なに、おねえ様に話しかてんだゴルア!!」や「八重樫さんに話しかけるとは死にたいようだな、ああ?」等という殺意の籠った視線が周りから大量に突き刺さる。

ちなみに雫も香織と同じ2大女神の一人であるためかなりの人気を誇る。

「それが分かっているなら直すべきじゃないか? 何時までも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うよ。香織だって君達に構ってばかりはいられないんだから」

そんな曖昧な笑いを零すハジメに光輝が忠告をする。光輝の目にもやはり、ハジメは香織の厚意を無碍にする不真面目な生徒として映っているようだ。ちなみに隣で日色が「その優しさに甘えている俺に負けているお前はどうかなんだ、テンプレ勇者」と小さく呟いていた。ハジメとしては甘えたことなんてないよ! むしろ放っておいて欲しい! と声を大にして反論したいのだがそんなことをすれば天之河様になってことを! とイジメに遭うことが確定する。光輝自身、思い込みが激しいところがあるので反論しても無駄であろうことも口を閉じさせる原因である。

と、いうかハジメからすれば香織が関わらなければ日色との関係がバレなかったし、父親はゲームクリエイターで母親は少女漫画家であり、将来に備えて父親の会社や母親

の作業現場でバイトして将来設計がバツチりなため香織が関わらなければ中学生の時の関係のままだったのだ。香織なんかがいなければ――

「あ、あはは〜」

ハジメは飛びかけてた意識を戻して曖昧に笑いながらその場を切り抜けようとするが今日も変わらず女神の無自覚に落とす爆弾のせいで切り抜けることができなくなった。

「? 光輝くん、なに言ってるの? 私は、私が南雲ちゃんと日色君と話したいから話してるだけだよ?」

ざわつとクラスメイト達が騒がしくなり舌打ちなどが聞こえ始める。光輝は驚いた顔をしていたが「え?……あ、ああ香織は優しいよな」と香織の発言はハジメに気を遣ったと解釈されたようだ。

そんな光輝と香織をおいてクラスメイトの殺気が猛烈に高まり――

――ドンツ!!という日色が本を勢いよく置く音と共に殺気が消し飛んだ。

「――おい」

一瞬静寂になった教室で静かに日色の声が響く。クラスメイトの数々がやばい!日色を怒らした!と身構える。

「俺は今、本を読んでるんだが?」

低く、重く、静かに、そして微かに怒りを込めた声で。

「騒ぐのは構わないが俺の席の隣でベラベラベラベラと騒がないでくれるか？」

シーンと彼のその言葉と共に静寂が訪れた、日色の怒りの混じった眼光の圧力に光輝や香織は言葉を失った、雫はああ、またかとため息を吐き、ハジメは少し苦笑いしている。

話は変わるがハジメ達を通っている学校の高2学年にはひとつの暗黙の掟がある。

『神代日色をキレさせたらいけない』と

奴の機嫌を損ねたら絶望が訪れるぞ、と。

そんな静寂を破るように始業のチャイムが鳴りガラガラと教室の扉が開かれる。

「はいー！ホームルームを始めますよ——つてどうしてこんなに静かになっているんですかあ!？」

現れた癒し系先生畑山愛子先生の登場に日色を除いたクラス全員が感謝した。

## 魔法陣ってロマンあるよなby文字使い

日色が少しプツツンしてから時は過ぎて昼頃の3時限目、社会の時間である。

愛子先生が小さい背丈を椅子を使いながらなんとか授業をして生徒達の心を癒す時間帯。

そんな時間にハジメは唐突に眠気が覚めたため、左隣に左肘を机につき左手で顔を支え目を瞑っている日色の寝顔を見つめていた。日色は本当に寝ているのか右手でシャーペンが三秒に一回ほど一回転させており、どうやっているの!?!と内心ハジメを驚かせている。

ハジメはそんな日色の寝顔をもっと見つめようか彼を起こそうか、欲望と理性が乱闘を起こしていた。

そしてそんな二人を現在、授業中の先生の眼を掻い潜って見つめているのが香織と雫である。

雫は日色を起こそうか左手を行ったり来たりしているハジメを、新たなライバルかしら?と警戒しながら見つめ、香織は南雲ちゃん、今すぐその場所変わって?と地味に背後から般若の姿をしたスタンド?を出していた。



「……は？」

突然自分に襲い掛かってきた投擲物に日色は一瞬反応ができず、回避が遅れてしま  
う。そんな日色の額に目掛けて横回転が加わったチョークが襲い掛かり――

「はぎやつ!!」

――その横にいるハジメへとカーブして直撃した。

「……な、なんで……僕……?」

愛子先生渾身の一撃は見事ハジメの哀れな遺言を残してハジメの意識を闇の中へ、ド  
サツとハジメを机に撃沈させた。教室にハジメが倒れる音と共に静寂が訪れる。

シーンと静まった教室の中で一人日色が呟いた。

「……凄いな、カーブしたぞー」

違う、そうじゃない、と大半の生徒が思ったが声に出す者はいなかった。

「南雲ちゃん!?、ごめんなさい!」

一人気絶した教室の中で愛子先生の可愛らしい声が響き渡った。



「うう、酷い目にあつた……」

時が経って昼休み、気絶からなんとか目覚めたハジメは未だに痛む額を片手で摩りな  
がら、今日のお昼ご飯である十秒で栄養がチャージできる便利な簡易食、銀のパックに

包まれたゼリーを取り出して、蓋を捻る事で開ける。

飲み口に口をつけて一息にジュルルルと飲み干す。あつという間にカラツカラのカラになってしまった銀パックの飲み口を蓋で閉めて、うひーと机に倒れ伏す。

このまま一眠りしようかと顔を横に向けると、視界には日色がいつも食べているお弁当（ちなみに自作らしい）を開かずに彼が愛用している革製の日記をめくって何か文字を書いていた。

ピコン！ピコン！とハジメの好奇心レーダーが反応を示し、そろりと日色の背後から彼の日記を眺めようとして――

「――え？みぎや?!?!」

――パタンツ、ベシツ！と日記に葉を挟む↓本が傷つかないように優しく閉じる↓ハジメを日記の表でを叩くという動作を高速で行い、見事ハジメを撃退した。

ハジメは突然襲い掛かる日記帳に反応できず、ペシツ！と頭に衝撃が駆け巡った。

「……何勝手に日記を見ようとしているんだ？」

「うう、だとしても叩くのは酷いよ、日色！」

「自業自得だ、なんならもう一度してやろうか？」

「ごめんなさい」

見られたくないものを見られそうになったとハア、とため息を吐く日色にハジメは叩



かれた額を摩りながら涙目になって恨めしそうに日色を見て僅かな抵抗を試みるが日色の鋭い睨みによってハジメの抵抗は完膚無きまで撃沈される。

日色の睨みに屈服されたハジメは（・ω・）シヨボーンと落ち込んだ。「ううゝ不幸だ」と呟きながら座って地味に床をイジイジとつついている。

「あー。ハジメ、大丈夫か？ほら、唐揚げをくれてやるからさっさと機嫌をなおせ」「ほ、本当！」

さすがの日色もかなりの陰キャオーラを放出しているハジメを見かねたようだ、自分のお弁当を開けて中に入っているおかず『唐揚げ』を取り出す。ちなみにハジメの好物の一つである、食べ過ぎて太らないのだろうか？

日色の言葉にハジメは捨て犬が新たな飼い主に拾ってもらった時のような希望の光を見たような表情で日色に振り向いた。念のためにいうが日色は別にハジメを餌付けしているわけではない、ないっただらない。

ほら、と取り出した箸で唐揚げを掴みハジメの口へと近づけさせる。ハジメは少し恥ずかしそうにしながらアーと口を開ける。クラスの女子から殺気が出るがハジメは無視である、例えクラスに殺気を向けられてもこの唐揚げは渡さない！とでも言うように。そんな幸福を訪れさせる美味しそうな美しい焦げ色を持った唐揚げはハジメの口に近づいていき――

「いただきます!」

——突然横から現れた香織にハムツと食べられた。

もぎゆもぎゆと微かに顔を赤く染めながら美味しそうに唐揚げを食べる香織を見てひと噛みするたびにハジメが「……ああつ……ああつ!」と悲痛な声を出してドサリと床に四つ這いの体勢になって悲しみの涙を流す、言おうガチ泣きである。

香織はゴクリと唐揚げを飲み込むと共にペアと文字どうり女神のような表情で「美味しい!」と呟いた。

「そうか、それは良かった。——で、白崎、何の用だ?……というかハジメ、もう一つやるからいい加減目を覚ませ(ペチっ!)」

「……唐揚げ……僕の唐揚げ……はっ!そ、そうだ、白崎さん、どうしたの?」

突如現れた我等の女神の登場に日色は眉一つ動かさず、未だに四つん這いになって壊れたハジメをデコピンで再起動させ、香織へと質問を投げかけた。彼の瞳には「めんどくさいことになりそうだ」と言うように少し目を細めている。香織はわ、忘れてた!とも言うようにハッ!と驚いてワタワタと持ってきたお弁当を取り出して笑顔でこう言った。

「ねえ、日色君、南雲ちゃん、一緒にご飯食べようよ!」

再起動したハジメは内心「しまった」と呻いた。今日が月曜日であり少々寝ぼけてい

たことと日色の日記に好奇心を持ってしまったことですっかり香織が関わってくる可能性を忘れてしまっていた。いつもなら香織達に関わる前に校舎裏などで日色と食べるのが昔からの定番なのだが二日連続の徹夜は少々きつかったらしい。

ざわざわと騒然としたすクラスメイト達にハジメは内心悲鳴を上げる。香織しゃん？ どうしてわっちに構おうとするんでござるか？ という意味不明な謎の方言が飛び出そうになった。え？ 日色？ 隣で小さく呑気に欠伸をしているよ？ どうしてこんな時にそんなに呑気になれるんだ！ とハジメが思ったのは言うまでもない。

そんなわけでハジメは再び抵抗を試みる。

「あゝ、誘ってくれて有難う、白崎さん。でも、もう食べ終わったから天之河さん達と食べたらどうかな？」

そう言って、ミイラのようにカラツカラのカラになった十秒チャージの銀パックを彼女にヒラヒラと見せる。断るのも「何様だ！ 貴様！」等と思われるかもしれないがその後クラスメイト達にハジメの処刑方法を会議する会話を聞くよりかは何倍もマシである。ちなみに日色の場合、最終手段は一瞬の虚を突いて窓から脱出するらしい。

しかし、勿論のこと女神にそのような抵抗は通じない、女神からは逃げられないのである。

容赦なく香織に追撃を加えられた。

「えっ！ お昼それだけなの？ ダメだよ、ちゃんと食べないと！今日は分けやすいサンドイツチを作ってきたから！」

（香織さあああああん!!! 気づいて！周りの視線に気づいて！皆さん僕に殺気向けているんだけど!!）

ハジメが冷や汗を流し始めたとほぼ同時に香織の頭にピカアン!!と天啓が振り降りる。ここで日色君を先に誘ってしまえばハジメもついてくるんじゃないの？やったね、成功したら勝ち組だよ香織ちゃん！

そんなわけで香織はくるりと日色の方を向いていつものようなニコニコ笑顔で声をかける。

「日色君も一緒に食べよう！この前昼食を分けてもらったからそのお返しにいつもより多く作ってきたの！」

そんなニコニコ笑顔に日色はなぜこつちに来たし？みたいな苦虫を潰したような表情をとって静かに返答する。

「結構だ、俺は自分の弁当があるし今日はあまり食欲がなくて眠いんだ。俺より栄養が欠けているハジメにくれてやれ」

そんな日色の言葉に「ニイ!」と声を上げそうになったハジメである。この男、まさかハジメを盾役に使ってる?冷や汗が流れる勢いが更に増幅した。裏切ったのかキスマア!!

しかしそんな日色の言葉には怯む我等の女神、香織ちゃんではない、食欲がないってことは朝食を抜いてきたのでは!?と何故か勘違い、更に声をかける。

「もう!昼にきちんと食べないと午後には持たないよ!朝も夜もちゃんと食べてるの!」

「なんでお前に言わなきゃいけないんだよ……昨日徹夜してたから朝食を作るために朝は食って無い、夜はあるもん食べたから別にいいだろうが」

「ダメだよ!きちんと一日三食バランスの良い食事をしなきゃ健康になれないんだから!」

「なんでお前までオカンのようなこと言っているんだ?ポニーと一緒にじゃねえか……これはもう二大女神じゃなくて二大オカンだろ」

途中で日色が小さく何か呟いていたがハジメにはよく聞こえなかった。どこかで「誰がオカンよ!」と叫んでいたがそれもきつと気のせいなのだろうそう、きつとそうに違いない。

キャンキャンと説教する香織をハイハイと右耳から左耳に流す日色にクラスメイトたちはギリギリと歯ぎしりや睨み、中にはカッターナイフやシャーペンに苦無のように

持って投擲しようと思う者たちもいる。ちなみに日色に一度カッターナイフなどを投げた者たちにはいたにはいたが全て片手で掴み取られ、高速で投げ返されたらしい。威力はシャーペンが壁に浅く突き刺さる程の威力である。

そんな殺意や嫉妬の敵愾心をハジメや日色に集中的に向けられハジメは冷や汗を流しているると一筋の希望の光が現れた、そう我等の勇者パーティ光輝達である。

「香織。こっちで一緒に食べよう。南雲はまだ寝足りないみたいだし、神代は香織の優しさを無下に行っているようだし。せつかくの香織の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ?」

爽やかに笑いながら気障なセリフを吐いて登場した光輝にキョトンとする香織。天然が入っている彼女には光輝のクサイセリフやイケメン爽やかスマイルは効果ないようだ。

「え? 何で、光輝くんの許しがいるの?」

素で聞き返す香織の言葉に「ブフツ」と雫と日色が吹き出した。光輝が困ったように笑いながら香織にあれこれ話しかけているが一向に効果がないようだ。しかし、結局は人気者4人プラスαが集まっているのだ。ハジメに向けられている圧力がもはや増大しすぎて空間が歪んでいる幻覚が見えるほどだ。

隣の日色ももう、逃げようと腰を上げかけており、ハジメももう彼らなんて異世界に

勇者召喚で行ってくれたらいいのに！なんて思い、退散しようと思腰を上げて——凍りついた。

突如、ハジメの目の前、つまり光輝の足元に純白に光り輝く円環と幾何学模様、俗に言う魔法陣が現れたからだ。円環と幾何学的模様により構成された魔法陣は、悪戯やドッキリで済ませられるようなものではないというのは一目見てわかる完成度であり、ついでに言えば真下から突風が吹き荒れ、香織がスカートを咄嗟に抑えていた。

この異常事態にはすぐ周りの生徒たちは気づいたがまるで金縛りにあつたように魔法陣を注視する。

その魔法陣は徐々に輝きを増していき、一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大した。自分の足元まで異常が迫って来たことに漸く硬直が解け悲鳴を上げる生徒達。未だに教室にいた愛子先生が何か叫んだ瞬間、カツと魔法陣が一際明るく輝いたかと思うと、光が教室を満たす。

数秒か数十秒か、光によって真っ白に塗りつぶされた教室が再び色を取り戻す頃、そこには既に誰もいなかった。

残されたのは食べ残された弁当や生徒達の荷物だった物、横倒しに蹴り倒された椅子、ボトルが外れたことで中身の水を床にぶちまけたペットボトル。まるで生徒達の姿だけが突如消えたかのように生徒達がいた痕跡のみが残った教室が静かであつた。

この事件が後に集団神隠しではないかと騒がれる出来事となる。



## 話があまり進まないからタイトルが思いつかない!の回

光が収まり、視界が良好となった日色は反射的に誰かを抱きしめようとしたのだろうか。日色の左腕をぎゅっと抱きしめている香織を何やってんだお前とでも言うように少し目を細めて見つめる。しばらく香織は呆然としていたが自分が日色に抱きついているということによりやくく自覚して、瞬時に顔がダルマのように真っ赤になった。「ぶ、ごめんなさい!」と謝ってバツと手を離し、日色から少し離れた。……少し両手をワキワキと動かして名残惜しそうにしているのはどうしてだろうか？

一方日色は教室の風景から一瞬で変化した石造りの部屋を素早く見渡し、手持ちで持っていた日記帳に教室で現れた魔法陣が思い出せなくなる前に書き写していた。

両手で顔を庇い、目をギュツと閉じていたハジメはざわざわと騒ぐ無数の気配を感じてゆつくりと目を開いた。そして、周囲を呆然と見渡す。

まずハジメの目に映ったのは大きな壁画である。縦横十メートルはありそうなその壁画には、後光を背負い長い金髪を靡かせうつすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が自然に囲まれているという絵が描かれていた。あまり芸術がわからないハジメでも素晴らしいものだと思う作品なのだがどうしてだろう？何故か薄ら寒さを感じてしまいつ

目をそらしてしまった。そのまま周囲を見つめるとどうやらハジメたちは大広間にいるようだ。素材は大理石？、美しい光沢を放つ滑らかな白い石作りの建築物のようで、これまた美しい彫刻が掘られた巨大な柱に支えられ、天井はドーム状になっている。大聖堂という言葉が自然と湧き上がるような荘厳な雰囲気の大広間である。

ハジメ達はその最奥にある台座のような場所の上にいるようだった。どうやら教室にいる皆が巻き込まれてしまったらしい。

ハジメはふと日色の方へと振り向くと日色が無事なことにホツとして声をかけようとしたが彼は真剣な表情で日記に何か書いていたためそつとしておいたほうがいいだろう。

そう思っているとこの広間にハジメ達が乗っていた台座の前に祈りを捧げるように跪き、両手を胸の前で組んだ格好で少なくとも三十人近い人々がいたのだ。

その中で中でも一番存在感のある老人が動き出し、名乗りを上げる。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

そう言って、イシユタルと名乗った老人は、何やら少し怪しい微笑を浮かべるのだつた。

◆ 現在ハジメ達は召喚の間から、長いテーブルの置かれた食堂のような部屋に移動していた。イシュタルはこの場では落ち着けないだろうと話を落ち着いてするために案内したのだ。この場所を口から一番遠い場所にイシュタルが腰掛け、その近くから愛子先生、光輝、雫、龍太郎……といった学校の人気者順に座っていくがそれを無視していくスタイルなのが日色である。

最後尾のところを日色が座ると慌ててその右隣にハジメが座り左隣に香織が座った。ちなみに檜山に憎しみのこもった視線を向けられていたが日色が一瞥するだけですぐにおとなしくなった。

日色が檜山から視線を外すと共に部屋にメイド服の女性が入ってきて、生徒たちに紅茶と思わしき飲み物を配っていく。しかもそのメイドさん全員が美少女や美女のオンパレードである。男子達はさすが異世界!!これを逃す期はないぜ!と男子生徒達がメイドさん達をガン見する。そしてそんな男子達を見た女子達の視線が北極の気温まで冷たくなりもはや汚物を見る目となっている。ハジメはまさか、日色も……と日色を見るが日色は肩肘をつけてメイド達を少し細めた瞳で少し見つめていたがすぐに興味を失ったように視線を下げた。ついでに言えばハジメとは反対側である香織もそこまでメイド達に興味を示さない日色に内心ため息をしていた。

『着こなしがなっていないんやでツ!! 咲夜さん見習え、ちくしょうが!!』

ちなみに内心ではメイド服の着こなしが甘いとお怒りになっていたりする。

そんなことはいざ知らず紅茶を配り終えたメイド達はそそくさと去っていき、イシュタルが話し始めた。

「……では、皆様方はさぞ混乱していることでしょう。事情を一から説明する故、まずは私の話を最後まで聞いて下され」

こうしてイシュタルが話した内容はハジメにとってどこか聞いたことのあるような、そしてどこか読んだことのあるようなテンプレでファンタジーすぎる内容だった。

この世界『トータス』は大きく分けて人族、亜人族、魔族の三つの種族が存在している。

人間族が大陸の北側を、魔族が南側を。亜人族は東側にある巨大な樹海にひっそりと住んでおり、何百年も人族と魔族は戦争を続けている。魔族は数に人間に及ばないものの個人の持つ力が大きくいらしく、その力の差を人間族は数で対抗し拮抗していた状態だった。そんな状態は、数十年と続いており、その間に大規模な戦争などは起きていなかった。しかしその拮抗が、最近になって崩れ始めてきた。

魔族が魔族を役し始めたのである。

魔族とは、通常の野生動物が魔力を取り入れ変質した異形のことだ、と言われてい

この世界の人々も正確な魔物の生体は分かっていないらしい。それぞれ強力な種族固有の魔法が使えるらしく強力で凶悪な害獣とのことだ。

彼等は本能のままに活動するため今まで使役できる者はほとんど居なかった。使役できたとしても魔法を用いてせいぜい1〜2体しか操れなかった。しかし最近の魔族は一人で何十匹もの魔物を操れるようになったという。

それはつまり『人数』という人間族の優位性の消失である。それは同時に人族の存続の危機を示していた。

「あなた方を召喚したのは“エヒト様”です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持つているのです」

「まあ、これもエヒト様の神託から教えてもらったのですが」と言葉を切ったイシユタルは表情を恍惚な表情に変え叫ぶように言った。

「そう！あなた達は『神の使徒』なのです！あなた方には是非その力を発揮し、“エヒト様”の御意志の下、魔族を打倒し我々人間族を救って頂きたい」

おそらく神託を受けた時のことでも思い出しているのだろう。イシユタルの表情は表現ができないほどの笑顔で体を震わしていた。イシユタルの話によれば、人間族の実

に九割が聖教教会に入信しており、神託を受けることができた者は例外なく高位に付くことができるらしい。

ハジメは「神の意思」を疑い無く、それどころか嬉々として従うのであろう彼らの価値観に言い知れぬ危機感と不安を感じていると突然ガタンツつと大きく音を立てて立ち上がる人物がいた。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のしていることは唯の……唯の誘拐ですよ！」

猛然と抗議を始めるプリプリと怒る畑山愛子先生。クリクリとしたおめめをキツとし、ポプカットの髪を跳ねさせながら抗議するが哀しかな持ち前の圧倒的庇護欲を感じさせる童顔と低身長のせいで「ああ、愛ちゃんがまた頑張っているなあ……」とほんわかかな空気にさせるだけである。

そんなほんわかかな空気は次のイシユタルの言葉で凍りつくこととなる。

「お気持ちは察しますが……しかし、現状私達はあなた方を帰還させることは不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に乗りかかっているようだ。日色を除い

て誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!?! 喚べたのなら帰せるでしょう!?!」

愛子先生がすぐさまイシユタルに食って掛かるが帰ってきた返答は絶望へ誘う最悪の言葉だった。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意志次第ということですよな」

「そ、そんな……」

ペタンつと愛子先生が脱力したように椅子に座り込む。それを合図に周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ? 帰れないってなんだよ!」

「いやよ! 何でもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねえ! ふざけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

パニックになる生徒達。ハジメも当然の如く平気ではなかったが日色とたくさんのラノベを読んでいるためこういつた展開は予想していた幾つかのパターンの内、最悪のパターンではなかった。他の生徒達よりは冷静を保っていた。ちなみに最悪のパ

ターンは召喚者を奴隷扱いされるパターンである。

オタクであるハジメは最悪のパターンではないもののあまりよくない状況による不安さでつい日色の学生服の袖を掴んでしまう。

「どうした？ハジメ」

帰ってきた声はいつもどうりの彼の声、こんな状況でも落ち着きを持っている冷静な声色だった。

「だけど——彼の表情がいつもより違っていた。

「……ひ、いろ？」

いつものような無表情、いつものような無機質な刃のような鋭い瞳。だがハジメは彼の変化に気づいていた。

暗い、昏い、冥い、彼の表情は普段より『くらく』まるで死刑囚のような絶望を感じさせる表情だったのだ。

まるでこれから襲いかかる避けられない災難を知っているかのように。

そんな表情はハジメが声を零してしまうと共にまるで最初からなかったようにいつもの普段の表情に戻っていた。

「ん？なんだ？」



「う、ううん、ごめんね。少し不安になったただけだから」

「……そうか？」と不思議そうに呟く彼からハジメは視線を外し、イシユタルの方を見る。

イシユタルは誰もが狼狽える中特に口を挟むでもなく静かにその様子を眺めていた。だがどうしてだろうか？悪意に敏感なハジメにはイシユタルの瞳には、侮蔑の色が潜んでいるように見える。

大方「エヒト様選ばれておきながら何故喜べないのか」とでも思っているのだろう。そんな中一人がバンツ！と机を叩き立ち上がった者がいた、光輝である。

その音にビクツとなり注目する生徒達。光輝は全員の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放って置くんなんて俺にはできない！それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？ どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？ここに來てから妙に力が漲っている感じがし

ます」

「ええ、そうです。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると  
考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。戦って、この世界を救うんだ！皆が家に帰れるように俺  
が世界も皆も救ってみせる!!」

ギョツと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。

同時に、彼のカリスマは遺憾なく効果を発揮した。絶望の表情だった生徒達が活気と  
冷静さを取り戻し始めたのだ。光輝を見る目はキラキラと輝いており、まさに希望を見  
つけたという表情だ。女子生徒の半数以上は熱っぽい視線を送っている。

そして同時に日色の目が死んだ。頭を抱えて「どうしてそうなるんだよ、バカが……」  
と呟いた。

当たり前だ、光輝が行ったのは日色からすればただの思考放棄である、そもそもエヒ  
ト神などという神様が本当にいるとは本来なら分からず、しかもそんな神様が異世界に  
自分たちを呼んだとは本当はわからないはずなのだ。自分達はエヒト神に出会ってい  
るわけではなくイシユタル達や日色達以外の第三者が行なった程度しかわからないの  
だから。

日色は光輝に抗議する考えが浮かんだがすぐに消した。小説からしても実際に出

会ってあるが故に彼の性格はよくわかつてる。仮にここで介入し光輝のカリスマによって一致団結した生徒達をわざわざ再び混乱させてしまえばめんどくさいことになることは避けたいのだ。決してコミュ症に纏め上げることなんてできないから諦めたのではない、ええ、決して。

そんな彼の思考を無視して新たな者達犠牲者が立ち上がる。

「へっ、お前ならそう言うと思つたぜ。でも、お前ひとりでなんかやらせねえぞ? ……俺も、戦うぜ!」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないのよね。……しょうがない、私も戦うわ」

「雫……」

「えっと、皆が戦うなら、私も……」

「香織……」

いつものメンバーが、光輝のいうことに賛同する。後はもう芋蔓式である、次々とクラスメイト達が賛同していく。愛子先生はオロオロと「ダメですよ」と涙目で訴えているが光輝の作つた流れの前では無力だった。

途中から香織や雫から視線を日色は向けられたが日色は興味ないですとでも言うようにプイと目を逸らす。

結局、全員で戦争に参加することになってしまった。おそらく、クラスメイト達は本当の意味で戦争をするということがどういうことか理解してはいないだろう。崩れそうな精神を守るための一種の現実逃避とも言えるし、未だに現実という認識が薄く、自分達が勇者だから大丈夫だと思っているのかもしれない。

それを本当に理解しているのはオタクでありながら幼い頃から虐められ続けられたが故に人一倍負の感情に敏感なハジメと元から異世界の残酷さを知っている日色だけだった。

ハジメは最もクラスで影響力のある光輝が立ち上がるように話を誘導させたイシユタルの手腕とこの不安でしかないクラスメイト達との未来を考え少し不安になった。

## ステータスプレートが何の材料で出来ているか気になる 俺氏 by 赤ローブ

戦争に参加することが決定した後、ハジメたちは聖教教会の本山である【神山】の麓にある【ハイリヒ王国】の王城へと移動した。標高八千メートルを超える【神山】から王城までつながっている魔法で動くリフトのようなものを用いての移動である。標高八千メートルを超える【神山】から見る景色は壮大の一言に尽きたとハジメは後に語る。

王城に到着して待っていたのは【ハイリヒ王国】の国王であるエリヒド・S・B・ハイリヒに王妃であるルルリアナ、第一王子であるランデルそして将来魔王の嫁のひとりになる王女であるリリアーナという王族のオンパレードである。その時エリヒドがイシユタルを立てて出迎えたことからハジメはこの国が動かしているのが『神』であると察していた。その後大臣や騎士達の挨拶があったり、ランデル殿下が香織にしきりに話しかけたり、何故か近くにいた日色が睨まれたので日色は完全にスルーしたり。

その後王宮の一人一室用意された部屋で休むことになったのだが、天蓋付きベッドに愕然としたのはハジメだけではないはずだ。豪奢の部屋にハジメは少し落ち着くことができなかったが怒号の一日だったからだろう張り詰めていたものが徐々に溶けてい

くのを感じベツトにダイブするとともに意識が闇に沈んでいった。

◆ 翌日から早速訓練と座学が始まった。

生徒たちはまず訓練場に集められ、十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。配られたプレートを何だこれ？と不思議そうに見る生徒達に騎士団長であるメルド・ロギンスから直々に説明がなされた。

騎士団長が訓練に付きつきりでいいのかとも思ったハジメだったが、対外的にも対内的にも「勇者様一行」を半端な者に預けるわけにはいかないということらしい。メルド団長本人も、「むしろ面倒な雑事を副長（副団長のこと）に押し付ける理由ができて助かった！」と豪快に笑っていたくらいだから大丈夫なのだろう。

日色は「副団長は苦労人だな……」と少し遠い目をしていたのがハジメは気になった。その瞳がまるで同士を見つけたような目だったからだ。

きつと今頃書類に埋もれている副団長がいるのだろう、哀れ副団長。小さくハジメは名も知らぬ副団長に合掌しておいた。

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ

「？」

非常に気楽な喋り方をするメルド団長。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になるうってのに何時までも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するように忠告するくらいらしい、近くにいた騎士に聞いてみるとハジメにそのような答えが返ってきた。

ハジメ達もその方が気楽で大変有難かった。遙か年上の人達から懇懃な態度を取られると居心地が悪くてしようがないのだ。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。ステータスオーブン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト？」

聞かない単語に光輝が質問する。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファク

トと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

なるほど、と大半の生徒達が顔を顰めながら指先に針を少しだけ刺し浮き上がった血をプレートに擦りつけると魔法陣が淡く輝き、銀色に輝くステータスプレートが空色のプレートに変わり、数値が映し出された。

ハジメはみんなと同じように少し期待しながらその数値を見る。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 女 レベル：1

天職：錬成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：錬成・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||



と表示された。

まるでゲームのキャラクターになったようだと感じながら自分のステータスをまじまじと眺める。他の生徒たちも自分のステータスをうへくと眺めている。

日色はどうなったかな？と気になったハジメはチラリと日色を見ると日色は少し顔を顰め、うわーと若干困ったような表情をしていた。

「……………ハア」

日色は面倒臭いことになったとでも言うようにため息をついてステータスプレートを身体に近づけることで周りに見られないようにし、こっそりとプレートをなぞる様に右手の人差し指を動かした。

「ねえ、日色はどうだったの？」

そんな謎の動きをしていた日色に疑問を抱いたハジメはチョンと日色の腕を軽く触って聞いてみると日色は「あー、見てみる」と紅緋色に染まったプレートをポイツつとハジメに渡した。

人によってプレートの色は違うのかな？と自分の水色のステータスプレートを日色に渡して日色のである紅緋色のステータスプレートの数値を眺める。

|||||

神代日色 17歳 男 レベル：1

天職：筆写師

筋力：30

体力：40

耐性：35

敏捷：40

魔力：35

魔耐：30

技能：紙作成・魔力筆・本製作・高速演算・瞬間記憶・言語理解

|||||

「ハジメのステータス、完全にゲームであるような初期キャラだな」

「うう、別にいいもん！日色とは違ってファンタジーなことができるから！」

日色のステータスとの差にハジメはウガー！と怒りに任せて日色のステータスプレートを投げ渡す。至近距離から放り投げたステータスプレートは日色の人差し指と中指に挟み込まれ見事に眉一つ動かさずキャッチされた。

はいはい、落ち着けとまるで娘をあやすようにハジメは日色に宥められているとメルド団長から説明が入った。

「全員見れたか？ 説明するぞ？ まず、最初に“レベル”があるだろう？ それは各

ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

「どうやらレベルが上がればゲームのようにステータスが上がるのではないらしい。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後で、お前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。何せ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大解放だぞ！」

メルド団長の言葉から推測すると、魔物を倒しただけでステータスが一気に上昇するということはないらしい。地道に腕を磨かなければならないようだ。

「次に『天職』ってのがあるだろう？ それは言うなれば『才能』だ。末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

ハジメは自分のステータスを見る。確かに天職欄に「錬成師」とある。どうやら「錬成」というものに才能があるようだ。つまりハジメの天職は『錬成師』。日色は『筆写師』というわけなのだろう。その場合、日色才能ありすぎじゃない!?!と違ってしまおう。同時に日色だからなあと思ってしまうため内心ため息をついてしまおう。

まるでゲームのキャラクターになったような感覚にハジメは自然と頬が緩んでしまおう。

ニヤニヤとした笑みでステータスプレートを見てみると日色にうわあと少し引いた視線を向けられてしまい慌てて表情に力を入れようとすがあまり力が入らない。自分に何かしらの才能があると言われれば、やはり嬉しいものである。

しかし、メルド団長の次の言葉を聞いて喜びも吹き飛び嫌な汗が噴き出る事となった。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！ あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

この世界のレベル1の平均は10らしい。ハジメのステータスは見事に10が綺麗に並んでいる。つまりクラスメイトのステータスはハジメとは違い三桁程だということなのだ。



速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

|||||

まさにチートの権化である。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！頼もしい限りだ！」

「いや、あはは……」

団長の称賛に照れたように頭を掻く光輝。ちなみに団長のレベルは62。ステータス平均は300前後、この世界でもトップレベルの強さだ。しかし、光輝はレベル1で既に三分の一に迫っている。成長率次第では、あっさり追い抜きそうである。

ちなみに、技能⇨才能である以上、先天的なものなので増えたりはしないらしい。唯一の例外が“派生技能”だ。

これは一つの技能を長年磨き続けた末に、いわゆる“壁を越える”に至った者が取得する後天的技能である。簡単に言えば今まで出来なかつたことが、ある日突然、コツを掴んで猛烈な勢いで熟練度を増すということだ。

光輝だけならばと淡い希望を持っていたハジメだがどの生徒もステータスが平均が80を超えているのを見てその希望は粉碎された。というか他のクラスメイトのほとんどが戦闘系天職ばかりなのだが……

ハジメは自分のステータス欄にある「錬成師」を見つめる。響きから言っただろう頭を捻っても戦闘職のイメージが湧かない。技能も二つだけ。しかも一つは異世界人にデフォの技術「言語理解」だ。つまり、実質一つしかない。だんだん乾いた笑みが零れ始めるハジメ。こんなのだったら日色の方がマシだった。

そうしてメルド団長がハジメ達のところにやって来たので日色とハジメは同時にステータスプレートを見せた。

これまで見てきた全員が『神の使徒』にふさわしい力を持っていたことにほくほく顔だったメルド団長は、二人のステータスプレートを見て、「ん？」という顔になり、ぶんぶんと振ってみたり裏返してみたり。完全に現実逃避である。さらには金属製のプレートなのに光に透かそうとしてみたりといういろいろしたが、やがて現実を受け入れたらしく、凄く微妙な表情で二人にステータスプレートを返した。

「ああ、その、何だ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときに便利だとか……それと筆写師は……書士の上位職だ。紙を魔力で生み出したりできるんだが、あまり持っている者は少ない天職だな……」

「あはは、すみません。ご期待に沿えなかったみたいで」

言葉に詰まるメルド団長に、ハジメが苦笑しながらそう言う。日色も「すみません」と謝っていた。

「い、いや。そんなことないぞ？ 熟練の錬成師が作った武器はアーティファクトに負けないモノもあるし、アーティファクトの整理だってできるぞ？ それから……」

なんとかハジメをフォローしようとするメルド団長だが、ハジメは「気にしてませんよ」と言う。こういうフォローをしてくれるメルド団長はかなりいい人なのかもしれない。

日色を目の敵にしている者たちがそんな日色の欠点を見逃すはずがない、クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では日色やハジメは役立たずの可能性が大きいのだ。代表の檜山大介がニヤニヤとしながら案の定絡んできた。

「おいおい、神代。もしかしてお前、非戦系か？ 筆写師でどうやって戦うつも「そうだな、檜山。お前の言うとお前だ。と、いうわけでメルド団長、俺は訓練はやめておきます」

「え、ちょー！日色!?!」

日色を馬鹿にするように声を張り上げ、ハジメは日色が馬鹿にされていることに怒りを抱いたが檜山の言葉を遮るように静かにメルド団長へと声を掛けて、ペコツとお辞儀した後、驚きの声を上げるハジメを置いてスタスタと王城内に戻っていきこうとすると慌ててメルド団長に止められた。

「ま、待ってくれ!!確かに非戦闘系天職ではあるが戦闘ができない訳では……」

「いえ、俺の技能は完全に内政向きです。確かにハジメの錬成師のような天職だった場



合は武器などの製作に役立てますが俺のは一切役に立ちません、そんな足手纏いに訓練の時間を割くのは非効率的ですよ」

全くの正論だった。確かにハジメの錬成は戦闘で用いれば敵の足止め、行動可能範囲の制限などの補助に役立つだろう、しかし日色の技能は完全に戦闘に役立つものではない。だったらそんな天職を持った日色を置いておいて光輝などの訓練を厚くした方が効果的である。

そしてなによりも……

「……日色」

ハジメは心配そうに小さく呟いた。ハジメは気づいたのだ日色の意図に。

そう、なによりも自分が役立たずを演じていけばハジメを嘲笑われる可能性が少なくなる。

太陽が出ていれば金星を見つけることが難しいように、最も役立たずな者がいればそのもの以外を馬鹿にすることはない。日色は自ら人が必ずしも持っている優劣感を利用した自己犠牲の囿となったのだ。

しかし、そんな王城内に戻ろうとしている日色に待ったをかけた愛子先生がいた。

「神代君、気にする必要はありませんよ！先生だって非戦系？とかいう天職ですし、ステータスだってほとんど平均です。神代君と南雲ちゃんの二人だけじゃありませんか

らね！」

と声高らかに言う愛子先生、ハジメや日色を励まそうとしているようだがどう見てもフラグにしか見えない。

愛子先生はピカツつとステータスプレートを取り出して「ほらっ」とハジメと日色に見せた。

|||||

畑山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：100

魔耐：10

技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊稔天雨・言語理解

|||||

ハジメの目が死んだ。

やっぱり僕なんか……と落ち込み始め、日色に大丈夫か？と慰められていた。立場が完全に逆だと思うのは気のせいだろうか？

確かに全体のステータスは低いし、非戦系天職だろうことは一目でわかるのだが……魔力だけなら勇者に匹敵しており、技能数なら超えている。糧食問題は戦争には付きものだ。ハジメの様にいくらでも優秀な代わりがいる職業ではないのだ。つまり、愛子先生も十二分にチートだった。それを見たメルド団長も「何!? 作農師だ?! おい！ 至急、王に報告しろ！」と騒ぎ始め、兵士たちがドタドタと動き始め少し騒ぎになった。

「あらあら、愛ちゃんつたら止め刺しちゃったわね……」

「あ、あれ？ な、南雲ちゃん、大丈夫ですか!？」

反応がないハジメに雫が苦笑いを零し、香織が日色とハジメへと心配そうに駆け寄る。

愛子先生は「あれえく？」と首を傾げている。相変わらず一生懸命だが空回る愛子先生にほっこりするクラスメイト達。

日色は騒がしい周りの状況にこれからの未来のことも考えてため息を吐く。

それは自分の低いステータスのせいで差別に合うから……ではない。

チラリッと日色は周りにバレないように自分のステータスプレートをもう一度見る。



魔力は最初に見たステータスより圧倒的に上がり光輝を超えており、技能は4つも増えていたのだ。

では、何故ステータスが偽られていたのか？それは日色がステータスを見たときにコツソリと文字魔法を使っていたのだ。

文字魔法とは書いた文字の意味を現実に起こす魔法、それを日色はステータスプレートに『欺』の文字を書いたのである。

(……やれやれ、ぶつつけ本番にしてはうまくいったな)

隠した理由は勿論のこと圧倒的に高い魔力と技能、そして職業が原因だ。……いや、この場合文字使いは肩書きなのかもしれない。

できればステータスは平均程度が良かったのだが魔力を除いて平均が35というしよっぱい数値、技能なんかは論外である。文字魔法で偽れたものの、自分の未来の一寸の先は闇である。

不幸中の幸いといえば文字魔法がきちんと使えたところと日記の紙切れの心配がなくなるというところだろうか。

まあ、まずこれからのことを考えて真つ先にすべきことは――

『あの……ハジメしゃん？いい加減戻ってきて欲しいんですけど？あの、どうして上目遣いで涙目になりながら俺の袖を掴んでいるんですかねえ!!? ちょ！他の生徒に見られ



## 文字使い日記⑦

ゞ(@)ー( )(@)ノ月? ( / / ▽ / / ) ? 日

この日記を書くのも久しぶりな気がする日色です。

えーと前回から約二週間ほど経過しただろうか？基本的徹夜していたから時間感覚がわからん。

この二週間何をしていたかというとひたすらに座学と訓練を繰り返していましたよ。朝早く起きたら訓練、その後朝ご飯を食べたら座学を行い、昼ごはんを食べたら再び訓練、その後深夜まで座学という感じとなっている。ええ、気分はブラック企業の社員です。

かなりハードだと思うがまあこれは仕方がない、これも日記帳に咄嗟に書き込んだ魔法陣が原因なのだ。

トータスに飛ばされる時に現れた魔法陣の式の構成、意味、その内容を調べようと思っただけど調べても一向にわからない。王立図書館にある魔法書のジャンルに入っている書物は全て読み込んだが成果は何一つない、全くの骨折り損である。

あーないわー、マジでないわー。アイスの棒拾ったら『当たれ』と書かれているレベ

ルでないわー。

いや、まあ、わかってたけどね？そんなので地球に帰れるわけがないってことぐらい。ただどうしてもさ、淡い希望を抱いてしまっただけじゃん？だからまあ、後悔はしていない。一応、調べたことは紙に記しておこうかな？と思っただけ紙を貰おうとしたんだけどこんな時に役に立つ技能があつた。

【紙作成】とである、なんとこれらは魔力を消費することで【紙作成】は紙を、【魔力筆】はペンとインクを生み出すことができるのだ！（ババンツ!!）

ちなみに日記も【魔力筆】で書いています。

【紙作成】の能力は文字どおり紙を魔力を用いて生み出す能力である。紙の大きさによつて魔力消費が変わり、最近では画用紙ぐらいの大きさまで作れるようになった。【魔力筆】は物に文字を書くたびに魔力を消費していくものだ。ちなみに【魔力筆】50m1で魔力10を消費する。

そんなわけで二週間分の地球の帰還方法を調べた書類を纏め、技能【本製作】で本に作り変えて『地球送還魔法考察目録』と名づけた。決してクサイとは言つてはいけない。後は戦闘能力が無いハジメもできるだけ足手まといになりたくないらしく俺と一緒にメルド団長に頼みにいき、説得しに言った。

説得は見事成功、ヤツタネ、これで思う存分遊べるぞ！



……いや冗談です、きちんと体を鍛えるよ。

ハジメと一緒に体づくりを中心に一緒に他のクラスメイト達の訓練とは緩い訓練をしている。

後はまあお情け程度にハジメに比較的簡単なナイフの扱いを教えている程度である。

ハジメはメルド団長に頼んだことで国の練成師から錬成を教わっているらしく、錬成の魔法陣が書かれた手袋を自慢しに来てくれた。なんだかハガレンみたいだなと思つた、ちよつと指をパチンと鳴らしたら炎とか出せないだろうか？

いいなあ、俺もファンタジーなことしかかった。文字魔法は魔力消費が激しく3、4回で力尽きてしまうからなあ、そんなに使えないんだよ。

座学は空いた時間を使って座学の時間に教わることを全て予習しまとめたものを教師役に出すことと免除になったから一瞬で終わらした。こういう時に役に立つのが技能【瞬間記憶】である、効果は文字どおり視界に映る景色を瞬間的に覚え、忘れないというものである、完全記憶能力かよ。

そんなわけで2時間ほどで座学の内容を完璧に予習して、ハジメに理解できるように分かり易く説明し開始して6時間程でレポート的なものを提出した。……驚かれたような表情をされたけど気にしない、それよりも『地球送還魔法考察目録』を書くために調べていたからな、仕方がないことなのである。

というかハジメ、時々訓練の時に俺を人外を見るような目で見ないでくれない？泣くよ俺、泣いちやうよ？

ゞ(@)――(@)ノ月(――)日

茶色の残像が軌道を描きながら俺に襲いかかる。左足を勢いよく踏み出すことで振った木製の短刀を俺はハジメの首に手刀を軽く入れることで込められていた力を逃がし、勢いを無くす。ハジメは前回ならそのまま倒れただろうが踏みとどまって左手で殴りかかってきた。俺は右手で掴み一度軽く押したあと一気に引き寄せて体勢を崩させる。

突然体勢を崩されたハジメはまだだ、とても言うように短刀を突くが体勢が崩れているためあまり勢いに乗っていない、短刀を左手で逸らした後身体を右に寄せて足を引っ掛けて転かす。

勢いが止まらずハジメがウボアと顔面から地面に突っ込みそうになったので片手を掴んでなんとか踏みとどまらせてやり、模擬戦が終了する。

嫁入り前の娘に傷をつけさすにはいかんのだよ！(迫真)

にしてもハジメは上手くなったものだ、最初は木製の短刀を持つだけでふらついていたのに今ではかなり様になっている。何よりもこの集中力だ、座学を教えている時も訓練している時も一切思考が逸れていなかった、なんで技能に俺と同じ【集中】がなかつ

たんだらう?というかそもそも未だに「集中」の効果がわからない、何の効果を持っているんだらう?思考速度を上げるとか、黒○のバ○ケのゾーンとか入れたりするのかな?だとしたら夢が広がりんぐ。

◆ そんなわけでハジメを褒めてやると照れてくれた、とつても可愛かった。

そんな頑張ったハジメのために休憩のついでに飲み物を取りに行っていると、途中で生真面目八重樫さんが現れた。ナズエミテルンデイス!!

ギヤアアアアアアアアアア!!と叫びそうになったけどどうやら俺を殺しに来たわけではないらしい。

どうやら俺に話があるらしく少し話さないかということだった。いや、待て、確実に闇討ちに来ているぞコイツツ!!人がいないところまで俺を誘った後、背後からグサツ!つとするつもりだ!!(愕然)

そうは行くか!と断ろうとしたのだが八重樫さんのオーラが断ったら殺すと語っていた。地味に背後に無駄無駄しそうな黄金のスタンドいるような幻覚が見えてしまう。え?あれ、幻覚だよな?本当に使えるわけじゃないよね?

そんなわけで近くの日陰のベンチに八重樫さんと共に適当に座ると——(ここから先は書かれていない)

◆ 左腕が泣きそうなほど痛い件について。

ああ、クソツ、日記が書きにくい。ひとまず起こったことを書いていくことにしよう。八重樫さんに言われたことは「どうして訓練をサボっているのか」「どうして戦おうとしないのか」等と言われ、適当に答えていると何故か喧嘩を売られた。

いきなり背後からどこから取り出した二つの剣の片方を俺に渡してきて「構えなさい」だぜ!?俺を殺す気か八重樫さん!!?

アレはないわ、マジで死ぬかと思った。

いや、だって剣筋が見えないんだよ?気づいたら八重樫さんの剣が皮膚を触れているんだよ!?!死ぬ!!マジで死ぬって!!

しかし、さすがは八重樫さん、手を抜いてくれたおかげでなんとか生き残ることができた。

初めて死にかけたかもしれない、恐怖に怯えてしまったせいで元の訓練場に戻る時に八重樫さんについて何か言った気がするけどできるだけ早く八重樫さんから逃げたかったせいで何を喋ったか忘れてしまった。

そうして、身体がボロボロになりながら帰ってくるとハジメをボコボコにしている檜山グループが。

貴様ら！ウチの娘に何してんじやボケえ!!とそんなノリで立ち向かったら左腕を風の魔法でズタズタに切られたあとこんがり美味しく焼かれたよ!!

ヤバイよあいづらめつちや強いわ、正直言つて香織達が来なかつたら左腕がなくなつていたかもしれない。

え？わざわざ戦いにいつてダサいつて？うるさいわ!!（逆ギレ）

そんなわけで香織達のおかげでなんとか檜山たちを撃退すると、香織達がハジメの怪我の治療をしてくれた。え？いや、俺は？あ、回復無しですか、そうですか……泣きそう。

こつそり後で文字魔法で治しておいたけど、痛みはまだ収まらない、いや、本当に泣きそうなんですけど！

しかも追い討ちをかけるように八重樫さんが忘れ物つて俺の日記を持ってきたんだよ!!

え？八重樫さん？見ちやった？もしかして日記見ちやったの？

そうだったら自殺しようと思いながら聞いてみるとどうやら見ていないらしい。もしかして気遣つてる？と思つたけどどうやら本当らしい。よかった、恥ずかしさに悶絶死するところだった。

ああ、もう、本当に俺、地球に生きて帰れるかなあ（涙目）

俺は今日もそんなことを考えながらトボトボと元の訓練場所に戻っていく。あ、ちなみに日記には俺以外に見られないように『封』の魔法をかけることにした。一々日記を書くときに『解』の魔法を使わなければならなくなったがこれは仕方ないだろう。

そしてようやく訓練時間が終わり、ようやく夕食の時間まで休めると自分の部屋に戻ろうとしているとメルド団長に伝えたいことがあると引き止められた。何事かと注目する生徒達に、メルド団長は野太い声で告げた。

「明日から、実戦訓練の一環として『オルクス大迷宮』へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！ まあ、要するに気合入れろってことだ！ 今日はずっくり休めよ！ では、解散！」

そう言って伝えることだけ伝えるときつきさで行ってしまった。ざわざわと喧騒に包まれる生徒達の中、俺は小さくこう思った。

……やっぱり、俺は地球に生きて戻れないかもしれない。

## 無能ちゃんは今日も頑張る

日色が訓練に参加しません発言をし、ハジメが自分の最弱ぶりと役立たず具合を突きつけられた日から約二週間が経過した。

ハジメはこの二週間の間何をしていたかというとひたすら座学と訓練を日色と二人きりで永遠と繰り返していたのだ。何故、ハジメと日色が二人だけで訓練しているかというところあのハジメと日色が役立たずだと認識された日、結局辞退は拒否され訓練を強制参加させられることとなった日色は真つ先にメルド団長に座学と訓練の自習を頼んだのだ、主に記憶することに長けている技能を持つ日色は知識面と技能で役に立ちたいのでその時間が欲しいと。

それに釣られたのがハジメである、僕も役立たずなので技能と座学を鍛える時間を下さいと日色に便乗して頼み込んだ。何やってんだお前！と日色に見られた気がするがハジメからすれば日色と離れないことが最も重要なことなのだそんなことは気にしないのである。

そんなハジメ達の説得(笑)に心を動かされたメルド団長は「お前らの姿勢は素晴らしいぞ!!」と大感激、滅茶苦茶張り切って行動を起こしてくれたおかげでハジメは錬成

の魔法がついている手袋を貰い、国の練成師に錬成を教わることとなった。ちなみに日色は王城から大解放された武器庫から雫と同じの刀に似た片刃の剣を適当に見繕っていた。

座学の時間は予習したものを纏め教師役の人に提出すれば免除してやると言われ、ここで活躍したのが日色である。技能「瞬間記憶」を用いて座学の内容を開始初日の三時間程で全てを予習し、残りの時間をハジメに教える時間となってしまうた。

訓練の時間では座学に時間を使うため他のクラスメイト達より訓練時間が少なくなってしまうため日色が考えた体力作りを重視した訓練を行い、余った時間を比較的扱いやすいナイフを日色がハジメに教えることとなった。

そんな訓練の中ハジメはかなりの集中力で行っていた、日色に足手まといなどといわれたくないためにだ。

そんなハジメのステータスがこちらである。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 女 レベル：2

天職：錬成師

筋力：18

体力：18



耐性：18

敏捷：18

魔力：18

魔耐：18

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+高速錬成」、言語理解

ハジメは寝る間も惜しんで錬成を日頃から行っていたことで「+高速錬成」という派生技能を手に入れたことにより錬成速度が格段に早くなり錬成範囲がかなり広くなり落とし穴程度なら作れるようになった。最近は日色に「細かい錬成もできるように努力すればどうだ？」と言われたため石などを錬成してコップのような形を作ろうと思っているのだが中に空間を生み出すことが難しく行き詰っていた。

ちなみに日色はこんな感じ。

神代日色 17歳 男 レベル：2

天職：筆写師

筋力：38

体力：47

耐性：43

敏捷：49

魔力：250

魔耐：37

技能：紙作成「+作業効率上昇」・魔力筆「+消費魔力減少」・本製作・高速演算・瞬間記憶・言語理解・文字魔法「+一文字開放」・剣術・集中・限界突破・言語理解

日色もハジメに劣らずステータスが上がっていた。まあ隠していた技能たちは使っていないため特筆するような変化がなかったが。

ハジメは自分が少しずつだが日色に近づけていることに喜んで——後に明かされた光輝のステータスを見て泣きたくなった。

天の河光輝 17歳 男 レベル：10

天職：勇者

筋力：200

体力：200

耐性：200

敏捷：200

魔力：200

魔耐：200

技能：全属性適性・耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読

高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

|||||

ざっとハジメの成長速度の約五倍である。

ついでに言えばハジメや日色（そもそも日色はいらなと思うが）には魔法適性が無いことがわかった。

魔法適性がないとはどういうことか。それはこの世界における魔法の概念を少し説明しなければならぬ。

トータスにおける魔法は、体内の魔力を詠唱により魔法陣に注ぎ込み、魔法陣に組み込まれた式通りの魔法が発動するというプロセスを経る。魔力を直接操作することは出来ず、どのような効果の魔法を使うかによって正しく魔法陣を構築しなければならぬ。

そして、詠唱の長さに比例して流し込める魔力は多くなり、魔力量に比例して威力や効果も上がっていく。また、効果の複雑さや規模に比例して魔法陣に書き込む式も多く

なる為それは必然的に魔法陣自体も大きくなるという事に繋がってしまったのだ。

例えば、RPG等で定番の「火球」を直進で放つだけでも、一般に直径十センチほどの魔法陣が必要になってしまう。基本は、属性・威力・射程・範囲・魔力吸収（体内から魔力を吸い取る）の式が必要で、後は誘導性や持続時間等付加要素が付く度に式を加えていき魔法陣が大きくなるということだ。

しかし、この原則にも例外がある。それが適性だ。

適性とは、言ってみれば体質によりどれくらい式を省略できるかという問題である。例えば、火属性の適性があれば、式に属性を書き込む必要はなく、その分式を小さくできると言った具合だ。この省略はイメージによって補完される為、式を書き込む必要がない代わりに、詠唱時に火をイメージすることで魔法に火属性が付加されるのである。

大抵の人間は何らかの適性を持っているため、上記の直径十センチ以下が平均であるのだが、ハジメの場合、全く適性がないことから、基本五式に加え速度や弾道・拡散率・収束率等事細かに式を書かなければならなかった。そのため、「火球」一発放つのに直径二メートル近い魔法陣を必要としてしまい、実戦では全く使える代物ではなかったのだ。

余談だが魔法陣は、一般には特殊な紙を使った使い捨てタイプか、鉱物に刻むタイプの二つがある。前者は、バリエーションは豊かになるが一回の使い捨てで威力も落ち

る。後者は嵩張るので種類は持てないが、何度でも使えて威力も十全というメリット・デメリットがある。イシユタル達神官が持っていた錫杖は後者だ。

え？日色はどうかだって？火球のような魔法を使う場合は——  
 魔力を人差し指に貯めます。

← 『炎』という文字を地面に描きます。

← 『火球』の何倍も威力のある火炎が舞います。

以上だ。しかし確かに日色の文字魔法はチートなのだが魔力消費が激しく数回しか使えない、一回でステータスで表すと魔力を60も消費してしまうのだ。

しかもハジメの場合敵の眼前でしゃがみ込み、地面に手を突くという自殺行為をしなければならず、日色の場合どこかに指を着けて文字を書かなければならないという決定的な隙が生まれてしまい結局のところ戦闘では役立たずであることに変わりはない。

正直言つて才能の差に嫉妬してしまいそうになるハジメだった。

そんなハジメは現在訓練の休憩時間を利用して王立図書館にて調べ物をしている。その手には『北大陸魔物大図鑑』という何の捻りもないタイトル通りの巨大な図鑑があった。

ハジメは人間に敵対する魔人族ついて調べようとしているのだが、『邪悪で狡猾』とか『神敵である』といった曖昧な情報しかなかったので、こうして別種族のことに移行したというわけである。

ハジメはこれも神が関係しているのだろうと予想していた、おそらくだが信仰の妨げになるような情報は一切書かれていないのだろう。

この二週間で主にハジメが日色と離れたくなくてでしゃばったのが原因だがハジメは『無能』日色は『能無し』というレッテルを貼られてしまった。

もういつそ日色と一緒に、旅にでも出たしまおうかと、図書館の窓から見える青空をボーと眺めながら思う。大分末期である。ハジメはもし行くなら何処に行こうかと、ここ二週間頑張った座学知識を頭の中に展開しながら物思いに耽り始めた。

(やつぱり、亜人の国には行ってみたいなあ。ケモミミを見ずして異世界トリップは語れないし……でも『樹海』の奥地なんだよなあ。何か被差別種族だから奴隷以外、まづ外では見つからないらしい。流石に奴隷として見るのはちよつと……)

ハジメも年頃の女の子、ヲタクであるのも含めてそつち系のことはあまり妄想はしたくないのである。

ハジメの知識通り、亜人族は被差別種族であり、基本的に大陸東側に南北に渡って広がる【ハルツィナ樹海】の深部に引き籠っている。なぜ、差別されているのかというところ

彼等が一切魔力を持っていないからだ。

神代において、エヒトを始めとする神々は神代魔法にてこの世界を創ったと言い伝えられている。そして、現在使用されている魔法は、その劣化版のようなものと認識されている。それ故、魔法は神からのギフトであるという価値観が強いのだ。もちろん、聖教教会がそう教えているのだが。

そのような事情から魔力を一切持たず魔法が使えない種族である亜人族は神から見放された悲しき種族と考えられているのである。

じゃあ、魔物はどうなるんだよ？ ということだが、魔物はあくまで自然災害的なものとして認識されており、神の恩恵を受けるものとは考えられていない。唯の害獣らしい。何とも都合解釈なことだと、ハジメは内心呆れた。

なお、魔人族は聖教教会の「エヒト様」とは別の神を崇めているらしいが、基本的な亜人に対する考え方は同じらしい。

この魔人族は、全員が高い魔法適性を持っており、人間族より遥かに短い詠唱と小さな魔法陣で強力な魔法を繰り出すらしい。数は少ないが、南大陸中央にある魔人の王国ガールランドでは、子供まで相当強力な攻撃魔法を放てるようで、ある意味、国民総戦士の国と言えるかもしれない。

人間族は、崇める神の違いから魔人族を仇敵と定め（聖教教会の教え）、神に愛されて

いないと亜人族を差別する。魔人族も同じだ。亜人族は、もう放っておいてくれといった感じだろうか？ どの種族も実に排他的である。

そんなことを思っていると訓練の時間が迫ってきたようだ。『北大陸魔物大図鑑』を日色にちゃんと本を大切にしろなどと昔言われた為、傷がつかないように読んでいた本を片付け、すっかり顔なじみになってしまった司書に挨拶をした後、図書館を出て、訓練場へと向かっていった。

◆ ハジメは右手に木製の短刀を持って目の前の3メートル先にいる日色と対峙していた。

対してヒイロは左腰に刀に似ている片刃の剣を腰に差しているが一向に抜く気配がない。

ハジメが日色にナイフの扱い方を教えてもらう時、2週間の間一度も日色は剣を抜いたことはなく毎度毎度無手でハジメは取り押さえられてしまうのだ。

しかしそれも今日で終わりだ、ハジメはその気持ちで日色へと飛びかかった。

日色との距離を4歩で詰め、勢いよく突きに掛かる。空気を裂くように突かれた短刀は日色に直撃する前に日色が半身を下げながら半歩下げること掠りもせず避けられる。しかしハジメは避けられることをこの二週間で悟っていたのか左手で裏拳を放



つ。日色を殴ろうとするのはかなり気が引け、未だに当たる直前で躊躇してしまふ。

日色は当たる寸前で勢いがなくなつたことに気づいたのかハアと小さくため息をつき片手で裏拳を掬い上げていなされてしまふ。

「やあつー！」

ハジメは左手が掬い上げられるあいだに右手の短刀を戻し右から左へと切りかかる。日色はハジメの手首に軽く手刀を入れることで手首の関節が曲がり力の勢いがなくなつてしまふ。勢いを乗せて切りかかつてきたからだろう勢いが逃がされたことで身体の体勢が崩れそうになつてしまふ。

「ッ、のッ!!」

なんとか踏みとどまつて左手で殴りかかるが日色によって絡め取られるように右手で左腕を取り押さえられてしまふ。日色は一度軽く前に押したあと一気に引き寄せてハジメの体勢を崩させる。

突然体勢を崩されたハジメはまだだ、とでも言うように短刀を突くが体勢が崩れていするためあまり勢いに乗っていない、日色は短刀を左手で逸らした後身体を右に寄せて足を引つ掛けて転がす。

「え? あ、きやッ!!?」

「ほらよ」

勢いが止まらずハジメがウボアと顔面から地面に突っ込みそうになったが日色がその直前で左手を片手を掴んでなんとか踏みとどまらせてやり、模擬戦が終了する。

「うう、また負けた……」

「ハツ、流石に初めて二週間の相手に負けるわけ無いだろうに」

訓練場の隅の隅で悪態をつきながらショボンと落ち込んでいるハジメに日色は飲み物を飲みながらタオルをかけてやる。

「まあ、だとしてもハジメはかなり上手くなったな」

「そ、そう……かな？」

「ああ、最初の頃のあのフラフラしていた頃とは違って……ククツ」

「ちよー思い出さないでよー！」

日色が初日の頃を思い出して突如笑い出すとハジメが顔を真っ赤にしてイヤイヤと恥ずかしがる。ハジメが日色にナイフ術を教えてもらおうとした時、試しに振ってみるといった日色の指示通り振ってみると木製の短刀が手からすっぽ抜け頭に直撃するという間抜けなことが起こったのだ。ちなみにハジメがあまりの痛さに半泣きしかけバツチリ黒歴史入り確定である。

うがーとその頃を思い出し恥ずかしがっているハジメをニヤニヤと見ていると日色はある事に気がついた。

「ん？ハジメ、お前飲み物はどうした？」

「あ……そういえば近くのベンチに忘れてた」

慌てて取りに行こうとするハジメに日色は頭をポフツとおいて、「俺が取りに行つてやるから休んでろ」とハジメに有無も言わず休ませてスタスタと訓練場から出て行つた。



「……あつた、これか」

日色は訓練場から出て、歩いて30メートル程先にあるベンチに置かれてある飲み物を手にとつて小さく溜息をつく。まさか近くのベンチにあると言つていたが何処にあるのか知らなかった為、5分も探すのにかかるとは思わなかった。日色は自分の無計画さに呆れてしまふがまあ、いいかと気を取り直す。別に日色は時間厳守させる様なマメな男では無いのだ。

それじゃあ、さつさと戻るかと言ふと日色は振り向いて――

「こんな所にいたのね、日色」

聞こえてきた声の主を察して日色はめんどくさい奴に出会つたとしても言うような表情をとつた。

振り向いた日色の目の前に、此方を見て立っている八重樫雫が立っていた。

「……わざわざ、こんな【能無し】に何の用だ、ポニー？あのテンプレ勇者率いる主力パーティの一人であるお前はこんな【能無し】に関わる時間などないはずだが？」

「その能無しさんが訓練を他の生徒より怠っている、つていう噂を聞いたから見に来たのよ」

「後いい加減、雫って呼びなさい」という雫に日色は面倒臭いとしても言うようにハア、と溜息を吐いた。日色は八重樫雫が苦手である、決して嫌いというわけではないが雫は香織と同じように関わると厄介ごとしか起きず、何よりも――

『ギヤアアアアアアアア!!妖怪首おいてけが現れたアああああ!!?!』

……何よりも出会うたびに命の危険を感じてしまうからである。そんなのはっっちゃけた内心は放っておいて、日色は嘲笑うように雫へと言い返した。

「ハッ、仕方ないだろう？俺はクラスメイトよりステータスが低く、成長速度もあのテンプレ勇者の五分の一だ、そんなんだつたら訓練するやる気も無くなるに決まっているだろう？」

日色は笑って両手を上に上げてヒラヒラとさせる、不真面目に見えるように、やる気がないように見えるように。

その言葉が雫に突き刺さり――

「嘘をつかないで」

——一刀両断とでも言うように否定された。

「……………は？何言つてんだお前？」

「じゃあどうして南雲ちゃんに訓練で構ってあげるのかしら？」

微かに怪訝な表情をした日色へと雫は疑問を投げかけ、彼の思惑を暴いていく。

「……………」

日色は答えない、いや、この場合は答えたくない、が正しいのだろう。

「日色、あなた、わざわざ不真面目なように装っているわね。南雲ちゃんに矛先があまり向かないように」

「……………っ」

日色の表情が一瞬微かに歪む、その表情を見て、やつぱりと雫は確信する。

この男は、彼は、日色は、ハジメのために自ら囚になろうと演じているのだ。

「南雲ちゃんと一緒に訓練をしているのは他人よりステータスが低いからじゃない、南雲ちゃんがクラスメイト達に足手纏いと思われないように教えているんでしょう？」

それが日色の目的だった。ハジメが日色と同じ訓練をしたいと言ってきた時、日色は逆にこれをチャンスだと思ったのだ。

短刀の技術を教えることで彼女を足手纏いという認識から外させようとしたのだ。

そもそも武術とは弱者が強者に勝つための技術なのだから。

まあ、当の本人の内心は『錬成を頑張らせるのもいいけど護身に教えるのもいいよね』と全く見当違いのことを考えていたのだが。

その言葉に日色は、一瞬何かを思い、ハッ！と笑い飛ばした。

「面白い妄想するな、ポニー。だが、それは俺がクラスメイト達に勝てるというのが前提のはずだろ？生憎といくら俺でもそれは不可能だ。……もういいだろう？俺はハジメのところに戻らなければならぬんだからな」

そう、ハジメがクラスメイト達に「無能」という認識を変えるには最低でもクラスメイト達に互角で戦えるほどではなければならぬ。しかしクラスメイト達の大半が戦闘職に戦闘向けの技能を持っているのだ、もしハジメがクラスメイト達に戦うとなれば戦闘向けの技能なしで戦わなければならない、従ってハジメに技術を教えるにしても日色が勝てなければならぬのが前提条件なのだ。

日色はそう言ったあとスタスタと元の訓練場へと帰っていく。よし、これで逃げれる！などと内心思っていた日色は次の瞬間、カチャリと自分の背中に冷たい鉄の感触を感じたことで止まってしまった。

「そうね、構えなさい、日色。今から試してみましようか」

「……はっ。」

つい振り向いてみれば雫はイイ笑顔でこちらを見ていた。そう、とつてもイイ笑顔

で。

「私も久しぶりに剣道の立ち会いをしてみたくなつたのよ、貴方が私に勝てたら日色も南雲ちゃんが【無能】なんて肩書きをなくせれる可能性もあるでしょう？」

「……お前、もしかしてこれを機に俺に勝とうとしているんじゃないか——（カチャリ）……わかった、やろう」

日色は雫に言葉を零しそうになつたが言葉の途中で剣を構えられたので日色は了承する。人はこのようなことを脅迫というのではないだろうか？

自分の剣は元の訓練場に忘れてしまつていたのでそれを理由に断ろうと一瞬思ったが雫がもう一つの剣を渡してきたので無駄だろうと察した。

そんなわけで日色対雫という剣道での久しぶりの対決が始まったのだった。

## スティータス差

技能とは才能を表している。剣術の技能があれば剣を振るう才能が、槍術の技能があれば槍を扱う才能があるように。

では、一つ疑問を浮かべてしまいが技能があるだけでその技能の技術は上がるのだろうか？

答えは否だ。技能とは、いうならば道のりを短縮できるショートカット用のチケツトの様なものだ。技能を持つていない者より同じ練習内容でコツを早く掴み、上達し易くなるというものだろう。『天翔閃』などという物理法則に喧嘩を売っているトンデモ技は魔力を用いてある程度上達した技能を合わせて起こす技なのではないかと日色は仮定している。

だからこそ日色は転移前で学んだ剣の技術は竹刀を握ったこともないクラスメイト達に対して大きな優位性アドバンテージが生まれる為決して無駄なものではないと思っていた。

決して油断しているわけではないがクラスメイト達にある程度戦えるだろうと、日色は思っていた。

だが、日色は一つのことを忘れていた。



◆ ステータスの差という溝は決してそう簡単に埋めれるものではないということ。

日色は剣を構えて二メートル先にいる雫に一瞬の目を逸らさず立ち会っていた。

両者の構えた剣は少しの震えも無く、目の前の相手を指し示し続けている。

「……行くわよ」

「……来い」

そして、次の瞬間。雫が勢いよく地面を滑らすように足を踏み出して――

――文字通り日色の視界から消えた。

「ツッ?!」

閃光が空中を奔る。

咄嗟に日色は上体を倒れるように仰向けになることで間一髪、鼻先を掠めるように数センチ先の空気を裂くように剣が通り抜けていく。

「うッ……そだろ、おい!」

慌てて後転の要領で地面に手をつき、後方に下がり距離を稼ごうとするが顔を上げた途端目の前に雫が現れ、剣が日色へと振り下ろされた。

咄嗟に剣を構え受け止めるが――

(お……もいつ！)

腕に襲いかかる衝撃は地球との比では無い、体感では地球での光輝の剣戟の3倍の重さを感じている。日色は仕方なく剣を傾けることで剣の腹を滑らし雫の剣をいなし、お返しとばかりに振るうが雫はいつのまにか日色の射程外に移動しており、日色の剣は空気を裂くだけだ。

「……【縮地】か、非戦闘職の俺にそれはズルくないか？」

「その【縮地】に反応できる貴方が何を言っているの……よッ！」

【縮地】それは文字通り一瞬にして距離を詰める高速移動の技能である、しかも移動距離が短い代わりにその速度は低スペックな日色では視認はほぼ不可能である。

再び摺り足による重心移動で素早く、そして滑らかに距離を詰めてくる雫。その速度は最早正確の捉えることなど不可能だ、一息で三メートルの距離を詰められ、飛び跳ねるように剣が跳ね上がり日色の首筋へと襲いかかる。

「クソッ、少しは手加減しろ！」

確かに剣の刃は潰されているがそれでも鉄であるのは変わらない、おそらく雫はこの程度の攻撃は日色がなんとか凌いでくれるだろうと信用しているのだろうだが日色からすればたまったものではない。

咄嗟に日色は剣の腹を斜めに傾けながら盾にし、全身を沈みこませることによって襲

いかかる衝撃を上へと逃して行く。雫との身体能力の差はもう体感している、彼女ともどもに打ち合えば確実にこちらが押し負け、避けようとしても身体能力の差でいつか捉えられてしまうだろう。だからこそ、日色は剣を受け流すことでしか対処することが出来ないのだ。

まあ、それでもステータスが約4、5倍の差がある相手に戦えること自体日色の異常性がわかるのだが。

受け流し、いなし、逸らし、偶に反撃する。

元々剣術の才能があつた雫の猛攻は例え日色でもそう簡単に捌けるものではない。

ガキゴッコツキカキキカキコツカガギガキツ!!と連続で響き渡る金属音が日色の耳に入り込んでくる。

(チツ、このままだったらジリ貧だ、勝負を仕掛けなければ負けるな)

そう思いながら舌打ちをして何度目かもわからない襲いかかる横薙ぎの斬撃を後ろに跳ぶことで避け、日色は雫から距離を離す。

しかし――

「甘いわよっ!」

――日色が次の行動に出る為に足を地面につける前にその距離を踏み越えた雫が剣を勢いよく突いてくる。

日色はまだ地面に着いていない、剣が突き刺さる前に地面を着くことは出来るがそこから左右に避ける事は出来ない。例え自分の剣で防ごうとしても軌道を少し逸らすことしかできず日色に当たるのは間違いないだろう。

だが日色は――

(それを――)

「――待つてたんだよ!」

襲いかかる剣の腹を左手で叩くことで方向を逸らしたのだ。逸らされた剣は日色の頬の横を突き抜けてしまっただけだった。

「なっ!」

勢いを乗せた突きを外されたことで僅かながら体勢が崩れてしまっ。日色はその隙を逃す程間抜けではない、剣を雫の肩目掛けて振り下ろす。一応当たる直前で止めるつもりだが念のために剣の腹で攻撃をしている、例え直撃したとしても打撲程度で天職が治癒師である香織に頼めばすぐに回復してくれるだろう。

そうして振り下ろされた剣は雫の服に触れ――

「まだよっ!」

――咄嗟に雫が日色の背後へと【縮地】を使ったことで何も無い空間を振るうだけだった。

「ッー」

まさか避けられるとは思ひもしなかったのだろう、日色の体勢が前のめりに傾き、決定的な隙を生んでしまった。日色の背後をとった雫はその隙を逃さず斬りかかる。

勝った、と雫は思った。日色はまだ体勢を崩したままだ、そんな状況で背後の攻撃に咄嗟に避けられるわけがない後は日色に当たる直前で止めれば――

(……………え?)

そして次の瞬間、雫の思考が停止した。

停止した思考とは裏腹に加速された感覚の中でゆつくりと肉体は日色に向かって剣を振り下ろしていた。

では何故雫の思考が停止したのか?それは日色の体勢が既に「天閃」の抜刀体勢に入っていたからである。

そう、日色は剣を振り下ろしたのではない、雫が反応して避けてくれるだろうと信頼し、剣を下げ抜刀体勢に入っただけなのだ。

もし日色の振り下ろしを【縮地】で日色の背後に回らなかつたら、いや、そもそも剣を盾に受け止めてしまえば間違はなく雫が勝っていただろう。目の前で剣を収めるのだ、決定的な隙を見せてしまうのだから、しかし、それは【縮地】により背後に回られてしまった場合は話は違う。

【縮地】とは言うならばジャンプと一緒にある、指定した短距離を高速で動き移動する。逆に言えば足に踏みしめるものがなければ使えないのだ。

つまり、それは日色のわざと生み出した隙が消滅することを意味する。

気づいてしまってももう遅い、日色の左足が地面を力強く踏みしめ、身体を高速で旋回させ背後へと振り抜きざまに抜刀する。

「——ッ!!」

【天閃】

今までの金属音とは違う一際甲高い金属音がキーンと響き渡った。



「ハア、まったたく。こっちは貴方よりステータスが高いのに負けるなんて……」

遠くに跳ね飛ばされた剣をちらりと見てやれやれと呆れる雫を見ながら日色はめんどくさいことをしたとでもいうように不機嫌な表情をとっていた。

「……それで？俺にわざわざ立ち会いを誘った本当の理由はなんだ？どうせお前のことだ、大方別の理由があるんだろう？」

その日色の言葉に雫は少し目を見開いてやっぱバレちゃったわねとでも言うように「……ええ」と眩き、真剣な表情で日色を見つめた。

「私はあなたに自信を持ってもらいたかったのよ」

「……………は？」

疑問の言葉を零す日色。

「【能無し】【無能】貴方達が役立たずっていう噂が王城中に広まっているのは知っているでしょ？」

「……………ああ」

日色は少し顔を不機嫌に歪ませながら頷く。本来なら【能無し】という肩書きで終わらすつもりだったのだがどこかのありふれた少女が原因で肩書きがもうひとつ増えてしまったことを思い出しているようだ。

「でも日色も南雲ちゃんも私たちの仲間なのよ。貴方達が馬鹿にされているのに我慢できるとは思えないじゃない」

「……………」

これが雫が日色に立ち会いを求めた理由だった。

雫は許せなかったのだ、役立たずだと言われ、無能だと言われ、それでも片方は努力を怠らず自分の出来ることを鍛え、もう片方はわざと無能を演じることでもう一人を助けようとしている彼達を馬鹿にし、貶している者たちが。

日色の思惑に気づいていたのは決してハジメだけではなかった、雫もきつと気づいていたのだ。

気づいていたから、いや、気づいてしまったからこそ葛藤していたのだろう。日色達  
の役には立ちたいが日色に関わってしまったら日色の目的を達することができない。

その葛藤は一体どれほどのものだったのだろうか？

「……………」

日色は黙っていた。

それは雫の葛藤に気づくことの出来なかった自分の無力さに嘆いているのか、それと  
もただ単に殺される恐怖でなにも喋ることができないのか。

「皆で一緒に地球に帰る、それが私たちの目標でしょう？ 私も日色の仲間なのよ？ 私に  
も背負わせてよ……………」

そう言つて雫は日色の胸の服を掴んで上目遣いで日色を見つめた。日色はそんな雫  
を見てハアと溜息を吐いた。

そして――

「……………え？」

——ポンツと雫の頭を撫で、小さく呟いた。

「……………善処しよう」

そう言つて日色は雫の頭に乗せていた手を離し、「じゃあ、そろそろ戻ってもいいか  
？」と言葉を零す。



その言葉に一瞬慰めてくれるのかと期待した雫はガクツと力が抜けかけるが、まあ、これも日色らしいといえれば日色らしいわねと思つて小さく溜息を吐き、小さく手を離れた。

日色はようやく解放されたとも言うようにスタスタと元の訓練場の方向へ戻つていくがふと、思い出したかのように立ち止まり振り向かずに雫へとポツリと言つた。

「なあ、雫。もし、こんな役立たずが仲間を見捨てて一人勝手に王城から逃げ出したらクラスメイト達はどう思うんだろうな……？」

「……………え？」

ポツリと零された言葉に雫は自分の耳を疑うが、その間に日色はスタスタと去つていった。

さつき言葉はどういうことだろうか？

さつき呟いた日色の言葉の意味を必死に雫は探ろうとするが一向に答えがわからない。

ああ、もう！とどうにかぐるぐると回り続ける思考を打ち切つた雫はふとベンチの方向を見るとベンチの下には日色がよく使つていた日記が落ちていた。どうやら雫と立ち会いをした時にポトリと落としてしまったようだ。

雫は後で日色に渡しておこうかしらと日記を拾い、ふと見つめる。

日記は長年使っていたからなのか革が少し色褪せているが、手入れされているため依然と問題なく使えるようだ。

雫は日記の表裏を眺め、日記が勝手に開かれないように固定されているゴム紐に指を近づけ――

「……ハッ！」

――慌てて自分が何をしようとしているのかに気づき、慌てて近づけた指を止める。

（お、落ち着きなさい！八重樫雫！わ、私は一体何をしているのッ！他人の日記を盗み見ようなんて決して許せないわ！……で、でも少しぐらいなら……い、いえ！ここで誰かに見られたら変な誤解をされるわっ！それに日色の信用も……あれ？そういえば私、さつき日色に雫って呼ばれてなかった……？――ッ!!?)

お前もかブルータス。

どこかデジャヴを感じるような状況にどこからかそのような電波が送られた。

雫はまるで信号機のように顔色を赤青と変化させながらウガァー！と声無き絶叫をあげる。わたしはどうすればいいのよッ!!とでも言うように身体を震わせて雫は迷い続ける。

ちなみにこの状況は香織達に声をかけられるまで十分程続いたのだが、後に雫は後悔した。あの時、日色にさつきと日記を返しに行けばよかったと。

## 南雲ハジメという少女とは 上

クラスメイト達が訓練している訓練場の角の隅でハジメはタオルを肩に掛けながら体育座りで日色の帰りを待っていた。

身体は未だに熱っているがタオルで拭き、休んでいることで汗はもう引いたらしい。

しかし、それでもハジメの顔色は少し悪く、溜息ばかり吐いていた。なぜなら——  
「チツ。【無能】の癖に、なんでまだ訓練場に居るんだよ」

「ホント最悪、早く何処かに行ってくれないかしら？」

——度々生徒達の非難の声が聞こえてくるからだ。

理由なんて考えなくてもわかっている自分が【無能】だからだ。ついでに言えばハジメや日色だけが別の訓練を受け、座学を免除されたりすることもハジメに対する不快感が高まっている理由の一つだ。

ハジメはそんな言葉をまるで他人事のように聞き流していく、この程度の悪口なら昔から聞き慣れているのだ、間に受けてはいけない。だってハジメにとってあの生徒達は

『——ボク達にとつては存在すら興味が無いから、でしょ?』

——どこからか聞こえた謎の声にハジメは歯を食いしばってうるさい、と内心言葉を零す。

まただとハジメは苛立つ気持ちを吐き出すように溜息をつく、この幻聴は日色に出会って以来自分に嘔きかけて来なくなつたが再び自分に嘔きかけてきたようだ。

『ねえ、どうして殺さないの? 君にとつてあいづらは邪魔でしょ? ねえ、邪魔なものは取り除かなくちゃ! ねえねえねえ!』

「……黙れ」

ハジメは自分の脳内に嘔きかけ続ける声に冷たく誰にも聞こえないほどの大ききで眩く。その声にハジメに嘔きかけてきた幻聴はまるで最初からなかつたことのように鳴り潜めた為、ハジメはようやく静かになつたと溜息を吐く。

日色が早く帰つてこないかな、と思うがそもそも日色に飲み物が明確にどこにあるのか言つていながつたことに気づき、しまったと頭を抱えた。きつと日色がまだ帰つてこない理由は飲み物を王城の中で片つ端から探し回っているに違いないだろう。

(僕のバカ!あの優しい日色ならこうなるだろうと分かっていたのに!!あの時に明確に言つていればよかつた!)

ハジメは体育座りから立ち上がり、つて訓練場から日色を探すために出て行った。

◆ ハジメは訓練場を出て飲み物を置いた場所へと向かうため、近道として訓練場の裏側を通って近道をしていた。

ここから自分が飲み物を置いてきたベンチに向かうには裏側から向かった方が格段に早いはずだ。

そう思いながらハジメは訓練場の裏場を進んでいると――

「おっ、無能君じゃ〜ん?」

「マジで? ホントだ。おーい、む・の・う・ちやーん! 何してんのおー?」

「もうすぐ訓練の時間だけど……ああ、悪い悪い、お前が訓練とか、するだけ無駄だよな。なんせ、無能何だし?」

――唐突にバツタリと檜山グループに出会いそんな声が投げかけられる。げらげらと下品な笑いと共に放たれる、聞くに堪えない醜悪な言葉に数々。顔を見ずとも分かる。檜山たちだ。

またか、とハジメは内心溜息を吐くトータスに飛ばされて以来檜山グループのいじめが活発になってきたのだ。日色という時やハジメが一人だった時、おそらくだが日色が一人の時もこの檜山グループはこのように醜悪な言葉を投げかけているのだろう。

しかし、所詮いじめだ。ハジメはまるで聞こえていないようにスルーし、その場から離れようとする。

いじめとは、相手が反応するから面白いのだ。まるで無反応の相手をいじめても、何の楽しみもない。昔からいじめをくらっているハジメにとってこのようないじめは昔からよくあつたのだ。この程度はどうってこともない。

その内檜山たちも飽きて何も言わなくなるだろうと、無視を決め込み、無言でその場から離れようとする。次の瞬間。

「てめえ！無能の分際で無視してんじゃねえよ！」

「ッ！」

背後から感じた衝撃でハジメは吹き飛ばされゴロゴロと地面を転がった。

とつさに受け身をとったのでそこまで痛くはない……が、服は砂埃で汚れてしまった。

「……（いっとう、痛い。今あいつらは魔法を使ったの……？何処か火傷はしてないからおそらく風の魔法だけど……メルドさんに魔法は人に向けちゃいけないって言われているのにッ！）」

「ギャハハ！無様だねえ、む・の・う・ちゃ・ん♪その程度の魔法でそんなに吹っ飛ばさなくて！」

「ほらほら、大好きな王子様でも助けに呼んでみるよ!!」

倒れたハジメに檜山たちが嘲笑を浴びせるがハジメの耳にはそれらの声は一切聞いていない、完全な無表情で地面に手をつけて起き上がろうとする。

「そら……よっ!」

「ゴホッ!」

しかし、檜山が勢いよくハジメの腹を蹴り飛ばしたことでハジメの肺の空気が吐き出され、再び吹き飛ばされ地面をゴロゴロと転がることとなったステータス差によりかなり痛い衝撃が奔ったがもともと痛み慣れているハジメである。めんどくさいなあと思いつつながら腹を抑え再び立ち上がろうとする。というか、年頃の女の子の腹を勢いよく蹴り飛ばす彼らの思考は少しおかしいのではないだろうか？

「オイ、無能。何役たたずな分際で無視しようとしてんの? ああ?」

「……………ッ……………」

倒れたハジメの手を檜山が踏みつけるが小さくと息を吐いただけで何も感じてないように何も喋らない。

「黙ってんじゃねえよ!」

「アグッ!」

檜山は苛立ったようにハジメの肩を掴み勢いよく右手でハジメの顔面を殴り飛ばし

た。

ハジメは一切の抵抗をせず殴り飛ばされ、地面を無様に転がり、浅く息を吐く。殴られた衝撃で髪留めが飛んでいき留めていた髪が垂れ下がってハジメの瞳を隠した。

ハジメは痛みで震える体で何とか立ち上がり、冷め切った瞳を一片も逸らさず檜山を見つめる。

その瞳に一瞬檜山は「……うつ」とたじろいてしまう。それを見たハジメは空っぽな平坦な声でこう言った。

「あのさ……邪魔しないでくれる？僕は君に構っている場合じゃないんだよ」

「……ツ！調子乗ってんじゃねえぞ！カスがツ!!」

まるで檜山に興味すらないとしても言うように言葉を零すハジメに檜山がついにキレた。ハジメに勢いよく飛びかかり投げ飛ばすと肩を押さえることで身動きを取れないようにして肩を、腕を、顔を、腹を、拳で、脚で、魔法で、剣の鞘で、殴って殴って殴り続ける。

「お、おい、檜山。流石にそれはやりすぎじゃねえか？」

「うるせえ！お前らも手伝え！このクソアマ、立場を分からせてやんだよ!!」

檜山グループの一人……確か中野だったろうか？が制止の言葉を投げかけるが檜山が怒鳴るように言った事で3人が加わり、更にハジメへと攻撃を仕掛ける。



もはやそれは従来のイジメなどとは比にならない、普通、これほどのイジメを受けた者は精神的に耐えきれず自殺してしまうかもしれないだろう。

しかしハジメは悲鳴を上げずただ冷めた瞳で檜山たちを見ていた。ただし、その瞳には檜山たちを一切映しておらず、内心本当にコイツらはつまらない人達だなあと内心呆れ返っていた。

『どうして反撃しないの?』

そんなことを思っていると再びどこからか謎の声が聞こえてきた。

その声にはハジメは顔を歪ませ、内心またかと呟く。

『コイツらは君が日色の元に行くのを邪魔したんだよ?』

それがどうしたとハジメは内心呟く、目の前の檜山達に邪魔されることはしよつちゅうあるだろう、今回はかなり酷いが昔とそう変わらない。慣れて仕舞えば別に気にする必要なんてないだろう。

『殺そうよ』

聞こえてきた謎の幻聴にハジメは一瞬思考が停止した。

『そうだよ、殺そう? 殺せば全て解決するじゃないか! こんな存在する価値のない塵芥なんか綺麗さっぱり掃除しなくちゃ! そうだよ! 最初からそうすればよかったのさ!! 君の、いやボク達と日色の邪魔をするものなんて全て殺して壊してしまえばいい!!』

何度も何度も声を荒げ、聞こえてくる謎の声。ハジメは身体に襲う痛みすら一欠片も気にせず聞こえてくる声に黙つてと口を開くなど内心叫ぶ。

『あの邪魔しかりしない白崎も！日色に近づくと八重樫も！目の前にいる檜山達も、全部全部殺してしまえば——』

「……ッ！（う、るっさいんだよッ!!きさ…つさと！消えろッ!!）」

何度も何度もまるで暗示をかけるように殺せと囁く謎の声にハジメは心の中でその声をかき消すように叫んだ。

自分が白崎さん達を傷つけるわけがないだろう！そんな事をすれば日色が悲しむに決まっている！そうハジメは思い、謎の声の主にだからさつさと消えろと叫ぶ。

その言葉に声の主は少し驚いたのか、へえという声を零し、不気味に笑い始める。

『ハハハ、いいさ別にボクは強要させているわけじゃない、君がそう思うのならそうすればいいよ』

その言葉と共に、謎の声は笑いながら徐々に遠ざかっていく。そして、もはや聞こえなくなる直前、声の主はハジメを嘲笑うように言葉を零した。

『だけど、彼はそれを認めるのかなあ？』

その言葉にハジメが、え？と疑問を思う瞬間——

——絶対零度の刃の如き殺意がハジメや檜山達を中心に辺り一面を包み込んだ。

「ヒッ……！」

その殺意に檜山達は小さく悲鳴を上げハジメへの攻撃の手を止めてしまう。

唐突に攻撃が止んだことにハジメは疑問に思いながらも滅多打ちにされたボロボロの身体にムチを入れて立ち上がりとうとするが予想以上にやられた様だ。いくら頑張っても全身が痛みで震え、力が抜けそうになってしまう。

どうにか倒れた状態から体を起き上がらせて、冷たい殺意の発生源であるハジメが訪れた方向へと視線を向ける。

そこには——彼がいた。

「なにを……している？」

腰には訓練場に置いてきたはずの片刃の長剣を差し、なんの感情も抱かせない無表情でこちらへと歩いてくる神代日色の姿があった。

## 南雲ハジメという少女とは 中

ザツ……ザツ……と日色が歩み寄ってくる音が聞こえてくる。

日色の姿をみた檜山は最初は表情が若干引き攣っていたが今は余裕を取り戻し嘲笑うような歪んだ笑みを浮かべていた。斎藤、近藤、中野も少し引き攣っていたがヘラヘラと笑っている。

おそらく檜山たちが余裕を取り戻したのは日色が圧倒的に低いステータスを持っていたからだろう。

そんな歩み寄ってきた日色へと檜山はヘラヘラと笑いながら話しかける。

「よう、神代。わざわざ正義の王子様気取りかあ？言っておくが俺達は南雲の”特訓”に付き合っただけだからなあ？」

ニヤニヤと歪んだ笑みで日色に笑いかける檜山、どうやら『檜山達が南雲の訓練に付き合っただけ』という建前で言い訳しようとしているらしい。例え切り抜けなくても低ステータスである日色ならば大丈夫だろうと思っただろう。

「そつ、そーそー！珍しく一人でいたもんだからさー！」

「今日は一人で特訓すのかなーって思って、せつかくだから！」

「でも南雲、すぐバテちやってさあー！」

そう言つてヘラヘラと『疚やましい事何もありませんよ』笑う檜山達に日色は小さく

「……そうか」と呟いた。

「つまりお前らはこんなところでハジメの訓練に付き合つてたと？」

「あ、ああ、そうそう」

そう言つて笑う檜山達に日色は、なるほどなるほどと呟いた後、小さく笑つた。

しかしその微笑みをハジメは知っている、その表情の意味をハジメは見たことがあつた。

「それはハジメが迷惑かけたな——」

日色は笑う、小さく笑つた。

彼の目以外は

「——その”お礼”をしてやるよ」

そして日色は次の瞬間、ハジメ達の視界から消え去り、最も日色の近くいた中野の鳩尾へと肘打ちを食らわせた。

「グヘッ!?……ゴフッ!!」

中野が突然の鳩尾の痛みに体の空気を全て吐き出し、何が起こったのか理解する前に日色は鳩尾に肘を突き刺した右腕を跳ね上げ中野の首へとアツパーを繰り出して中野の脳を揺さぶり意識を刈り取る。

「「……………は？」」

何が起こっているのか分からない、という表情を浮かべる檜山達に日色はドサツと地面に倒れた伏した中野をチラリと見たあと、ギロリと檜山達を睨みつける。

「……………お前ら、俺の友達を傷つけられて黙って見ていると思つたのか？」

小さく、そしてゾツとするような冷たい声が辺り一面に静かに響き渡る。

檜山達は日色の冷たい瞳にまるで蛇に睨まれた蛙のように動けなかった。

「来いよ、塵芥共。俺の友達に手を出したらどうなるか教えてやる」

その言葉と共に日色は檜山達へと駆け出した。

◆  
「テメエエエエエエ!!上等だクソツタレが!!」

「このクソ野郎が!よくも中野を!!」

「死にやがれ!!クソ野郎!!」

日色が接近してきたことでようやく現状の認識ができた檜山達はそれぞれ目の前の日色を倒すために行動を起こした。真つ先に硬直が解けた近藤が自分を持っている槍を操り日色へと襲い掛かり、檜山と斎藤は後方で詠唱し魔法を使おうとする。

「し、ねえええええええッ!!」

「誰が死ぬか」

声を上げながら近藤は槍を薙ぎ払い、日色の胸めがけて槍を振るうが日色が咄嗟に上体を下げ背中向きに倒れることで紙一重で日色の頭上を槍が空気を唸らせながら過ぎていく。

「オラアアア!!」

しかし近藤は薙ぎ払った槍を引き寄せることで持ち手を穂先に近づけ、倒れた体勢である日色へと再び突きを放つ。この間約二秒

元々ステータスが高い戦闘職である近藤だからこそこのような高速で槍を操ることができのだろう、おそらくだが技能も関係しているのかもしれない。

もちろんのこと日色は背面で倒れている途中な為左右に避けることはできない。  
だから日色は――

「チッ!」

――両手を後方に回し手に地面がついた途端、両手に力をいれバク宙をすることで近藤の槍の穂先の腹の部分を蹴り飛ばすことで槍を真上へと跳ね飛ばした。

「なっ!」

おそらく決まったと思っていたのだろう槍が突如真上に跳ね飛ばされたことで驚愕の声を上げ手から槍が離れてしまう。

もちろんそれは隙でしかない、バク宙により体勢を立て直した日色が体勢を低くし一瞬でバク宙により開いた距離を詰める。

そして――

ダンッ!!!

「痛ッ!?!」

――勢いよく近藤の足を踏み潰した。

突然の足元の激痛に近藤は顔を歪め隙を生み出してしまふ。

その隙を逃さず日色は吐息を吐きながら勢いよく右手で近藤へと殴りかかる。

「――フッ!!」



「ク、クソッ！」

咄嗟に近藤は自分に殴りかかってくる拳に気づいたのだろう槍を手放して顔を腕で防御する。

しかし日色は近藤の顔面を殴るのではなく、近藤の顔の横を右腕で通らし、左腕をもう片方向へと潜らせ、両手を掴む

そう、ちようど近藤の頭を両腕で抱き抱えるように。

「歯、食いしばれよー！」

「っ？……ガア!!？」

そして日色は勢いよく両腕を近藤の後頭部めがけて叩きつけた。

ブレインシェイカー  
後頭部攻撃

敵の後頭部に強い衝撃を与える事で致命打を浴びせる技だ。

各種格闘技では後頭部への攻撃は脳障害などの後遺症を起こし易い為禁止されており、これを受けた者は脳を揺さぶられることで一瞬で戦闘不能にさせることができるのだ。

所詮日色とクラスメイト達のステータス差は決定的である。たとえ全力で殴ったと

しても相手を気絶させることは不可能であり最悪アザすら無いかもしれない。ただし、それはある部分に関してはその違ふ。

人体にはどれだけ鍛えても決して強く出来ない箇所がある。一つは鳩尾、そしてもう一つは脳である。

例えどれだけのマッチョでも脳を揺らされた場合気絶やバランス感覚を失ってしまうように例えステータス差がある程度離れていたとしても気絶させることは可能なのだ。

何故なら武術とは弱者が強者に勝つ為の物なのだから。

脳を揺さぶられたことで意識が飛んだ近藤を捨て置き、次の獲物めがけて日色が振り向いて見えたものは——赤と薄緑の球体と衝撃だった。

「ガハツ——チイ！」

「日色！」

日色は咄嗟に左腕を盾にしたものの、あまりの衝撃で吹き飛ばされゴロゴロと地面を転がってしまふ。ハジメの悲鳴が聞こえたので受身を取りながら勢いよく立ち上がる。と再び詠唱を行っている檜山と斎藤がいた。どうやらさつき食らったのは魔法のよう

だ。

咄嗟に左腕を盾にしたせいaka服が少し焦げ炎魔法によりところどころ火傷しており、風魔法により火傷したところから血が流れていた。

「ハツハア！ ざまあ見やがれ！」

「このクソ野郎が、もう一度焼かれちまえ!!」

「チツ、メンドクサイ奴らだな」

日色は檜山達が魔法を詠唱しているのを見て自分の魔法とは違い使い勝手がいいことに悪態を吐き、再び距離を詰めるため体勢を低くし、一気に飛び出した。日色は詠唱が終わる前に一気に距離を詰めようとしたがあと一步のところ間で間に合わなかった。

「( )に風撃を望む。『風球』」

「( )に焼撃を望む。『火球』」

「クソツッ！」

檜山達の距離が残り1メートルほどで日色へと打ち出された火球と風球に対し、日色が躲す術はない。なぜなら日色はトップスピードで一直線に檜山達へと向かって行っていたのだ。急に方向を変えることなどできるわけではない。

ただし――

(だったら――

——避けずに攻撃すればいいだろうが!!!  
 ——だからといって何もできないというわけではない。

「ツ——ハアツ!!」

日色は腰に差している片刃の長剣を勢いよく引き抜き、斎藤へと勢いよく投擲した。襲い掛かる火球と風球を傷ついた左腕で薙ぎ払い防御する。猛烈な激痛と衝撃に左腕の感覚が無くなり倒れそうになるが歯を食いしばってそのまま一直線に檜山達へと向かう。

(こんな傷など——ハジメの傷に比べたら安いものだ)

「ギヤアアアアアアアアア!!」

「よ、善樹!」

どうやら投げた長剣は見事斎藤の腕に突き刺さったようだ。日色は我ながらナイスな投擲技術だと思いつながら、腕を長剣に貫かれたことで倒れこみ、なんとか引き抜こうとしている斎藤へと飛びかかり、突き刺さった長剣をさらに深く突き刺した。

「ヒツ!ギヤアアアアアアアア!!」

日色は痛みに悶える斎藤を抑えつけると勢いよく引き抜いて、クルリと檜山へと振り

向く。斎藤はあまりの痛みで傷口を抑えしばらくは動けないようだ。

「……後は、お前一人だ」

「ヒ、ヒイ！ヒイイツ！ごめんさい！俺が俺が悪かったからっ！だから——」まさか、許してもらえらるでも？散々ハジメをいたぶり蹴っておいて謝れば許すほど俺は優しくはない」

ギロリと日色が振り向くと檜山が腰が抜けたのか尻餅をつきながら仲間たちの死屍累々とも言うべき姿を見て……そして『次はお前が』こうなる”番だ』と見せ付けられて、完全に恐慌状態に陥っている。

日色は空っぽの無表情でゆらりゆらりと檜山へと近づいていく。

一歩また一歩と日色が近づくと檜山の顔が涙や鼻水でベトベトに汚れていく。

「ヒイヒイヒイ！！止めろ！止めてくれ！！もう南雲にも手出ししないからっ！！嫌だ！！痛いのは嫌だアアアアア！！」

「……………」

日色は喋らない、もはや檜山と話すことはないとしても言うように片刃の長剣を構え、また一歩近づく。

そして檜山へと振り上げた刃を振り下ろすというところで——

「待って、日色！！僕はもう大丈夫だから！！」

——ハジメの声によりピタリと空中で長剣は停止した。

日色は視線を檜山からハジメに移し、感情のない声で語りかける。  
「本当にいいのか、ハジメ。こいつらはお前を痛めつけたんだぞ?」

その言葉にハジメはある程度痛みは収まったとはいえ未だに身体に奔る痛みに顔を  
顰めながらも、なんとか震えながらも立ち上がり、コクリツと頷いた。

それを見て日色はハアとため息を吐き、仕方がないとしても言うように長剣を腰の鞘に  
戻した。

「……わかった」

日色はそう呟くと、檜山から背を向きハジメの元へと向かった。いち早くハジメを香  
織に頼んで治してもらおうと思ったのだろう、いや、だからこそ気づかなかった。

「ヒ、ハ、ハハ……し、ねえええええええ!! 神代才おおお!!」

背後から剣を鞘から抜き日色めがけて振り下ろそうとしている檜山のこと。

ハジメが咄嗟に「日色ツ!!」と叫ぶがもう遅い、日色は反応に一瞬遅れてしまった。  
避けることは不可能、剣での防御は鞘に差してしまつて不可能だ。

だから日色は咄嗟に――

「あ、ぐ、ガアアアあああああアツツ!!」

——火球により火傷し、風球により血まみれとなつた左手で剣を防いだのだ。

グチュリツ!!とまるで腐つた果実が潰されたような気持ちの悪い音が響いていく。

だが、不幸中の幸いは檜山が剣を振るう体勢が崩れていたおかげであり勢いがなく左手が少々切り裂かれただけで済んだのだが、もともと火傷している左腕を切り裂かれたのだ、その激痛は通常の比では無い。

日色の視界がチカチカと明滅するように瞬き、体勢がぐらりと崩れてしまう。

だけど——

「——あ、あああああああああああああああああッ!!」

——日色は決して倒れない。

ダンつと勢いよく左足を踏み出し、傾いた体勢を無理矢理前に踏み出す。

「ヒィ!!」

「歯ア、食いしばれッ!」

踏み出したことで手に入れた力をロス無く、足から腰、胸、腕の順に捻りを入れながら伝え、右腕を一切躊躇無く檜山の顔面へと殴りかかる。

ゴツツ!!!

という音が日色の右腕を通して伝わってきたのを日色は感じた。

日色の渾身の一撃を食らった檜山は勢いよく地面に叩きつけられ、ピクピクと数度痙攣した後、気絶したのだった。



## 南雲ハジメという少女とは 下

「日色君!!？」

日色が檜山を殴り飛ばして数十秒後、どうやら騒ぎを聞きつけて駆けつけた香織達が現れた。

「どうやら日色と檜山達の戦いは予想以上に騒ぎを大きくしてしまったようだ。」

日色は来るのが遅いとしても言うように溜息を吐いて、左腕が白崎や八重樫に見えないように隠しながら駆け寄ってきた香織へと話しかける。

「白崎、とりあえず事情は後で話してやるからまずはハジメの怪我を治してくれ」

「う、うん。わかった！」

そう言つて慌ててハジメの全身につけられた傷を見て「南雲ちゃん！」と慌てて治療しに行つてくれた。

ようやく一息つけるかと思つた日色だが新たに緋色の前に現れた雫達に面倒臭そうに視線を向ける。

「それで？日色、どうしてこんなことをしたのか説明してもらえますのしょうね？」

「……別に、俺はあの檜山達に『お礼』しただけだ」

その言葉に何を言っているとしても言うように会話に入ってきたのは龍太郎だった。

「『お礼』……だど?」

「ああ、こいつらが南雲の特訓に付き合ってくれた分の『お礼』をくれてやっただけだ」  
その淡々と告げられた言葉に食いついてきたのは光輝だった。

「お礼だど?! ふぎけるな! これの何処がお礼だど? 言うんだ!!」

「全部だ、むしろ俺はこの程度で済んだことに感謝してほしいな。この程度、ハジメの傷に比べればマシな方だろう?」

「だとしてもこれはやり過ぎだろう! 聞けば南雲は、訓練をサボって図書館で読書に耽ふけていたそうじゃないか! それを知った檜山たちは、そういう南雲の不真面目さをどうかかしようとした「だとしても——」……ッ!!」

光輝の言葉を遮るように日色は少しも光輝から視線を逸らさずこう言った。

「——男が4人寄ってたかつてハジメが動けなくなるまで暴力を加えるのは間違っているだろっつ! お前は白崎やポニーを訓練という名目で動けなくなるまで暴力を振るうのか?」

「そ、それは……」

その言葉に光輝は答えることができない。なぜなら肯定すればそれは光輝の正義が間違っており、否定すれば結局は檜山達が悪いことになるからだ。

答えることができない光輝を見て日色はまるで興味を失ったように視線を外し、香織に治してもらっているハジメの元へと向かった。

「ハジメ、大丈夫か？」

「う、うん、白崎さんのお陰で大体は治ったよ。ありがとう、白崎さん」

「ううん、私は治療師だから。怪我を治すは、私の仕事だよ」

「あとごめん白崎さん、お願いなんだけど檜山達の傷も治してくれないかな？」

そう、ハジメが言った事で香織はあ！忘れてたとも言おうようにハツとした顔をして、急いで檜山達の傷を治しに行ったのだった。そんな香織を眺めたあと、日色へと視線を戻すと日色がこう言ってきた。

「いいのか？あいつらはお前を傷つけたんだぞ？」

「うん、僕は大丈夫だから。それよりも日色！左腕は大丈夫なの！？白崎さんに治してもらったほうが……」

「そうね、日色。あなた、左腕怪我しているでしょう？香織に治させてもらいなさい」

ハジメの言葉に同調して現れた雫の言葉に日色はチツと舌打ちをした。

「……気にするな。ちよつとした切り傷だ、放っておけば治るさ」

そう言つて左腕を見せる日色、腕は袖に隠れて見ることはできないが袖は浅く裂かれ少し血がにじみ出ているだけでそれ以外には一切の傷や炎による火傷がなかった。

(…………アレ?こんな浅い傷だったかな?)

日色が火球に当たったのを目撃したハジメはそのことに疑問を抱くが、もういいだろうと日色が隠してしまったのでわからなくなってしまった。

「俺に、白崎の治療はいらん。もういいだろう?俺は訓練施設に戻るぞ」

「ちよつと待ちなさい日色、忘れ物よ」

そう言つて踵を返そうとする日色に雫が日色へと革製の本を投げた。日色は咄嗟に右手だけで受け取り、それが自分の日記だと知ると「なんでお前がこれを持っている?」  
というような視線で雫を睨みつける。

雫はやれやれといった感じに言葉を零す。……若干頬が赤く染まっているのはどうしてだろうか?

「あの時、あなたが落としていったのよ。これ、あなたの物でしょう?」

「まさか……見たのか?」

「そんなわけ無いでしょうが、それに本当に香織に治してもらわなくていいの?」  
その言葉に日色はああ、と呟いた後、訓練場へと歩き出した。



「…………ク…………ソつ、流石に、もう限界…………だな」

現在、日色は訓練場に——ではなく、訓練場の近くに設置されている井戸の元で顔を

汗だくにしながらも座り込んでいた。

日色は、近くに置いてある桶に満タンの水を入れた後——左腕に掛けていた魔法を解除した。

そして瞬間——辺りが鮮血に染まった。

緋色の左袖は所々焼け焦げ、真つ赤に染まっており、左腕は出血しておりドクドクと今も血を少しだが流している。

そして、その左腕に浮かび上がる『欺』の文字。

そう、日色は左腕の傷を文字魔法で掠り傷のように見せていたのだ。文字魔法の『欺』の効果は『書いた対象を見せたい物に見せる』というもの、つまり日色が受けた傷は予想以上に浅かったのではない、ただ『欺』で傷を偽り、日色はハジメ達と会話している間も奔る激痛を押し殺してハジメ達を欺いていたのだ。

そして現在、『欺』によって隠されていた傷が解放されたことで血が出血し、辺りを染めてしまった。

(とは言っても……察しがいいポニーにはある程度バレていただろうが)

しかし、雫もこれほどの傷とは思っていなかっただろう、彼女のことだからもしこれ

ほどの傷だと思っていたのなら必ず香織に治療させようとしたのだから。

もし、あのままこの傷を隠さなければおそらく香織はわからないが、オカンな雫はきつと檜山達相手にキレルかもしれない。しかもメルド団長にも伝わり更に大事になっていたかもしれない。日色にとつてそんな面倒事は全力で避けたいのだ。

(まあいい、そんなことよりさっさと文字魔法で治さなければ)

日色はそう思つて桶の中の水を使つて左腕を洗い水を血で流していく。

「……………ッ！」

左腕に奔る激痛が日色を襲うが日色はそれを押し殺して決して悲鳴を上げないようにする。

どうにか痛みを悶えながらも水で傷口を洗つた後、日色は再び文字魔法を使い、治すために人差し指を傷口に近寄せて――

「ひ……………いろ……………う……………どう……………したの……………それ？」

「……………ッ！チツ、最悪だ」

――突如声のした方向を振り向くとそこには驚いた表情のハジメがいた。

「……………何の用だ、ハジメ」

「……………え？あ……………ひ、日色が……………訓練場にいないから……………探しに……………来たんだけど……………」

でも……………その、ち、血が……………」

日色の左腕が血だらけな事によつぽど動揺しているのだろう、言葉が途切れとぎれで表情が徐々にクシヤクシヤになって泣きそうになっている。

それを見て日色は内心頭を抱える。

この傷がバレたくなかったからわざわざ隠していたのに訓練場の近くで治療しようとしたのが悪手となるとは。

ではなぜ日色が傷を隠していたのか？それは――

「もし……かして、その……傷は……檜山達と戦った時の……」

「……お前には関係ない」

「嘘だよー」

その日色の言葉に一気に泣きそうになり涙が零れそうになるハジメ。

その姿を見て日色は内心悪態を吐く。

（……だからお前に知られたくなかったんだ、ハジメ）

――ハジメに知られたくなかったからである。

ハジメと知り合ってから日色はハジメの性格などある程度は理解している。昔からののだがハジメは日色が絡むとなぜだかは日色は知らないが思考が時折自分のせいでと勝手に思つて落ち込んでしまう癖があるのだ。

日色からすれば自分の為に行動した結果だというのにハジメが勝手に落ち込んでし

まうのを避けるために今回このような行動をしたのだがどうやら無駄になったようだ。「その傷は……僕のせい……」

そう言いながら落ち込むハジメに日色はああ、クソッ！と頭を抱えた後、立ち上がったハジメの頭をデコピンを食らわせた。

ズドンという音が響き、落ち込んでいるハジメはデコピンを食らったことで「痛いッ！」と呻くことになった。

「勝手に落ち込むなバカが、これは俺が行動した結果だ」

「で、でも……」

「お前の意見は聞いてない。いいか、これはお前には関係ないことだ、勝手に自分のせいにして俺の目の前で泣くな、正直言つて目障りだ」

その日色の言葉にようやくハジメは嗚咽を零しながらコクリと頷き、ヒックヒックと徐々に泣くのを止めてくれた。日色は「……漸く泣き止んだか」と呟いてハジメの頭をポンと右手を置き、ワシヤワシヤワシヤと撫でる。

「えっ?!?ちよ!日色!?!」

「泣き止んだなら早く戻るぞ、メルド団長が確か俺達を呼んでいただろう?どつかの泣き虫のせいで遅れてしまったら困るからな」

その言葉に泣き虫ハジメはううくとまた迷惑をかけたことに落ち込んでしまうもふ



と思考に日色の傷をそのままで大丈夫なのかという疑問が浮かび上がった。

「で、でも、日色。その傷は本当に大丈夫なの!? 白崎さんに見せてもらった方が——」  
「ああ、大丈夫だ——と言つてもお前のことだから心配するんだろう? せっかくだ、ちよつと見せてやるよ」

そう言つて日色は「見てろ」と言つてハジメに見えるように水で洗つたことである程度血は流されている傷だらけの左腕を掲げた後、右手の人差し指を近づけ、瞬間——

——日色の右手の人差し指が高速で動いた——と思つたら左腕に青い『治』という文字が浮かび上がると淡い青色の光となつて左腕を包んでいき、そして光が消えると左腕の傷がほぼ全て治つていたのだ。

「えっ!? き、傷が……っ!」

「なっ? だから言つただろう? 大丈夫だ、つてな」

そう言つて日色はヒラヒラとまるで痛みなど元からないように左手首を動かす。楡山によつて切り裂かれた切り傷は血が止まり、いつの間にか切り傷には瘡蓋が出来ており、火傷の痕や痣はまるで元から無かつたように消えてしまつてゐる。

その不可思議な現象にハジメは目を見開いて瞠目する。

「今のは……!?」

「ああ、俺の魔法だ。詳しくは時間がないから話せないが俺の魔法は少し特殊でな、今ま

でクラスメート達には隠していたんだ。すまんな」

「で、でも……ステータスプレートには書いてなかったよ?」

「映らないようにしたんだよ、わざわざ手の内を全て出すわけ無いだろ? ほら、さっさと戻るぞ、後でポニーとかに説教されるのは嫌だからな」

そう言つて、日色は溜息を吐いた後スタスタと王城へハジメを差し置いて歩いていく。

取り残されたハジメは慌てて「ちよっ! ひ、日色、待つてよ!」と叫んで慌てて日色の後を追いかけていった。

慌てて追いかけてくるハジメを視界に入れながら日色は彼女にバレない様に歯をくいしばる。

(だからといって……痛みが引くわけではないけどな)

日色の左腕に奔る痛みは未だに和らいでないなかつた。



その後、雫がメルド団長に事情を説明したらしく、日色は厳重注意を受けたものの特に咎められる事は無かつた。

どうやら雫と龍太郎、そして香織が目覚めさせた檜山四人組に、何をしていたのかを尋もn……説得(笑)を行った末に『元々は檜山四人組が悪く日色は少しばかりやり過

ぎではあったが、そこまで重症ではなかったため』らしい。

そして現在、訓練終わりにいつもなら夕食の時間まで自由時間となるのだがメルド团长が野太い声で

「明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！ まあ、要するに気合入れろってことだ！ 今日にはゆつくり休めよ！ では、解散！」

と言われ、ざわざわと生徒達は喧騒に包まれながらも夕食の時間が終わり、自由時間になった頃、ハジメは薄暗い自分の部屋で一人ベットの所で体育座りになって蹲っていた。

思い出すのは今日のこと、自分のせいで傷ついてしまった日色のことである。

日色が檜山達に立ち向かったことで左腕が血まみれになるという重傷を負った。

『一体誰のせいで彼は傷ついたんだろうね？』

またあの声が聞こえた。

不気味にハジメを嘲笑うような笑いを含めながら謎の声がハジメへと語りかける。

『少し考えたらこうなると君はわかってただろう？彼が、日色が決して君に何かあったら見て見ぬ振りをするわけがないって』

「……………」

ハジメは答えない、一層顔をうずめ身体を震わせるだけだ。

『ねえ、答えてよ【南雲ハジメ】、いったい誰が日色が傷ついた原因になったんだい？』

そんな問いにハジメはハハッと小さく自分を自虐する様に笑う。

そんなことは言われなくてもわかってる。

あの時、日色が檜山達に立ち向かう原因になったのも。

あの時、日色が左腕を斬られる原因になったのも。

「……………全部、僕のせいだ」

ハジメは目尻に涙を浮かべながら小さく呟く。

日色は言った、お前には関係がないと、お前のせいではないと。

本当に？

そんなわけないッ!!!

自分が檜山達に反抗して、逃げていれば日色が立ち向かうことはなかった。

自分が日色を止めなければ、日色が左腕を斬られる事はなかった。

彼に傷をつけたのはまぎれもない——

『そう、君のせいだよ。ハジメ』

薄暗い部屋の中、窓から入ってくる月明かりの光がハジメの長い影を作り出している。

しかしどうしてだろうかハジメの足元から伸びた影がハジメを見つめ、嘲笑っているようにハジメには見えてしまう。

『最初っからそうだ、君は日色の足を引っ張っているだけでなんの役にも立っていない』  
「違うッ！僕は——『だったら——』」

謎の声と共に影が揺らめき、ハジメを嘲笑う。

ハジメは必死に叫び返そうとするがそれを遮るかのように声が響く。

『——どうしてあの時、君は抵抗しなかったの？』

「……………え？」

『あの檜山達に虐げられた時、どうして君はなんの抵抗をせず受け入れていたの？』

「そ、れ……………は……………」

思考が空白に染まった。

ハジメは聞こえてくる声に慌てて言い返そうとするも零れる声は小さくまるで何か

に言い訳するように言葉が甲高くなっていった。

「そ、それは……もし傷つけたら日色が悲しむから——」

『日色が悲しむ？じゃあどうして日色が檜山達に立ち向かったの？いや、そもそもどうして日色が悲しむと思ったの？』

えっ？と自分の口から無意識に声が出たのを感じた。

影は笑う、まるでハジメが必死に隠そうとしている物を徐々に暴こうとしているかのように。

『ハハッ！正直に言いなよ「南雲ハジメ」。ボクは知ってる、ボクだけは君の歪みに気づいている。君は——』

やめろ、聞くな。それを聞いてはいけない。何処かでハジメはそう感じていた。

しかし、自分の耳に囁いてくる謎の声にハジメは声をかけることができなかつた。

『君は——ただ、日色に嫌われたくなかつただけだろうか？』

呼吸が止まつた。

ハジメは目を見開き瞳目する。いくら口を開いても酸素を吸えず、謎の声の意味を知ることができない。

『もし、檜山達に抵抗をして檜山達を傷つけたら日色は自分から距離を離すかもしれない。君はそう思ったから抵抗しなかったんでしよう？ 虐められる悲劇のヒロインであらうとしたんでしよう？』

「ち、ちが——」

否定の言葉を言おうと思っても口からは言葉にできず小さく空気が溢れるだけだ。

『違わないよ、君は自分のことしか考えてない。一人だったから、孤独だったから、もう一人になりたくなかったただけだ』

「……………あ、う……………」

声は出ない、言葉は出ない。

いくらハジメが否定しようと思っても何処かではハジメは肯定してしまうのだ。

『君はただ、寄生虫の様に日色に甘えているだけなんだよ』

「……………ぼ、くは」

ハジメはもはや病人の様に声を出すことすらできなかった。全身が汗だくになり全身がガチガチと無意識に震えてしまっている。

そんなハジメに影は笑ってこう言った。

『だからさあ、代われよ』

その言葉にハジメはピクツと反応すると共に今まで震えていた震えが一切止まった。

ハジメはゆつくりと顔を上げ、自分の影へと目を向ける。

「……………」

『代わってよ、代わりにボクが上手くやってあげる。檜山も、白崎も八重樫も天之川も、みんなみんな全部壊して、日色と共に地球に帰るんだ。だから——』

影が一際大きく揺らぐ、まるで影が宿主を引きずり落とし入れ替わろうとする様に。

そして——

「……うるさい」

——瞬間、ハジメの一声であれほど揺らいでいた影がまるで金縛りにあつた様に停止した。

あれほどハジメに囁いていた謎の声が静まり返り、微かに驚いたような小さな声が聞こえてきた。

『……………まったく、君はいつになったら代わってくれるの?』

「……………」

ハジメは答えない。

何も答えないハジメに謎の声は溜息を吐き、『……まあいいや』と呟いた。

『代わりたくなつたらいつでも呼んでよ、ボクはいつまでも待つてるから』

謎の声はそう呆れながら言うと共に徐々に声は遠ざかって、消えていった。



月明かりが照らす薄暗い部屋の中、一人になったハジメは倒れこむようにベットに横になりながら小さく泣いた。

「……僕の……うう……せいで……ごめん……なさいっ……!……グスツ……ひ、いろ……っ!」

誰も聞こえないように、誰にもバレないように、一人静かにハジメは泣き続ける。

何度も、何度も……

正史の『南雲ハジメ』とこの「南雲ハジメ」という名の少女には幾つかの違いがある。ひとつは性別。

そしてもう一つはこの世界のハジメは幼い頃からイジメに遭い、孤独だったということ。

幼い頃から「南雲ハジメ」という少女は多くの虐めにあっていた。

最初は自分の趣味を馬鹿にされ、次に物を隠された。そして虐めはだんだんエスカレートし殴られることもあった。本来なら虐められた者は先生に報告し助けを求めるだろう、しかし、「南雲ハジメ」という少女はそれをしなかった。

その少女は幼い頃から普通の子供とは少々ズレており人一倍、精神が成熟していたのだ。

『親に迷惑をかけてはいけない』

『誰かを傷つけてはいけない』

両親に言われるそんなありふれた言いつけをズレている少女はきちんと冷静にその意味を考え、律儀に守っていた、守ってしまった。

親に迷惑をかけないように、虐めにあつてもそれを言わず、決して虐めのことを悟られないようにいじめられた証拠すら見つからないようにした。

誰を傷つけてはいけないから、自分の表情で誰かを傷つけないように自分の感情を隠し、どんな時も曖昧に笑うことにした。

誰にも助けを求めずに、どれだけ馬鹿にされても、どれだけ虐められても、どれだけ虐待を受けていたとしても、少女はいつもの様に笑ってありふれた少女の様に生きていた。

しかし、どれだけ隠しても所詮子供である、いつしか両親に虐めることがバレてしまった。虐めの暴力により身体に残った痣がいつに見つかってしまったのだ。

そのことに両親は泣きながら少女を叱った、どうして教えてくれなかったの、と少女は言った、お母さんとお父さんに迷惑をかけたくなかったから、とそういうと両親は泣きながら少女を抱きしめた。ごめんなさい、ごめんなさいと言いながら。

それを聞いては少女はこう思った。

『ああ、迷惑をかけてしまった』

それが少女の心が壊れた原因となった。

我慢した、どれだけ辛くとも少女は両親に迷惑をかけたくなかったから。幾たびも虐げられ続けた少女の心はもはや擦り果て、『迷惑をかけない』という思いだけが少女の支えになっていたのだ。

だからこそ少女は壊れた。支えが無くなってしまったことで。

では、幼い頃から誰にも助けられず虐められ遂に耐えられず壊れてしまった少女は一体どうなってしまったのだろうか？

答えは『解離』だった。

碎かれ、壊れた少女の心は人間の防衛本能としてその時の憎悪の感情とトラウマになった記憶を切り離し、少女のその時の記憶を曖昧にしたのだ。

ではここで疑問が生まれる。

その時の感情と記憶はどうなったのか？

答えは簡単。

裏でその記憶と感情は成長し、一つの人格として存在しているのだ。

時にもう一つの人格へと囁きかける様に、時に身体の所有権を奪おうとする様に。

それが正史の『南雲ハジメ』との決定的な違いだった。

この南雲ハジメという少女には障害を持っている。

障害の名を〔D i s s o c i a t i v e I d e n t i t y D i s o r d e r〕通  
称D I D

日本語で〔解離性同一性障害〕

つまり、南雲ハジメという少女は二つの人格を持った多重人格者なのだ。

## 月下での決意

### 〔オルクス大迷宮〕

それは、全百階層からなると言われている大迷宮である。七大迷宮の一つで、階層が深くなるにつれ強力な魔物が出現する。

にもかかわらず、この迷宮は冒険者や傭兵、新兵の訓練に非常に人気があるのは、階層により魔物の強さを測りやすいからということである。階層が深くなるに連れて出現する魔物は強くなっていくが、逆に言うとは浅くなるほど弱いということなのだ。故に魔物の強さを段階付けし易いという点を活かして、新兵の訓練などに使われており、しかも出現する魔物が地上の魔物に比べ遥かに良質の魔石を体内に抱えているためだ。

魔石とは、魔物を魔物たらしめる力の核をいう。強力な魔物ほど良質で大きな核を備えており、この魔石は魔法陣を作成する際の原料となる。魔法陣はただ描くだけでも発動するが、魔石を粉末にし、刻み込むなり染料として使うなりした場合と比較すると、その効果は三分の一程度にまで減退する。

例えるならば歯車の動きを良くする潤滑油のような役割を持っているのだ。

その他にも、日常生活用の魔法具などには魔石が原動力として使われており、日常生

活にも必要な大変需要の高い品なのである。

次の日、そんな迷宮に実践訓練を行うために勇者一行は（若干二名程、気分が沈んでいた者がいたが）メルド団長と複数人の騎士とともに冒険者たちのための宿場街「ホルアド」に到着していた。

昨日、メルド団長の通達を聞いた日色は即座にメルド団長に直談判し非戦闘職業である自分やハジメを置いていくように頼んだのだがメルド団長はついで首を縦に振らず上層部から生徒たちは全員訓練に参加するように、と言われているようで、どうしようもないらしい。

「大丈夫だ、いざとなれば俺が絶対お前らを守ってやるからー」などと男臭く笑って言ったのだが原作を知っている日色からすれば軽く死刑宣告である。ベヒモスが出てくるんだよクソツタレがツ！などと内心毒吐きながら、恐怖で寝れなかったため顔色が悪くなっている原因となっているのだ。ちなみにハジメは言わずもがなである。

そんなわけで冒険者たちのための宿場街「ホルアド」に到着し、まずは実戦の空気に慣れる、ということと迷宮探索は明日になり、王国直営の宿屋に泊まることになったのである。

最低二人で一部屋使われるために、日色ともう一人のペアになるのだがまさかの相部屋が南雲ハジメだとは日色にとって予想外だった。男女で同じ部屋なのは問題がある

のでは……と、思われたが、誰も何も言わなかったのでなし崩しである。……まあ、若干二名ほど二人を目の笑っていない笑顔で日色とハジメを見つめていたのだが無視である。

そんなわけで若干緊張しながら日色と共に宿屋の部屋に入ったハジメだが、久しぶりに見る普通の部屋について、ベッドにダイブして一息吐いてしまふ。

そんなハジメに小さく苦笑しながら日色は上着を脱いで近くの木製の椅子に掛けた後、自分の鞆から『地球送還魔法考察目録』と書かれている本を取り出し、自分のベットへと座り込んだ。

そうして日色の本を見ている間にうへへへとベットのフカフカさを堪能した後ふと気づいたように「……そういえば」と日色へと話しかけた。

「——ん？どうした？」

「そういえば日色、昨日使ってた魔法って何のなの？」

そのハジメの言葉に日色は「——ああ、アレか」と呟いて手に持っていた本を閉じた。

「アレは俺の固有魔法、『文字魔法』だ」

「文字……魔法？」

日色の言葉に復唱するように疑問符を浮かべながら呟いたハジメに日色は「……ああ」と頷く。

そして日色は右手をあげ人差し指を伸ばした後、ベットの布団へとゆつくりと文字を書いていく。

「この魔法の能力は簡潔に言えば『書いた文字の効果を実際に起こす』魔法だ……こんなふうにな」

「え？——うわっ!？」

日色はそうやってハジメに見えるように布団に『浮』の文字を書き、布団をハジメへと放り投げると次の瞬間——布団がまるで空を飛ぶように布団が空中を浮いた。

その摩訶不思議な現象にハジメは驚きの声を上げてしまう。

そんな驚いたハジメを見て微かに笑う日色にハジメは羞恥を覚えるが、慌てて思考を戻し日色の魔法の効果に一つの疑問を零す。

「じゃ、じゃあ……それを使ったら地球に戻れたりはできるの?」

「……いや、文字魔法は書いた文字の効果を起こすことができるが今の俺には文字数が一文字しか書けないんだ、成長したらもつと書けるかもしれないけどな」

「それでも十分チートだと思っただけ……」

そう言っただけで空中に浮き上がっている布団を自分のベットに戻しながら悔しがる日色にハジメは小さく溜息を吐く。確かにそんなチートな魔法を持つていれば黙っているかもしれないだろう、おそらくだが日色のステータスプレートもそれで隠蔽して



いたのかもしれない。

「……とは言っても魔力消費が激しすぎて一日3、4回しか使えないし、ハジメの錬成と一緒に書くためには一度対象に直接触れなきやいけないからな、役立たずなのは変わらない。残念ながらそこまでチートというわけじゃないんだよ」

「へ、へえ……」

難儀なものだと溜息を吐き、再び手に持った本を読み始める日色にハジメはハハハと曖昧に笑った後、何も喋らなくなった。

少しの静寂の後、唐突にハジメはポツリと呟いた。

「……ねえ、日色。日色は……怖くないの？」

「……何がだ？」

ハジメへと視線を向けず、パラリと本を捲る日色。

「明日の実践訓練……日色は怖くないの？」

そのハジメも言葉に本を捲る日色の手が止まった。ちらりと本から目線を変えハジメを見つめ、「ハジメはどうなんだ？」と呟いた。

「……怖いよ。戦うのは……やっぱり怖い。戦わないと帰れないのはわかるけど……やっぱり……ッ、怖いよッ……」

ハジメはベットの所で布団を抱きしめて目を瞑り震えながら声を零す。

きつとハジメは不安なのだろう、いや、それも当たり前か、突如日常が壊れ、命懸けの戦いに巻き込まれるのだ不安にならない訳が無い。

例え正史では将来『魔王』と呼ばれるほどの力を持ったとしても、今はただの『南雲ハジメ』という少女なのだから。

日色の返答はない、落胆されたのだろうか？

そんなことをハジメが微かに思った瞬間――

――ドサツとハジメと背中合わせに日色が座ってきた。

「――えっ？ちよっ！日――」 「安心しろ――」 「……え？」

突如ハジメに肌が触れるほど近づいてきた日色にハジメは驚愕の声が出るがハジメの声に被さるように呟いた日色の声に言葉が詰まってしまう。

「――俺だって怖い、戦うのはな」

ハジメの震えが背中越しから伝わる日色の体温の暖かさで止まった。

ハジメは暖かくそして頼りがいがあるその背中に無意識に寄りかかってしまいそうになる。

そんなハジメに日色は「だから――」と告げる。

「——今だけは隣にいてやるよ」

だからもう怯えなくていいんだ、ハジメ。

そう、ハジメは言われたような気がした。

その言葉を言うと共に日色は再び無言になり本を捲る音が聞こえる。ハジメは小さく「……そつか」と眩き、日色へと重心を預け、もたれかかる。

(……日色の身体……あつたかいなあ……)

小さな部屋の中で、小窓から差し込む月明かりが、寝台で背中を合わせる二人を照らし出す。まるでそれは、背中を合わせた少年少女の一つの物語の始まりだとも言うように。

背中越しに日色から感じる体温にハジメは安心感と父性を感じていると徐々に眠気が襲ってきた。

ゆっくり、ゆっくりと目蓋が落ちていき、意識が闇へと落ちていく。

そして遂に眠気に負け、深い眠りへとハジメが着く直前——

——コンコンとノックの音が響き渡った。

「日色君、起きてる？ 白崎です。ちよつと、いいかな？」

「ちよつと、話があるの。開けてくれないかしら」

そんな彼女達の声にハジメの眠気が一瞬で覚ぎめ、冷や汗がボタボタと背中から流れ出る。

え？ いやいや、待って、ちよつと待って欲しい。こんな状況で白崎さんや八重樫さんに見られたらどうなるのだろうか？

月明かりの中、男女二人が狭い個室で距離を近づけ、背中合わせ。

……考えなくても修羅場になることが確定するだろう。

「ああ、入ってきていいぞ」

「ちよつ、日色!?!」

そんなハジメの危機感を知らずに部屋に招き入れようとする日色にハジメは慌てて日色の口を黙らせるために日色の方向へと立ち上がりながら身体を動かして――

ズリッ

「あ?」

「ん?――うおっ?!!」

――ベットのシーツに足を滑らしてしまいハジメは日色の方へとスツテンコロリンと倒れてしまった。

もちろんそれに驚いたのは日色だ、突如転んで此方へと倒れてきたハジメに目を剥い

て反応が遅れてしまう。

結果どうなったか？それは突如日色へと倒れこんできたハジメを成す術も無く押し倒されたのだ。

そう、それは第三者が見ればハジメが日色を押し倒したような体勢に。

「え？ちよつ、日色君？どうしたの!？」

「あ、ちよつ！香織つ!？」

そんな日色の驚いた声に反応したのはドア越しにいる香織である。慌てて扉を開き、部屋の中にいる日色達の光景を視認する、してしまふ。

そして、そこから先はお察しである。

「……ふ、ふふふふふふ」

「もうっ！お邪魔しま……って！ な、ななななな何をやってるの、二人とも！」

「ちよつ！白崎さん！八重樫さん！違うんだ、これはっ！」

「フフ、何が違うのかな……？南雲ちゃん？ねえ、日色君にイッタイナニヲヤツテイルノ？」

「ハジメがいきなり襲いかかってきたな」

「ちよつ！日色！誤解を招く言い方しないで！白崎さんの目がさつきから一切笑ってないんだけど!!！」

「……ッ!? と、とにかくすぐに離れなさい二人ともお! 不純異性交遊なんてダメよ!  
! 駄目なんだからね!」

「……フフツ、フフフフフフフフフフフフツ!」

「すぐに止めます!止めますから白崎さんを止めてくださいっ!さつきから白崎さんが  
笑いながら椅子を振りおろそうと掲げているのが怖いんですけどっ!!」

雫が顔色を真っ赤に染め、恥ずかしそうに顔を両手で隠し(ただし指の間からバツチ  
リと見ている)香織は瞳に光が無いレイプ目になって寒気がするような笑い声を零し、  
確実に対象を撲殺することに適した手頃な椅子を掲げている。そんな彼女たちに弁明  
をするかのように日色の腹の上でハジメは両手で必死にそんなことをしようとしたん  
じゃないんですっ!と横に振り続けている。

そんなカオスな状況の中で日色は小さく呟く。

「で、ポニーと白崎は何の用だ?」

「今、こんな状況でそれを聞くツ!」

◆  
そんなマイペースな日色の言葉にハジメの悲鳴のようなツッコミが突き刺さった。

「で、一体何の用だ?夜這いか?だったらあのテンプレ勇者に構ってもらえ」

「殴るわよ?」

カオスな状況から数分後、事態が収束した後、取りあえず誤解は解けたため日色は白崎達が訪問した理由を聞くために取りあえず紅茶モドキを四つ入れ、トレイに置いて持ってきた。

雫と香織を日色のベツトに座らせた日色は、紅茶モドキを全員に手渡した。香織やハジメもありがとうと言いながら紅茶モドキの入っているコップを貰った。

途中日色のジョーク(?)に雫は静かに拳を構え、香織は顔を真っ赤にし「よ、夜這い?ち、ちちちちちちち違ッ!」と言っていたのはご愛嬌。

そんな月明かりの中始まった四人だけのありふれたお茶会の中でハジメは、なんでもなくなったろうと若干現実逃避しながら紅茶モドキを一口。

水出しの紅茶モドキのためお世辞にも美味しいとは言えないが身体が温まり心は安らぐだろう。

茶菓子も無くキレイな部屋でも無いため決して御伽噺のお茶会とは言えないがそれでも月明かりの中ネグリジュの姿にカーディガンを羽織った香織と似たような服装をした雫は並大抵の男子が見たら天使と勘違いされ、つい赤面してしまう程のものだろう。まあ、案の定日色は一切顔色を変えていないが。

「それで、何の用だ?」

「えっと、私は別に大したことじゃないんだけどさ、この世界に来てから日色君と二人で

話すことなんてなかったし、なんか寂しかったから……雫ちゃんが日色に用があるっていうから付き添いに……」

「ふーん、といっても何か話すことなんてあるのか?」

「何言ってるの、ステータスのこととかこの世界に来てから何をしていたからとかあるでしょう?」

「割と頑張った」

「適当!」

会話に入ってきた雫の言葉に怠けたように帰ってきた適当な返答に香織とハジメがツツコミを入れる。

日色はそんな彼女たちの言葉にめんどくさそうに目を細め、「じゃあ、質問しろよ。適当に答えてやる」と眩き、ハジメが内心で結局適当なの!と驚かせたりした。

そんなわけで始まった会話は基本的に香織が話し、日色が返して、そこにハジメ達が混ぜるという形式だったが初めての異世界生活にどれだけ困惑したかや魔法という新しいものにちよつとワクワクしたことなど、言葉は普通だが所々の言葉に香織が不安が募らせていることがハジメにもよくわかった。

空になったカップをカチャリと戻して、目の前の存在に不安そうな表情を隠しもせず顔をつつむかせ気味に、香織は思っていることを言葉に変え吐露する。



「どうしてこうなっちゃったのかな……」

「さあな、日頃の行いが悪かったかそれとも単純に運がなかったか。まあ、神なんて存在がいるならば一発殴ってやりたいところだろうな」

「ハハ、日色らしいね」

そんな日色の答えにハジメは小さく苦笑する、他の香織達もそんな日色の答えに勇気づけられているようだ。

その会話を気にしばらくの沈黙が訪れたが次に日色が見ながら「……で、ポニーは何の用だ？」と呟いた。

それに雫は「いい加減雫と呼びなさいよ」と毒づきながら、「まあいいわ……で、日色」と呟いた。

「なんだ？」

「あなたが私と訓練した時に言った言葉の意味ってどういうことよ」

その雫の言葉にえっ？と反応したのはハジメと香織である。

「ちよっ！日色!?!八重樫さんとも訓練してたの!?!」

「そんな！羨ま……言ってくれたら私も一緒に手伝ったのに!」

慌てて日色へと詰め寄るハジメ達に何慌ててんだお前らとでも言うように「ハア？」と疑問符を浮かべた。

「というか香織、お前今途中まで何を言おうとした。

「別に訓練ってほどじゃない、そのポニーに軽く誘われたから少しだけ付き合っただけだ」

軽く脅迫じみた誘いだがな、という言葉は日色は飲み込んでおく。ここで下手なことを言つて再び雫と立ち会うのは遠慮願いたいのだ。……香織が恨めしそうに雫を見ているのはどうしてだろうか？

「……話を戻すわよ、それで日色。あなたが言っていた『こんな役立たずが仲間を見捨てて一人勝手に王城から逃げ出したらクラスメイト達はどう思うんだろうな……？』、つて言葉の意味、説明してもらえるかしら？」

「ひ、日色君、そんなこと言っていたの？」

身を乗り出すように聞いてきた香織に日色はうわーとでも言うように頭を抱え、どうして過去の自分はそんなことを言ったのか内心頭を抱えた。

「……説明するのが面倒臭いから説明しなくていい——「だめよ」……マジか」

言葉が言い終わる前に雫に拒否された日色はめんどくさいなどでも言うように溜息を吐いた後、意を決したように「あー、そうだな」と言葉を零し——

「——俺は、あと数日たったなら王城を旅立つから」

——と、なんともないように衝撃の言葉を呟いたのだった。

◆ 「「……………は？」」

三人の思考が停止した。

素つ頓狂な疑問の声が無意識に零れてしまい、日色の言った言葉の意味を理解することができない。

だというのに日色は何故ハジメ達が疑問符を浮かべているかがわからないとでも言うように首を傾けている。

数秒後、いち早く再起動した雫が「えーと、ちょっと待ってね」と呟きながら少しの間眉間をほぐしながら日色へと話しかける。

「えーと、旅立つ？」

「ああ」

「誰が？」

「俺が」

「どこを？」

「王城を」

「いつ?」

「明確には決まってるがないが五日以内には……もういいだろう? 明日は早いんだ、もう寝させて——」

「いい訳がないでしょうが!!」

ダルそうに溜息を吐く日色に雫が叫び日色の肩を掴んでガクンガクンと揺さぶる。

そんな雫に日色は内心『解せぬ』と思いながらも「じゃあ、何が悪いんだよ」と呟くと、その言葉に雫はブチリツと青筋が浮かび上がった。

「全部よーぜ、ん、ぶ!! どうしてそんな重要なことを言わないのよ! ああ、もう! 昔の頃と一切変わってないわね!! 日色ツ! そこに正座しなさいっ!」

「いや——「い、い、か、ら、言、う、こ、と、を、聞、き、な、さ、い、ッ!!!」……わかった」

雫ちゃん、マジ怒である。

あまりの怒気により、あの日色もおとなしく正座し、ハジメと香織はとぼつちりを受けないように雫から怯えるように距離を離すしかない。

まさか雫がこれほど怒るとは思ってもいなかったのだろう、香織は「こんな雫ちゃん、初めて見た……」と小さく驚いたように呟いている。

ガミガミガミ! と日色へと説教している姿はもはや角を生やし雷が落ちたオカンに

しか見えない、そんな雫へとハジメは日色に助け舟を出すために雫へと話しかけるが――

「貴方っていつもそうよねッ！なんでそう大事なことをもう手遅れな時に言うのよ！！日色には圧倒的に報・連・相が足りてないのよッ！！報告連絡相談がつ！！」

「あ、あの、や、八重樫さん？そこまですておいたほうが……「ああッ!?」……ヒィ！……ごめんなさい！」

――残念、その助け舟はオカン雫の睨みによつてあつという間に撃沈してしまった。

しかし、一応効果はあつたのだろう、雫は一度深く息を吐いたあと冷静さを取り戻し、睨むような視線を日色へと向けた。

「……それで？貴方が出て行く理由は？まさか無いなんてないでしょうね？」

「そ、そうだよ！日色君はこの世界の人たちを助けようとは思わないの!？」

雫の言葉に続くように日色へと言葉を投げかける香織に日色はハアと溜息をついて「なあ、白崎――」と言葉を返した。

「救うって誰を救うんだ？」

「……………え？」

そんな、なんともないように疑問を香織に投げかけた日色に、香織は無意識に疑問の声を零してしまう。慌てて口を開き「そ、それは勿論——」と声を出そうとするが再び疑問を零す日色の言葉に遮られた。

「魔族だつて人の姿をしているんだぞ？ 人族を助けたいのなら魔族を殺す——要は人殺しを強制的にやらされそうになつてんだぞ俺達は、そこんとちやんと理解しているのか？」

そのような冷めきつた瞳で香織を見つめる日色に香織はゴクリと無意識に喉を鳴らしてしまう。わかつていたはずだ、これから自分達は殺し合いをするのだと。香織はちやんと理解している、だがだからこそ思つてしまうのだ。自分達は勇者だから大丈夫だろうと、相手は悪なのだから気にする必要は無く、自分達は正義だから必ず勝てるのだ、と。

異世界召喚という余りにも現実離れた現象にクラスメート達には現実感というものが薄くなつてしまつていなのだ。

「でも、魔族を倒さないと地球に戻ることは出来ないのよ？ 仕方ないじゃない」

言葉に詰まつた香織をフォローする様に会話に入ってきた雫の言葉に日色は少し眉を顰め、そして雫の言葉に呆れたように言葉を吐き出した。

「根拠は？」

「……………え？」

「だから根拠だよ根拠。 どうして地球に戻れると思ったんだ？あのイシユタルのジジイ共がもしかしたら魔族を倒せばなんとかの神が元の世界に戻してくれる『かも』しれないと言っただけだろうが。証拠は？根拠は？実際に俺達は元の地球に送還されたのを見たのか？実際に神様に会ったのか？いや、そもそも神なんているのか？この異世界に召喚されたのが何兆分の一の確率で俺達の教室で起きた『現象』で、あのジジイ共がその『現象』を神だと思っただけかも知れないのに？ちよつと考えただけでこれだけの疑問が出てきたんだぞ、なぜお前ら、テンプレ勇者達は疑問に思わない？これだったら王立図書館で情報を集めていたハジメの方が何倍もマシだ。 だというのにあのテンプレ勇者め、何が訓練をサボっているだよ…脳筋か？脳筋なのか？どこの誰が喜んで殺しの技術を学ばなきゃ行けないんだよ……」

「日色、だんだん只の愚痴になってきているよ」

徐々にただの愚痴になり謎の苦勞人オーラを放出させてきた日色にハジメはブレーキをかける。しかし、日色を落ち着かせながらもハジメは内心日色の言葉をその通りだ、と肯定していた。異世界に飛ばされ、いきなり殺し合いをさせられるのは冷静に考えればおかしいのだ。

貴方は勇者です、貴方は強力な力を持っています、だから私達の代わりに私達の敵を

全滅させてくださいと言われているようなものだ、それにハイと躊躇なく答えるものがあったとすればそれは文字どうり命を捧げた軍人か、ただのサイコパスである。ましてやありふれた高校生である自分達がそう簡単に命を奪うことなどできるわけもない。……まあ、日色がこれほどまで考えていたのは予想外だったが。

ハジメはちらりと日色から視線を外し香織達を見ると、香織は悲痛そうな表情で両手を胸で握り、雫は目を伏せ、自分の認識が甘い事を理解したのか、ベットのの上に置かれた手を強く握っている。

そんな彼女達を差し置いて日色はフウと一度息を吐いた後、再び口を開いた。

「……それに、ハジメも気づいているだろう？この国の歪さに」

「……うん、異常な程の神への信仰だよな」

日色はそのハジメの言葉にその通りだ、とでもいうようにコクリと頷いた。

「そうだ、この国の信仰の深さ、それが余りにも深すぎる。正直言つて狂気じみているレベルだな。冷静に考えてみる、人間族の存続の危機にいるかもわからない神様が選んだどこの馬の骨も知らない少年少女を勇者として一切疑わず尊敬の気持ち悪い視線を向けているんだぞ。普通におかしいだろうが」

「そ、それもそうね……」

さらりと毒を吐く日色に雫達は苦笑いするしかない。



「——以上が、俺が王城を離れる理由だ。幸いにも俺は役立たずだしな、どうせいなくなってもクラスメイトたちの支障にはならない」

「あなたの場合、そうなるように動いてたからでしょうが」

日色の思惑をようやく理解した雫は手を強く握りしめ、歯を食いしばる。

日色の狙い、それは自分の重要性を最底辺に下げること。クラスメイト達の認識を下げ、いなくても構わないような状況に持ち込んだのだ。

自分達には圧倒的に情報が足りない、故に日色は自分の存在価値を下げ、自分が王城を離脱することで単独で情報を集めるのだ。もし、これで仮に雫や香織達が離脱してしまえば重大な役割が空いてしまうことでクラスメイト達に混乱が生じてしまうだろう、内部分裂が起こってしまうかもしれない。光輝によつてまとめあげられたクラスメイト達は少しでも重大な人物が居なくなってしまうえば亀裂が奔ってしまうのだ。

「だ、だったら私も一緒に——」「だめよ（だ）——ど、どうしてっ!」

慌てて香織が日色についていく事を言葉にしようとすればそれを言い切る前に日色と雫に遮るように拒絶された。

「香織、今貴女が抜けたら皆が混乱するわ。今は光輝のおかげでどうにかなっているけど『無能』の肩書きをつけられた南雲ちゃんはともかく私や貴女がいなくなったら混乱を招くわ。日色も……それが分かっているから今まで言わなかったのよ」

「そんな……」

悲痛な香織の声が溢れる。慌てて日色の方を違つて欲しいという願いを込めて顔を向けるが、日色は何も喋らない。つまり、それは肯定の意を示していた。

そんな香織を置いて、雫は日色へと視線を向け再び質問を行う。

「日色、本当に行くのね」

「……ああ」

「だったら南雲ちゃんは どうするのよ。もちろん、どうするかなんて考えているのよね？」

その雫の言葉に日色の眼は見開き、口を開いてまるで『忘れてました』とでも言うような驚愕の表情を取った。

「……………あ」

「……………忘れてたのね」

雫は頭に手を置いて、肝心なところを忘れてしまっている日色に溜息をついてしまう。

またまた日色への怒りが湧いたがここで出しても仕方ないだろう。雫はハジメへと視線を向けて微かに表情に影が差したハジメへ声をかけた。

「それで、南雲ちゃん。貴女はどうするの？このまま此処にいるか、日色と共に行くか。

貴方の自由よ、好きに決めなさい」

「え？あ、ぼ、僕は……」

その雫の言葉にハジメは慌てて口を開くが、学校にいる彼女とはまるで別人のように表情に影が差し、声も少々小さく、心細い。

「……少し、考えさせて欲しいな。まだ……答えが出来ていないんだ……」

「そう、意外ね。てつきり日色についていくと即答するかと思ったのに……」

「あの……八重樫さん？僕をなんだと思ってるの……？」

「ふふ、冗談よ」

そう言っつてハジメをからかって小さく笑う雫にハジメの表情は若干引きつっている。

そうして笑い終わると雫はベットから立ち上がった。

「それじゃあ、私は部屋に戻るわ。香織はどうする？」

「……えっと、私は日色君達とまだ話したいことがあるから……」

「……そう、それじゃあ早く戻って来なさいよ。日色、南雲ちゃん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

「うん、おやすみなさい。八重樫さん」

そう挨拶を残し、小さく手を振って雫は部屋を出て行った。



バテてはいなかっただろうか？  
耐えることができただろうか？

雫は香織との共同部屋にある自分のベットで布団を被りながら小さくそう思う。

現在の彼女の手は小刻みに震え、まるで自分を抱きしめるように両腕を手で掴み、怯える子供のように身体を震わせている。

知りたくなかった。

日色が王城を離れようとしていることに。

私達から離れようとしていることに。

分かっている。

自分たちが何よりも必要なのは地球に戻る方法ということに。

だからこそ、日色が取ろうとしている行動は正しいものだろう。

だけど、

もし、

日色がそれが原因で死んでしまったら？

「……………違う」

止めよう、考えてはいけない。

そんなことは決して起こらないのだから。

だから、大丈夫だ。きつと、大丈夫。  
さあ、明日は早いのだ。早く寝ないと。

——ホントウニ？

◆ 雫の頬には小さな一つの透明の水滴が零れていた。

場所は変わって宿から少し離れた青白い月明かりが照らす小川沿いの歩道。

そこに二人の人影、日色と香織が居た。

何故、彼らがそんな場所にいるか？それは香織が日色と二人きりで話かしたいと言ってきたのでハジメにはいち早くベツトで寝てもらうことにしたのだ。

ハジメも最初は渋っていたがすぐ済むからという日色の言葉に仕方なく頷き、一足早くベツトで寝てもらった。

「——で、わざわざ二人きりで話したい要件とは何だ？」

月明かりの下、日色は月が映る川を少し眺めたあと、目の前の香織の方へと振り向いた。

「……ねえ、日色君。やっぱり、王城から旅立つのを変更することはできない……かな？」  
そう言つて服をかすかに握りしめながら言葉を零す香織に日色は小さく「……ああ」と呟く。

「……どうして？」

「地球に戻らなければならないからだ。クラスメイト一丸となつて魔人族を全滅させても元の地球に戻してくれる確証がない以上、国を回つて情報を集めないといけないからな」

淡々と感情を感じさせない声色で語る日色に香織の表情に影が差し、胸のあたりで服を握りしめる力が強くなる。胸から溢れそうになる何かを香織は無理矢理押し込んでどうにか「…そっか」と呟くことができた。

「日色君は、変わらないね。どんな時でも真つ直ぐで……ねえ、日色君。初めて私と出会つたこと覚えてる？」

「……いや、覚えていない」

日色は少し顎に手を置いて昔のことを思い出すような仕草を数秒したがすぐに軽く頭を横に振るい、否定の言葉を零した。

「中学二年の時にね、小さな男の子とおばあさんが、不良っぽい人に囲まれてたときの事  
なんだけど……」

「——ああ、あの時のことか。確かそんなこともあったな」

まるで大切な思い出を語るかのように話す香織に日色は昔のことをようやく思い出したようで、手の平をポンツと叩いた。

「あの時、私は怖くて何もできなかったの。強い人の助け方しか知らないから自分は強くないから誰か強い人が助けてあげてと思うだけだった、だから日色君が助けてに言ってくれたのはすごく嬉しかったの」

そう言つて、朗らかに微笑む香織に日色は「別に助けようとしたわけじゃない」とぶつきらぼうに言葉を零す。

「あれはただの八つ当たりだ。それに助けることだったらあのテンプレ勇者の方が多くの人を助けているだろうが?」

日色は波打つように流れている川を微かに見たあと、香織の方を向きまるで自分を自虐するように言葉を吐き捨てた。

その言葉に香織は小さく笑つて——

「違うよ、日色君」

その言葉を否定した。

「——何？」

「日色君はね、自分では気づいてないのかもしいないけど。光輝君や雫ちゃんのように強い人だから暴力で解決できるような人じゃないんだよ。私が初めて日色君に出会った時は光輝君達と同じ強い人だと思ってたんだけど、本当は違ったの」

そう、日色がクラス達に人気な理由は光輝達のようにヒーローとして助けてくれるからではない。日色の強さはそんなものではない、そのことはハジメも雫も、そして香織も知っている。

「日色君は、光輝君とは違って暴力で解決するんでもなくて、陰ながら困ってる人を助けてくれる優しい人なんだよ。他人の成長を願って、そのきっかけを作って、それでも自分は他人として陰ながら支えてくれる。だから私の中で日色君は誰よりも優しくして強い人になったんだよ」

それが、神代日色の強さ。全て自分の為と言いながら陰ながら誰かを助けようとし、あくまで表向きは他人として接し続ける。自分の為ということは逆に言えばどのようなことが起こっても他人のせいにしなないということなのだから。

日色は言葉を失った。

思わなかった。

まさか、香織に自分がそう思われていたなんて、一欠片も思っていなかったのだから。



「——死なないで、日色君」

気がつくくと香織が正面にいて日色の手を包み込まれていた。

彼女の声色は普段のような元気な彼女らしくなく、不安にまみれている。

瞳は潤んで、今にも涙がこぼれ落ちそうだ。

「ずっと不安なの。日色君がいつか遠くに消えてしまっくんじやないかって」

「……………」

「今日の夢だつてそう……………日色君がいたんだけど……………声を掛けても全然気がついてくれなくて……………走っても全然追いつけなくて……………最後には……………」

徐々に、彼女の声に嗚咽が混ざっていく。

「……………最後には……………消えちゃうの……………」

日色は沈黙を保っていた。

香織の体勢が徐々に日色へと傾いていき、日色の胸へと香織の頭が触れ、小さな嗚咽が青白く輝く月下に響いていく。

香織は身体を震わせて日色の胸で嗚咽を漏らしていると、日色は溜息を吐いて「おい、白崎。顔を上げろ」と呟いた。

その言葉に香織は「……ふえ？」未だに止まらない嗚咽を漏らしながら顔を上げると

——ズドンツツ!!という音と共に香織の額に激痛が走った。

「——ふにゅツツ?!?!」

突然の激痛に香織は額を抑え痛みに悶えて涙目になってしまう。

「な、何するの——?!」

「震えは止まったか？」

「——え？」

いきなり何をするのか？

抗議の視線を香織は日色に向けるが、淡々とつぶやく日色に香織はおそるおそる手に視線を向けると、不安と恐怖で震えていた香織の手は既に震えは止まっていた。

「お前が俺を心配するのは嬉しいが、勝手に死ぬ前提で話をするな」

「で、でも——」

「でもじゃない。いいか、白崎。お前に心配されなくても俺は死なん。何があろうと生きて地球に帰ってやるよ」

そう、香織の不安を打ち消すように日色はそう宣言した。

傲慢に、そして大胆不敵に。

その言葉に香織は目を見開いて驚愕し――

「ふふ、日色君らしいなあ」

――つい、笑いを吹き出して、いつものようにくすぐったそうに笑った。

不安はある、恐怖も少し薄れたただけだ。だがそれでも、覚悟はできた。

だからきつと大丈夫だ。

「ほら、明日は早いんだ。早く戻――つておい」

日色は明日に備えて早く戻ろうと香織に声をかけようとすると、次の瞬間――

――香織に自分の腕を絡まれてしまった。

「ごめんね日色君。今だけは……こうさせて？」

「……拒否権は「ないよ」……チツ」

日色は歩きにくいため、香織を離そうとしたが、香織の声色に強い意志を感じたため、

日色は舌打ちをしたあと諦めることにした。

夜空を照らす月が二人の少年少女の道を照らす。

香織は腕から感じる日色の体温を感じながら、小さく思う。

（日色君は……私が守るよ）

そんな決意をした香織を置いておいて、対象者となった日色は彼女に片腕を抱かれながら思う。

『あーッ！腕に胸が当たってんのに死の恐怖を感じすぎてそこまで喜べねえ!! てゆうかなんなの？どうしてハジメに起こるフラグが俺に建ってんの？どうして落下フラグ成立してんの？馬鹿なの？アホなの？死ぬの？死ぬのは俺だけだなっ！アツハツハツハツ!!!（乾いた笑み）……念の為に『アレ』の数増やしておこう』

やっぱり、この男にはどうあがいてもシリアスが通用しないのだろうか？

## トラップは主にバカ共のせいで引っかかる

次の日、日色達は「オルクス大迷宮」の正面入口がある広場に集まっていた。

ハジメとしては薄暗い陰気な入口を想像していたのだが、まるで博物館の入場ゲートのようなしつかりした入口があり、受付窓口まであった。制服を着たお姉さんが笑顔で迷宮への出入りをチェックしている。

『モ〇ハンですね、わかります』

そんな思考をしている日色は放っておいて、どうやら受付窓口がある理由はステータスプレートをチェックし出入りを記録することで死亡者数を正確に把握するのだとか。戦争を控え、多大な死者を出さない措置だろう。

入口付近の広場には露店なども所狭しと並び建っており、それぞれの店の店主がしのぎを削っている。まるでお祭り騒ぎだ。

浅い階層の迷宮は良い稼ぎ場所として人気があるようで人も自然と集まる。馬鹿騒ぎした者が勢いで迷宮に挑み命を散らしたり、裏路地宜しく迷宮を犯罪の拠点とする人間も多くなったようで、戦争を控えながら国内に問題を抱えたくないと冒険者ギルドと協力して王国が設立したのだとか。入場ゲート脇の窓口でも素材の売買はしてくれるの

で、迷宮に潜る者は重宝しているらしい。

ちなみに日色は途中見つけた串に刺されタレを塗り美味しそうに焼かれている肉をこっそり買おうとしたのだが雫に強制的に引きずられていた、ハジメ曰く、日色は地味に食べられなくて涙目だったらしい。

しかし、迷宮の中に入ると外の賑やかさとは無縁であるように静かだった。

縦横五メートル以上ある通路は明かりもないのに薄ぼんやり発光しており、松明や明かりの魔法具がなくてもある程度視認が可能だ。緑光石という特殊な鉱物が多数埋まっているらしく、「オルクス大迷宮」は、この巨大な緑光石の鉱脈を掘って出来ているらしい。

一行は隊列を組みながらゾロゾロと進み、日色とハジメは最後尾で辺りを見渡しながらかついていく、しばらく何事もなく進んでいると広間に出た。ドーム状の大きな場所です天井の高さは七、八メートル位ありそうだ。

と、その時、物珍しげに辺りを見渡している一行の前に、壁の隙間という隙間から灰色の毛玉が湧き出てきた。

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

その言葉通り、ラットマンと呼ばれた魔物が結構な速度で飛びかかってきた。

ラットマンという名称に相応しく外見はねずみっぽいが……二足歩行で上半身がムキムキだった。八つに割れた腹筋と膨れあがった胸筋の部分だけまるでボディビルダーのように毛が無く、そして瞳は殺意に濁っており、どこかの夢の国の鼠とは大違いである。……まあ、某夢の国の鼠も時と場合によっては恐怖を感じるのだが。

一行の最前列である光輝達は（頬が引き攣っている雫がいたが）訓練通りに間合いに入ったラットマンを光輝、雫、龍太郎の三人で迎撃し、その間に、香織と特に親しい女子二人、メガネっ娘の中村恵里とロリ元氣っ子の谷口鈴が詠唱を開始。魔法を発動する準備に入る。クラスメイト達が何度も行ったありふれたフォーメーションだ。

光輝は純白に輝くバスタードソード「聖剣」を高速で振るい、ラットマンを数体をまとめて葬っている。

「聖剣」とはハイリヒ王国が管理するアーティファクトの一つであり、光属性の性質が付与されており、光源に入る敵を弱体化させると同時に自身の身体能力を自動で強化してくれるという「聖なる」というには実に嫌らしい性能を誇っている。ちなみに口色は「聖剣」という銘をつけた王国のネーミングセンスに若干呆れていたりする。

龍太郎は、空手部らしく天職が「拳士」であることから籠手と脛当てを付けている。これもアーティファクトで衝撃波を出すことができ、また決して壊れないのだという。

日色は「どんな理屈だよ」と呟いていたがこれもまあ、魔法という謎現象のおかげなのだろう。

龍太郎はどつしりと構え、見事な拳撃と脚撃で敵を後ろに通さない。無手でありながら、その姿は盾役の重戦士のようである。

雫は、サムライガールらしく「剣士」の天職持ちで刀とシャムシールの中間のような剣を抜刀術の要領で抜き放ち、一瞬で敵を切り裂いていく。あまりの洗練された技に騎士団員をして感嘆させるほどである。

日色は冷めた瞳で、ハジメは自分との力の差に乾いた笑みを浮かべながら彼らの活躍を見ていると詠唱が響き渡った。

「「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——「螺旋炎」」

後衛の三人が同時に発動した螺旋状に渦巻く炎がラットマン達を吸い上げるように巻き込み燃やし尽くしていく。「キイイイツ」という断末魔の悲鳴を上げながらパラパラと降り注ぐ灰へと変わり果て、絶命していく。

気がつけば他の生徒達の出番なく、ラットマン達は絶滅していた。光輝達のステータスでは一層の魔物は弱すぎるらしい。

よく言えばオーバーキル、悪く言えば死体蹴りだった。

その証拠にメルド団長も苦笑いをしていた。



「ああ、うん、よくやったぞ！ 次はお前等にもやってもらおうからな、気を緩めるなよ！」

「気を抜かないよう注意するメルド団長だが初めての迷宮の魔物討伐にテンションが上がり、頬が緩む生徒達に「しようがねえな」とメルド団長は肩を竦めるしかない。

「それとな……今回は訓練だからいいが、魔石の回収も念頭に置いておけよ。明らかにオーバークルだからな？」

そのメルド団長の言葉に香織達魔法支援組は、やりすぎを自覚して思わず頬を赤らめるのだった。

そんな彼らの活躍を見ながら日色とハジメは最後尾で完全に傍観者気取りで眺めていた。とはいえ、周りへの警戒を怠ることは無く、何が起きてもすぐに対処できるようにしていたが。

「やっぱり皆チート過ぎじゃないかなあ？ 白崎さんも非戦闘職なのにアレ程の魔法を出せるなんて……」

「まあ、仮にも全ステータスが100を軽く超えている奴らだからな、俺達とは違ってこの辺りの魔物なんて相手にならないだろう」

「微かに落ち込んでいるハジメを日色は慰めながら列へと続いていくと。

「クッ、数匹抜けたぞ！」

そんな声が前方から聞こえてくる。どうやら、前衛組が相手にしていた魔物の——日色を見ると2——いや3匹、ラットマンや犬のような魔物が此方へと向かってきている。

「どうやら前との列を離れすぎたことで日色達が標的に選ばれたらしい。」

「——つと、話していると魔物が来たな。ハジメ、行けるか？」

「う、うん。だ、大丈夫だよ……多分」

そう少し体を震わせながら鞘に入ったナイフを抜きながら呟くハジメに日色は小さく微笑む。

「だったら安心だ——じゃ、行くか」

そうして日色が腰に差している剣を抜刀の体勢になりながら、襲い掛かる魔物達を迎え撃った。

◆ 最初に日色達に襲いかかったのは一匹のラットマンだった。

日色達の距離が二メートルを過ぎた途端、跳躍し一気に毛がついていないムキムキの右腕で殴りかかる。

それに反応するように前に出たのは日色である。襲い掛かるラットマンの右腕に沿うように剣を抜き放ち、右腕を剣で撫でながら軌道を逸らしていき、打ち出された右腕

は空を切る。

「——シッ！」

そのまま剣を反撃とばかりにラットマンの喉元に向けて剣を振るう。

振るった斬撃は寸分の狂いもなくラットマンの喉元へと直撃し、肉を切り裂くが——  
「キイツ！」

突然の喉元の痛みにラットマンは悲鳴の叫びを上げるが、それに反して日色の顔色は優れない。

（——チツ、浅い！）

元々の日色の低いステータスでは一撃で魔物を殺すことはできない、その為に喉を狙ったのだがラットマンの攻撃をハジメにも当たらないように逸らすことに力を使ったことで勢いが足りなかったようだ。

しかし、日色はそれだけでは止まらない。

仕留め損なつたと認識した途端、身体を一気に旋回。再び勢いを乗せた横薙ぎの斬撃を喉元にかけて振るう。

全身の捻れを利用した斬撃はラットマンの喉を切り裂いて、続けざまに突きによる一撃を喉に放つことで万が一のラットマンの生存の可能性を無くし、絶命させる。

次にその止めを指した日色に襲い掛かる狼のような魔物にハジメが回り込むように

ナイフを片手に立ちふさがる。

「させない！」

「グルア！」

まるで邪魔だとしても言うように勢いよく跳躍し、ハジメの喉笛を噛み付くために襲いかかるが――

「錬成！」

――突如いきなりハジメの目の前の地面から出現した横幅40センチ高さ1メートル厚さ1センチの石壁が狼の魔物の突撃を阻み、突然の出現に狼の魔物は一切のスピードの減速ができず顔面にまるまるぶつかってしまい石壁に罅を入れながらも脳を揺らしてしまふ。

突然現れた石壁、それはハジメのスキル「+高速錬成」による錬成である。寝る間も惜しんで錬成を日頃から行っていた成果が今ここで発揮されたのだ。

「錬成！――やあ！」

石壁に激突したことで動きを止めてしまった狼の魔物の隙を逃さずハジメは罅が狼の魔物がぶつかったところから放射状に奔り今にも壊れそうな壁を蹴りで壊すことで、狼の魔物へと壁の破片を飛ばし、狼の魔物を怯ませる。

ハジメが生み出した壁の厚さがわずか1センチ程で錬成したのは魔物の勢いのある

程度落とすためであり、もし壁が壊れなければ、ハジメが自ら壊すことで破片を飛ばし、相手を一瞬だけ怯ませるためだったのだ。

狼の魔物が怯んだ隙に左手を地面に着き、再び錬成を行うことで狼の魔物の足元に十数センチの落とし穴を作り、動けなくなった狼の魔物の喉仏をナイフで切り裂き絶命させる。

「グギイ!!」

断末魔と共に息の根が止まったことを確認したハジメはフウと呼吸を整えるために息を吐こうとするがそのハジメの死角から最後の狼の魔物が襲い掛かり――

「グギヤ!!」

「油断大敵だ、ハジメ」

――横から現れた日色が剣を振るい息の根を止めた。

「う、うわっ！ひ、日色、ありがとう！」

「気にするな。それにしても上手かったぞ、その錬成の使い方」

「えへへ、そ、そうかな？」

日色の称賛にハジメは妙にくすぐったい気持ちに襲われ照れてしまい、つい頬が緩んでしまう。

取りあえず、こちらに向かってきた魔物はこれで全てなのでこれで一息つけるだろう

う。

「ところでハジメ、魔力は大丈夫か？」

「う、うん。錬成は工夫してある程度消費は抑えてるからあと二、三回は大丈夫だと思うよ」

「……そうか、あと一回程になったら魔力回復薬を飲んでおけ、余裕はある程度ある方がいいからな」

「……うん、わかっている。改めて思うけどやっぱり、こうして命を奪うのはなれないや」

ハジメは鞘にナイフを収め、我ながら情けないよと苦笑しながら日色に呟くと日色は若干呆れた表情でハジメの額を小突いた。

「イタッ！」

「全く、何を当たり前のことを言っている。そう簡単にハジメが命を奪うのに慣れてしまったら逆に困るだろう、別に情けないことじゃない」

「そう……なの、かな？」

「ああ、今のままで大丈夫だ。ほら、さっさと進むぞ、前の奴らと距離が少し離れてしまったからな」

そう言い、前へと向かう速度を速める日色の言葉にハジメは心が軽くなったのを感じた。命を奪ったことに対しての気持ち悪さや忌避感が残っていても、それを気にするの

は当たり前で、決して情けないことではない。そう言ってくれる日色にハジメはまた励ましてもらったな、と思いつながら日色の後を追いかける。その足取りはいつもより軽くハジメは感じた。

その後も日色とハジメは時々抜けてくる魔物相手に時に騎士たちの手を借りながらも戦闘訓練を行っていた。

二人とも、時に魔物を足止めし、時に片方が囷になりながら、お互いを支え合いながらも確実に相手を仕留めていく。もともと4倍きのステータス相手に反応できる日色とそんな日色に教えられたハジメだ、お互いを支え合い、支援しながら戦うことで一切の怪我を生み出すことは決してなかった。

ハジメは『錬成』を、日色は少しながらも『剣術』を交えた戦闘術を多用しているため魔力のステータスの伸びがよく、レベルも4つも上がっていた。そんな二人に度肝を抜かれたのは騎士たちである。

非戦闘職であるため、「この二人に戦闘は無理だろう」全く期待していなかった――が、蓋を開けてみるとどうだろうか？

お互いの息の合うコンビネーションに、戦闘方法の創意工夫。己のスキルの予想外の使い方、そして冷静な判断に行動。

この二人の戦い方は前線で戦っている光輝達に引けをとっておらず、『全体を見る』と

いう戦闘方法の中ではクラスメイト達の中で群を抜いていた。

「ハジメ！」

「うん！、任せて！」

襲い掛かるトカゲのような魔物を日色は蹴り飛ばし、地面に叩きつけられた瞬間、ハジメの『錬成』がトカゲの前足を地面に固定させ、その隙にハジメがナイフで喉仏を斬り裂いた。

「ギューッ！」

悲鳴を上げながら命を落としたトカゲの魔物を確認した後、ハジメはようやく安堵の息を吐いて、日色の元へと向かった。迷宮に入っておよそ2、3時間。ハジメと日色の戦闘回数は2桁を超えており、現在の階層は19階層まで来ていた。今回の実戦訓練は21階層までが目標なのでもう少して終わりである。

「やったね、日色！今回も完璧だよ！」

「……まあ、そうだな。事前に戦い方を相談していたのが功を奏したんだろう、ところでハジメ、魔力は大丈夫か？そろそろ厳しいだろう、魔力回復薬を飲んでおけ」

「う、うん。わかった」

日色の指示通りに魔力回復薬の蓋を開け、口をつけるハジメを横目に日色は周りに注意を向ける。



どうやら現在は小休止に入ったため、辺りの警戒は騎士たちが代わりに行ってくれるらしい。

ふと前方を見ると日色は香織と目が合った。香織は日色へと微笑んでいるが、正直言ってみてあまり関わりたくない日色はサツ、と目を背け香織をガン!!と落ち込んでいた。……ちなみに香織の隣では雫が若干勝ち誇った表情をしているのが気になるくらいである。

日色はそんな彼女達を横目に見、すぐに視線を変えようとするやと突然、背後からねばつくような、負の感情がたつぷりと乗った不快な視線を感じた。その視線は教室などで感じていた類の視線とはとは比べ物にならないくらい深く重い。

日色はその視線の主が誰かは悟っているものの、その主の目的を考え、いい加減うんざりする。

(……玉碎覚悟でさっさと告つちまえばいいのに、ハジメがアレだから可能性はあると思うんだが……)

日色はそう思いながら、深々と溜息を吐くのだった。

一行は20階層を探索する。

迷宮の各階層は数キロ四方に及び、未知の階層では全てを探索しマッピングするのに数十人規模で半月から一ヶ月はかかるといのが普通だ。現在は四十七階層までは確

実なマツピングがなされているので迷うことはないだろう。

二十層の一番奥までたどり着くと、鍾乳洞を思わせる複雑な地形の部屋に出た。一行は滑らかなツララ状にとげとげとした壁や足場に横列を組めず、縦列を形成して進んでいく。

すると、先頭を行く光輝達やメルド団長が立ち止まった。訝しそうなクラスメイトを尻目に戦闘態勢に入る。どうやら魔物のようだ。

「擬態しているぞ！ 周りをよく注意しておけ！」

メルド団長の言葉に一行は目を凝らすと、壁の一部が揺らいでいるのが見えた。その揺らぎが大きくなったと思った瞬間、その場に褐色の毛に覆われたゴリラの如き魔物達が出現した。出現と同時に威嚇のドラミングを始める。

どうやらカメレオンのような擬態能力を持ったゴリラの魔物のようだ。

「ロックマウントだ！ 二本の腕に注意しろ！ 豪腕だぞ！」

そのメルド団長の言葉が言い終わるか否か、そのロックマウントが飛びかかり、メルド団長が言う豪腕を振るう。

飛びかかってきたロックマウントの豪拳を龍太郎が迎え撃ち、光輝と雫が取り囲もうとするが、鍾乳洞的な地形のせいで足場が悪く思うように囲むことができないうだ。

ロックマウントもまた、状況の悪さに態勢を立て直そうと後ろ向きに飛び退いた。着



なんと、投げられた岩もロックマウントだったのである。空中で見事な一回転を決めると両腕をいっぱい広げて香織達へと迫っていく——フゴフゴ荒い鼻息と血走った目付きで。

その光景に香織も恵里も鈴も「ヒイ！」と思わず悲鳴を上げて魔法の発動を中断してしまう。

「（こらこら）、戦闘中に何やってる！」

咄嗟にメルド団長が向かってくるロックマウントを切り落とし、苦言を呈する。青褪めたまま香織達が「す、すみません！」と謝るものの、持ち直せてはいないようだ。

まあ、お気づきの方もいるだろうがそんな様子を見てキレる若者が一人。正義感と思い込みの塊、我らが勇者（笑） 天之河光輝である。

「貴様……よくも香織達を……許さない！」

どうやら気持ち悪さで青褪めているのを死の恐怖を感じたせいだと勘違いしたらしく、『キサマア！許さんぞー！』とばかりに怒りを見せ、その光輝の怒りに呼応してか彼の聖剣が輝き出す。

『あつ……………（察し）』

「万翔羽ばたき、天へと至れ—— // 天翔閃！」

「あつ、こら、馬鹿者！」

メルド団長の声を無視して、光輝は大上段に振りかぶった聖剣を一気に振り下ろした。そしてそれと同時に日色の目が死んだ。

その瞬間、詠唱により強烈な光を纏っていた聖剣から、その光自体が斬撃となつて放たれた。

もちろん逃げ場などなく曲線を描く極太の輝く斬撃が叫び声をあげることも許さずロックマウントを縦に両断し、更に奥の壁を破壊し尽くしてようやく止まった。哀れなロックマウントに合掌。

パラパラと部屋の壁から破片やら埃やらが落ちる中、「ふう〜」と息を吐きイケメンスマイルで香織達へ振り返った我らの勇者（笑）光輝様。香織達を怯えさせた魔物は自分が倒した。もう大丈夫だ！と声を掛けようとして、案の定笑顔で迫っていたメルド団長の拳骨を食らったのだった。

「へふう!？」

「この馬鹿者が。気持ちにはわかるがな、こんな狭いところで使う技じゃないだろうが！崩落でもしたらどうすんだ！」

メルド団長のお叱りに「うっ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪する光輝。ざまあである。

その時、ふと香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「……あれ、何かな？ キラキラしてる……」

その言葉にその場にいた全員が指さす方向に視線を向ける。するとメルド団長が一瞬目を細めて、感心したように目を大きく開き、キラキラの正体を語ってくれた。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しいな」

香織の見つけた青白く発光する鉱物。その名をグランツ鉱石と言い、加工したものは涼やか且つ煌びやかな宝石となる。この世界においては婚約指輪に使う宝石として貴族のご婦人ご令嬢方に非常に人気があるものだ。ざつと言えば宝石の原石みたいなものである。ちなみに求婚の際に選ばれる宝石としてもトップ三に入るとか。

「素敵……」

香織が、メルドの簡単な説明を聞いて頬を染めながら更にうつとりとする。そして、誰にも気づかれない程度にチラリと日色に視線を向けた。ちなみにその行動に気づいた雫はこっそり闘志を燃え上がらせ、もう一人は恨みや妬みを心に湧き出していたが。「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言つて唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登っていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「……！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ！」

メルド団長が焦るのも無理はなかった。迷宮で最も警戒しなければならぬのは魔

物ではなくトラップであり、致死性のトラップも数多い為、フェアスコープと言う道具によつての安全確認が必須なのだ。

「フェアスコープ」とは魔力の流れを感知してトラップを発見することができるという優れたものの道具である。迷宮のトラップはほとんどが魔法を用いたものであるから八割以上はフェアスコープで発見できるのだが索敵範囲がかなり狭いのでスムーズに進もうと思えば使用者の経験による索敵範囲の選別が必要だ。

しかし、檜山は「チツ、うっせえな」と小さく呟き、聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった。

「――ハジメ、今すぐ数歩下がれ」

「え？ 日色、どうしたの？」

そして、それと同時に日色はハジメへと呼びかけた。

その言葉に疑問の言葉をかける日色にハジメは疑問符をあげ、聞き返そうとするが、日色が瞬間、真剣な表情になり、ハジメへと怒気のある声で言葉を投げかける。

「いいから従え!!――アレは、やばい!」

その怒気のある言葉にハジメが困惑するその頃、メルド団長が檜山を止めようと追いかけており、その中騎士団員の一人がフェアスコープで周囲を確認すると顔を青褪めさせて叫ぶ。

「団長！ トランプです！」

「ッ!？」

「クソッ！」

「え？——うわっ！」

しかし、メルド団長も、騎士団員の警告も一歩遅かった。慌てて日色はハジメの声を無視し、ハジメを部屋の外へと突き飛ばす。

檜山が「よっしゃあ」とグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝きに魅せられて不用意に触れた者へのトランプである。

魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。まるで、召喚されたあの日の再現だ。

しかし、ハジメは日色に突き飛ばされたことで魔法陣の中に入っていかない！

「くっ、撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達は行動を移そうとするが、遅い、遅すぎる。

光が輝き、全員の視界を真っ白に染める中、日色は次の出来事に言葉を失った。

助けようとした。逃がそうとした。自分の命を置いて、助けたハジメが再び日色へ手を伸ばして、部屋に入ってきていることに。

「日色っ！」



「ツー、バカ野——」

——郎と日色が言い終わる前に視界が真っ白に染まり、一瞬の浮遊感に包まれた。日色達は空気が変わったのを感じ、次いで、ドスンという音と共に地面に叩きつけられた。

ハジメは尻餅を吐き、尻の痛みに呻き声を上げながら、ハジメは周囲を見渡す。

クラスメイトのほとんどはハジメと同じように尻餅をついていたが、メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒は既に立ち上がって周囲の警戒をしている。

どうやら、先の魔法陣は転移させるものだったのだろう。現代の魔法使いには不可能な事を平然とやってのけるのだから神代の魔法は規格外である。

ハジメ達が転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざつと百メートルはあり、天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えない深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。橋の横幅は十メートルくらいありそうだが、手すりどころか縁石すらなく、足を滑らせれば掴むものもなく真っ逆さまだ。ハジメ達はその巨大な橋の中間にいた。橋の両サイドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見える。

それを確認したメルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばした。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

生徒達はメルド団長の轟く声に、必死になって階段へと向かおうとする。ハジメもそんな中、急いで指示通りに動こうとしたがふと、日色を見ると、日色は一切体を動かさず、メルド団長が指示した階段の逆の方向を見つめていた。

一切目を逸らさず、歯を食いしばりながらもとても険しい表情で。

「——日色？」

「……クソッ。やっぱり、変えられないのか」

小さく呟かれた日色の言葉をハジメは理解することができなかつた。

しかし次の瞬間、生徒達が向かう上り階段の手前に、赤黒い光で描かれた数多の魔法陣が浮かび上がり、そこから足場を埋め尽くさんばかりの大量の骸骨が現れる。

そして、日色が一切目を逸らさず見つめている通路側の橋から直径十メートル近い魔法陣が不気味に発光し、周辺を赤黒く照らす。

その大きな魔法陣から現れたのはこれまで相手取ってきた魔物とは一線を画す巨大さを誇る魔物だった。

瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っているトリケラトプスのような体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物。

その名を呆然と見つめるメルド団長の呻く割にやけに明瞭に響く言葉で呟いた。

——まさか……ベヒモス……なのか……

物語が、回り始めた。

## たとえ命を懸けてでも 上

橋の両サイドに現れた赤黒い光を放つ魔法陣。通路側の魔法陣は十メートル近くあり、階段側の魔法陣は一メートル位の大きさだが、その数が尋常ではない。

階段側である小さな無数の魔法陣からは、百体を上回る骸骨の魔物“トラウムソルジャー”が溢れ、しかも一メートルほどの魔法陣はその数を減らすことなく、未だに骸骨を呼び出し続けている。

“トラウムソルジャー”は空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。

しかし、反対側の通路側から出現した魔物はハジメの目から見てもヤバイと思わせる物だった。

体長十メートル級の四足に瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っている魔物“ベヒモス”は、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。

「グルアアアアアアアアア!!」

「ッ!?!」

「どうやらその咆哮で正気が戻ったのだろう、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン！ 生徒達を率いて『トラウムソルジャー』を突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ！」

「待って下さい、メルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！ ヤツは六十五層の魔物。かつて、『最強』と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！ さっさと行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

メルド団長の鬼気迫る表情に一瞬怯むも、「見捨ててなど行けない！」と踏み止まる光輝。

しかし光輝とメルド団長とのやり取りなどお構いなしに、ベヒモスはその巨体を躍動させ、突っ込んでくる。

そうはさせるか！とでも言うように突進による被害を防ぐべく、カイル、イヴァン、ベイルの三人が同時に二メートル四方で最高級の紙に書きつけられた魔法陣を使い詠唱をする。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を

通さず、  
“聖絶”!!”

二メートル四方の最高級の紙に描かれた魔法陣と四節からなる詠唱、さらに三人同時発動。一回こつきり一分だけの防御であるが、何物にも破らせない絶対の守りが顕現する。純白の輝きを放つ半球状の障壁が橋の中央に生徒達を包み込むように顕現し、ベヒモスの突進を受け止める。

衝突の瞬間、凄まじい衝撃波が発生し、ベヒモスの足元が粉碎される。橋全体が石造りにもかかわらず大きく揺れた。撤退中の生徒達から悲鳴が上がり、転倒する者が相次ぐ。

本来、三十八層に出没する魔物である“トラウムソルジャー”は、二十層までの魔物とは比較にならない力がある。前方に立ちはだかる不気味な骸骨の魔物と、後ろから迫る恐ろしい気配に生徒達は半ばパニック状態である。

隊列など無視して我先にと階段を目指してがむしやりに進んでいく。騎士団員の一人、アランが必死にパニックを抑えようとするが、目前に迫る恐怖により耳を傾ける者はいない。

その時、その中の一人である女子生徒が後ろから突き飛ばされて転倒してしまう。呻き声をあげ、どうにか顔を上げると眼前で一体のトラウムソルジャーが剣を振りかぶっていた。

「あ」

そんな一言と同時に彼女の頭部目掛けて剣が振り下ろされる。

死ぬ——女子生徒がそう感じた次の瞬間、その女子生徒へと襲い掛かる剣を阻むように横から空中を奔り、斬撃が間一髪、女子生徒の顔の寸前で押しとどめていた。

「クソツ、タレ！お前はさっさと下がれ！」

その斬撃の主は日色だ。日色は押しとどめている剣を無理矢理跳ね上げ、胴の空いたトラウムソルジャーを蹴り飛ばし、距離を離させる。

その隙に日色は倒れている女子生徒の襟を掴んで強制的に後ろに下がらせる。女子生徒が「きやあ！」という悲鳴をあげたが無視だ、今はそんなことよりも標的を日色へと変えたトラウムソルジャーを対処するほうが先決なのだから。

骨の身体のかせにどうしたらこれほどの速度で振るえるのかは不明だが動きが単調なため、対処するのは容易い。日色は自分へと襲い掛かる横薙ぎの一撃を体勢を倒れるように下げることと避け、倒れながら剣を振るう。狙いは骨だけな為、日色のステータスでも折ることができそうなトラウムソルジャーの足だ。

「ハアッ！」

日色の目論見通り、体は骨なため身体能力は高いが防御力はあまりないのだろう。ポキッ！という骨が砕ける音と共にトラウムソルジャーの片足は折れ、体勢を崩してしま

う。

それを確認した日色はハジメへと合図を出す。

「今だ、ハジメ！流せ！」

「錬成!!」

瞬間。トラウムソルジャーの足元の地面が突然隆起し、滑り台のように波打って数体のトラウムソルジャーを巻き込みながらも橋の端へと向かい、瞬く間に奈落へと落とした。

橋の縁から二メートルほど手前には、座り込みながら荒い息を吐くハジメの姿があった。ハジメは地面を錬成し、滑り台の要領で魔物達を橋の外へ滑らせて落としたのである。

日色は急いで助けた女子生徒へと駆け寄り、「さっさと立て！死にたいのか！」と若干怒気を含めた声で呆然となすすべとなっている女子生徒の手を強制的に掴み、立ち上がらせた。

「あ、ありがとう……！」

「礼を言う暇があつたらさっさと前に進め、冷静に戦えれば俺とハジメを除いて楽勝だろうが」

不機嫌そうに日色は頭を数回掻き、女子生徒の背中を軽くバンツと叩いた。



女子生徒は、パチパチと数回瞬きしたあと「……うん！」と元気に頷いた後、再び駆け出した。

その女子生徒の背中を見送った後、日色は小さくため息を吐くと、此方へとハジメが魔力回復薬を飲みながらやって来た。

「日色！大丈夫!?!」

「見たらわかるだろう、五体満足だよ。だが、状況が最悪だな。生徒全員がパニックになつてやがる、しかも肝心のテンプレ勇者がメルド団長のところにおいて、あの通路側の化物を倒そうと躍起になつてるしな。クソッ！あのバカ、状況が理解できてんのかよ！」

日色がハジメに状況を説明していると現状がどれほど絶望な状況か理解して、表情が徐々に不安に染まってきている。

現状、誰も彼もがパニックになりながら滅茶苦茶に武器や魔法を振り回しているのだ、このままでは、いずれ死者が出る可能性が高い。騎士アランが必死に纏めようとしているが上手くいっていない。そうしている間にも魔法陣から続々と増援が送られてくる。

(……クソッ、どうする?)

ある程度、事前知識がある日色だがだからこそ行動に移せない。ここで光輝の元へ行

き説得することはできるかもしれないが、だからこそ奈落に落ちる危険性があるため、日色は躊躇つてしまう。しかしこのまま何もしなければ更に全滅の可能性が高まるだけだ。

日色は必死に打開策を考えていると、背後でブツブツと呟いていたハジメが突如日色の腕を掴んだ。

「日色！ 僕が天之河さんを説得しに行くから、皆をお願い！ 日色だったら天之河さん程じゃないけどみんなに届くと思うから！」

「なっ！ 馬鹿な事は止めろ！ あつちにはあのベヒモスという化け物がいるんだぞ！ 第一、あのテンプレ勇者を説得できるのか！」

そう言って、ベヒモスがいる方向へ走ろうとするハジメを日色は咄嗟に片手で止め、言葉を零すが振り向いたハジメの決意に満ちた瞳にたじろいでしまう。

「これが最善手だよ、日色！ 誰も死なせずに皆で帰るにはこれしかないんだ！」  
「なっ！ おいつ……！」

ハジメはそう日色へと言うと、日色の静止を無視して光輝達のいるベヒモスの方へ向かって走り出した。

日色は咄嗟に手を伸ばすが、それ以上を進むことはできなかつた。

「クソッ！」

日色は自分を情けなく思い、悪態を吐いてハジメが向かった反対側、階段側へと走り出し、生徒達へと大声で指示を出す。

「お前ら！ いい加減落ち着け！ 俺より強いくせに狼狽えるな！！ 前衛側、バラバラにならず近くにいる奴らと隊列を組め！ 中衛は前衛の補助と騎士団員達の援護！ 後衛と回復はさつさと魔方陣を描け！！ 死にたくなければ訓練通りに行動しろ！！」

まるで、逃げている自分から目を逸らすように。



ベヒモスは依然、障壁に向かって突進を繰り返していた。

障壁に衝突する度に壮絶な衝撃波が周囲に撒き散らされ、石造りの橋が悲鳴を上げる。障壁も既に全体に亀裂が入っており砕けるのは時間の問題だ。既にメルド団長も障壁の展開に加わっているが焼け石に水だった。

「ええい、くそ！ もうもたんどぞ！ 光輝、早く撤退しろ！ お前達も早く行け！」

「嫌です！ メルドさん達を置いていくわけには行きません！ 絶対、皆で生き残るんです！」

「くっ、こんな時にわがままを……」

メルド団長は苦虫を噛み潰したような表情になる。

本来、この限定された空間ではベヒモスの突進を回避するのは難しい。だからこそ、

逃げ切るためには障壁を張り、押し出されるように撤退するのがベストである。しかし、その微妙なさじ加減は戦闘のベテランだからこそ出来るのであって、今の光輝達には難しい注文だ。

だからこそメルド団長はその辺の事情を掻い摘んで説明し撤退を促しているのだが、光輝は「置いていく」ということがどうしても納得できないらしく、また、自分ならばヒモスはどうにかできると思っているのか目の輝きが明らかに攻撃色を放ってしまっている。

おそらく自分の力を過信してしまっているのだろう、戦闘経験がないためまずは褒めて伸ばす方針が裏目に出たようだ。

「光輝！ 団長さんの言う通りにして撤退しましょう！」

どうやら雫は状況がわかっていているようで光輝を諫めようと腕を掴む。しかし——  
「へっ、光輝の無茶は今に始まったことじゃねえだろ？ 付き合うぜ、光輝！」

「龍太郎……ありがとな」

龍太郎バカの言葉に更にやる気を見せる光輝。それに雫は舌打ちする。

「状況に酔ってんじゃないわよ！ この馬鹿ども！」

「雫ちゃん……」

苛立つように声を出す雫に不安そうに声を出す香織。

その時、背後からひとりの少女が向かってきた。

「天之河さんっ!」

「南雲ちゃん!」

「な、南雲! どうしてここに!」

驚く一同にハジメは必死の形相で光輝へとまくし立てる。

「天之河さん! 早く撤退してください! このままじゃ! 皆が!」

「いきなりなんだ? それより、なんでこんな所にいるんだ! ここは君がいていい場

所じゃない! ここは俺達に任せて南雲は……」

「いいから早く撤退して!!」

ハジメを言外に戦力外だと告げて撤退するように促そうとした光輝の言葉を遮って、

ハジメは今までにない乱暴な口調で怒鳴り返した。あまりの勢いにハジメの瞳には若

干ながら潤んでおり、文字通りの必死さを感じ取れ、光輝は言葉を失った。

「後ろが見えないの! 皆がパニックになってるんだよ! 今は日色が指示しているからな

んとか耐えてるけどもう時間の問題なんだよ!!」

光輝の胸ぐらを掴みながら指を差すハジメ。

ハジメが指さした方向には生徒達が恐怖を滲ませながらも、所々ではお粗末な隊列を組み戦っているが、大半は訓練のことなど頭から抜け落ちたように誰も彼もが好き勝手

に戦っている。効率的に倒せていないから敵の増援により未だ突破できないでいた。敵も増えていくため死傷者が出るのも時間の問題だ。

「天之河さんだけなんだよ！皆の恐怖を吹き飛ばせるのは！みんなを助けられるのは！天之河さんはみんなが死んでもいいの!!？」

呆然と、混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見る光輝は、ぶんぶんと頭を振るとハジメに頷いた。

「ああ、わかった。直ぐに行く！メルド団長！すいませ——」

「下がれえ——！」

「——ッ!!れんせ——」

「すいません、先に撤退します」——そう言うおうとしてメルド団長を振り返った瞬間、その団長の悲鳴と同時に、遂に障壁が砕け散った。

暴風のように荒れ狂う衝撃波がハジメ達を襲う。咄嗟に、ハジメが前に出て錬成により一気に3つ石壁を作り出し、盾がわりに使おうとするが瞬く間に砕かれ吹き飛ばされた。

しかし、一気に三つ石壁を生み出したのが功を奏したのだろう、三枚中二枚が跡形もなく破壊されたが最後の一枚は大きな罅を生み出し、今にも壊れそうになりながらもなんとか耐え切ってくれたおかげでハジメは破片による少々の切り傷で済み、光輝達も対

したダメージは無いようだ。

舞い上がる埃をベヒモスの咆哮が吹き飛ばす。

そこにはハジメの生み出した防壁の範囲に入ることができなかつた団長と騎士が三人、倒れ伏し呻き声を上げており衝撃波の影響で身動きが取れないようだ。

「クツ……龍太郎、雫、時間を稼げるか？」

光輝が問う。それに苦しそうながらも確かな足取りで前へ出る二人。団長たちが倒れている以上自分達がなんとかする他ないだろう。

「やるしかねえだろ！」

「……なんとかしてみるわ！」

そう、言うと共に二人はベヒモスに突貫した。

「香織はメルドさん達の治癒を！」

「うん！」

光輝の指示で香織が走り出す。ハジメは既に団長達の元だ。戦いの余波が届かないよう石壁を作り出している。とにかく耐久性を上げてこれ以上騎士達を傷つけられる訳にはいかない。

そして光輝は、今の自分が出せる最大の技を放つための詠唱を開始した。

「神意よ！ 全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ！ 神の息吹よ！ 全ての暗雲を

吹き払い、この世を聖浄で満たしたまえ！ 神の慈悲よ！ この一撃を以て全ての罪科を許したまえ！——『神威』！」

極光が奔る。

詠唱と共にまっすぐ突き出した聖剣からは先の天翔閃と同系統だが威力が段違いな極光が迸り、橋を震動させ石畳を抉り飛ばしながらベヒモスへと直進する。

龍太郎と雫は、詠唱の終わりと同時に既に離脱している。かなりギリギリだったようで二人共ボロボロだ。この短い時間だけで相当ダメージを受けたようだ。

「これなら……はあはあ」

「はあはあ、流石にやったよな？」

「だいたいけど……」

龍太郎と雫が光輝の傍に戻ってくる。光輝は莫大な魔力を使用したようで肩で息をしていた。

それもそうだろう先ほどの攻撃は文字通り、光輝の切り札である。残存魔力のほとんどが持っていかれているためはや光輝の魔力は少ししか無い。

背後では、治療が終わったのか、メルド団長が起き上がりとしている。



そんな中、徐々に光が収まっていき土埃が舞うように揺れ動いて——  
(……………っ?)

その時、異変に気づいたのはハジメだった。

埃の動きがおかしい、まるで何かが光輝達の方向へと進んでおり、そのせいで何か動いた風圧で埃が動かされているような気がしたのだ。

それを視認した瞬間、ハジメは勢いよく光輝達の方向へと駆け出す。

別に気のせいかもしれない、だがハジメには妙な予感がしたのだ。何か嫌な予感がすると。

「みんな！今すぐそこから離れてッ!!」

ハジメのその悲鳴に叫びが光輝達の耳に届き、光輝がえ？という疑問の声を出そうとする瞬間——

——無傷のベヒモスが埃を・吹き散らすように光輝達の目の前に現れ、光輝達へと突撃したのだ。

完全に反応が遅れた。回避は不可能、防御なんてもつてのほかである。

光輝達は目の前に襲いかかるベヒモスの突撃を呆然と見つめ——  
「鍊——成ッ!!」

——寸前、ハジメが鍊成の最大効果範囲の5メートルの範囲に光輝達を捉える場所へと辿り着き鍊成を繰り出した。

一つは衝撃を抑えるため、光輝達の目の前に魔力を絞りに絞って石壁を生み出し、もう一つ、石壁を真横から生える様に光輝達へと生み出した。

ハジメの「+高速鍊成」とは一瞬で石壁などを生み出す技能である。逆に言えば壁を一瞬で生み出すことで物を射出兵器のように飛ばすことが可能なのだ。

高速で生える様に生み出された石壁は光輝を含めた雫や龍太郎達に直撃し、メルド団長達のいる方向へと吹き飛ばした。

瞬間、轟音と衝撃。

ベヒモスが石壁に直撃した瞬間、瞬く間に石壁を粉砕し、強大な衝撃を撒き散らした。光輝達は、ハジメの咄嗟の機転で直撃は喰らわなかったが、衝撃波をモロに浴びて吹き飛び、ゴロゴロと地面を転がりようやく止まった頃には、満身創痍の状態だった。

そして、それはまた5メートルという近距離にいたハジメも例外ではない。

「——あ、グ、ギイツー！ゴホッゴホッ!!」

ハジメはあまりの衝撃に全身を打ち付けられ、地面に叩きつけられた。あまりの衝撃

に内臓に少しダメージが入り、何度も咳き込んで少量の血を吐いてしまう。

視界が歪む、意識が錯乱する。

ようやくハッキリと視界ではどうにか動けるようになったメルド団長が光輝達の元  
に駆け寄って来ており、他の騎士団員は、まだ香織による治療の最中だ。

「お前等、動けるか！」

メルド団長が叫ぶように尋ねるも返事は呻き声だ。先ほどの団長達と同じく衝撃波  
で体が麻痺しているのだろう。

ハジメはどうかか身体を動かそうとするがもぞもぞと少しずつしか体を動かすこと  
しかできない。

メルド団長は香織を呼ぼうと振り返ろうとして、突如背後から悲鳴のような叫びに  
ギョツとした。

「南雲ちゃんっ!!は、早く逃げて!!」

「な、何っ!!」

メルド団長は慌てて倒れているハジメの方を向くと、そこにはハジメへと徐々に近づ  
いてくるベヒモスの姿があった。ハジメは光輝達を助けるために錬成の効果範囲であ  
る五メートルまで距離を縮めていた。光輝達はメルド団長達の方へと吹き飛ばしたた  
めベヒモスに最も近いのはハジメなのだ。

メルド団長はすぐさま助けに行こうとするが——勇者である光輝の救出を優先するべきである騎士団長としての判断か、ハジメを助けるべきか一瞬躊躇してしまった。

そして、その一瞬の躊躇が分かれ目だった。

ベヒモスが再び、突進し始めたのだ。標的は——最も近いハジメである。

「南雲ちゃん!!」

香織の悲鳴が聞こえた。



(……ああ、コレ、死んじやうのかなあ?)

ハジメは臆げな思考で、まるで他人事のように考えていた。

死にたくはない、確かに死にたくはないがこれはこれで仕方がないことだろう。

あの時、ハジメが助けなければ光輝や龍太郎、そして雫はおそらく死んでいただろう。

そうなった場合、日色はどうなるだろうか? 彼のことだ、きっと悲しむに違いない。

それだけは嫌だった。

日色が悲しむのだけは嫌だった。

だから、この行動に後悔はない。

ああ、だというのに——

——どうして泣きそうになるんだろう。

(まだ……死にたくないなあ……)

嫌だ、終わりたくない、まだ終わるわけにはいかない。

そうどこかでハジメは思ってしまったている。まだ、日色と一緒にいたいと。

だが、その願いはもう叶えられないだろう。目線を向けるとベヒモスが頭部の兜全体をマグマのように燃えたぎらせてこちらに向かって突撃していた。

おそらくあれを喰らったら即死だろう。

逃げることは不可能だ。助けも間に合わない。

だからハジメは目を瞑る。その瞬間が来るのをおとなしく待った。

そして……

そして——



そしてベヒモスはハジメのかなり手前で跳躍し、赤熱化した頭部を下に向けて隕石のように落下した。



方で生徒達と一緒に戦っているはずなのだ。

まさか、ハジメのために、ハジメを守るために危険を晒してここまで走ってきたとも言うのか？

「……なんで……どうしてっ！」

ハジメは込み上げてくる感情に身を任せて、目の前にいる『彼』へと疑問の言葉を叫ぶ。

『彼』の役に立ちたかった、『彼』を死なせたくなかったから命を晒したのに『彼』に助けられてしまった。

なんで、とどろいて、と叫ぶハジメに対し『彼』は左手に持っている焦げて千切れボロボロになった三メートル程の紙を捨て、「……なんで——だと？ 決まっているだろう？」とまるで当たり前のように宣言した。

艶やかな黒髪をさっぱりとした短髪に切り揃え、瞳は氷のように無機質で刃の如く鋭い、容姿は大変整っており黒色の眼鏡をかけた少年はハジメへと小さく微笑む。

「——親友だからだ」

そう言っただけで傷一つない『彼』は、神代日色は笑ったのだった。



わざわざ命懸けでハジメちゃんを助けに行ったら拒絶された件について。

……泣いていいだろうか？

いやね、本当はハジメが指示した通りに後方でエツサホイサエツサホイサと戦つても良かったんだけどさ、ハジメが頑張っているのにお父さんが頑張らないわけにはいかんでしようっ!!（ドヤア!!）

……あ、はい、嘘です。ごめんなさい。自分そんな度胸無いです。

別に『気づいてたら体が動いてたんだっ!』みたいな厨二的なことも起こったわけでもないし、そんなのはテンプレ勇者の役割だ、俺は正直言つて隅っこで事が済むまでじっとしていようと思つてたよ。

だって、あのクソ檜山の火球に巻き込まれて奈落に落ちたくないし、わざわざベヒモスと戦いたい戦闘狂でもないしな。

しかし。だがしかしだ、ある時俺の脳内に天啓が振り降りたのだ。

アレ？別にハジメ、性別が違うんだから檜山に火球で落とされることなんてないんじゃないかね？、と。

そもそも原作で檜山がハジメを奈落に落としたのはハジメ（男）に好意を持っている香織が原因なのだ。檜山は香織に好意を持っており、そんな香織を手に入れるために邪



魔なハジメを『野郎オブクラツシャー』するためにハジメに火球を撃ち、奈落へと叩き落したのだ。

だが、しかあしっ!!!

今のハジメは女っ！つまり香織がそっちのけの人では無ければ火球を撃たれることはないのだ。

つまり、ハジメが奈落到落とされることはない！

だから、助けに行っても大丈夫なのですっ!!

え？原作のことを考えたらそれでいいのか、だつて？

——知らんな、そんなもの。きっとテンプレ勇者が何とかしてくれるさっ！（キラッ！）

親友であるハジメにそんなことさせるわけ無いだろうっ！

何？本当は魔王になったハジメに殺されないか心配なんじゃないか、だつて？

.....君のようなカンの

の良い餓鬼は嫌いだよ。

そんなわけで現在、俺はベヒモスの目の前にいます。.....ハジメに拒絶されたせいで若干、涙目なのは秘密だ。

ちなみにベヒモスは俺が前日、このために用意していた魔法陣の効果を受け、決して大きいわけではないがダメージを食らい、俺を仇敵を見るような目でこちらを睨んでいる……どうしよう、恐怖でちびりそうなんですが。

しかしまあ、後ろにはハジメがいるんだ。大人の威厳を見せてやるために引くわけにはいけない。

「……なんで……どうしてっ！」

背後で俺に言葉を零すハジメに応ずるようにもはや自分自身の言葉か言語さんによるものなのかわからなくなってしまうた口が開く。

「……なんで——だど？ 決まっているだろう？——親友だからだ」

さあてつと、ひと仕事いきますか！

娘ができたお父さんや妹がいる兄が最強だつてことを見せてやらあ!!

そう言つて俺は腰から剣を引き抜いたのだった。

## たとえ命を懸けてでも 下

日色を仇敵を見るような瞳で睨みつけるベヒモスを前に日色が執った行動は実にシンプルだった。

「逃げるぞ」

「……え？あ、ちよっ！」

それは文字通りの逃げの一手。

日色はハジメを有無を言わせず肩に担ぎ、脱兎のごとく全力疾走でメルド団長の元へと走り出す。

それに驚いたのはベヒモスである。まさか一目散に逃げ出すとは思わなかったのだろう、叫び声を上げて慌てて追いかかけようと前足を出そうとし――

「ハジメ。奴の足に穴を作れ」

「う、うん！【錬成】！」

――ベヒモスが脚を踏み出そうとした地面が深く沈み込み、体勢が崩れてしまう。ついでに言えばその穴を二度目の錬成で塞がれてしまうという土産付きだ。

「グルアアアアアアアアア!!？」

踏み込むことができず体勢が崩れる十落とし穴を埋められるという妨害をくらいベヒモスが必死に抜け出そうとする前に日色達はメルド団長の元にたどり着いていた。

どうやら香織は他の騎士達の治療をしているらしく、ある程度治療され動けるようになった雫がこちらへと向かってきている。

「ハジメ、動けるか？」

「う、うん。大丈夫」

「坊主っ、どうしてここに！そしてあの魔法は何だ！」

困惑するように日色へと言葉を零すメルド団長に日色はハジメを降ろしながらメルド団長へと目を向ける。

「階段側の戦闘が一時的に安定したので応援に来たんです。そんなことよりもメルド団長早くテンプレ勇者を連れて撤退してください」

「だが、まだベヒモスが……」

「奴は俺が囷になって時間を稼ぎます」

「「ッ!!」」

そのなんとも無いように呟いた日色の言葉に香織の治療によって回復した雫や日色に下ろされたハジメ、そしてメルド団長が言葉を失った。

「恐らくですが奴は敵対し抵抗を行おうとする者を先に狙う習性があります。つまり、

俺が抵抗を見せれば俺を集中的に狙うはずです、その間に撤退し、撤退が完了したら全員でベヒモスに一斉攻撃してください、その間に俺は離脱します」

「待てっ！それはつまり……」

——自分を時間稼ぎの囷にするということかつ！

メルド団長はその言葉を飲み込み、目を剥いてしまう。確かにそれは勇者である光輝を逃がすためには最も最適な方法だろう、日色が助かる可能性が限りなく少ない事以外は。

その事実を察した雫が悲痛な表情で日色に詰め寄る。

「ダメよツ、そんなの！だったら私が——」ダメだ。お前の場合、失った時のリスクが多過ぎる。ポニーはテンプレ勇者の手助けをしろ——でもっ!!」

日色を失いたくない。

その思いに駆られるように雫は日色の考えに反発し、一切引こうとしない。

そんな態度に日色は、ハアとため息をついたあと冷め切った瞳で雫を映し、決定的な事実を突きつけた。

「足手纏いだ」

「——ッ!!」

その言葉が深く雫に突き刺さり、雫の思いを一脚した。

日色の言葉に雫の表情は泣きそうになり、その表情を見られないように顔を下げ表情に影が差す。

分かっている、日色にとつてその言葉は彼なりの優しさだと言うことは。そんなのは雫どころかハジメも理解している。

分かっている、自分は香織に治療されたがあくまでそれは動ける範囲では、というだけなのだから。

だが、そんな何もできない自分が何よりも雫にとつて辛かった。

情けない自分を恨めしく思い雫は血が滲むほど拳を握り締め、唇を噛む。

「——死なないでよ」

「当たり前だ、俺を誰だと思っている。ほら、さっさと撤退しろ」

言葉を零す様に出した雫に日色はフンツと堂々と言い返す。そんな日色に雫は渋々階段側へと撤退を開始する。

そんな雫を片目に日色は未だに撤退しようとしないうハジメへと目を向ける。

「……おい、ハジメ。お前も話を聞いていただろう、さっさと撤退しろ」

「——嫌だよ」

「……………は？」

撤退を促そうとするとハジメに断固として拒否されたことに日色は目を丸くする。

「——おい、さつきポニーとの会話を聞いていただろう。お前のその傷じゃあ足手纏いだ、さつきと撤退——」僕はまだ練成ができる、日色のサポートぐらいはまだできるよ——  
「なっ！おい、こんな時に屁理屈を——」

「グルアアアアアアアアアア!!」

雫とは違い一切引こうとしないハジメの態度に日色は苛立つように唇を噛み、説得しようとするがベヒモスの雄叫びを聞くと共に「クソツ！」と毒づく。ベヒモスは既に落とし穴から抜け出し戦闘態勢を整えている。再び頭部の兜が赤熱化を開始しており、もう時間がない。

日色はメルド団長の方を向き、決意をした表情で話しかける。

「メルド団長！一度だけ奴の攻撃を凌ぐことはできますか!?!後は不本意ですがハジメと共に何とかします!」

「あ、ああ！可能だ！だが……やれるんだな?」

「やれます」

決然とした眼差しを真っ直ぐ向けてくる日色にメルド団長はこんな状況で場違いのように「くっ」と笑みを浮かべる。

まさか、一番低いステータスを持つている少年がこのような決意の瞳をするとは思わなかったからだ。

「わかった、まさか、お前さん達に命を預けることになるとはな。……必ず助けてやる。だから……頼んだぞ！」

「はい！」

「任せてください！」

勢いよく返事をするハジメと当然とでもいう風に頷く日色。

メルド団長はその二人の返事に小さく笑うとベヒモスの前に出た。そして、簡易の魔法を放ち挑発する。

やはり日色の推測は正しく自分に歯向かう者を標的にする習性があるようだ。しっかりとその視線がメルド団長に向いている。

「チツ、ハジメ。今から作戦を伝えるぞ。死にたくなかったら大人しく従え！」

「う、うん」

そのメルド団長が注意を引き連れてくれる間に日色はハジメへと作戦を伝える。

それは文字通り命懸けの作戦だ、失敗すれば日色達どころか大勢が死ぬだろう。

その作戦の内容を聞いた途端、ハジメの表情が暗くなるがすぐに決意に満ちた表情となる。



そのハジメの表情を見て、日色は問う。

「できるな？」

「——うん」

そんなハジメの返事に日色はよしと頷いたと同時期。

ベヒモスが赤熱化を果たした兜を掲げ、突撃、跳躍する。メルド団長は、ギリギリまで引き付けるつもりなのか目を見開いて構え、そして、小さく詠唱をした。

「吹き散らせ——【風壁】」

詠唱と共にバックステップで離脱する。

その直後、ベヒモスの頭部が一瞬前までメルド団長がいた場所に着弾した。発生した衝撃波や石礫は「風壁」でどうにか逸らす。大雑把な攻撃なので避けるだけならなんとかなる。倒れたままの光輝達を守りながらでは全滅していただろうが。

再び、頭部をめり込ませるベヒモス。その決定的な隙が生まれた瞬間、日色が叫ぶ。

「ハジメ！やれ！」

日色の言葉に応えるようにハジメは両手に淡い空色の魔力を迸らさせる。ハジメが名前だけの詠唱に最も簡易で、唯一の魔法。

「——【錬成】！」

石中に埋まっていた頭部を抜こうとしたベヒモスの動きが止まる。引き抜こうとし

た途端、ハジメの錬成によって頭部を石で固定したのだ。

その隙に日色がベヒモスへと駆ける。右手と右脚、左手と左脚を同時に出すナンバ走りによる高速移動により瞬く間にベヒモスとの距離を詰める。

「——フツ！」

踏み込む足は右足、重心を低く下げ鞆に収まった剣を引き抜き、ベヒモスの焼け爛れた傷口へと抜刀する。

——我流刀術【天閃】

神速の抜刀は寸分の狂い無くベヒモスの傷口を切り裂くが傷は血がほんの数滴しか零れず、とても浅い。日色の低スペックさが実感できた瞬間である。

しかし、それはベヒモスを怒らせる事実としては十分だった。

「グガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ベヒモスは怒りのままに全身を駆動させ、埋められた頭部を力任せに引っこ抜いた。

己の身体に傷をつけた日色を激怒の炎を瞳に宿らせながら映そうとするが日色はとつくに離脱しておりベヒモスが現れた通路側の魔法陣へと走っている。

ベヒモスは雄叫びを上げながら追いかける、もともと低スペックの日色とベヒモスだ。追いつかれるのは時間の問題だろう。

だが、日色の狙いはそこではない、元々自分達の目的は時間稼ぎだ。出来るだけ階段

側から離れたほうが失敗したとしても時間は稼げるだろう。

そして遂にベヒモスと日色との距離が10メートルを切った途端、日色は突然立ち止まり、ベヒモスの方向へと向きなおった。

ベヒモスは日色が何故止まったのか理解できなかったが好機だと思い、頭上の冠を赤熱化させる。

そして距離を詰め、一気に跳躍する。

その一撃は例え勇者だろうと防ぐことができない絶対の一撃、日色が喰らえば間違いなく死に至るだろう。

だが、日色の表情に恐怖は皆無。一切、身体は震えてなどいない。

何故なら日色には彼女がいるのだから。

「ハジメ！行くぞー！」

「——錬成!!」

瞬間、日色が身体をまるで何かを飛び越えるかのように沈み込ませた途端、地面から日色を射出させるように斜めから土壁が高速で生えた。

そう、ハジメの錬成による射出である。

日色が言った作戦、それは単純に言えばハジメの錬成によるサポートで行う高速移動での時間稼ぎである。



迎え撃つ。

その角度、方向は完璧だった。

ベヒモスの体が紙一重低空を飛ぶ日色に当たらず頭上を通り抜け、しかし、日色の剣の射程内である。

ベヒモスの跳躍が日色の頭上を通り抜け、同時に勢いよく振るった日色の剣がベヒモスの皮膚を浅く切り裂いていく。

恐ろしい衝撃、力を少し緩めてしまえばベヒモスの勢いに引きずられてしまいそうになる。

だが耐える。耐え切ってみせる。

そしてベヒモスの下を通り抜けた先にはこつそり錬成の射程内まで近づいて来てくれたハジメがいる！

「日色ー！」

日色の名前を呼ぶハジメに日色は着地と同時に猛烈な勢いを逃がすため、受け身を取り何度も転がる。

ようやく止まった頃には日色の全身は擦り傷でボロボロだったが全て軽傷なのでよしとしよう。

「日色、大丈夫!？」

「ああ、ハジメの錬成助かったぞ」

日色へと心配そうに駆け寄ってくるハジメに日色は立ち上がりながらも微笑で返す。が、すぐさまベヒモスに意識を戻すとベヒモスはまるで何ともないように頭上の冠を引っこ抜き、再び憤怒の燃え上がる瞳に日色達を映す。

そして、再び吼えながら赤熱化を果たした兜を掲げ再度突進をしてきた。今度は跳躍などはしない単純な物量の突撃だ。日色達との距離は5メートル、避けることはできない。

「クッ……え、日色？」

「大丈夫だ」

ハジメは咄嗟に石壁を生み出し、その間に距離を離そうと地面に手を触れようとする。日色がハジメの肩に手を置き、大丈夫だとも言おうように前に出る。

困惑するハジメを置いて、日色はポケットから小さな紙を取り出す。

その紙の大きさはわずかに10センチ程度、紐で丸められておりまるで一種の巻物のようだ。

しかし、次の瞬間。紙の上に『小』という文字が現れ、空気に溶けるように消え失せると紙の大きさが三メートル程まで大きくなった。

そして、ベヒモスが日色へと突撃する瞬間、日色は盾にするように紙を広げ、名前だ

けの詠唱を告げる。

【反鏡】

瞬間、ベヒモスが突撃した反対方向に吹き飛ばされた。

紅緋色の鏡のような壁に触れた途端、ベヒモスが吹き飛ばされたのだ。ベヒモスの身体には新たな抉れ、焼き爛れた傷が生まれている。

ここで一つ話が変わるが魔法の知識のおさらいをしておこう。

トータスにおける魔法は、体内の魔力を詠唱により魔法陣に注ぎ込み、魔法陣に組み込まれた式通りの魔法が発動するというプロセスを経ており、魔力を直接操作することはできず、どのような効果の魔法を使うかによつて正しく魔法陣を構築しなければならぬ。

魔法陣の式は主に5つ、属性・威力・射程・範囲・魔力吸収である。後は誘導性や持続時間等付加要素、適性がないものは速度や弾道・拡散率・収束率などの式が必要になってくる。

逆に言えばそれらの式が書ければどんな効果だろうと付与が出来るのだ。

例えば「反光壁」というものを知っているだろうか？

それは神代、眼鏡をかけた天才錬成師が生み出した魔法で光属性初級防御魔法の「光絶」に反発の効果を付与した初級防御魔法で靴底に瞬間展開し、空中多段跳躍として用

いていた。

だからこそ、日色は考え、そして三日間徹夜をかけて生み出した。

自分だけのオリジナル魔法を。

名を【反鏡】

光属性初級防御魔法である【光絶】にある効果を付与した魔法である。

その効果は『ベクトルの方向反転』

生み出された光の壁に触れた瞬間の衝撃を瞬時に計算し、指定した方向に力の向きを操作する。

それが【反鏡】の効果である。

しかし、もちろんデメリットも存在する。それは魔力の消費量である。

【反鏡】の魔力消費の燃費はかつてないほど悪く、なんと一度の発動に消費する魔力は数値にすると約250。しかも反射する力はいくまで発動した一瞬に触れた衝撃の一つだけな為、二撃目は反射することも防ぐこともできない。

だが日色はその欠点を補う方法を考え、一つのアイディアが思い浮かんだ。

『ナニイ？チートな魔法を開発したけど使用時に必要な魔力が足りない？』

——逆に考えるんだ、自分が使う必要はないと考えるんだ』

そうして生まれたのは魔法陣に必要な式の一つ『魔力吸収』の変更である。



魔力を流す対象を使用者ではなく対象者へと強制的に吸い取る式に。

魔法陣に魔力が触れた瞬間、触れた魔力を強制的に吸収し、発動するというものに変えたのだ。

魔物とは体内に魔石という特殊な体内器官を持ち、全身に変質した魔力を直接巡らせることで驚異的な身体能力を発揮する。この変質した魔力が固有魔法を生み出していると考えられているのだが、日色はそこで一つの仮説を立てる。

もし、仮に変質した魔力が固有魔法を生み出しているというのならその固有魔法に使う魔力を魔法陣に流せば、魔法は使えるのではないか？

答えは是だった。

つまり、ベヒモスが吹き飛ばされたのはベヒモスの固有魔法によって赤熱化した兜に触れた瞬間、兜に込められていた魔力を6割強奪し、魔法が発動。ベヒモスは自分の魔力を奪われた挙句、自分の突撃した衝撃を丸々喰らったことになる。簡潔に言えばベヒモスは自分の魔力で発動した魔法でダメージを食らったのだ。一つの博打だったがその仮説が正しかったのは日色にとって助かった。

それが日色がこっそり作っておいた5個作っておいた魔法陣、別名『一方通報の紳士壁』である。

まあ、欠点はまだあり魔法陣の大きさは日色が使うには三メートル程の大きさになる

ので結局、持ち運びは文字魔法頼みになることやベヒモスのように魔力を込めた攻撃でなければタイミングよく発動できず、本当にギリギリまで追い詰めて大量の魔力を消費しなければならぬので、使い方を限定された魔法なのだが。

吹き飛ばされたベヒモスに注意を向け、日色はハジメに魔法の効果の説明しながら内心溜息を吐く、残りの魔法陣はさつき使ったから3つ、それまでに撤退が完了するか？ わからない、もし魔法陣が尽きれば確実に自分は死ぬだろう。

(……まあ、きつとなんとかなるだろう)

今は自分の最善を尽くすべきだ。



日色とハジメが足止めしている間、メルドは回復した騎士団員と香織を呼び集め、光輝達を担ぎ離脱しようとする。

トラウムソルジャーの方は、どうやら幾人かの生徒が冷静さを取り戻したようで、周囲に声を掛け連携を取って対応し始めているようだ。立ち直りの原因が、実は先ほど日色が助けた女子生徒だったりする。地味に貢献しているハジメと日色だった。

「待って下さい！ まだ、日色君と南雲ちゃんがっ」

撤退を促すメルド団長に香織が猛抗議した。

「坊主の作戦だ！ ソルジャーどもを突破して安全地帯を作ったら魔法で一斉攻撃を開始する！ もちろん坊主がある程度離脱してからだ！ 坊主達が足止めしている間に坊主が帰還したら、上階に撤退だ！」

「なら私も残ります！」

「ダメだ！ 撤退しながら、香織には光輝を治癒してもらわにやならん！」  
「でも！」

なお、言い募る香織にメルド団長の怒鳴り声が叩きつけられる。

「坊主達の思いを無駄にする気か！」

「ッ——」

メルド団長を含めて、メンバーの中で最大の攻撃力を持っているのは間違いなく光輝である。少しでも早く治癒魔法を掛け回復させなければ、ベヒモスを足止めするには火力不足に陥るかもしれない。そんな事態を避けるには、香織が移動しながら光輝を回復させる必要があるのだ。今は日色達が抑えているがそれは時間の問題なのだから。

「天の息吹、満ち満ちて、聖浄と癒しをもたらさん—— “天恵”」

香織は泣きそうな顔で、それでもしっかりと詠唱を紡ぐ。淡い光が光輝を包む。体の傷と同時に魔力をも回復させる治癒魔法だ。

メルド団長は、香織の肩をグツと掴み頷く。香織も頷き、もう一度、必死の形相で戦

い続ける日色を振り返った。そして、光輝を担いだメルド団長と、龍太郎を担いだ騎士団員達と共に撤退を開始した。

トラウムソルジャーは依然増加を続けていた。既にその数は二百体はいるだろう。階段側へと続く橋を埋め尽くしている。しかし、それが逆によかったかもしれない。もつと隙間だらけだったなら、突貫した生徒が包囲され惨殺されていただろう。実際、最初の百体くらいの時に、それで窮地に陥っていた生徒は結構な数いたのだから。

騎士団員達のサポートがなくなり、続々と増え続ける魔物にパニックを起こし、魔法を使ってもせずに剣やら槍やら武器を振り回す生徒がほとんどである以上、もう数分もすれば完全に瓦解するだろう。

それを悟っている生徒たちの表情は絶望が張り付いている。もはや連携をとついても限界である。

誰もが、もうダメかもしれない、そう思ったとき……

「――【天翔閃】！」

純白の斬撃がトラウムソルジャー達の下真ん中を切り裂き吹き飛ばしながら炸裂した。

橋の両側にいたソルジャー達もその斬撃の衝撃で押し出されて奈落へと落ちていく。直ぐに雪崩れ込むように集まったトラウムソルジャー達で埋まってしまったが、生徒



中でも殲滅する速度が突出しているのが雫だ。高速で剣を振るい瞬く間にトラウムソルジャー達を殲滅する。

全ては、早く日色を助けるために。

凄まじい速度で殲滅していき、その速度は、遂に魔法陣による魔物の召喚速度を超えた。

そして、遂に階段への道が開ける。

「皆！ 続け！ 階段前を確保するぞ！」

光輝が掛け声と同時に生徒たち全員が走り出す。ある程度回復した龍太郎と雫がそれに続き、バターを切り取るようにトラウムソルジャーの包囲網を切り裂いていく。

そうして、遂に全員が包囲網を突破した。背後で再び橋との通路が肉壁ならぬ骨壁により閉じようとするが、そうはさせないと光輝が魔法を放ち蹴散らす。

その行動にクラスメイトが訝しそうな表情をする。それもそうだろう。目の前に階段があるのだ。さつさと安全地帯に行きたいと思うのは当然である。

「皆、待って！ 日色君と南雲ちゃんを助けなきゃ！ 日色君達がまだたつた二人で戦っているの！」

香織のその言葉に何を言っているんだという顔をするクラスメイト達。そう思うのも仕方ないだろう、日色とハジメは役立たずというのがクラスメイトたちの認識なのだ。

から。

だが、困惑するクラスメイト達が、数の減ったトラウムソルジャー越しに見えた日色達の姿を見て言葉を失った。

「な、なんだよ、あれ？」

「あの魔物と、戦ってる？」

次々と疑問の声を漏らす生徒達の視線の先には日色とハジメが満身創痍になりながらも戦っていた。

服はいくつも破け、擦り傷や切り傷は全身に絶え間なく、もはや息絶え絶えと言えるだろう。

だが、それでも決して倒れずたった二人だけで戦っていたのだ。

「そうだ！ 坊主達がたった二人であの化け物を抑えているから撤退できたんだ！ 前衛組！ ソルジャーどもを寄せ付けるな！ 後衛組は遠距離魔法準備！ アイツらもう限界だ！ アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」

そのメルド団長のビリビリと腹の底まで響くような声に気を引き締め直す生徒達。中には階段の方向を未練に満ちた表情で見ている者もいる。無理もない。ついさつき死にかけてのだ。一秒でも早く安全を確保したいと思うのは当然だろう。しかし、団長の「早くしろ！」という怒声に未練を断ち切るように戦場へと戻っていった。

そんな中、クラスメイトの一人である『彼』はいた。クラスメイト達と同じく本気で恐怖を感じていた『彼』は直ぐにでもこの場から逃げ出したかった。

しかし、ふと脳裏にあの日の情景が浮かび上がる。

それは、迷宮に入る前日、ホルアドの町で宿泊していたときのこと。

緊張のせいか中々寝付けずにいた『彼』は、トイレついでに外の風を浴びに行つた。涼やかな風に気持ち落ち着いたのを感じ部屋に戻ろうとしたのだが、ふと外の景色を見るとネグリジエ姿の香織を見かけたのだ。

『彼』は初めて見る香織の姿に思わず物陰に隠れて息を詰めていると、ある衝撃な光景が目映つた。

香織が日色の腕に腕を絡ませ、まるで恋人のように寄り添っていたのだ。

香織の表情は幸せそうな笑顔で、日色も満更ではなさそうだった（あくまで個人の主観です）

それを見て『彼』は頭が真っ白になった。『彼』は香織に好意を持っている。しかし、自分とは割に合わず光輝のような相手なら、所詮住む世界が違ふと諦められた。

だが、日色の場合は違ふ。

日色は香織を無下に扱ひ（あくまで個人の意見です）むしろ邪魔だと思つている（あくまで個人の r y）、だということに日色が傍にいるのはおかしいだろう。自分ならもつ



と彼女を思いやってあげられる。自分ならもつと彼女に応じられる。自分が傍にいるべきだ。と端から聞けば頭大丈夫？　と言われそんな考えを『彼』は本気で持っていた。(あくまry)

そしてただでさえ溜まっていた不満は、もはや憎悪にまで膨れ上がってしまった。

その時のことを思い出した『彼』は向こうで未だベヒモスの足止めとして戦っている日色を眺め、今も祈るように日色を案じる香織を視界に捉え……

憎悪の混じった三日月のような暗い笑みを浮かべた。

一方、その頃ハジメはもう直ぐ自分の魔力が尽きるのを感じていた。回復薬はもはや一個しか残っていない。チラリと後ろを見るとどうやら全員撤退できたようである。隊列を組んで詠唱の準備に入っているのがわかる。

ベヒモスは相変わらずこちらへの攻撃を絶やすことはないが、日色の身のこなしとハジメの錬成によるサポートによりギリギリではあるが足止めすることには成功していた。

後は、タイミングを見測りベヒモスを錬成で時間を稼ぎその間に距離を取るだけである。

日色もそれは承知しているのだろう、日色の方を見ると擦り傷だらけの身体でチラリと此方を見、コクリと頷いた。

額の汗が目に入る。極度の緊張で心臓がバクバクと今まで聞いたことがないくらい大きな音を立てているのがわかる。

チャンスは一瞬だけだ。

「グガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

再び兜を赤熱化させ全身をバネのように沈みこませ一気に突進を行うべヒモス。

それに反応するように日色が立ち向かうように最後の『反鏡』の魔法陣を右手に携え、駆け出す。

両者の距離が瞬く間に接近する瞬間。

「ハジメー!」

「【錬成】!」

日色の足元に高く天へと高速で生えた石壁が日色を空中へと押し上げる。

ハジメの錬成により地面から3メートルも高く跳躍した日色は魔法陣を襲い掛かる赤熱化した兜へと魔法陣が地面へと向くように広げる。

「【反鏡】」

そして赤熱化した兜が魔法陣に触れ——瞬間。

ベヒモスの一撃が丸々【反鏡】によって力の向きベクトルを変えられ、石橋へと襲い掛かる。日色は【反鏡】の向きの反転の性質を使い、空中で受けることで力の向きを地面に変更したのだ。

地面は破裂するように粉碎され、幾重にも無数で巨大な放射状の罅が奔り、地面を削り取っていく。

そして、その隙をハジメは決して逃さない。

最後の回復薬を一息で飲み干し、両手の手袋の魔法陣に空色の魔力を迸らせ、残り全魔力を用いて錬成を行う。

「…錬——成!!」

空色の魔力が地面を伝わり、罅割れ陥没した石橋を錬成させ、ベヒモスの赤熱化している頭部を幾重にも石壁を錬成し、地面に埋める。これで数秒は稼げるだろう。

「ハジメ！走れ！」

「…………う、うん！」

その隙に、ハジメの元へと駆け寄って来た日色によって片腕を掴まれ、一瞬転げそうになるも何とか持ち直し、日色に手を引かれながら全力でベヒモスから距離を離す。

日色達が猛然と逃げ出した数秒後、地面が破裂する様に粉碎されベヒモスが咆哮ともに起き上がる。羽虫風情の分際で己に無様を晒された怨敵を、ハジメと日色を捉えた

## 瞬間――

――あらゆる属性の攻撃魔法がベヒモスへと殺到した。

夜空を流れる流星の如く、色とりどりの魔法がベヒモスへと直撃する。やはりダメー  
ジはない様だが余りの猛攻にベヒモスは地面に縫われ、前に進むことはできない。

日色達は頭を低く下げながら全力で走る。正直言つて頭上を致死性のある魔法が突  
き抜けていくのは生きた心地が全くしないがチートなクラスメイト達を信じて駆ける  
しかないだろう。

既にベヒモスとの距離は三十メートルも広がっている。このまま行けばきつと問題  
なく皆の元へ辿り着けるはずだ。

そう思い、日色は前を向いてハジメの手を引きながら走り続ける。

だが。

いや、だからこそ、日色は気づくことができなかつた。

代わりにそれに気づいたのはハジメだつた。

彼女はこんな命懸けの状況でも日色を見ていたのだから。

空を駆ける数多の魔法の中、その中の一つがクイツつと軌道を僅かに曲げたのだ。

……日色達へ向かつて。偶然ではない、明らかに日色を狙い誘導されたものだ。

誰が？ 一体どうして？ そんな疑問や、困惑、驚愕がハジメの脳内を駆け巡るが今はそ

れどころではない。

軌道は確実にハジメもとい日色を狙って来ている、かなりの速度な為日色を呼ぶ暇など無い。このままでは日色に直撃し、吹き飛ばされ奈落に落ちるか、最悪焼き殺されるか、最低でもたたらを踏んでしまうのは確実だろう。

だったら、どうする？

答えは、決まっていた。

そしてハジメは――

――トンツと日色の背中を勢いよく押した。

突然の背後からの衝撃に日色の体勢は崩れるが数歩ハジメと距離が離れ、驚いた表情で此方を振り向き此方へと手を伸ばしている。

自分は今、どんな表情をしているのだろうか？

出来れば、日色に裏切られたと思われなければいいなあ、とハジメは思い。

瞬間――横からハジメの横腹で炸裂した火球の衝撃によつてそんな思考は消しとばされた。

◆ 何が、起こった？

日色の思考はまさにそれ一色に染まっていた。

突然の背後からの軽い衝撃、咄嗟に後ろを振り向くと此方を突き飛ばしたハジメの姿があった。

わからない。何故ハジメが日色を突き飛ばしたのか？

わからない。何故、ハジメが笑っているのか？

ハジメは笑っていた。

くしゃくしゃに顔を歪めて、それでも無理矢理弱々しい笑みを浮かべて笑っていた。

自分のために浮かべる笑みではなく、誰かを安心させるような弱々しい笑み。

何故、そんな笑みを浮かべている？

何故——

——そんなに泣いているんだ？ハジメ。

日色は無意識にハジメへと手を伸ばす。

今にも警鐘を鳴らす胸騒ぎにつられて。

そして、刹那——

「ハジ——ッ!!?」

——ハジメの脇腹に火球が突き刺さる。

同時に炸裂し、着弾時の衝撃波がハジメと日色の身体を打ちハジメを元来た通路の方  
向へ、日色を階段側へと吹き飛ばす。

日色がハジメを叫ぶ声は着弾時の衝撃波で掻き消された。

吹き飛ばされた日色は数度転がり何とか体勢を立て直す、視界が霞み、平衡感覚が狂わされたことですから動く事ができない。そしてそれはまたハジメも例外では無かった。

いや、むしろもつと酷いのではないだろうか？ハジメのお陰で直撃を避けた日色ですらそうなのだ、直撃を食らったハジメは脇腹に軽い火傷を負い、ゴロゴロ転がってグッタリと倒れている。

それを見た日色は喉の水分が蒸発した様に錯覚した。

急いで立ち上がろうとするが今までベヒモスの衝撃波で喰らった全身の傷と無防備な状態で火球を喰らったからだろう必死に立ち上がろうとするが腕に力が入らず、まるで底無し沼に入ったかのように全身から力が抜けていく。

「…クッ………ソ………ハジ………メッ!!」

しかし日色は諦めず何度も立ち上がろうと挑戦するがいずれも虚しく力が抜け、立ち上がることができない。ハジメを見るとハジメも何とか意識を取り戻したらしく再びフラフラとゆっくり立ち上がろうとしていた。

「日色ッ!!」

「し………ず、くっ」

すると、背後から日色の元へ駆け出している雫の音が聞こえた。背後を振り向くとどうやら制止を振りきって此方に向かっているらしく、その証拠に涙目になりながら必死の表情で此方に向かう雫の背後にメルド団長が追いかけて来ており、さらに背後では今にも駆け出そうとしている香織を光輝が必死に抑えつけていた。

おそらくだが香織が此方に向かおうとして光輝に取り抑えられ、その隙に雫が此方へと駆けて来たのだろう。

「……………頼むツ！早く、ハジメ…を！」

「……………ツ、ええ！」

日色の言葉に雫はハジメのいる場所に目を向け、一瞬目を見開いたが、すぐに頷きハジメのいる場所へと方向を変え、さらに走る。現在雫と日色の距離は10メートル、日色とハジメとの距離は7メートル程である。ハジメも漸く立ち上がり三半規管をやられたのかフラフラとなりながらも此方へと少しでも進もうとするが……

「グアガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ベヒモスもいつまでも一方的にやられっぱなしでは無かった。ハジメが二メートルほど進んだ直後、背後で咆哮が鳴り響く。

ハジメは思わず振り変えると、赤黒い魔力を噴き上げ、赤熱化を行ったベヒモスの眼光がしっかりとハジメを捉えていた。



そして、赤熱化した頭部を盾のようにかざしながらハジメに向かつて突進する！

「ハジメエえええ!!」

フラつく頭、霞む視界、迫り来るベヒモス、遠くで焦りの表情を浮かべるクラスメイト達の悲鳴と怒号。そして、絶叫するようにハジメの名前を叫ぶ日色。

日色の声に反応したハジメはなけなしの力を振り絞り、必死にその場を飛び退いた。直後、怒りの全てを集束した様な強烈な衝撃が橋全体に激震する。着弾点を中心に物凄い勢いで亀裂が走っていく。

「があー！」

「日色ー！」

その衝撃でさらに後ろに飛ばされた日色は間一髪走つて来た雫に受け止められる。

霞む視界の中、メキメキと橋が悲鳴をあげる音が聞こえ——遂に橋の耐久限度を超えた。

「グウアアアア!?!」

悲鳴をあげながら崩壊し傾く石畳を爪で引つ掻くベヒモス。だが引つ掛けた場所さえ崩壊し、抵抗も虚しく奈落の底へと消えていった。ベヒモスの断末魔の叫びが奈落を木霊する。

それはまたハジメも例外ではなく、何とか脱出しようといざするが、しがみついた場所

も次々と崩壊していく。

日色がハジメを叫ぶ声が聞こえる。

ハジメはふと対岸にいる日色を見て――

「――」  
眩いた。

◆  
日色は見た。

まるで一瞬が永遠に感じるかのように時間が減速する錯覚をする中、ハジメが奈落へと落ちていく姿を。

日色は見た。

その瞳に絶望を抱きながら、かすかに涙を滲ませているハジメの姿を。

日色は見た。

ハジメが刹那の中、届かない声で口を動かしたのを。

そのハジメが動かした口の動きを言葉にすればこうだろう。

『よ、か、つ、た』

「あ

ッ

」

こんな状況で、こんな自分が命を落とす状況で。

それでも日色を助けられたことに微笑むハジメを――

――見ているままなど出来るわけがなかった。

カチンっ、と日色の何かが切り替わる。



石橋が崩壊していく中、日色は全身傷だらけで震える身体に鞭を打ち、強制的に立ち上がる。

受け止めてくれた雫が突如立ち上がった日色に「日色？」と困惑の声を零すが日色は雫の方へは振り向かなかった。

「……悪い、雫。後は…頼む」

「……え？日色？何を――」

日色が振り向かず雫に呟いた言葉に雫は困惑し、咄嗟に日色を止めようと彼の右手へと手を伸ばした。

胸騒ぎがした。

何か嫌な予感がした。

今ここで、日色を止めなければ何か取り返しのない事が、起こりそうな気がしたのだ。

そして直後――

――日色がハジメが落ちた奈落へと駆け出した。

「――日色!?!」

雫は日色の手を掴もうと手を伸ばしたが一瞬遅かった。

雫の指が日色の手を微かに撫でるように触れたが――瞬間、日色の姿が加速した。

――文字魔法『速』

日色は立ち上がった瞬間、文字魔法で自分の身体に『速』の文字を書いたのだ。効果は読んで字の如くである。

崩れ落ちていく足場を日色はパルクールのごとく跳び、走り、障害物を乗り越えながら下へ下へと駆けていく。

慌てて雫も追いかけてようとするが背後から追いかけてきたメルド団長によつて取り押さえられてしまった。

「メ、メルドさん!?!は、離してください!まだ日色が!!」

「ダメだツ!これ以上犠牲を出すわけにはいかん!!」

「そんな!」

雫の瞳に涙が滲みながらの懇願も歯を食いしばりながらも悔やんだ表情のメルド団長に拒否され、強制的に肩に担がれて元の階段側へと戻らされてしまう。

自然と日色と開いていく距離に雫は涙を流さんばかりの声で叫ぶしかない。

「ッ!!!」

その声はもう、彼には届かない。

◆ 走る走る走る。

もはやそれは落下しているといっても間違いないのかもしれない。

瓦礫を足場に安全性を度外視して降りていくと、遂には踏みしめる瓦礫が無くなり日色も奈落に落ちたハジメのように自由落下になってしまう。

が、日色にそれに対する恐怖は一切ない。

踏みしめるものがないと理解した途端、左手に輝いている『速』の文字をちらりと見ると『速』の文字の輝きが徐々に薄れ、文字が空気に溶けていく。

それを確認した途端、日色は新たに文字を書いていく。

イメージは翼、輝きながらも夜空を駆ける流星の如き速度。

「——飛べー！」

新たに書いた文字は『飛』である。このまま何もせず落ちていつてしまえばハジメを助けることはできない、だからこそ落下速度を速める必要がある。

日色は翼を力強く大空を羽ばたくイメージを行う、方向はもちろん真下だ。

そして瞬間、今までの落下速度の数倍の速さで日色の落下速度は加速した。

「う、おおおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

風圧が尋常ではない、体感ではおよそジェットコースターの3倍の風圧だ。

日色は吹き飛ばされそうな風圧に耐えながら、更に加速する。

そしていくら時間が経つただろうか、数秒? 数十秒? それとも数分? まあどうでもいい。

ついに日色は落下する彼女を見つけた。

「ハジメエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

どうやら意識を失っているのか、だらりと脱力して落下しているハジメを見つけた途端、日色は更に速度を加速させる。もはや奈落の底が微かだが見えてしまっている、このままでは二人共地面にぶつかり落下死するだろう、しかも『飛』の効果時間も限界が近い、もう時間がないのだ。

ハジメとの距離を20メートル、10メートル、5メートル、3メートルと縮ませ、遂に――

――日色はハジメの元にたどり着く事ができた。

が、

「ぐうッ!!」

アレ程加速しながら体勢が整っていない状態でハジメの身体を抱きしめたのだ。もちろん体勢は崩れ、きりもみ状態になってしまう。

世界が廻る、三半規管が異常をきたす。

それにより日色は中身をリバースしそうになるが根性で押し留める。

なんとか体勢を整えようとイメージを働かせようとしたがもう、魔法の限界時間が近いのだから上手く体勢を整えることができない。

「クソッ!」

廻る視界の中、必死に体勢を整えようとするがもう奈落の底との距離はもはや50メートルをきっている。底に着くまであと5秒しかないだろう。

万事休すか!と日色が思った瞬間、腕の中から声が聞こえた。

「ひ、いろ?」

ハジメの声だった。明確に意識は覚醒していないのか、声は小さいが日色にとってはそれで十分だった。

ハジメが生きているというだけで日色にとっては十分すぎた。

「ああ、日色だ!クソツタレ!」





た。

## 奈落の底で少女は叫ぶ

冷たい感覚で意識が目覚め始める。

息苦しく、しかしどこか浮遊しており、ザアとまるで水が流れているかのような――

「――ま、ずい!!」

日色は目が覚めると同時に水上らしき上へと慌てて泳ぐ。

何とか水上から顔を出すことに成功し、近くの川岸から川から上がることになる。

「ゲホッ!ゲホッ!……死にかけてな」

日色は氣道に入った水を吐き出すため数回咳を行い、荒い息を整える。

あのまま意識が覚めなければ溺死していただろう、不幸中の幸いか。しかし全身が地下水という低温の水にずっと浸かっていた為に、服は濡れ、体を冷えているためこのままでは低体温症になり結局危険なのだ。

日色はそれを理解しているため、服を脱いで絞っていく。

そうしてパンツ一丁になったあとは、人差し指に技能『魔力筆』を使い、『火種』の魔

法陣を書いていく。

文字魔法を使えば一瞬で炎を起こすことはできるがここで魔力を6分の一も消費するわけにはいかない。

「……こんな時に自分の才能に反吐が出そうだ」

本来「火種」の魔法はその辺の子供でも十センチ位の魔法陣で出すことができる簡単な魔法なのだが魔法適性ゼロな日色にはたった一つの火種を起こすのに一メートル以上の大きさの複雑な式を書かなければならない。

十分近くかけてようやく完成した魔法陣に詠唱で魔力を通し起動させる。

「求めるは火、其れは力にして光、顕現せよ、「火種」……チツ、やはり魔法適性がないというのは不便だな」

そう毒づきながら日色は発動した拳大の炎で暖をとりつつ、傍に服も並べて乾かす。

「しかし……ハジメはどこだ？まさか俺よりも流されたのか？」

暖かな火に当たりながらハジメの行方を考えるが今の状況では答えはわからない。暖をとったことで霧がかかった記憶を思い出し、何とか二人共即死は免れたことに日色は安堵の溜息をこぼす。

服が乾ききつたので日色は再び服を着て、出発することにした。今最優先なのはハジメの搜索だ。どの階層にいるのかはわからないが迷宮の中であるのは間違いない以上、

どこに魔物が潜んでいてもおかしくない。ハジメと早く合流しなければ日色にとつてもハジメにとつても危険だ。

そんなわけで日色は腰に差してある剣の存在を確認した後、ハジメと合流するため川沿いから搜索を開始した。ハジメも同じように流されている可能性が高いからである。

日色は物陰から少し視界を確認したあと、少しずつ進んでいく。日色の原作知識では奈落の魔物はどいつもこいつも化物だらけなのだ、正面衝突になつてしまつたら瞬く間に殺されてしまうだろう。……原作のハジメの心を折つた爪熊なんて論外である。

そうしてスネ○クの如くコソコソと移動していると、視界の端の通路で何かが動いた気がして慌てて岩陰に身を潜める。

そつと顔だけ出して何うとそこにはピョンピョンと長い耳を携えた白い毛玉が――

——ということを認識した瞬間、日色は再び岩陰に顔を戻し、小さく誰にも聞こえないようにため息を吐く。

(……最悪だな)

さつき見ただけで何の魔物化が日色には理解できた。

白い毛玉、長い耳、さあわかる人にはわかるだろう。

『なんでこんなところにいつちゃんことイナバちゃんと同種族がいるんですかねえ?』

我らのウサギちゃんことイナバちゃんの登場である。といつても同種族だと思ふの

で別人ならぬ別兎なのだが。

イナバ、それは原作にいた重要な回復アイテム『神水』を飲み、魔王化したハジメに憧れた最強のウサギちゃんである。『神水』を飲んだことで知能が上がり、魔王に憧れたことでウサギの強者になるため、そして強くなるキツカケをくれた魔王に一言お礼を言う為に旅を始め、最終的に『谷口鈴』の仲間になったのだ。

### 閑話休題

そんなわけでそんなウサギと同種族の魔物と日色は出会ってしまったのだが正直言って逃げようかと思っていた。

あのウサギの固有魔法は「天歩」、あの雫が使っていた「十縮地」や空中に足場を作る「十空力」の技能を手に入れることができ最終的には最終派生技能「十瞬光」を手に入れることができるのだが日色からすれば悪夢でしかない。

あの一蹴りでハジメの腕を砕くことができる化け物と戦う？——アホか。

そう思って日色はその場から離れたのだがここは一本道であるここで離れても回り込んで進むことしかできないし、あのウサギは一向に動こうとしない。もしかしたらあの先にハジメがいるかもしれないのだ、ここで逃げるのは得策ではないだろう。

(やるしかない……か)

日色は静かに近くの手頃な小石を拾って、数度ポーンポーンと片手で空中に放った後岩陰

から地面に鼻をつけてフンフンと嗅いでいる蹴りウサギの少し先の地面を狙って石を投げる。

「キュウ?」

コツツと日色が投擲した石は綺麗な放物線を描き、見事蹴りウサギの前へと落下し物音を立てる。突然の物音に蹴りウサギが石が落下した地点に振り向いて――

「――ッ!」

――瞬間、日色が音も無く背後から剣を引き抜き抜き襲いかかる。

踏み込みは右足、体勢を少し下げ全身のねじれと鞘走りを利用した斬撃を蹴りウサギの首筋目掛けて叩き込む。

――我流刀術【天閃】

日色の作戦は勿論不意打ち一択である。そもそも光輝アホのようなステータスならば正面からの戦闘も立ち回り次第で戦えるかもしれないが日色のステータスでは不可能である。だからこそその背後からの首筋への一撃である。ベヒモスのような巨体ならばいくら日色の【天閃】でもかすり傷が限界だが蹴りウサギならば話は違う。例え斬り裂く事ができなくても吹き飛ばし壁にぶつけることぐらいはできるはず――ッ!!?

「キュッ!」

「なっ!?!」

が、直後。蹴りうさぎはまるで背後に目があるかのように紙一重、地を蹴り空中を宙返りしたことで日色の斬撃を避けたのだ。その俊敏な行動に日色は目を剥いてしまう。蹴りうさぎは宙返りをした体勢のまま、つまり日色と上下が逆の体勢でこちらを見ていた。

その瞬間日色の背筋に嫌な予感が奔る。

もはや無意識に近い。日色は半歩足を下げ崩れた体勢だが強制的に回避を行う。

そして、蹴りウサギが震んだ。否、消えた。

さつきまで日色がいた場所を後ろに残像を残して砲弾の如き蹴りを放つ。

おそらく逆さまの状態で空中を踏みしめて地上へ隕石の如く落下したのだろう、避けられたのはもはや奇跡に近い。爆発するように着弾点が決れ、日色はゴロゴロと転がり、蹴りうさぎから距離を離す。

しかし顔を上げた先には余裕の態度でゆらりと立ち上がる蹴りウサギの姿が悠々と存在していた。

その姿に日色は悔しげに小さく舌打ちをする。

(まさか……背後からの不意打ちを避けられるとはな)

やはり、奈落の魔物には化物しかいないことを再認識する。

日色はいっつ襲ってくるかわからない蹴りうさぎの襲撃に注意しながら文字魔法の準

備に入る。

このような敵に通用する武器は日色には文字魔法しかない、が。

(問題は……何の文字を書くかだな……)

そもそも文字魔法は現状地面に書かなければ効果を發揮しない、しかもここで下手に意味のない字を書いてしまえば一瞬で頭蓋を破壊されお陀仏だ。

一撃で対象を殺す文字が必要だ。しかし『死』等という直接殺せる魔法は数日前試しに使ってみたが書く事が出来なかつた為使えない。

(あれで……いくか)

そう思い、日色は人差し指を動かして――

「きゅいー!」

「チイツ!」

――瞬間、再び地面を爆発させながら日色に突撃する。奴の狙いは日色の頭だ。

が、それを読んでいた日色は自ら己の足を払い、崩れるように倒れることで蹴りうさぎの蹴りをかわす。

しかし――

「ガッ!?!」

それはあくまで直撃を避けたというだけである。蹴りウサギの一撃が日色の背後に



ある壁を砕き、その破片の数個が日色の胸に直撃したことで日色は肺から空気を吐き出しながら軽々と吹き飛ばされた。

日色は何度も転がるとようやく壁にぶつかつたことで勢いが止まる。

「ゴホッ！ゴホッ！」

何度も日色は咳き込みながら必死に起き上がろうとする、おそらく今の日色に次の攻撃はよけられないだろう。体勢が崩れ、内蔵もいくつか傷んでいるかもしれない、むしろ骨折していいことが幸運だった。

次の攻撃で確実に日色の命は尽きる。

ただし——

「クソツ、ようやく倒せたか」

——次があるのなら、だが。

壁が抉れるように砕かれ砂煙が舞う中、その煙が晴れた先には一匹の蹴りウサギがいた。

全身を彫像のように凍らせた状態で。

## ——文字魔法『凍』

あの時、日色が蹴りウサギの蹴りを避けた時に、コツソリと文字魔法を書いておいたのだ。そして蹴りウサギが壁を蹴り、地面に着地した場所には文字魔法が書かれており、着地と共に発動、見事蹴りウサギの体を凍らせたのだ。

日色は油断せず恐る恐る蹴りウサギに近づき、ツンツンと剣で突いてみるが一切反応を示さない。

「氷を破壊して復活——は無さそうだな」

日色はどっかの漫画のように『それがどうしたア！』かのように氷を破壊し、復活するのかと思ったがその可能性はないようだ。まあ、そもそも『凍』の文字魔法によって蹴りウサギは血液ごと凍らされたのだ。酸素が運ばれなくなった為生きているはずがない。

日色は死んだ蹴りウサギをどうするか考えるが文字魔法『元』を使って元に戻し食料にするか考えたが魔物の肉は毒なのだ。回復方法がない現状では食べることはできない。

が、だからといってこのまま放置するのももつたないだろう。

「仕方ない……凍らしたままで持つていくか」

日色はそう呟いて凍った蹴りウサギを地面から剣を用いて切り離し、懐に収めること

にし、再び歩を歩み始めた。

『予想以上にお腹が寒いんですけどおおお！や、やばいこのままだと、冷た〜いアイス  
○ロツチになりそうなんですけど！』

◆ 自業自得である。

◆ 同時期、ハジメは慎重に慎重を重ねて奥へと続く巨大な通路に歩を進めていた。

「日色……どこにいるんだろう……？」

時は数十分遡るが、ハジメは幅五メートル程の川の川辺の岩に引っかけり下半身を川に浸けた状態で目が覚めた。

慌てて川から上がり、地下水という低温の水にずっと浸かっていた為に、すっかり冷えてしまった体を温めるため服を脱ぐことに少し躊躇しながらもええーい、ままよとばかりに服を脱いで絞り、錬成の魔法を使って「火種」の魔法陣を作り、暖をとって服を乾かしながら霧がかった記憶を思い出していた。

そう、朧げな視界の中、目まぐるしく変わる視界に唯一感じる体温の温かみ。そして日色の声。

あの時自分は日色に助けられたのだということを思い出した。寒気が体を走り、一気に血の気が引いていくのを感じたハジメは辺りを慌てて見渡すが日色の姿は見当たらず

ず、服を乾かした後日色を探すために少しずつ移動しながらも日色を搜索していたのだ。

そして現在、正しく洞窟といった感じの通路をハジメは進んでいた。

低層の四角い通路ではなく岩や壁があちこちからせり出し通路自体も複雑にうねっている。二十階層の最後の部屋のようなだ。

ただし、大きさは比較にならない。複雑で障害物だらけでも通路の幅は優に二十メートルはある。狭い所でも十メートルはあるのだから相当な大きさだ。歩き難くはあるが、隠れる場所も豊富にあり、ハジメは物陰から物陰に隠れながら進んでいるのだが未だに全体を把握できていなかった。

そしてハジメがそろそろ疲れを感じ始めた頃、遂に初めての分かれ道にたどり着いた。巨大な四辻である。ハジメは岩の陰に隠れながら、どの道に進むべきか逡巡した。

しばらく考え込んでいると、視界の端で何か動いた気がして慌てて岩陰に身を潜める。

ハジメは立つたまま、そつと顔だけ出して様子を窺うと、自分たちのいる通路から直進方向の道から白い毛玉がピョンピョンと跳ねて来たのがわかった。そう蹴りうさぎである。

蹴りうさぎには赤黒い線がまるで血管のように幾本も体を走り、ドクンドクンと心臓

のように脈打っている。

明らかにヤバそうな魔物の為、ハジメはしばらくは様子をうかがう事にした。

しかしあのウサギがこちらの道に進んで来ないとも限らない。

ハジメは気づかれないように左右の道に進めないかと思いつながら観察を続ける。

突然、ウサギがピクツと身体を震わせたかと思うと、背筋を伸ばして立ち上がった。

警戒するように耳が忙せわしくあちこちを向いている。

ハジメはまさか見つかった!?!と即座に岩陰へ、張り付くように身を潜めながら冷や汗を流す。

だが、ウサギが警戒したのは別の理由だったようだ。

「グルウア!!」

獣の唸り声と共に、これまた白い毛並みの狼のような魔物がウサギ目掛けて岩陰から飛び出したのだ。

二本ある尻尾に大型犬くらいの大きさの白い狼はウサギと同じように赤黒い線が体に走って脈打っている。

いつ現れたのか一体目が飛びかかった瞬間、別の岩陰から更に二体の二尾狼が飛び出す。

どう見ても狼の群れがウサギを捕食する瞬間であり、このドサクサに紛れて移動出来

ないか、とハジメは考えた……が直後、その認識が覆される。

「キユウー！」

可愛らしい鳴き声を洩らしたかと思つた直後、ウサギがその場で飛び上がり、空中でくるりと一回転して、その太く長いウサギ足で一体目の二尾狼に回し蹴りを炸裂させた。

すると――

ドパンツ!!、という、ウサギの足蹴りが出せるとは思えない音を発生させて、二尾狼の頭部にクリーンヒットし、ゴギャー!、という明らかに鳴つてはいけない感じの音を響かせながら、狼の首はあらゆる方向に捻じ曲がってしまった。

ハジメは腰を浮かせたまま硬直する。

そうこうしている間にも、ウサギは回し蹴りの遠心力を利用して更にくると空中で回転すると、逆さまの状態で空中を踏みしめ地上へ隕石の如く落下し、着地寸前で縦に回転。強烈なかかと落としを着地点にいた二尾狼に炸裂させた。

ベキヤツ!

再び鳴つてはならない音を鳴らしながら二匹目の狼の頭部を断末魔すら上げさせず粉砕する。

しかしその頃には更に二体の二尾狼が現れて、着地した瞬間のウサギに飛びかかっ

た。

今度こそウサギの負けかと思われた瞬間、なんとウサギはウサミミで逆立ちしブレイクダンスのように足を広げたまま高速で回転をした。

まるで竜巻の如き回転蹴りに飛びかかっていた二尾狼二匹は弾き飛ばされ壁に叩きつけられる。グシャという音と共に血が壁に飛び散り、ズルズルと滑り落ち動かなくなった。

そして最後の一匹が唸りながらその尻尾を逆立て、バチバチと放電を始めた。

「グルウア!!」

咆哮と共に電撃がウサギ目掛けて乱れ飛ぶ。

しかし、高速で迫る雷撃をウサギは華麗なステップで右に左にとかわしていく。そして電撃が途切れた瞬間、一気に踏み込み二尾狼の顎にサマーソルトキックを叩き込んだ。狼は仰け反りながら吹き飛び、グシャと音を立てて地面に叩きつけられた。二尾狼の首は、やはり折れてしまっているようだ。

それを見た蹴りウサギは

「キューー!」

と、勝利の雄叫び?を上げ、耳をフアサと前足で払った。

それを見て乾いた笑みしか浮かべれないのが硬直しているハジメである。ヤバイな

んてものじゃない。ハジメ達が散々苦勞したトラウムソルジャーがまるでオモチャに見える。もしかしたら単純で単調な攻撃しかしてこなかったベヒモスよりも、余程強いかもしれない。

ハジメは、「気がつかれたら絶対に死ぬ」と、表情に焦燥を浮かべながら無意識に後ずさろうとしたその時。

カラン……

という音が洞窟内に響いた。

ハジメが無意識に足を後ろに下げた際、足元にあつた小石を蹴ってしまったのだ。

あまりにもベタでありふれていて……そしてなによりも致命的なミスである。

小石に向けていた顔をギギギと油を差し忘れた機械のように回して蹴りウサギを確認する。

蹴りウサギは、ぼつちりとハジメを見ていた。

赤黒いルビーのような瞳がハジメを捉え細められている。ハジメの背中に冷や汗が大量に吹き出し、逃げろと生存本能が警報を鳴らす。

しかし、ハジメが次の行動を移す前に蹴りウサギが動いた。



首だけで振り返っていた蹴りウサギは体ごとハジメの方を向き、足をたたみグツと力を溜める。

(やばいッ！)

ハジメが本能と共に悟った瞬間、蹴りウサギの足元が爆発した。後ろに残像を引き連れながら、途轍もない速度で突撃してくる。

気がつけばハジメは、無意識に全力で横っ飛びをしていた。

直後、一瞬前までハジメのいた場所に砲弾のような蹴りが突き刺さり、地面が爆発したように抉られた。硬い地面をゴロゴロと転がりながら、尻餅をつく形で停止するハジメ。陥没した地面に青褪めながら後退る。

蹴りウサギは余裕の態度でゆらりと立ち上がり、再度、地面を爆発させながらハジメに突撃する。

今度は避けられない、ハジメは咄嗟に左腕を掲げ盾にし、衝撃に耐えようと目を瞑る。しかし衝撃は——来なかった。

(——え？)

一瞬の疑問が浮かぶが横から訪れた衝撃と浮遊感に慌てて目を見開く。

「まったく、世話がやける」

そして、ようやくハジメは日色に抱えられていることに気づいた。

「え、う、あ、ひ、日色?」

「何だ?そんなに俺が居ることがおかしいか?」

そう、ハジメが蹴りウサギに蹴られそうになる瞬間、日色が横から抱きつくようにハジメにぶつかり蹴りウサギの蹴りを避けたのだ。

日色はハジメから手を離し、日色は前に出て、蹴りウサギからハジメを庇うかのよう  
に剣を構える。

しかし蹴りウサギの目には見下すような、あるいは嘲笑うかのような色が見え、『雑魚  
とその仲間は自分よりも圧倒的に格下だ』と思われるのが分かった。

「……話は後だ。時間は稼いでやるから早く逃げろ」

「で、でもッ!——」いいから早くしろッ!コイツがやばいことぐらいは俺だつて理解し  
ている!だが問題はコイツよりも強い奴がいる可能性があるんだ!そいつが来る前に  
この場を離れ——ッ!」

ハジメの言葉を遮って怒鳴るように叫ぶ日色がその言葉を言い終わる前に異変に気  
づいた。

それはまるで突然背中に氷を入れられたような感覚、何かどうしようもない驚異と出  
会ってしまったような、そんな嫌な予感。

「……震えている……?」

そんなハジメの言葉を聞いた日色は蹴りウサギを注視すると、ウサギの身体はふるふると震え、目からは一切の余裕が消えているのが分かった。まるで、何かの来訪に怯えているかのように。

否、事実蹴りウサギは怯えていた。

そして、その魔物は現れた。

ハジメが逃げようとしていた右の通路から二メートルはあるだろう巨軀に白い毛皮を持った新たな魔物が現れる。

例に漏れず赤黒い線が幾本も体を走っておりその姿は、たとえるなら熊だった。ただし、足元まで伸びた太く長い腕に、三十センチはありそうな鋭い爪が三本生えているが。その爪熊が、いつの間にか接近しており、蹴りウサギ、そして日色とハジメを睥睨していた。

ハジメは元よりウサギも硬直したまま動かない……いや、動けない。

そのウサギの様は、まるで先程のハジメの様で、爪熊を凝視したまま凍りついている。

「……グルルル」

突然爪熊が、この状況に飽きたとでも言うかのように、低く唸り出した。

「ッ!?!」

それを聞いたウサギは、まるで夢から覚めたように、ビクツと一瞬震えると踵を返し、

まさに脱兎の如く逃走を開始した。今まで敵を殲滅するために使用していたあの踏み込みを逃走のために全力使用する。

しかし、その試みは成功しなかった。

爪熊が、その巨体に似合わない素早さで蹴りウサギに迫り、その長い腕を使って鋭い爪を振るつたからだ。蹴りウサギは流星の俊敏さでその豪風を伴う強烈な一撃を、体を捻ってかわす。

ハジメの目にも確かに爪熊の爪は掠りもせず、蹴りウサギはかわしきつたように見えた。

だが日色は見た。

あの蹴りウサギが身を捻って爪熊の爪を避けた途端、爪熊の爪から風の刃が射出されたのを。

この現象は爪熊の固有魔法が原因である。あの三本の爪は風の刃を纏っており最大三十センチ先まで伸長して対象を切断できるのだ。

着地した蹴りウサギの体はズルと斜めにずれると、そのまま噴水のように血を噴き出しながら別々の方向へドサリと倒れた。愕然とする日色達。あんなに圧倒的な強さを誇っていた蹴りウサギが、まるで為す術もなくあっさり殺されたのだ。

蹴りウサギが怯えて逃げ出した理由がよくわかった。あの爪熊は別格なのだ。蹴り

ウサギの、まるでカポエイラの達人のような武技を持つてしても歯が立たない化け物なのだ。

爪熊は、のしのしと悠然と蹴りウサギの死骸に歩み寄ると、その鋭い爪で死骸を突き刺し肉を咀嚼する音を立てながら喰らってゆく。

ハジメは動けなかった。

あまりの連続した恐怖に、そしてウサギだったものを咀嚼しながらも鋭い瞳でこちらを見ている爪熊の視線に射すくめられて。

日色は冷静に現状の選択肢を判断し、文字魔法の準備に入る。

最善の手を打ち、最悪でもハジメが生き残れる可能性を増やす為に。

爪熊は三口ほどで蹴りウサギを全て腹に収めると、グルツと唸りながらハジメの方へ体を向けた。その視線が雄弁に語る。次の食料はお前らだと。

そして、その捕食者のような目を向けられたことがないハジメはその視線に耐えきれず、恐慌に陥った。

「うわあああー!!」

「なッ！バカがッ！不用意に動いたら——」

意味もなく叫び声を上げながら日色の制止の声すら無視して必死に立ち上がり爪熊とは反対方向に逃げ出す。

だがあのウサギですら逃げる事が叶わなかった相手からハジメが逃げられる筈が無い。

ゴウツ!!と風が唸るような音が聞こえ、何かに押された感覚の直後、強烈な衝撃がハジメの左側面を襲った。そして、そのまま壁に叩きつけられる。

「があっ?!」

肺の空気が衝撃により抜け、咳き込みながら壁をズルズルと滑り崩れ落ちるハジメ。

衝撃に視界が揺れ、思考が霞む。

そして直後、強烈な痛みがハジメを襲った。

あまりの激痛にハジメは顔を歪ませ、何が起こったのか理解しようと纏まらない思考で痛みの元へと目を向ければ、そこには半分以上が切断されてプラプラとぶら下がっているだけの様な自身の左腕があった。

そんな現実離れた事実にハジメは夢だと思いかけるがハジメの脳が夢から覚めるというように痛みをもって現実を教えてくる。

そして、あまりの激痛に迷宮中に絶叫を木霊させそうになり――

「あがあっ!!」

あ?」

——恐怖の込められた瞳で爪熊の方を見ようとして、文字通り呼吸を忘れ、目を見開いた。

目の前に映った光景にハジメは一瞬、痛みを忘れ、何が起こっているのか理解できなかった。

待って。

これは何？

何が起こっているの？

なんで輝く『守』の文字が切り裂かれているの？

なんで地面が真っ赤に染まっているの？

なんで目の前で日色が倒れているの？

わからない。

理解ができない。

何が起こっているの？

あまりの現実にはジメは、アレ？、と顔を引き攣らせながら、首を傾げる。脳が、心が、理解することを拒んでいるのだろう。

だけど、目の前の現実がジメの脳裏に明確に焼きつけられる。

蛇口を捻られたかのように日色から真紅の血が絶え間なく流れ、地面を真っ赤に染め上げていく。

「あ

？

」

体から全身の血が引いていくのを感じた。

もはや口から無意識に溢れる言葉をジメは認識することができない。

なんで日色が倒れているの？——爪熊の攻撃からジメを庇ったからだ。

なんで血が流れているの？——日色の胸を右下から左上に沿うように深く斬り裂かれていたからだ。

誰のせいで日色が倒れているの？——僕の、せいだ。

もはや目の前の事実はジメの許容量をとうに超えていた。

目の前で日色が死にかけているという事実にジメは耐えることができない。

あまりの絶望と恐怖にはジメの心はまるで心臓が止まった時に表示される心電図のメーターのように平坦になり——瞬間、爆発した。





防具を加工するためだけの魔法。その天職を持つ者は例外なく鍛冶職に就く。故に戦いには役立たずと言われながら、異世界人ならではの発想で騎士団員達すら驚かせる使い方を考え、クラスメイトを助けることもできた力。

だからこそ、死の淵でハジメは無意識に頼ったのだ。

錬成により背後の壁に縦60センチ、横130センチ、奥行4メートル程の穴が空く。

獲物が逃げようとしている事を察知した熊は二人に迫ろうとする。

「ギツ、グツ、アアアアアア!!」

しかし、ハジメはその直後、ハジメはぶら下がっていた自身の左腕を一切躊躇せず、右手で掴んだナイフで切り落とした。

グチュリと肉が抉れる感覚と激痛に顔を歪めながらもナイフを捨てハジメは熊に向けて自分の腕を投げつける。

ドチャツ、と熊の横に落ちたハジメの腕に熊は惹かれ、喰らい付いた。

その隙にハジメは血まみれの日色の服に噛み付き、その体を引っ張りながら穴の中へ体を潜り込ませた。

「グウルアアア!!」

目の前で獲物を逃したことに怒りをあらわにする爪熊は咆哮を上げながら固有魔法を発動し、ハジメが潜り込んだ穴目掛けて爪を振るう。凄まじい破壊音を響かせながら

壁がガリガリと削られていく。

「ひっ、う、ああああーッッ!」【錬成】! 【錬成】! 【錬成え】!」

熊の咆哮と壁が削られる破壊音に半ばパニックになりながら、少しでもあの化け物から離れようと連続して錬成を行い、奥へ奥へと進んでいく。

何度も何度も錬成を行いながらほく前進で日色を引つ張りながら奥へ進むハジメ。

後ろは振り返らない、もはや痛みなど忘れ、『日色を死なせたくない』という想いだけで突き進む。

……どれくらい進んだのだろうか? ハジメにはわからなかったが、恐ろしい音はもう聞こえなくなっていた。

だが、そこまで進んでいないことは無意識にハジメは理解していた。一度の錬成の効果範囲は5メートル程度であるし(これでも初期に比べ倍近く増えている)、人間一人の服を唾えながら引つ張っているし、何より左腕の出血が酷い。

今でもハジメは出血多量により既に落ちかけている。それでも、もがくように前へ進もうとする。

だが、

「【錬成】……【錬成い】……【れんせい】……【えんせえ】……」

何度錬成しても眼前の壁に変化はない。意識よりも先に魔力が尽きたようだ。ズル

りと壁に当てていた手が力尽きたように落ちる。

ハジメは、朦朧として今にも落ちそうな意識を何とか繋ぎ留めながらゴロリと仰向けに転がった。

ボーツとしながら引つ張ってきた日色を見つめる。

日色の姿はこの辺りは緑光石が無く明かりもないため、見ることはできないが荒い息遣いだけは聞こえてくる。

いつしかハジメは昔のことを思い出していた。走馬灯というやつかもしれないと沈むような思考でハジメは思った。

何時しかハジメは日色と出会った頃を思い出していた。

書店で初めて日色に出会って、日色に友達と言ってもらって、一緒にゲームで遊んだ時、好きなキャラクターを話し合ったり、日色にアーンしてもらった時も思い出した。

様々な思い出が駆け巡り、そして最後に思い出したのは……月明かりの下で背中越しに感じる体温とともに傍にいて、微かながらも笑ってくれた<sup>神代</sup>大切な人の姿。

その美しい光景を最後にハジメの意識は闇に吞まれていった。意識が完全に落ちる寸前、ぴたっぴたっぴたっと頬に水滴を感じた。

それはまるで、誰かの流した涙のようだった。

## 少女の本質

ぴちよん……ぴちよん……

水滴が頬に当たり口の中に流れ込む感触に、ハジメは徐々に意識が闇から浮上し始めた。

そのことを不思議に思いながらゆっくりと目を開く。

(……生き、てる?……助かった……の?)

疑問に思いながらも起き上がろうとグツと腹に力をいれ起き上がろうとして低い天井にガツツと額をぶつけた。

「——いつ!?!」

突然の額の激痛に思考が混乱するがすぐに自分の作った穴は縦幅が五十センチ程度しかなかったことを今更ながらに思い出し、ハジメは、錬成して縦幅を広げるために天井に手を伸ばそうとした。

しかし、視界に入る腕が一本しかないことに気がつき動揺する。

「え、あ?なんで腕が——ツ!?!」

しばらく呆然としていたハジメだったが、やがて自分が左腕を失っていた事を思い出

し、その瞬間無いはずの左腕に激痛を感じた。おそらく幻肢痛だろう。

【幻肢痛】、それは四肢を失った者があるはずのない手の先端があるように感じたり、失った部分から電流を流した万力で潰されるような痛みを感じてしまうような幻肢の派生症状である。

幻肢痛は実際の疼痛ではないため、痛み止めや麻酔は効かずミラーセラピーなどにより実際にあるかのように思わせることで緩和は可能だが：鏡のない現状では難しい。

ハジメは表情を苦悶に歪めながら反射的に左腕を押さえて気がつく。切断された断面の肉が盛り上がって傷が塞がっているのだ。

「な、なんで？ ……それに血もたくさん……」

暗くて見えないが明かりがあればハジメの周囲が血の海になっていることがわかっただろう。普通に考えれば絶対に助からない出血量だった。

ハジメが右手で周りを探れば、ヌルヌルとした感触が返ってくる。血が乾いていない、まだ気を失ってそれほど時間は経っていないのだ。

「そ、そうだ！ ……日色ッ！」

ハッ、とハジメは日色を探すために身体を動かした。大量出血したことが夢ではないのなら日色はハジメよりももっと重傷なはずなのだ。真つ暗なせいで何も見えないが、腕を動かせば温かみの感じる何か……日色の腕に触れることができた。

耳をよく傾けて聞けば微かだが日色は小さく早い苦しそうな呼吸をしていた……だが、まだ生きている。

「……日色……よかった……」

日色が死んでいないことはとても嬉しかったが今はそれどころではない日色が出血多量で苦しんでいるのにどうして自分だけがこんな風に傷が塞がっているのか。

ハジメはそんな疑問と共に日色が苦しんでいる状況に苛立ちを浮かべながら必死に考えていると再び頬や口元にぴちよんと水滴が落ちてきた。

それが口に入った瞬間、ハジメは少しだが感じ取れる程度に体に活力が戻ったのがわかった。

「……まさか……これが？」

ハジメは幻肢痛と貧血による気怠さに耐えながら右手を水滴が流れる方へ突き出し錬成を行った。

「日色、苦しいけど待ってて。すぐ……戻るから」

苦しんでいる日色にハジメはそう呟くと日色の返事を待たずにふらつきながら再び錬成し奥へ奥へと進んで行く。

不思議なことに、岩の間からにじみ出るこの液体を飲むと魔力も回復するようで、いくら錬成しても魔力が尽きない。ハジメは休まず熱に浮かされたように水源を求めて

鍊成を繰り返した。

やがて、流れる謎の液体がポタポタからチヨロチヨロと明らかに量を増やし始めた頃、更に進んだところで、ハジメは遂に水源にたどり着いた。

「ハ……それは……」

そこにはバスケットボールぐらいの大きさの青白く発光する鉱石が存在していた。

その鉱石は、周りの石壁に同化するように埋まっており下方へ向けて水滴を滴らせている。神秘的で美しい石だ。アクアマリンの青をもっと濃くして発光させた、言葉で表現するならばそのような言葉でしか表せない美しい雰囲気の花石だった。

ハジメは一瞬、幻肢痛も忘れて見蕩れてしまった。

そして縫り付くように、あるいは惹きつけられるように、その石に手を伸ばし直接口を付けて啜った。

すると体の内に感じていた鈍痛や、靄がかかったようだった頭がクリアになり倦怠感も治まっていく。

やはり、ハジメが生き残れたのはこの石から流れる液体が原因らしい。治療作用がある液体のようだ。幻肢痛は治まらないが、他の怪我や出血の弊害は、瞬く間に回復していく。

ハジメは知らないが、実はその石は「神結晶」と呼ばれる歴史上でも最大級の秘宝で、



既に遺失物と認識されている伝説の鉱物だったりする。

神結晶は、大地に流れる魔力が、千年という長い時をかけて偶然できた魔力溜りにより、その魔力そのものが結晶化したものだ。直径三十センチから四十センチ位の大きさで、結晶化した後、更に数百年もの時間をかけて内包する魔力が飽和状態になると、液体となって溢れ出す。

その液体を「神水」と呼び、これを飲んだ者はどんな怪我も病も治るといふ。欠損部位を再生するような力はないが、飲み続ける限り寿命が尽きないと言われており、そのため不死の霊薬とも言われている。神代の物語に神水を使って人々を癒すエヒト神の姿が語られているという。

「これなら……」

ハジメは錬成によつて「神結晶」を一欠片も残さずに岩壁から取り外し通つてきた穴を広げながら日色のもとへ急いで戻つた。

そして発光する鉱石のおかげでようやく日色の姿を見て、言葉を失つた。

目は閉じられ、一向に開く気配はなく、呼吸は僅かに開いた口で必死に酸素を取り込もうと口が小さく上下を繰り返している。

そしてなにより、あの爪熊にハジメを庇つて切り裂かれた胸は悲惨だった。

胸を右肩から斜めに斬り裂かれ、傷口は今も大量出血を引き起こし服を紅く染め、

所々に少しだけ骨すら見える。もはや今生きていることすら奇跡だった。

あの時、日色が咄嗟に文字魔法で『守』を書いていなければ日色は両断されていただろう、しかしそれだけでは生き残れなかったのだが今は関係ないので割愛する。

ハジメは日色の頭をゆつくりと少しだけ上げ、その隙間に自分の片足を入れる。伸ばした自分の足の上に乗せた後、どうにか鉱石を片手で持ち上げ、滴る水滴を日色の口の中へと垂らしていく。

小さくだがコクリコクリと飲んでいく音が聞こえ、徐々にだが胸の傷が塞がっていき、呼吸が穏やかになっていく。

それに安堵してようやく自分達が生き残ったことを実感したハジメはそのままズルズルと壁にもたれながらへたり込んだ。

そして思い出した死の恐怖に震える体を抱え、体育座りしながら膝に顔を埋めた。

既に脱出しようという気力はない。ハジメは心を折られてしまったのだ。

なぜならハジメを餌としてしか見ていない捕食者の目を向けられてしまったのだから。弱肉強食の頂点に立つ人間がまず向けられることのない目だ。

敵意や悪意になら立ち向かえたかもしれない。あのような捕食者のような目でも日色が傍にいたのなら立ち向かえたかもしれないだろう。しかし、日色が切り裂かれたのを見てハジメは完全に心が折れてしまった。

(誰か……助けて……)

しかしここは奈落の底。

ハジメの声は誰にも聞こえず、日色は一向に目覚めない。



どれくらいそうしていたらだろうか。

ハジメは壁に体を預け、手足を投げ出してボーっとしていた。

ハジメと日色が奈落到ち落ちた日から既に四日が経っている。

その間、ハジメはほとんど動かず、日色を介抱しながら滴り落ちる液体のみを口にしておきながら生きていた。

と、言っても日色に神水を飲ませ、自分も飲み、何度も何度も、意識を失うように眠りについては、飢餓感と痛みを目を覚まし、苦痛から逃れる為に再び液体を飲んだり、日色に飲ませてやった後、また苦痛の沼に身を沈めるサイクルを延々と続けるだけなのだが。

神水は服用している間は余程のことがない限り服用者を生かし続けるものの空腹感まで消してくれるわけではなかった。死なないだけで、現在、ハジメは壮絶な飢餓感と幻肢痛に苦しんでいたのだ。

(どうして僕がこんな目に?)

ここ数日何度も頭を巡る疑問。

痛みと空腹で碌に眠れていない頭は液体を飲めば回復するものの、回復してクリアになつたがために、より鮮明に苦痛を感じさせる。

もう何度、そんな微睡みと覚醒を繰り返したのだろうか。

「こんな苦痛がずっと続くなら……いつそ……」

そう呟いてから、ハジメは傍で眠っている日色の顔を思い出し死ぬ訳にはいかないと思いつつ、意識を闇へと落とす。

日色はまだ目覚めない。



それから更に三日が経った。

ピークを過ぎたのか一度は落ち着いた飢餓感だったが、嵐の前の静けさだったかのようになり、更に激しくなつて襲い来る。幻肢痛は一向に治まらず、ハジメの精神を苛み続ける。まるで、端の方から少しずつヤスリで削られているかのような耐え難き苦痛。

「……ひ、いろ……目を……覚ましてよ……」

「……ッ……ハッ……うッ……」

そんな痛みにも耐えながらハジメは日色の囁かされている声を聞いて、虚ろな瞳を日色へ向ける。

もはやハジメは精神的に限界が近く既に正常な思考が出来なくなっていた。パタリと日色の横で倒れ、空っぽな瞳でもはや焦点が合わず霞んでいる視界の中、小さくうわ言を呟く。

「……………また……………あの……………時の……………ように……………に……………笑つ……………て……………」

そうしてハジメは再び意識を闇へと落とす。かつての日常を思い出すように。

そして、夢を見た。

明晰夢、というものがあるらしい。

睡眠中にも見る夢のうち、自分で夢であると自覚しながら見ている夢のことであり、夢の状況を自分の思い通りに変化させられるらしい。

だとすれば、今の状況は明晰夢なのだろうか、とハジメは他人事のように思う。

窓辺から差し込む黄昏色の夕日の光が電気のついていない無人の教室の灯りとなつて、机を照らす。

そんな中自分の席である窓側から二番目の最後尾の席でハジメは座っていた。

別にハジメは自ら座ったわけではない、奈落の底で眠ってたただ気がついたらただ一人席に座っていたのだ。

あの爪熊に食わせた左腕も元通りに存在している。

ハジメは最初、さつきまでの記憶……すなわち異世界に飛ばされたなんてことは夢で、本当は放課後、夕日の光を浴びながら眠っていただけではないか、それで皆が先に帰ってしまっただけなのではないか、と思っていた。

そんなわけがないのに。

あの傷ついた日色の姿が、あの切り裂かれる瞬間が今でもハジメの脳裏にこびり付いて離れていないのだから。

では、だとすればここは一体どこなのだろうか？ やつぱり、夢なのだろうか？

そんな内心で思った疑問に答えるように、突然前方から声が聞こえた。

『——まあ、夢かといえればここは夢の部類に入るだろうね』  
「ツ!!？」

そうハジメとまったくの同じ声で語る声の主へとハジメはバツと顔を上げ、向ける。

そして、ハジメの視界に声の主の姿が目にと映るとともにハジメは無意識に歯を噛み締める。

茶髪の混じった黒髪がハジメと同じ寝癖無く少し外側に跳ねたショートカットに纏められ、ハジメと同じ制服を着て、顔つきも全くの瓜二つ。

ただし、雰囲気とその瞳の色は対極だった。ハジメは気弱でオドオドとした印象を与えるような雰囲気を与えるのに対し、目の前の少女はその真逆、濁りに濁った紅色の瞳は何もかもを憎むかのような禍々しく、雰囲気は昏く、冥く、暗い。

もし、ハジメを知っているものが見たのなら確実に別人だと答えるだろう。

それほど、両者は決定的に違っていたのだ。

そんなあまりに変わっている『彼女』は、『ナグモハジメ』は南雲ハジメの到来を歓迎するかのようにならう。

『ようこそ、「南雲ハジメの世界」へ。そしてこの姿では初めましてだね、南雲ハジメ僕？』  
彼女はそう言つて壊れきった笑みを浮かべたのだった。

◆ 『……とは言つても、流石にボクも此処に来るとは思つていなかったけど。本来此処は絶望の深さがボクに近くなければ来れないはずなんだけどなあ？ボクだって日色が傷ついたことに動揺したけど今の君には正直言つてがっかりだよ』

「……黙つて」

やれやれと呆れたように呟く『ナグモハジメ』にハジメは『ナグモハジメ』を親の仇

の如く睨み、小さく呻くように言い返す。

そのようなハジメの態度に『ナグモハジメ』はハア、とため息を吐く。

『またその反応? いい加減、ボクも飽きてきたよ』

「……うるさいつ、僕はお前に関わっている暇なんてないんだ。早く目覚めて日色を——  
—『助けるつて?』 ツ!?!……そうだよ!」

ハジメの声に被さるるように呟いた『ナグモハジメ』の言葉にハジメは同意の意を示すと『ナグモハジメ』はへえ、と呟いてピヨンと座っていた机から降りた。

『なるほどねえ……なるほどなるほど』

まるで何かに納得したかのように何度もなるほどなるほど、と呟いてハジメへと歩んでいく。

『つまり君は日色を助けたいと言うんだね? 早く起きて日色にあの謎の水を飲ませなければ、と』

「……何が言いたいのか?」

ハジメには『ナグモハジメ』の言いたいことが理解できなかった。

日色を助けたいのは当たり前だろう、ハジメにとって日色は大切な人なのだから。

日色を助けるにはあの水を飲ませるしかないのだ、だから早く起きないと—— ツ!!?

そう思うハジメの目の前まで『ナグモハジメ』はなるほど、と呟いて直後笑顔でこう



言った。

『嘘つき♪』

呼吸が止まった。

目の前の少女がハジメには何を言っているか理解できない。

嘘つき？ 僕が？ コイツは一体何を言っているんだ？

「——なっ、何言ってるッ?!」

『やれやれ、ボクは君から生まれた人格だよ？ 君の本心なんて知っているに決まっているじゃないか。日色を助けない？——嘘をつくなよ、君の本心はもつと醜い。君はただ日色に褒めてもらうことに存在意義を見出して行動しているに過ぎないんだ』

思考が空白に染まった。

心のどこかで何かが目の前のコイツの言葉を聞くことを拒絶している。

だというのにハジメの身体は一向に動かず、『ナグモハジメ』の言葉を何もせず聞くことしかできない。

「ち、違ッ——」

『いいや、違わない。君の行動原理はそれだけなんだよ、『僕』。日色が、いやヒーロー自分を救ってくれる人が、助けてくれるような悲劇のヒロインを演じて、その人が褒めてくれるような行動を起こす、君の行動原理はただそれだけなんだ』

『ナグモハジメ』は嗤う。未だに目を背けている『南雲ハジメ』を侮蔑するように。

『ナグモハジメ』は嗤う。自分の醜い欲望に気づかない『南雲ハジメ』を嘲笑う様に。

そんな彼女の言葉にハジメは自制が出来ないほど身体が震えていた。

『君にとつて世界は日色と……あとは両親だけかな？君にとつてそれ以外の人は興味すらないもんね、例え日色以外のクラス全員が全員死んだとしても君は悲しんだりしないだろう？……ああ、ごめん、間違つてた。日色のために悲しんで絶望するように演じるんだよね』

「そ……ん、な……わ、けが……ちがッ……ほ、僕は……」

止めろ、これ以上言わないでくれ。

ハジメの何かが壊れていく、崩れていく。

もはや、ハジメの心は壊れかけていた。

『日色に嫌われないように、日色に褒められるように友達も作つたんだよね。えーと、確か白崎香織と八重樫雫、だっけ？よかつたね、友達が出来て！嬉しかったよね、何故ならこれで日色に褒めてもらえるからッ!!』

そう、それこそがハジメの本質。

ただ日色に褒めてもらいたい、お前がいてくれてよかったと言って欲しい。

逆に言えばハジメにとってそれ以外は一欠片も興味すらわかないゴミ屑でしかない。

『だから、日色のあの水を飲ませようとしてるんだよね。何故なら水を飲ませるだけで日色が目覚めてくれたらきつと褒めてくれるはずだから！本当なら最善は命懸けで魔物を倒し、日色の周りの安全を確保することなのに、もし日色に拒絶される可能性が怖いから！』

「もう止めてッ!!」

そして遂にハジメが制止の言葉を叫んだ。

もはや今のハジメには元の姿の面影もない、まるで怯えた子犬のように椅子の上に膝を折りたたんで『ナグモハジメ』の声を聞かないように耳を塞いで震えている。

そんなハジメの姿を見て『ナグモハジメ』は溜息を吐く。

『……それでどうするの？このままだと日色は死んじゃうよ?』

「……………え?」

その『ナグモハジメ』の言葉に呆然といったように反応し、顔を上げると『ナグモハジメ』の姿は消え、そこにはさつきまでの教室ではなくなっていた。

変わった場所は一言で言うならば葬式だった。







そして元の教室の光景に戻った時には既にハジメには言葉をあげる気力すら無くなっていった。

あまりの悲惨な出来事の連続に、元々精神的に限界に近かったのが遂に限界を超えたのだ。

まるで糸の切れた人形のようにへたり込んで『ナグモハジメ』の言葉にすら何の反応すら示さなくなってしまうている。

『それでも君が日色に甘え続けるっていうならさ——』

そんな何の反応も示さないハジメに『ナグモハジメ』はコツコツと音を立てながら近づいてきた。

そして——

『——もう、ボクが代わりに終わらせるから死んじゃえよ』

——ハジメを押し倒しマウントを取るとともにハジメの喉元を掴み力強く締め始めた。

「——ガッ!?!——ツ!!」

『ボクにとつても僕にとつても、日色には死んで欲しくない。だからこのまま日色の邪魔になるのならいつそのこと君は消えてしまえばいい』

眼を見開き、呼吸を行おうと何度も口を開きさせるハジメに対し『ナグモハジメ』は

無表情で更に絞める力を強めていく。

ハジメは一切抵抗しなかった。なぜならハジメは自分の本質を知ってしまったから、自分が日色に甘えているだけだということが理解できてしまったのだから。

そして――

「、――。――、――」

――どこからか、懐かしい大切な人の声がハジメの脳裏をよぎった瞬間。

『さようなら、  
南雲ハジメ 僕』

グキリツ！と骨が折れる音が響いた。

◆ グキリツ！と骨が折れる音が聞こえた。

その音は確実に折れた音であり、もし首ならば確実に死んでいるだろう。

しかし。



『——なッ!?』

骨を折ったのがハジメであり、手首を折られ、驚愕しているのが『ナグモハジメ』だったが。

「——ッ」

ハジメは『ナグモハジメ』の手首を折ったと共に『ナグモハジメ』の腹を蹴り飛ばし、マウントを逆転させる。そのままさっきの出来事を逆転するように今度はハジメが『ナグモハジメ』の首を絞め始めた。

『どう……いう……こ、と……?……まだ、日……色に……甘える、つもり……?』

「……………思い、出した」

『……何?』

困惑する『ナグモハジメ』にハジメは大切な思い出を思い出すように語っていく。

「……昔、日色と約束したんだ。【いつか、俺が困った時お前が助けてくれ】って、【お前にしかできないことはある】って。こんな僕を……頼りにしてくれたんだ」

ハジメが思い出したのは自宅で日色と勉強会を行ったあの日のこと。ハジメの灰色の世界を彩らせて救ってくれた日色との約束。

【いつか、俺が困った時お前が助けてくれ。これは貸しだ、絶対忘れるなよ】

何故なら約束とは互いに取り決めを行い、その内容を実行すること。

つまりそれはハジメが日色に一方的に甘えているのではなく、お互いが対等で支え合っていることの紛れもない証明に他ならない。

故にハジメは立ち上がった、立ち上がることができた。

「——だからこんなところでは消えるわけにはいけない、僕は日色に大きすぎる借りを返すんだ！」

『それ……は、……彼なりの……優し、さ……だ、よ。結、局……君は……日色に、甘えているだけ……じゃないかッ！』

「違うッ！」

憎しげにハジメを睨みつけながら自分の喉元を締め付けるハジメの両腕を手首の折れていない片手で掴み、引き離そうとしながらハジメの本質をつく『ナグモハジメ』の言葉にハジメは断固引かず否定する。

「——僕はもう逃げない。僕は、私は……世界から日色を守るんだ！」

『』

そうハジメは宣言した。

助けるではなく守る、と

日色に甘えるのではなく、嫌われないように顔色を伺いながらヒロインを演じるわけ

でもない。

この世の全ての理不尽から日色を守る、とそう宣言したのだ。

それを聞いた『ナグモハジメ』は目を細め、瞬間。ハジメの両腕をそんな細腕で、しかも片手でありながらありえない力を使って自分の喉元から引き離す。

「——ッ!?!」

『ハハッ! 守る? 守るだつて? ——ふぎけるなよ』

『ナグモハジメ』は握っているハジメの両腕を自分の喉元から離し、それに動揺したハジメの一瞬の隙をついてハジメの左腕を握りしめて一息で引きちぎった。

「——あグガッ!!?!」

爪熊に切り裂かれた時と同じように再び左腕から灼熱に溶けた真つ赤な鉄の棒を傷口に入れられぐちやぐちやに掻き回されたかのような激痛が奔る。

そんなハジメに『ナグモハジメ』はまるで様々な感情が一気に浮かび上がったような表情で歯を食いしばり、ハジメへと叫ぶ。

『何が守るだッ! 誰かを傷つけることができない偽善者がッ! 昔も、そして今も一切抵抗せず、記憶も思いも全てボクに押し付けて逃げたくせにッ!』

「——ッ」

それはまさしく切り捨てられた者の叫びだっただろう。

そう言つて、『ナグモハジメ』はハジメを足で突き飛ばし、体勢を崩させる。

そして倒れたハジメへとどこから取り出したのか右手にナイフを逆手に持ち、一息で振り下ろした。

『——そんな奴が今更つ、何を守れるつて言うんだッ!』

そんな万感の叫びと共に振り下ろされたナイフは寸分違わずハジメの喉元の寸前で停止していた。

もはやあと少しのチカラでナイフを押し込むだけでハジメの喉元は貫かれ、呼吸ができなくなり死に至るだろう。

しかし、どれだけ経つてもハジメの喉元へとナイフが押し込まれることはなかった。

「……………」

『……………ねえ、一つ…聞いていい?』

何故なら、既に『ナグモハジメ』の腹へ『ナグモハジメ』が持っているナイフと全く同じナイフが刺さっていたのだから。

当然、それを行なつたのはハジメだ。ナイフを振り下ろされる寸前、まるで空中から現れたかの様に右手に現れたナイフで『ナグモハジメ』の横腹を刺したのだ。

カシャンと『ナグモハジメ』の手からナイフが零れ、床に落ちたと同時に徐々にナイフが刺さつた『ナグモハジメ』の横腹から血が流れ、彼女の服を紅く染め上げていく。

しかし、そんな傷を受けてもまるで痛みを感じないかの様に『ナグモハジメ』は変わらない声色でハジメへと質問する。

『……どうやって、敵から日色を守るつもりなの？日色からの拒絶を恐れて誰かを傷つけることが出来ない君が？』

「だったら——私が変わればいい。私が変わって敵を殺して日色を守る、ただそれだけだから」

『——その生き方は、日色に拒絶されるかもしれないよ？』

そう、ハジメが選ぶ道としている道はまさしく修羅の道だ。

生きる為に、日色を守る為に必要だから日色の生存を脅かす敵は全て滅殺する。

そんな生き方をすればきつと日色に拒絶されるだろう。

だからこそ『ナグモハジメ』は問うのだ。

それでいいのか？と

「構わない」

答えは是だった。

ハジメは何の躊躇もなく、何の動揺もせず、即答した。

日色のために、例え日色にすら拒絶されたとしても日色の敵を滅殺する道を選んだのだ。

「私は、それで日色が守れるのなら、それで日色が幸せならそれでいい！」

この時、この瞬間、南雲ハジメは優しく穏やかで、対立して面倒を起こすより苦笑いと謝罪でやり過ごす南雲ハジメは完膚無きまでに豹変した。

否。

これは決して豹変ではない。これこそが本当の『南雲ハジメ』なのだ。

ただ今まで日色に拒絶されることを恐れ、ありふれた少女を演じていただけなのだから。

神の強い理不尽も、魔物の敵意も、世界なんてどうでもいい。

大切なのは『神代日色』だけ。

だから彼のためならばクラスメイトだろうと、世界だろうと、なんであろうと滅殺する。

例え拒絶されても構わない、嫌われても構わない、それで日色を守れるというのなら。

例えるならば今までの『南雲ハジメ』は鞘だ。波紋を隠し、刃を隠し、世界から逃げていた臆病者。

だが今の『南雲ハジメ』にはその鞘はもう無い。幼き時から溜め続け、鋭く強く、そして鋭利に森羅万象を尽く斬り裂き滅殺するが如き儂くも美しく、禍々しくも輝く呪いの妖刀だ。

『……そう、だったらせいせい頑張りなよ』

そのハジメの決意に『ナグモハジメ』は小さく笑った。

スツと立ち上がり、横腹から溢れ続けている出血すら無視してハジメから距離を取るように歩いていく。

『だけど、その道を選んだ君はいつか必ずボクと同じように絶望する』

「何……言ってるの？」

『——ただの忠告だよ。気にしなくていいさ』

ハジメの疑問の声に言葉を返すと共に『ナグモハジメ』はクルツと背後のハジメへと振り向いて、笑顔を向けた。

その笑顔はあまりにも狂っていて、壊れていて、絶望していて、そして何よりも——

『それじゃあね、南雲ハジメ僕。せいぜい足掻くといいさ、応援してるよ?』

——ありふれた少女が泣くのを必死に堪えているようにハジメには見えた気がした。

瞬間、ハジメの視界がまるでテレビの電源を消したかのように一本線に収縮し、プツリと意識を失った。



「……………う……………っ?」

ハジメは右手から感じる冷たい液体の感覚に目を覚まし、ゆっくりと瞼を開いた。

薄暗い視界の中、神結晶の青い輝きが周囲を微かに照らしている。

どうやらハジメが触れた冷たい液体は地面の窪みに嵌めた神結晶から溢れた神水のようだ。意識を失う寸前に見た時より神水の水溜りの深さが増している為、1、2日ぐらいは眠っていたのかもしれない。

「……………ツ……………グツ……………」

「——日色ッ」

日色の呻き声を聞くと共にハジメは慌てて起き上がり神結晶へと手を伸ばす。

1、2日意識を失っていたと言うことはそれまで日色に神水を飲ませることが出来なかったことに他ならない。ハジメの身体はすっかり弱っていてろくに力が入らなかったが、どうにか右手だけで神結晶を持ち上げ、いつものように日色の口へと神水を飲ませる。

ようやく、日色が規則正しい呼吸に戻ってきたことで一息つく。

「——ッ」

すると同時に再び忘れていた飢餓感と幻肢痛がハジメに襲いかかる。

ハジメはその苦痛に少し顔を歪めるが、その苦痛を無視して倒れている日色の手を握る。

かつて日色の手に触れた時に感じた体温程暖かくは無かったがそれでも恒温動物特



有の体温を感じ、ハジメは頬を緩ませる。

そう、生きている。日色はまだ生きているのだ。

ならば自分がどうするべきか、などは考えることもなく理解している。

ハジメは弱った身体を動かし、地面の窪みに溜まった神水を犬の様に直接口をつけて啜った。飢餓感も幻肢痛も治らないが、体には活力が戻ってくる。

ハジメは、濡れた口元を乱暴に拭うともう一度眠っている日色の顔を見て、優しく微笑んだ。

「待ってて、日色」

そして瞬間、ハジメの表情は一変する。瞳をギラギラと光らせ、小さく歪んだ笑みを浮かべる。まさにかつてのハジメを見たのなら豹変という表現がぴったり当てはまるだろう。

禍々しくも美しい笑みを浮かべながらハジメは錬成を始めながら宣言するように呟いた。

「——日色は、私が守るから」

奈落の化物が生まれる時は近い

## 魔王の生誕

迷宮のとある場所に二尾狼の群れがいた。

二尾狼は単体ではこの階層の魔物の中で最弱である為、4〜6体で群れで行動する習性がある。故に二尾狼は連携によって単体の弱さを補っているのである。

彼らは周囲を警戒しながら岩陰に隠れつつ移動し、絶好の狩場を探していく。二尾狼の基本的な狩りの仕方は待ち伏せなのだ、突然の強襲で獲物が動揺した隙に集団の連携で獲物を仕留める。これが二尾狼の一般的な狩り方である。

しばらく彷徨っていた二尾狼達はやがて納得のいく狩場が見つかったのか各自別れ、それぞれの岩陰に潜んだ。

そのうちの一体が岩と壁の間に体を滑り込ませジツと気配を殺す。あとは獲物が出てくるのを待っただけなのだが何やら違和感を感じた。

二尾狼は狩の成否の要は連携である為、ある程度は繋がりを感ずることができのだ。

明確に意識を疎通できるわけでは無いが仲間がどこにいるのか？どんな感情を抱いているのか？何をしようとしているのか？が大まかにわかるのだ。

だがその感覚がおかしい、群れの中の一匹が忽然と消えてしまったのだ。

二尾狼は不審に思い伏せていた身体を起き上がらせようと力を入れた直後、今度は仲間間の悲鳴が聞こえた。消えた仲間と同じ壁際にいた一体から焦燥感が伝わってくる。

何かに捕まり必死に脱出しようともがいているようだが中々抜け出せないようだ。

それに救援に駆けつける為と二尾狼は立ち上がろうとするが瞬間、再びもがいていた一体の気配が消え失せる。

慌てて、二体は二尾狼が消え失せた場所へと向かい、辺りを見回すが何もおらず困惑しながら、消えた二体が潜んでいた場所へ鼻を近づけフンフンと嗅ぎ、手掛かりを探そうとする。

しかし次の瞬間、地面がグニャアと凹み、同時に二尾狼二体を覆い尽くすように壁がせり出した。

咄嗟に二尾狼は跳び退こうと足に力を入れるが、その前に沈んだ地面が戻り、足を地面に固定されてしまう。しかし、所詮ただの地面だ。これくらいなら直ぐに破壊し脱出できるだろう。

だが、地面が凹むという突然の現象に二尾狼は一瞬だが対応が遅れてしまう。勿論襲撃者はその隙を決して逃すわけがない。

「グルアア!?!」

まるで地面に溶けるかのように壁が二尾狼を覆い、瞬く間に地面へと引きづり込んでいく。

二尾狼は足が固定されていることで何の対応もできず悲鳴をあげて引きづり込まれるしかない。そして最後には、元の平らな地面しか残っていないかった。

そして入れ替わるかのように新たに壁がまるで溶けるが如く穴が開いて中から人が現れた。

「これで全部……かな？」

そう、ハジメだった。日色を守る決意をした日から飢餓感も幻肢痛も全て振り伏せて、神水を飲むことで魔力を回復させ、錬成の鍛錬を延々と行っていたのだ。

あくまでハジメの武器は錬成だ、このまま外に出ても死ぬのがオチだということを悟ったハジメは魔力を神水で回復させ、もはや狂気に等しいレベルで打ち込み続けたのだ。

より早く、より広範囲に、より硬く、より複雑に、と。

元々技能「十高速錬成」を持っていたハジメである、丸一日軽く何千回と続けていくことで効果射程範囲は七メートルに増え、一度の錬成範囲は五メートルで可能になり、簡易な剣や槍程度の武器も数秒で作れるようになっていた。もつともあくまで錬成である為土属性魔法のような直接的な攻撃力は皆無なのだが。

そしてハジメは神水を石を加工した容器に入れ、錬成を用いて隠れながら迷宮を進み標的を探していた。今ハジメが欲しいのは日色の安全のために己の力が通用するかどうかなのだ、このまま迷宮の魔物を殺せなければ日色を守ることなど決して不可能なだから。

そこで見つかったのが二尾狼達である。二尾狼達が岩陰で獲物を仕留めようと待ち伏せしていたのを見つけた為、それを逆手に取り逆に地面に引きづり混んだのである。「さてつ……と、まだ生きています?……まあ、私の錬成で仕留めれるとは思っていないけど」

そう言つてハジメは足元の小さい穴から中にいる二尾狼を覗く。その奥にはまさに壁の中とでも言うように周囲を石で固められ身動き一つできない二尾狼達があった。完全に周囲を石で囲まれている為焦燥の滲んだ低いうなり声を上げるしかない。

その光景にハジメは「…やっぱりね」と呟きながら小さく溜息をつく。

以前、ハジメは孤立した魔物を落とす穴に落とし、底に石の刺で攻撃したことがあったがその時も突き破る速度も威力も足りず結局は断念することとなった。

「……【錬成】」

ハジメは右手を壁に当て、錬成の魔法を酷使用する。作るのは簡素な槍だ、だが先端を螺旋状に変え持ち手の部分に手に持てるハンドルを取り付ける。

空色の魔力を迸らせながら約3秒で片手で扱える簡素な細い石槍が出来上がる。

ハジメは出来上がった石槍を軽く一、二回クルクルと片手で回転させた。

「まあまあ、ね——ん？」

「グアアツ!!」

ふと声がした方へとハジメは振り向くと視界の先には二体の二尾狼が此方へと向かってきていた。どうやら群の数は合計で6体だったらしい。

「……まだ居たのね」

そう呟いてハジメは槍を自分の右脇に通して、槍を構える。

元々槍など使ったことなどないのだ、構えなど適当だが生憎と此方は槍を相手に触れさせるだけでいい。

すると、真つ先に此方へと向かってきた一体が一気にハジメへと距離を詰め、飛びかかってきた。その速度は流石に蹴りウサギ程ではないが視認は出来るものの避けれる速度ではない。

「グルア!!」

「……ッ!」

だからハジメは躊躇せず槍を盾の様に前に出し背後へ跳ぶように身体を後ろへと傾けた。

避けられないのなら、いっそのこと逆らわず勢いを逸らそうとしたのだ。自ら後ろに下がることで襲い掛かる衝撃を和らげ、誤って槍を落としたり、吹き飛ばされないようにするためのハジメの策である。

その策が功を奏したのだろう、後ろへと飛んだことで二尾狼の突撃の衝撃を和らげることができ、ハジメの貧弱な力で——しかも片手でありながら槍を落とさず防ぐことができた。

「——はあッ！」

そして、その攻撃の直後に出来た隙を決してハジメは逃さない。

二尾狼の飛びかかりを防いだことで二尾狼の身体が重力に従い地面へと着地した。

その着地する瞬間を狙いハジメは槍を叩きつけるように片手で振るう。それは別に槍術を学んだ者が見れば確実に初心者だと分かり、そのような振り方では決して魔物を仕留めることなど出来はしない、それ程の拙い槍の扱い方だ。

だが、ハジメの狙いは槍で魔物を斬殺するわけでも、刺殺するわけでも、撲殺するわけでもない——

「ギャンッ!?!」

「——ッ、【錬成ッ】」

——錬成による捕獲である。

ハジメの振るった槍が二尾狼の胴体に直撃すると共にハジメの手袋から水色の魔力が石槍を伝わり——二尾狼の胴体に直撃した時に触れた地面へと流れていく。

瞬間、再び二尾狼を地面が喰らうかのように二尾狼を中心に壁が覆いかぶさり、二尾狼が悲鳴を上げる間もなく先ほどと同じように地面に飲み込まれた。

ハジメの錬成とは対象には直接手を触れなければ効果を発揮しない術である以上、敵の眼前でしやがみ込み、地面に手を突くという自殺行為をしなければならぬがこれには抜け道が存在する。

それは地面を錬成される時に地面と同じ材質でできた物を地面に触れさせて錬成すればわざわざ地面に触れなくても地面と同じ材質の物体を介して地面を錬成できるのだ。

何故なら錬成とは魔力を対象に流して物質の形を変えて、加工を行うことができる。それはつまり錬成の魔法を用いることで無機物限定で原子の分離と結合を操作しているのだから。

だからこそ、同じ材質のものならば介して錬成を行うことができるのである。

ハジメは二尾狼が地面に飲み込まれたことを確認すると共にすぐさまもう一体の方へと視線を向ける。

もう一体の二尾狼はハジメが油断ならない相手だと認識したのか、グルルと唸りなが



らその尻尾を逆立てる。すると、その尻尾がバチバチと放電を始めた。どうやら固有魔法を使うつもりのようなのだ。

「そんなこと——「グルウア!!」——させるわけ無いでしょっ!」

咆哮と共に電撃がハジメへと放たれる瞬間、ハジメは一本の矢と化した。

まるで短距離走のスタート体勢のように身体を沈ませ、槍を一直線に二尾狼へと向ける。

そして、ハジメは自分の足元へ二尾狼めがけて石壁を錬成した。そう、あのベヒモス戦で使った「+高速錬成」による射出錬成である。

槍は矢尻、ハジメはシャフト、そして羽は錬成による石壁だ。蹴りウサギの飛び蹴りに引けを取らない速度でハジメは加速し電撃を放とうとした二尾狼へと直撃、そのまま突き進み、二尾狼の背後に存在する壁に激突した。

「グルアアアア!?!」

「これでも死なないの?……硬すぎ!」

ハジメは肩が外れたのではないか?と思わせるほどの右腕から奔る衝撃に顔を歪めながら嘆息する。

ハジメの突進を食らった二尾狼は決して軽症ではないが未だ健在だった、魔物は強くなればなるほど硬いというのが基本なので、この二尾狼の皮膚は今までの魔物よりは圧

倒的に硬いのだろう、硬い皮膚はなんとか貫けたが皮膚にエネルギーを使いすぎたのだろう、槍は微かに体内を傷つけただけで済んでしまったようだ。

まあ、それを認識した途端ハジメは錬成で槍の形状を変化させ壁と結合させることで身動き一つ取れないようにしたのだが。

これで全部の二尾狼の群れを捕らえたことを確認したハジメは再び錬成を用いてさつきと同じ槍を生み出す。

「あとは……掘削つと」

そしてさつき捕らえた二尾狼へと近づいてハジメはその槍を突き立てた。硬い毛皮と皮膚の感触がして槍の先端を弾く。

「やっぱり刺さらない……か、まあ想定内だけど」

そうしてハジメは槍を二尾狼に刺すと共にハンドルをグルグルと回した。それに合わせて先端の螺旋が回転を始める。そう、ハジメが作った武器は魔物の硬い皮膚を突き破るために考えたドリルなのである。

本来なら地面に埋めた魔物にトドメを刺すために作ったため上から体重をかけながら殺そうと思ったのだが目の前の二尾狼は壁に埋まっているため前に体重をかけねばならず、少し力が多く必要になってしまう。

そうして必死に回していると少しずつ先端が二尾狼の皮膚にめり込み始めた。

「グルツ!?グギツ、グガア?!」

その激痛にたまらず二尾狼が絶叫するが――

「うるさい」

――ハジメが言葉と共に顔面に蹴りを放ったため絶叫が遮られてしまう。

「私はお前に一ミリも興味がないの。断末魔なんてうるさいだけだから黙って死んで」

淡々とそう言いながらさらに前に体重を掛けドリルを回転させる。二尾狼が必死にもがこうとしているが、周りを隙間一つなく埋められているのだから不可能だ。

そして、遂に、ズブリとドリルが二尾狼の硬い皮膚を突き破った。そして体内を容赦なく破壊していく。断末魔の絶叫を上げる二尾狼。しばらく叫んでいたが、突然、ビクツビクツと痙攣したかと思うとパタリと動かなくなった。

「やっつと、飯確保ね」

そう嬉しそうに嗤いながら、残りの5頭もトドメを刺していく。そして、全ての二尾狼を殺し終えたハジメは錬成で二尾狼達の死骸を取り出すと、安全に食事をするために片手で担ぎながら元の寝ぐらへと戻っていった。



6頭の二尾狼を運び終えたハジメは日色が眠っている寝ぐらへと戻ってくるのと片手に不自由しながら毛皮を剥がしていく。

あの時掘った洞窟は現在ハジメが拡張して二つの部屋となっており、入口はハジメがキッチンと閉じてある。

部屋を二つ作った理由は簡単だ、魔物の死骸を解体する際に血の匂いで日色の体調が悪くならないようにする為である。

そんなわけでハジメは日色が眠っている部屋の真横の部屋で食欲を必死に抑えながら適当に毛皮を剥いだ後、必死に二尾狼の肉を咀嚼していた。

「あぐう、があ、オエエーうグツ、まずいつ……」

緑光石の明かりが暗闇をぼんやりと辺りを照らす中、ハジメの姿は完全に野生児と似た様子だ。現代の人間から見れば酷くおぞましい姿に映っただろう。

ハジメは悪態を付きながら二尾狼の肉を必死に喰らっている。

硬い筋ばかりの肉を、血を滴らせながら噛み千切り必死に飲み込んでいく。およそ二週間振りの食事だ。いきなり肉を放り込まれた胃が驚き、キリキリと痛みをもつて抗議する。だが、ハジメはそんなもの知ったことかと次から次へと一心不乱に齧り付き飲み込んでいった。

強烈な血の味と獣臭に涙目になりながらも何度も吐き出しながらも口いっぱい詰り込め込み神水で強引に飲み干す。

それは決してまともの人間のするような食事ではなかったが飢餓感が癒されていく

感覚にハジメは陶然とする。

飯を食べるということがこんなに幸せなことだったとは思ひもしなかったのだ。夢中になって喰らい続ける。

どれくらいそうやって喰らっていたのか、神水を飲料代わりにするという聖教教会の関係者が知ったら卒倒するような贅沢をしながら腹が膨れ始めた頃、ハジメの体に異変が起こり始めた。

「ん？——っ？アギツ?!」

突如全身を激しい痛みが襲った。まるで体の内側から何かに侵食され、己を壊そうとするようなおぞましい感覚。その痛みは、時間が経てば経つほど激しくなる。

「がああああ。な、何がっ——ぐうううっ！」

耐え難い痛み。何度も暗転する視界。ハジメは地面をのたうち回る。幻肢痛など吹き飛ばすような遥かに超えた激痛である。

ハジメは震える手で懐から石製の試験管型容器を取り出すと、端を噛み砕き中身を飲み干す。直ちに神水が効果を発揮し痛みが引いていくが、しばらくすると再び激痛が襲う。

「ひぎっ！ぐがあああッ?!——な、なんで?!なおらなあ、あがああ！」

ハジメの体が痛みに合わせて脈動を始めた。ドクンッ、ドクンッと体全体が脈打ちそ

して同時に至る所からミシツ、メキツという音さえ聞こえてきた。

しかし次の瞬間には、体内の神水が効果をあらわし体の異常を修復していく。修復が終わると再び激痛。そして修復。また激痛。

神水の回復効果のおかげで気絶することもできない。絶大な治癒能力がアダとなった形だ。

ハジメは絶叫を上げ地面をのたうち回り、頭を何度も壁に打ち付けながら終わりの見えない地獄を味わい続けた。流石に死にたいとは思われないがあまりの激痛で思考が炸裂するため絶叫しながらひたすら耐えるしかない。

すると、ハジメの体に変化が現れ始めた。

まず髪から色素が抜け落ちていく。おそらく許容を超えた激痛と破綻しかけた精神のストレスが原因だろう。日本人特有の黒髪がどんどん白くなってゆく。

そして神水による超回復による細胞分裂のお陰だろうか？髪が白くなっていくと同時に髪が伸び、首元までだった髪が背中ぐらいつままで伸びていく。

続いて骨格がゴリゴリと音を立てながら動き、どこにでもいるありふれた女子の体型から最適化され、括れが細くなりそこから先の殿部はしっかりと大きく、腰つきは実に艶めかしいラインを描く女性でも羨むような抜群のスタイルへと変化していく。

筋肉は太くなるのではなく、筋繊維の一本一本の強靱な耐久力とそれ相応の重量を持

つように変わっていき、肌は汚れ一つないのではないかと思わせるような淡い肌色になっ  
ていき、体の内側に薄らと赤黒い線が幾本か浮き出始める。

そして注目の胸は平均のCカップだったのが大きくも決して邪魔にならないDカッ  
プほどになっていく。

超回復という現象がある。筋トレなどにより断裂した筋肉が修復されるとき僅かに  
肥大して治るといふ現象だ。

怪我をすれば怪我をするたびに皮が厚くなるように、骨が折れば骨の強度が増すよ  
うに。

今、ハジメの体に起こっている異常事態も同じである。

魔物の肉は人間にとって猛毒だ。魔石という特殊な体内器官を持ち、魔力を直接体  
に巡らせ驚異的な身体能力を発揮する魔物。体内を巡り変質した魔力は肉や骨にも浸透  
して頑丈にする。

この変質した魔力が詠唱も魔法陣も必要としない固有魔法を生み出していると仮説  
されているが問題はこの変質した魔力が人間にとって致命的に猛毒であり、人間の体内  
を侵食し、内側から細胞を破壊していくのである。

過去、魔物の肉を喰った者は例外なく体をボロボロに碎けさせて死亡したとのこと  
だ。実は、ハジメもこの知識はあったのだが、飢餓感がすっかりその知識を脳の奥に押

し込めてしまっていた。

故に本来ならハジメは変質した魔力によって死ぬはずだったのだがあるものが原因で生き残っているのだ。

そう、神水である。

壊れたところから強烈な回復能力で回復していく、その結果肉体が凄まじい速度で強靱になっていくのだ。

それはまさに破壊と再生の輪廻。

壊れては治るたびに肉体は脈打ちながら変化していく。

その様は、あたかも転生のように脆弱な人の身を捨て化生へと生まれ変わる生誕の儀式。ハジメの絶叫は例えるならば産声だ。

やがて、脈動が収まりハジメはぐったりと倒れ込んだ。その頭髮は真っ白に染まっており、服の下には蹴りウサギや二尾狼、そして爪熊のように赤黒い線が数本ほど走っている。それはまるで魔物のようだった。

すると、ハジメの右手がピクリと動いた。閉じられていた目がうつすらと開けられる。その瞳は日本人特有の黒眼ではなく真紅に染まった美しい紅色。焦点の定まらない瞳がポーと自分の右手を見る。やがて地面を搔くようにギヤリギヤリと音を立てながら拳が握られた。



ハジメは、何度か握ったり開いたりしながら自分が生きていること、きちんと自分の意思で手が動くことを確かめるとゆっくり起き上がった。

「……そういえば、魔物の肉って毒だったわけ……ハア、迂闊だったなあ。いや、まあ食わずにはいられなかったけど……」

あまりの激痛で精神が疲れたのか疲れ果てた表情で、自嘲気味に笑うハジメ。

しかし精神とは反して肉体は飢餓感が無くなり、幻肢痛も感じなくなっていた。あまりの壮絶な痛みで消えてしまったのだろうか？

久しぶりに何の苦痛も感じず、それどころか妙に身体が軽く全身に力がみなぎっているような気がする。

腕や腹を見ると汚れのない美しい肌色でありながらも筋肉がまるで一つの芸術品の様に現在のハジメの姿を損なわない形で綺麗に引き締まっており、腹は括れが細くなつてスタイルが美しい曲線を描いている。そして実は身長も伸びており以前のハジメの身長は153センチだったのだが現在は更に10センチ以上高くなっている。

「私の体、一体どうなったの？というか何か妙な感覚があるし……」

体の変化だけでなくハジメは体内にも違和感を感じていた。温かいような冷たいようななどちらとも言える奇妙な感覚。意識して集中してみると腕に薄っすらと赤黒い線が浮かび上がってきた。

「う、うわあ、気持ち悪い。まるで魔物になった気分。……洒落にならない、しかも何故か髪も伸びてるし……そうだ、ステータスプレートは……」

ハジメは耳にかかる伸びた髪をスリスリと弄り、ステータスプレートの存在を思い出すとステータスプレートを探してポケットを探る。どうやら無くしていなかったようだ。現在の自分のステータスを確認すれば体の異常の手がかりが何かわかるかもしれないと思ったのだ。

|||||

南雲ハジメ 17歳 女 レベル：7

天職：錬成師

筋力：120

体力：315

耐性：120

敏捷：230

魔力：310

魔耐：310

技能：錬成〔+高速錬成〕〔+鉱物系鑑定〕・魔力操作・胃酸強化・纏雷<sup>てんらい</sup>・言語理解

|||||

「……なんでやねん」

昔のように驚愕のあまり癖で関西弁でツツコミを入れてしまうハジメ。ステータスが総じて急増しており、技能も三つに増えている。しかもそれでありながら未だレベル7という数値、最早理解不能である。

レベルはその人の到達度を表していると考えるとどうやらハジメの成長限界も上がっているようだ。

その中でハジメの目を惹く技能があった。

「魔力操作？」

つまりそれは文字通りに魔力を操作できると言うことだろうか？

ハジメは先程から感じるこの奇妙な感覚こそが魔力なのでは？と推測し、先程と同じく集中して「魔力操作」を試みる。

するとハジメが集中し始めると共に赤黒い線が浮かび上がり、全体に感じる奇妙な感覚——もとい魔力が右手に集まっていく。

「おっ、おお〜！」

なんとも言えない奇妙な感覚に声を上げながら試していると集まっていた魔力が何と右手にはめた手袋の魔法陣へと宿り始める。驚きながらも錬成を試そうとすると、詠唱も無しにあっさりど地面が凹んだ。

「……嘘、もしかして詠唱いらすつてこと？ 魔力を直接操作できるのは原則魔物以外い  
なかつたんじゃないっけ？……やっぱり魔物の肉を食ったせいなのかな」

大正解。ハジメは確かに魔物の特性を取得していたのだ。ハジメは、次に【纏雷<sup>てんらい</sup>】を  
試そうとする。

「……えつと、どうすればいいの？ 【纏雷】ってことは電気だから……確か二尾狼の尻尾  
の……」

あれこれ試すがなんの変化もない。魔力のように感じるわけではないから取っ掛か  
りがなくどうすればいいのかわからないのだ。

うーむ、と頭を捻っているときういえば魔法適性があるものはイメージで魔法を行使  
していたのを思い出す。魔法陣に多くの式を書き込まなくてよい分、明確なイメージが  
そのまま加工物に伝わるのだ。

ハジメはバチバチと弾ける静電気をイメージする。すると右手の指先から紅い電気  
がバチツと弾けた。

『超電磁砲ですね、ビリビリ女乙』

とあるバカがその光景を見ればきつと心の中でそう呟くに違いない。

「おおつ、出来た。……なるほど、魔物の固有魔法はイメージが大事つてことね。とい  
うか魔力光も赤……じゃなくて紅色に変わってるし……」

その後もバチバチと放電を繰り返す。しかし、二尾狼のように飛ばすことはできなかった。おそらく【纏雷】とあるように体の周囲に纏うか伝わらせる程度にしか出来ないのだろう。電流量や電圧量の調整は要練習だ。

【胃酸強化】は文字通りだろう。魔物の肉を喰って、またあの激痛に襲われるのは勘弁だ。しかし、迷宮に食物があるとは思えない。飢餓感を取るか苦痛を取るか。その究極の選択を、もしかしたらこの技能が解決してくれるのではとハジメは期待する。

二尾狼から肉を剥ぎ取り纏雷で焼いていく。流石に飢餓感が癒された後で、わざわざ生食する必要もない。強烈な悪臭がするが耐えてこんがり焼く。途中、纏雷の調整に失敗し、少し焦げてしまったがまあ、いいとしよう。

そしてハジメは一瞬躊躇しながらも意を決して喰らいついた。

……………しばらく経っても何事も起こらない。

ハジメは次々と肉を焼いていき再び喰ってみる。しかし、特に痛みは襲って来なかった。胃酸強化の御蔭か、それとも耐性ができたのか。理由はわからないがこれで飯を喰う度に地獄を味わわなくて済むことに拳を握った。

腹一杯まで肉を喰ったハジメは、保存のために他の二尾狼から肉を切り分ける。最初無比幾分染に捌くことができた。肉をある程度石で作った容器に入れると、ふと自分

の現状の体がどうなったか気になった為、壁から錬成で緑光石を取り出した。

現状ハジメの視界は暗闇に慣れてきているとはいえまともに自分の髪すらどうなっているのかわからないのだ、だからこそ緑光石の明るさを使って光を照り返すステータスプレート裏側の鏡のように使って自分の顔を確かめようとしたのだ。

そして、すぐに後悔した。

「——な、な、な、」

ステータスプレートから鏡のように映る自分の顔は——

——穢れ一つない美しい白の長髪が緑光石の光を微かに反射し。

おそらく魔物のような赤黒い線が瞳にも伸びていったのだろう、暗闇にも輝くルビーのような真紅の瞳は前の自分とは別人と思えるほどキラキラと輝き鋭い。

顔つきは地球のアイドルやモデルでさえ比べ物にならなく、まさに空想の人物が現実にはポンツと現れたと錯覚してしまうほど整えられている。

「なツ」

「ツツ!!?!」

そんなあまりの厨二な姿にハジメが数分ほどフリーズしてしまったのは仕方のないことだった。

## 怨敵との再会

ハジメが己の厨二姿に絶望してから数日が経過した。

日色が寝ている部屋に戻ったハジメは最初、魔物の肉を日色に食わせれば目覚めてくれるのではないか？と思ったが元々片腕が無くなったハジメですら悶絶してしまう程の激痛が現在の日色に訪れればショック死してしまう可能性があるため断念することにした。

なので次にハジメが行なったのは派生技能「十鉱物系鑑定」である。かつていつの間にか手に入れていたこの技能だが調べてみたところによると王都の王国直属の鍛冶師達の中でも上位の者しか持つていないという技能らしい。

通常、鑑定系の魔法は攻撃系より多くの式を書き込まなければならず、必然、限られた施設で大きな魔法陣を起動して行わなければならないがこの技能を持つ者は、触れさえいれば、簡易の詠唱と魔法陣だけであらゆる鉱物を解析できるので。潜在的な技能ではなく長年錬成を使い続け熟達した者が取得する特殊な派生技能である。

王国では使う機会がなかったものの現状使わない理由はない、何か有益な鉱石を探すため、ハジメは周囲の鉱物を片っ端から調べることにした。例えば、緑光石に鉱物系鑑

定を使うとステータスプレートにこう出る。

緑光石

魔力を吸収する性質を持った鉱石。魔力を溜め込むと淡い緑色の光を放つ。  
また魔力を溜め込んだ状態で割ると、溜めていた分の光を一瞬で放出する。

なんと簡素な説明だろう、しかし今のハジメには十分有益な情報だった。

それからハジメはあちこち彷徨いながらも役立ちそうな鉱物を探していると突如、  
後にハジメの武器を作るのに必要な鉱石を発見した。

燃焼石

可燃性の鉱石。点火すると構成成分を燃料に燃焼する。燃焼を続けると次第に小さくなり、やがて燃え尽きる。密閉した場所で大量の燃焼石を一度に燃やすと爆発する可能性があり、その威力は量と圧縮率次第で上位の火属性魔法に匹敵する。

この説明を見た瞬間、ハジメの脳内に電流が走ったような気がした。

もしかしたら燃焼石は地球で言うところの火薬の役割を果たせるのではないか？だ



としたら、攻撃には使えない錬成で最大限の攻撃力を生み出せるかもしれない!と。そう銃火器の作成である。昔父親の仕事の手伝い中に銃の資料を見つけ、様々な銃の構造を教えてもらったことのあるハジメにはあまりにも嬉しくそして興奮する事実だった。

しかし容易にはいかないだろう、きつと何千回も失敗するはずだ。そう考えたハジメは大量の燃焼石を探すために幾度も二尾狼を狩るついでに集めていった。

そしてハジメがショックを受けてから2日後、いつものように燃焼石を探し集めて戻ろうとしたハジメはふと、現在自分がいる場所がどこかに気づいて足を止めた。

「……………は」

そこはかつてハジメに深い絶望を与え左腕を失い、日色を切り裂いた爪熊と遭遇した場所だった。

「——ッ!」

自然と右手を握り込む力が強くなり、ハジメの心からドス黒い殺意の感情が溢れてくる。

しかし、ハジメが変わるきつかけになったのもまたこの場所なのだ、ハジメは歯を食いしばるときつさと元の寝床へ戻ろうとして——視界に輝く何かを見て足を止めた。

「あれは……」

慌てて近づいてみるとそこには鉄色に輝くハジメがあの時左腕を切り裂き、捨てたナイフがあった。

かつてハジメが宝物庫から錬成の魔法陣が刻まれている手袋のついでに護身用に手にとったものだったがさすが王国製とでも言うべきだろうか血跡がこびり付いているものの決して未だ刃毀れをしていない、おそらく錬成によつて再利用すれば使えそうである。

「——まだ使えそう」

ハジメはナイフを手にとると共に日色とのナイフの訓練を思い出す。

思い出すとともに無意識に持ち手を強く握つてしまふが己を落ち着かせるために腰に差してある鞘にカシヤンと収める、これは後に武器として使わせてもらおう。

今のところは銃を作るつもりだが、近接用の武器も必要だろう。そしてなによりも日色との訓練を無駄にしたくないから。

そう思ったハジメはフウとため息をつくことで気持ちを抑え殺意を研ぎ澄ます。

あの爪熊はいつか必ず殺さなければならぬ、だがそれは今ではないのだ。

殺意を必死に押さえつけて寝床に戻つたハジメは早速作業に取り掛かった。

しかし銃を作るのは初めてなのだ、作業は難色をきわめ何千回という失敗と共に錬成はメキメキと上達していく。

そして遂にとある物の作製に成功した。

全長の長さは約65センチ、この辺りでは最高の硬度と靱性を持つタウル鉱石を使った六連の回転式弾倉の振出式（スイングアウト）である。長方形型のバレルに王国で手に入れたナイフを錬成によって研ぎ直された後姿を変え、鋭い刃としてタウル鉱石をコーティングした後、付けてある。弾丸もタウル鉱石製で、中には粉末状の燃燒石を圧縮して入れているお墨付きだ。

すなわち大型リボルバー式の拳銃に剣を合わせた銃剣だ。

弾丸は燃燒石の爆發力だけでなく、ハジメの固有魔法【纏雷】により電磁加速され、小型のレールガン化させることや刃に【纏雷】を纏わせることで電磁メスならぬ電磁ナイフとして活用でき、焼き斬るように斬ることや斬ったあとに【纏雷】を流すことで敵にダメージを与えることができるという機能を持っている。

ちなみにレールガンの威力は最大で対物ライフルの十倍、電磁ナイフは試してみると二尾狼ですら抵抗なく豆腐を斬るように斬り裂かれた。王国の宝物庫つて結構すごいのかも？と思つたハジメである。

「これなら……殺せる、日色を……守れる！」

ハジメはドンナーの他にも現代兵器を参考に作つた兵器を眼前に並べて薄らと笑う。ただ、剣や防具を上手く作るだけ、そんなありふれた天職「錬成師」の技能「錬成」

が、剣と魔法の世界に兵器を産み落とした瞬間だった。

タウル鉱石

黒色で硬い鉱石。硬度8、韌性8（10段階評価で10が一番硬い）。衝撃や熱に強いが、冷気には弱い。冷やすことで脆くなる。熱を加えると再び結合する。

◆ 「むぐ、むぐ……ウサギ肉ってまずいのね」

現在、ハジメは拠点にてモリモリとウサギ肉を喰っていた。そう、蹴りウサギの肉である。かつて自分を見下し嘲笑った蹴り技の達人は、今やただの食料だった。ウサギとすることで多少はマシな味なのではと期待したハジメだったが、所詮は魔物の肉。普通に不味かった。ウサギを食べたことのないハジメはもしかしてウサギ肉は元々まずいのだろうかと疑問に思い、地球に日色とともに帰ったら美味しいウサギ料理を作つてもらおうと心に決めた。

ハジメはペロリとウサギを二匹平らげる。

【胃酸強化】を手に入れてから食べようと思えばいくらでも食べられる気がするハジメ。特に固有魔法使用後はお腹が空き収支は五分五分だった。

神水があれば死にはしないが、いつ切れるかわからない以上ある程度は遠慮しなければならぬ。

ちなみに、蹴りウサギは畏を張って倒した。スタート地点の川から水を汲んできて蹴りウサギを誘導、爆進して来た蹴りウサギが撒き散らした水の上を通った瞬間、〃纏雷〃の最大出力で感電させる。

全身から煙を噴き上げながらも、突進してきたので、電撃で鈍ったところを正面からドンナーで撃ち抜いた。

流石に、電磁加速された秒速三・二キロメートルの弾丸は避けられなかったらしく頭が木っ端微塵に砕け散って絶命した。わざわざ感電させる必要もなかったかもしれない。それくらい、ドンナーの威力は凄まじかった。

ちなみにその後ももう一体出会い今度は堂々正面から戦い電磁ナイフを試してみると、蹴りウサギの蹴りを受け流すためにドンナーで触れた瞬間蹴りウサギに感電、蹴りウサギの筋肉が硬直した瞬間、ドンナーを振るえば首を切断され即死した。

「さてと、蹴りうさぎを食べた後のステータスは……」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 女 レベル：10

天職：錬成師

筋力：220

体力：330

耐性：210

敏捷：430

魔力：380

魔耐：380

技能：錬成「+高速練成」「+鉦物系鑑定」「+精密錬成」「+鉦物系探査」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

やはり魔物肉を喰うとステータスが上がるようだ。二尾狼三匹目程でもう殆ど上がらなかつたことを考えると喰つたことのない魔物を喰うと大きく上昇するらしい。

早速、「天歩」とやらを調べる。まず一番最初にイメージしたのは、蹴りウサギのあの踏み込みだ。焦点速度が間に合わなくて体がブレて見えるほどの速度。「天歩」の横に「+縮地」とあるのはその技能ではないかと当たりを付ける。縮地といえば地球でも有名な高速移動のことだ。

ハジメは足元が爆発するイメージで一気に踏み込んでみる。体内の魔力が一瞬で足元に集まる。踏み込んだ足元がゴバツと陥没し……ハジメは吹き飛んで顔面から壁に

ダイブした。

「はにゅ?!……痛い、これどうやってあの勇者達はあも自在に動いているの?」

一応成功したが、加減が難しい。蹴りウサギのようなカポエイラの如き動きをするためには鍛錬が必要なのだろう。銃技と組み合わせれば、きつと強力な武器になる。

次は「+空力」だ。だが、これが中々発動しない。名称だけではどんな技能なのかわかりづらい。あれこれ試す内に、ハジメは蹴りウサギが空中を足場にしていただけを思い出す。

早速、ハジメは、踏み出した空中に透明のシールドがあることをイメージする。そして、前方に跳躍してみた。

そして顔面から地面にダイブした。

「ううううううっ?!」

右手で頭を抑え、ゴロゴロと地面をのたうち回る。しばらく身悶え、痛みが引くと憚然とした表情で神水を飲む。

「……一応、出来た。けど痛い……」

前方に跳躍して顔面からダイブした原因は中途半端に足場ができたせいだった。要は躓いて転けたのである。どうやら「+空力」は空中に足場を作る固有魔法で間違いな  
いようだ。

どうやらこれらは【天歩】の派生技能らしくなんだか得した気分だった。そして次の目標は——爪熊。

おそらく、遠距離からの銃撃で片はつくだろうが、念の為に鍛えておく。あの化け物より強い魔物がふらりと現れる可能性も否定できないのだ。あの爪熊を倒したあとは、この階層の脱出口を探し、日色を見捨てるなんて選択肢がない以上最悪日色を背負って戦わなければならない。迷宮では楽観視した者から死んでいくのだから。

ハジメは気合を入れ直した。

◆ 迷宮の通路を、姿を震ませながら高速で移動する影があった。

ハジメである。【天歩】を完全にマスターしたハジメは、【縮地】で地面や壁、時には【空力】で足場を作って立体的高速移動を繰り返して、空間把握能力を意図せず鍛えながらも怨敵である爪熊を探していた。

爪熊を殺すことはもはや決定事項だ。日色を抱えて脱出口を探す以上、この階層の中で最強でなければならぬ、故に一度心を砕かれた相手である爪熊を殺さなければ自分は決して前に進めない。

「グルウアー！」

途中、二尾狼の群れと遭遇し一頭が飛びかかってくる。しかしハジメの思考は一定に



冷静だった。

ハジメはその場で跳躍し宙返りをしながら錬成した針金とナイフの鞘である革を合わせて作り右腰に固定したドンナーを抜き発砲する。

ドパンツ！と燃焼粉の乾いた破裂音が響き、【纏雷】で電磁加速された弾丸が狙い違わず最初の一頭の頭部を粉碎した。

そのまま空中で【空力】を用いて更に跳躍し天井に足を付け、視認したもう一体へと更に発砲する。

再び乾いた破裂音と共に標的となつた二尾狼は頭部を粉碎されるが既にハジメはさつぎいた場所から消えている。

ハジメは天井に足をつけた途端【縮地】で地面に跳躍、着地と共に三体目へと振るつたドンナーの電磁ナイフが牙を剥く。

豆腐を斬るように二尾狼の首が切断され、残りの二体が突然再び現れたハジメに驚愕するが、その前にハジメがドンナーを連続で発砲する。

流星に全弾命中とはいかなくなつたがどうか全弾撃ち尽くす前に仕留め切つた。

ハジメは肘から先のない左腕の脇にドンナーを挟み、素早く装填する。そして二尾狼の死骸には一瞥もくれずに再び駆け出した。

出会つては殺し、出会つては殺す。蹴りウサギや二尾狼相手にそのサイクルを何度も

繰り返しながら進んでいくとようやく宿敵の姿を発見した。

「——見つけた」

爪熊は現在食事中のようだ。蹴りウサギと思しき魔物を咀嚼している。その姿を確認するとハジメは笑った、まるで子供がなくしたおもちゃを見つけたかのように笑った後悠然と歩き出した。

爪熊はこの階層における最強種だ。主と言つてもいい。二尾狼と蹴りウサギは数多く生息するも爪熊だけはこの一頭しかいない。故に、爪熊はこの階層では最強であり無敵。

それを理解している他の魔物は爪熊と遭遇しないよう細心の注意を払うし、遭遇したら一目散に逃走を選ぶ。抵抗すらない。まして、自ら向かつて行くなど有り得ないことだ。

ならば、この爪熊に対して瞳に絶望を映さず、己を前にして背を見せることもなく恐怖に身を竦ませる事もないこの生き物は一体なんだ？

「ああ、よかった。やっと見つけた。ねえ、私の腕は美味かった？」

どうしてこの目の前の生き物は嬉しそうに笑っている？

かつて遭遇したことのない事態に、流石の爪熊も若干困惑する。

「散々探した、もしかしたらいないんじゃないかとも思ったわ。ああ、でもこれでようや

く——」

そう言いながらハジメはドンナーを抜き銃口を真つ直ぐに爪熊へ向けた。

ハジメは構えながら思い出す、日色との思い出を。そしてそれをぐちやぐちやに壊された目の前の怨敵を思い出す。

恐怖はある、日色がいなくなってしまうのではないかという恐怖が。

怒りはある、日色が傷つけられたことの怒りが。

絶望はある、日色が傷ついているのに何もできない自分への絶望が。

安心はある、日色が生きているという安心が。

ならば、全ての元凶は今ここで塵殺しよう。

さあ——

「——お前を殺せる」

——想いを全て、殺意に変えろ。

「——死ネ」

その宣言と同時にハジメはドンナーを発砲する。ドパンツ！ と炸裂音を響かせながら毎秒三・二キロメートルの超速でタウル鉱石の弾丸が爪熊へと一直線に迫っていた。



ドパンツ！ と炸裂音を響かせながら毎秒三・二キロメートルの超速でタウル鉱石の弾丸が爪熊に迫る。

「グウウ!?!」

爪熊は咄嗟に崩れ落ちるように地面に身を投げ出し回避した。

おそらく、銃弾を見て回避したのではなく、ハジメから発せられた殺気に反応して動いたのだろう。その証拠に肩の一部が抉れて白い毛皮を鮮血で汚している。しかし、この場合は咄嗟にハジメの殺気に反応し回避行動に映ったのはさすが階層最強の主であるといったところか。二メートル以上ある巨軀に似合わない反応速度だ。

その一撃に爪熊の瞳に怒りが宿る。どうやらハジメを『敵』と認識したらしい。

「ガアアア!!」

爪熊は咆哮を上げながら物凄い勢いで突進する。二メートルの巨軀と多く広げた太くそして長い豪腕が地響きを立てて迫ってくる姿はとてつもない迫力だ。

「アハツ! そう! 私はもう獲物じゃない、敵だ!」

爪熊から凄まじいプレッシャーを掛けられながら、なお、ハジメは不敵な笑みを崩さない。

ここが一つの分岐点だ。ハジメの左腕を喰らい、心を砕き、変心の原因となった魔物を打ち破る。そうしなければハジメは一步も前に進めない、己の心がどこかで『妥協』し

てしまう。そうなれば日色を守るなんて夢のまた夢だ。

ハジメはそう確信していた。

突進してくる爪熊に、再度ドンナを発砲する。超音速の銃弾が爪熊の眉間を狙うが爪熊は突進しながら側宙を行い回避した。その反応速度はあまりにもその巨軀に似合っていないだろう。

いや、それも当たり前なかもしれない。何故なら図体が大きいなら動きも遅いなどというのはいまのイメージに過ぎない。図体が大きいということはそれはつまり筋肉が発達しているということ。大きくなればなるほど筋肉の重量がまし、その重量を支えるために筋肉の力を使ってしまうのだ。

ア리가小柄のくせに自分より大きいものを持てるのもそれが理由だろう。

ましてや爪熊は変質した魔力が全身に流れているため本来の筋肉の身体能力と変質した魔力による身体能力が合わさっているのだ、身体能力が高いのは当たり前だろう。

自分の間合いに入った爪熊は突進力そのままに爪腕を振るう。固有魔法が発動しているのか三本の爪が僅かに歪んで見える。

ハジメはそれを視認すると共に脳裏にかつてその爪をかわしたにもかかわらず両断された蹴りウサギの姿が浮かび上がる。ハジメはギリギリで避けるのではなく【縮地】を用いて全力で斜め後ろに回避する。

「——ッ」

刹那、一瞬前までハジメがいた場所を豪風と共に爪が通り過ぎ、触れてもいないのに地面に三本の爪痕が深々と刻まれた。同時にハジメは僅かに呼吸を漏らした。見ると脇腹を浅く切り裂かれ血が滴り落ちている。避けきれなかったのだ。

いくら爆発的に上昇した身体能力でもまだ総合的には反応が追いついていない。

爪熊が獲物を逃がしたことに苛立つように咆哮を上げ再度間髪いれず追撃で襲いかかる。

「——チッ」

ハジメは舌打ちを突くとともに風の刃が殺到する。ハジメは「空力」で空中に逃れ、爪熊めがけ三度目の発砲を行ったが爪熊は右爪を地面に突き刺してまるで風車のように身体を右爪を中心に旋回させ、ハジメの紅い閃光を回避した。

「グルウアア!!」

ハジメの銃弾を回避すると爪熊は咆哮とともに空中にいるハジメへと十字を切るように両腕を振るう。

刹那、ハジメの背筋を冷たい悪寒が奔っていく。もはや無意識に「空力」と「縮地」を用いて地面へと右斜め下に宙を蹴る。

瞬間、足に風を感じたかと思うとズバンツとさつきまでハジメがいた場所が十字に六

本の格子状に削られた。

「——風も飛ばせるのツ!? 面倒臭い!」

ハジメの左足の靴の端が削れ、ハジメの左足が浮き出ている。あと一瞬遅ければハジメの左足の腱が切り裂かれていただろう。爪熊の両腕の射程外にいたのに当たったということとはあの風の刃は飛ばせるようだ。

ハジメは身体を宙返りさせることで顔面から地面に落下するのを回避し、地面に着地すると共に【縮地】を用いて一瞬で爪熊へと距離を詰める。

「死ねッ!」

「グガア!!」

ハジメは【空力】で跳躍しながら爪熊の首元めがけドンナーの電磁ナイフを振るうとコマ遅れて爪熊が対抗するように爪を振るう。

両者が重なり、再び離れると共に刃を沿うように血が放物線を描くように空中に飛んでいく。

ハジメは爪熊から距離を【空力】と【縮地】を用いて離すが彼女の顔色は優れない。

「……外したッ!」

苦々しくそう呟くと共にハジメの左頬が三本線で浅く切り裂かれ血が微かに零れる。それと同時に爪熊の左肩が切り裂かれた。

「グガアアア!!?」

電磁ナイフで切り裂かれたため血は出ないが軽傷は与えられただろう。本来ハジメは爪熊の喉元を狙ったのだが爪熊の風の刃を避けるために全身を捻らせ回避しようとしたため軌道が逸れてしまったのだ。

ハジメは顔を歪ませながらも再び突進してくる爪熊に今度は二度、連続してドンナーの引き金を引いた。連続して激発の音が洞窟内を轟く。

頭と胴体を狙った弾丸を流石に完全に避けきることはできなかつたようで爪熊は側宙させることで致命傷は避けたが脇腹を一発貫かれたようだ。衝撃を受けて突進の軌道が逸れる。

「ガアアア!!」

「ッ!、しまっ——」

しかしそれでも巨体が砲弾の如く突っ込んできたことには限りがなくハジメは咄嗟に避けようとしたのだがズキリッ!と左足が痛んだことで一瞬動きが硬直してしまう。どうやら予想以上に風の爪の威力は左足にダメージを与えていたらしい。

足の怪我で動きが鈍ったハジメを爪熊の体当たりが直撃し、トラックにでも撥ねられたかのようにハジメは吹き飛ばされてしまった。

「がはっ!」



地面に転がり肺の中の空気が強制的に吐き出され、何度も咳を繰り返すがハジメの口元は小さく笑っていた。

ドンナーの装填数は六発であり、既に五発使い切っている。残りは一発しか残っておらず再装填の暇を爪熊が与えてくれるはずがない。ドンナーの過剰な殺傷力がなければハジメのスペックでは未だ爪熊に叶う相手ではない。

しかし、ハジメの口は小さく笑っていた。

何故なら、もう畏は仕掛けてあり、既に作動しているのだから。

瞬間、ハジメが目を隠すように片手で目を覆うと共にハジメが吹き飛ばされた場所に落ちていた直径5センチ程の深緑色のボール状鉱石がカツと強烈な光を放った。

その正体はハジメが作った『閃光手榴弾』である。

原理は単純だ。緑光石に魔力を限界ギリギリまで流し込み、光が漏れないように表面を薄くコーティングする。更に中心部に燃燒石を砕いた燃燒粉を圧縮して仕込み、その中心部から導火線のように燃燒粉を表面まで繋げる。

後は【纏雷】で表に出ている燃燒粉に着火すれば圧縮してない部分がゆっくり燃え上がり、中心部に到達すると爆発。臨界まで光を溜め込んだ緑光石が砕けて強烈な光を発するというわけだ。ちなみに、発火から爆発までは三秒に調整してある。苦勞した分、自慢の逸品だ。

ハジメは爪熊の突進をくらう直前、ドンナーをホルスターに戻し、懐から『閃光手榴弾』を置いておいたのだ。

当然、そんな兵器など知らない爪熊はモロにその閃光を見てしまい一時的に視力を失った。両腕をめちゃくちゃに振り回しながら、咆哮を上げもがく。何も見えないという異常事態にパニックになっているようだ。

その隙を逃すハジメではない。再びドンナーを構えてすかさず発砲する。電磁加速された絶大な威力の弾丸が暴れまわる爪熊の左肩に命中し、根元から吹き飛ばした。

「グルウアアアアア!!」

その生涯でただの一度も感じたことのない激烈な痛みに凄まじい悲鳴を上げる爪熊。その肩からはおびただしい量の血が噴水のように噴き出している。吹き飛ばされた左腕がくるくると空中を躍り、やがて力尽きたようにドサツと地面に落ちた。

「……偶然にしてみれば出来過ぎな気もするけど。……まあいいや、これで私と同じね」  
ハジメとしては左腕を狙ったつもりはなかった。まだ其処まで銃の扱いをマスターしているわけではない。直進してくる敵や何度もやりあった二尾狼等、その動きを熟知していない限り暴れて動き回る対象をピンポイントで撃ち抜くことは未だ難しい。

故に、かつて奪われ喰われたハジメと同じ左腕を奪うことになったのは全くの偶然だった。

ハジメは、痛みと未だ回復しきっていない視界に暴れまわる爪熊を注視しながらドナーを肘から先がない左脇で挟み込む形で再装填すると再度発砲した。

爪熊は混乱しながらも野生の勘で殺気に反応し横っ飛びに回避した。

どうやらハジメの殺意こそ爪熊にレールガンでの回避という離れ業を成功させている主な原因のようである。

既に爪熊はこの短時間で視力を少し回復させたのか残り一本になった右腕を構えこちらを強烈な怒りを宿した眼で睨んでくる。

それを理解したハジメは素早く決着をつけようとドナーを構える、このまま完全に視力を回復させる前に電磁ナイフで止めを刺そうとしたのだ。

しかし、瞬間爪熊の違和感に気づく。

「……………何?」

爪熊の纏う雰囲気が変わったのだ。今までの雰囲気も十分恐怖を感じる程の威圧感を感じさせたが今の爪熊は格が違う。正しく変貌といったかのように。

まるでハジメとは見ているものが違うかのような極限の集中を肌で理解させられた。

ハジメの本能がかつてないほどの警鐘を鳴らす。

ハジメは咄嗟にドナーを構え、刃による防御を行おうとして――

――ハジメが自分がどうなったのか気づいたのは全てが終わった後だった。

爪熊の紅く輝く瞳の残光を残して姿を消し、咄嗟に構えたドンナーごとハジメの身体を吹き飛ばす。

ハジメの体は一切地面にバウンドせず、迷宮の壁に直撃した。

「——がッ!!?」

ハジメは肺からの空気と共に血を吐き出し、地面に倒れこむ。

爪熊が行ったことはシンプルだ、ただハジメに接近し爪を振るった。ただそれだけ。ただし、それらの行動がハジメですら反応できないほどの速度だった。

ハジメが生き残れたのは咄嗟にドンナーを構えたことと爪熊の視界が完全に回復しておらずそれにより右爪がドンナーに直撃した奇跡により生き残ることができたのだ。

ただし、衝撃はそのまま食らったため骨は一、二本折れ、全身にろくに力が入らない状態なのだが。

「——な、にが……!」

何が起こったのか理解ができず困惑するハジメは徐々に近づいてくる爪熊に気づくと何をされたのかはわからなかったが、誰がしたのかを理解した。

徐々に両眼に紅い残光を残しながら近づいてくる爪熊に立ち上がるのできないハジメは憎悪の瞳で見上げるしかなかった。



そしてその同時刻

「……………ッ……………こ……………こ……………は……………つ……………?」

一つの洞窟の中、一人の少年が眼蓋を開き弱々しく言葉を零した。

神代日色が目を覚ます。

## 怨敵との決着（ただし一人は寝ぼけている模様）

暗がりの洞窟の中で緑光石の明かりがぼんやりと辺りを照らしている。

そんな中、ゴツゴツとした地面に横たわり眠っていた日色はまるで意識が浮上するよ  
うに目を覚ました。

「……………ツ……………は……………つ……………う？」

そう呟きながら日色の虚ろで焦点の合わない瞳がゆっくりと動き、現状を把握しようとするために起き上がろうとするが身体には一切力が入ることはなく、無様にバタリツと仰向けから傾いてうつ伏せになり地を舐めてしまう。

「……………ク、ソ……………ツイ……………アイ、ツ……………は……………どこに……………？」

再び地面に手を置いて立ち上がろうとするがまったく力が入らず自分の身体を起き  
上がらせることすらできない。

あの日色が一切立ち上がることができないのはあの爪熊に切り裂かれたのが原因だ、  
文字魔法の『守』とある物が原因で死ぬことがなかった日色だがそれでも胸を切り裂か  
れ、大量出血をした。神水によって傷は塞がったがだからといって血が増えたというわ  
けではない。

現状、今の日色には血が少なく貧血になっているのだ。それは文字通りロクに力を入れることすらできないほどに。

故に現在の日色は思考が錯乱し、此処はどこなのか？何が起こって自分が眠っていたのか？どうしてハジメがいないのか？数々の疑問が浮かびその疑問が晴れぬまま消えていつているのだ。

「……探しに……行かないと……な……」

そう呟き、日色はゆつくりと動き出した。ロクに動かない身体を引きずるように動かして見たこともないはずの神結晶から溢れ出し地面の窪みに溜まっている神水をまるでその効果を知っているかのように一気に顔ごと突っ込んで飲み干した。

血液は戻らないため決して倦怠感と錯乱する意識は晴れないがそれでも活力は戻る。

「——ゴクッ！ゴクッ！——ふはあ！………あ？」

そして、神水の溜め池から顔を出すとポトリツと日色の血だらけとなった懐から血だまりの肉の塊が地面に落ちた。

日色は何故こんなものか？と思うが血溜まりに染まった肉の塊に見覚えのある白い耳の残骸が視界に収まり、無意識に理解する。

「……あの時の……蹴りウサギ……か」

一つ疑問に思わなかっただろうか？爪熊に切り裂かれた時どうして日色が重傷です

んだのか？日色の身体能力は低スペックだ、例え文字魔法である程度威力を抑えたとしても相手は奈落の最強種。そのまま身体を両断されてしまいうだろう。

ただし、日色は懐にある物を入れていた。

——そう、氷の彫像と化した蹴りウサギである。

元々の蹴りウサギの皮膚の硬さに合わせ凍らされたことでさらに強度が上がった蹴りウサギは見事日色の胸当ての役割を果たし風の刃の威力を減少させたのだ。

しかも低温であったため日色の傷口が冷え出血量がある程度少なくなった効果もある。

そしてその蹴りうさぎの肉は現在日色の血液の体温で温められすっかり氷は溶けてしまっている、つまり鮮度は十分だ。

それを理解した日色は蹴りうさぎを手に取り——

「——食うか」

——躊躇なく食らいついた。

本来の万全の状態であればもちろん日色でも躊躇しただろう、当たり前だ。原作知識のある日色にとって魔物の肉の猛毒さを理解しているのだから。

ただし、現在の日色は貧血で頭が回っておらず、危機感がないのである。

ハジメを探さないと↓でもお腹がすいて力が出ない↓飯食って元氣出そうぜツ!!と



いう頭のおかしい結論に達した日色の中の人は躊躇なくそれを選んだ。

だからこそ躊躇なく蹴りウサギの肉を喰らい、神水を飲み干していく。

肉を喰らうたびに倦怠感が無くなり、血が補充され思考が冷め渡っていく。

そしてある程度お腹が満たされてきた頃――

「――アガツ!!!?――アツ、ギツ、グウウ!!――」

魔物の肉を食ったことで変質した魔力が肉体を侵し、壊すが神水の回復能力で治っていく。

破壊と再生の輪廻が何度も起こり、日色の精神を激痛で痛めつけていくが日色は小さく呻き声をあげるだけで決してハジメのように暴れまわるのではなく――否、それどころか壁を支えに立ち上がり、出口らしき方向へと歩き出したのだ。

一歩進むたびに肉がぐちゃぐちゃに潰されたかのような激痛が奔り、踏み出すたびに全身の筋肉が引き締まり、もともと鍛え上げられていた日色の肉体を更に新たな領域へと昇華させていく。

それはハジメと同じ、魔王への領域へと。

だが、何よりも驚嘆すべきなのは小さな呻き声しか出さない精神力である。現在の日色の激痛は言葉で表すならば肉をブルドーザーで何度も踏み潰されているようなものなのだ、ハジメですらアレ程悶え苦しんだというのにこの男は呻き声で収めるどころか

己の意思で前へと歩いていくのだ。

もし、かつて魔物の毒で全身が崩れ死んでしまった者が見れば、真つ先に日色を人間とは思わないだろう。

それどころか確実に人の皮を被った人外だと思い、目を剥くはずだ。

日色は進む、きつと彼にはそうしなければならぬ理由があるのだ。と誰もがその光景を見たのならそう思うだろう。

ましてや――

『……………zzzz……………ううう、全身が筋肉痛で痛いんですけど……zzz……徹夜まで働きすぎたかなあ？空も暗いし、今何時だあ？……zzzz……勤務時間は合計18時間だから休憩時間は……zzzz……（半寝半起き）』

――ましてや、彼には八割がた寝ているため痛覚がうまく働いておらず、動き出した理由も特に無く、単に寝ぼけているだけなどと誰が理解できるのだろうか？



その頃、ハジメは地面に倒れ伏し、こちらを紅く輝く輝く双眼でこちらを睥睨する爪熊を憎悪の瞳で睨みつけていた。

爪熊はハジメの睨みに一切動揺することもなくゆつくりと右腕だけとなった右爪を掲げ近づいてくる。

「……グルウツ……」

「——こ、のツ……!!」

傷つき容易に動かない己の肉体にハジメは歯を食いしばりながらどうにか動く右腕で懐を必死に探る。

爪熊の歩みは正しくハジメの死へのカウントダウンだ。もしもハジメのもとにたどり着けばハジメは殺されてしまう。

「ルウツ……!?!」

ハジメが何かをしていることに気づいたのか爪熊は一瞬で倒れ伏したハジメの元へと駆け、左肩の傷を気にせず一気に右爪を振り下ろした。

が、その前にハジメが懐から中に神水を入れてある厚みを薄く作った石製の試験管容器を取り出し、端を噛み砕き中身を飲み干す。

全身の激痛がなくなり、動かせるようになったのを理解するとともに倒れ伏した状態で真横に【縮地】を使用しその場から離れる。

刹那、ハジメの服を微かに浅く切り裂くように爪熊の風の刃が通り過ぎ、地面と壁を切り裂くのではなく抉りとった。

「——なっ！嘘でしょ!?!」

ハジメは転がりながらも体勢を立て直し、顔を上げ爪熊の起こした風の刃の一撃に顔

色を驚愕に染める。

当たり前だ、今までの爪熊とは根本的に何かが違う。速度も威力も段違いだ。

威力は先ほど見たとおり、速度は体感ではおよそさつきまでの倍以上だ。

ハジメは爪熊がこちらに振り向く前にドンナーを構え、3度発砲する。装填は倒れながら行つた、今のドンナーの弾丸は最大の6発だ、発砲を惜しむ理由などない。

三発の弾丸は頭、胴体、足をそれぞれ狙い発砲する、いくら爪熊でも回避は不可能だ。たとえ仕留めることができなくても足を止めることができれば十分、次で決めれるとハジメは考えたのだ。

ただし、その策も次の爪熊の行動で潰されることになる。

ハジメが銃を構える瞬間、爪熊は後ろを向いたまま風の刃を地面に放ち地面を抉る。そしてその抉られた隙間に爪を差し込み力づくで引き上げ、簡易的な壁を生み出したのだ。

「——ッ!？」

「グルア!!」

別にハジメは壁に銃弾が弾き返されるとは思っていない、電磁加速が加えられた弾丸だ。難なく生み出された壁を貫くだろう。ただし次の瞬間、ハジメの表情は驚愕一色に染まる。

爪熊が生み出した壁が無数の瓦礫となりハジメへと吹き飛んできたのだ。弾丸は無数の瓦礫に直撃し軌道があらぬ方向へと曲がってしまふ。

おそらく爪熊が石壁を突進で粉碎したのだろう、ハジメは脳内でそう思ったが同時にあり得ないと思う。

状況判断が早すぎるのだ。

相手がもし爪熊と同じ身体能力を持つ人間なら行えるかもしれない——が、それはあくまで知性を持った人間の中で限られたメルド団長などの凄腕の長い戦いの経験を持つ者たちだけだ。ましてや魔物がこれほどの状況判断速度を持つなど理解不能だ。

（あの天之河の限界突破のような効果じゃない!?今の爪熊の状態は全く別のもの……ッ！）

あくまで【限界突破】という技能は時間制限付きで魔力によって身体のリミッターをある程度外し、ステータスを強制的に上昇させる技能なのだ。身体能力が上がっているだけなので現在の爪熊とは全く別のものである。

ハジメは【縮地】と【空力】で襲いかかる瓦礫を回避しながら必死に策を巡らせる。

が、瞬間ハジメの背後へと爪熊が風の刃を纏わせながら襲いかかる。

「グルアアアアアッ!!!」

「——ッ?!しまッ——」

死角を取られたが故に虚をつかれてしまう。

ハジメは咄嗟に背後へとドンナーの電磁ナイフを振り抜きながら【縮地】と【天歩】の同時活用でその場から退避する。

紅い閃光を纏わせながら振るわれるドンナーと爪熊の風の刃が衝突する。

そして勝敗が上がったのは——爪熊だった。

「——がはッ!!」

根本的に身体能力が違うのだ負けるのはある意味当然だろう。

咄嗟にドンナーを振るったことで風の刃は押し止められ、強制的に回避を選んだことで身体を切り裂かれることはなかったが爪熊の太い腕が胸に直撃し、体内から酸素を放出しながら吹き飛ばされる。

ハジメは地面に叩きつけられ何度もバウンドしながら必死に受け身を取り、喉元から胃液を吐き出しそうになるのを神水で無理矢理飲み込んだ。

「——ゴホッ!ゴホッ!……ドンナーはッ!」

痛んだ体を神水で強制的に回復させながら己の武器が手元がないことに気づく、あたりを急いで見渡してみると怨敵——爪熊の1メートル手前の斜め前に見覚えのある黒い銃剣が無造作に落ちていた。

「——最悪っ!!」

こんな時に最も殺傷力のある武器を手放した事実にはジメは毒づいてしまう。

ドンナーのある状況でさえなんとか爪熊に追いつけることができているというのに今武器を無くしてしまえば文字通り絶体絶命だ。

「グルア!!」

「——ッ! 【錬成ッ】」

そんなハジメに止めを刺すように爪熊は風の刃をハジメへと振り下ろし風の刃を飛ばしてくる。

ハジメは咄嗟に錬成を行い、視界を遮るための壁を生み出し、連続で近くの壁に行い、壁の中へと逃走する。

元に戻った壁に風の刃が直撃し、深く削り取るがそこにハジメの姿はない。おそらく連続錬成により壁の中を移動しているのだろうが、爪熊は本能で近くにいるだろうと思考する。あれほどの憎悪の瞳で爪熊を襲い掛かったあの生物が無様に逃げるはずがない。

「グルル……」

爪熊は生存本能のままに魔力を意図的に操作することによって左腕の出血を止めていった。



(……さてつと、どうしよう?)

ハジメは錬成を行い壁の中を移動しながら時々神水を飲んで策を巡らせていた。

現在のハジメにはドンナー以上の殺傷能力を持つ武器は存在しない、というかドンナー以外は相手の動きを一時的に封じることの特化した道具しか現在のハジメは持っていないのだ。

ならば自分ができることは最短でドンナーを拾い、爪熊にとどめを刺すこと。ただそれだけだ。

ハジメは己を手札を確認し、爪熊との距離、そしてドンナーの距離を確認した後、小さく深呼吸を行う。

「……よし」

そして、ハジメは賭けに出た。



爪熊が辺りを見渡す中、変化は突如現れた。

ボコツ！と近くの壁から穴が空き、中から【縮地】と【空力】を使用してハジメが現れたのだ。

一切の躊躇せず己の武器であるドンナーの元へと一直線に突き進んでいく。

当然、爪熊はハジメが壁の中から現れた瞬間反応し、風の刃を飛ばそうとする。



——が、その前にハジメが爪熊の目の前に緑色に輝く物を放り投げた。  
閃光手榴弾だ。

爪熊が右爪を振るう瞬間、ピキリツ！という罅割れる音と共に辺りが閃光で満たされる。

「グルウ!!？」

再度失う視力に爪熊は咆哮を上げる。一度見ていたため効果は薄いだろうがそれでも視力は数秒は回復しないだろう。

その隙にハジメは右手である物を走りながら掴み、一目散にドンナーへと駆け抜ける。

しかし——

「グルアアア!!」

「っ!？」

——ハジメが最初の地点から2メートル進む頃には爪熊が此方へと突進を行っていた。

あまりにも回復が早すぎるとハジメは僅かに目を見開いた。

否だ、別に爪熊は数秒で視力が回復したわけではない。

ただ、ハジメの閃光手榴弾を見た瞬間、効果を理解している爪熊は片目を既に瞑つて

いたのだ。

故に視力を失ったのは片目だけ、爪熊は視力を失っていないもう片方の眼でハジメを視認し、突進を繰り返したのだ。

片腕を失っているため速度は少し遅いが威力はそこまで変わるわけではない。

ハジメに直撃すれば重症は免れないはずだ、しかし、ハジメの表情は変わらない。不敵な笑みのままである。

「——そうだと……思ったよー」

そして、ハジメは拾っていた爪熊の左腕から溢れでる血を、乱暴に掲げることによって撒き散らし、ハジメと爪熊の場所を血液でつなげる。

繋げた地点に爪熊が踏み入れた瞬間、ハジメは右手に紅の雷を纏わせ、爪熊の血に叩きつけた。

ハジメは【纏雷】を二尾狼のように飛ばすことができないため、電気を通す物質『導體』が必要だ。

だからこそハジメはちぎれた左腕をわざわざ拾ったのだ、動脈が千切られていることで左腕から絶え間なく流れている血液は主に水分で構成されている。

『水は電気を通しやすい』、子供でも分かる常識である。

まあ、水は水でも純水である場合は電気をまったく通さない『絶縁体』となるのだが

今は関係ない。気になる人は個人でウイキでも調べて欲しい。

自らの流した血溜りに爪熊が踏み込んだ瞬間、強烈な電流と電圧が瞬時にその肉体を蹂躪する。神経という神経を侵し、強制的に筋肉を伸縮させる。最大威力と言つても、ハジメが取得した固有魔法は本家には及ばない。

ハジメの【纏雷】の出力は二尾狼のモノより半分程度。しかし、それでも一時的に行動不能にさせることは十分に可能だ。ちなみに、人間なら血液が沸騰してもおかしくない威力ではある。

「ルグウウウウ——」

低い唸り声を上げながら爪熊が自らの血溜りに地響きを立てながら崩れ落ちる。その隙にハジメは既に爪熊の左腕を捨て、爪熊の斜め後ろに沈黙しているドンナーへと飛びかかった。

ハジメは頬が自然に緩んでしまうのを感じた。

己の作戦通りに事が進んだことに笑っているのだ、現在の爪熊の体は【纏雷】が全身を襲ったことで最低でもしばらくはまともに動けないはずだ。つまり、これでドンナーを手に入れば爪熊の眉間に確実に銃弾を叩き込み脳髓を粉碎し、殺すことが可能はずだ。

だから。そう、だから——

——だから、ハジメは後ろ左斜めから己めがけて振り下ろされている右爪の存在に気づくのが遅れた。

「——え？」

ハジメの瞳が驚愕に染まり、小さく無意識に息が零れた。

何故、右爪が自分に襲いかかっている？ 爪熊は「纏雷」で動きを止めたはずだ。

そう思ったハジメだが、ハジメには一つの認識の誤りが存在していた。

爪熊はこの迷宮内での最強種である。最強種であるが故に数が少なくそれで生態系を保っているのだが、ここで疑問が生じる。

数が少ない最強種を最も最弱の二尾狼の固有魔法で殺すことができるのか？ という疑問だ。

通じると思ったのならそのものは甘いとしか言い様がない。

確かに直撃すれば傷を負うだろう、二尾狼という種族が長い年月生き残るために手に入れた魔法なのだ、通用しなければまたたく間に絶滅してしまう。

——が、それは爪熊も同じだ。最強種であるが故に迷宮の環境に適応し、年月を重ね進化していった。

だからこそ二尾狼の固有魔法に対する耐性はある程度できているのだ。

話は変わるが貴女はデンキウナギを知っているだろうか？

学名で「Electrophorus electricus」と呼ばれ、分類上デンキウナギ目ギユムノートウス科デンキウナギ属に分類される硬骨魚類の一種とされている南アメリカのアマゾン川・オリノコ川両水系に分布する大型魚で、強力な電気を起こす魚である。

さて、そんな電気を起こすデンキウナギであるが発電時どうやって感電からしのいでいるか疑問に思ったことはないだろうか？

答えは簡単、別にデンキウナギは感電していいのではなく普通に感電している。

ただ、体内に豊富に蓄えられた脂肪組織が絶縁体の役割を果たすため、自らが感電死することはないのである。

閑話休題。

そんなデンキウナギと同じ仕組みで爪熊の体内の中も脂肪組織は全体で見れば少ないが確かに存在しているのだ。

だからこそ爪熊は二尾狼の「纏雷」をある程度防ぐことができ、最強種として君臨し続けることができる。

ましてや本来の出力の半分程しか出せないハジメの「纏雷」など文字通り一瞬でしか動きを止めることができないのだ。

その事実を知らないハジメは驚愕に襲われながらも周囲の情景が、自分を含めスローモーションのようにゆっくりと流れていく。

避けることも、防ぐこともできない。完全に虚をつかれた攻撃にハジメはドンナーに手を伸ばしたまま、爪熊の風の刃の一撃を受けるしかないのだ。

全てがスローモーションの世界は時間が止まってしまったかのような感覚だった。

このまま、もしかしたら当たらないなんて……なんて思いもしたがそんな訳がない。世界はそれほど優しくなどない。

今、ハジメが味わっているのは走馬灯のようなものに過ぎず己の命を刈り取る風の刃を無様に見続けることしかできないのだ。

ハジメの死はもはや決定づけられている。

だけど――

（――ま、だッ……！）

――ハジメはそれでも生を決して諦めない。

スローモーションの世界でドンナーへと手を伸ばし、動けと何度も心で念じ、無理矢理でも動かそうとする。

何故ならここで力尽きることはできないから。まだ、ハジメは日色を守りきっていないから。

だからハジメは己の終わりを認めない、受け入れることなどしない。

しかし、いくらハジメが認めなくても現実是非情だ。

どれだけ念じても風の刃の軌道を変わず、ハジメはドンナーに手を伸ばすだけで触れることすら叶わない。

（日色……ッ！）

ハジメは心の中で大切な親友の名を呟きながら無様に襲い掛かる風の刃を振り下ろす爪熊を無防備に見つめ――

――同時に蒼く輝く『止』の文字が爪熊へと一直線に飛んで行くのを視認した。

それをハジメが認識した途端、脳裏に久しく聞いていなかった声が再生される。

――アレは俺の固有魔法、『文字魔法』だ。

――文字……魔法？

――ああ、この魔法の能力は簡潔に言えば『書いた文字の効果を実際に起こす』魔法だ。……とは言っても魔力消費が激しすぎて一日3、4回しか使えないがな。

嘗てのその日色との会話が反芻されていくと同時に蒼い『止』の文字が爪熊に直撃し

まるで放電現象のように火花を発生させ瞬間、ハジメですら容易に視認することができなかつた爪熊の風の刃を纏わせた右爪ごと爪熊の体がピタリツと停止した。

そしてスローモーションの世界から時が再び加速した。

突然身動きが取れなくなつたことに爪熊は困惑がこもつた声を零すがその声を掻き消すように洞窟内を一人の少年の声が響き渡る。

「ハジメエエツ!!」

「——ツ!!?」

もはやその声を聞いた途端、反射でハジメは行動を起こしていた。

ドンナーに飛びつき、転がるように手に取ることで体勢を整え、ドンナーを構える。銃口の狙いはもちろん頭。

「——これで……終わり」

その言葉と共に引き金を引く。撃ち出された弾丸は主の意志を忠実に実行し、身体を動かすことのできない爪熊の頭部を粉碎した。

迷宮内に銃声が木霊する。

爪熊は最後までハジメから眼を逸らさなかつた。ハジメもまた眼を逸らさなかつた。想像していたような爽快感はない。だが、虚しさもまたなかつた。ただ、やるべきこ



とをやった。生きるために、守るために、この領域で生存の権利を獲得するために。

ハジメは爪熊の死亡を確認したと共にバツと文字が飛んできた方向を見ると、そこには彼がいた。

『神代日色』が。

「——ッ！」

ハジメは無意識に身体を震わせる。

日色の表情は俯いている為髪の影響で見えず、明確にはわからないが身体には服越しに幾つもの切り傷とそして胸を大きく斜めに切り裂かれた跡が服に存在していた。

わかっていた、日色を守ることを決意していた時から日色の敵を躊躇なく殺すと決めていた。

そしてそれは例え自分が日色に拒絶されたとしても、だ。

「——あ……ッ！」

だが、覚悟していたとしても恐怖であることには変わりがない。

髪は短い茶髪の混じった髪から純白の長髪に。かつての穏やかな茶色の瞳はなりを潜め、鋭い目つきを持った紅の瞳に。身長は伸び、顔つきは美しく整えられ、もはや面影のない姿に、殺しに一切躊躇しない性格。

拒絶されないわけがなかった。

日色が眩こうと息を吸ったことに反応してハジメは無意識に一步下がってしまった。そして紡ぎ出された日色の拒絶の言葉がハジメの心に突き刺さり――

「大丈夫か、ハジメ？」

「――え？」

――思考が停止した。

日色の言葉を自分が望んだ言葉として変換したのではないかとすら思った。

しかし、現実はこちらが決して夢ではないと事実を突きつけてくる。

ハジメにとってはあまりにも優しい幸せを。

「――ッ!!」

「グッ!?!……おい」

あまりの嬉しさにハジメは日色の胸へと飛びついた。

だがまあ、ハジメのステータスは平均300程。いくら蹴りウサギの肉を食べた日色でもハジメの躊躇ない抱きつきは痛いようだ。

ハジメの抱きつきに押され、地面に後ろ向きで倒れた日色は痛む頭を片手で抑え呻きながら、ハジメに苦言を零すが顔を上げたハジメの今にも泣きそうな表情を見て、言葉を失った。

「――怖かった」

まるで怯えたありふれた少女のように心細い声でハジメは言葉を零す。

「——もう、日色が目を覚まさないんじゃないかって」

「——こんな私は拒絶されるんじゃないかって」

「……また、独りになるんじゃないかってっ！だから、だから私は——」

ハジメは語る。己の本心を。

あまりに醜い自分を自嘲するように。

そんなハジメを日色はため息を吐くと優しくハジメの頭を撫でた。

「——え？」

まるで父親に頭を撫でてもらうかのように優しい感触に訪れる安心感と共にハジメは困惑の言葉を零した。

そんな困惑するハジメに対して日色は小さく申し訳ないように呟いた。

「……すまん。迷惑を、かけたな」

その言葉でハジメは限界だった。

心の枷が外れたように様々な感情が濁流となって溢れ出し、涙腺から止めどない涙が頬を伝わり、日色の胸の中で何度も「よかった」と叫びながら泣き続けたのだった。

そんなハジメを慰めるかのように日色はハジメの頭を撫で続ける。

何度も、何度でも。

大切な親友の涙を止めるために。

◇◆◇

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！

暗闇の中、全身筋肉痛に悩まされながら仕事から帰っていると突然閃光に目を焼かれ、ようやく視界が回復したかと思うと少女が二メートルほどあるだろう大男に襲われていた！

咄嗟に止めようと思ったら人差し指から何かが飛んでいった！

そして突然腹に衝撃を感じ、地面に倒れ目を開けると俺の上に白髪紅眼の少女が乗っていたツ！！

何を言っているかわからねえと思うが俺も何を言っているかわからねえツ！！

幻覚だとか現実逃避だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえツ！！

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……………

とまあ、今までの現状を簡潔に話すとこんな感じだ。

え？何言っているかわからない？安心しろ、俺もさっぱりわからない。

確かあの時、爪熊に『またつまらぬものを斬ってしまった……………』状態にされた俺がど

うして生きているかは知らない。と、どうか現在も記憶が混雑して何が起こっているのか自分でもわかんないしね。

ただ、強大な眠気と共に俺が目覚めた場所は——あの懐かしいブラック企業の会社だった。

いや、待つて欲しい。ちよつと待つてくれ。ここが夢か天国かは知らないが流石にそこでも働けとおっしゃいますか神様よ。

え？何？食事は置いておくから頑張れつて？

食事つておまつ！タライに満杯に入った水と巨大なおからこんにやくだけつてそれもう料理の域に達してねえだろうがツ!!え、何？何なの？俺つて家畜なの!?

というか、おからこんにやく硬ツ!!というかマズツ!!

そしてなんで飲み物が水!?!お茶にしろよお茶！静岡県の茶葉を持つてこいよツ!!

そう嘆きながらおからこんにやくを完食し働いていると、ようやく帰宅することを許された。

全身は疲労で筋肉痛なのか踏み出すたびに痛みが走り、あまりのブラック企業さに泣きそうになってくる。

既に空は真つ暗であり幾つもの緑色の星の光が辺りを照らしていた。

そんな照らされた道を進んでいくと突如視界が閃光によって光に塗りつぶされた。

バルスツ!!!

目が、目があゝ!

万感の思いでそう叫びながら目を擦っていると、どうにか視界が元に戻った。

なんじゃあツッ警察かつ!と思いつながら元に戻った視界で前方を見ると、目の前には今にも前方にいる少女に今にも襲いかかっている二メートル台の大男がいた。

……おいおい、犯罪臭がするんだが。

こんな夜遅くに歩く少女に襲い掛かる大男とかどう見てもヤバそうな気配しかしない。

アレか、あのままR18ルートに突入しちゃうのか。

そうはいかんとばかりに俺は止めようと思ったが如何せん今の自分には少女を助ける方法はない。

こんな時に昔見た丘村日色の『文字魔法』を思い出してしまった。

確か日色は空中で文字を書いて飛ばせたんじゃないか?と思いつけ?と思いつながら自分もあの大男の動きが止まるように適当に『止』の文字を書いていく、こんな時に厨二心が再び燃え上がってしまったのだ。



エ!!ハジメ!? ハジメサンナンデ!?

あまりの出来事の連続で思考が追いついていかないぞ。なんでハジメが魔王ハジメになつてんの!?!しかもココドコよ!?!てゆうか、何あの死体!?!めっちゃ見覚えあるんですけどツ!!あれ爪熊だよネツ!?

困惑し混乱する思考のせいでハジメが何を言っているのかが聞こえなくなっている。何をすればいいか全く分からない俺は取りあえず、ハジメの頭を撫でて謝ることにする。

秘技『取りあえず謝っておけばいいだろ戦法』である。

これを今まで破つた者はいな——つてああ!ハジメ!?!どうして泣き出したの!?!俺何もしてないよね!?!

お願い!お願いだから泣くのは止めてくれえ!!罪悪感に押しつぶされそうになつちやうからあ!!!

俺は混乱する現状の中、前に一度こんなことがあつたような既視感デジャヴを感じながら泣き続けるハジメを慰め続けるのだった。



## 幕間 少女達は想いを胸に歩き出す

時は日色達が奈落に落ちていった時に遡る。

響き渡り消えゆくベヒモスの断末魔。ガラガラと騒音を立てながら崩れ落ちてゆく石橋。

そして……奈落に落ちるハジメに手を伸ばし奈落へと吸い込まれるように消えていく日色の姿。

その光景を、まるでスローモーションのように緩やかになった時間の中で、ただ見ていることしかできない香織は自分に絶望する。

そんなスローモーションの光景を見ながら香織の頭の中には昨夜の光景が何度もリフレインされる。

月明かりの射す部屋の中で、日色が入れた紅茶モドキを飲みながら4人で話したあの時を。二人つきりで月明かりが照らす道の中で自分を慰めてくれた日色との光景を。

嬉しかった。

夢見が悪く不安に駆られて、日色達の部屋を訪ねて二人つきりの月明かりの下でその不安をいとも容易く消してくれた日色の言葉が。

だからこそ、香織は決意したのだ。

昨夜見た夢が現実にならないように、日色は自分が守ると。

奈落へと消えていった日色を見つめながら、その時の記憶が何度も何度も脳裏を巡る。

どこか遠くで聞こえていた悲鳴が、実は自分のものだど気がついた香織は、急速に戻ってきた正常な感覚に顔を顰めた。

「離して！日色君の所に行かないと！私があ、私が守らなきゃって！離してえ!!」

飛び出そうとする香織を光輝が必死に羽交い締めにする。香織は、細い体のどこにそんな力があるのかと疑問に思うほど尋常ではない力で引き剥がそうとする。勇者である光輝のステータスですら押さえ込むのに苦戦するほどだ。

このままでは香織の体の方が壊れるかもしれない。しかし、だからといって、断じて離すわけにはいかない。今の香織を離せば、そのまま崖を飛び降りるだろう。それくらい、普段の穏やかさが見る影もないほど必死の形相だった。いや、悲痛というべきかもしれない。

そんな悲痛な形相の香織に光輝は必死に押し止めようと叫ぶ。

「ダメだ香織！君まで死ぬ気か！神代達はもう無理だ！落ち着くんだ！このままじゃ、香織の体が壊れてしまう！」

それは、光輝なりに精一杯、香織を気遣った言葉。しかし、今この場で錯乱する香織には言うべきでない言葉だった。

「無理って何!? 日色君も南雲ちゃんも死んでない! 行かないと、きつと助けを求めている!」

その香織の言葉に同意するものは一人もない。奈落の底と思しき崖に落ちていったのだ誰がどう考えても彼等は助からない。

しかし、その現実を受け止められる心の余裕は、今の香織にはないのだ。光輝の言葉に反発して更に無理を重ねるだけだ。龍太郎や周りの生徒もどうすればいいかわからず、オロオロとするばかりである。

その時、雫を抱えてきたメルド団長が雫を下ろしツカツカと歩み寄ると、問答無用で香織の首筋に手刀を落とした。ピクツと一瞬痙攣し、そのまま意識を落とす香織。

ぐったりする香織を抱きかかえ、光輝がキツとメルド団長を睨む。文句を言おうとした矢先、雫が遮るように機先を制し、団長に頭を下げた。

「——すいません、ありがとうございます……」

「礼など……止めてくれ。もうこれ以上一人も死なせるわけにはいかない。全力で迷宮を離脱する。……彼女を頼む」

「——はい」

離れていく団長を見つめながら、口を挟めず懺然とした表情の光輝から香織を受け取った雫は、光輝に告げる。

「……光輝が香織を止められないから団長が止めてくれたのよ。香織の叫びが皆の心にもダメージを与えてしまう前に、何より香織が壊れる前に止める必要があった。……ほら、早く行きましょう。あんたが道を切り開くのよ。全員が脱出するために」

感情のこもっていない雫の言葉に、光輝は頷いた。

「そうだな、早く出よう」

目の前でクラスメイトが二人死んだのだ。クラスメイト達の精神にも多大なダメージが刻まれている。誰もが茫然自失といった表情で石橋のあった方をボーと眺めていた。中には「もう嫌!」と言つて座り込んでしまう子もいる。

ハジメが光輝に叫んだように今の彼等にはリーダーが必要なのだ。

光輝がクラスメイト達に向けて声を張り上げる。

「皆! 今は、生き残ることだけ考えるんだ! 撤退するぞ!」

その言葉に、クラスメイト達はノロノロと動き出す。トラウムソルジャーの魔法陣は未だ健在だ。続々とその数を増やしている。今の精神状態で戦うことは無謀であるし、戦う必要もない。

光輝は必死に声を張り上げ、クラスメイト達に脱出を促した。騎士団員達も生徒達を鼓舞する。

そして全員が階段への脱出を果たした。

上階への階段は長かった。

先が暗闇で見えない程ずっと上方へ続いており、感覚では既に三十階以上、上つていくはずだ。魔法による身体強化をしても、そろそろ疲労を感じる頃だろう。先の戦いで肉体的にも精神的にもダメージもある。薄暗く長い階段はそれだけで気が滅入るものなのだ。

そろそろ小休止を挟むべきかとメルド団長が考え始めたとき、ついに上方に魔法陣が描かれた大きな壁が現れた。

メルド団長は扉に駆け寄りフェアスコープを使って詳しく調べ始めた。

その結果、どうやらトラップの可能性はなさそうであることがわかった。魔法陣に刻まれた式は、目の前の壁を動かすためのものようだ。

メルド団長は魔法陣に刻まれた式通りに一言の詠唱をして魔力を流し込む。すると、まるで忍者屋敷の隠し扉のように扉がクルリと回転し奥の部屋へと道を開いた。

扉を潜ると、そこは元の二十階層の部屋だった。

「帰ってきたの?」

「戻ったのか!」

「帰れた……帰れたよお……」

クラスメイト達が次々と安堵の吐息を漏らす。中には泣き出す子やへたり込む生徒もいた。光輝達ですら壁にもたれかかり今にも座り込んでしまいそうだ。

しかし、ここはまだ迷宮の中。低レベルとは言え、いつどこから魔物が現れるかわからない。完全に緊張の糸が切れてしまう前に、迷宮からの脱出を果たさなければならぬ。

メルド団長は休ませてやりたいという気持ちを抑え、心を鬼にして生徒達を立ち上がらせた。

「お前達! 座り込むな! ここで気が抜いたら帰れなくなるぞ! 魔物との戦闘はなるべく避けて最短距離で脱出する! ほら、もう少しだ、踏ん張れ!」

少しくらい休ませ欲しい、という生徒達の無言の訴えをギンツと目を吊り上げて封殺する。

渋々、フラフラしながら立ち上がる生徒達。光輝が疲れを隠して率先して先をゆく。道中の敵を、騎士団員達を中心となつて最小限だけ倒しながら一気に地上へ向けて突き進んだ。

そんな生徒達の中で、後方にいる雫は表情を髪影で隠しながら香織を抱えながら進

んでいく。

すると、近くにメルド団長が近寄ってきた。どうやら殿として務めているらしいがどうしたのだろうか？

「……私を恨んでいるか？」

そう己の無力さを呻くように小さく呟くメルド団長に雫は表情を隠したまま小さく絞り出すような声で呟いた。

「——いえ」

「——そうか……すまなかった」

それっきり、メルド団長は雫から距離を離し後方へと下がっていく。再び殿に戻ったのだろう。

あの時、雫を強制的に抱え逃げたことを悔やんでるのだろう。一人の『メルド』としてではなく『騎士団長メルド・ロギンス』としての選択を選んできましたことに。

そして突き進んでいくと遂に、一階の正面門とんだか懐かしい気さえする受付が見えた。迷宮に入つて一日も立っていないはずなのに、ここを通つたのがもう随分昔のような気がしているのは、きつと少数ではないだろう。

今度こそ本当に安堵の表情で外に出て行く生徒達。正面門の広場で大の字になって倒れ込む生徒もいる。一様に生き残つたことを喜び合っているようだ。

だが、一部の生徒——未だ目を覚まさない香織を背負った雫や光輝、その様子を見る龍太郎、恵里、鈴、そして日色が助けた女子生徒などは暗い表情だ。

そんな生徒達を横目に気にしつつ、受付に報告に行くメルド団長。

二十階層で発見した新たなトラップは危険すぎる。石橋が崩れてしまったので罨として未だ機能するかはわからないが報告は必要だ。

そして、南雲ハジメと神代日色の死亡報告もしなければならぬ。

憂鬱な気持ちを顔に出さないように苦勞しながら、それでも溜息を吐かずにはいられないメルド団長だった。



ホルアドの町に戻った一行は何かする元気もなく宿屋の部屋に入った。おそらく精神的衝撃と肉体的疲勞が大きく負荷になったのだろう。幾人かの生徒は生徒同士で話し合ったりしているようだが、ほとんどの生徒は真っ直ぐベッドにダイブし、そのまま深い眠りに落ちた。

そんな中、檜山大介は一人、宿を出て町の一角にある目立たない場所で膝を抱えて座り込んでいた。顔を膝に埋め微動だにしない。もし、クラスメイトが彼のこの姿を見れば激しく落ち込んでるように見えただろう。

だが実際は……



「ヒ、ヒヒヒ。ア、アイツが悪いんだ。雑魚のくせに……ちよ、調子に乗るから……て、天罰だ。……俺は間違つてない……白崎のためだ……あんな雑魚に……もうかかわらなくていい……俺は間違つてない……ヒ、ヒヒ」

……………うわあ

生徒達が見れば必ずそう呟くだろうと思えるような暗い笑みと濁った瞳で自己弁護しているだけだった。

あの時、軌道を逸れてまるで誘導されるように日色達を襲った火球は、この檜山が放ったものだったのだ。

そう、なんとか山さんの正体はいじめグループの筆頭、檜山大介なのである。

階段への脱出と日色達の救出。それらを天秤にかけた時、日色を見つめる香織が視界に入った瞬間、檜山の中の悪魔が囁いたのだ。今なら殺つても気づかれないぞ？ と。

そして、檜山は悪魔に魂を売り渡した。

バレないように絶妙なタイミングを狙って誘導性を持たせた火球を日色へと発射させた。……まあ、あの糞女に庇われてしまったが結果的に落ちていったため結果オーライだろう。流星の如く魔法が乱れ飛ぶあの状況では、誰が放った魔法か特定は難しいだろう。まして、檜山の適性属性は風だ。証拠もないし分かるはずがない。

そう自分に言い聞かせながら暗い笑を浮かべる檜山。まあ、本当はその日色が正体を

知っているのだが死人に口なしである……まだ死んでおらずピンピンしているが。

「へえ、やつぱり君だったんだ。異世界最初の殺人がクラスメイトか……中々やるね？」

「ッ!? だ、誰だ!」

慌てて振り返る檜山。そこにいたのは見知ったクラスメイトの一人だった。

「お、お前、なんでここに……」

「そんなことはどうでもいいよ。それより……人殺しさん? 今どんな気持ち? 恋敵をどさくさに紛れて殺すのってどんな気持ち?」

その人物はクスクスと笑いながら、まるで喜劇でも見たように楽しそうな表情を浮かべる。檜山自身がやったこととは言え、クラスメイトが一人死んだというのに、その人物はまるで堪えていない。ついさつきまで、他のクラスメイト達と同様に、ひどく疲れた表情でシヨツクを受けていたはずなのに、そんな影は微塵もなかった。

「……それが、お前の本性なのか?」

呆然と呟いてしまう檜山。

それを、馬鹿にするような見下した態度で嘲笑う。

「本性? そんな大層なものじゃないよ。誰だつて猫の一匹や二匹被っているのが普通だよ。そんなことよりさ……このこと、皆に言いふらしたらどうなるかな? 特に……」

あの子が聞いたら……」

「ッ!? そ、そんなこと……信じるわけ……証拠も……」

「ないって? でも、僕が話したら信じるんじゃないかな? あの窮地を招いた君の言

葉には、既に力はないと思うけど?」

檜山は追い詰められる。まるで弱ったネズミを更に躪るかのような言葉。まさか、こんな奴だったとは誰も想像できないだろう。二重人格と言われた方がまだ信じられる。目の前で嗜虐的な表情で自分を見下す人物に、全身が悪寒を感じ震える。……まあ、日色の本性の方がもっと信じられないと思うが。

「ど、どうしろってんだ!」

「うん? 心外だね。まるで僕が脅しているようじゃない? ふふ、別に直ぐにどうこうしろってわけじゃないよ。まあ、取り敢えず、僕の手足となって従ってくれればいいよ」

「そ、そんなの……」

実質的な奴隷宣言みたいなものだ。流石に躊躇してしまう檜山。当然断りたいが、そうすれば容赦なく日色とハジメを殺したのは檜山だと言いふらさだろう。

葛藤する檜山は、「いっそコイツも」とほの暗い思考に囚われ始める。しかし、その人物はそれも見越していたのか悪魔の誘惑をする。

「白崎香織、欲しくない?」

「ツ!? な、何を言つて……」

暗い考えを一瞬で吹き飛ばされ、驚愕に目を見開いてその人物を凝視する檜山。そんな檜山の様子をニヤニヤと見下ろし、その人物は誘惑の言葉を続ける。

檜山は完全にその人物に会話の主導権を握られていた。

「僕に従うなら……いずれ彼女が手に入るよ。本当はこの手の話は神代にしようと思つていただけけど……君が殺しちゃうから。まあ、彼より君の方が適任だとは思ふし結果オーライかな?」

「……何が目的なんだ。お前は何がしたいんだ!」

あまりに訳の分からない状況に檜山が声を荒らげる。

「ふふ、君には関係のないことだよ。まあ、欲しいモノがあるとだけ言つておくよ。……それで? 返答は?」

あくまで小バカにした態度を崩さないその人物に苛立ちを覚えるものの、それ以上に、あまりの変貌ぶりに恐怖を強く感じた檜山は、どちらにしろ自分に選択肢などないと諦めの表情で頷いた。

「……従う」

「アハハハハ、それはよかった! 僕もクラスメイトを告発するのは心苦しかったか

らね！ まあ、仲良くやろうよ、人殺しさん？ アハハハハハ」

楽しそうに笑いながら踵を返し宿の方へ歩き去っていくその人物の後ろ姿を見ながら、檜山は「ちくしょう……」と小さく呟くしかない。

檜山の脳裏には忘れてたくても、否定したくても絶対に消えてくれない光景がこびり付いている。日色が奈落へと転落した時の香織の姿。どんな言葉より雄弁に彼女の気持ちを物語っていた。

今は疲れ果て泥のように眠っているクラスメイト達も、落ち着けば日色とハジメの死を実感し、香織の気持ちに悟るだろう。香織が決して善意だけで日色を構っていたわけではなかったということ。……ただしハジメは知らないが。

そして、憔悴する香織を見て、その原因に意識を向けるだろう。不注意な行為で自分達をも危険に晒した檜山のことを。

上手く立ち回らなければならない。自分の居場所を確保するために。もう檜山は一線を越えてしまったのだ。今更立ち止まれない。あの人物に従えば、消えたと思った可能性——香織をモノにできるといえるという可能性すらあるのだ。

「ヒヒ、だ、大丈夫だ。上手くいく。俺は間違っていない……」

再び膝に顔を埋め、ブツブツと呟き出す檜山。

月明かりの下で、再び呟きだした檜山を横目にその者はいい駒が手に入った、と歪ん

だ笑みを浮かべる。

『自称ヒロイン』と書いてメンヘラ女と呼ぶ、その者は動き出す。

大切なものを手に入れるために。



そして、初の迷宮探索が終わってから五日が経過した。

その後、生徒達は宿場町ホルアドで一泊し、早朝には高速馬車に乗って一行は王国へと戻った。とても、迷宮内で実戦訓練を続行できる雰囲気ではなかったし、無能扱いだったとは言え勇者の同胞が死んだ以上、国王にも教会にも報告は必要だったからだ。

そして何よりも致命的な障害が発生する前に、勇者一行のケアとあの時火球を射つた犯人を探すことが必要だとメルドが判断したからだ。

メルドは王国に帰還した後、日色とハジメという勇者の同胞が死亡したことを正確に報告した。

途中の訓練の様子、未知のトラップによる強制転移、そして、戦死した勇敢な二人の戦士が時間を稼ぐため奮闘してくれたことで残りの者たちが生き残ることができた。

メルドはせめて伝えたかったのだ、彼等は決して『無能』や『役立たず』ではなくメ

ルドを含め全員の命を救ってくれた命の恩人だと。

しかし現実は無情だった。メルドの訴えも虚しく帰還を果たし日色とハジメの死亡が伝えられた時、王国側の人間は誰も彼もが愕然としたものの、それが「無能」のハジメと「能無し」の日色と知ると安堵の吐息を漏らしたのだ。それは国王やイシユタルですら例外ではない。

強力な力を持った勇者一行が迷宮で死ぬこと等あつてはならないこと。迷宮から生還できない者が魔人族に勝てるのかと不安が広がっては困るのだ。神の使徒たる勇者一行は無敵でなければならぬのだから。

しかも中には悪し様に日色とハジメを罵る者までいたのだ。

もちろん、公の場で発言したのではなく、物陰でこそそと貴族同士の世間話という感じではあるが。やれ死んだのが無能でよかったのだ、神の使徒でありながら役立たずなど死んで当然だの、それはもう好き放題に貶していた。

メルドは己の無力さに嘆いた。

これではあまりにも命を賭して戦ってくれた彼等に申し訳が立たない、と。

実際、正義感の強い光輝が真っ先に怒らなければ雫は日色を罵った貴族を全て斬殺していただろう。光輝が激しく抗議したことで国王や教会も悪い印象を持たれてはマズイと判断したのか、日色を罵った人物達は処分を受けたようだが……

逆に、光輝は無能にも心を砕く優しい勇者であると噂が広まり、結局、光輝の株が上がっただけで、日色やハジメは勇者の手を煩わせただけの無能であるという評価は覆らなかった。

あの時、自分達を救ったのは紛れもなく、勇者も歯が立たなかった化け物をたつた二人だけで抑え続けた彼らだけだというのに。そんな彼らを死に追いやつたのはクラスメイトの誰かが放つた流れ弾だというのに。

クラスメイト達は図つたように、あの時の誤爆の話をしなさい。自分の魔法は把握してはたはずだが、あの時は無数の魔法が嵐の如く吹き荒れており、『万一自分の魔法だったら』と思うと、どうしても話題に出せないのだ。それは、自分が人殺しであることを示してしまうから。

その結果現実逃避をするように、あれは日色とハジメが何やら自分でドジつたせいだと思ひ込むようになった。無闇に犯人探しをするより、自業自得にしておけば誰もが悩まなくて済む。クラスメイト達の意見は意思の疎通を図ることもなく一致していた。

メルド団長は、あの時の経緯を明らかにするため、生徒達に事情聴取をする必要があると考えていた。生徒達のように現実逃避して、単純な誤爆であるとは考え難かつたこともあるし、仮に過失だったのだとしても、白黒はつきりさせた上で心理的ケアをした方が生徒達のためになると確信していたからだ。



しかし、

イシユタルが、生徒達への詮索を禁止したことでそれは不可能となった。メルド団長は食い下がったが、国王にまで禁じられては堪えるしかなかったのだ。

そんな中、ハイリヒ王国王宮内、召喚者達に与えられた部屋の一室で、八重樫雫は、暗く沈んだ表情で未だに眠る親友を見つめていた。

あの日から一度も香織は目を覚ましていない。

医者の診断では、体に異常はなく、おそらく精神的ショックから心を守るため防衛措置として深い眠りにについているのだろうということだった。故に、時が経てば自然と目を覚ますと。

しかしそれでも五日は経っているのだ、さすが雫でも心配になってくる。

その時、不意に、握り締めていた香織の手がピクツと動いた。

「――香織?」

雫の囁く声に応じる様に閉じられていた香織の臉が震え始め、香織はゆっくり目を覚ました。

「……雫ちゃん?」

香織は、しばらくボーと焦点の合わない瞳で周囲を見渡していたのだが、やがて頭が活動を始めたのか見下ろす雫に焦点を合わせ、名前を呼んだ。

その言葉に返答するように雫は髪の影で瞳は香織にはよく見えないが小さく笑った。

「……ええ、雫よ。香織……体は平気？」

「う、うん。平気だよ。ちよつと怠いけど……寝てたからだろうし……」

「——そうね、もう五日も眠っていたのだから……怠くもなるわ」

そうやって体を起こそうとする香織を補助しながらどれくらい眠っていたのかを伝える雫。香織はそれに反応する。

「五日？ そんなに……どうして……私、確か迷宮に行つて……それで……」

徐々に焦点が合わなくなる瞳に記憶を探ろうとする香織の声が徐々に焦燥の混じつた声になつていく。

「それで……あ………日色くんは？」

「………」

雫は答えない。

その事実には香織は自分の記憶にある悲劇が現実であつたことを悟る。だが、そんな現実を容易に受け入れられるほど香織はできていない。

「……嘘だよ、ね。そうでしょ？ 雫ちゃん。私が気絶した後、日色君や南雲ちゃんも助かつたんだよ、ね。ね、ね？ そうでしょ？ ここ、お城の部屋だよ、ね？ 皆で帰つてきたんだよ、ね？ 日色君は……また南雲ちゃんと訓練かな？ 訓練所にいるよ、ね？」

うん……私、ちよつと行つてくるね。日色君にお礼言わなきゃ……だから、離して？  
雫ちゃん」

現実逃避するように次から次へと言葉を紡ぎ日色を探しに行こうとする香織。そんな香織の腕を掴み離そうとしない雫。

「……香織、わかつてるでしよう？」

「やめて……」

「香織の覚えている通りよ」

「やめてよ……」

「彼は、日色は……南雲ちゃんと一緒に」

「いや、やめてよ……やめてったら！」

「香織……日色は死んだわ」

「嘘だ！日色君は死んでなんかない！絶対、そんなことない！日色君は言ったもん！！死なないうって！死んだりしないってツ！！」

雫の言葉を拒絶するかのよう香織は雫を胸元の服を掴んで、壁に押しつけた。どこからそんな力が出るのかわからないが雫は為すすべもなく壁に体をぶつけてしまう。

「なんで雫ちゃんは冷静なの!?!日色君は死んでないツ！勝手に決めつけないでよ!!」

「——さっ」

「雫ちゃんは日色君が大切じゃなかったの!!? そんな簡単に諦めていいの!!?」

「——るさこ」

「雫ちゃんは日色君のことが好きじゃなかったの!!?」

「——うるさいって言っているでしょうッ!!!!」

そして瞬間、雫の絶叫が部屋中を響き渡った。

香織は雫の表情に一瞬言葉が詰まり躊躇してしまふ。

叫びと共に雫の髪が少し浮かび上がり、雫の表情が明らかになる。

臉には何度も泣いた跡を示すように赤くなって、目の下には一睡もしていないのか隈があり、顔色は暗い。

彼女の表情はまさにうつ病にかかった人とも言うべきだろう。

雫は押し返すように香織の腕をつかみ、香織が寝ていたベットへと香織を押し倒す。

「いいわけがないでしょッ!! 私だって今すぐ日色を助けに行きたいわよッ! 私だって日色を大切だと思ってるッ! だけッ! あの時、日色に私は頼まれたのよ! あとは頼むって!! 貴女にわかるの!?! その託された時の気持ちがあッ!!」

まるで今まで溜め込んできたものを吐き出すかのように叫びだす雫にはもはやブレキは存在しない。

どうしようもないほどの絶望が詰まった言葉が吐き出されそれに呼応するように涙が流れ続けていく。

「ええ、そうよ！ 日色を殺したのは私よッ!! あの時、私は日色の手を掴めなかったッ!! 掴めたはずなのに！ 本当なら助けられたはずなのにッ!!」

あの日色に手を伸ばした時、本来なら届くはずだったと雫は思う。

だが、日色を止めるために手を伸ばした時、ふと思った。思ってしまったのだ。

——どうして、私じゃなくて南雲ちゃんなの？

ふと過ぎった小さな疑問、あの時、落ちていくのがハジメじゃなくて自分だったら日色は助けに来てくれるのか？

と。

だが、その一瞬の躊躇により雫は日色の手を掴むことができなかった。

その事実が雫の心を蝕み続ける。

「私の小さな嫉妬で日色を殺したのよ!! 日色を見捨てた私が、今更日色を助けに行けるわけじゃないじゃない!! ……嫌なのよ、もう。日色を失って今度は貴女を失ったら私はどうすればいいのよ？ 日色に……任されたから、まだ私は立ち上がれるのに……今度は貴女を失ってしまったらもう……私は立ち上がれないのよ……」

涙を流しながら雫は言葉を泣きながら零し続ける。

自覚しているのだ、とつくの昔に自分の醜い本性に。

大切なものを失ってから気づいてしまい、気づいたはずなのに嫉妬で全てを無くしてしまう。

「……誰でもいいから……教えてよ……」

嗚咽を漏らしながら泣き続ける雫に香織は抱きしめ、抱きしめ返されながらも自分も涙ぐみながら聞き続ける。

二人は 縋り付くようにしがみつき、喉を枯らさんばかりに大声を上げて泣く。まるでお互い冷え切った体を温めあつてなんとか生きているかのように。お互いの傷を舐め合うかのように。

どれくらいそうしていたのか、窓から見える明るかった空は夕日に照らされ赤く染まっていた。香織はスンスンと鼻を鳴らしながら雫の腕の中で身じろぎした。

囁くような、今にも消え入りそうな声で香織が呟く。

「ねえ……雫ちゃん……あの時、日色君を狙っていった魔法の犯人って……誰なの？」  
その言葉に反応するように雫が小さく呟いた。

「……わからないわ。誰も、あの時のことには触れないようにしてるから……」

「……そっか」

「恨んでる？」

「……わからないよ。もし誰かわかったら……きつと恨むと思う。でも……分らないなら……その方がいいと思う。きつと、私、我慢できないと思うから……」

「そう……」

俯いたままポツリポツリと会話する香織。やがて、起き上がると真つ赤になった目をゴシゴシと拭いながら顔を上げ、同じく目が真つ赤になった雫を見つめる。そして、決然と宣言した。

「雫ちゃん、私、信じないよ。日色君も南雲ちゃんも生きてるって信じてる」

「……でも、香織。それは……」

香織の言葉に再び悲痛そうな表情で諭そうとする雫。しかし、香織は両手で雫の両頬を包むと、微笑みながら言葉を紡ぐ。

「わかっている。あそこに落ちて生きていると思う方がおかしいって……でも確認したわけじゃないから、可能性はゼロじゃないから……信じたいの」

「香織……」

「日色君があのまま死ぬなんて思わない、だからもつと強くなって自分の目で確かめなぐちや。雫ちゃんだってそうでしょ？」

「……ええ、日色ならそのまま奈落で生きてそうね」

「うん！きつとそうだよ！」

そう言つて笑う香織に雫は小さく笑う。香織の目には狂気や現実逃避の色は見えない。ただ純粋に己が納得するまで諦めないという意志が宿っている。

「だから、一緒に探そう？ 日色君を。可能性がゼロじゃないなら確かめる価値はあると思つから」

そう言つて雫へと手を伸ばす香織に雫は考える。普通に考えれば、香織の言っている可能性などゼロパーセントであると切つて捨てていい話だ。あの奈落に落ちて生存を信じるなど現実逃避と断じられるのが普通だ。

おそらく、幼馴染である光輝や龍太郎も含めてほとんどの人間が香織の考えを正そうとするだろう。

だけど、それでも大切な人を諦める理由にはならない。

自分も香織も、惚れてしまった人への想いはその程度でなくなるほどでは決してないのだから。

だったら、その可能性に賭けてみてもいいのだろうか？

こんな醜い自分を彼は受け入れてくれるのだろうか？

「……日色は、私を許してくれるかしら？」

「うん、きつと許してくれるよ……日色君のことだから『興味ない』で終わるかもしれないけど」



「……ありえそうね」

脳内でちゃんと日色の声で再生されてしまうことに二人は笑ってしまふ。

雫はしようがないわねとため息をついて、香織の手を取った。

「ええ、一緒に日色を探しましょう。私も日色に謝らなければ気が済まないわ」

「雫ちゃん！」

香織は雫に抱きつき「ありがとう！」と何度も礼をいう。「礼なんて不要よ、同じ人を恋した仲でしょ」と、笑う。二人は想いを抱え歩き始める決意を決めた。愛しい彼と再び再開するために。

その時、不意に部屋扉が開けられる。

「雫！ 香織はめざ……め……め……？」

「おう、香織はどう……だ……？？」

光輝と龍太郎だ。香織の様子を見に来たのだろう。訓練着のまま来たようで、あちこち薄汚れている。

あの日から、二人の訓練もより身が入ったものになった。二人も日色とハジメの死に思うところがあつたのだろう。何せ、撤退を渋った挙句返り討ちにあい、あわや殺されるという危機を救ったのは日色達なのだ。もう二度とあんな無様は晒さないと相当気合が入っているようである。

そんな二人だが、現在、部屋の入り口で硬直していた。訝しそうに雫が尋ねる。

「あんた達、どうし……」

「す、すまん！」

「じゃ、邪魔したな！」

雫の疑問に対して喰い気味に言葉を被せ、見てはいけないものを見てしまったという感じで慌てて部屋を出ていく。そんな二人を見て、香織もキョトンとしている。しかし、聡い雫はその原因に気がついた。

現在、香織は雫の膝の上に座り、雫の両頬を両手で包みながら、今にもキスできそうな位置まで顔を近づけているのだ。雫の方も、香織を支えるように、その細い腰と肩に手を置き抱き締めているように見える。

Q、さて問題です。この体勢を第三者から見ればどう見えるでしょうか？

A、百合ですわかります。

雫は深々と溜息を吐くと、未だ事態が飲み込めずキョトンとしている香織を尻目に声を張り上げた。

「さっさと戻ってきなさい！ この大馬鹿者ども！」

こうして少女達は歩みだす、己が恋した一人の少年のために。



「日色? どうしたの?」

「——いや、なんでもない………ところでハジメ、寝ろと言ったのは俺だがどうして寝るのに俺の腕を掴む」

「日色の側じゃないと安心して眠れないから」

「……………そうか」

『ハジメしやんツ!! それはつまり俺に寝るなど言っているんですかあああああああ  
!!?』

そんな恋された少年は現在、美少女ハジメに片腕を抱きしめられていた。

## 文字使い日記⑧

ゞ (@) | (@) ノ月 ( | | ) ∴ z z z Z Z 日

ある日気がつくくと親友が白髪紅眼の美少女になっていた。どうしてこうなった。

あ、どうも、現在進行形で混乱中の日色です。

爪熊に体を切られたと思ったらハジメが白髪紅眼の美少女になっているこの自体、誰だろうとポルナレフ状態になるだろう。

しかも女の象徴でもある胸が大きくなっているのである!!

正直言って泣きそうになった。

大きくなった胸、美しい顔つき、整えられた体つき、これらの要素を手に入れたハジメにはきつと嫁の貰い手が無くなることはないだろう。これでお父さんも安心ですよ

!!  
ただし、抱きついて寝るのはやめてくれませんかねえ!?! いや、確かに!寝ろと言ったのは俺だけど!寝不足気味になって肌荒れを避けるためにハジメを強制的に寝させたのは俺だけどさあ!!胸が気になって仕方がないの!!今度は俺が寝れなくなっちゃうの!!

ブラック企業で徹夜は慣れているけどなッ!! (涙目)

ゞ (@ ( @ ) ) ノ月 ( T ^ T ) 日

数日……というか三日が経過した。

と言つても、迷宮の上階を探しながら魔物の肉を食つて俺が足手纏いにならないようにステータスを上げているだけだったけど。

魔物の肉を食べる事に何故かハジメに反対されたが食料がないなら食べるしかないだろという説得によつてしぶしぶ許可してくれた。……しかし、魔物の肉は猛毒だったはずなのに初めて食べた時あまり痛くなかつたのはどうしてだろう? いやまあ痛いっっちゃ痛いけど耐えられない程ではない。ハジメは最初気絶しかけるほどの激痛だったはずだけどやっぱり神様ボディのお陰だろうか?

現在のステータスはこんな感じ

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 女 レベル 13

天職：錬成士

筋力：330

体力：440

耐久：340



費魔力減少」・魔力筆「＋消費魔力減少」・本製作・高速演算・瞬間記憶・剣術・集中・限界突破・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」・風爪・言語理解

|||||

……うわあ、突っ込みどころがいつぱいだあ……！

うん、一つ一つ確認していこうか。

まずは文字魔法の技能「＋空中文字解放」である。と言っても効果は簡単で文字魔法を直接物に書かなくても空中で書けるようになり、一直線だが高速で飛ばすことができなのだ。……これで遠距離攻撃が出来るようになったのでチマチマ攻撃していくのも一手だろう。

しかし、一体いつこんな技能を手に入れたのだろうか？

次の「＋消費魔力減少」は……読んで字の如くなので端折らせてもらおう、説明がメンドクさ——説明するほどのものじゃないからな。

そして技能「集中」、確か最初はハジメは持っていなかった為ハジメ曰く爪熊から手に入れたらしいが未だに効果が分かっていない、出来れば早く効果を解明したいものだ。

えっと次は「魔力操作」だ、確か自由に体内の魔力を操れる技能だっけ？そう思い試しに纏雷（勿論効果の説明はしない）を使おうとして——

——魔力色が変わっていた。

もう一度言おう、魔力色が変わっていた。

紅緋色の魔力色だったのが「丘村日色」が使っていた青白い色に……うーん、何色と言ったらいんだろう？ 青色？ 藍色？ 紺色？ 碧色？……まあ蒼色という事にしておう、ほら紅色の反対つて蒼色のような気がするじゃん？

だったら髪色も白髪になってんの!?!と想ったがそんな事はじえんじえん無かった。よかつたこれで厨二病なんて言われる事はなくなる……ハジメの厨二つぽさは更に上昇したが。

ついでに言えば俺の愛用している片刃の剣——もとい直刀は爪熊に斬られた時受け止めようとしてついで感覚で切断されていたのだが気がつくともハジメに修復されていた。

いつのまに!!と思つたが頼んでもいないのにわざわざ修復してくれたのだ、なんていい奴なんだハジメツ!

そう思つて感謝の言葉を零すととても喜んでいた。

え？ なにこの子？ めっちゃ可愛いんだけど？ 元々の容姿の笑顔も良かったけど今のハジメの笑顔は殺人的だ。不覚にも萌えてしまった。

いやいや、待て待て落ち着け俺。小宇宙は燃やすものだ、萌やすんじゃない。賢者の心を取り戻せ!



そんなわけで作ってもらった直刀は反りのある打刀に姿を変え、銀色の刀身から黒銀の刀身へとフォルムチェンジ。銘はどうするの？と聞かれたのでハジメが試作品として作ってくれたらしいので『試作刀』はどうかと呟くととても哀しそうな瞳で見られた、何故し。

ゞ(@)ー(@)ノ月(――)。○○日

上階へと続く階層が無いことが判明した。

俺からすれば既に知っていることなんだけど最近の出来事が鮮烈過ぎてその原作知識が薄れて消えかけてしまっている。日記に原作情報を書いていたはずなんだけどうやら爪熊の風爪で切り裂かれ消失してしまったようだ。

え？文字魔法で直せるじゃん、だって？出来るならば既にしている。試しに『復』や『直』で直そうとしたのだがどうやら一文字であるため力が足りないのか日記は傷一つなく新品に戻ったが欠損した部分は書いたはずの文字がなく白紙のままになっていたのだ。

原作知識が消えかけている現状に絶望しそうになるが、同時にまあいいかと思う。ハジメが女の子の時点で自分はそこまで原作知識を信用していないし、あまりにも信用し過ぎていると咄嗟の事態に対応できなくなる。

原作知識があったとしても生き残れるほどこの世界は優しくないだろうし。

途中、ハジメとともに錬成と文字魔法で『道がなければ作ればいいじゃない！』作戦を実行しようとしたが上だろうと下だろうと一定範囲を過ぎると錬成が一切反応しなくなってしまった。文字魔法は一応効果を発揮するがせいぜい20センチしか穴を開けることしかできない、しかも自動で修復される自動再生付きだ。

故に地道に探すしかないのだが下へと続く階層は見つかったが上の階層は見つからない。

と言うわけで下の階層に進む事になったのだがいかんせん不気味な雰囲気醸し出しているため恐怖で漏らしそうだ、こんな状況で不敵な笑みを浮かべているハジメが羨ましいです。

しかし、大人である自分は恐怖している事は決してハジメに悟らせてはいけないのだ、こんな時にニートしている表情筋が役に立つなんて思わなかった。

こうして俺たちは新たな階層への一步を踏み出したのだった。

◆……………最初の一步で足を滑らせそうになり必死で耐えようとしたのは秘密だ。

◆ハジメちゃん、マジTUEEEッ!!

奈落に落ちる前のハジメとは別人のように強いんですけど!!だってアレだよ?いき

なりかち合ったバジリスくらしき蜥蜴の金色の瞳が輝いたかと思うと嫌な予感がしたのでハジメを突き飛ばしたらハジメを突き飛ばした俺の左手が石化していった。

ギイヤアああつ、と叫びそうになるが咄嗟に右手から神水の入っている容器を飲むと何とか石化を治すことが出来た。なんとハジメは俺が神水を飲んでいる一瞬の間に倒れながらも空中でドンナーを構え、金色の瞳がいた場所を暗闇の中、一瞬で把握し、正確に射撃したのだ。

その電磁加速された狙撃は見事、バジリスクの頭蓋骨を捉え、そのまま貫通し奥の壁に直撃し、壁をシューと赤熱化させた。

うん、ハジメに逆らうのはやめよう！そう決意するには決定的過ぎる出来事だった。

しかもその後、何故か怒られた。何故だ。

その後もハジメ無双は続いていく、俺がした事はせいぜいアレだよ？

サッカーしようぜ!!お前ボールな!!やボール(刀)を相手のゴール(羽)を散弾銃のように飛ばす梟や六本足の猫)にシューウウーツ!!超エキサイティン!!しかしていない。

やはり魔王の強さは俺とは格が違うのだろうか？

しかし本当に魔物の肉が不味い、食べれば痛みも奔るし。せめて味を何とかしたいものだ、スパイスのような調味料を何処かで手に入れる事は出来ないだろうか？

あ、ちなみに技能は【夜目】【気配感知】【石化耐性】の三つの技能を手に入れました。

若干ガツカリしているハジメが気になったがあまり気にしないほうがいいのだろう。

現在、俺は日記を超精密品である銃弾を錬成で作っているハジメの側で書いている。俺からすれば離れたほうがいいのではと思ったが、ハジメ曰く俺が側にいた方が集中できるらしい。

最初は銃弾を一個作るのに一時間以上もかかったらしいのだが現在は俺と会話しながらでも20分に一個作り出すことができるらしい、ドンナーに刻まれたライフリングが無意味にならないようにサイズを完璧に合わせなければならず、炸薬の圧縮量もミスは許されなければならないのだが俺と行動するようになってから爆発的に技量が上達していったらしい、ハジメはこれも日色が側にいるからかなと呟いていたがそれはあり得ない、絶対にハジメの才能だろう。

しかし、その言葉にハジメは三割悲しく七割嬉しいような複雑な表情を浮かべていたのはどうしてだろう？錬成が失敗したのだろうか？

ゞ(@)ー(@)ノ月(\*。▽。\*)日

技能【気配感知】のお陰で比較的早く階下の階段を見つけることが出来た。

躊躇いもなく踏み込んで降りていくと今度の階層は地面が何処もかしこもコォールツタールツツ!!!のように粘つく泥沼のような場所だった。足を取られたりするので凄まじく動きにくい。と、言うわけで迫り出した岩を足場に【天歩】で進んでいくとふ

と【鉱物鑑定】を行なったハジメが引き攣った笑みとともに「……嘘」と声を零した。どうやらこの辺りはフラム鉱石で出来ているらしい、惜しい最初と真ん中を入れ替えれば新しい人類だったのに。

そう思いながら文字魔法『覗』を用いて鑑定することにした。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

フラム鉱石

艶のある黒い鉱石。熱を加えると融解しタール状になる。融解温度は摂氏50度程でタール状の時に摂氏100度で発火する。その熱は摂氏3000度に達する。燃焼時間はタール量による

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

……ガソリンかよ。

浮かび上がるツツコミはそれだけだった。

というか、確か魔王はこれを集めて焼夷弾の様に使い、辺りを火の海に……いや、これ以上は考えない様にしよう。

とはいえ、これは困った。こんな所でハジメの最強武器であるドンナーが使えなくなるとは、もし鑑定する前にハジメが発砲していたら辺り一面がリアル火の海になっていた所だった。

せめて階層の入り口付近に『火気厳禁』の看板でも置いてつてくれ、いや無理だろうけど。

とはいえ原作と違いハジメのドンナーは男のロマンである銃剣だ。

ハジメも戦えると戦意をメラメラと燃やしていた、がハジメに出番は取らせないこんな所じゃないと足手纏いの俺が役に立てないのだ。さあ、今こそ八重樫さんにもつちり仕込まれた剣術を見せてやらあ!!

◆ と、思っていた時期がありました。

しばらく進んで三叉路に出た為、近くの壁に印を付け、ク○ピカ理論で左から進めようと探索しようと足を踏み出した途端、嫌な予感が背筋を走った。

咄嗟に予感に従いハジメを横に突き飛ばすとさつきまでハジメの頭部があつた場所へとサメの様な魔物がタールのの中から巨大な顎門を開いて飛び出してきたのだ。【気配感知】に一切反応せずに。

俺も身を屈めてサメの突撃を避け、反撃しようとするが既にタールの中に沈み見えなくなつてしまっている。

【気配感知】に一切反応しない事に【気配遮断】の技能でも持っているのだろうかと思いつながら止まつてはいられるかと【空力】で空中に移動した。

どうやらハジメも空中に退避したらしい、再びサメが飛び出してきた為ハジメは宙返りを行い逆さまになった視界の中で正確に発砲、しかし銃弾はまるでゴムに当たったかのように、一瞬、サメの肌を凹ませるも直ぐにはじき返された、どうやらサメの表皮は衝撃を緩和させる性質があるらしい。

サメは 通り過ぎタールに飛び込んだ勢いそのままに、サメが驚異的な身のこなしで反転し、再度、宙返りから着地した瞬間のハジメを狙って飛びかかってきたので俺が横から蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされたサメはタールの中に再び泳いで身を隠してしまった。

これがこのサメの厄介なところだ、「気配感知」が一切反応しない中悠々と泳ぎ死角から襲い掛かってくる。

せめてタールが固まっていればなあ、と思い、無意識に人差し指で『固』を書き、文字魔法としてタールへと射出した。

そしてタールに触れた瞬間――

――触れた部分を中心に半径約10メートルの範囲のタールが元のフラム鉱石へと変化する。

文字魔法『固』の効果でタール状になったフラム鉱石が固められ、元の艶のある黒い

鉱石に戻ったんだろうか？その10メートルの範囲にサメもいたのか鉱石に全身を固められ身動きが取れなくなってしまっている。

その光景を見て、俺は小さく思う。

.....別に剣術なんていらなかったんや、と。

その後、サメに【風爪】でとどめを刺した後、文字魔法で『冷』と『固』をテーブルを片っ端から固めていき迷宮探索を行い、下への階層を見つけることが出来た。サメで手に入れた技能はやはり【気配遮断】だった。余談だがフラム鉱石をたらふく回収したハジメの笑顔はとても眩しかったと書いておく。

ゞ (@ ( ( ( @ ) ) ) ノ月 ( T . T ) 日

迷宮全体が薄い毒霧で覆われた階層で毒の痰を吐き出してきた二メートル台の虹色のカエルと麻痺の鱗粉を撒き散らす董色のモ〇ラに遭遇した。

取り敢えず麻痺の鱗粉がうざかったので『風』で鱗粉を吹き飛ばし、モ〇ラの首を切断した。カエルの相手をしているハジメが毒の痰を食らった時、つい『爆』の文字をカエルに飛ばしたのは仕方がない事だろう。頭だけ『見せられないよ！』状態になったが不可抗力だ。

ハジメがかかった毒は神水のストックの為に『清』で治す事にした。

.....あ、カエルの肉は割と美味しかったです。後は調味料とご飯とビールがあったら



完璧だったのに。……この世界の物で調味料……作ってみてもいいだろうか？

ゞ (@ ( @ ) | ( @ ) ) ノ月 ( \* \* ) ▽ ( \* \* )

地下迷宮のはずなのに密林の様な階層に出た。物凄く蒸し暑く鬱蒼としていて熱帯地方とでも言う様な場所だった。へばりついてくる汗に鬱陶しさを感じていると森から巨大ムカデが落ちてきた。

もう一度言おう、巨大ムカデが落ちてきた。

しかも駄目押しとばかりに体の節ごとを分離させて襲いかかってきた。しかもその数は台所に出てくる一匹いたら30匹入ると思えの代名詞であるアイツを彷彿とさせる。

よろしいならば戦争だ。

ヒヤッハー！汚物は消毒だあ！！

ゞ (@ ( @ ) | ( @ ) ) ノ月 | φ ( ? | ? ) ) 日

次の階層は前回の階層とは違い今回の階層はうって変わって温暖な森林といった所だった。巨大な大樹を中心に森が広がっている。そこから出てくる魔物がトレントに酷似している樹の魔物である。

樹の魔物の攻撃は木の根を地面に潜らせて突いてきたり、枝を鞭の様に振り回して攻撃したりするのだが、このトレントモドキの最大の特徴は別にある。

このトレントモドキなんとピンチになると頭部にわっさわっさつと実った赤い果実を投げつけてくるのだ。その実に当たっても攻撃力はない為、試しにハジメが食べてみたのだが泣きながらとても美味しかったと言っていた。俺も試しに食べてみるとメチャクチャ美味かった。

甘くそしてとても瑞々しい、例えるならばスイカの様な果物である。

そしてそれを食べてからハジメの眼は完全に狩人の眼になった。

二十何日ぶりかの新鮮な肉以外の食い物にドンナーを片手にトレントモドキを駆逐する勢いで襲いかかる。俺としても探索の途中、王立図書館で読んだ本に書かれていた香辛料『ラシヨウの実』を文字魔法で『覗』で見つけたので採取する事にした。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ラシヨウの実

温暖な気候で育つる性の植物『ラシヨウ』から手に入れることができる緑の果実。収穫した時期と焼く、煮る、蒸す、乾燥のどれかをさせることによつてそれぞれ味と風味が変化し、主に肉類の香辛料として使用される。

様々なバリエーションでありながらどれもが肉の美味しさを何倍にも上げる為、大変人気だが『ラシヨウ』は少しの気温変化ですら耐えられない弱い植物な為、中々量産することができず滅多に手に入れることができない高級品となっている。

|||||  
 どうやらこのラシヨウの実は地球では胡椒の役割を持つ様だ。

説明に書かれている様に気温の変化に弱い為、温度が変わらない迷宮では育ちやすいということだろうか？いや、解放者達がわざわざ植えた可能性もあるけど。

というわけで俺は大量に生えているラシヨウの実を育ちきつていないものを残して片っ端から採取する事にした。コレで少しは肉が上手くなるだろうか？

手に入れたものは後で落ち着いたハジメに容器でも作ってもらおう事にしよう。一体どんな味になるのだろうか？考えるだけで頬が緩んでしまう。

数日後若干恥ずかしがりながらも大量の赤い実を背負ったハジメと合流したが大変可愛かったと記述しておこう。

(?・▽?) 月(。▽。) 日

やはりラシヨウの実を採取したのは正解だった。

今まで不味かった肉が何倍にも美味しく感じられる、しかも味のバリエーションが豊富な為飽きることがない。しかもデザートで食べる赤い実はまた格別だった。

赤い実はもうすぐ無くなるがラシヨウの実は大量に採取し、かつ焼いたもの、煮たもの、蒸したものの、乾燥したもの、e t c ……をハジメ製の容器に分けて入れている為今のところ尽きる心配は無い。

ハジメも味が上手くなったので喜んでいた。

(?▽?) 月? (／▽／) ?日

次の階層では広い洞窟らしい場所で糸で巨大な巣を巡らせている紅蜘蛛もといシユピーネさんと遭遇した。

壁や岩などを切り裂く程の硬度を持った糸を持つていたのだが取り敢えず『斬』で糸を切断し、地に堕ちたところをハジメにトドメを刺してもらった。

今まで一番簡単な敵だった……ということは言わないでおく事にしよう。

というか、もう次で50階になるのだがこの迷宮、深すぎないか?よく原作の主人公は攻略できたなあ。



日色は書いていた日記をパタンと閉じると文字魔法で『封』の文字を書き、開かれな  
い様にし、立ち上がる。

時間の感覚は無いようなものだが現在の階層、50階層目に行くまで約20日後半程  
経過していた。しかしいくら進んでも未だ終わりが見える気配はなく現在の日色達の  
ステータスはこうである。

南雲ハジメ 17歳 女 レベル41

天職：錬成士

筋力：960

体力：1060

耐久：930

敏捷：1120

魔力：870

魔耐：870

技能：錬成「＋高速錬成」「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」「＋複製錬成」「＋効率性上昇」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」・風爪・集中・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・言語理解

神代日色 17歳 男 レベル40

天職：筆写士 文字使い

筋力：970

体力：1040

耐久：940

敏捷：1140

魔力：1030

魔耐：860

技能：文字魔法「＋一文字開放」  
 「＋空中文字解放」  
 「＋紙作成」  
 「＋作業効率上昇」  
 「＋消費魔力減少」  
 「＋魔力筆」  
 「＋消費魔力減少」  
 「＋空中書き」  
 「＋本製作」  
 「＋高速演算」  
 「＋演算速度上昇」  
 「＋瞬間記憶」  
 「＋剣術」  
 「＋集中」  
 「＋限界突破」  
 「＋魔力操作」  
 「＋胃酸強化」  
 「＋纏雷」  
 「＋天歩」  
 「＋空力」  
 「＋縮地」  
 「＋豪脚」  
 「＋風爪」  
 「＋念糸」  
 「＋夜目」  
 「＋遠見」  
 「＋気配感知」  
 「＋魔力感知」  
 「＋気配遮断」  
 「＋毒耐性」  
 「＋麻痺耐性」  
 「＋石化耐性」  
 「＋言語理解」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

巨大ムカデが出てきてからハジメは高速リロードや銃技、蹴り技などを徹底的に鍛える様になった。どうやら巨大ムカデとの戦闘で片手でも高速でリロードする方法と弾が無くなった時の攻撃手段を出来るだけ増やしたかったらしい。ちなみに蹴り技を教えているのは日色である。

日色は50階層で作った簡易拠点を移動し、外で銃技の再確認を行なっているハジメ

へと声をかける。

「ハジメ、準備は出来たか？」

「——うん、私は大丈夫。日色は？」

「出来てるよ」

一通り満足したのか慣れた手つきでドンナーをホルスターにしまい、日色へと振り向きコクリと頷くハジメに日色は返答した。

現在、日色達は50階層で足踏みしていた。と言っても下への階段は既に見つけていたのだがこの50階層には何やら異質な場所が存在していたのだ。

それは、なんとも不気味な空間だった。

脇道の突き当たりにある開けた場所には高さ3メートルの装飾された荘厳な両開きの扉があり、その扉の脇には一对の一つ目巨人の彫刻が半分壁に埋め込まれる様に鎮座していたのだ。

あまりにもこの階層の迷宮と合わない『変化』、故にハジメは日色に一旦引くことを願ひ日色はそれに了承したのだ。

ハジメは期待と嫌な予感を、日色は希望と絶望を同時に感じていた。いや、まあ日色のは原作知識で知っているからなのだが。

「まさにパンドラの箱……か」

「——？ 日色、さつき何か言った？」

「いや、何でもなし」

日色は誰にも聞こえないような声でそう呟くのだった。



扉の部屋にやってきた日色とハジメは油断なく歩みを進める。特に何事もなく扉の前にまでやって来た。近くで見れば益々、見事な装飾が施されているとわかる。そして、中央に二つの窪みのある魔法陣が描かれているのがわかった。

「？ 何、この式……見たことない。日色はわかる？」

「——いや、わからん。おそらく三百年前の相当の古い魔法陣だろうな、ここまで意味の分からない魔法陣は教室で見た魔法陣以来だ」

日色はもちろんハジメは無能と呼ばれていた頃、自らの能力の低さを補うために座学に力を入れていた。日色にわかりやすく王国で習う魔法に関する知識を学び終えているがそれでも、魔法陣の式を全く読み取れないというのは些いささかおかしい。ましてやたった三日で新しい魔法を生み出した日色ですらわからないのだ。

トラップを警戒して調べているのだが、どうやら今の日色達程度の知識では解読できるものではなさそうだ。

「じゃあ、いつも通り練成するから」



「ああ、だが気をつけろよ」

ハジメは日色の警告に頷きながら壁へと手を触れる。一応、扉に手をかけて押したり引いたりしたがビクともしない。なので、いつもの如く錬成で強制的に道を作る。ハジメは右手を扉に触れさせ錬成を開始した。

しかし、その途端、

バチイイ!

「——ッ!?!」

扉から赤い放電が走りハジメの手を弾き飛ばした。ハジメの手からは煙が吹き上がっている。悪態を吐きながら神水を飲み回復するハジメ。直後に異変が起きた。

——オオオオオオオオ!!

突然、野太い雄叫びが部屋全体に響き渡ったのだ。

「ハジメ!」

「分かってる!」

日色の声に応じて既に扉から離れた日色に続いてバックステップで扉から距離を離し、腰を落として手をホルスターのすぐ横に触れさせいつでも抜き撃ち出来るようにスタンバイする。

雄叫びが響く中、遂に声の正体が動き出した。

「まあ、ベタといえればベタね」

「無かったほうが嬉しかったがな」

苦笑するハジメに無表情で返答する日色の前で扉の両側に彫られていた二体の一つ目巨人が周囲の壁をバラバラと砕きつつ現れた。いつの間にか壁と同化していた灰色の肌は暗緑色に変色している。

一つ目巨人の容貌はまるつきりファンタジー常連のサイクロプスだ。手にはどこから出したのか四メートルはありそうな大剣を持っている。未だ埋まっている半身を強引に抜き出し無粋な侵入者を排除しようとハジメの方に視線を向けた。

その瞬間、

ドパンツ！

凄まじい発砲音と共に電磁加速されたタウル鉱石の弾丸が右のサイクロプスのたった一つの目に突き刺さり、そのまま脳をグチャグチャにかき混ぜた挙句、後頭部を爆ぜさせて貫通し、後ろの壁を粉碎した。

左のサイクロプスがキョトンとした様子で隣のサイクロプスを見る。撃たれたサイクロプスはビクンビクンと痙攣したあと、前のめりに倒れ伏した。巨体が倒れた衝撃が部屋全体を揺るがし、埃がもうもうと舞う。

「そんなのわざわざ待ってあげるわけ無いでしょ」

いろんな意味で酷い攻撃だった。ハジメの見敵必殺の方針は間違つてなどいないがやられたサイクロプス（右）があまりにも不憫である。皆さん、哀れなサイクロプス（右）に合掌。

おそらく、この扉を守るガーディアンとして封印か何かされていたのだろう。こんな奈落の底の更に底のような場所に訪れる者など皆無と言つていいはずだ。

ようやく来た役目を果たすとき。もしかしたら彼（？）の胸中は歓喜で満たされていたのかもしれない。満を持しての登場だったのに相手を見るまでもなく大事な一つ目ごと頭を吹き飛ばされる。これを哀れと言わずしてなんと言うのか。

サイクロプス（左）が戦慄の表情を浮かべハジメに視線を転じる。その目は「コイツなんてことしやがる！」と言っているような気がしないこともない。

「よそ見していいの?」

ハジメは、動かずサイクロプス（左）を睥睨しながらそう呟くとその言葉の意味が伝わったのか「え?」というような疑問の視線をハジメに向けるが――

瞬間。

——我流剣術【天閃】

サイクロプス（左）の首が背後から現れた日色に一瞬にして切断された。

なんて事はない、ハジメがサイクロプス（右）へ発砲した瞬間に、日色が文字魔法を

使つて背後に移動していたのだ。

### 文字魔法『隠』

技能【気配遮断】と共に併用した文字魔法『隠』の隠蔽能力はそう簡単に見破られるものではない。

【縮地】を用いて高速移動を行い、サイクロプス（左）の首へと接近し、【空力】によつて足場を生み出したところで刀を抜刀、かつての片刃の剣とは違い鞘走りが行えるため、その速度は現在のステータスと合わせて視認不可能の斬撃と化す。

哀れサイクロプス（左）、君もろくに出番もないまま終わってしまった。彼らの勇姿に皆さんもう一度合掌を。

ドサリとさつきと同じように衝撃が部屋全体を揺るがす中、日色は刀を収めながら、着地し、此方へと向かつてきたハジメの方向を向いて小さく微笑んだ。

「さてと、どうする？先、部屋を見ておくか？」

「うん、私もそれに賛成」

日色に返すようにハジメも笑うと【風爪】を用いたドンナーでサイクロプスを切り裂き体内から魔石を取り出し、片方を日色へと渡した。

血濡れを気にすることはなく二人は二つの拳大の魔石を扉まで持つて行き、それを窪みに合わせてみる。

ピッタリとはまり込んだ。

瞬間、魔石から赤黒い魔力光が迸り魔法陣に魔力が注ぎ込まれていく。そして、パキヤンという何かが割れるような音が響き、光が収まった。同時に部屋全体に魔力が行き渡っているのか周囲の壁が発光し、日色達が久しく見なかつた程の明かりに満たされる。

日色はハジメと顔を合わせたあと、小さく頷き警戒しながら、そつと扉を開いた。

扉の奥は光一つなく真つ暗闇で、大きな空間が広がっているようだ。日色とハジメは【夜目】を用いると徐々に辺りの全貌がわかつてきた。

中は、聖教教会の大神殿で見た大理石のように艶やかな石造りで出来ており、幾本もの太い柱が規則正しく奥へ向かつて二列に並んでいた。そして部屋の中央付近に巨大な立方体の石が置かれており、部屋に差し込んだ光に反射して、つるりとした光沢を放っている。

「——っ。ハジメ、見ろ」

「——え？」

一瞬動揺した日色が指さした巨大な立方体を見ると何か光るものが立方体の前面の中央辺りから生えているのに気がついた。

ハジメは近くで確認しようと扉を大きく開け固定しようとする。いざと言う時、ホ

ラー映画のように、入った途端ボタンと閉められたら困るからだ。ちなみに青○とかがその例だ。

しかし、ハジメが扉を開けつ放しで固定する前に、それは動いた。

「……だれ？」

「——ッ!!？」

まるでしばらく声を出していなかったかのようにかすれた、弱々しい女の子の声だ。

日色とハジメは咄嗟に己の武器へと手を触れた。武器に触れた手を離さないまま部屋の中央を凝視すると先程の『生えている何か』がユラユラと動き出した。差し込んだ光がその正体を暴く。

「——」

「嘘。人……なの？」

『生えていた何か』は人だった。

上半身から下と両手を立方体の中に埋めたまま顔だけが出ており、長い金髪が某ホラー映画の女幽霊のように垂れ下がっていた。そして、その髪の隙間から低高度の月を思わせるハジメとはまた違う紅眼の瞳が覗いている。年の頃は十二、三歳くらいだろう。随分やつれているし垂れ下がった髪でわかりづらいが、それでもビスクドール如き美しい容姿をしていることがよくわかる。

『何故、裸?!?』

流石に予想外だったのか日色は言葉を失い、ハジメは目を細める。金色の髪の少女は日色とハジメをジツと見つめていた。

ある程度冷静さを取り戻した日色は一度ため息を行い、止まった思考を再回転させようとする、隣でハジメは決然とした表情で告げた。

「さようなら」

後にハジメはこう言った、過去に戻れるのならあの部屋を探索しようと思った自分をぶん殴ってやる、と。

何故封印されているヒロインは大半、裸なの？ b y 神代

「さようなら」

ハジメは決然とそう告げると右腕で日色の腕を掴んで引き寄せ、手を離し次にそっと扉を閉めようとする。それを見た金髪紅眼の少女が慌てた様に引き止める。

もつとも、その声はもう何年も出していなかった様に掠れて眩きの様に聞こえるが、必死さは伝わった。その声は勇者（笑）ならば確実に全速力で助けに行くだろう、というか言わなくても助けに行くと思う。

「ま、待つて！……お願い！……助けて……」

「嫌」

そう言って変わらず扉を閉めようとするハジメ。ハジメさん、鬼ですか。

「ど、どうして……何でもする……だから……」

「……………」

首から下は動かないが必死に顔を上げ懇願する少女にハジメは反応を示さず、無言で扉を閉めていく。



「……ハジメ、助けようとしなくていいのか?」

躊躇いもなく扉を閉めようとしているハジメに日色は少し顔を痙攣らせながら呟くとハジメは金髪紅眼の少女を見ることすら億劫であるかの様に顔を少し苦めながら言い返した。

「あのね、日色。こんな奈落の底の更に底で明らかに封印されてる奴なんてロクな奴じゃ無いに決まってるでしょ、見たところ封印だけみたいだし……脱出に役立ちそうなものも無い。関わるだけ時間の無駄。それに……」

「それに、なんだ?」

「……いい、なんでもない」

途中、言葉が詰まったハジメに日色は聞き返すがハジメは首を振って誤魔化した。……頬が若干赤みを増しているのはどうしてだろうか?

まあいいかと日色はふと思っただ疑問を忘れることにし、考える。

ハジメの言っていることは間違いなく正論だった。

普通、囚われた女の子の助けを求める声を、というか原作ではメインヒロインである少女をここまで躊躇いもなく切り捨てられることには目を剥いたがまあ、この奈落ならば仕方

がないだろうと思う。

日色は原作知識をまだ完全には忘れておらず、大体の流れは技能【瞬間記憶】で今はもう無い原作知識を書いた紙を読み直している。

この金髪紅眼の少女を助けても大丈夫だということを日色は知っている。

——が、だからといって助けることはまた別だ。

そもそも創作物に書かれた紙の情報をどうやって信じれる？

創作物の世界に行ったんだからその紙の情報を信じれるのは当たり前だ、などと思っている人にこう投げかけたい。

ならば、その薄っぺらい紙に記された情報に命を掛けられるのか？、と

創作物の世界？——どうやってここがその世界だとわかる？神様だとかそんな超常的存在が言ったとしてもそれが本当か嘘か分からないというのに。

日色の中の人が昔、ありえない程香織や雫、ハジメを想像以上に恐怖しているのは正にそれが理由だ。

常に『もしも』の可能性を探り、調べ、予想し、対策しなければならぬからだ。

だからこそ神代日色は考える。

ここで金髪紅眼の少女を助けるか否かを。

メリットは勿論ある、原作知識通りなら戦力となるだろう。

だが、デメリットの方が格段に多いのだ。裏切られる可能性、原作知識が訴える将来の危険性。

(……………どうする?)

やっぱり見捨てた方がいいのか?と日色が思っているとすげなく断られた女の子がもう泣きそうな表情で必死に声を張り上げる。

「ちがう!ケホッケホッ……………私悪くない……………待つて!私……………」

訴える女の子の言葉を知らんとばかりにハジメは扉を閉めていき、もう僅かで完全に閉じるという時、最後の気力を振り絞ったのか女の子の叫びが聞こえてきた。

「裏切られただけ!」

「……………ッ」

その瞬間、もう僅かしか開いておらず今にも閉じられようとしている扉が一瞬止まった。

それは一瞬、されど一瞬。ハジメが一瞬心が動かされたことの証明だった。

別にハジメは封印されている女の子に同情しているわけではない。

奈落に落とされた時、結果的に日色も落ちることとなったので顔も知らない犯人をいつか殺してやるとは思ってはいるが、自分が落とされた事には全く恨んでないなかった。

そんなハジメがほんの僅かだが一瞬心を動かされたのは一瞬だけ浮かび上がった嫉妬だ。

顔も名前も知らない者に、誰かに助けを求めることが出来るこの女の子に対する嫉妬。最早過去を思い出す行為に痛みが奔る程傷つけられ、助けを求めることも出来ず壊れてしまった自分とは違う事実。

とは言っても、それによりハジメは日色に出会うことが出来たので後悔は全く無いが。

ハジメはそのまま扉を閉め切ろうとして――

「――待て、ハジメ」

――その手を日色に掴まれた。

その行動に疑問符を浮かべたハジメは日色へと振り向いた。

「……どうしたの、日色？」

「扉を開けるぞ、あいつと話をする」

変化のない声色で告げられた日色の言葉にハジメは目を剥き、驚愕した。

「な、何言ってるの?そもそも話って何を——」あいつは裏切られたと言っていた。つまり元々はここに封印されてなかったということだろう?だとすればここから出る方法を知っている可能性がある——つ、それは」

日色の言葉に苦虫を潰した様な表情を取るハジメ。

その通りだ、あの少女の言い分は元々封印されていなかった証明になり、ここに封印された経緯を聞けば脱出の手がかりを見つけることは可能かもしれない。

だが、それとは別の理由でハジメは了承することが出来なかった。だって——  
そうハジメが思った瞬間。

「——え?」

ポンツと日色がハジメの頭に手を置いて優しく撫でた。

呆然とするハジメに日色は小さく微笑し、優しい声で言う。

「守って、くれるんだろう?」

「……………わかった」

その言葉にハジメは俯いて小さく了承の言葉を呟いた。

(……………ずるい)

扉を開け、女の子がいる封印の部屋へと歩んでいく日色を顔を俯かせて追いかけてながら思う。

あんな優しい声であんなカッコいい微笑みで言われて、断ることなんてハジメには出来なかった。顔を俯けた自分の判断に称賛を送りたい。

今の自分の表情を見られたらきつと冷静ではいられないだろうから。

日色を追いかけるハジメの耳はこれでもかという程、真つ赤に染まっていた。

(全く…：我ながら何やってるんだか…)

そんなハジメを置いておいて日色は己に呆れながら扉を全開にし、女の子に隙を見せず、歩み寄る。勿論油断はしない。

元々、日色は金髪紅眼の女の子を助けようと思っていなかった、何故ならさつき言っていたようにデメリットの方が多く、この世界が原作通りならばラスボスに目をつけられる可能性が更に増大するからだ。

だが、彼女の気力の振り絞った叫びに日色は心を動かされ一つの思いが湧き上がったのだ。

その、思いは――

『大人が子供を助けなくてどうするんじやいッ!!』

いや、あの女の子はお前より年上だよ。

どうやら彼の中では封印されていた期間は年齢に入っていないらしい。

「おい、お前。ここから出たいか？出たいのなら応えろ」

日色が戻ってきた事に半ば呆然としている女の子、その女の子を一手一足を見逃さないように日色の背後でハジメが銃に手を触れている。

ジツと、豊かだが薄汚れた金髪の間から覗く紅眼で日色を見つめる。

何も答えない女の子に苛ついたのか「……聞いていないなら帰るぞ」と苛立ちを込めた声色で言い、踵を返そうとする。

それに、ハツと我を取り戻した女の子は慌てて頷いた。

「そうか。今からお前に質問することに答えろ。嘘をついたらお前を殺してさっさとここから出て行く。理解したか？」

「……………(コクリ)」

日色の言葉に再度頷く女の子。よしと頷いた日色は質問を投げかけて行く。

「お前は裏切られたと言ったがそれはお前が封印された理由になっていない。裏切られたことが仮に本当だとすると、何故お前をここに封印した？」

「私が、先祖返りの吸血鬼……だから。……すごい力持つてる……だから国の皆の為に頑張った。でも……ある日……家臣の皆……お前はもう必要ないって……おじ様……これからは自分が王だって……私……それでもよかった……でも、私、すごい力あるから危険だって……殺せないから……封印するって……それで、ここに……」

枯れ果てた喉で必死にポツリポツリと語る女の子。話を聞きながら日色は眉を顰め、

考える。原作の知識と照合し、矛盾や違うところがないか考えているのだ。

しかし、知っていたものの何とも波乱万丈な境遇だろうか、湧き上がってくる複雑な気持ちを押し殺しながら淡々と質問を続ける。というか、全裸だということは封印される前に身ぐるみ全て剥がされたということに……いや、やめよう。

「お前はどこかの王族だったのか？」

「……（コクコク）」

「殺せないとはどういうことだ？」

「固有魔法……【自動再生】……怪我しても勝手に治る、首を切り落としてもそのうち治る」

「なッ!!？」

「おい……ハジメ……」

「……、ごめん」

女の子の固有魔法の効果について声を出してしまったハジメに日色が非難の視線を向ける、ハジメは慌てて口を塞ぎながら小さく謝った。しかし、これで女の子にハジメがいることがバレてしまった。まあ、別に構わないが。

「……話を戻すぞ。お前のすごい力はそれか？」

「これだけ……魔力、直接操れる……陣……いらぬ」

それを聞いてハジメは「なるほど」と納得した。



ハジメや日色も魔物を食ってから、「魔力操作」が使えるようになった。身体強化に関しては詠唱も魔法陣も必要ない、他の錬成などに関しては詠唱も不要だ。

ただ、ハジメの場合、魔法適性がゼロなので魔力を直接操れても巨大な魔法陣は当然必要であり、日色に関してはそもそも「文字魔法」があるので無問題モイマンタイである。

だがこの女の子のように魔法適性があれば反則的に力が発揮する。なぜなら周りがチンタラ詠唱やら魔法陣やら準備している間にバカスカ魔法を撃てるのだから。例えるならば火縄銃で戦闘機に立ち向かうようなものだろうか？

しかも不死身、絶対的なものではないだろうが勇者ですら凌駕しそうなチートである。

「……次の質問だ、お前はここから出る方法を知っているか？地上への脱出の道のりを」  
「……わからない。でも……この迷宮は反逆者の一人が作ったと言われている」

「反逆者？」  
聞きなれない単語に何とも不穏な響きにハジメが聞き返した。

「反逆者……神代しんだいに神に挑んだ神の眷属のこと。……世界を滅ぼそうとしたと云われている」

女の子曰く、神代に、神に反逆し世界を滅ぼそうと画策した7人の眷属がいたそうだが、しかし、その目論見は破られ、彼等は世界の果てに逃走した。その果てというのが現在

の七大迷宮と言われているらしい。

この【オルクス大迷宮】もその一つで、奈落の最深部には反逆者の住まう場所があるらしい。

「……だから、そこに行けば地上の道があるかも……」

「なるほど……な」

神代の魔法使いがえつちらおつちらとこの迷宮を登つてくるとは思えない、神代の魔法使いならば転移系の魔法で移動しているはずだ。——女の子の話が本当ならば、だが。

「……助けて……」

日色が一人思索に耽り一人で納得しているのをジツと眺めながら、ポツリと女の子が懇願する。

日色はハア、とため息をつき——踵を返した。

「ま、待って！……いかないでッ！……なんでもするから……ッ！」

日色が自分を助けてくれない、そう理解した女の子は必死に呼びかける。

その悲痛な叫びに日色は立ち止まり、体は向けず顔のみ振り向いて、こう言った。

「——さっさと出ろ、金ロリ」

その言葉に、女の子がえっ?と疑問の言葉を零した瞬間――

――女の子を縛っていた立方体がどろっと液体のように融解し、地面に落ちた。

女の子が長い期間一切身動きが取れなかった封印が、いとも簡単に。

――文字魔法『解』

どれだけ強い封印だろうと日色には関係ない、封印は『解』けばいいのだから。

体の全てを解き放たれた女の子は地面にぺたりとそのまま女の子座りで座り込んだ。どうやら立ち上がる力すらないらしい。一糸纏わぬ女の子の裸体は痩せ衰えていたが、それでもどこか神秘性を感じさせるほど美しかった。

日色はお気に入りの赤い外套を脱ぎ、女の子に被せようとする。流石に全裸のままでは自分としても困るからだ。

が、その手を女の子がギュツと握った。弱々しく力のない手だ、その証拠にフルフルと震えている。日色が疑問に思い少女の様子を見ると女の子が真っ直ぐに日色を見つめている。顔は無表情だがその奥にあるハジメとはまた違う紅眼には彼女の気持ち溢れんばかりに宿っていた。

そして、小さく震えながら、しかしはつきりとした声で女の子は告げた。

「……………ありがとう」

「……約束を守っただけだ」

繋がった手は握られたままだ。一体どれだけの月日を彼女は過ごしたのだろうか？彼女の表情は会話している間も動いていない、それはつまりそれらを忘れるほど長い間封印されていたことの証明だった。大切な人に裏切られて。もしかしたら固有魔法「自動再生」の所為で発狂すら出来なかつたのかもしれない。

「……名前、何？」

ブカブカな外套をよそよそと微笑ましく着替えながら囁くような声で少女が日色に訪ねてきた。

「日色だ、神代日色。後ろにいるのが南雲ハジメ。お前は？」

日色は後ろにいるハジメへと振り向き、指を指すとハジメはふんっ！と何やら不貞腐れていた。……なにか機嫌の悪いことでもあったのだろうか？

女の子は「日色、日色」と、大事なものを心に刻みつけるように繰り返して名前を聞かれると思いついたように日色にお願いした。

「……日色……名前、付けて」

「は？つ付けるだと、忘れたのか？」

日色の返答に少女はフルフルと首を振る。

「もう、前の名前は要らない。……日色が名前を付けて」

「とは言ってもな、ハジメ!何か——「日色が付けて」

元々あまりネーミングセンスがないことを理解している日色だ。ハジメに任せようかと思っただが残念ながら拒否されてしまった。

日色はハジメの助けを諦め、安易に決めることにした。

「ふむ、金ロ——「却下」——チツ」

即刻で却下された。因みに日色がつけようとした名前は『金ロリ』である。いや、もうそれ名前というよりか渾名では?

仕方ないな、と日色は頭を掻きながら新たな名前をつぶやいた。

『ユエ』——俺の故郷で『月』を表す言葉だ。これでいいか?」

「ユエ?.....ユエ.....ユエ.....」

「ああ、お前のその髪、金髪だからな。月に似ているだろう?」

そう言う日色の言葉に女の子がパチパチと瞬きする。相変わらずのようだが瞳だけは輝いているように見えた。.....まあ、日色からすればロクな名前が浮かばなかったのが原作に逃げただけだが。

「.....んっ。今日からユエ。ありがとう」

「そうか。よかったな、金ロリ」

.....??

日色の言葉にキョトンとなる女の子、もといユエ。

「……………今、ユエって」

「確かにユエと名付けたな。だが呼ぶとは言っていない」

屁理屈だった、とてもしようもない屁理屈だった。どうしてこの男は空気を読もうとしないのだろうか。

「……………う、うう〜！」

「おい。何故腹を叩く」

ユエは無表情ながら少し怒りが混じったような表情でポカポカと日色の腹を殴る。力が無いため痛くも痒くもなく、殴る速度もかなり遅い。日色は何故叩くのか不思議だとも言うように言葉をこぼす。

その光景を見ながらハジメは若干ユエに殺意を抱き、ドパンツ！しようかと思い——  
——常時使用していた【気配感知】が反応を示したことに凍りついた。とんでもない気配を感じる魔物が直ぐ傍に存在することに気がついたのだ。

場所はちょうど——日色達の真上！

「日色ツ!!」

「——ツ！」

ハジメが日色を叫んだのと、ソレが天井から降ってきたのはほぼ同時だった。

咄嗟に日色はユエを掴み片腕で抱き上げると全力で「縮地」と文字魔法『速』の併用で離脱する。一瞬で移動した日色が振り返ると、直前までいた場所に地響きを立ててソレが姿を現しながら落ちてきた。

体長5メートル程の胴体に、四本の長い腕に巨大なハサミを持ち、八本の足をわしやわしやと動かしている。そして何よりもその尻尾の先端には鋭い二本の針が付いている。一番わかりやすく例えるとサソリだろうか。

何よりも、地面に触れた途端、地面が生きたように動きサソリの全身を石で覆っている、鎧のようになっていて。

ユエが封印されていた部屋で反応を示さなかったと言うことはユエが封印から解けると放出される魔物だったのだろう。【気配感知】では明らかに強敵と感じる気配がピンピンに伝わってくる。

ふとユエを見れば一心に凪いだ水面のような静かな覚悟を決めた瞳で日色を見ていた。ユエは喋らずともこう言っているのだ。自分の運命を日色に預ける、と。

「全く、めんどくさいことになった」

日色はユエのその瞳を見て苦笑する。そして一瞬でユエを背負いポーチから取り出した神水を無理矢理飲ませる、異物をつつまれたせいかな涙目になっているのは無視である。

しかし神水の効果でユエの衰えきった体に活力が戻ってくる感覚に目を見開き、強く日色の肩を握ったのを感じた。

「死にたくなければ離すなよ、金ロリ。ハジメ、いけるな?」

「当然ッ!」

日色の言葉に微かに紅雷を走らせる銃を構え、待つてましたと言わんばかりにサソリモドキへと殺意の込められた笑みを浮かべるハジメ。日色も試作刀を右手で引き抜き、左手に蒼い魔力を燈らせながら臨戦体勢に入る。

「来いよ、サソリモドキ。邪魔をするなら殺してやる」

『サソリって美味しいんだっけ? 出来ればかつ〇えびせんみたいな味だどつても嬉  
C、ラシヨウと合う事を願い申す(迫真)』

そんな場違いな思考とともに新たな戦闘が始まった。



## 封印の化物の登場（ただし難易度はベリーハードな模様）

「キシヤアアアアアッ!!」

最初に先手を打ったのはサソリモドキだった。

サソリモドキは尻尾の針から紫色の液体を噴射する。紫色の液体は地面につくことなく日色達へとかなりの速度で直進する。

それに応じる様に日色が前に出て、左腕を振るう。

「——文字魔法ワイド・マジックッ」

左腕を振るっただけ——他人にはそう見えた動きだが振るった場所に日本人にしかわからない高速で書かれた『守』の文字が現れ、日色の意思に従い紫色の液体へと高速で直進する。

紫色の液体と『守』の文字が衝突する瞬間、『守』の文字が火花と共に弾け、5メートルほどの蒼色の結界を形成する。

紫色の液体は蒼色の結界に着弾すると共に弾け、地面に落ちると共にジュワーという音を立てて瞬く間に床を溶かしていった。溶解液のようだ。

「ハジメー」

「——分かつてるッ！」

それを横目に確認しながら日色が叫ぶと共に日色の背後でハジメがドンナーを抜き様に発砲する。

もちろん初つ端から最高威力だ。ドパンツ！と秒速三・九キロメートルの弾丸がサソリモドキの頭部に炸裂する。

（——私と……同じ!?!）

それを見た途端、日色の背中越しにユエの驚愕が伝わって来た。見たことのない魔法と見たこともない武器で、攻撃を蒼色の閃光のような何かを防ぎ、紅色の閃光のような何かが攻撃したのだ。それも魔法の気配もなく。日色の人差し指が一瞬蒼色に輝いたがそれも魔法陣や詠唱を使用していない。日色とハジメが自分と『同類』である、つまり魔力を直接操作する術を持っているということに気づいたのだ。

自分と『同じ』、そして、何故かこの奈落にいる。ユエはそんな場合ではないとわかっていながらサソリモドキよりも日色達……何より日色を意識せずにはいられなかった。

一方、日色とハジメは【空力】を用いて移動を繰り返していた。その表情は今までになく険しく、サソリモドキが未だ健在であるどころか微動だにしていなことを【気配感知】で理解しているからだ。

それが事実であるように舞い上がった煙を吹き飛ばし、凄まじい速度で針が撃ち出された。咄嗟に避けようとした日色達だが、針が途中で破裂し散弾のように広範囲を襲う。

「——くう！」

「チイツー！」

日色は襲い掛かる針をユエに当たらないように刀で片っ端から叩き落とし、時に文字魔法で防いでいく。

ハジメも苦しげに唸りながら、ドンナーで撃ち落とし、【豪脚】で払い、【風爪】で叩き切る。

どうにか凌ぎ、お返しとばかりにドンナーを発砲するが、再び地面から纏った石の鎧を粉碎するだけで中の外殻には傷一つなく微動だにせず耐えきられてしまう。

だが——

「一瞬でも動きが止まれば隙だらけになるに決まっているだろう？」

——その弾丸の衝撃に怯んだ隙にユエを抱えた日色がサソリモドキの顎へと接近している。

咄嗟にサソリモドキは四本バサミを繰り出すが最初の一本目を体を沈み込ませることで髪を風圧で風ぐごとしかできず、2本目を振るう前に日色が刀を両手で右下から左

上へと振り上げる。

構えるは脇構えである金の構え、斬るためではなく叩きつけるために日色は既に『打』の文字を書いた刀を振り上げる。

「吹き飛べ」

瞬間、サソリモドキの体を斜め下から超巨大のハンマーが叩いたかのような衝撃がサソリモドキを吹き飛ばす。

甲高い金属音が響き渡り空気が辺りを響き渡らせる——が、刀から伝わる衝撃を腕を伝わって感じながら日色の表情は優れない。

「——硬いな」

吹き飛ばされたサソリモドキは未だ健在——どころか、石の鎧を全て粉碎しただけで外殻には凹み一つない。宙返りして体勢を整えながら綺麗に着地するほどの余裕があるほどだ。

サソリモドキは最優先で日色とその背中に乗っているユエを殺すため更に散弾針と溶解液を放とうとした。

「日色っ、離れて!!」

しかし、日色が背後に退避するとともにその前にコロコロと転がってきた直径八センチ程の手榴弾がカツと爆ぜる。その手榴弾は爆発と同時に中から燃える黒い泥を撒き

散らしサソリモドキへと付着した。

いわゆる「焼夷手榴弾」というやつだ。タールの階層で手に入れたフラム鉱石を利用したもので、撰氏三千度の付着する炎を撒き散らす。ハジメが日色の危機を直感的に感じ、投擲したのだろう。

流石に、これは効いているようでサソリモドキが攻撃を中断して、付着した炎を引き剥がそうと大暴れした。日色はついでとばかりに『油』の文字を書いて、サソリモドキに飛ばすことで炎の勢いを強ませ、更に時間稼ぎを行った。

その隙に、後方に下がった日色にハジメが空中でリロードを片手で言いながら日色の元へと着地した。

「日色、無事!?!」

「——ああ。しかし、あのサソリモドキの外殻が硬すぎるな、撰氏三千度の炎で溶けないのはさすがに物質離れしすぎてないか?」

「だったら、文字魔法での攻撃は?文字魔法ならいくら外殻が硬くてもどうとでもなるんじゃないの?」

そう、どれだけ硬度が高くても文字魔法ならば切断や柔らかくすることは可能だ。それならばサソリモドキなど殺すのは容易い、そうハジメは進言したのだが——

「無理だ」

——日色はそれを容易く否定した。

「見てろ」と呟き、左手で『割』の文字を一瞬で書くと文字を射出する。

日色の名に従い『割』の文字は未だ火だるまとなつているサソリモドキめがけて発射されるが——

——サソリモドキの外殻に触れる前に石の鎧が庇うように遮り、パツカリと二つに両断された。

「あのサソリモドキ、常に地面の石を纏わせて防いでいる。文字魔法が作用するのはあくまで触れた物体だけだから纏わせた石の鎧を壊すことが出来てもその先までは壊すことは不可能だ。しかもさっきの攻撃でわかったがあの鎧、衝撃を受けた途端自ら弾け飛ぶように壊れることで衝撃を和らげているな」

『うーむ、確かサソリモドキにはもうひとつ何か秘密があつたような希ガス』

原理としては外部からの攻撃に対して何らかの反応(Reaction)を起こすことで防御効果を発揮する装甲『爆発反応装甲(Explosive Reactive Armour)』が代名詞であるリアクティブアーマーと同じだ。

サソリモドキのあの石の鎧は固有魔法か触れた途端、炸裂し衝撃を和らげているのだ。

「つまり——」

「——私の鍊成なら衝撃を和らげることもなくドンナーを食らわせれるということね」  
「可能性としては……だがな」

そう日色が眩く頃には「焼夷手榴弾」はタールが燃え尽きたのかほとんど鎮火してしまっていた。しかし、あちこちから煙を吹き上げているサソリモドキにも少しはダメー  
ジがあつたようで強烈な怒りが伝わってくる。

「キシヤアアアアア!!」

「来るぞッ!」

絶叫を上げながらサソリモドキはその八本の足を猛然と動かし、日色達に向かつて突進した。四本の大バサミがいきなり伸長し大砲のように風を唸らせながらそれぞれ日色とハジメに迫る。

ハジメは一本目を「縮地」でかわし、二本目を「豪脚」で蹴りウサギの如き鋭い弧を描くような蹴りで蹴り流し、三本目を日色が刀でいなす事で大バサミを上へと受け流し、四本目を日色は「空力」で大バサミの数センチ上に宙返りして大バサミの上に乗って駆け出す。背中のユエが激しい動きに「うう」と唸っているが、どうにか堪えられているようだ。

その隙にハジメは、そのまま空中を跳躍し、サソリモドキの背中部分に降り立った。  
【鍊成】を使い石の鎧に穴を開けようとするがサソリモドキの固有魔法の抵抗があるせ

いか予想以上に穴が小さくなってしまった。直径30センチ程空いた石の鎧の隙間にドンナーの銃口を黒光りする外殻にゴツツと押し付けるとゼロ距離で連続で発砲した。

ズガンツ!! ズガンツ!! ズガンツ!!

凄まじい炸裂音が連続で響き、サソリモドキの胴体が衝撃で地面に叩きつけられる。

しかし、直撃を受けた外殻は僅かに傷が付いたくらいでダメージらしいダメージは与えられていない。その事実には歯噛みしながら、ハジメはドンナーを振りかぶり【風爪】+電磁ナイフで斬りかかるがガキツという金属同士がぶつかるような音を響かせただけで、やはり外殻を突破することは敵わなかった。

「——このツッ!」

「ハジメッ! 離れてろっ!!」

——我流剣術【天閃】

ハジメの傷をつけた場所に大バサミから登ってきた日色が正確無比の斬撃を叩きつける。

再びサソリモドキの胴体が地面に叩きつけられる。

——が、日色の斬撃は火花を散らしながら少し傷ついたサソリモドキの外殻の深さを数センチ深く切り裂いただけだった。

サソリモドキが「いい加減にしろ!」とでも言うように散弾針を自分の背中目掛けて



放った。

日色とハジメは即行でその場を飛び退き空中で身を捻ると、ハジメは散弾針の付け根目掛けて発砲する。超速の弾丸が狙い違わず尻尾の先端側の付け根部分に当たり尻尾を大きく弾き飛ばすが……尻尾まで硬い外殻に覆われているようでダメージがない。完全に攻撃力不足だ。

空中のハジメを、再度、四本の大バサミが嵐の如く次々と襲う。それを日色がハジメを庇うように前に出て、距離を取ろうとわざと吹き飛ばされるため文字魔法『守』で防ぎ、空中では支えるものがないため吹き飛ばされる。

「——グッ！」

「——ッ、日色ッ！」

ハジメは苦し紛れに「焼夷手榴弾」を吹き飛ばされながらサソリモドキの背中に投げ込んだ。爆発四散したタールが再びサソリモドキを襲うが時間稼ぎにしかないだろう。

どうするべきか、日色達は策を考えながら地面に体勢を整えて着地すると、瞬間今までにないサソリモドキの絶叫が響き渡った。

「キイイイイイイ!!」

「——ッ!?!」

その叫びを聞いて、全身を悪寒が駆け巡り、咄嗟に【縮地】で距離をとろうとする日色達だったが……既に遅かった。

瞬間——地面が落ちた。

正確には、絶叫が空間に響き渡ると同時に、突如、周囲の地面が波打ち、轟音を響かせながらまるで日色達を飲み込む口の如く這い上がってきたのだ。おそらくサソリモドキの固有魔法は広範囲の地形操作なのだろう、操作の規模が少しおかしいが。

「クソッ!」

「最悪ッ!!」

これには完全に意表を突かれた。

日色達は【空力】で空を逃れるが、それを捕らえようとするように、地面から無数の円錐の刺が、巨大な肉食獣の牙の如き5メートル程の巨大な土の牙が、海岸に流れるような土の大波が。

圧倒的物量を持って宙に逃げた日色たちへと襲い掛かる。

「嘘でしょ!?!流石に洒落にならないッ!!」

「クッ、物量が多すぎる!!金ロリ!振り落とされるなよ!!」

「んっ!!」

日色は「縮地」「空力」そして文字魔法『速』を同時使用することでユエを背負ったハ  
ンデのまま加速する。

土の牙を避けるどころかむしろ足場にしながら空中を駆け、円錐の無数の刺を刀で撃  
ち落とし、大波を文字魔法『静』で固有魔法を打ち消しながら空中で360度からの攻  
撃に全て対応する。

だが――

（クソツッ！押し切られるツ！）

――物量差が多すぎるのだ、今はなんとか凌いでいるが限度がある。サソリモドキが  
固有魔法を使用してから30秒ほどしか経ってないがその少しの時間ですら凌ぐこと  
が困難になっているのが現状だ。

（――だが、あのサソリモドキの魔力もかなりの勢いで減っているはずだ。余裕を残す  
なら最高でも60秒程度が限度のはず……限界がないのかもしれないが）

むしろ、これほどの攻撃に10秒も必要ないくらいだろう。これほどの物量による攻  
撃、防御特化の勇者パーティの一人結界師の谷口鈴がいたのならば凌げるかもしれない  
が最悪軍を壊滅することもサソリモドキがやろうとすればできるかもしれない。

日色の推測はあっていたらしく急激に物量が少なくなってきている。

その事実によし、と一瞬思考が逸れた瞬間――

――背後でサソリモドキが此方へとサソリモドキの散弾針の尻尾がピタリと自分に照準されているのが視界の端に見えた。

「――」  
思わず顔を引きつらせる日色。

しかももう片方の溶解液を吐き出す尻尾を別方向で練成を用いながら必死に攻撃を凌いでいるハジメの姿が眼に入った。

「――」  
しかも、ハジメには尻尾を向けられていることに気づいていない。

つまり、この状況で日色は避けることは不可能ではないがその場合、ハジメがああ溶解液に直撃することは間違いないだろう。

だが生憎とこちらには神水がある、たとえハジメが傷ついても神水であれば治しすぐに戦線復帰できるだろう。

むしろ、自分が散弾針を食らってしまうほうが当たる場所によつては自分が死んでしまう可能性が高い。

故に、自分のことに意識して、ハジメは見捨てたほうが正解だ。

それを理解した日色は、すぐさま行動に起こす。

ハジメのことなど一切考えず、自分の為に行動し――

――躊躇なく背中中で必死に自分にしがみついているユエをハジメ目掛けて投げ飛ばし、『守』の文字を彼女達の元へと飛ばした。

視界の端でユエが驚いたような、泣きそうな表情を取っているような気がしたが、それらを全て無視して左腕と右腕を可能な限りクロスさせて急所を守り、更に刀で顔を守り、魔力の直接操作で身体を限界まで強化し筋肉を締めた。

そして瞬間、車に飛ばされたような強烈な衝撃と共に肉を突き破るような音が体を通して伝わり、鋭い針が何十本と日色の体を蹂躪した。



ハジメは【空力】と【縮地】を併用しながらサソリモドキの攻撃を避け、時に練成を行うことで波打つ地面そのものを固定し、短時間に大量に襲い掛かる攻撃を凌いでいた。

「――このつ、数が多いのよー！」

悪態を吐きながらも必死に凌いでいるが流石にもう限界が近い。襲い掛かる針を【豪脚】で叩き落とし波打つ地面を再度練成で押さえつける。

すぐさま、ハジメは襲い掛かる攻撃の気配を感じて振り向こうとし――

「――日色ツ!!――ぐう!!」

「キヤッ!?!」

――此方へとユエを投げ飛ばした日色が無数の散弾針に貫かれ、吹き飛ばされたのを視認した。

咄嗟に追いかけてやろうとするが、日色が傷つけられたことに一瞬動揺し、此方へと飛んでくるユエを受け止め損ね、かなりの速度で投げられたのだろう、体勢が崩れてしまう。その崩れた隙を狙い打つように此方へと溶解液がサソリモドキから噴出された。

(このツ……次から次へと……ツ!!)

ハジメはユエを抱えたまま、「空力」で回避しようとするが体勢が崩れたせいで間に合わない。

背筋がキュツと縮まる感覚を味わうが――瞬間、ハジメ達を守るかのように『守』の文字が溶解液の進路に割り込んだ。

再度発動される結果が溶解液からハジメ達を守りきり、それを合図に波打っていた地面が一時的に静まった。

日色に自分を犠牲にして守られた、それを理解した途端ハジメの顔色は蒼白に染まり、サソリモドキが攻撃の手を止めたこの隙を逃すなどハジメの経験が音を鳴らす。

だが、あくまでこの生まれた隙は一瞬に過ぎない、今ハジメが日色を助けに向かえば瞬く間に二人共斃り殺しだ。

だから――

ハジメはそう思い、考えた策に憎しげに歯を食いしばった。

「――つう!!ユエ!日色にコレを飲ませてツ!!」

「……でも」

「早くしてツ!本当はお前なんかには日色を預けたくないけど、日色を助けるにはこれしかないのツ!!私が抑えるからさっさと行って!!」

ハジメの考えた策はユエに日色の容態を見に行ってもらうことだった。

自分が迎えばサソリモドキに日色ごとやられてしまう、時間稼ぎを行う者が必要だ。

本来ハジメはユエを信用していない、いつでも裏切る気配を見れば即座に殺すと決めている。だが、今この危機的状况には、日色を助けるためにはユエに託すしかないのだ。

最初、ハジメはユエを身代わりにしようと思ったがそれをしてしまえば日色が悲しむ。

だからこそハジメは託すしかなかった。

ユエはハジメが差し出した神水の容器を持つと一瞬、躊躇したように見えたものの「日色を助ける」というハジメの言葉に決意を持った瞳で受け取り、吹き飛ばされた日色

の元へと走り出した。

ハジメはそれを横目に見ながら片手にドンナーを構え、こちらを睥睨するサソリモドキへと銃口を向ける。

「キシヤアアアアアアアアアアアアッ!!」

「——さっさと死ね、サソリモドキ!」



「日色!」

「——ガアッ!……ユエかつ」

ユエが日色の元に向かうと日色は必死に深々と突き刺さった針を抜こうとしていた。

どうやら神水の入った容器はいくつか貫かれて使い物にならなくなったらしく、日色は神水無しで針を抜いているため所々が血だらけになっている。

「日色……コレ、飲んで」

「これは……神水か。悪いな、世話をかける」

日色はユエから血だらけになった右腕で神水を受け取り、一息で飲み干すと再度無理矢理針を全て引き抜いた。

カランカランと地に全て落ちた針を確認し、顔を上げるとユエの表情が無表情が崩れ今にも泣き出しそうになっていた。



「しかし……あのサソリモドキをどう攻略するか……いつそのこと捨て身特攻すべきか？ いや、だとしてもリスクが……」

ユエの心配を余所にサソリモドキを攻略すべく思案する日色にユエはポツリと言葉を零す。

「……どうして？」

「あ？何がだ？」

「どうして逃げないの？」

自分を置いて逃げれば助かるかもしれない、その可能性を理解しているはずだと言外に訴えるユエ。それに対して、日色は呆れたような視線を向ける。

「何言ってるんだ金ロリ、そんなことすれば約束を果たせないだろう」

「……え？」

日色の言葉にユエは何を言っているかわからない、とでも言うように困惑の表情を取る。

当たり前だ、日色が言った約束は封印部屋から出すことだけのはずだ。

そうだ、だって、日色はちゃんと此処から出してくれると――

――待て。

そこまで考えてユエの思考が停止した。

確かに日色は自分を此処から出してやると言ってくれた。それは間違いなく決定的な事実だ。

だが、一度も封印部屋から出してやるとは言っていない。

——だったら、だとしたら。

「言っただけで、金ロリ」

ユエは、呆然といったように立ち上がった日色をゆっくりと視線を向けてしまう。

——日色が言っただけというの……

「お前を此処から、奈落の底から出してやるとな」

「——あ」

呼吸が止まった。

あまりにも淡々と呟いた日色の言葉がユエの心に染み渡り、ユエはストーンと何かの心に落ちたのを感じた。

昔、ここに閉じ込められてしまったときになくなりしまった何かが。

ユエは日色に言葉以上の何かを見たのか顔を俯かせいきなり日色の背中に抱きついた。

「——ッ、いきなり何だ？」

「日色……お願い、信じて」

そう言つてユエは、日色の首に手を回し日色の首筋にキスをした。

「ッ!？」

否、キスではない。噛み付いたのだ。

日色は首筋にチクリと痛みを感じた。そして、体から力が抜き取られているような倦怠感が全身に巡っていく。自分のことを吸血鬼と名乗っていたのでおそらく自分は現在吸血されているのだろうと日色は推測した。

『信じて』——その言葉は、きっと吸血鬼に血を吸われるという行為に恐怖、嫌悪しても逃げないで欲しいということだろう。

「——できるだけ、早くしてくれ」

日色はそれに苦笑しながらも、必死に視界の先で時間稼ぎを受け持っているハジメのことが気が気ではなかった。本来なら今すぐ助けに行きたいところだ。

しかしその日色の思いに反してユエは日色の血を飲んだ時にあまりの美味さに身を

震わせ力をつけながらも驚愕していた。

吸血鬼の主食とも言え、嗜好品でもある血液。随分と長いこと口にしていなかった為『空腹は最高の調味料』と言われるがそれを抜きにしても日色の血液はユエが今まで飲んだ血液の中でぶつちぎりでも最高だった。

(駄目……コレ……飲まれ……)

永遠に飲んでいたくなるような芳香で濃厚な味わい。そして舌触りの良さと喉を通り抜ける感覚に延々と飲めるほどの飲みやすさがあるのにもかかわらず、かつてないほどの濃く、深い味わい。まるで神々の美酒に例えられるほどの至高という言葉すら物足りない味が細胞一つ一つをまで染み渡り、蘇らせるような感覚が全身の奥深くまで駆け巡る。

もはや日色の血液の味は快楽の絶頂どころの話ではない、少しでも気を抜けば冗談抜きで文字通り墮ちる。

そんな神々しい美血を吸血し始め3秒後。

「——ッ、ハジメ!!」

「——痛っ!!……やっぱ硬いッ!」

攻撃を避け損ねたのだろう、サソリモドキの四本の大バサミの一つを避け損ねたハジメは吹き飛ばされ、日色の叫びと共に日色達のところまで落ちてきた。全身には幾つも

の裂傷や擦り傷顔の眉毛部分に決して浅くない裂傷が走っており、そこから血が流れ白くなった眉毛を紅く染め上げていく。

しかし、吹き飛ばされる直前に【閃光手榴弾】を投げたらしく前方でサソリモドキが視力を失いパニックに陥っていた。

「ハジメツ、無事か!？」

「大丈夫っ！むしろ日色は——つて、ユエツ！何をしてるの！羨ま——今すぐ日色から離れて」

ハジメは振り向くと共に日色に抱きついていているユエを視認して、若干声を荒げるが途中何故か一瞬言葉を詰まらせ、すぐさま冷静に言葉を零しながらユエへと銃を構えた。

そしてその引き金が引かれようとする前に日色がハジメを制止した。

「——待て、ハジメ。簡潔に状況を説明するから話を聞いてくれ、ユエが吸血鬼だということは知っているだろう。ユエは今、俺から吸血しているから俺たちは動けない、だから……」

「キイシヤアアアアアアア!!」

「クソツツ！もう、復帰したのか!？」

サソリモドキの咆哮が轟く。どうやら【閃光手榴弾】のショックから回復したらしい。こちらの位置を把握しているようで、再び地面が波打ち、土の棘が、土の牙が、大量に

日色達へと襲いかかる。

「——日色、ひとつだけ教えて?」

攻撃性のある土の猛威がサソリモドキの意思に従って襲いかかるうとする中、凜としたハジメの声が明確に空間を響き渡る。

「私は、何をしたらいい?」

そのハジメの質問に、そのハジメの疑問を問いかける声に日色はこんな状況でありながら小さく笑って回答した。

「——俺達を、守ってくれ」

「——わかった」

——瞬間、日色達に襲いかかった巨大な土の牙が、大量の土の棘が、総てただ一つの例外もなく、突如出現した土の壁に遮られ、吹き飛ばされ、弾かれた。

ハジメが地面に右手を置き行った錬成は、ハジメ達を中心に半径5メートル程を中心に波打つのを止め石の壁がハジメ達が囲むように形成される。

周囲から大量の土の棘や巨大な土の牙、時に土の大波が生み出されるが総てハジメの錬成によって防がれ、弾き飛ばされたのだ。

「生憎とコレは私の十八番だから」

地形を操る規模や強度、攻撃性はサソリモドキの方が圧倒的に上だろう。だが、錬成速度と錬成の応用性はハジメの方が上だ。

土の棘は何度も形成される防壁に防がれる、巨大な土の牙は真横や真下から突然高速で形成される石の壁が弾き飛ばし、土の棘を弾く防護壁となってしまう。土の大波はハジメの錬成範囲5メートルに入った途端、崩れるように停止し、地面に落下してしまう。ドグツガギツゴガツガギツギギギギギギギツツ!!、と何度も土と土がぶつかり合っている、お互いを削りあっている。

ハジメが錬成をしながら防御に専念していると、ユエが漸く日色の首筋から口を離れた。

どこか熱に浮かされたような表情でペロリと日色の血がついた唇を舐める。その仕草と共にやつれていた肌はツヤツヤと張りのある白磁のような白い肌となり、頬は夢見のような薔薇色となっていた為、何処か妖艶さを感じさせる。

何処か影が居座っていた紅の瞳は温かな光を薄らと放っていて、その細く小さな手は、そつと撫でるように日色の首筋に置かれている。

「…………ちそうさま」

そう言うのと、ユエは日色から降りサソリモドキに向けておもむろに片手を掲げた。同

時に、その華奢な身からは想像もできない莫大な魔力が噴き上がり、彼女の魔力光なのだろう——黄金色が暗闇を薙ぎ払った。

そして、美しい神秘に彩られたユエは、魔力色と同じ黄金の髪をゆらりゆらりとなびかせながら、一言、呟いた。

「蒼天」

その瞬間、サソリモドキの頭上に直径六、七メートルはありそうな青白い炎の球体が出来る。

直撃したわけでもないのに余程熱いのか悲鳴を上げて離脱しようとしながら固有魔法で地面を操り、防壁を作り出そうとするが奈落の底の吸血姫がそれを許さない。

ピンつと伸ばされた綺麗な指がタクトのように優雅に振られ、青白い炎の球体は指揮者の指示を忠実に実行し、土の防壁を紙を燃やすが如く容易く燃やし尽くしながら逃げるサソリモドキを追いかけ……直撃した。

「グウギイヤアアアアアアア!」

サソリモドキがかつてない絶叫を上げる。明らかに苦悶の悲鳴だ。着弾と同時に青白い閃光が辺りを満たし何も見えなくなる。ハジメと日色は腕で目を庇いながら、その



壮絶な魔法をハジメは呆然と、日色は何かを考えているような無表情で眺めた。

やがて、魔法の効果時間が終わったのか青白い炎が消滅する。跡には、背中の外殻を赤熱化させ、表面をドロリと融解させて悶え苦しむサソリモドキの姿があった。

あのハジメが使う摂氏三千度度の「焼夷手榴弾」でも溶けず、ゼロ距離からレールガンを撃ち込まれてもビクともしない、日色の文字魔法すら防いだ化け物の防御を僅かにも破ったユエの魔法を称賛すべきか、それだけの高温の直撃を受けて表面が溶けただけで済んでいるサソリモドキの耐久力を褒めるべきか、日色としては悩むところであった。

トサリと音がして、ハジメが驚異的な光景から視線を引き剥がし、そちらを見やると、ユエが肩で息をし、日色に支えられながら座り込んでいる姿があった。どうやら魔力が枯渇したようだ。

「無事か、金ロリ」

「ん……最上級……疲れる」

「…そうか、よくやった。後は俺がやるからゆっくり休んでろ」

「ん、頑張つて……」

日色の賞賛に無表情だが嬉しそうに少し頬を緩めるユエに日色はポンポンと頭を優しく叩くと、錬成に魔力を使いすぎたのか同じく肩で息をしているハジメの元に向かっ

ていく。

「ハジメもだ、よく時間稼ぎしてくれた。あとはゆっくり休め」

「ま、待って、日色！私はまだ——」

日色はハジメに賞賛と休息の意を込めて言葉を贈ったのだがハジメは魔力枯渇でフラフラになりながらもまだ戦えるそばかりに立ち上がろうとして——

——ポントと日色はハジメの頭を優しく撫でた。

「いいから、休んでろ。もう、体は限界が近いはずだろう？神水で治せ」

「ひ……いい、ろ？」

優しさとともに思いやりを感じるその日色の言葉、だがハジメには違和感を感じずにはいられなかった。

確かに日色の言葉には不器用ながらも優しさを感じるだろう、だが日色の声色は一定で変化が無く無機質さをハジメは感じてしまったのだ。

そう、まるでハジメが檜山グループに黽ぶられていたあの時、ハジメを助けてくれた時とは比にならないほどに。

日色は謎の予感を抱えているハジメの頭から手を離し、サソリモドキの方を向くと腰に差している刀に左手を添え、体勢を少し下げる。

そして、瞬間——

——日色が消えた。

ドオンツツツ!!?という地面があまりの衝撃に耐え切れずひび割れ、抉れ、粉碎すると共に刹那遅れて粉碎音が聞こえてくる。

しかしハジメは辛うじて日色の動きを視認していた。

日色が体勢を低くした瞬間、滑らかにサソリモドキへとすり足によつて接近する、最初の一步は極自然な踏み込み、しかしそれは停止状態から加速したとは思えない、一歩踏み込む前から最高速に達していた。

「キイシヤアアアツ!!」

しかし、それ程の速度すら視認しているのかサソリモドキは固有魔法を用いて地面を波打たせ、巨大な土の牙を、大量の刺を、日色そのものを飲み込むがごとく土の大波を巻き起こし、それらが全て日色という敵対者へと殺到する。

だがそれらの攻撃は全て日色には通じなかった。

初陣として襲いかかるのは30をも超える巨大な土の牙、それらが全て日色を引き裂き、貫き、粉碎するため襲い掛かる。

「」

それに対し日色は反撃も、いなす事さえ行わない、徹底的な回避一択のみ。

【空力】と【縮地】を併用し、一切の減速すらなく牙の弾幕を縦横無尽に駆け抜けていく。まるで土の牙そのものが日色を避けていくかのように日色の服にすら触れることから叶わず、むしろ足場として利用され、全ての土の牙が誰もいない地面を貫いていくだけだった。

残ったのは、まるで電流のごとく日色の道筋を示す、蒼雷の残光だけである。

第二陣の攻撃は100をも超える土の刺。それらが全て日色を穴だらけにするために殺到する。

日色一人に襲い掛かる土の刺はまるで戦場での弓矢の豪雨のようだ。

ここでようやく日色は刀を引き抜いた、左手を鞘に添えて腰を少し下げ、鞘走りによって加速させ抜刀し――

「――ッ!!」

――生み出された土の刺が2メートル進む前に全てが斬撃によって叩き落とされた。

文字魔法『斬』を刀に書いておくことにより無数の斬撃を飛ばすことで一つも取りこぼしが無いように丁寧丁寧に一つ一つ切り裂き、叩き落としているのだ。

あまりにも現実離れた絶技、これほどの絶技を行うのは決して技量だけでは不可能だ。

では、これほどの絶技を行える理由は一体なんなのか？それは一つの技能が原因である。

——技能【集中】

あまり触れられていなかったこの技能だがこの技能を持つている者は【トータス】の中では極僅か、「人族」「魔族」「獣人族」の中で一人いるかいないかの激レアな技能である。

その技能の効果は『他の技能の上達速度の増加』である。

【集中】の技能を持っているものが他の技能を使うとその技能の上達速度が圧倒的集中により増加し、いち早く派生技能を手に入れることができるのだ。

ハジメが爆発的に【錬成】の派生技能が増えていったのも、日色が三日で新たな魔法を作り出したのもこれが理由である。

だが、その【集中】という技能にはもう一つの隠された能力がある。いや、派生技能が存在する。

話は変わるが、人間の脳や肉体にはリミッターが掛けられていることを知っているだろうか？

人間には潜在能力というものが備わっており、従来よりも質的や量的に高い能力が内

在しているとされている。危機が迫っているようなときに普段の力の何倍もの力が出せる「火事場の馬鹿力」という慣用語があるように。人間の筋肉は過剰な筋出力をした場合、筋繊維などにかなり大きな負荷がかかったり、莫大なエネルギーを消費したりするため、身体はぼろぼろになってしまう。そのため筋肉や骨の損傷を防ぐために、人間の脳にはあらかじめ安全装置（リミッター）がかけられていて、意識的に発揮できるパワーに制限がかかっている。普段人間が100%の力を出せないのは自らの身体を守るためなのである。

それを破るための技能が「限界突破」だ。魔力消費によって一時的に肉体のリミッターを外し基礎ステータスの三倍のステータスの力を得る、もともと高い身体能力が100%使われしかも肉体を魔力によって底上げする、それが「限界突破」の能力だ。

では現在日色が使っているのは「限界突破」か？——否だ。

何故なら「限界突破」とはあくまで肉体のリミッターを外すものであり、例えば肉体の限界を超えたとしてもサソリモドキの全ての攻撃を防ぐことは不可能だからだ。

では日色の使っている技能はなんなのか？

これまた話は変わるが、貴方は『ゾーン』というものを知っているだろうか？

スポーツで素晴らしい結果を出すことができた試合やプレーの最中に、『リラックスしているのだけど、ものすごく集中している』『試合が自分の思うように進み、負ける気

がしない』『体と心が完全に一体化していて、自然に体が動いているような感じ』『体の調子も良く、気持ちもワクワクしている』『なにもかもうまくいって最高の気分。絶好調』等というこんな感覚を持ったことはないだろうか？

ゾーンとは、スポーツ選手が、極度の集中状態にあり、他の思考や感情を忘れてしまうほど、競技に没頭しているような状態を体験する特殊な感覚のことである。

単に調子がいい、とても集中している、というだけでなく、「心と体が完全に調和した無私の境地だった」「体が勝手に動き、苦痛を感じなかった」「試合をやっている自分を上空から眺めていた」など、選手にとって「何か特別なことが起こった」と感じさせるような感覚であり、疲れを知らず、そのプレイにのみ没頭できる極限の集中状態で、実力を100%引き出せる状態である。

『ゾーン』とは選手の持つている力を最大限に引き出してくれるが、それだけでなく、この体験は選手にとって、スポーツの喜びと生きる喜びが一つになる、とても幸福な体験でもある。その幸福感、充実感、結果以上に、「スポーツは素晴らしい!」、「もつともつと続けたい」と思えるモチベーションとなるのである。

決して特別な人だけに起こるものではなく、ほとんどの人にとって、それは偶発的に、たまたま起こるものであり、起こそうとして起きるものでもない、それこそが『ゾーン』である。

知っているだろうと思うが『神代日色』の前世である『■■■■』はブラック企業に就職していた。一週間休み無しなど普通にあり、三徹等も一ヶ月に5回以上必ずあった。

だが、そんな中『■■■■』は老衰で死んだ。

もう一度言おう、『■■■■』は過労死で死んだのではない、老衰で90代後半で死んだのである。

わかるだろうか？この異常性が。この男はブラック企業に就職しながら定年退社したのである！

この男生まれながらにしてひとつの才能があった。

それは、『一つのことに対して没頭もとい超集中するという才能』である。

その才能はブラック企業に就職してからも効果を発揮し、メキメキと才能が研ぎ澄まされていった。

そう『ゾーン』である。この男は、仕事中に何度も『ゾーン』に入ることによって仕事を行っていたのだ！……そうしなければ仕事が終わらなかつたから。

『ゾーン』は引き出すたびに持っている力を最大限に引き出し、幸福感、充実感を与え、



モチベーションとなる、なってしまう。

結果、『■■■■』は定年後にはあらゆる物事にほぼ『ゾーン』に入れ、消化できるスーパーアルティメット社畜となったのだ！

### 閑話休題

そして現在、スーパーアルティメット社畜である『■■■■』は『神代日色』となり、その才能を存分に発揮していた。

それこそが『神代日色』を『神代日色』とたしめている真骨頂。特典など関係なく彼自身が元から持っていたもの。

### ——派生技能【超集中持続】

その効果は『己のポテンシャルを100%発揮し余計な思考や感情、感覚、神経を無くし、情報処理能力や、反射速度などの知覚機能を何倍にも上昇させる』というものである。しかも、その効果は集中力によって上昇量が変動する。

爪熊が突然、圧力が増し、身体能力や状況判断が尋常ではないほど高まったのもそれが理由だ。己に適した動き方を最適化させたのだ。

しかし弱点もあり、一つはそう簡単に使えるものではなく、何かのきっかけがなければこの技能を使うことは不可能となっている。例えば……嫁入り前の親友の顔に傷がついた事、などというキツカケが。

二つ目は集中力が持続するまでという制限時間が存在している。

では、このスーパーアルティメット社畜である『神代日色』が【超集中持続】を使つた時の上昇量はどれほどか？

三陣目に襲い掛かる土の大波と相對しながら、日色は刀を収め、体勢を低くし、いつもと同じ抜刀体勢に入る。

使うのは最初に覚えた、己の劍術、望み、焦がれ、手にした修練オタク心の結晶。

もはや、現在の日色の視界には色彩はない、余分な感情も、余分な思考すら消え失せている。

だが、そんな白黒モノクロの視界の中、敵だけは決して目を離さない。

——我流劍術【天閃】

そして日色は——抜刀した。

答えは簡単、集中力が最低でも原作ハジメの【天歩】の最終派生技能【瞬光】の知覚能力、情報処理能力の約三倍である。

瞬間——土の大波に蒼色の閃光が走ったかと思うと切り裂かれ、粉微塵となった。

「キシヤア!？」

己の渾身の固有魔法がいとも容易く切り裂かれたことに驚愕の声を上げるサソリモドキに日色は既に射程範囲に接近している。

既に日色は刀を袈裟懸けに構え、瞳に蒼色の残光を灯らせながら、踏み込みを終わっている。

神速の踏み込み。そこに至ってはもはや拍の概念などと言うものは存在しない。無拍子？零拍子？そんなチンケなモノとはこの踏み込みは比べ物にならない。

あまりにも現実離れた、あまりにも人間業ではない『零』でありながらも『無』境地に達した神業の踏み込みだった。

咄嗟にサソリモドキは四本の大バサミを伸長し大砲のように風を唸らせながら日色に迫る。おそらく大バサミにも石の鎧をしていることから、盾にして防ごうとしたのだろう。

だが、その足掻きは無駄だった。

日色は小さく呼吸を吐きながら袈裟懸けに振り下ろす。

望むのはひとつの斬撃、外を斬るのではなく内を斬り裂く透刃の一撃。

——我流劍術浸透斬撃……

「——【霞桜】 ツ!!」

振り下ろした斬撃が咄嗟に盾にした大バサミに触れた瞬間——知ったことかとても言うように衝撃がサソリモドキの大バサミから肉体に伝わり内側から蒼色の斬撃が吹き出して、左右に両断された。

サソリモドキは悲鳴をあげることすらできず、軀を両断された左右はゆつくりと傾き、そのままズズンツと地響きを立てながら倒れ絶命した。

辺りが静寂に包まれる中、日色は手にした刀の刀身を視て、小さく苦笑した。

「……ハジメに怒られるな」

あまりにも刀に負担をかけすぎたのだろう、刀には幾つもの亀裂が走っており、次にかか硬いものにぶつかればいとも容易く粉碎されそうなほど刀は疲弊していた。

日色は刀を壊さないように、丁寧な鞘に戻しながら、ピクリとも動かないサソリモドキを念の為というように【豪脚】で頭を潰し、「よし」と呟いた。止めは確実に！ というのが最近できた日色とハジメのポリシーである。

振り返ると、無表情ながら、どことなく嬉しそうな眼差しで女の子座りしながら日色

を見つめているユエと神水で傷を治し、怪我一つない身体で此方に笑顔で走ってくるハジメがいた。迷宮攻略がいつ終わるのか分からないが、どうやら新たな頼もしい仲間ができたようだ。

パンドラの箱には厄災と一握りの希望が入っていたという。どうやらこの部屋に入る前に出したその例えは、中々どうして射を射ていたらしい。そんなことを思いながら、日色は彼女達の元へと歩き出した。

## 少年少女は語り合う（ただし一人はロリババア）

サソリモドキを倒した日色達は、サソリモドキとサイクロプスの素材やら肉やらをハジメの拠点に持ち帰った。

その巨体と相まって物凄く苦勞する——と思いきや日色が文字魔法により『軽』の文字を使うことで重さが軽くなり発泡スチロールを持っているような感覚になったので最上級魔法の行使により、へばったユエに再度血を飲ませ、日色がサソリモドキを、ハジメとユエが片方ずつサイクロプスを運んでいくこととなった。

ちなみに、そのまま封印の部屋を使うという手もあったのだが、ユエが断固拒否したためその案は没となった。……いやまあ、何年も閉じ込められていた場所など見たくもないのが当たり前だが。

そんなわけで現在日色達はハジメが作った隠れ家を拠点に消耗品を補充しながらお互いのことを話し合っていた。

「つまり金ロリは少なくとも三百歳以上というわけか……」

「……女性に……年齢は、マナー違反」

ユエが非難を込めたジト目で日色を見る。女性に年齢の話はどの世界でもタブーら

しい。

ハジメの記憶では、三百年前の大規模な戦争のおり吸血鬼族は滅んだとされていたはずだ。実際、ユエも長年、物音一つしない暗闇に居たため時間の感覚はほとんどないと思うのだが、それくらい経っていてもおかしくないと思える程には長い間封印されていたという。二十歳の時、封印されたというから三百歳ちよいということだ。

「というか、吸血鬼って、皆そんなに長生きなの？」

「……私が特別。【再生】で歳もとらない……」

ハジメの質問にポツリと小さな声で答えるユエ。

聞けば十二歳の時、魔力の直接操作や【自動再生】の固有魔法に目覚めてから歳をとっていないらしい。普通の吸血鬼族も血を吸うことで他の種族より長く生きるらしいが、それでも二百年くらいが限度なのだそうだ。

どんな理屈なんだろう？他人の血液を吸うことで細胞の分裂回数を増やしたりしているのだろうか？

ちなみに、人間族の平均寿命は七十歳、魔人族は百二十歳、亜人族は種族によるらしい。エルフの中には何百年も生きている者がいるとか。

ユエは先祖返りで力に目覚めてから僅か数年で当時最強の一角に数えられていたそう、十七歳の時に吸血鬼族の王位に就いたという。

あのサソリモドキの外殻を融解させた魔法を、ほぼノータイムで撃てる能力にほぼ不  
死身の肉体。

行き着く先は十中八九『神』か『化け物』か『英雄』か、である。その中でユエは『化  
け物』の扱いをされたのだろう。

ユエ曰く欲に目が眩んだ叔父が、ユエを化け物として周囲に浸透させ、大義名分のも  
と殺そうとしたが「自動再生」により殺しきれず、やむを得ずあの地下に封印したのだ  
という。ユエ自身、当時は突然の裏切りにショックを受けて、碌に反撃もせず混乱した  
ままなんらかの封印術を掛けられ、気がつけば、あの封印部屋にいたらしい。

ユエが話した『欲に目が眩んだ叔父』という言葉に何やらピリツ！とした違和感を感  
じたが原作知識を思い出そうにも思い出せない、ユエが封印された理由は別にあつた気  
がするが思い出せなかったので何も言い出さないことにした。……どうやら爪熊との  
後遺症は予想以上に深いようだ。

ユエの力について聞くと、どうやら誇張などではなく本当にユエは全属性に適性があ  
るらしい。ハジメは言葉にはしなかったものの顔を少し顰めたことからどうやら魔法  
適性のない自分のあてつけに感じるらしい。

しかし、ユエ曰く、接近戦は苦手らしく、一人だと身体強化で逃げ回りながら魔法を  
連射するくらいが関の山なのだそう。もっとも、その魔法が強力無比なのだから大し



たハンデになっていないのだが。

ちなみに、無詠唱で魔法を発動できるそうだが、癖で魔法名だけは呟いてしまうらしい。魔法を補完するイメージを明確にするためになんらかの言動を加える者は少なくないので、この辺はユエも例に漏れないようだ。

【自動再生】については、一種の固有魔法に分類できるらしく、魔力が残存している間は、一瞬で塵にでもされない限り死なないそう。逆に言えば、魔力が枯渇した状態で受けた傷は治らないということ。つまり、あの時、長年の封印で魔力が枯渇していたユエは、サソリモドキの攻撃を受けていればあっさり死んでいたということだ。

『え？じゃあ傷口が凍らされたらどうなるん？』

そう思った日色だが口に出さないでおくことにした。

（……とは言っても300歳か。さすが異世界というべきか、ロリババアが実在するとはな……）

と、日記を開いてさっきの出来事を魔力筆で記しながらオタク知識が現実起こっていることについて思わずそんなことを思い浮かべてしまう。

「日色、さっき何か変なこと考えた？」

「……いきなり何言ってるんだお前？」

とぼけて返す日色だが、錬成を行いながらハジメの美しいユエとはまた違う紅色の瞳

が細まり、こちらを見つめてくることに女の勘の鋭さに内心冷や汗をかき、誤魔化すように眼鏡をクイツ、と上げる。因みにユエもジト目で日色を見ていた。……なんて勘の鋭い女の子達だろう。

ハジメは暫く日色を見つめていたが、まあいいやとでも言うように日色に修復した刀を差し出した。

「……はい、日色。刀の修復が終わったよ、タウル鉱石に重ねるようにシユタル鉱石を使っているから、耐久力はかなり上がったと思う」

「そうか、わざわざすまん。ハジメ」

「——べ、別に気にしなくていい。日色の役に立てたから」

そう言つて渡された刀はタウル鉱石で作られた時より一層艶やかに黒銀に照り輝き、魔力を流すと淡い蒼色の輝きが生まれた。

この刀にはサソリモドキのあの硬い外殻——もとい新たな鉱石であるシユタル鉱石が含まれている。

ハジメが、あのサソリモドキの外殻の硬さの秘密を探ろうと調べてみたところ、【鉱物系鑑定】が出来たのである。

シユタル鉱石

魔力の親和性が高く、魔力を込めた分だけ硬度と靱性が増す特殊な鉱石。

|||||

どうやらサソリモドキの外殻の圧倒的強度はシユタル鉱石の特性のようだ。おそらく、サソリモドキが常時、自身の膨大な魔力を込めに込め続けることで硬度と靱性をガーン上げていたのだ。

じゃあ鉱石なら加工できるだろう、と試しに錬成してみたところあっさり形状を変えられることが出来てしまった。「じゃあ、今までの苦労は……」と思わず崩れ落ちたハジメを日色が慰める事になった。……え？どうやって慰めたかつて？取り敢えず頭を撫でたら満更では無さそうだったので3分ほど撫で続けただけだよ？……ユエの瞳が冷め切っていたのが印象的だ。

とまあ、話を戻すがそんなわけで新たに生まれ変わった刀はさらに強力な硬度と靱性を手に入れ、日本刀の技法のひとつである、やわらかい鋼をかたい鋼で包み込むことによつて作る『甲伏せ』を行い、作られている。因みに情報源は日色である。なんで知っているか、だって？……若気の至りだ。

刀を作り出す時に行う時、鋼を折り返し何度も槌で叩き鍛錬することで、硫黄などの不純物や余分な炭素、非金属介在物を追い出し、数千層にも及ぶ均質で強靱な鋼を作らなければならないが、ハジメの【錬成】を用いればその必要は無い。

こうして出来上がった刀を日色は受け取り、ハジメに礼を言う。ハジメは少し頬を赤らめ、誤魔化すように新たな武器を作るために「練成」を始めていく。

日色は貰った刀の波紋を眺め、気に入ったのかコクリツと小さく頷いた後、丁寧に鞘に収めた。

すると、ユエも気が逸れたのか今度は日色に質問し出した。

「……日色と、ハジメ、どうしてここにいる？」

当然の疑問だろう。ここは奈落の底の更に底。正真正銘の前人未到の人外魔境だ。魔物以外の生き物がいていい場所ではない。

ユエには他にも沢山聞きたいことがあった。なぜ、魔力を直接操れるのか。なぜ、固有魔法らしき魔法を複数扱えるのか。なぜ、魔物の肉を食って平気なのか。なぜ、ハジメの左腕が無くなっているのか。日色の使っていた魔法はなんなのか。ハジメが使っている武器はなんなのか。そもそも、日色達は人間なのか。

次々と出てくる疑問の数々に日色はハジメの方をちらりと見て、ハジメが好きにして、というジェスチャーをしたため、仕方なしに質問されたことに関してポツリポツリと日記を書きながら日色は答えていく。

自分達が同郷の仲間たちと共にこの世界に召喚されたことから始まり、仲間達から役立たずだと言われていたこと、ベヒモスとの戦いでクラスメイトの誰かに裏切られ日色

を庇いハジメが落ち、それを追いかけて共に奈落に落ちたこと、魔物を喰って変化したことで、爪熊と戦ったこと、ポーシヨン（ハジメ命名の神水）のこと、故郷の兵器にヒントを得てハジメが現代兵器モードキの開発を思いついたこと。

途中、奈落に落ちたことがクラスメイトの誰かのせいだと知らなかったハジメが、鍊成に失敗しベキツ!!と新たに生み出した武器のパーツをへし折り、「え？日色はクラスメイトの誰かに落とされかけたの？ねえ、日色。誰があなたを落とそうとしたのか教えて？最初に爪を剥がして、指を切り落とした後——（自主規制）——して殺すから。え？知らない？そう……」、と暴走し日色に迫ってきたのでハジメに説明しなくてはならなくなつた。……証拠がないため多分犯人である檜山のことは伏せて。ハジメのことだから可能性があるというだけでドパンツしそうだし。

そうしてツラツラと話していると、いつの間にかユエの方からグスツと鼻を吸るような音が聞こえ出した。

「なんだ？」と日色は再び視線を上げてユエを見ると、ハラハラと涙をこぼしている。

「何故、泣いている」

「……グスツ……日色……つらい……私もつらい……」

さらつとハジメが含まれていないのが気になるところだ。

しかしまあ、どうやら、ユエは日色のために泣いているらしい。日色は取りあえずユ

エを慰めるために無表情のままユエの頭を優しく撫でる。僅かに隣で【練成】に集中していたはずのハジメがピクリツと反応した。

「金口リが気にすることじゃない。クラスメイトのことや裏切られたことなんて俺にはあまり興味がないからな、そんなことよりも生き残る術を磨くことや元の世界に帰る方法を探さなければならぬからな」

スンスンと鼻を鳴らしながら、撫でられるのが気持ちいいのか猫のように目を細めていたユエが、故郷に帰るという日色の言葉にピクリと反応する。

「……………帰るの?」

「——まあ、な。いろいろ変わってしまったが、故郷に……………家に……………帰りたくない」

「……………そう」

ユエは沈んだ表情で顔を俯かせ、ポツリと呟いた。

「……………私にはもう、帰る場所……………ない……………日色……………私は……………どこに、行けばいいの……………?」

「……………」

そんなユエの言葉に日色はユエの頭を撫でていた手を止め、手を引っ込める。

おそらくユエは日色を自分の新たな居場所に見ているのだろう、新しい名前を求めたのもそういうことだ。だからこそ、日色が元の世界に戻るということは、再び居場所を

失うということだとユエは悲しんでいるのだろう。

その落ち込むユエを見て、日色は小さくため息を吐いた。

そして――

――ズドンツツツツ!!?!?、という見事に威力を調整されたデコピンがユエの額を打ち抜いた。

「――にゅツツ!!?!?」

あまりの激痛!におもわず後ろに倒れこみ、悶絶してしまうユエ。秘技日色デコピン一本入りました。

「――い、いきなり何――」心底どうでもいいことで落ち込むな、金ロリ。正直言ってお前の居場所なんかに興味がない――ツ」

心底呆れた瞳をユエに向ける日色にユエは目を見開き、瞳に絶望の色が染められ、顔を伏せた。日色がユエの居場所になることを拒否したのだろうと思っただろう。

そんなユエの表情を無視して、日色は「それにな――」と言葉を続ける。

「――自分の居場所は他人に決めてもらえるものじゃないだろうが」

そのなんともないように呟かれた日色の言葉にユエは目を見開いた。

口から本人の意思を代弁され「……………え？」と疑問の聲が呟かれる。

「何がおかしい、当たり前だろう。『居場所』というのは自分で決めるものだ、自分がいい場所じゃない、自分がいたい場所が『居場所』なんだ」

呼吸が止まったのでは無いかと錯覚した。

日色のなんともないように呟かれる言葉がユエの心に染み渡り、広がっていく。

「だから——」と日色は言葉を続ける。

「——選べ、金ロリ。お前はもうどうしたい？」

日色はこう言っているのだ。

お前の居場所なんか知らないし、興味が無い。だから、自分の居場所は自分で好きなように決めろ、と。

彼らしい、あまりにも不器用な優しさだった。

「——あ、う、わ……………たしは……………」

ユエは口を開き言葉を紡ごうとするが、呆然として、理解が追いつかないのか口からうまく声が出ない。

そして漸く理解が追いついたのか、掠れた小さな声で遠慮がちに恐る恐る呟いた。



「……………たい」

「ん？聞こえないぞ、もう少し大きな声で喋れ」

あまりに小さくぼつりと呟いたのか日色の耳にはよく聞こえず、日色は思わず聞き返してしまふ。

その言葉にユエは紅い瞳に涙を滲ませながら小さくしかしきつきよりもはつきりと万感の思いを込めて呟いた。

「…………日色の…傍に居たい…っ！」

この日、■■■■■は、ユエは、初めて選択をした。

誰かに望まれて王になった時とは違い、流されるままロクに反撃もせず封印された時とも違い。

己の意思で、自分の欲望に重んじられるように、流されるままであった自分と決別した。

その選択を行ったユエを見て、日色は無表情から少し表情を変え、小さく微笑した。

そして、ユエの頭を撫でながらユエに微かに何かの思いを滲ませながら言った。

「…………好きにしる。言っておくが足手纏いは置いていくからな」

「んー」

その日色の言葉にユエは今までの無表情が嘘のように、ふわりと花が咲いたように微笑んだ。その笑顔は10人中9人は必ず振り向かせる程の美しさを持っていた。……おそらく残り一人は日色だろう。

そして日色はさつきから黙っているハジメに疑問を抱きハジメの方を向いて見るとハジメは日色達の会話が右耳から左耳に流すほど集中して錬成しているのが感じ取れた、技能【集中】のお陰だ。

「……ところでハジメは何をしているんだ？」

その日色の言葉にハジメの肩がびくつと震え、怪訝そうな表情で日色の方へと顔を向ける。

「？ 日色、何か言った？」

「ああ、ハジメがさつきから何を作っているのかと思つてな」

そう言う日色の視線にはハジメの錬成によって少しずつ出来上がっていく黒光りに輝く何かのパーツ。1メートルを軽く超える長さを持った筒状の棒や12センチ（縦の長さ）はある紅い弾丸、その他の細かな部品が散らばっている。

ハジメはそれらの部品を見ながら嬉しそうに日色の疑問に答える。

「コレ？……対物ライフル——のレールガンバージョンよ。対物ライフルだからドーナ—とはまた違う特性の弾丸を作らないといけないから手間はかかるけど……威力は

申し分ないはずよ」

ハジメの言うように、それらのパーツを組み合わせると全長約1・5メートル程のライフル銃となる。炸裂量や電磁加速が限界値に達しているドンナーではこれ以上の大幅な威力上昇が見込めない事を理解したハジメは新たな銃を製作することにしたのだ。

当然威力を上げるためには口径を大きくし、加速領域を長くしてやる必要があるのだ、そこでハジメが考えたのが対物ライフルである。

「——なんでライフルの構造を知っているんだ……？」

「お父さんの仕事の手伝いをしている時に銃の資料で見つけて、教えてもらったから」  
『愁さああああああああん!!!娘に何教えてんのツ!!?』

日色の中の人が脳内でキラリと歯を光らせ笑顔を見せるハジメの父の行動に内心嘆いていた。

話を戻すが対物ライフルは装弾数は一発と少なく、持ち運びが大変だが理論上その威力は絶大だ。何せドンナーですら、最大出力なら通常のライフルを軽く凌駕するほどの威力を持つているのだ。ドンナーですら普通の人間が撃った瞬間、打ち手の方が持ち腕と肩を粉碎されるほどの化け物銃なのである。それが対物ライフルならば最低でも半身を粉碎されるだろう。

この新たな対物ライフル——ハジメ命名『シユラーゲン』は、理論上、ドンナーの更

に数倍の威力を出すことができるという代物だ。素材は勿論シユタル鉱石である。

弾丸にもこだわりタウル鉱石の弾丸にシユタル鉱石でコーティングするフルメタルジャケット（仮）を行なった。燃焼石も錬成で粉状にし、最適な割合で圧縮してあらかじめ作つてある薬莖に詰める。一発生み出して仕舞えば後は錬成の派生技能「十複製錬成」は材料が揃つている限り同じものを作るのは容易な為、「十高速錬成」と併用してサクサクと量産した。

そんな事を話しながら遂にハジメはシユラーゲンを完成させた。

黒光りするシユラーゲンはなかなか凶悪なフォルムで迫力がある。

なかなかの出来にハジメは満足していると一段落ついたせいかハジメの胃袋が空腹を訴えてきたので食事にしようかと思ひ、日色の方に振り向くと日色は既にサソリモドキとマイクロプスの肉を「風爪」で手頃なサイズに斬り裂き、『ラシヨウの実（煮）』を粉末状にしたもの日色命名『ラシヨウ（煮）』で下味を付け程良く「纏雷」で焼いていく。「ハジメ、金ロリ、飯だぞ……つと、金ロリが食べるのはまずいな。金ロリは食事どうするんだ？」

そう言いながら日色は刀をユエに貸していたのか、物珍しそうに刀の波紋を見ていたユエに視線を向ける。

ユエは刀に向けていた視線を変えて、日色へと向き直ると「食事は要らない」と首を

横に振った。

「確かに300年以上封印されているなら大丈夫だろうが……飢餓感を感じるだろう？」

「感じる。……でも……もう大丈夫」

「何？」

腹はもう満たされているというユエにハジメに焼いた肉を渡しながら怪訝そうな顔をする日色。ユエは真つ直ぐ日色に指を指した。

「……ん……日色の血」

「……なるほどな、吸血鬼は確か血で栄養を摂るらしいから、食事は不要ということか」

「……食事でも栄養は取れる……でも血の方が効率が良い」

吸血鬼は血さえあれば平気のようだ、あの時、日色の血を飲んだからこそ満たされているのだろう。……どんな理屈で数ミリリットルの血で栄養を取れているのか気になるところだが気にしない方がいいのだろうか？

「……だから……日色の血……飲ませて」

「まあ、別に構わないが……」

そう言い、ペロリと舌舐りしながら日色の元に近づいてくるユエ。日色は手つ取り早く終わらせる為、血を飲みやすいように首を傾げ、妖艶さを醸し出しているユエへと近

づいていく。

もちろんそれに反応する者はいる訳で……

「待って、日色。ユエは私の血を代わりに飲んだらいいから別に貴方が血を吸われる必要はないし、それにわざわざ直接飲む必要はないはずでしょ」

そう案の定ハジメである。ハジメは錬成で簡易な皿を作り出して、そこに肉を置いた後日色を制止するように言葉を投げかける。

その言葉にユエの表情は無表情だが微かに不快と苛立ちの色に染められる。

「……日色の血……ハジメより……美味しい」

「さうつと嘘を言わないで、お前はまだ私の血を飲んだことはないはずでしょ」

ユエに反論するハジメの言葉に徐々に彼女達の視線が衝突し火花が散り始め、辺りの空気が謎の圧迫感が増していき温度が下がっていく気がするのを日色は感じた。……背の中から流れる液体はきつと冷や汗ではないだろう、いや、無いと思いたい。

「……いちいちうるさい……不健康女」

「——春を逃した老いた寄生虫ごときが喚かないで」

ああ？ おお？ と彼女達はヤンキーの如くメンチを切りながら、その二人の言葉と共にゴゴゴゴ……とハジメとユエの背後からオーラが立ち上り、人ならざる化物へと変化していく。ユエの背後には暗雲と雷を背負った龍が、ハジメの背後には黒いコートに右眼を

眼帯で覆い、紅い波動を吐き散らす魔王の姿が現れ、今にもファンタジー大戦争と成りかけている。

「待ってて、日色。今から日色の為にこの害虫を駆除するから」

「……上等。キメラモドキ風情に…負ける私じゃない……」

「——何やってるんだお前は……」

片やドンナーを片手に構え赤雷を纏いながら、片や両手に金色の魔力を込めながら一触即発の空気を生み出している彼女達に日色は呆れた声を零すしかなかった。

ちなみにサソリモドキとサイクロプスの肉からは新たに【魔力放射】と【魔力圧縮】、そして【金剛】の技能を手に入れたと記述しておく。

## 幕間 かつての悪夢がもう一度

ハジメとユエの修羅場を日色が死んだ瞳で見っていた日。

光輝達勇者一行は、再び「オルクス大迷宮」にやって来ていた。但し、訪れているのは光輝達勇者パーティーと、小悪党組、それに永山重吾という大柄な柔道部の男子生徒が率いる男女五人のパーティーだけである。

理由は言うまでもない。話題には出なくとも日色達の死が多く、生徒達の心に深く重い影を落としてしまったのである。「戦いの果ての死」というものを強く実感させられてしまい、ともに戦闘などできなくなつたのだ。生徒達は一種のトラウマを抱えてしまったのである。

当然、聖教会関係者はいい顔をしなかつた。神の使徒なのだから実戦を繰り返し、時が経てばまた戦えるだろうと、毎日のようにやんわり復帰を促してくる——

——が、それに猛然と抗議した者がいた。愛子先生だ。

愛子は、当時、遠征には参加していなかつた。作農師という戦争に必要な糧食問題を解決してしまう可能性がある特殊かつ激レアな天職のため、実戦訓練するよりも、教会側としては農地開拓の方に力を入れて欲しかつたのである。



そんな愛子は日色とハジメの死の知らせを聞くとシヨックのあまり寝込んでしまった。自分が安全圏でのんびりしている間に、生徒が死んでしまったことで全員を日本に連れ帰ることができなくなったという事実、強いシヨックを受けた愛子は責任感に押しつぶされそうになっているのだ。

だからこそ、戦えないという生徒をこれ以上戦場に送り出すことなど断じて許せなかった。

さつきも言ったが愛子の天職は、この世界の食料関係を一変させる可能性がある激レアである。その愛子先生が、不転の意志で生徒達への戦闘訓練の強制に抗議しているのだ。関係の悪化を避けたい教会側は、愛子の抗議を受け入れた。

よって自ら戦闘訓練を望んだ勇者パーティーと小悪党組、永山重吾のパーティーのみが訓練を継続することになり、彼らは現在再び訓練を兼ねてメルド団長と数人の騎士団員の付き添いと共に「オルクス大迷宮」に挑むことになったのだ。

今日で迷宮攻略六日目。

現在の階層は六十層だ。確認されている最高到達階数まで後五層である。

だが彼らはその六十階層で立ち止まっていた。目の前には何時かの悪夢のものとは異なるが同じような奈落に続きそうな深い闇が広がる谷が広がっており、次の階層へ行くには崖にかかった吊り橋を進まなければならない。それ自体は問題ない……のだが

やはり思い出してしまうのだろう。特に、香織と雫は奈落へと続いているかのような崖下の闇をジッと見つめ、手に持っている己の獲物を強く握りしめて動かなかった。

「香織……」

「——大丈夫だよ、雫ちゃん。私はもう……覚悟は出来ているから。雫ちゃんもそうでしょ?」

「……ええ、もちろんよ」

そう言つて瞳に強い輝きを放ちながら雫に微笑えむ香織に雫は彼女に応じるように微笑んだ。

香織の瞳には現実逃避や絶望は見取れず、本心で大丈夫だと言っているのが洞察力に優れ、人の機微に敏感な雫にはわかった。

(……やっぱり、香織は強いわね)

日色達の死はほぼ確定事項だ。その生存は絶望的と言うのも生温い。それでも、逃避でも否定でもなく、自らの納得のため前へ進もうとする香織に、雫は感嘆するしかない。

(対して私は……)

そんな香織に微笑みながら雫は心の中で自分に問いかける。

自分は日色が死んでいるという事実能耐えるのだろうか?

前回、雫は香織の言葉によつて再び前に進む活力を手に入れた。

だが、それはあくまで日色が生きていくという可能性があるからなのだ。

だがもし、このまま日色が見つからず、彼の死体や遺品が見つければ――

――雫は、二度と立ち上がることはできないだろう。

（――つくづく私は愚かね……）

失った者が己にとつてあまりにも大きすぎることに気づくのが失つてからだということに雫は顔には一切出さず己を自嘲する。

だが、そんな彼女達の想いを無視するのが勇者クオリティー。光輝の目には、眼下を見つめる香織の姿が、日色達の死を思い出し嘆いているように映った。クラスメイトの死に、優しい香織は今も苦しんでいるのだと結論づけた。故に、思い込みというフィルターがかかり、微笑む香織の姿も無理しているようにしか見えていない。

そして、香織が日色を特別に想っていて、まだ生存の可能性を信じているなどと、ましてや雫さえもが想っている等とは露ほどにも思っていない光輝は、度々、香織にズレた慰めの言葉をかけてしまうのだ。

「香織……君の優しいところ俺は好きだ。でも、クラスメイトの死に、何時までも囚われていちゃいけない！ 前へ進むんだ。きつと、神代も南雲もそれを望んでる」

「――」

「ちよつと、光輝……」

「雫は黙っていてくれ！ 例え厳しくても、幼馴染である俺が言わないといけないんだ。……香織、大丈夫だ。俺が傍にいる。俺は死んだりしない。もう誰も死なせはしない。香織を悲しませたりしないと約束するよ」

そう見当違いなことを言いながらキラリと齒を光らせる光輝に雫は無言で手に顔を当ててはしかなかった。

「……えっと、光輝くん？ 光輝くん言いたいことは分かったけど、私は大丈夫だよ」  
「そ、そうか！ わかってくれたか！」

光輝の見間違い全開の言葉に、香織は苦笑いしながら返答するのだった。

光輝の中で日色とハジメは既に死んだことになっている。故に、香織の訓練への熱意や迷宮攻略の目的が日色の生存を信じてのものとは考えられない。自分の信じたことを疑わず貫き通す性は、そんな香織の気持ちも、現実逃避をしているか心を病んでしまっているかと解釈するだろう。

長い付き合い故に、嫌でも光輝の思考パターンを何となく分かっってしまう香織は、だからこそ何も言わず合わせるのだった。

そう合わせただけである。

下心なく完全に口説いているようにしか思えないセリフを語る光輝の言葉を香織は既に忘れて……光輝は気づいただろうか？ 香織の言葉には感情の変化がなく、あく

まで機械的に返答しているということに。

香織は目的である日色達の搜索に全力を注いでいるため光輝の言葉を否定することも無駄でしかないと無意識に理解しているのである。

だから光輝の言葉は香織には届かないに等しいのだ。

「香織ちゃん、私、応援しているから、出来ることがあつたら言つてね」

「そうだよ、鈴は何時でもカオリンの味方だからね！」

光輝との会話を傍で聞いていて、会話に参加したのは中村恵里と谷口鈴だ。

二人共、高校に入ってからではあるが香織達の親友と言つていい程仲の良い関係で、光輝率いる勇者パーティーにも加わっている実力者ある。

中村恵里はメガネを掛け、ナチュラルボブにした黒髪の美人である。性格は温和で大人しく基本的に一步引いて全体を見ているポジションだ。本が好きで、図書委員をやつていた女の子だ。……そこ！とある日色パカと似ているとか言わない！性格が破綻しているのは確かに似てるけど！

谷口鈴は、身長百四十二センチのちみつ子である。その小さな体には無尽蔵の元気が詰まつており、常に楽しげでチョロリンと垂れたおさげと共にぴよんぴよんと跳ねている。クラスのマスコットNo. 2である。

そんな二人も、日色が奈落に落ちた日の香織の取り乱し様に、その気持ちを悟り、香

織の目的にも賛同してくれている。

「うん、恵里ちゃん、鈴ちゃん、ありがとう」

そんな二人に微笑む香織。

「うう、カオリンは健気だねえ、神代君め！ 鈴のカオリンをこんな悲しませて！ 生きてなかつたら鈴が殺つちゃうんだからね！」

「す、鈴？ 生きてなかつたら、その、こ、殺せないと思うよ？」

「細かいことはいいの！ そうだ、死んでたらエリリンの降霊術でカオリンに侍せちゃえばいいんだよ！」

「す、鈴、デリカシーないよ！ 香織ちゃんや雫ちゃんは、神代君も南雲ちゃんも生きてるって信じてるんだから！」

「——というか日色にそんなことすれば、彼、きつとキレるわよ。鈴は彼のアイアंकローを喰らいたいのか？」

「ひにゃッ!!それは嫌だ!!」

鈴が暴走し恵里が諫める、それがデフォである。

二人の会話を雫がツッコミを入れると鈴は顔を真っ青にし身体を震わせる。そんないつもどうりの光景にいつしか香織もいつもの笑顔になっている。

ちなみに、光輝達は少し離れているので聞こえていない。肝心な話やセリフに限って

聞こえなくなる難聴スキルは、当然の如く光輝にも備わっている。……光輝然り香織然り容姿がいい者はそんなスキルがデフォで装備されているのだろうか。

「恵里ちゃん、私は気にしてないから平気だよ。」

「鈴もそれくらいにしなさい。恵里が困ってるわよ?」

香織と雫の苦笑い混じりの言葉に恵里は、香織が鈴の言葉を本気で気にしていない様子にホツとしながら、降霊術という言葉に顔を青褪めさせる。

「エリリン、やっぱり降霊術苦手? せつかくの天職なのに……」

「……うん、ごめんね。ちゃんと使えれば、もつと役に立てるのに……」

「恵里。誰にだって得手不得手はあるわ。魔法の適性だって高いんだから気にすることないわよ?」

「そうだよ、恵里ちゃん。天職って言っても、その分野の才能があるというだけで好き嫌いとは別なんだから。恵里ちゃんの魔法は的確で正確だから皆助かってるよ?」

「うん、でもやっぱり頑張つて克服する。もつと、皆の役に立ちたいから」

恵里が小さく拳を握つて決意を表す。鈴はそんな様子に「その意気だよ、エリリン!」とぴよんぴよん飛び跳ね、香織と雫は友人の頑張りに頬を緩める。

恵里の天職は、『降霊術師』だ。

闇系魔法は精神や意識に作用する系統の魔法で、実戦などでは基本的に対象にバッド

ステータスを与える魔法と認識されているのだが降霊術は、その闇系魔法の中でも超高難度魔法で、死者の残留思念に作用する魔法だ。聖教教会の司祭の中にも幾人かの使い手があり、死者の残留思念を汲み取り遺族等に伝えることやその気になれば遺体の残留思念を魔法で包み実体化の能力を与えて使役したり、遺体に憑依させて傀儡化させたり生身の人間に憑依させることでその技術や能力をある程度トレースすることもできるのだ。

しかし、ある程度の受け答えは出来るものの、その見た目は青白い顔をした生氣のない、まさに幽霊という感じであり、また死者を使役するということに倫理的な嫌悪感を覚えてしまうので、恵里はこの術の才能があってもまるで使えていなかった。

そんな女子四人の姿を、正確には香織を、後方から檜山大介が暗い瞳で見つめていた。あの日、王都に戻ってしばらく経ち、生徒達にも落ち着きに戻ってきた頃、案の定、あの窮地を招いた檜山には厳しい批難が待っていた。だが、それを予想していた檜山は光輝の目の前で土下座をしたのだ。

光輝なら確実に謝罪する自分を許しクラスメイトを執り成してくれと予想したのである。

その予想は見事的中した。光輝の許しの言葉で檜山に対する批難は収まったのだ。香織も元来の優しさから、涙ながらに謝罪する檜山を特段責めるようなことはしなかつ



た。檜山の計算通りである。

また、例の人物からの命令も黙々とこなした。とても恐ろしい命令だった。戦慄すべき命令だった。強烈な忌避感を感じたが、一線を越えてしまった檜山は、もう止まることができなかった。

しかし、クラスにごく自然と溶け込みながら裏では恐ろしい計画を練っているその人物に、檜山は畏怖と同時に歓喜の念も抱いていた。

(あいつは狂ってやがる。……だが、付いて行けば香織は俺の……)

言うことを聞けば香織が手に入る、その言葉に檜山は暗い喜びを感じ思わず口元に笑みを浮かべるのだった。



そして一行はとうとう歴代最高到達階層である六十五層にたどり着いた。その階層でも順調に進んでいると、大きな広間に出た。何となく嫌な予感がする一同。

その予感的中した。広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上がったのだ。赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。それは、とても見覚えのある魔法陣だった。

「ま、まさか……アイツなのか!？」

光輝が額に冷や汗を浮かべながら叫ぶ。他のメンバーの表情にも緊張の色がはつき

りと浮かんでいた。

「マジかよ、アイツは死んだんじゃないのかよ！」

龍太郎も驚愕をあらわにして叫ぶ。それに応えたのは、険しい表情をしながらも冷静な声音のメルド団長だ。

「迷宮の魔物の発生原因は解明されていない。一度倒した魔物と何度も遭遇することも普通にある。気を引き締めろ！ 退路の確保を忘れるな！」

いざと言う時、確実に逃げられるように、まず退路の確保を優先する指示を出すメルド団長。それに部下が即座に従う。だが、光輝がそれに不満そうに言葉を返した。

「メルドさん。俺達はもうあの時の俺達じゃありません。何倍も強くなつたんだ！ もう負けはしない！ 必ず勝ってみせます！」

「へっ、その通りだぜ。何時までも負けっぱなしは性に合わねえ。ここらでリベンジマッチだ！」

龍太郎も不敵な笑みを浮かべて呼応する。メルド団長はやれやれと肩を竦め、確かに今の光輝達の実力なら大丈夫だろうと、同じく不敵な笑みを浮かべた。

そして、遂に魔法陣が爆発したように輝き、かつての悪夢が再び光輝達の前に現れた。「グウガアアアア!!!」

体長十メートル級の四足に瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭

部の兜から生えた角から炎を放っている魔物、ベヒモスが光輝達を壮絶な殺意を宿らせた眼光で睨む。

全員に緊張が走る中、そんなものとは無縁の決然とした表情で真つ直ぐ睨み返す女の子が二人。

かたや片手に刀に似た片刃の刃シヤムシールと刀の中間のようなアーティファクトの剣を持ち、かたや治癒師特有のアーティファクトの白い長杖を携える。

「雫ちゃん……行くよ」

「——ええ、もちろんよ」

雫と香織は彼女達だけしか聞こえないように、しかし確かな意志の力を宿らせた声音で宣言した。

「もう誰も奪わせない。必ず私は彼のもとへ行く、だから——」

「こんなところでは止まれない。私は彼に謝らなきゃいけないの、だから——」

「私はあなたを踏み越える！」

◆ 今、過去を乗り越える少女達の戦いが始まった。

◆ 先手は、光輝だった。

「万翔羽ばたき、天へと至れ、【天翔閃】！」

詠唱と共に光輝の振るつた聖剣になぞるように曲線状の光の斬撃が轟音を響かせながらベヒモスに直撃する。以前は更に上位技である【神威】の一撃ですら傷一つかなかったベヒモスの肉体だが光輝のいつまでもあの頃のままではないという宣言を証明するかの様にベヒモスの胸の部分に斜めの剣線を刻み、赤黒い血を滴らせた。

「グウルガアア!？」

突然の胸の痛みにベヒモスは悲鳴をあげて後退する。

「いける！俺たちは確実に強くなっている！永山達は左側から、檜山達は背後を、メルドさんは右側から！正面は俺たちが引き受ける！後衛は魔法準備を！上級を頼む！」

メルド団長との訓練の賜物により光輝が矢継ぎ早に指示を出す。

「迷いが無い良い指示だ。聞いたな！総員、光輝の指示に従うぞ！」

メルド団長の叫びと共に騎士団員が右サイドに走り出し、それを機に少し遅れて総員が一斉に動き出し、ベヒモスを包囲した。前衛組が暴れるベヒモスを行かせまいと必死に応戦する。

「グルウアアアア！」

それをまどろっこしく感じたのかベヒモスは踏み込みで地面を粉碎しながら突進を開始する。

「龍太郎！永山！防いでくれ！」

「わかつてら！」

「行かせん！」

光輝の叫びと共にクラスの二大巨漢、坂上龍太郎と永山重吾がスクラムを組むようにベヒモスに組み付いた。

「猛り地を割る力をここに！【剛力】！」

身体能力、特に膂力を強化する魔法を使い全身ごと吹き飛ばされるほどの衝撃に両足で地を削りながらベヒモスの突進を受け止める。

「ガアアア!!」

「らああああ!!」

「おおおお!!」

三者三様に雄叫びを上げ必死に力を振り絞る。流石に完全には止められないまでも勢いのある程度殺したことでベヒモスは苛立つように地面を踏みならした。

その隙を当然他のメンバーは逃しはしない。

「粉碎せよ！破碎せよ、爆砕せよ、【豪撃】！」

いち早くベヒモスに飛び込んだメルド団長が魔法で剣速と腕力を同時に強化した騎士剣の重く鋭い一撃をベヒモスの角に叩きつける。しかし、その一撃はベヒモスの角に

罇を入れ三割程食い込んだまでも切断するには至らない。

「ぐっ、切り裂けないか！」

「任せてください！全てを切り裂く至上の一閃、【絶断】！」

苦悶をあげるメルド団長に応じるように雫が魔法により己の魔力色である瑠璃を纏い切れ味の増したアーティファクトの剣で抜刀術を繰り出す。

瑠璃の斬撃はベヒモスの角の残り七割を見事切断し、遂にベヒモスの角の一本が半ば残して断ち切られた。

「ガアアアアア!？」

角を切り裂かれたことに衝撃を受けたのか渾身の力で暴れ回り、咄嗟に【縮地】で回避した雫を除いた永山、龍太郎、メルド団長を吹き飛ばした。

「優しき光は全てを抱く 【光輪】」

香織は自身のアーティファクトである白い長杖に白堊色の魔力を灯らせながら【光輪】という形を変化させることで衝撃を殺す魔法により幾つもの光の輪が組み合わさった網が吹き飛ばされた三人を受け止める。

間髪入れず遠隔で複数人を同時に癒せる以前使った【天恵】の上位版である【回天】を唱え三人を癒していく。

それだけではとどまらず香織はまるで意識を切り替えるように【回天】に魔力を注ぎ

ながら新たな詠唱を紡いでいく。

「抑する光の聖痕、虚より来りて災禍を封じよ、【縛光刃】！」

詠唱が完了すると共に香織の長杖から剣のように見える無数の光の十字架が飛び出し、散弾のようにベヒモスに強襲する。

「グルウア!!？」

無数の光の十字架はベヒモスの肉体に突き刺さり、地面に刃が押し込められていることで地面に縫い付けられる。

香織は日色を探す決意をして以来、戦闘に向かない自分でも回復役だけではないように血のにじむ努力を続けてきた、そうして考えた技の一つがこの捕縛魔法の攻撃転化である。

「雫ちゃん！」

「ええー！」

地面に縫い付けられたことで生まれた隙を突くようにベヒモスの攻撃を避けた雫が再度ベヒモスへ距離を詰める。

【縮地】を用いて風が破裂するようなヴオツ！ という音を一瞬響かせて姿が消えたかと思えば、次の瞬間にはベヒモスの顔の側面に現れ、いつの間にか納刀していた剣を抜刀術の要領で抜き放った。

先程使った【絶断】の効果で未だ切れ味を上昇させたアーティファクトである剣で納刀状態から全身を回転させながら抜刀を行う。

八重樫流刀術——【水月・漣】

この技は本来納刀状態から回転しながら抜刀をおこない、全方位に切り払う抜刀術なのだが雫はベヒモスの肉体を斬り裂いた後の回転の勢いを次の技に繋げるために利用した。

八重樫流刀術——【流水之太刀】

回転したことによってベヒモスから逆の方向を向いた身体を回転の勢いを無駄にすることなく反転させながら素早く袈裟斬りを繰り返し出し、最初に斬り裂いた傷口に重ねるように更に斬撃を刻み付ける。

「グガアアアアアア!!」

連続で傷口を深く斬り裂かれたことでベヒモスが苦悶の声を上げ、一層多く暴れまわる。

雫は冷静にベヒモスの攻撃を受け流し、時に回避に徹することで攻撃を捌き続け、その余波で地面が吹き飛び、破片が雫の皮膚を掠めていく。

その光景に光輝は雫が苦戦していると思ったのか雫へと叫び、同時に詠唱を開始する。



「雫、下がってくれ！俺が行く！」

「——チツ……わかったわ」

もう少しで再びベヒモスに攻撃を当てられる！そう思った雫だが光輝の言葉に渋々と最後にベヒモスに薙ぎ払いを行なったあと、後方へと跳躍する。

そして雫と入れ替わるように光輝が突きの構えを取り、未だ暴れるベヒモスに真っ直ぐ突進した。そして、先ほどの傷口に切っ先を差し込み、突進中に詠唱を終わらせて魔法発動の最後のトリガーを引く。

「【光爆】」

瞬間、聖剣に蓄えられた膨大な魔力が、差し込まれた傷口からベヒモスへと流れ込み大爆発を起こした。

「ガアアアア!!」

傷口を抉られ大量の出血をしながら、技後硬直中の僅かな隙を逃さずベヒモスが鋭い爪を光輝に振るった。

光輝は咄嗟の攻撃に反応できず、そのまま鋭い爪の一撃を喰らう——かと思われたが

……

「光輝、退きなさい！」

「うわっ！」

それを予想していた雫が光輝の鎧の首根っこを掴み後ろに放り投げることで光輝をベヒモスの射程外へと逃した。

代わり雫へと鋭い爪が襲い掛かり――

八重樫流刀術――【音刃流し】

咄嗟に雫は剣を構え、襲い掛かる鋭い爪を剣で受け止めた瞬間、手首の返しで剣撃を逸らそうとする。

剣撃を逸らした瞬間、擦れる剣同士が澄んだ音色を発生させるが故に名付けられたこの技は、相手の斬撃を逆手に持った刀で受け流しつつ、カウンターの斬撃を繰り出すカウンター技なのだが光輝を投げ飛ばされたことで体勢が崩れていたこととベヒモスの膂力によつて完全に受け流すことはできず、右肩を切り裂かれてしまう。

「あぐつ!?!」

「雫!」

襲い掛かる肩の激痛に顔を歪め、光輝の悲鳴のような叫びが聞こえてくるが雫は無視して、歯を食いしばりながら手首の返しで剣撃を逸らし、同時に逆手に持ち替えて切り上げる。

「ハアアア!!!」

「グガアア!?!」

まさかカウンターが来るとは思わなかったのだろう、雫の切り上げた斬撃は鋭い爪を半ば残して断ち切った。

悲鳴を上げるベヒモスに雫は痛みで肩を抑えながら、後方へと後退する。しかしその痛みも一瞬だ、すかさず香織の回復魔法がかけられる。

「天恵よ、彼の者に今一度力を【焦天】」

先ほどの回復魔法が複数人を対象に同時回復できる代わりに効果が下がるものとするれば、これは個人を対象に回復効果を高めた魔法だ。雫が光に包まれ一瞬で全快する。ベヒモスが、雫が後退した間、奮闘していた他のメンバーを咆哮と跳躍による衝撃波で吹き飛ばし、折れた角にもお構いなく赤熱化させていく。

「皆、離れて！アレが来るわよ！」

雫の警告とベヒモスの跳躍は同時だった。ベヒモスの固有魔法は経験済みなので皆一斉に身構える。しかし、今回のベヒモスの跳躍距離は予想外だった。何と、光輝達前衛組を置き去りにし、その頭上を軽々と超えて後衛組にまで跳んだのだ。大橋での戦いでは直近にしか跳躍しなかったし、あの巨体でここまで跳躍できるとは夢にも思わず、前衛組が焦りの表情を見せる。

だが、後衛組の一人が呪文詠唱を中断して、一步前に出た。谷口鈴だ。

「（（）は聖域なりて、神敵を通さず【聖絶】!!」

呪文の詠唱により光のドームができるのとベヒモスが隕石のごとく着弾するのは同時だった。凄まじい衝撃音と衝撃波が辺りに撒き散らされ、周囲の石畳を蜘蛛の巣状に粉碎する。

しかし、鈴の発動した絶対の防御はしっかりとベヒモスの必殺を受け止めた。だが、本来の四節からなる詠唱ではなく、二節で無理やり展開した詠唱省略の【聖絶】では本来の力は発揮できるはずがない。その証拠に既に障壁にはヒビが入り始めている。

それでもなお、ここまで持っているのは鈴が天職『結界師』を持っているからだ。鈴でなければ、ここまで持たせるところか、発動すら出来なかつただろう。鈴は歯を食いしばり、二節分しか注げない魔力を注ぎ込みながら、必死に両手を掲げてそこに絶対の障壁をイメージし続ける。

「うううう！ 負けるもんかあー！」

しかしどれだけ弱気を払って必死に叫んでも限界はもうそこだ。ベヒモスの攻撃は未だ続いており、もう十秒も持たない。

破られる！鈴がそう心の内で叫んだ瞬間――

「光の恩寵を以て宣言する。ここは聖域にして我が領域。全ての魔は我が意に降れ

【廻聖】――

鈴の体が光に包まれ、【聖絶】に注がれる魔力量が跳ね上がった。香織が使った魔法は

光系の上級回復魔法「廻聖」。これは、一定範囲内における人々の魔力を他者に譲渡する魔法だ。基本的には、自分の魔力を仲間に譲渡することで、対象の魔力枯渇を一時的に免れさせたり、強力な魔法を放つのに魔力が足りない場合に援護する事を目的とした魔法である。

また、譲渡する魔法は術者の魔力に限らないので、領域内の者から強制的に魔力を抜き取り他者に譲渡する事も出来るのだがその場合は詠唱に時間がかかり、抜き取る魔力の量もあまり多くは出来ないという欠点がある。

だが、この魔法の真骨頂はそこではない。この魔法により強制的に魔力を抜き取り他者に譲渡することができるといふことはつまり「廻聖」とは他人の魔力に干渉する魔法なのだ。

瞬間、「聖絶」が一気に本来の四節分の魔力が流れ込むと同時にパシンツと乾いた音を響かせ障壁のヒビが一瞬で修復され、香織によって魔力を暴走されたことでドオオン！と音を立てベヒモスの頭が爆発した。

「グルガアアアアアア!!」

「きやあ!!」

その爆発の勢いは凄まじく張り直した「聖絶」を介して強大な衝撃が伝わってくるため、鈴は咄嗟に悲鳴を上げてしまう。ベヒモスの角にどれだけ魔力が込められていたか

がよくわかるだろう。

ベヒモスは爆発と共に吹き飛ばされ、着地すらままならずドサリツ！と地響きを立て倒れてしまう。自分の込められた魔力が意図せず暴発したからだろうベヒモスの堅固な外殻は幾つか融解し、残っていた角は形も残らずへし折れていた。

それでもどうにか起き上がろうとするベヒモスに前衛組が肉薄する。光輝が聖剣を振るいながら叫ぶように指示を出す。

「後衛は後退しろ！」

光輝の指示に後衛組が一気に下がり、前衛組が再び取り囲んだ。ヒット&amp;amp;アウェイでベヒモスを翻弄し続け、遂に待ちに待った後衛の詠唱が完了する。

「下がって！」

後衛代表の恵里から合図がでる。光輝達は、渾身の一撃をベヒモスに放ちつつ、その反動も利用して一気に距離をとった。

その直後、炎系上級攻撃魔法のトリガーが引かれた。

「【炎天】」

術者五人による上級魔法。超高温の炎が球体となり、さながら太陽のように周囲一帯を焼き尽くす。ベヒモスの直上に創られた【炎天】は一瞬で直径八メートルに膨らみ、直後、ベヒモスへと落下した。絶大な熱量がベヒモスを襲う。あまりの威力の大きさに味

方までダメージを負いそうになり、慌てて結界を張っていく。「炎天」は、ベヒモスに逃げる暇すら与えずに、その堅固な外殻を融解していった。

「グウルアガアアアアア!!」

ベヒモスの断末魔が広間に響き渡る。いつか聞いたあの奈落到ちていくときの絶叫だ。鼓膜が破れそうなほどのその叫びは少しづつ細くなり、やがて、その叫びすら燃やし尽くされたかのように消えていった。

そして、残ったのは黒ずんだ広間の壁と、ベヒモスの物と思しき僅かな残骸だけだった。

「か、勝ったのか?」

「勝ったんだろ……」

「勝っちゃまったよ……」

「マジか?」

「マジで?」

皆が皆、呆然とベヒモスだった物を眺め、ポツリポツリと勝利を確認するように呟く。同じく、呆然としていた光輝が、我を取り戻したのかスつと背筋を伸ばし聖剣を頭上へ真っ直ぐに掲げた。

「そうだ! 俺達の勝ちだ!」

キラリと輝く聖剣を掲げながら勝鬨を上げる光輝の声にようやく勝利を実感したのか一斉に歓声が沸きあがった。男子連中は肩を叩き合い、女子達はお互いに抱き合って喜びを表にしている。メルド団長達も感慨深そうだ。

そんな中、未だにポーと何かを思うようにベヒモスのいた場所を眺めている香織に雫が声を掛けた。

「香織? どうしたの?」

「え? ああ、なんでもないよ。ただ……ここまで来たんだなあ、つてそう思ったわけ」

そう苦笑いする香織。香織はかつての悪夢を倒すが出来たことに感慨に浸っていたらしい。

「そうね。私達は確実に強くなってるわ」

「うん、……雫ちゃん、もつと先へ行けば日色君も……」

「……ええ、きつとね。その為に私達は強くなるうとしてるんじゃない」

「えへへ、そうだね」

先へ進める。それは日色の安否を確かめる具体的な可能性があることを示している。答えが出てしまう恐怖に、つい弱気がでたのだろう。それを察して、雫がグツと力を込めて香織の手を握った。……本当は自分が何よりもその答えに怯えていることから目を逸らして。



そんな二人の所へ光輝達も集まってきた。

「二人共、無事か？香織、最高の治癒魔法だったよ。香織がいれば何も怖くないな！」

「……ええ、大丈夫よ。光輝は……まあ、大丈夫よね」

「……うん、平気だよ、光輝くん。……皆の役に立ててよかったよ」

爽やかな笑みを浮かべながら香織と雫を労う光輝に二人は何か含みを持たせた微笑で返す。しかし、次ぐ光輝の言葉に少し心に影が差した。

「これで、神代も南雲も浮かばれるな。自分を突き落とした魔物を自分が守ったクラスメイトが討伐したんだから」

「……」

光輝は感慨にふけた表情で雫と香織の表情には気がついていない。どうやら、光輝の中で日色達を奈落に落としたのはベヒモスのみという事になっているらしい。確かに間違いではない。直接の原因はベヒモスの固有魔法による衝撃で橋が崩落したからだ。しかし、より正確には、撤退中の日色とハジメに魔法が撃ち込まれてしまったことである。

今では、暗黙の了解としてその時の話はしないようになっていたが、事実は変わらな。だが、光輝はその事実を忘れてしまったのか意識していないのかベヒモスさえ倒せば日色とハジメは浮かばれると思っっているようだ。……きつと日色なら「喧嘩売って

るのか、テンプレ勇者」とキレルだろう。

基本、人の善意を無条件で信じる光輝にとって、過失というものは何時までも責めるものではない、ましてや故意に為されたなどは夢にも思わないだろう。

だからこそ、光輝が行ったのは誰かのせいという事実をなかつたことにしたのだ。しかも悪気がないためさらにタチが悪い。

その言葉によつて雫と香織の光輝に対する信頼度が更に一層下がり、香織の瞳には失望の色が浮かび上がっていく。

これより先は未知の領域、しかし光輝達は過去の悪夢を振り払うことには成功したが光輝と香織達のすれ違いは一層深まるばかりなのだった。

## 少女達は仲が悪い

「……どうしてこうなった」

「……日色、ファイト……」

「——ユエはいい加減日色の背中から降りて、私が代わりに乗るから」

「……だが断る」

「呑気だな、お前ら」

現在、日色はユエを背負い、ハジメと共に猛然と草むらの中を逃走していた。周りには推定約160センチ程度の雑草が大量に生い茂り日色の肩まで生い茂っている、おそらくユエならば雑草に完全に隠れてしまうだろう。そんな生い茂る雑草を鬱陶しそうにかき分けながら猛然と走り続ける。

何故なら——

「……」「……」「キシャアアアアアア!!」「……」「……」

——三百体程の爬虫類を思わせる魔物に襲われているからだ。

時は少し遡る。

日色達が準備を整えて再び攻略を開始して以来、楽々と10階層も降りることができ

た。

これもハジメの錬成や蹴り技、銃技などが上達し、装備も充実してきたこともあるが、なによりもユエのお陰が大きい。

全属性の魔法をノータイムで使用し的確に日色のサポートをしてくれる、ただし回復系と結界系の魔法は苦手らしいがユエには「自動再生」があり日色達には神水があるため問題はない……筈だったのだが別の問題が新たに発生した。

あの修羅場以来ハジメとユエの仲が大変悪いのである。

それはもう、お前らは親を殺されたのかというレベルで。

ハジメもユエも日色をサポートする時などは的確にしてくれるのだが何度も敵ごとハジメはユエを、ユエはハジメを攻撃するのである。

しかも食事の時間や休息中にすらも睨み合い、火花を散らすことも多々ある……まあ、食事中に修羅場などになれば日色がキレる為、食事中のみはマシになるのだが。

そんなこんなで新たに三人が降り立ったのげ現在の階層である。最初に視界に映ったのが樹海で十メートルを超える木々が鬱蒼と茂っており、空気はどこか湿っぽい。前回とは違って決して暑くないのが救いだっただ。

三人は階下への階段を探して探索していると、突然ズズンツという地響きが響き渡る。何事かと警戒度を高める三人の前に現れたのは巨大な爬虫類を思わせる見た目は

完全にテイラノサウルスな魔物だ。

ただし、頭に一輪の可憐な花を生やしていた。

もう一度言おう。

頭に一輪の可憐な花を生やしていた。

鋭い牙と迸る殺気が議論の余地なくこの魔物の強力を示しているのだが、いつと視線を上に向けてと向日葵に似た花がふりふりと動き、とつてもシユールだ。

そんなテイラノサウルスが咆哮を上げハジメ達に向かって突進してくる。

日色は取りあえず応戦するため刀を抜こうと――

「緋槍」

――ユエの掲げた手から現れた炎は渦を巻いて円錐状の槍の形をとり、一直線にテイラノの口内目掛けて飛翔し、あっさり突き刺さって、そのまま貫通。周囲の肉を容赦なく溶かして一瞬で絶命させた。地響きを立てながら横倒しになるテイラノ。

そして、頭の花がテイラノサウルスの墓場だと示すようにポトリと地面に落ちた。

「……」

『あるえ？もしかして俺役立たずになってるう？』

いろんな意味で思わず押し黙る日色。

最近、戦闘がこのようになることが多い。最初は日色の援護に徹してくれていたのだ

が何故か途中から対抗するように先制攻撃を仕掛け魔物を瞬殺するのだ、しかもそれに対抗するようにハジメも真似し始めたせいで日色の出番が全くと云っていいほどない。

日色は前衛として前に出ているのだがハジメの銃火器とユエの魔法の前では、正直あまり役に立っていない、何故なら自分が一匹すりつぶしている間にハジメやユエが一人です、4匹程葬っている。

それ故に日色はもしかして自分は役たたずなんじゃないかと思いついて始めるようになった。まさか、自分が足手まといだから即行で終わらせているとかではあるまいな？と内心不安に駆られてしまう。……実際はその気になれば日色はハジメやユエが3、4匹程葬っている間に7、8匹ほど葬れるのだが日色自身は気づいていない。

日色は無言で柄に触れていた手を離す。

「……最近、俺はあまり動いてない気がするんだが……」

ユエは振り返って日色を見ると、無表情ながらもどこか得意げな顔をする。

「……私、役に立つ。……日色のパートナーだから」

ユエはそう言いながら日色からハジメへと視線を変えて――

「……………フツ」

「……………（ギリッ！）」

――日色には見えないようにハジメに嘲笑を浴びせた。

ユエに嘲笑を浴びせられたハジメは歯ぎしりをするほど強く歯を食いしばり、ピンポイントでユエに殺気を浴びせ、それに応じるようにユエも殺気をハジメにぶつける。再びお互いの間に火花が散り始めた。

ユエがさつき呟いたことはハジメに対する宣戦布告——どころか既に攻撃しているに等しい言葉である。

何故なら日色のパートナーということは自分が日色の一番だ、と言っているに等しいからである。当然、ハジメがその言葉にキレないはずがない。その証拠に今すぐ撃ち殺してやろうかとも言うようにホルスターに収めているドンナーへと手が伸び始めている。

すると、再びさつきとは逆の方向からまた別のテイラノが頭に華麗な花を咲かせながら此方へと襲いかかってきた。

再びユエがテイラノへと手を掲げ——

「緋——」

ドパンツ!!

——瞬間、ユエの眩く魔法名を遮るかのように赤雷を纏った閃光が宙を奔り、テイラノの顔を貫き、赤雷によって肉を焼きながら顔を粉砕した。

再び地響きを立てながら横倒しになるテイラノの上に頭の花が落ちる。

「……………」

無言で掲げていた手を下げるユエに右手に硝煙を上げるドンナーを持ったハジメがくるくるとドンナーを回転させながらホルスターに戻す。どうやらさっきの赤雷はハジメのドンナーによるものだったらしい。

カシヤンとホルスターにドンナーを収めたハジメはユエへと視線を向け――

「……………ハッ」

「――（ブチッ！）」

――嘲笑を浴びせ返した。

額に青筋を立てるユエをハジメは嘲笑付きで視線を逸らし、日色の腕に抱きついた。

それはまさしく「お前如きに日色のパートナーが務まるわけがない、日色のパートナーは私よ」とでも言っているようである。

「――日色、勝手に自分をパートナーと思い込んでいる妄想癖のある寄生虫は放つておいて、早く移動しよう。さっさとここを攻略しないといけないから」

「……………キメラ如きが吠えるな」

「――ああ!?!」

「……………仲いいなお前ら」

ユエはハジメに対抗するようにハジメが抱きついた反対の腕に抱きつき、ハジメを罵



倒すると共に二人は再び火花を散らしながらキャッツファイトを開始する。

日色は己の腕に抱きつくそんな彼女達を死んだ目で見ることにしかできず、ハアと溜息を吐くのだった。

日色からすればこの現状は全くもって理解不能である。

もともと奈落に落ち、ハジメが豹変して以来自分の腕に抱きついて寝る等のスキンシップがあつたが日色はそれらをハジメの精神を支えるために必要なものとして鬱陶しそうにしたが決して拒絶することはなかった。

ハジメも日色も元々はありふれた高校生なのだ、突然命の危険を常に感じる奈落に落ちてしまえば当然精神は摩耗していく、故にハジメは自分と親しかったからこそ自分の傍で休むことで精神を保っているのだらうと思ひ、依存して欲しくはないため注意は必要だがある程度許容していた。

だからこそ、ユエと出会ったことで同じ女の子同士（ユエを女の子と言えないんじゃないかという突っ込みは無しで）親しくなり磨り減っていく精神をさらに休めることができるんじゃないだらうかと日色は思ったのだが現状を見るに親しくなるどころかむしろ仲が悪くなってしまうている。喧嘩するほど仲がいいとも言えるがこの場合はどうなのだろう？

『うーむ、性別は違うけど原作では確かバカップルだった気がするんだけど……なんで

や?』

やはり創作物と現実とは違うんだな、と日色は結論づける。

しかし、どうして彼女達は仲が悪いのだろうか? 日色はいくら考えても答えは出ない。

(やはり、地球とトータスの価値観が違うからか?)

もつと根本的な理由で仲が悪いのだが自覚のない元凶には一切理解できない。

いつか聞いてみようか、とさらつと彼女達にとつて残酷なことを考えながら傍から見ればいちやつしている様に見える三人だが日色の「気配感知」に続々と魔物が集まってくる気配が捉えられた。

十体ほどの魔物が取り囲むように日色達の方へ向かってくる。統率の取れた動きに、二尾狼のような群れの魔物か? と日色は訝しみながら二人に「……さっさと離せ」と眩き、魔物が近づいていることを伝え二人に移動を促して現場を離脱する。数が多いので少しでも有利な場所に移動するためだ。

円状に包囲しようとする魔物に対し、日色達は、その内の一体目掛けて己の存在がバレないように隠れながら接近した。

そうして、生い茂った木の枝を払い除け飛び出した先には、体長二メートル強の爬虫類、例えるならプトル系の恐竜のような魔物がいた。……頭からチューリップのよう

な花をひらひらと咲かせて。

「……かわいい」

「……流行りなの？」

「——あの花は光合成しているのか気になるな」

そのラプトルの姿に三者三様、ユエが思わずほっこりしながら呟き、ハジメはシリアスブレイカーな魔物にジト目を向け、有り得ない推測を呟く。日色の場合、この状況でその感想はおかしい。

ラプトルは、テイラノと同じく、「花なんて知らんわー」というかのように殺気を撒き散らしながら低く唸っている。臨戦態勢である。花はゆらゆら、ふりふりしているが……

「シヤアアアア!!」

ラプトルが、花に注目して立ち尽くすハジメ達に飛びかかる。その強靱な脚には二十センチメートルはありそうなカギ爪が付いており、ギラリと凶悪な光を放っていた。

「ハジメ、花」

「——わかった」

しかし、日色の淡々とした単語だけの指示にハジメは宙に浮くラプトルの頭のチューリップを的確に撃ち抜いた。

ドパンツという発砲音と同時にチューリップの花が四散する。

さつき眩いた日色の指示は言葉にすると『ラプトルの頭のチューリップのみを撃ち抜け』である。

ラプトルは一瞬ビクンと痙攣したかと思うと、着地を失敗してもんどり打ちながら地面を転がり、樹にぶつかって動きを止めた。シーンと静寂が辺りを包む。ユエもトコトコとハジメの傍に寄ってきてラプトルと四散して地面に散らばるチューリップの花びらを交互に見やった。

「……………死んだ？」

「……………いや、生きているようだ」

日色の見立て通りピクピクと痙攣した後、ラプトルはムクツと起き上がり辺りを見渡し始めた。そして、地面に落ちているチューリップを見つけるとノツシノツシと歩み寄り親の敵と言わんばかりに踏みつけ始めた。まるで『野郎、ぶっ殺してやる!!』と言っているようである。

「え、何、この反応? どういうこと?」

「……………イタズラされた?」

「いや、イタズラされたガキじゃあるまいし……………」

ラプトルは一通り踏みつけて満足したのか、如何にも「ふう、いい仕事したぜ!」と

言わんばかりに天を仰ぎ「キュルルル〜！」と鳴き声を上げた。そしてようやく日色達の存在に気がついたように日色達を見るとビクツとする。

「今気がついたの？ どんだけ夢中だったのよ」

「……………やつぱりイジメ？」

「……………」

ハジメがツツコミ、ユエが同情したような眼差しでラプトルを見る。ラプトルは暫く硬直したものの、日色が無言で殺気を出したことで勝てない相手だと悟ったのかすぐさま全力で逃走した。その走り姿はあまりにも必死で「ひえええええ!!？」という声が聞こえてきそうである。

「ホント、一体なんなの？」

「……………イジメられて……………哀れ」

「金ロリはいい加減イジメから離れろ。絶対違う」

理解ができない状況に日色とハジメは混乱するがそもそも迷宮の魔物自体わけのわからない物ばかりなので気にするのを止めた。包囲網がかなり狭まってきていたので急いで移動しつつ、有利な場所を探っていく。

程なくして直径五メートルはありそうな太い樹が無数に伸びている場所に出た。まるで空中回廊のように隣り合う樹の太い枝同士が絡み合っている。きつと昔のハジメ

ならば『ファンタジー、スゲー!』と目を輝かせるだろう。その証拠に——  
『巨大樹の森じゃん! やつべ、マジやつべ! 女型の巨人が来るぞ!!』

——などとハツチャケている奴がいるし。

日色とハジメは「空力」を用いて片手にユエを抱えて、頭上の太い枝に飛び移る。中・遠距離を担当するハジメとユエに樹の下に集まってきた魔物達を殲滅してもらおうと考えたのだ。

五分もかからず眼下に次々とラプトルが現れ始めたので日色も自分の文字魔法で殲滅の手助けをしようとし、人差し指に蒼い魔力を灯らせて——硬直した。

ハジメやユエも焼夷手榴弾を投げようとして硬直したり魔法を使おうとして硬直していた。

何故なら……

「…なんでどいつもこいつも頭に花をつけてるの!」

「……ん、お花畑」

「シユールすぎるな」

ハジメ達の言う通り、現れた十体以上のラプトルは全て頭に花をつけていた。それも赤や白、黄色といった色とりどりの花を。チューリップの歌が日色とハジメの脳内にリフレインされ始めたがすぐさま停止させる。

ハジメは「焼夷手榴弾」を投げ落とすと同時に、その効果範囲外にいるものから優先してドンナーで狙い撃ちにした。連続して発砲音が轟き、その度に紅い閃光がラプトルの頭部を一発の狂いもなく吹き飛ばしていく。ユエも同じく周囲の個体から先程も使った「緋槍」を使って仕留めていく。

日色は文字魔法で『油』と書いて燃焼の勢いを加速させたり、刀に『斬』の文字を書いて、斬撃を飛ばし一体ずつ仕留めていく。

群れの中央で「焼夷手榴弾」が爆発し、摂氏三千度の燃え盛るタールが飛び散り周囲のラプトルを焼き尽くしていくことにこの階層の魔物にも十分に効いているようだ。ハジメは胸を撫で下ろす。流石に「焼夷手榴弾」が通用しなくなり、攻撃手段がひとつ無くなるとなると困るのだ。

結局十秒もかからず殲滅に成功したが、日色とハジメの表情は優れない、日色は顎に手を置いて何やら考えている。ユエがそれに気がつき首を傾げながら尋ねた。

「……日色？」

「……………やはりそうか。ハジメ、金ロリ、近くにある一番高い樹に移動するぞ」

「……………どうしたの？」

日色はそう呟くと共に刀を収め、すぐさま移動しようとする。その行動に疑問を持つたユエが疑問の声を投げかけるとその疑問にハジメが答えた。

「ユエはまだ気づいてないの?」

「?」

「…敵が弱すぎるのよ」

ハジメの言葉にハツとなるユエ。

確かに、ラプトルも先のテイラノも、動きは単純そのもので特殊な攻撃もなく簡単に殲滅できてしまった。それどころか殺気はあれどもどこか機械的で不自然な動きだった。花が取れたラプトルが怒りをあらわにして花を踏みつけていた光景を見た後なので尚更、花をつけたラプトル達に違和感を覚えてしまう。

だとすればどうして日色は移動しようとしたのだろうか? そう思ったユエだがその疑問を察した日色によってその疑問は解かれた。

「【気配感知】に軽く60匹以上の魔物が急速接近中だ。しかも、誰かが指示してるみたいに全方位から囲むようにな。手っ取り早く殲滅するには一番高い樹から金ロリの魔法で殲滅させたほうがいい、魔物が弱い理由もだいたい推測がついたしな。金ロリ、できな?」

「んー」

「よし、だったらさっさと行くぞ」

日色達は高速で移動しながら周囲で一番高い樹を見つける。そして、その枝に飛び乗



り、眼下の足がかりになりそうな太い枝を砕いて魔物が登って来にくいようにし、日色はついでに文字魔法である細工をした。

息を潜めながら日色達は静かにその時を待つ。ハジメとユエが途中そつと日色に身体を寄せてきたが不安なのだろうと思ひ拒絶はしなかった。

そして第一陣が現れた。ラプトルだけでなくテイラノもあり、テイラノは樹に体当たりを行い、ラプトルはカギ爪を使って樹を登ろうとするが――

――テイラノの突進はまるで力が自ら逃げるかのようにヌルンツ！と滑り突進に失敗してしまい、ラプトルは鉤爪を使うがこれまたヌルンと木の幹が鉤爪を滑らせて削ることすらままならない。

そのあまり、不可思議な現象にユエとハジメは目を剥いた。

「日色、何……したの?」

「ん? ああ、文字魔法だ」

恐る恐る聞いたハジメに日色はなんともないように人差し指に灯した蒼色の魔力をハジメ達に見せる。

なんて事はない、日色が行ったのはただ大樹の幹に『滑』の文字を付けただけである。

テイラノの突進が失敗したのも『滑らされて』しまったからで、ラプトルの鉤爪も『滑らされて』いるため幹に引つ掛けることができない。

しかしあくまでこれは牽制であり、限界はある。時間が経てば登ってくるものはいら  
だろ。

しかし――

ハジメはドンナーの引き金を引いた。発砲音と共に閃光が幾筋も降り注ぎ滑りそう  
になりながらも鉤爪で樹にしがみついていたラプトルを一体も残さず撃ち抜く。

撃ち尽くしたドンナーからシリンダーを露出させると、手首を振るうことで薬莖をす  
べて排出し、脇に挟んで装填する、この間約三秒。

――その先にはハジメの兵器による蹂躪が待っている。

装填中の間隙を埋めるように発砲直前に落としておいた「焼夷手榴弾」が爆発し、辺  
りに炎を撒き散らす。装填が終わると共に再び一匹一発的確に連射し、打ち抜いてい  
く。既に20匹も殺しているがハジメには満足感など一欠片も無く紅の瞳は常に新た  
な獲物を補足し続けている。

「日色？」

「……まだだ、もう少し待て」

ユエの呼び掛けに文字魔法でハジメの援護をしながら答える日色。ユエは日色を信  
じ、ひたすら魔力の集束に意識を集中させる。

そして遂に、眼下の魔物が総勢70匹以上を超え、今では多すぎて判別するのが難し

いが事前の【気配感知】で捉えた魔物の数に達したと思われるところで、日色は、ユエに合図を送った。

「今だ！」

「んっ！ 【凍獄】！」

ユエが魔法のトリガーを引いた瞬間、ユエを中心に冷気が吹き荒れ、大樹を凍りつかせ、伝わっていくように眼下が一気に凍てつき始めた。ビキビキツと音を立てながら瞬く間に蒼氷に覆われていき、魔物に到達すると花が咲いたかのように氷がそり立って氷華を作り出していく。その風景は傍から見れば美しく咲く華のよう、日色達がいる場所では例えるならば雄しべと雌しべが生えている花の中心だ。

魔物は一瞬の抵抗も許されずに、その氷華の枢に閉じ込められ目から光を失っていった。氷結範囲は指定座標を中心に五十メートル四方。まさに【殲滅魔法】というに相応しい威力である。

「はあ……はあ……」

「お疲れ様、よくやったな」

「……………ん……ふふ……………」

周囲一帯、まさに氷結地獄と化した光景を見て混じりけのない称賛をユエに贈りながら頭を優しく撫でる日色、最上級魔法を使った影響で魔力が一気に消費されてしまい肩

で息をしながらもユエは撫でられるのが気持ちよさそうに目を細める。途中、ハジメも「私も頑張った、撫でて！」とでも言うように頭を差し出してきたので日色はもう片方の手で撫でることとなった。

しかし、すぐに日色が険しい表情で立ち上がる。少し遅れてハジメも日色が立ち上がった理由を察した、何故なら「気配感知」がさっきの倍以上、150匹程捉えたからだ。

「日色、さっきの倍以上来る」

「!？」

「チツ、分かってる。大方さっきの花が原因だろうな」

「……寄生？」

「そういうことだ、このまま本体を倒さなければ、この階層の全てを相手にしなくてはなくなってしまう」

日色は物量で押しつぶされる前に、おそらく魔物達を操っているのである。魔物の本体を探す為、座り込んでいるユエに神水を渡そうとする。しかし、ユエはそれを拒んだ。訝しそうな日色にユエが両手を伸ばして言う。

「日色……だっ……」

「!？」

「……………吸血しながら行くにしてもこの状況でそれを言うのか」

驚いているハジメを差し置いて日色の言葉に「正解！」というようにコクンと頷くユエ。確かに、神水ではユエの魔力回復が遅いし、不測の事態に備えて回復はさせておきたいが、この状況でそれを普通頼むだろうか？

日色は面倒臭そうにため息を吐くとユエを抱っこ……………するのではなくおんぶしてハジメと共に本体探しに飛び出していった。

そして現在に戻る。

ハジメ達は現在、二百近い魔物に追われていた。草むらが鬱陶しいと、吸血は済んでいるのにユエは日色の背中から降りようとせず、後ろからは魔物が、

ドドドドドドドドドドドドツ!!

と迫ってくる始末だ。

しかも背の高い草むらに隠れながらラプトルが併走し四方八方から飛びかかってくる。

「鬱陶しいー!」

日色は刀を抜き放ち、全てを一瞬で絶命させて樹海を抜けた先、今通っている草むらの向こう側にみえる迷宮の壁、その中央付近にある縦割れの洞窟らしき場所へとひたすらに駆け続ける。

ユエもハジメも魔法と銃弾を撃ち込み致命的な包围をさせまいとする。  
カプツ、チュー

なぜ日色がその場所に目星をつけたのかというと、襲い来る魔物の動きに一定の習性があったからだ。ハジメ達が迎撃しながら進んでいると、ある方向に逃走しようとした時だけその方向には行かせまいというように動きが激しくなるのだ。あとは日色の文字魔法『探』で行かせないようにしている場所を発見したため現在、その方向へと向かっているのである。

カプツ、チュー

「というかユエ、いい加減降りて！吸血するたびに恍惚な表情をとるのが気持ち悪いらら」

「……不可抗力」

「嘘言わないで、ほとんど消耗していないでしょ！」

「……キメラは黙ってて」

「……殺す」

「——お前ら、次騒がしくしたらメシ抜きな」

「……………」

日色の鶴の一声で押し黙る二人。どうやらハジメは日色のラッシュウが、ユエは日色の

血が飲めなくなるのはさすがに嫌らしい。

この状況で余裕な三人は三百体以上の魔物を引き連れたまま縦割れに飛び込んだ。

縦割れの洞窟は大の大人が二人並べば窮屈さを感じる狭さだ。テイラノは当然通れず、ラプトルでも一体ずつしか侵入できない。何とか日色達を引き裂こうと侵入してきたラプトルの一体が鉤爪を伸ばすが、その前にハジメのドンナーが火を噴き吹き飛ばした。そして、すかさず錬成し割れ目を塞ぐ。

「ふう、これでとりあえずは大丈夫」

「……そうか、ありがとな。……金ロリはさっさと降りろ」

「……むう、仕方ない」

日色の言葉に渋々、ほんとうに渋々といった様子で日色の背から降りるユエ。余程、日色の背中が居心地がいいらしい。……日色からすれば吸血するたびに妖艶な荒い息が耳に触れたりするので迷惑なのだが。

錬成で入口を閉じたため薄暗い洞窟を三人は慎重に進むとやがて大きな広間に出た。広間の奥には更に縦割れの道が続いている。もしかすると階下への階段かもしれない。ハジメは辺りを探る。【気配感知】には何も反応はないがなんとなく嫌な予感がある。警戒は怠らない。気配感知を誤魔化す魔物など、この迷宮にはわんさかいるのだ。

日色も何らか嫌な予感を感じているのか右手が刀に触れている。

瞬間、全方位から緑色のピンポン玉のようなものが無数に飛んできた、その数は優に百を超え、尚、激しく撃ち込んでくる。三人は一瞬で背中合わせになりそれぞれで迎撃する。

ハジメは咄嗟に錬成で石壁を作り出し防ぐことに決めた。石壁に阻まれ貫くこともできずに潰れていく緑の球には大した威力もなさそうである。ユエの方は速度と手数に優れる風系の魔法で迎撃し、日色の方は――

「――フッ！」

――派生技能【超集中持続】

瞳に蒼色の残光を灯らせ、文字魔法『速』により加速した身体能力と【超集中持続】の情報処理能力で刀を振るい己に向かってくる全ての緑色の球を叩き落とす。

「金ロリ、おそらく本体の攻撃だ。どこにいるかわかるか？」

「……」

「金ロリ？」

ユエに本体の位置を把握できるか聞いてみる日色。吸血鬼の鋭い五感はたとえ【気配感知】など索敵系の技能を持っていなくても有用な索敵となることがあるのだ。

――が、日色の質問にユエは答ええない。訝しみ、再度ユエの名を呼ぶ日色だが……

「……にげて……日色！」



瞬間、いつの間にかユエの手が日色へと向いていた。ユエの手に風が集束し強力な風の刃が日色とその後ろにいるハジメに襲い掛かる。

「チー！」

「きゃっ?!」

刹那、「超集中持続」を発動していた日色は右手でハジメの身体を抱きしめ、転がるように回避する。

コンマ数ミリで日色の髪をそよぐように風の刃が通り過ぎ、背後の石壁を綺麗に両断される。

「ユエ、裏切ったの!」

「違う、おそらく操られているんだ」

まさかの攻撃にハジメは驚愕の声を上げるが、日色の言葉とユエの頭の上にあるものを見て事態を理解する。そう、ユエの頭の上にも花が咲いていたのだ。それも、ユエに合わせたのか?と疑いたくなるぐらいよく似合う金色の花が。

「さっきの緑玉が原因か、クソッ！」

『そーいやあ、そんな奴いたの忘れてたあ!! 胞子ボンボンしてくる奴!!』

日色は己の迂闊さに毒づきながらハジメと共に風の刃を回避する、ここは奈落なのだからその可能性も常に考えておくべきだったのだ。

「日色……うう……」

ユエが無表情を崩し悲痛な表情をする。ラプトルの花を撃つたとき、ラプトルは花を憎々しげに踏みつけていた。あれはつまり、花をつけられ操られている時も意識はあるということだろう。体の自由だけを奪われるようだ。

（長い間、寄生されたらどうなるかわからない！一秒でも早くあの花を斬り裂くー）

そう考えた日色は肉薄して抜刀しようとするが突然ユエが片方の手を自分の頭に当てるといふ行動に出た。接近したらユエの頭を切り飛ばすつもりなのだろう。

ならばハジメに撃ち落としてもらおう、そう思ったがそれすら読んでいたのかユエを操り、花を庇うような動きをし出したのだ。上下の運動を多用しており、外せばユエの顔を吹き飛ばしてしまう。

「——チツ」

ユエは確かに不死身に近い。しかし、上級以上の魔法を使い一瞬で塵にされて尚【再生】できるかと言われれば否定せざるを得ない。そして、ユエは、最上級ですらノータイムで放てるのだ。特攻など分の悪そうな賭けは避けたいところだ。

ハジメの逡巡を察したのか、それは奥の縦割れの暗がりから現れた。

アルラウネやドリアード等という人間の女と植物が融合したような魔物がRPGにはよく出てくる。ハジメ達の前に現れた魔物は正しくそれだった。もつとも、神話では

美しい女性の姿で敵対しなかったり大切にすれば幸運をもたらすなどという伝承もあるが、目の前のエセアルラウネにはそんな印象皆無である。

確かに、見た目は人間の女なのだが、内面の醜さが溢れているかのように醜悪な顔をしており、無数のツルが触手のようにウネウネとうねっていて実に気味が悪い。その口元は何が楽しいのかニタニタと笑っている。

『ヲトコの夢を返せこのやろおおおおおおおおう!!』

この状況でも呑気だな。

「ハジメ！」

「——わかった」

日色の言葉に応じてハジメはすかさずエセアルラウネに銃口を向けるがハジメが発砲する前にユエが射線に入って妨害する。

「日色……ごめんなさい……」

悔しそうな表情で歯を食いしばっているユエ。自分が足でまといなっていることが耐え難いのだろう。今も必死に抵抗しているはずだ。口は動くようで、謝罪しながらも引き結ばれた口元からは血が滴り落ちていく。鋭い犬歯が唇を傷つけているのだ。悔しいためか、呪縛を解くためか、あるいはその両方か。

ユエを盾にしながらかエセアルラウネは緑の球を日色達に打ち込む。

ハジメは、それをドンナーで打ち払い、日色は刀で叩き落とす。球が潰れ、目に見えないがおそらく花を咲かせる胞子が飛び散っているのだろう。

しかし、ユエのように日色とハジメの頭に花が咲く気配はない。ニタニタ笑いを止め怪訝そうな表情になるエセアルラウネ。おそらく日色とハジメには耐性の技能があるからこそ効かないのだろう。

エセアルラウネの胞子は一種の神経毒である。胞子を吸い込んだものの神経を一時的に停止させ、代わりにエセアルラウネの命令を胞子が受信し、増幅させ、身体に命令する電気信号を送ることで操っているのである。

そのため、「毒耐性」により日色とハジメには効果がないのだ。つまり、日色達が助かっているのは全くの偶然で、ユエを油断したとは責められない。ユエが悲痛を感じる必要はないのだ。

エセアルラウネは日色とハジメに胞子が効かないと悟ったのか不機嫌そうにユエに命じて魔法を発動させる。また、風の刃だ。もしかすると、ラプトル達の動きが単純だったことも考えたと操る対象の実力を十全には発揮できないのかもしれない。

(不幸中の幸いというわけか)

風の刃を回避しようとする、これみよがしにユエの頭に手をやるのでその場に留まり、文字魔法『防』でハジメごと覆うように結界を生み出し、念の為にサイクロプスよ

り奪った固有魔法〔金剛〕を使用する。

この技能は魔力を体表に覆うように展開し固めることで、文字通り金剛の如き防御力を発揮するという何とも頼もしい技能である。まだまだ未熟なため、おそらくサイクロプスの十分の一程度の防御力しか出せないが、文字魔法の『防』が予想以上に高性能なため今のところ使い道は保険程度でしか使用していない。

「どうやってこの状況から打破しようか？」と日色は考えているとユエが悲痛な叫びを上げる。

「日色……私はいいいから……殺つて！」

何やら覚悟を決めた様子で日色に叫ぶユエ。日色の足手まといになるどころか、攻撃してしまいうぐらいなら自分ごと斬つて欲しい、そんな意志を込めた紅い瞳が真っ直ぐ日色を見つめる。

そんなこと出来るはずないだろう！ 必ず助けてみせる！ 普通はこんな熱いセリフが飛び出て、ヒロインと絆を確かめ合うシーンだ。日色はふとハジメをチラリと見つめ――

――瞬間、日色は少し慌て気味に文字魔法をユエの足元へと飛ばした。

書いた文字は『穴』、ユエの足元に文字が着弾すると共にユエぐらいの深さの穴が生み出される。

え？というユエの言葉と共に重力によりユエの体は穴へと落下する。

刹那——

「死ぬ」

ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！

——ハジメが全弾発砲した。

ハジメの六連射による弾丸がさつきユエがいた場所の頭、心臓に三発ずつ的確に打ち出され、ユエがいなくなったことで一発が落下中のユエの頭に生えていた金色の花を打ち抜き、残りの五発がエセアルラウネの頭部と胸を貫き、緑色の液体を撒き散らしながら爆砕した。そのまま、グラリと傾くと手足をビクンビクンと痙攣させながら地面に倒れ伏した。

広間に六発の銃声が響き渡る。

広間を冷たい空気が満たし静寂が支配する。そんな中、くるくると宙を舞っていたバラの花がパサリと地面に落ちた。

そしてハジメがこう一言。

「——チツ、外した」

その言葉がどんな意味を持つか理解できるだろうか？

そう、ハジメが狙ったのはエセアルラウネではない、ユエの方である。

あの時、日色が慌て気味に文字魔法を使ったのはふと見たハジメの表情が三日月のよう  
に裂けた笑いだったからである。

それを見た瞬間、日色は察した。

『あ、これアカン奴や』

その予感は的中した。

むしろハジメからすればこれは絶好のチャンスだった。

この最近現れたこの寄生虫を殺してしまえば、日色が悲しんでしまう。

だが、あの時ユエはこう言った。

『……私はいいいから……殺って！』

それを聞いた瞬間ハジメは一つの結論を出した。

(じゃあ結果的に撃たれてしまっても事故よね！だってユエからも許可もらったし！)

結果、これである。ハジメは発砲し日色の文字魔法がなければ死にはしなかったもの  
の『お見せできないよ!!』状態になるだろう。

静寂になった洞窟の中、ユエは風魔法を使い、スツポリと埋まった穴から静かに這い  
出てきた。

「金口リ、無事か？何か違和感とかないか？」

「……別に【自動再生】あるから大丈夫でしょ」

そう気軽な感じでユエの安否を確認するハジメと日色。だが、ユエは未だに頭をさすりながらジトつとした目でこうなることとなった元凶ハジメを睨む。しかしハジメもそれに対抗するように逆に逆に睨み返してきた。

「……………撃った」

「ユエが私ごと殺つていいって言ったからね」

「……………軌道、完全に私だった」

「——撃つ瞬間、手が滑ったのよ。それに別に撃たれてもユエは大丈夫でしょ」

「……………喧嘩売ってる?……………キメラモドキ」

「寄生虫風情に喧嘩なんて売るわけ無いでしょ?」

「……………ツ!! (ガンのくれ合い)」

ユエとハジメはお互いの顔がぶつかるところではないかという程、顔を近づけ火花を散らしながらにらみ合った。

「……………私も手が滑—— (ビュツ!! ↑上級風魔法を込めた右手をハジメに向ける音)」

「——らないように私がしつかり握っておくから (ガシツ!! ↑ユエの右手を自分から逸らしながら掴む音)」

「……………ツ!! (メンチの切り合い)」

「……………何やってんだお前ら?」



ユエとハジメは黄金と真紅の魔力を放出しながら火花を散らし、彼女達の上空でスタ  
○ドラしき金色の雷龍と紅色の魔王が雷やら閃光やら現代兵器やらで大乱闘を起こし  
ているがスタ○ドを見ることのできない日色は相手を射殺すのではないかというほど  
殺意とともに睨み合い続けている彼女達の姿に首を傾げるしかなかったのだった。

## 最奥での死闘①

ハジメがユエ……結果的にエセアルラウネを撃ち殺し、ユエとの仲がさらに険悪になった日から随分経った。その後、何故か二人のスキンシップが更に激しくなり、日色のメンタルがゴリゴリと削られていくがなんとか彼女達の険悪さは落ち着き、再び迷宮攻略に勤しんでいた。

そして遂に、次の階層で日色達が目覚めた階層から百階目になるところまで来た。その一歩手前の階層で日色達は最後の装備の確認と補充にあたっていた。いつものように日色は刀の手入れを行った後、日記を開いて書き始め、ユエは日記を書いている日色を見ながらまったりとしている。その表情は迷宮には似つかわしくない緩んだものだ。

ハジメは銃弾の補充や兵器の点検に忙しいため、もう少し時間がかかるようだ。

ユエと出会ってからどれくらい日数が経ったのか時間感覚がないためわからないが、最近、ハジメもユエも日に日にお互いがお互いに対抗しているのか日色に露骨に甘えるようになった。

特に拠点で休んでいる時には必ず密着している。彼女達は横になれば添い寝の如く両腕に抱きつき、座っていればハジメは背中から抱きつき、ユエは日色の膝の上に

座ってくる。ユエが吸血させるときは正面から抱き合う形になるのだが、終わった後も中々離れようとしない。日色の胸元に顔をグリグリと擦りつけ満足げな表情でくつろぎ、ハジメに首根っこを掴まれ、投擲されるのが一種のテンプレとなっている。

当然、日色からすればたまったものではない。ユエの外見が十二、三歳なので微笑まじさが先行し一欠片も欲情したりはしないが、実際は遥に年上。その片鱗を時々見せると随分と妖艶になるのは困ったものである。正直言つて集中力が切れるため鬱陶しいのだ。

ハジメもハジメである、元々の容姿はありふれた少女だったが現在は地球のアイドルやモデルなどとは比べ物にならない顔つきに男のロマンである銀髪紅眼になっているのだ。しかも日色に積極的に抱きついてきたり、頭を撫でるだけでほぼ全ての男を魅了する笑顔になってしまう。……将来悪い男たちに惑わされたりしないか心配になる日色だった。

「……ところでハジメ、今回はやけに慎重だな」

「え？ ああ、次で百階だから。一般に認識されている上の迷宮も百階だと言われていたから、もしかしたら何かあるかもしれないと思って……まあ、念の為にね」

日色とハジメが目覚めた階層から八十階を超えた時点で、ここが地上で認識されている通常の「オルクス大迷宮」である可能性は消えた。奈落に落ちた時の感覚と、各階層

を踏破してきた感覚からいえば、通常の迷宮の遥かに地下であるのは確実だ。

銃技、体術、固有魔法、兵器、そして錬成。いずれも相当磨きをかけたという自負があり、日色を守る力を手に入れたという実感はハジメは持っている。だが、それでも確実に日色を守れるという保証はないのだ、どれほどの実力を持つていたとしても実力とは関係なくあつさり致命傷を与えてくるのが迷宮の怖いところである。

だからこそ、現時点で己が出来ることを全て行い、念には念を入れて出来る限りの準備をしておく。ちなみに今のハジメと日色のステータスはこうだ。

|||||

南雲ハジメ 17歳 女 レベル63

天職：錬成師

筋力：2610

体力：2790

耐性：2770

敏捷：3010

魔力：2310

魔耐：2290

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+高速錬成」「+精密錬成」「+鉱物系探查」「+鉱物分



「十超集中持続」・限界突破・魔力操作「十魔力放射」「十魔力圧縮」「十遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「十空力」「十縮地」「十豪脚」・風爪・念糸・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・威圧・念話・言語理解

|||||

ステータスは、初めての魔物を喰えば上昇し続けているが、固有魔法はそれほど増えなくなった。主級の魔物なら取得することもあるが、その階層の通常の魔物ではもう増えないようだ。魔物同士が喰い合っても相手の固有魔法を篡奪しないのと同様に、ステータスが上がって肉体の変質が進むごとに習得し難くなっているのかもしれない。

しばらくしてすべての準備を終えた日色達は階下へと続く階段へと向かった。

その階層は、無数の強大な柱に支えられた広大な空間だった。柱の一本一本が直径五メートルはあり、一つ一つに螺旋模様と木の蔓が巻きついたような彫刻が彫られ、柱は規則正しく一定間隔で並んでいる。目測だがおよそ天井までは五十メートルはあるだろう。地面も荒れたところはなく平らで綺麗なものでどこか荘厳さを感じさせる空間だった。

日色達は少し見惚れながら足を踏み入れると全ての柱が淡く輝き始め、日色達を起点に奥の方へと道標のように順次輝いていく。

日色達は暫く警戒していたが特に何も起こらないので先へ進むことにした。感知系

の技能をフル活用しながら警戒を怠らず歩みを進める。そして二百メートルも進んだ頃、前方に行き止まりを見つけた。いや、行き止まりではなく、それは巨大な扉だ。全長十メートルはある巨大な両開きの扉が有り、これまた美しい彫刻が彫られている。特に、七角形の頂点に描かれた何らかの文様が印象的だ。

「……凄いい、もしかしてこれが——」

「反逆者の居場所、だろうな」

「……綺麗」

如何にもラスボスの部屋といった感じだ。実際、感知系技能には反応がなくともハジメには謎の威圧感がヒシヒシと伝わってくる。ユエどころか日色ですら薄らと額に汗をかいている。

そんな本能からの警鐘がけたたましく鳴る中、それらを知らぬとばかりに立ち止まった三人の中で最初に日色が足を踏み出した。

「ようやくゴールが見えたんだ、さっさと行くぞ」

「んー！」

「ええー！」

二人に振り返って小さく不敵に笑う日色に、二人は覚悟を決めた表情で一步を踏み出した。

そして、三人揃って扉の前に行こうと最後の柱の間を越えた。

その瞬間、扉と日色達の間三十メートル程の空間に巨大な魔法陣が現れた。赤黒い光を放ち、脈打つようにドクンドクンと音を響かせる。

日色とハジメにはその魔法陣に見覚えがあった。忘れようもない、あの日、日色とハジメが奈落へと落ちた日に見た自分達を窮地に追い込んだトラップと同じものだ。だが、ベヒモスの魔法陣が直径十メートル位だったのに対して、眼前の魔法陣は三倍の大ききがある上に構築された式もより複雑で精密なものとなっている。

(これは……まずいぞ……ッ！)

何よりもその魔法陣に籠っている魔力量が馬鹿にならない。「魔力感知」により魔法陣から感じる魔力量はおおよそ日色やハジメの約5倍だ。もはや笑い話にすらならない。

「ハジメ！金ロリ！気をつけろ、冗談抜きでやばいぞッ!!」

「言われなくてもわかってる！」

「……大丈夫……私達、負けない……ッ！」

咄嗟に日色が警告するが二人は決然とした表情を崩さずに返答してきた。

そんな二人に日色は小さく苦笑して日色も魔法陣を睨みつける。おそらくこの魔法陣から出てくる化物を倒さないと先へは進めないだろう。



そして魔法陣はより一層輝くと遂に弾けるように光を放った。咄嗟に腕をかざし目を潰されないようにする日色とハジメとユエ。光が収まった時、そこに現れたのは……  
体長三十メートル、赤、青、黄、緑、白、黒の色とりどりの六つの頭と長い首を持った鋭い牙と赤黒い眼の化け物。例えるなら、神話の怪物ヒュドラだった。

「ククルウアアアン!!」

不思議な音色の絶叫をあげながら六対の眼光が日色達を射貫く。ただそれだけの行動だというのにヒュドラを中心に暴風が吹き荒れ、心臓を握りられているかのように錯覚し、身体が重く感じてしまう。

身の程知らずな侵入者に裁きを与えようというのか、常人ならそれだけで心臓を止めてしまうかもしれない壮絶な殺気が日色達に叩きつけられた。

同時にその内の一つである赤い紋様が刻まれた頭がガパツと口を開かれた。

「来るぞッ!!」

瞬間——視界が焰に染め上がる。

恐らく口からドラゴンの代名詞と言える火炎の息吹を放ったのだろう。赤紋様の頭が放った約二メートル程の火球は空中を突き進み——発射されてから約三十センチ進んだところで日色達目掛けてまるで水風船を割ったが如く広範囲に炸裂した。

その規模は火炎放射の様なものでも炎の壁と喩えようとしても物足りない。もはや

それは——炎の大波である。

初手で放たれた広範囲の攻撃に日色とハジメは驚愕しながらも【空力】と【縮地】を併用し、ユエも風魔法を用いて同時に三方向へ飛び退く様に散開する。

広範囲に襲いかかる炎の大波をどうにか避け、三人は空中に跳び上がり反撃を行おうとする。

奇しくもその行動により、三人はまだ継続している攻撃を防ぐことができた。

瞬間——日色の背筋に悪寒が走る。

「ッーお前ら、防——ッ!!」

日色は叫びながら直感に身を任せて日色の言葉に疑問の表情となつているハジメに抱きつく様に突進し、同時に文字魔法『防』を使い結界を張る。ユエも日色の声に何かあるのではないかと、思い、咄嗟に風魔法で風を操り全身を包む。

刹那——

ボハンツ!!と炸裂した火球の炎の一つが地面に触れた途端、爆発した。すると爆発に連動する様にその爆発の近くで新たに爆発が巻き起こり、それに連動する様に更に爆発が何度も連鎖的に巻き起こる。

連鎖反応の様に何度も爆発し空間を炎で彩りながら爆炎と爆風が烈風の如く平等に薙ぎ払う。

「ぐっ?!」

「日色ッ!!」

「大丈夫だ!」

『どこの某女王のチャージブレスですかねえ?!』

日色は背中にいるハジメの悲鳴じみた叫びに叫びかえしながらも文字魔法の結界が爆炎と爆風に壊されない様に魔力を込めて意識を向け続ける。

そして漸く爆炎と爆風が収まると同時に爆風に巻き上げられた土煙が辺りを覆い、偶然にも煙幕の煙幕の役割を果たしてくれた。

「——ハジメ、大丈夫か!」

「大丈夫。ユエは!」

「……………大丈夫だ、おそらく咄嗟に風魔法で防いだのだろうな」

「……………チッ」

「……………なんでそこで舌打ちをするんだ?」

日色の視線の先には日色が渡した服を微かに焦がしているながらも無傷で空中を漂うユエの姿がいた。

その姿に何故か舌打ちをするハジメがいたが、日色は持ち前のスルースキルでスルーし、土煙を利用しながら反撃を開始する。

土煙を吹き飛ばすように「空力」を用いて移動しながらハジメのドンナーが火を吹き電磁加速された弾丸が超速で赤紋様の頭を狙い撃つ。

しかし――

「キュルア!?!」

「なっ!!」

――人間の科学の結晶である弾丸は赤雷を撒き散らしながら赤紋様の頭を抉つていき、傷口を焼くが頭の左部分を三割ほど抉つただけで吹き飛ばすことは叶わず、仕留めきることは出来なかった。

もはや自分のドンナーでは一撃で仕留めることは難しい、その事実にはハジメは目を剥いてしまう。

だが、その事実には衝撃を受けたのは一瞬である。すぐさま思考を切り替え【念話】で魔力を通して日色に呼びかける。

「日色ッ、赤頭を!」

「ああ、任せろ」

日色に伝えると、土煙から日色が「空力」を用いて土煙を風圧で吹き飛ばすように現れ、痛みに悶える赤紋様の頭へと鞘に収めた刀に魔力を流し、強度を上昇させながら火花が散るほどの速度で鞘走りを行いさらに加速させながら抜刀する。

## ——我流劍術【天閃】

空中では踏みしめる足場がないため、刀をうまく振るえないかと思われるかもしれないが日色には【空力】がある。自ら足場を生み出すことによつて虚空を踏みしめ、赤紋様の頭を傷口に斬撃を当て、見事首を切断した。

まずは一つと日色が内心ガッツポーズを決めた時、白い文様の入った頭が「クルウアン！」と叫び、吹き飛んだ赤紋様の頭を白い光が包み込んだ。すると、まるで逆再生でもしているかのように赤紋様の頭が元に戻った。

「クソツ、回復魔法も使えるのか！」

「……こつちも……同じ、頭を吹き飛ばしても……すぐ治る」

視界の端ではユエの氷弾が緑の紋様がある頭を吹き飛ばしたが、同じように白紋様の頭の叫びと共に回復してしまつた。このままでは堂々巡りである。

ユエから【念話】で伝えられる情報に日色は舌打ちしながら【念話】でユエとハジメに伝える。

「白紋様の頭を狙うぞ！このままではキリがない！」

「わかつた！」

「んっ！」

日色の指示に従いユエとハジメは白紋様の頭を狙いと銃口と手を構える。

ドパンツ！

「緋槍」！

最大出力の閃光と燃え盛る槍が白紋様の頭に迫る。しかし、直撃かと思われた瞬間、白紋様の頭が一鳴きすると共に白紋様の頭の目の前に四つの光が生み出され、四つの光は幾何学模様を描くと同時に白色の結界が展開され、閃光と燃え盛る槍を受け止め、包み込んだ。

その光景に日色はゾワツ！と背筋が粟立つような感覚に襲われる。

白紋様の頭が生み出した幾何学模様の魔法陣を見た瞬間、ひとつのデジャブを感じたのだ。

何故なら、それは自分が作った魔法陣にとても似ていたから。

「ハジメ！金ロリ！今すぐその場から離れろおおおおおおおおおおおお！！」

日色は己の直感に委ねるように喉が張り裂けそうなほど叫び、その叫びにハジメとユエは日色の様子に何かあるのではと思ひ、つい少し後退してしまう。

瞬間——

「クルアアアン！！」

「なっ！！」

——まるで限界まで引き絞られたゴムが元に戻るように未だ直進しようとする閃光

と燃え盛る槍を包み込み、伸びていた白い結界がバチンツ！と元に戻り、閃光と燃え盛る槍がハジメ達目掛けて跳ね返った。

驚く二人にその反撃を避けることはできず、さっきまで二人がいた場所に閃光と燃え盛る槍が着弾し、二人は吹き飛ばされてしまう。

「がッ!？」

「きゃ!？」

日色の言葉に運良く後退していたことで直撃は喰らわなかったものの着弾と共に衝撃波と地面の破片が二人の全身を滅多打ちにし、吹き飛ばされてしまう。その地に伏した二人を睥睨する白紋様の頭とその二人に止めを刺そうとするように青紋様の頭と緑紋様の頭がガパツ！と口を開き、口から息吹らしきものを吐こうとする。

「——させるか!？」

しかし、吐かれる瞬間、日色が二人の前に着地し、人差し指に魔力を灯らせ文字魔法『守』を描く。

そして、日色の文字魔法が完成すると青紋様の頭と緑紋様の頭が息吹を吐くのは同時だった。

日色の文字魔法による結界が三人をドーム状に包むと共に、青紋様の頭から吐かれる氷の息吹と緑紋様の頭から吐かれる暴風の息吹が空中で混ざり合い、ひとつの災害を巻

き起こす。

それは一言で言うならば、ブリザード吹雪。

日色達を中心に風速50メートル以上の高密度の竜巻が一つ60センチ（縦の長さ）の無数の氷柱を高速で吹き飛ばし続ける災害である。

猛烈な竜巻の内部は日色が張った結界の範囲以外を除いてマイナス30度以下となっており、次々と加速された大きな氷柱が結界に衝突し、結界が軋みをあげる。

「ぐううツ!!」

「日色ッ!」

「俺のことはいい!お前らはさっさと神水を飲んで回復しろ!」

ユエの悲痛な叫びが聞こえるが日色は怒鳴るように叫び返し、回復を促す。

今の日色には結界が壊れないように意識を向けるのに集中しなければならぬほど余裕がないのだ。

なんとか竜巻を防ぎ続けているとふと神水を飲み、回復しているハジメから声がかかった。

「……日色、私を文字魔法で援護できる?」



「一応はできるが……どうするつもりだ？いくらダメージを与えても白紋様の頭に回復させられるし、白紋様には攻撃を跳ね返させられるぞ」

「だったら、跳ね返せない攻撃をすればいい」

「簡単にいうな、何か……そういうことか、確かに試してみる価値はあるな」

そう言いつつハジメが出した物を見て、日色は結界に意識を向けながらも小さく笑う。

ハジメは日色の言葉に気を良くしながら、ユエに視線を向ける。

「ユエも行けるわね？」

「……ん、言われるまでもない」

「それじゃあ、頼むぞ」

そして、竜巻が消え日色は結界を解除すると共に、三人は一気に散開し、一気にヒュドラへと接近する。

「クルアア!!」

それに反応したのは黄色の紋様を持った頭である。黄紋様の頭がひと鳴きするともにもサソリモドキの時と同じように地面が波打ち辺りの地面が変化し、まるで生きているかのようにグネグネと触手のように形状を変えながら襲ってくる。しかも触手の大きさは10メートル程で先端に刃がついてあるという駄目押しだ。

「日色!」

「ああ!文字魔法!」  
ワード・マジック

ハジメは襲い掛かる土の触手を避けながら日色の名を呼ぶと日色は人差し指を動かして『静』の文字を書き、地面に飛ばすと波打っていた地面がまるで最初から何もなかったかのように静止し、土の触手は地面に溶けるように沈んでいった。

日色の文字魔法によって地面が『静』められたのだ。

その隙にハジメはヒュドラに、厳密には白紋様の頭に迫る。

「クルアアアン!!」

その行動に無駄だとしても嘲笑う様に白紋様の頭は再度白色の結界を張る。

ハジメは己のドンナーの一撃やユエの「緋槍」すら跳ね返したそれを視認すると共に手持ちの物を白紋様の頭目掛けて放り投げた。

「お前のその魔法は確かに私のドンナーやユエの「緋槍」を跳ね返す」

放物線上の軌道を描きながら白紋様の頭目掛けて飛んでいく物体、「焼夷手榴弾」を見ながらハジメは、「だけど——」と呟く。

「——範囲攻撃は防げないよね?」

瞬間——「焼夷手榴弾」が破裂し、摂氏三千度度の燃え盛るタールが撒き散らされた。

ハジメの推測では白い結界は魔法や遠距離の物理攻撃を跳ね返すものではないかと

推測している。

ならば、防げない攻撃をすればいい。

燃え盛るタールを確かに白い結界は防ぐだろう、だが結界はあくまで一方向でしか展開されていない。故に「焼夷手榴弾」等のような二つ以上の他方位からの攻撃を跳ね返すことも、防ぐこともできないのだ。

どうやらその予想は的中したようで撒き散らされた燃え盛るタールは白紋様の頭にも降り注ぎ、その苦痛に悲鳴を上げながら悶えている。

「今ッ！」

「んっ！」

「念話」でハジメはユエに合図を贈り、最上級魔法を使わせようとする。白紋様の頭の反射魔法により最上級魔法を跳ね返られる可能性があるためと一度使うとユエは行動不能になるため容易に使えないが、このチャンスで使わなければ確実に白紋様の頭を殺すことはできない。出し惜しみをしている余裕はないのだ。

ハジメの合図とともにユエは膨大な魔力を放出させながら手を掲げ、魔法名を呟く。

「蒼——」

——瞬間、ユエの視界は反転した。



「いやあああああ!!!」

「!? 金ロリ!」

「一体何ツ!」

突如、絶叫するユエに何事かとばかりに日色とハジメは振り向くとユエは頭を抱えながら涙目のまま絶叫し続けていた。

咄嗟に日色はユエに駆け寄ろうとするが、それを邪魔するように赤紋様の頭と緑紋様の頭が炸裂炎と真空刃を伴った渦巻く竜巻を無数に放ってくる。

「邪魔だ!!」

日色は文字魔法『速』を使い速度を上げることでも無数の竜巻と炸裂炎を避けながら歯噛みして、必死に考える。そして、黒い文様の頭の存在を思い出した。

『そういえば、精神攻撃してくる奴いたなあ!』

日色は文字魔法『斬』を黒紋様の頭に飛ばし、ザンツ!!!と頭に張り付くと共に文字魔法を発動させ、切断すると共にユエがくたりと倒れ込んだ。その顔は遠目に青ざめているのがわかる。

「ハジメ、しばらく時間を稼いでくれ!」

「わかった!」

日色の言葉に応じるようにハジメはユエの元に向かう日色に効果が及ばないように

【閃光手榴弾】と【音響手榴弾】をヒュドラに向かって投げつけた。

【音響手榴弾】は八十層で見つけた超音波を発する魔物から採取したものだ。体内に特殊な器官を持つており音で攻撃してくる。この魔物を倒しても固有魔法は増えなかったが、代わりにその特殊な器官が鉱物だったので音響爆弾に加工したのだ。

二つの手榴弾が強烈な閃光と音波でヒュドラを怯ませる。しかしその怯みも一瞬で一時的に視力を失ったことでがむしやらに攻撃を行ってくる。しかしその際に日色はユエを抱き上げ柱の陰に隠れた。

「おい！金ロリ！しっかりしろ！」

「……」

「おいっー！」

日色の呼びかけにも反応せず、青ざめた表情でガタガタと震えるユエ。日色はクソツと悪態を付きながら、ペシペシとユエの頬を叩き、神水を飲ませた。暫くすると虚ろだったユエの瞳に光が宿り始めた。

「……日色？」

「ハア、ようやく目覚めたか……一体何をされた？」

パチパチと瞬きしながらユエは日色の存在を確認するように、その小さな手を伸ばし日色の顔に触れる。それで漸く日色が其処にいと実感したのか安堵の吐息を漏らし

目の端に涙を溜め始めた。

「……よかった……見捨てられたと……また暗闇に一人で……」

「は？何の話だ？」

ユエの様子に困惑する日色。ユエ曰く、突然、強烈な不安感に襲われ気がつけば日色に見捨てられて再び封印される光景が頭いっぱい広がっていたという。そして、何も考えられなくなり恐怖に縛られて動けなくなつたと。

「閻属性系の魔法か……相手は全属性の魔法を使えるということか」

『多分、原作とは全然違うよねえ!? やっぱ信じなくてよかつたあ!』

「……日色」

敵の厄介さに悪態をつく日色に、ユエは不安そうな瞳を向ける。ユエにとつて日色に見捨てられるということはよっぽど恐ろしいことなのだろう。当たり前だ、何せ自分を三百年の封印から命懸けで解き放ってくれた人物であり、吸血鬼と知っても変わらさず接してくれるどころか、日々の吸血までさせてくれるのだから。

例えるならば日色は一種の麻薬と一緒にだ。さも当然のようにユエはあつさり救われて、自分で道を決めさせて、ユエは孤独ではなくなつた。ユエは確かに救われた、救われたからこそ再び一人になるなんて耐えられず、依存してしまう。

だからこそ植えつけられた悪夢はこびりついて離れず、ユエを蝕む。

「日色っ！まだ！」

「チツ、もう時間か」

叫んだハジメの声に日色はヒュドラが混乱から回復したことを察した。日色は立ち上がるうとするがユエは、そんな日色の服の裾を思わず掴んで引き止めてしまった。

「……日色………私を………追いてかないで………っ!!」

泣きそうな不安そうな表情で震えるユエ。日色は何となくユエの見た悪夢から、今ユエが何を思っているのか感じ取った。そんなユエに日色は小さくため息を吐く。

そして――

――ズドンツツツツ?!?!、という見事に威力を調整されたデコピンがユエの額を打ち抜いた。

「――にゅツツ?!?!」

デジャブを感じるかのようにユエはあまりの激痛におもわず後ろに倒れこみ、悶絶してしまふ。

痛みに悶える中、呆れた様な日色の声がユエの耳に聞こえてくる。

「お前の都合なんて知らん、というかついてくるかどうかはお前の意思だろうが」

「……………え？」

目尻に流していた涙がピタリと止まり、ユエはマジマジと日色を見つめる。日色は一

切ユエから目を背けず、しかしユエの手を引くこともないまま立ち上がった。

「——追いていかれたくなかったら、勝手について来い。言っただろう？ お前はほしい？、つてな」

その言葉にユエは未だ呆然と日色を見つめていたが、いつかの様に無表情を崩し万感のしかしし決意を込めた表情で勢いよく立ち上がった。

「……んっ！」

「よし。だつたらさっさと行くぞ、ハジメにシュラーゲンを使わせるから俺達は援護だ」  
「………任せて！」

静かにつぶやく様な口調が崩れ覇気に溢れたやる気がいつもと断然あるユエに日色はどうしてこんなに張り切っているか疑問に思い首を傾げたがまあいいか、と思いつけないことにした。別に理由がわからなくても困らないからだ

二人は一気に柱の陰から飛び出し、反撃に出ながら一人でヒュドラの攻撃を必死に凌いでいるハジメに日色が【念話】で作戦を伝える。

「ハジメ、シュラーゲンを使えッ！俺たちが時間を稼ぐ！」

「——わかった！」

日色の作戦に従う様にハジメは日色と入れ替わる様に退避し、それを追撃する様にヒュドラの緑紋様の頭と赤紋様の頭が炸裂炎と竜巻のブレスを空中でぶつかる様に吐



くことで炸裂する筈の炎を暴風で覆い、膨大な酸素を常時供給させることで竜巻の内部をハジメの「焼夷手榴弾」に近い温度に変化させる摂氏3000度以上の灼熱の竜巻が日色に襲いかかる。

『【合技　ボム・サイクロン】ですね、わかりたくありませんッ!!』  
「——ハアッ!!」

それに対して日色は刀を鞘に納め、全身の振れを利用しながら左足を空気が鳴るほど力強く踏みしめた。

右手が柄に触れると共に瞳に蒼い残光が生まれ、己の動きを最適化させていく。

——技能【超集中持続】＋我流剣術【天閃】

そして——抜刀。

瞬間——灼熱の竜巻に蒼い剣線が奔り、半ば灼熱の竜巻を斬り裂く。

だが、完全には切断するには至らず竜巻を切り裂いた部分から噴出するように摂氏3000度以上の灼熱の炎が日色へと襲い掛かる。

しかし、悔るなかれ日色の剣術はそれだけでは止まらない。

日色の神速の斬撃が通過した部分の空気が弾かれたことで真空の空間が生まれ、その空間の空気が元に戻ろうとする作用により灼熱の炎が日色を焼き尽くすことはなくその目の前で引き寄せられ、縫い付けられるように停止する。

そして、二回転目の遠心力と更なる一步の踏み込みを加え、日色のさらに威力の増した【天閃】がもう一度繰り出された。

「——【天閃】……二撃ッ!!」

日色が習得しようとした抜刀術の元々の技は『隙の生じぬ二段構え』として生み出されているのだ。だとすればその抜刀術を日色が習得しようとしなはずがない。

瞬間——さつきよりも何倍にも長く、そして深い蒼い剣閃が炎を含めた灼熱の竜巻を今度こそ斬り伏せる——

——どころか斬撃はヒュドラの胴体そのものを切り裂き、決して浅くない斜線の傷口を生み出した。

「【緋槍】！【砲皇】！【凍雨】！」

痛みに悶えるヒュドラの隙を突くようにユエが矢継ぎ早に魔法のトリガーを引いた。

有り得ない速度で魔法が構築され、炎の槍と螺旋に渦巻く真空刃を伴った竜巻と鋭い針のような氷の雨が一齐にヒュドラを襲う。

攻撃直後の隙を狙われ死に体の赤紋様の頭と緑紋様の頭を庇うように黄紋様の頭が【金剛】らしき固有魔法を使い、盾になろうとするが日色が白紋様に接近していることに気づき、一鳴きすることで地面を波打たせ柱を生み出すことで即席の盾を生み出させ、矢継ぎ早に日色へと噛み付きを繰り出していく。

「クルアンツ!!」

ユエの魔法はその石壁に当たると先陣が壁を爆砕し、後続の魔法が襲い掛かる。青紋様の頭が出来るだけ攻撃を打ち消そうとしているのか口から何度も氷の息吹を吐き出した。

しかし、量が量なので完全に打ち消すことはできないようだ。

「「グルウウウウウ!!」」

完全に打ち消すことのできなかつた魔法が三つの頭に直撃し、三つの頭は悲鳴を上げのたうつことしかできない。

黒紋様の頭が、魔法を使った直後のユエを再びその眼に捉え、恐慌の魔法を行使する。ユエの中に再び不安が湧き上がり、視界がかつての封印部屋の暗闇に塗りつぶされる。

しかし、日色の言葉と痛くも暖かみのあったデコピンを当てられた箇所から暖かみを感じ、体に熱が入ったように気持ちが高揚し、不安を押し流していった。

「……もう効かない!」

ユエは、日色を援護すべく、更に威力よりも手数を重視した魔法を次々と構築し弾幕のごとく撃ち放つ。どうせ強力な魔法を当てられてもすぐに治されてしまうのだ、だったら絶え間なく攻撃したほうが注意を惹きつけられるはずだ。

回復を受けた赤紋様の頭、青紋様の頭、緑紋様の頭がそれぞれ攻撃を再開するが、ユエはなんとか魔法で凌いでいた。相手の攻撃は一つ一つが最上級魔法の威力だがそれに対し中級魔法程度で凌いでいるユエの魔法の技術がどれだけ異常かよくわかるだろう。

一方、日色は三つの首がユエに掛かり切りになっている間に、一気に接近する。白紋様の魔法は最悪シユラーゲンの攻撃すら弾き返してしまう可能性があるため、魔法を展開する暇すらないほどの連撃を浴びせるには接近したほうがいいからだ。黒紋様の頭がユエに恐慌の魔法が効かないと悟ったのか、今度は日色にその眼を向ける。

「——がッ!？」

瞬間、日色の視界が反転し、視界に様々な悪夢を映し出される。

ハジメに裏切られて射殺される自分の姿が。

ユエに裏切られて身体を焼き尽くされる自分の姿が。

物語のラスボスに無残にやられる自分の姿が。

日色の胸中に湧き上がる不安が日色の動きを止めらせ、その隙に黄紋様の頭がサソリモドキに勝る魔法で地面を操り、日色へと襲い掛かる。

だが——

「——舐めるなッ……!」

——日色は無理矢理悪夢を吹き飛ばし、襲い掛かる土の触手をミリ単位で紙一重避け、文字魔法で『炎』の文字を書き、黒紋様の頭目掛けて射出させ突然燃え上がったことに困惑と悲鳴をあげる黒紋様の頭を抜刀術で首と頭をお別れさせる。

先ほど見せられた悪夢は日色にとつて既に受け入れた悪夢だ。例えばその悪夢が訪れたとして日色はできる限り抗い生きると、その時はその時だと決めたのだ。………世間一般ではそれを思考放棄というのだが。

蒼色の残光を残しながら日色は掻き消えるように土の触手を避けながら黄紋様に接近する。

それに対し受けて立とうと言うのか黄紋様の頭は自らの頭を巨大化させ、【金剛】らしい魔法を使って自ら噛み付き攻撃を日色に行った。

しかし、その攻撃が日色の身体に傷をつける前に日色が袈裟懸けに刀を振り下ろした。

——我流剣術浸透斬撃【霞桜】

刀が黄紋様の頭に触れると共に衝撃となった斬撃が黄紋様の頭の内部を斬り裂き、内側から破裂させた。

「今だ！ハジメッ！」

「わかつてる！」

首を残して無残の姿になった黄紋様の頭をすかさず回復させようと白紋様の頭が視線を向けるが、その瞬間の隙を突くようにハジメが【空力】と【縮地】で飛び上がり背中に背負っていた対物ライフル『シユラーゲン』を取り出し空中で脇に挟んで照準する。それに気づいた白紋様の頭が反射魔法の結界を生み出し、日色が「クソッ！」と悪態をつくがハジメの表情は変わらない、不敵な笑みのままだ。

「貫けッ！」

ハジメが【纏雷】を使いシユラーゲンが紅いスパークを起こす。そのスパークは最初の頃よりもだいたい威力は上がり二尾狼の【纏雷】の約4倍の威力である。弾丸はタウル鉱石をサソリモドキの外殻であるシユタル鉱石でコーティングした地球で言うところのフルメタルジャケットだ。シユタル鉱石は魔力との親和性が高く【纏雷】にもよく馴染む。通常弾の数倍の量を圧縮して詰められた燃焼粉が撃鉄の起こす火花に引火して大爆発を起こした。

ドガンッ!!

大砲でも撃ったかのような凄まじい炸裂音と共にフルメタルジャケットの赤い弾丸が、更に約一・五メートルのバレルにより電磁加速を加えられる。その威力はドンナーの最大威力の更に十倍。単純計算で通常の対物ライフルの百倍の破壊力であり、威力を比べれば戦艦の大砲などこれに比べれば玩具のようなものだ。異世界の特殊な鉱石と

固有魔法がなければ到底実現し得なかった怪物兵器である。

発射の光景は正しく極太のレーザー兵器のよう。かつて、勇者の光輝がベヒモスに放った切り札が、まるで兎戯に思える。射出された弾丸は真つ直ぐ周囲の空気を焼きながら白紋様の頭が生み出した結界に直撃した。

反射魔法の結界は必死に弾丸を跳ね返そうと、ゴムのように引つ張られながらも一瞬は耐えたもののすぐにパンツ!!という音と共に粉碎され、背後の白紋様の頭に直撃するも何もなかったように貫通して背後の壁を爆砕した。階層全体が地震でも起こしたかのように激しく震動する。

後に残ったのは、頭部が綺麗さっぱり消滅しドロツと融解したように白熱化する断面が見える白紋様の頭の残骸と周囲を四散させ、どこまで続いているかわからない深い穴の空いた壁だけだった。

一度に半数の頭を消滅させられた残り三つの頭が思わず、ユエの相手を忘れて呆然とハジメの方を見る。ハジメはスタツと地面に着地し、煙を上げているシューラーゲンから排莖した。チンツと葉莖が地面に落ちる音で我に返る三つの頭。ハジメと日色に憎悪を込めた眼光を向けるが、彼等が相対している敵は眼を離していい相手ではなかった。

〔天灼〕

それは正しく天の怒り。

かつての吸血姫。その天性の才能に同族までもが恐れをなし奈落に封印した存在に敵対した事への天罰だとも言うかのように三つの頭の周囲に六つの放電する雷球が取り囲む様に空中を漂ったかと思うと、次の瞬間、それぞれの球体が結びつくように放電を互いに伸ばしてつながり、その中央に巨大な雷球を作り出した。

ズガガガガガガガッ!!

中央の雷球は弾けると六つの雷球で囲まれた範囲内に絶大な威力の雷撃を撒き散らした。三つの頭が逃げ出そうとするが、まるで壁でもあるかのように雷球で囲まれた範囲を抜け出せない。天より降り注ぐ神の怒りの如く、轟音と閃光が広大な空間を満たす。

そして、十秒以上続いた最上級魔法に為すすべもなく、三つの頭は断末魔の悲鳴を上げながら遂に消し炭となった。

何時もの如くユエがペタリと座り込む。魔力枯渇で荒い息を吐きながら、無表情ではあるが満足気な光を瞳に宿し、日色へと向けてサムズアップした。ハジメがその行動に苛立ったのか眼光に僅かに殺意を滲ませる。

日色はそんな二人を落ち着かせながら、ヒュドラの僅かに残った胴体部分の残骸に背を向けユエの下へ行こうと歩みだした。

直後――



「日色ッー」

——ハジメの切羽詰まった声が響き渡る。何事かと見開かれたハジメの視線を辿ると、ズゾツ!!と圧倒的プレッシャーを纏いながら胴体部分から銀色に輝く七つ目の頭がせり上がり、ある一方向を睥睨していた。

その方向とは——ユエ!!

瞬間——七つ目の銀色に輝く頭は、ユエをその鋭い眼光で射抜き予備動作もなく極光を放った。その極光はハジメのシユラーゲンの比較にすらならないほどの破壊力があると一目見て誰もが理解できてしまう。

極光は瞬く間にユエに迫るが、ユエは魔力枯渇で動けない。

しかし、ユエに直撃し丸ごと消し飛ばす数瞬の前に日色が青紋様と緑紋様の頭の攻撃を防いだ時の再現のように再び立ち塞がることに成功した。

銀色の頭が出てきた瞬間、悪寒と同時にユエのもとへ飛び出していったことでなんとか間に合ったのだ。

咄嗟に文字魔法『防』を発動し、蒼色の結界を生み出してユエから極光を防ごうとする。

しかし、その結果はあの時とは全く違ったものだった。

結界は濡れた紙を破くが如く容易く破壊され、極光が日色を飲み込む。後ろのユエも

直撃は受けなかったものの余波により体を強かに打ちぬかれ吹き飛ばされた。ハジメも極光が境界を突き破り、地面に着弾すると共に乱反射するように拡散し、幾つもの光線をなんとか「空力」と「縮地」で避けながら日色の名前を叫ぶことしかできない。

極光が収まり、ユエが全身に走る痛みに呻き声を上げながら体を起こす。極光に飲まれる前に日色に助けられた光景に焦りを浮かべながらその姿を探す。

日色は最初に立ち塞がった場所から動いていなかった。両腕を前に突き出し、仁王立ちしながら血だらけになった全身から煙が上がっている。地面には融解した刀と鞘の残骸が転がっていた。

「ひ、日色？」

「ひ、いろ……？嘘……そんなッ」

「……………」

なんとか光線を回避し、此方のもとに來れたハジメも目の前の現実に掠れた声で言葉を零すが日色は一切答えない。瞬間——まるで糸が切れた人形のようにグラリと揺れると前のめりに倒れこんだ。

「日色ッ!!」

少女達の悲鳴が木霊するの中、地面が日色の血で紅に染め上げられ、倒れた衝撃で外れた眼鏡は極光でレンズが割れており、落ちた眼鏡のフレームを地面に溢れるように流

れる日色の血が彩っていく。

それはちようど黒のフレームを緋色へと変えていくように。  
戦闘は、まだ終わらない。

## 最奥の死闘②

「日色ッ!」

ハジメは新たに現れた7つ目の銀色の首の存在すら頭から忘れ、痛む身体を無視して一目散にうつ伏せに倒れ込んでいる日色へと駆け寄った。ユエも焦燥に駆られるまま日色の元に駆け寄ろうとするが魔力枯渇で力が入らず転倒してしまい、もどかしい気持ちを押し殺して神水を取り出すと一気に飲み干し、少し活力が戻った身体で日色の元へと今度こそ駆け寄った

うつ伏せに倒れ込んでいる日色の下からジワツ、と流れる血は止まることを知らない。あのヒュドラの吹雪の一撃すら防いだ文字魔法を軽々と突き破り、「金剛」による防御すらも突き抜いてしまったことから想像を絶する威力なのだ嫌でも理解ができた。

「早く神水を……………ッ!」

「言われなくても……………ッ!」

ユエの言葉にハジメは苛立つ様に返しながらも日色を無理矢理仰向けにさせた。

そして同時に余りの傷の酷さに二人は言葉を失った。指の先から胸、横腹にかけて肉が焼き爛れており一部が骨が見え、服は焦げ焼き爛れた皮膚と一体化している部分もあ

る。最も軽傷である頭や足の怪我でさえ軽い火傷程度なのでそこは不幸中の幸いだつた。

ハジメは急いで神水を飲ませ様とするがそんな時間を敵が与える筈がない。銀色の頭はガポツと口を開けると数えることが馬鹿らしくなるほどの無数の光弾をガトリング掃射の如く吐き出して来た。

壁や地面にぶつかる到着弾点を溶かしたまま跳ね返る直径10センチの光弾や直線には飛ばず弧を描く様に動く爪の様な光弾、無数の直径50センチ程の大玉同士を連結させる線の様に光線が大玉の間に出てくる連結光弾などが激しく三人に襲いかかる。

「最悪ッ！」

「ハジメッ！柱に！」

「分かつてる！」

ハジメは日色を抱えると疲労した体に鞭を打ち、ユエが指した柱の陰に共に隠れる。柱ごと仕留めようと言うのか柱を削るように無数の光弾が次々と撃ち込まれていく。ハジメは隠れると共に錬成を行い、柱を修復させながら時間稼ぎを行おうとするが修復速度よりも柱を削る速度の方が断然早い、このままでは1分も持たないだろう。

「ユエッ、早くッ！」

ハジメの声を聞き、ハジメから神水を受け取ったユエは急いで日色の傷口に振り掛

け、もう一本もむせないように少しずつ飲ませる。

しかし、神水は止血効果はあったものの何かに阻害されているのか中々傷を修復してくれない。何時もならずすぐに修復が始まるのに、まるで攻撃を受け続けているかのように修復速度が遅くなっているのだ。

「どうして!?!」

ユエは半ばパニックになりながら自分が持っている神水を全て取り出した。

「もしかして……あの極光には回復を阻害する効果があるの……ッ!?!」

ハジメの推測は当たらずも遠からずだ。実はヒュドラのあの極光には肉を溶解させる一種の毒が含まれているのだ。それは文字通り僅か1分弱で肉体を跡形も無くドロドロに溶かす程の。

しかし、神水の回復速度も凄まじく、溶解速度を僅かに上回って修復しており、速度は遅いが確実に治ってはいる為、死ぬ事は無いだろうし、日色の魔物の血肉を取り込んだ強靱な身体も相まって時間をかければ治りそうである。

この場合、神水の回復速度を褒めるべきかそれともヒュドラの溶解の毒を褒めるべきか悩みどころだろう。

しかし回復速度が遅いと言う事は直ぐには復帰できないと言う事であり、日色が動けるようになるまですでにほとんど砕かれた柱はとも保つ筈がなかった。

その事実にくエは小さく唇を噛んでいると、カチャリと音がした。ふとそちらを見る  
と神水を飲んだハジメがシユラーゲンと背負い、ドンナーを持って立ち上がっている姿  
があった。

「——ユエ、日色をお願い」

「……ハジメ？——ッ！待つ——」

ハジメの言葉に疑問の声を上げるユエ。しかしすぐさまハジメが何をしようとして  
いるのかを察し、声を荒げ止めようとするが数コンマ遅かった。

瞬間、ハジメが柱の陰から飛び出した。

己が時間を稼ぐために。



(……………私のせいだ)

柱の陰から飛び出したハジメを最後に残った銀紋様の頭が睥睨し、幾つもの種類の光  
弾を発射する。ハジメはドンナーで撃ち落としながら、「空力」と「縮地」を用いて回避  
するが襲いかかる光弾は最早千にも及び一種の芸術のようだ。しかもそれらは壁や地  
面にぶつかるとびに着弾点を溶かし、ボールのように跳ね返るため光弾の数は減るどこ  
ろかむしろ増えていく一方である。

流石のハジメも文字通り視界一面埋め尽くす光弾の密度の所為で中々反撃に出るこ

とが出来ない。ドンナーによる射撃も途中で光弾に遮られてしまったため銀紋様の頭を狙うことも不可能だ。

(……私のせいだ……ッ！)

時間を稼ぐことはできてはいるが徐々にその光弾の包围網は狭まっていき、光弾が直撃するのは時間の問題だろう。

だが、その事実に対しハジメの内心は場違いのようにひとつの感情が激烈に荒ぶっていた。

それは、憤怒。

誰かに撒き散らすものではなく、ただただ自分自身に向けられた自己嫌悪のようなもの。

日色が傷ついた。誰のせい？誰によるもので？誰が原因で？

自分のせいだ。自分が無様に倒したと油断したからこうなった。愚かにも甚だしい。己の愚鈍さに反吐が出る。

もはやその憤怒の荒波は抑えることができずハジメは胸中を焼き尽くし、目の前の敵を殺せと駆動する。



「——ッ!!」

ハジメはもはや限界に近い身体に鞭を打ち更に体を加速させ、光弾の弾幕の中を縦横無尽に疾駆する。

その速度は風圧だけで軽く常人は吹き飛ばされるほどのもの、ハジメは一気に接近してからのシュラーゲンによる近距離の一撃を叩き込もうとしているのだ。

（——もつと速くッ!!）

更に加速しながらハジメは弾幕の隙間をなんとか潜り込みながら接近していく。しかし数十センチ進むたびに光弾が体を微かに掠め、それに比例するように血も流れ限界に近い身体に疲労も溜まっていく。

（——もつとッ!!）

それらを無視してハジメは更に加速し、そして遂に銀紋様の頭から3メートルまで接近することに成功した。ハジメは頭を狙っている光弾を首を傾げることで避け、背負っていたシュラーゲンを構え銀紋様の頭に照準を向ける。銀紋様の頭の耐久度は知らないがこれほど近かったのなら確実に殺せるはずだ。

（——これでッ!!）

「死——」

そしてハジメがシュラーゲンの引き金を引こうとして——

刹那。

——銀紋様の頭がハジメを嘲笑った様に見えたと同時にハジメの背筋に悪寒が走る。咄嗟にハジメは射撃を切り上げ身体を反らそうとするが一瞬遅かった。

瞬間——銀紋様の頭が首を少し傾けると共にさつきまで銀紋様の頭がいた場所から光弾がハジメに襲いかかる。

ハジメは咄嗟に身体を反らした為、胴体に直撃する事はなかったものの反応するのが遅れた為完全に避け切る事はできない。襲いかかる光弾がハジメの顔面へと襲いかかり——

——それがハジメの右眼が最後に見た光景だった。

「——あぐつ、があ!!」

バシユツ!!という音と共に眼の部分が焼かれ、文字通りハジメの右眼が蒸発した。

流星のハジメも突然見えなくなった視界と顔を焼く激痛に動揺し、ぐらりと体勢が崩れてしまう。当然、それをヒュドラが見逃す筈がない。銀紋様の頭が体勢の崩れたハジメを狙う様に口をガパツと開き、「クルアアアアン!!」と叫ぶと日色を焼いた時の様に極光を放つ。

その瞬間、ハジメは己の失態を悟る。この銀紋様の頭は最初からハジメが突撃してくることが読んでいたのだ。だからこそ不意を付けるよう光弾を己の頭の背後から飛び

出すようにしていた。大量に光弾を撃っていたのは不意をつくための光弾を隠すためのものなのである。

極光がハジメに迫る。視界が閃光に満たされ、直撃する。死ぬ。

その無慈悲な決定にハジメは思う。

(まだだ……ッ!!)

激烈な怒りが更に燃え上がり、全身を満たしていく。

この理不尽を許容するのか？こんな化け物に屈するのか？大切な人が傷ついたのに仕方がないと諦めるのか？

違うッ！断じて違うッ！日色の命を脅かすものは、日色を傷つけるものは殺す！

だからッ——

「ま、だ、だアッ!!」

その瞬間、ハジメの脳内にスパークが走った様な感覚と同時に世界が色褪せた。モノクロームの世界でまるで時間の流れが途端減速したかのように光弾や極光がゆっくりと動いているのが視認できる。そんな中、ハジメだけは自由に動けるのだ。

——【天歩】の最終派生技能「+瞬光」

知覚機能を拡大し、合わせて【天歩】の各技能を格段に上昇させる派生技能。この瞬間、土壇場でハジメはまた一つ、『壁を超えた』のだ。

減速された世界の中で迫り来る極光をハジメは倒れ込むように左下方向へと「天歩」を用いて回避する。

回避した空間にも光弾は迫り来るがハジメは尽く空中をまるで踊るようにくるくるとあるいはフラフラと倒れるように「空力」で細かに移動しながら光弾をやり過ごしていく。

（——これならッ！）

新たな技能の力に希望を見出したハジメが地面に着地すると共に四方八方から幾つもの光弾が同時に襲いかかる。ハジメはそれらの光弾を避け、再び銀紋様の頭へと突撃する為両足に力を入れ——

「——あ」

——瞬間、まるで糸の切れた人形のようにガクツと両足に込められていた力が抜け、受け身も取れず倒れ伏した。

突然、力が抜けたことに驚愕し慌てて立ち上がろうとするが身体は限界だと訴える様に震え、まるで底無し沼に入ってしまったかの様な深い倦怠感がハジメを襲う。

「……な、ん……で……う……動け……な……」

そう呟くことすらままならないハジメ。別にハジメが動けなくなったのは銀紋様の頭によるものではない。

ただ、ハジメの疲労が限界値に溜まっていただけである。

ヒュドラの六頭の戦闘に疲労した身体は既に限界に近くなっており、日色が傷ついたことで怒りに囚われたハジメは限界に近い身体を更に酷使した。元々少なかった体力を絞りに絞り続けていたのだ。疲労した身体に着実に増えていった傷から流れる血を合わせればこうなるのは当然と言えるだろう。神水もユエに渡しているため、疲労を回復させることも不可能だ。

だが――

「……まだ……だ……ッ……まだッ！」

―― 迫り来る光弾を前にしてもハジメは以前諦めず、怒りを糧に足掻き続ける。

ハジメの瞳は以前と変わらないどころか一層怒りと殺意に満ち溢れ、紅の魔力はハジメの心情を表すかのように荒れ狂い続けている。

「――ま……だ……ッ！」

しかしどれほどの思いを持って立ち上がろうとしても現実是非情である。迫り来る無数の光弾は成す術がないハジメへと無慈悲に襲い掛かり――

「……【緋槍】！【砲皇】！――【凍雨】ッ！」

——突如横から割り込むように炎の槍と螺旋に渦巻く真空刃を伴った竜巻がそれだけの確に光弾に着弾し、相殺することはできなかつたものの軌道を変えることには成功し、ハジメの倒れている場所から遙か彼方へと着弾した。

同時に幾つもの氷の針が銀紋様の頭に襲い掛かり、少しの間だが怯ませることに成功した。

ハジメはその声の主を、その精密な魔法を扱う者を知っている。

ハジメが驚きの混じつたその者の名を言葉を零すと同時にハジメの目の前に金色の髪を持った吸血姫がハジメの前に現れた。

振り返ると共にハジメとはまた違う美しさを持った紅の双眼がハジメを映した。

「——ユエ……」

「………無様。ハジメ、何やってる？」

ユエはそう呟くと共に取り出した神水をハジメの口に彼女が咳き込むのを無視して強制的に飲ませた。

ハジメはどうにか飲み干すと身体にあつた大量の小さな傷は完全にはいかないがある程度塞がり、全身の倦怠感と疲労感が消え失せる。

「………うるさいッ、私は早くアイツを——」

——殺す。その言葉を立ち上がりながらハジメが言い終わる前に比喩ではなくその

ままの意味で冷水が浴びせかけられた。ハジメの頭上に突如発生した大量の水が小規模な滝となって降り注いだことでハジメの全身がびしょ濡れになってしまい強制的に肉体的にも精神的にも冷やされてしまう。荒れ狂っていた怒りの激情も今は冷えてしまったせいで静かになってしまっている。

「~~~~ツ!!何を——」

「……頭は冷えた?」

困惑するハジメが憎しげにユエを睨みつけるがユエの言葉の意図に気づくとバツの悪そうな表情となる。

ユエが水をハジメに浴びせたのはハジメに冷静さを取り戻すためだろう。ハジメは日色が傷ついた事実に関心を怒り一色に塗り尽くされ、軽く我を忘れていたのだ。何故なら本来のハジメならば不用意に傷を無視した特攻など行わないはずだから。

「——ツ……ええ、情けなさで怒り狂いそうになる程ね」

ハジメは濡れた体で立ち上がり、一度天を仰ぎながら自分の頭に手を翳し深呼吸を行うことで己の中に燃え盛っている怒りの炎を落ち着かせる。燃え盛るような怒りを深く、冷たく、鋭い刀のような殺意へと変え研ぎ澄まさせていく。

「……それで、日色は目覚めたの?」

「……まだ。着実に傷は治ってきているけど目を覚ますまでには至ってない。念の為に

魔法で壁を作つて回復するのを待つてた……けど——」

「——私が殺られそうだったから助けに来たつてことね……最悪」

ユエがコクリとそう頷いたのを見てハジメは小さく歯噛みする。おそらくユエは倒れた日色の血を飲み魔力を回復させ自分を助けに来たのだろう。ユエに助けられた事実二度と冷静さを失つて、ユエに借りを作らないと誓うハジメだった。

ふとユエが来た方向を見ると柱の陰にユエの土魔法で柱と合わせるように組み合わせた壁が日色を覆うかのように生み出されていた。光弾が壁に被弾している様子はないためどうやら時間稼ぎは成功しているようだ。

「……一応礼を言つておくね、ありがと」

「——お前の礼なんていらぬ」

「——人の善意を……ッ！」

念の為に言つた礼に対し冷たく返すユエに拳を震わせるハジメだが無視をするなど言いたげに「クルアアアアン!!」という銀紋様の叫びを聞くと思考を切り替える。

「——まあいい。ユエ、手伝つて。あのヒュドラを殺す」

「……言われなくても」

瞬間、ヒュドラが極光を放つと同時にハジメはユエを抱え【瞬光】で上昇した【空力】と【縮地】でその場から空中へと退避した。



さつきまでいた既に無人の場所を極光が貫き、床を瓦礫に、瓦礫を砂に、砂を塵に、欠片も残さず蒸発させた。

同時に空中に回避したハジメ達をさつき着弾した極光が巨大な球体に形を変え、一瞬収縮すると一気に弾けるように分裂し、無数の光弾が空中へと弾け飛んでハジメ達を襲いかかってくる。

「——遅いっ！」

しかしハジメはユエを抱えた状態でありながらまるで光弾の方がハジメを避けていると勘違いするほどにギリギリで避けていく。その挙動はあたかも縦横無尽に空間を疾る紅の雷だ。その証拠にあまりの挙動と速度のせいユエが軽く目を回してしまっている。

高速で移動しながらハジメは銀紋様の頭へと駆けながら、「縮地」を使い、紙一重で光弾を避けながらドンナーを連続で3発発砲する。銀紋様の頭はその銃弾を嘲笑うかのようにハジメが撃つ事を最初からわかっていたかのように首を傾けることで光弾の弾幕を唯一突き抜けた一つの銃弾を回避した。

「——チツ」

ハジメは小さく舌打ちし、再度次々と場所を変えて銃撃を行うがいずれも光弾に弾かれるか弾丸は外れ虚しく天井に穴を開けるだけだった。銀頭の目に嘲りの色が宿り、光

弾をハジメ達目掛けて発射するがそれらをユエが魔法で迎撃する。

「……ちゃんと狙って」

「——うるさい、いいから黙って見てて」

ユエの苦言にハジメは気にした様子もなくリロードを行い再度発砲するがそれらも例外なく天井に穴を開けるか光弾に打ち消されるだけだった。ハジメは全弾撃ち尽くすと「空力」で宙へ跳躍し、ユエに魔法を打ってもらいながら天井付近の空中を泳ぐように跳躍し光弾をかわす。

あまりに逃げ続けるハジメ達に苛立ったのか銀紋様の頭は極光を放った。

（それを——

——待ってたのよッ！）

ハジメは無意識に頬が緩んでしまうのを感じながら悠々と極光を躲すとリロードしたドンナーを再び穴を開けた六箇所に向かって狙い撃った。ハジメは銀紋様の頭が極光を放っている間は硬直していることを看破していたのである。

すると、突然天井に強烈な爆発と衝撃が発生し、一瞬の静寂の後、一気に崩壊を始めた。その範囲は直径十メートル、重さ数十トン。大質量が崩落し直下のヒュドラを押し潰した。

あの時、ハジメは天井にドンナーで穴を開け、空中で光弾をかわしながら手榴弾を仕

込みつつ、鍊成で天井の各部位を脆くしておいたのである。そして、六箇所をほぼ同時に撃ち抜き爆破した。ハジメが銃弾を外していたのは偶然ではなかったのである。

「クルアアアアンツツ!!」

しかし、流石ヒュドラと言うべきか押しつぶされただけですぐさまこの瓦礫から身体を持ち上げようとする。おそらく瓦礫で動きを封じれるのは一瞬あるかどうかだろう。

しかし一瞬は一瞬でも、それは確かに隙なのだ。

ハジメは【縮地】で一瞬でヒュドラの元に接近し、鍊成で崩落した岩盤を変形させ瞬く間に拘束具に変える。同時に、銀頭の周囲を囲い即席の溶鉱炉を作り出した。その場を離脱しながら焼夷手榴弾を全て溶鉱炉の中に放り込み、叫ぶ。

「ほらっ！隙を生み出してやったからさっさと魔法を使ってっ！ユエッ！」

「——言われなくても……【蒼天】ツ!!」

ユエの言葉のトリガーと共に青白い太陽が現れ、ハジメが生み出した溶鉱炉へ放り込まれると共にハジメが鍊成で溶鉱炉に蓋をするように覆い尽くす。中に放り込まれた爆薬の類も連鎖して爆発し、ハジメ達のいる場所からも感じる程の熱気がヒュドラへと襲い掛かる。

「グウルアアアア!!」

ヒュドラの叫びと共に暴れ、溶鉱炉を破壊しようとするがハジメが鍊成し直すため脱

出することができない。

そんな中、ハジメは練成をしながら肩にかけてあるシユラーゲンを構え、溶鋳炉へと銃口を向ける。

「そんなに出たいのなら穴を開けてあげる」

ドガンツツ!!!

瞬間、ハジメがシユラーゲンの引き金を引くと大砲のような轟音と共に赤雷の極光が溶鋳炉へと発射され、容易く溶鋳炉を貫くと同時に膨大な炎がシユラーゲンが貫いた穴から吹き上がると共にヒュドラの叫び声すら打ち消して大爆発を巻き起こした。爆音が空間全域に伝わり、凄まじい熱風が穴から吹き出して二人を襲う。溶鋳炉があった場所は接触面は全てどろどろに溶け、溶岩のようになった瓦礫がどろりと地面に落ちていく。

【バックドラフト】

室内など密閉された空間で火災が生じ不完全燃焼によって火の勢いが衰え、可燃性の一酸化炭素ガスが溜まった状態の時に窓やドアを開くなどの行動をすると、熱された一酸化炭素に急速に酸素が取り込まれて結びつき、二酸化炭素への化学反応が急激に進み

爆発を引き起こす火災の現場で起きる爆発現象である。

密閉された空間でヒュドラに当たって爆発した「蒼天」が一瞬にして穴の中の空気を使い尽くし、シユラーゲンによる銃弾が溶鉱炉を貫き、ヒュドラに直撃すると共に穴が開けられたことで穴の外の空気を急激に吸い込んだことによつて炎が吹き出したのだ。

確実に仕留めた、そう思ったユエは襲い掛かる倦怠感から耐えながらハジメの方を向き――

「……………嘘」

――驚愕の表情で面影がないほどドロドロに溶けた溶鉱炉の方を見続けているハジメの声を聞いた。

慌ててユエは溶鉱炉の方を見ると吹き上がっている土煙の中に微かに黒い巨大な竜の影を見た。

「……………そん、な」

無意識に溢れる声をユエは自覚することが出来ない程の絶望が襲い掛かる。

そして、土煙が晴れると共にその姿が明らかとなった。

嘗てのギラギラと輝く鱗は黒焦げになり、肉は全身火傷で所々煙が吹き上がって、そして胴体の左腹にはシユラーゲンにより貫かれ、炎により傷口を焼かれた血のこぼれな

い穴が存在していた。

だが、生きていた。

それでもまだ、ヒュドラは生きていた。

そして、ヒュドラがハジメ達を睥睨すると共に銀紋様の頭の瞳が一際輝いた。

「ユエッ！」

ハジメはゾクンツと背筋に走った悪寒に従い、神水を飲んでいるユエを呼び、ユエを背中に担ぎ上げる。そして、ハジメが再び戦闘態勢に入るとヒュドラの咆哮と共に変化が訪れた。

「グルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

最初はギユコンツ!!という異質な音だった。ヒュドラの首の一つである黒焦げになった赤紋様の頭がまるで首の肉に埋もれるように首だけ残して奥に引っ込んだのだ。それに連動するように残りの5つの頭が首に引っ込んでいく。

そして、引っ込んだ部分から赤紋様の頭からは赤い魔力が、青紋様からは青い魔力がといったように頭の紋様と同じ色の魔力が吹き出てきたのだ。

しかもハジメの【魔力感知】からは首一つから吹き出ている魔力だけでもハジメの魔力の三倍の量である。

「…第二ラウンドってわけね」



「——なッ!」

「——え!」

ユエの「緋槍」を避けるように極光は空中で八つに分裂し四方八方に弧を描くように軌道を変え、それぞれが二人に襲い掛かる。咄嗟にハジメがシユラーゲンを盾にしたことにより直撃は免れたものの、分裂した極光がシユラーゲンに触れた途端、シユラーゲンに入つてある火薬が引火し、爆発と共に二人は別々に吹き飛ばされた。

「があああッッ!!」

「キャアッ!!」

まともに受身を取れず地面に墜落してしまう二人。しかしそのまま止まっているわけには行かないハジメは倒れた状態から飛び上がるように立ち上がり、同じく倒れているユエを拾い上げなんとか襲い掛かる光弾を転がるように避ける。「瞬光」を使つてすらどうにか追いつがることのできる現状に絶望しそうになる。

「——ユエ!大丈夫!」

「……ッ、大丈夫。まだ…行ける」

「それは良かったわッ!」

ハジメはユエの返答に苦しい表情で言い返す。

襲い掛かる高密度の光弾の中、ハジメ達は徐々に追い詰められていった。



◆  
落ちていく。

落ちていく。

落ちていく。

まるで自分という意識が闇へと微睡みと共に落ちていくのを日色は感じた。

どうして自分はこんなところにいるのだろうか？いつから自分はこんなところにいるのだろうか？

わからない。

わからない。

——ああ、でも眠い。どうせならこのまま眠ってしまおう。

そう思っていると突如暗闇の視界の中、目が焼ける痛みと共に映像が流れてくる。

白髪の少女と金髪の少女がボロボロになりながらも怒りを滲ませて一匹の化け物と戦っていた。

——どうして戦っているのだろうか？

——どうして怒りを抱いているのだろうか？

——そもそも彼女達は一体誰だったのだろうか？

再び痛みが奔るとその痛みに呼応するように今度は映像と共に音声が始めた。

『ぼ、僕の名前は——南雲ハジメです』

『……んっ。今日からユエ。ありがとう』

——そう……彼女達は、彼女達の名前は……

日色の言葉と共に次々ハジメとユエの様々な映像が流れ始める。

初めてハジメと出会った時のこと、ハジメと一緒に学校で話したこと、奈落に落ちてハジメに助けてもらったこと、ユエと出会ったこと、サソリモドキと死闘したこと、様々な思い出が流れていく。

——そう……だ、こんなところで寝てなんていられるか！

映像は再び、最初のハジメとユエがヒユドラと戦っている映像に戻った。どうやらかなり苦戦しているらしく彼女達の姿は既にボロボロになっていた。

その姿に日色の心臓がひときわ高くなったと錯覚した。

どうにかして意識を浮上させようとするがまるで底なし沼のように眠気と倦怠感が日色に襲い掛かり、日色を更に闇へと落としていく。

——ク……ソツ！ま、だだ……俺は、アイツ等を……

だが、そんな日色の叫びとは裏腹に徐々に視界がぼやけ、映像すら見れなくなってくる。

——お、れ……………は……………

落ちる、落ちる、落ちていく。

そして、遂に糸が切れるかのようにプツリと思考が途切れ——

『……………♪、~~~~♪……………♪』

——歌が、聞こえた。



「があツ!!?」

「ハジメッ!」

一方その頃、ハジメとユエはヒュドラとの戦闘で既に限界を迎えていた。

ヒュドラの銀紋様の頭から放たれる高密度の光弾は少しずつハジメの体力を奪っていき、遂に限界を迎えたのだ。咄嗟に身を捻ったものの完全には避けきることができ

ず、左腹に掠り、吹き飛ばされてしまう。当然ハジメの背中に乗っていたユエも同様だ。当然、ヒュドラがその隙を逃すはずがなく無数の光弾が彼女達に迫る。咄嗟にユエはハジメを守る為に前に出て魔法で防ぐ。

「【砲皇】 ツ！」

真空刃の竜巻が光弾に襲い掛かり、ユエ達から軌道を風圧で逸していくが量が量だ。光弾がぶつかる度風が削られていき、遂にユエの肩に直撃してしまう。

「あぐっ!？」

痛みと共にユエも限界が近かったせいとかグツと力が抜け、その拍子に真空刃の竜巻が消えてしまう。

その隙を突くようにヒュドラの銀紋様の頭がガパツと口を開け、極光を放つ。

「——ユエっ!!」

咄嗟にハジメは痛みを無視して、ユエに抱きつくように抱え【縮地】を行い、迫る極光からその場を離れようとする。しかし——

(避けきれな……ッ)

——ハジメの【縮地】を行ってその場から離れるがそれを読んでたかのようにヒュドラの極光は空中で分裂し弧を描きながら誘導弾のようにハジメ達に追いつがる。ハジメが再度【空力】で逃れようとするが足に力が入らない。

(日色……ッ!!)

ハジメは迫り来る極光を避けれないと悟るが心で大切な人の心を思いながらも最期の時まで足掻き続ける。ユエも心までは負けるものかと目を閉じずキツと銀紋様の頭を睨みつけていた。極光が迫り視界が閃光に満たされる。直撃する。死ぬ。ハジメは日色を守れなかったことを心の中で謝罪しようとして――

「――ワイド文字……マジック魔法」

刹那――声が聞こえた。

その言葉と共にハジメ達の背後から金色の文字が極光へと迫ると共にガツという音と共に軌道を変えた。

何の膠着もなく、あっさりと。

そして、空中に名残のように『逸』の文字が滞空し、空気に溶けるように消えた。

その魔法を、ハジメは、ユエは知っている。何故ならその魔法は己の大切な人の魔法なのだから。

ハジメはゆっくりと振り向き、言葉を震わせながら大切な名前を呟いた。

「――ひ、いろ……なの？」

「当たり前だ、他に誰に見える」

艶のある黒髪に黒水晶のような鋭い目つきを持っていた少年、神代日色は、傷だらけの身体にユエの金色の魔力とは比べ物にならない美しい金色の炎を纏い、呆れたようにハジメを見つめていた。

ユエも日色の姿に驚いたがそれでも日色が無事なことに涙ぐんでいる。

「その姿は一体……」

「さあな？自分でもよくわからん。だが都合がいいことに力は湧いてくる、こんなふうにな」

そう言って日色は人差し指を伸ばすとそれに応じる様に金色の炎が踊る。

金色の炎は人差し指に集まり、まるで生きているかの様に自ら『治』の文字を描き出す。

それだけに留まらず続く様に金色の炎が『治』『治』『治』『治』『治』『治』と同じ文字を描き、それぞれをハジメとユエに飛ばすと、あつという間に二人の傷と倦怠感が消え失せた。

「……………凄」

思わず感嘆の声をこぼしてしまうユエ。毒が肉を溶かしてしまう前に強制的に治している、文字魔法の効果が格段に上昇しているのだ。

日色は目覚めれば突然体がこうなっており、連続で文字魔法が使えているのだ。何が原因だったのかわからないが今はそれどころではないため思考の隅に置いておく。

「金ロリ、血を吸え」

日色を警戒しているのかこちらを睥睨したままのヒュドラを見ながら静かな声でユエに促した。ユエは唯でさえ血を失っているのにと躊躇するが日色は静かな声で言った。

「……最後はお前の魔法が頼みの綱だ、頼む」

「……っ（コクリ）」

日色の強烈な意志の宿った言葉に、ユエもまた力強く頷いた。日色を信じて首元に顔を埋め牙を立てる。日色の力が直接流れ込むかのようにユエの体に急速に魔力が回復していく。

「——行くぞ、俺たちが勝つ！」

「ええ！」

「んっ！」

瞬間——ヒュドラは攻撃することに決めたのか銀紋様の頭から高密度の光弾を吐いた。

それを見越していたのか日色はユエを背負うと共に自分とハジメに文字魔法をかけ

る。

——【超集中持続】＋文字魔法『速』×2

——【瞬光】＋文字魔法『速』×2

そして、二人は閃光となった。

高密度の光弾を二手に分かれていとも容易く駆け抜けてヒュドラの元へと接近する。

ハジメは【瞬光】によって加速した視界を更にギアを上げ、光弾の隙間を狙い打つようにドンナーを連続で全弾発砲する。

精密な狙撃により電磁加速された弾丸は丁寧に光弾の隙間を突き抜け、ヒュドラの身体をあらゆる方向から貫こうと発射されるがどれもが決定的な効果を持つことができない。

「グウルアアアアア!!」

しかし、注意を惹きつけることはできたようでヒュドラはハジメを怒りの瞳で睨み、高密度の光弾を一層更に放つ、ハジメはそれを【空力】と【縮地】で避けるがその回避先を読んでいたのか回避した方向へと極光を放つ。

だが、その迫り来る攻撃に対しハジメの表情は不敵の笑みのまま変わらないまま叫ぶ。

「日色ッ!」



「任せろー！」

瞬間、極光がハジメの目の前で縦に切り『裂』けた。

ハジメに極光が直撃する瞬間、どこからともなく打ち出された『裂』の文字が空中を飛び極光を遮るように現れたのだ。

その隙にハジメは「縮地」であつという間に動けない銀紋様の頭に接近し、ドンナーを電磁ナイフと「風爪」を合わせた斬撃を放つ。

「クルアン!!？」

肉を切り裂く感触と共にドンナーの斬撃は銀紋様のある額を決して浅くはない程深く斬り裂いた。すぐさま離脱するハジメを銀紋様の頭は逃がすまいと光弾を放とうとする。だが、その前に置き土産とばかりにカンツという音と共に「閃光手榴弾」が銀紋様の頭の鼻の上に置かれていた。

瞬間——銀紋様の頭の視界が閃光に包まれる。

ヒュドラは突然の閃光に眼を焼かれ堪らず悲鳴をあげてがむしやらに光弾を放ちながら暴れまわった。ハジメはがむしやらに吐かれる光弾を悠々と避けながら二人に叫ぶ。

「今ツ!!」

「——ユエ——ツ!!」

「——んっ！【蒼天】ッ!!」

瞬間、日色の声に応じる様に風魔法で空中に上がっていたユエの掲げた手から本日3度目の青白い太陽が生みだされ、吸血姫によりタスクの様に操る手に従いある方向へと射出された。

——空中に気配を隠すのを止め、一直線に銀紋様の頭に接近する日色へと。

最早、銀紋様の頭に【蒼天】だけの攻撃は通用しないだろう、ハジメが生み出した溶鉱炉に【蒼天】を入れバツクドラフトを起こしても重傷を負わせるだけで仕留めきるには至らなかつたのだ。

ならばどうする？

(——簡単だ。隙を作つて文字魔法で【蒼天】の威力を上げて叩きつけるッ！)

世間一般ではそれをゴリ押しという。

背後から此方へと向かつてくる青白い太陽を横目に日色は右手の人差し指に金色の炎を収束させる。余力は一切考えない、この一撃に全てを賭けるッ！

するとユラユラと日色の身体に纏わりついていた金色の炎が日色の人差し指一本に移動していき、収束し、圧縮され、遂に日色の人差し指に小さな小さな金色に輝く球体へと変化した。

そして日色は空中に指を動かし文字を書く、金色の線を残しながら書く文字は『倍』。

しかし、日色が二画目を書く途中で空間を響かせる様な叫びが聞こえる。

「キュルアアアアアアアアアツ!!!」

そう、ヒュドラである。

【閃光手榴弾】により一時的に視力を失ったはずのヒュドラはどんな手を使ったのか銀紋様の頭が上空にいる日色へと視線を向けていた。

「どうしてっ!?!」

光弾を避けて、悲痛な叫びを零しながらハジメは何故ヒュドラが日色の居場所を分かっただのか考える。

（——まさか!?! 【気配感知】 ツ!?!）

ハジメの推測は当たらずも遠からずだ。銀紋様の頭には光弾や極光を放つ他にもう一つの固有技能を持っている。

それは、【魔力感知】である。

不思議に思わなかっただろうか? ヒュドラが新たな形態を取った時、前回の光弾の弾幕よりも何倍の高密度の光弾を避けた時に生じたハジメ達の隙を的確に狙うことが出来るのか。

答えはハジメ達の移動先を知っていたからである。

話は変わるが、かつて技能とは才能だ、と語ったが明確には違う。

正確には技能とは記された行動を体内の魔力を魔法陣無しで使用することができる。適性の才能である。

つまり単純に言えば技能とは魔法から派生したものののだ。

【縮地】や光輝の【天翔閃】のような物理法則に完全に喧嘩を売っているようなとんでも現象を起こせるのは全て魔力を詠唱にしても直接操るにしても魔法として魔力を消費しているからである。

では、話を戻そう。

ハジメと日色の持っている【天歩】や光輝や雫の持っている【縮地】にはある一定の共通点が存在する。

それは使用時に指方性を持った魔力を足に集中してしまうこと。

【空力】は足場を魔力で作っているように、【縮地】も僅かに魔力を消費して行っている。つまり、【魔力感知】には【縮地】の移動先がある程度分かっているのだ。

確かにハジメや日色も一応【魔力感知】の技能を持つてはいるが銀紋様の頭ほどの精度を持っているわけではない。あくまで日色達は大まかに魔力が集まっている場所がわかる程度である。

だが銀紋様の頭の場合は、目を瞑っていたとしても正確に彼らの場所がわかってしま

うほどの【気配感知】の精度を持っているのだ。

ハジメが【瞬光】を使ってすら光弾を凌ぐことが限界なのはそれが理由だ、ハジメの速度は確かにヒュドラには追いつけないほど速かっただろう、だがどこに移動するかを分かっているれば対処は容易いのだ。

故に、現在最も魔力を使用し一点に収束している日色が場所を特定されるのは当然のことだった。

銀紋様の頭が口から極光を放とうとガパツと口を開く。

「——クッ！」

「日色ッ！」

日色はまだ三画の線を書いたばかりであるため、極光を放たれる前に文字を完成させるのは不可能だ。そして一度書いた文字を中断させることはできないため防御も回避もできない。

魔力枯渇で既に動けなくなり、地面に着地すると共に座り込んでいるユエの叫びを聞きながらも日色は歯を食いしぼることしかできなかつた。

(……どうしたらッ!?)

ハジメは今にも極光が放たれようとしている光景を【瞬光】で加速された世界の中思考する。

今から日色の元に行つて助ける？——駄目、間に合うかもしれないがそうなれば日色の魔力が尽きて結局は日色が死ぬ、

極光の射線に入つて肉壁となる？——駄目、数瞬の時間も稼げずに蒸発する。

銀紋様の頭にドンナーで斬りかかる？——駄目、間に合わないッ!!

何度も策のトライアンドエラーを一瞬の内に繰り返すが、一向に答えは出ない。

だがいくら加速された世界の中で動けるとしても時間は刻一刻と近づいて来ている、その事実にはジメは焦りながらも策を考え続ける。

(……絶対に守る……ッ!!)

あの銀文様の極光によつて倒れる日色を自分が無様に眺めるしかないあの光景を見るわけにはいかないから。

(——二度と、日色を……ッ!)

そしてハジメは加速した世界の中、光弾を空中で避けるとあまりの高速による移動によりポーチの栓が緩んだのかチャリンッ!という音と共にポーチに入っていた一つのドンナーの銃弾が空中を舞つた。

「二、度とッ——」

瞬間——カチンッ!とハジメの何か切り替わつた。

思考が冴える、世界から色が消え、体が全能感に包まれる。



だが、

それでも、

その一瞬の隙はあまりにも大きかった。

「よくやった、ハジメッ！」

金色の光が日色の指に従い舞い踊る、人差し指は『倍』の文字を書き終え、二文字目に突入し瞬く間に書き終えた。

そして書かれた文字は『倍増』

日色が初めて書くことができた二文字魔法である。

そして、日色の書き終えた二文字が日色の動かす手に従い青白い太陽に触れる。

刹那——空が輝いた。

日色の書いた二文字はユエの「蒼天」に触れた瞬間、「蒼天」が一瞬にして空中に五つに増え重なり合うように融合し、形状が変化する。

それは、ひとつの槍だった。

世界を文字通り火の海に変える様な、神の怒りを彷彿とさせる白熱化した美しい10メートル程の白金の槍。

その槍を右手で触れずに携えた日色は白金の槍の穂先をヒュドラへと向ける。

「これで——」



日色はゆっくりと槍投げ選手のように右腕を背中越しに回し、バネのように引き絞る。銀紋様の頭が極光を放とうとするがもう遅い、この二文字が完成した時点で既に勝負はついている。

「——終わりだアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして——投擲した。

日色の振るつた右手に従い白金の槍は一直線にヒュドラへと迫る、途中ヒュドラが極光を放ち迎撃しようとするが勢いを減速させることすら適わない。僅かの拮抗も無く白金の槍は極光を切り裂き、ヒュドラの体を貫いた。

瞬間——爆散。

ヒュドラが断末魔を上げる間もなく、白金の槍を中心にそれを塗りつぶす爆音と爆風が三人を平等に襲い辺りを全て薙ぎ払う。

三人は爆風に吹き飛ばされそうになるのを耐え続けていると数秒で爆風は消え失せ、土煙を吹き飛んでいった。そして、ヒュドラのいた場所に残っていたのは抉れ、溶け、融解したクレーターとその中に残った黒焦げになったヒュドラだったものだった。

感知系技能からもヒュドラの反応は消えている。それを指し示すことはつまり——

「——俺達の……勝ちだ……ッ!!」

地上になんとか降りてきた日色が息絶え絶えにつぶやいた通り、三人の勝利だった。

## 幕間 帝国の使者と勇者達

日色達がヒュドラとの激闘を制した頃、勇者一行は、一時迷宮攻略を中断しハイリヒ王国に戻っていた。

道順のわかっている今までの階層と異なり、マツピングされていない階層の地道な探索や、魔物の強さも一筋縄では行かなくなってきたことでメンバーの疲労が激しく、未だ疲労を見せずケロリとしているのは雫、香織だけなため、一度中断して休養を取るべきという結論に至ったのだ。当然、雫と香織は不満を示したのは言うまでもない。

しかし休養だけなら宿場町ホルアドでもよかったがハイリヒ王国に戻った一番の理由は王宮から迎えが来たからである。何でも今まで音沙汰無かったヘルシャー帝国から勇者一行へ会談を申し込まれたのだ。

光輝達の脳裏に「何故、今？」という疑問を抱いたのは至極当然のことだろう。

勇者の際に同盟国である帝国の人間が居合わせなかったのはエヒト神による【神託（笑）】から【召喚（誘拐）】までの間がほとんどなく、知らせが間に合わなかったからなのだが……：……：仮に勇者召喚の知らせが届いても帝国は動かなかっただろう。なぜなら、帝国は三百年前にとある名を馳せた傭兵が興した国であり、冒険者や傭兵の聖地という

べき完全実力主義の国だからだ。

突然現れ、人間族を率いる勇者と言われても納得はできないだろう。聖教教会は帝国にもあり、帝国民も例外なく信徒であるが、王国民に比べれば信仰度は低い。大多数の民が傭兵か傭兵業からの成り上がり者で占められていることから信仰よりも実益を取りたがる者が多いのだ。

要は『神様より金』を信条としているのだ。

そんな訳で、召喚されたばかりの頃の光輝達と顔合わせをしても軽んじられる可能性があった。もちろん、教会を前に、神の使徒に対してあからさまな態度は取らないだろうが。王国が顔合わせを引き伸ばすのを幸いに、帝国側、特に皇帝陛下は興味を持つていなかったの、今まで関わることはなかったのである。

だが、勇者一行が迷宮攻略にて前人未到の領域である今回の「オルクス大迷宮」攻略で、歴史上の最高記録である六十五層が突破されたという事実には帝国は興味が出てきたから会いたいときたので王国側も聖教教会も、いい時期だと了承したのである。

……それよりもぶつちぎり最下層に日色バカとハジメ化け物とユエ吸血姫が最高記録をリアルタイムで更新しているのだが現状それを知る者はいないため除外する。

そんな話を帰りの馬車の中でツラツラと教えられながら、光輝達は王宮に到着した。

馬車が王宮に入り、全員が降車すると王宮の方から一人の少年が駆けて来るのが見え

た。十歳位の金髪碧眼の美少年である。光輝と似た雰囲気を持つが、ずっとやんちゃやうだ。その正体はハイリヒ王国王子ランデル・S・B・ハイリヒである。ランデル殿下は、思わず犬耳とブンブンと振られた尻尾を幻視してしまいそうな雰囲気で駆け寄ってくる大声で叫んだ。

「香織！ よく帰った！ 待ちわびたぞ！」

もちろんこの場には、香織だけでなく他にも帰還を果たした生徒達が勢ぞろいしている。その中で、香織以外見えないという様子のランデル殿下の態度を見ればどういふ感情を持っているかは容易に想像つくだろう。

実は、召喚された翌日から、ランデル殿下は香織に猛アプローチを掛けていた。召喚された日に日色を睨んでいたのはきつとそういうことなのだろう。しかし彼は十歳。香織から見れば小さい子に懐かれている程度の認識であり、その思いが実る気配は微塵もない。初恋とは淡い結末が殆どである。

「ランデル殿下。お久しぶりです」

パタパタ振られる尻尾を幻視しながら微笑む香織。そんな香織の笑みに一瞬で顔を真っ赤にするランデル殿下は、それでも精一杯男らしい表情を作って香織にアプローチをかける。

「ああ、本当に久しぶりだな。お前が迷宮に行ってる間は生きた心地がしなかったぞ。

怪我はしてないか？ 余がもつと強ければお前にこんなことさせないのに……」

ランデル殿下は悔しそうに唇を噛む。香織としては日色を探すという目的があるため守られるだけなどお断りなのだが少年の微笑ましい心意気に思わず頬が緩む。

「お気持ちだけ受け取らせていただきます。ですが、私は大丈夫です。自分で望んでやっていることですから」

「いや、香織に戦いは似合わない。そ、その、ほら、もつとこう安全な仕事もあるだろう？」

「安全な仕事ですか？」

ランデル殿下の言葉に首を傾げる香織。その表情は成り行きを見ている雫には戦わせるために呼び出した側が何を言っているのだろうか？と疑問を抱いているように見え、少年の必死のアプローチによる結末を察し小さくため息を吐いた。

「う、うむ。例えば、侍女とかどうだ？ その、今なら余の専属にしてやってもいいぞ」「侍女ですか？ いえ、すみません。私は治療師ですから……」

「な、なら医療院に入ればいい。迷宮なんて危険な場所や前線なんて行く必要ないだろう？」

医療院とは、王宮の直ぐ傍にある国营の病院のことである。要するに、ランデル殿下は香織と離れるのが嫌なのだ。しかし、そんな少年の気持ちは鈍感な香織には届かな

い。いや、たとえ届いたとしても彼女は日色が待っている大迷宮に行かなければならなかったため止まることはないだろう。

「いえ、前線でなければ直ぐに癒せませんから。心配して下さり有難うございます」  
「うう」

ランデル殿下は、どうあつても香織の気持ち動かすことができないと悟り小さく唸る。そこへ空気を読まない厄介な善意の塊、勇者光輝がにこやかに参戦し――

「ランデル殿下、香織は俺の大切な幼馴染です。俺がいる限り、絶対に守り抜きますよ」  
――火種に油を注ぎ込むどころかぶち込んだ。

光輝としては、年下の少年を安心させるつもりで善意全開に言ったのだが、この場において是不適切な発言だった。恋するランデル殿下にはこう意識される。されてしま  
う。

『俺の女に手え出してんじやねえよ。俺がいる限り香織は誰にも渡さねえ！絶対にな  
！』

もしかしたらご都合主義解釈というものは光輝と顔が似ているもの全員に標準装備  
されているものなのかもしれない。

親しげに寄り添う勇者と治癒師、実に様になる絵である。

ランデル殿下は悔しげに表情を歪めると、不倶戴天の敵を見るようにキツと光輝を睨

んだ。ランデル殿下の中では二人は恋人のように見えているのだろう。

香織はランデル殿下が自分から光輝に関心が移ると理解すると共に後ろに引つ込もうと考えていた。成り行きを見守っていた雫は親友の心情を察し、苦笑いするのだった。

そこへ涼やかだが、少し厳しさを含んだ声が響いた。

「ランデル。いい加減にしなさい。香織が困っているでしょう？ 光輝さんにもご迷惑ですよ」

「あ、姉上!? ……し、しかし」

「しかしではありません。皆さんお疲れなのに、こんな場所に引き止めて……相手のことを考えていないのは誰ですか？」

「うっ……で、ですが……」

「ランデル？」

「よ、用事を思い出しました！ 失礼します！」

ランデル殿下はどうしても自分の非を認めたくなかったのか、いきなり踵を返し駆け去ってしまった。その背を見送りながら、王女リリアーナは溜息を吐く。

「香織、光輝さん、弟が失礼しました。代わってお詫び致しますわ」

そう言っ頭を下げた。美しいストレートの金髪がさらりと流れる。

「ううん、気にしてないよ、リリイ。ランデル殿下は氣を使ってくれただけだよ」  
「そうだな。なぜ、怒っていたのかわからないけど……何か失礼なことをしたんなら俺の方こそ謝らないと」

香織と光輝の言葉に苦笑いするリリアーナ。姉として弟の恋心を察しているため、意中の香織に全く意識されていないランデル殿下に多少同情してしまう。まして、ランデル殿下の不倶戴天の敵は別にいることを知っているので尚更だった。

当然、ランデル殿下がその不倶戴天の敵に会ったとき、一騒動起こすのだが……それはまた別の話である。

リリアーナ姫は、現在十四歳の才媛だ。その容姿も非常に優れ性格は真面目で温和、決して硬くなりすぎることもなく時と場合をわきまえつつ使用人達とも気さくに接する人当たりの良さを持つている為、国民にも大変人気のある金髪碧眼の美少女である。彼等が関係ない自分達の世界の問題に巻き込んでしまったと罪悪感もあるように光輝達召喚された者にも、王女としての立場だけでなく一個人としても心を砕いてくれる。

当然、率先して生徒達と関わるリリアーナと彼等が親しくなるのに時間はかからなかった。特に同年代の香織や雫達との関係は非常に良好で、今では愛称と呼び捨て、タメ口で言葉を交わす仲である。



「いえ、光輝さん。ランデルのことは気にする必要ありませんわ。あの子が少々暴走気味なだけです。それよりも……改めて、お帰りなさいませ、皆様。無事のご帰還、心から嬉しく思いますわ」

リリアーナはそう言うと、ふわりと微笑んだ。香織や雫といった美少女が身近にいるクラスメイト達だが、リリアーナの美しさには二人にない洗練された王族としての気品や優雅さというものがあり、多少の美少女耐性で太刀打ちできるものではないためその笑顔を見てしまえば永山組や小悪党組の男子は顔を真っ赤にしてボーと心を奪われてしまい、女子メンバーですら頬をうつすら染めている。異世界で出会った本物のお姫様オーラに現代の一般生徒が普通に接しろという方が無茶なのである。

普通に接することができるのは恐らく厄介な正義の塊である光輝に香織や雫、そもそも日色以外に興味がないハジメとほぼ常に無表情な日色ぐらいだろう。

そんなわけで彼女の謝罪と共にこの場は無事に収められた。

途中、自分の容姿や言動の及ぼす効果に病的なレベルで鈍感な光輝が下心一切なく爽やかな笑顔でキザなセリフを言い、リリアーナをオロオロとさせたり、数日間帝国の使者が来るまで足止めされる為、雫と香織は苛立つ感情を押さえつけるように訓練を打ち込んでいたりしたが、特に特筆することではないので割愛とする。



それから三日後、遂に帝国の使者が訪れた。

現在、光輝達、迷宮攻略に赴いたメンバーと王国の重鎮達、そしてイシユタル率いる司祭数人が謁見の間に勢ぞろいし、レッドカーペットの中央に帝国の使者が五人ほど立ったままエリヒド陛下と向かい合っていた。

「使者殿、よく参られた。勇者方の至上の武勇、存分に確かめられるがよかろう」

「陛下、この度は急な訪問の願い、聞き入れて下さり誠に感謝いたします。して、どなたが勇者様なのでしょう？」

「うむ、まずは紹介させて頂くか。光輝殿、前へ出てくれるか？」

「はい」

陛下と使者の定型的な挨拶のあと、早速、光輝達のお披露目となった。陛下に促され前にでる光輝。光輝の顔は召喚された頃と違い、まだ二ヶ月程度しか経っていないのに随分と精悍な顔つきになっている。

ここにはいない、王宮の侍女や貴族の令嬢、居残り組の光輝ファンが見れば間違いない。熱い吐息を漏らしうっとり見蕩れているに違いない。光輝にアプローチをかけている令嬢方だけで既に二桁はいるのだが……彼女達のアプローチですら「親切で気さくな人達だなあ」としか感じていない辺り、光輝の鈍感さ極まっている。まさに鈍感系主人公を地で行っている。それは逆に言えば彼と仲のいい女が虐められても何でそんな事

するんだらう?となるわけなのだが……

そして、光輝を筆頭に、次々と迷宮攻略のメンバーが紹介された。

「ほう、貴方が勇者様ですか。随分とお若いすな。失礼ですが、本当に六十五層を突破したのです? 確か、あそこにはベヒモスという化物が出ると記憶しておりますが……」

使者は、光輝を観察するように見やると、イシユタルの手前露骨な態度は取らないものの、若干、疑わしそうな眼差しを向けた。使者の護衛の一人は、値踏みするように上から下までジロジロと眺めている。光輝は居心地悪そうに身じろぎしながら、答えた。

「えっと、ではお話ししましょうか? どのように倒したかとか、あつ、六十六層のマップを見せるとかどうでしょう?」

光輝は信じてもらおうと色々提案するが使者はあつさり首を振りニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「いえ、お話は結構。それよりも手っ取り早い方法があります。私の護衛一人と模擬戦でもしてもらえませんか? それで、勇者殿の実力も一目瞭然でしょう」

「えっと、俺は構いませんが……」

使者がそう言うと共に護衛の一人が前に出る。光輝は若干戸惑ったようにエリヒド陛下を振り返つて了承を得るかどうかしているその間に香織は雫に近づき、耳打ちを行なっていた。

(……ねえ、雫ちゃん。あの護衛の人って……)

(ええ、香織。恐らくあなたが思っている通りよ、あの護衛……何かあるわね……)

そうコツソリと話しながら護衛へと視線を向ける香織と雫。二人が向ける視線の先にはさつき前に出た何とも平凡そうな護衛の男がいた。高すぎず低すぎない身長、特徴という特徴がなく、人ごみに紛れたらすぐ見失ってしまいそうな平凡な顔であり、一見すると全く強そうに見えない。

だが、それがおかしい。

確かに護衛の男はこれといった特徴という特徴が無い、平凡な顔をしているだろう。人ごみに紛れたらすぐに見失ってしまいそうである。

故に、不自然なのだ。

人間の顔というのは生まれや育ちによって千差万別に変わり、どんな平凡な人間だろうとも僅かな特徴があるものだ。それはホクロだったり髪型だったりといったように。

たとえ顔が整っていたとしてもそれは特徴であるだろうし、ブサイクだとしても特徴となってしまう、ありふれた少女である南雲ハジメであろうとも必ず『南雲ハジメ』の特徴が存在するのである。

だが、この護衛の男にはそれがない。

身長も、顔つきも、体型も、髪型も、どれもかれもが不自然なほど平凡すぎるのだ。

だからこそ、日色を見つける決意をしたことで他よりも何倍も練習に打ち込み、迷宮に必要な観察力をも鍛え続けている二人には気づくことができた。

もつとも雫の場合は幼い頃から日色の剣術を見てきたことで自然と身についた洞察力で微かの武人の癖というものを見つけたからなのだが。

二人は注意深く護衛の男を観察し続けているとふと護衛の男が此方へと視線を向けると、僅かに驚いたかのように眉を上げ――

「……………（ニヤッ！）」

「——ッ！」

——二人以外には見えないように一瞬獰猛に笑ったことで二人は自分達の考察が正しかったことを知る。

一瞬、二人は身構えるもすぐに視線を外されたことで警戒を解き、小さくため息をついた。

すると、光輝達の方も確認が終わったようでエリヒド陛下から声が上がる。

「構わんよ。光輝殿、その実力、存分に示されよ」

「決まりですな、では場所の用意をお願いします」

こうして急遽、勇者対帝国使者の護衛という模擬戦の開催が決定し、一行はそろそろと場所を変えるのだった。

◆ 「それで、勇者はどうでしたか？」

その晩、王宮の一室で帝国の使者が一人の男に本音を聞いていた。四十代位の野性味溢れる顔つきで短く切り上げた銀髪に狼を連想させる鋭い碧眼、スマートでありながらその体は極限まで引き絞られたかのようにミッシリと詰まっているのが服越しでもわかるような筋肉を携えたあの平凡な護衛に化けていた男、ヘルシャー帝国現皇帝ガハルド・D・ヘルシャーは呆れ7割、面倒臭さ3割といった表情で答えた。

「ありや、ダメだな。唯の子供だ。理想とか正義とかそういう類のものを何の疑いもなく信じている口だ。なまじ実力とカリスマがあるからタチが悪い。自分の理想で周りを殺すタイプだな」

そう言つて今日の光輝との模擬戦をガハルトは思い出しながら答えた。

サプライズが日常茶飯事なフットワークが物凄く軽いこの皇帝陛下は今日、勇者がリーダーたるかどうか自分自身で調べた方が早いと考え、アーティファクトを使い身分を隠して一芝居を売っていたのである。

だが、勇者を見、模擬戦をしてガハルトは失望した。というか興味の対象にすらなら

なかった。

殺意のひとつ無い腑抜けた剣に傷つくことも傷つけられることも恐れている餓鬼のような精神性、光輝の言っている言葉や行っていることはまるで夢物語を騙られるような不快な気分だった。

その為、光輝に興味を失ったガハルトは抗議する光輝を無視して模擬戦を一方的に止めた。

その後、微妙な雰囲気吹き散らすように場が取り繕われ、形式的な会談がなされる中で帝国からも将来性を理由に勇者を認めるとの何とも機械的な返答がなされ、現在に至っている。

「確かに。それに、どうも魔物と魔人を同列に語っているようでした。意識的なら問題ありませんが……」

「まあ、間違いなく無意識だろうよ。それも『無知であることをよしとする故に』だ。あの意味、よくあんな在り方で生きていられたものだ。そういう世界だったのか、それとも能力の高さ故か……」

どうやら、皇帝陛下の中で勇者光輝の評価は赤点のようだ。ただし、数ヶ月前までは戦いとは無縁のただの学生だったという点と、その能力の高さを思い出して、「まあ、魔人どもとの戦争が本格化して変わるんだったら話は変わるがな」と保留の結論を出し

た。

そして続けるように「それよりも……」と言葉を零した。

「俺の正体を見破った二人の取り巻きの女のほうがあの勇者よりも何倍もマシだな」

そういつてあの時、己の正体を看破し、一手一足を注意深く観察する二人の少女を思  
い出し、微かに笑みを浮かべるガハルトに使者だった部下は驚愕したようにガハルトに  
聞き返す。

「見破ったつて、アーティファクトをつけた陛下をですか!？」

「ああ、そいつらは俺の正体を看破するどころかどうやって殺すかまで考えていやがつ  
た。勇者とは違つて覚悟も決まつていやがるんだ、同じ同郷の者でもこれほど差がある  
とはな」

どうやら香織と雫は皇帝陛下のお眼鏡にかなつたらしい、二人に興味があるようだつ  
た。

なかでも、とガハルトは内心呟きながら彼女達の瞳を思い出す。

片方の治癒師の少女の瞳は良い、人を殺してもいいという覚悟と大きな決意を感じさ  
せた。

だが、もう一人の剣士らしき少女の瞳を見て、ガハルトは一瞬見蕩れてしまった。

研ぎ澄まされた敵意に反して怯えた子犬のような不安の二面性を感じさせる瞳、確か



に覚悟や決意を感じたもののいつ折れてもおかしくない儂さを持っている。

その少女を見てガハルトは強烈な支配欲に駆られたのだ、文字通り欲しいと思つてしまふほどに。

しかし、その少女は途中で見失つてしまい会談中という機会が見つからなかった。

そのことを悔やみながらも己の部下に言う。

「まあ、今は、小僧どもに巻き込まれないよう上手く立ち回ることが重要だ。教皇には気をつけろ」

「御意」

そんな評価をされているもいざ知らず光輝達は、翌日に帰国するという皇帝陛下一行を見送ることになった。用事はもう済んだ以上留まる理由もないということだ。本当にフットワークの軽い皇帝である。

ちなみに、早朝訓練をしている雫を見て気に入った皇帝が愛人にどうだと本気で誘つたというハプニングがあった。雫は動揺することなく即座に丁寧な断り、皇帝陛下も「まあ、焦らんさ」と不敵に笑いながら引き下がったので特に大事になつたわけではなかったが、その時、光輝を見て鼻で笑つたことで光輝はこの男とは絶対に馬が合わないと感じ、暫く不機嫌だった。

雫の溜息が増えたことは言うまでもない。

## 反逆者の居場所と謎の記憶

ハジメは、体全体が何か温かで柔らかかな物に包まれているのを感じた。随分と懐かしい感触だ。これは、そうベッドの感触である。頭と背中を優しく受け止めるクッションと、体を包む羽毛の柔らかさを感じ、ハジメのまどろむ意識は混乱する。

(何?ここは迷宮のはずじや……何で……私……ベッドに……)

まだ覚醒しきらない意識のまま手探りをしようとする。すると何やらハジメの手の平に暖かくも逞しい細長い何かに触れているのを感じた。

(何……これ……?)

ゆつくりと微睡みから覚めるように眼蓋を開き、ボーと焦点が合わない瞳で己が握っているものを見つめ――

――それが日色の腕だということに気づき、瞬間まどろんでいたハジメの意識は一気に覚醒する。

「ふわッッ?!?!」

慌てて叫びながら体を起こすと、ハジメは自分が本当にベッドで寝ていることに気がついた。純白のシーツに豪華な天蓋付きの高級感溢れるベッドである。爽やかな風が

天蓋とハジメの頬を撫でつい目を細めてしまおうが周りは太い柱と薄いカーテンに囲まれており、場所は、吹き抜けのテラスのような場所で一段高い石畳の上にいるようだ。建物が併設されたパルテノン神殿の中央にベッドがあるといえばイメージできるだろう。空間全体が久しく見なかった暖かな光で満たされている。

さつきまで暗い迷宮の中で死闘を演じていたはずなのに、とハジメは混乱する。

(どい)……………は…う……………まさかあの世とかじゃないよね……)

どこか荘厳さすら感じさせる場所に、ハジメの脳裏に不吉な考えが過ぎるがふと自分の手元を見てみると横で傷だらけの日色が寝ていることに気がついた。

「……………う、……………うん……………」

「……………日色……………ッ！よかった……………」

日色は傷だらけではあるものの現在も規則正しい寝息を立てていることにハジメはホッ、と一息をついた。あの時日色は意識を取り戻してはいたが今にも倒れそうな姿だったため、また倒れてしまうんじゃないかと心配だったのだ。

その心配が杞憂だったことに嬉しく思っているとふと日色がうーん、うーんと呻き声を上げていることに疑問を抱き、ハジメが握っていた右腕とは逆の左腕に視線を向けるとシーツの中に誰かいることに気がついた。ハジメはゆっくりとそのシーツをめくると――

「……んあ……日色……あう……」

「……………」

——そこには一糸纏わぬユエが日色の左手に抱きつきながら眠っていた。

その光景に思わずハジメから表情が抜け落ち、完全な『無』の表情になってしまい硬直してしまう（ちなみに日色やハジメは既にポロポロの服を着ている）

日色の左手は丸まっているユエの太ももに挟まれており、丸くなつたことで危険な場所に接近しておりユエが寝返りをするように少しずつ日色の手を動かすたびに艶かく喘いでいた。

「……あつ……んう……んっ……日色……そこっ……だめっ……」

一応言っておくが日色は呻いてはいるものの一切体を動かしていない、完全にユエが自分で行っていることである。

その光景にハジメの中でプチッと何かが弾けた。

無言でベットのの上に立ち上がるとプロサッカー選手顔負けのシニートフォームで日色に当たらないようにユエポールを蹴り飛ばす。

「——死ぬ、寄生虫!!」

「はにゅッ!!」

ハジメの鋭い蹴りは丸まっているユエの膝越し胸に直撃し、日色の左手から手を離さ

せることに成功するが蹴られる途中でユエは自ら後ろに跳ぶ事で勢いを逃がし、薄いカーテンにぶつかった拍子にカーテンが外れたのでクツションにしながらゴロゴロと受身を取りながら石畳の上に着地した。

ぐるぐる巻きとなったカーテンから不機嫌な苛立った表情をピヨコとカーテンからユエは見せた。

「……………ん、キメラモドキ風情が……私の、睡眠の邪魔……しないで」

「日色の手で自慰していた変態がほざかないで、このエロ寄生虫が」

まさに一触即発、ハジメは腰に差してあるドンナーを引き抜き、ユエはカーテンから両手を出して片方ずつに風と炎を灯らせている。紅と金のお互いの魔力がせめぎ合いアレ程暖かい光が満たす空間だったというのに今では戦場となった王城のように殺伐とした空気となっている。

「……………何やってんだお前ら」

そんな中、疲労による眠りからようやく覚めた日色は乾いた声でそう呟くしかなかった。



その後、目が覚めた日色により二人は喧嘩両成敗とばかりにデコピンを喰らい正座させられ、日色はここに来る一連の流れを説明した。ちなみに、ユエにはすっかりシート

を纏わせている。

ヒュドラを倒した後、疲労で限界がおとづれ倒れたハジメと同じく魔力枯渇でフラフラのユエの傍に元々ボロボロだった日色が寄り添っていると突然、扉が独りでに開いたのだそうだ。新手か!?と思ったが何時までたつても特になにもなく、ユエをハジメに連れ添ってもらおうようにして日色は限界に近い身体に無理を言わせ確認しに扉の奥へ入った。

神水の効果で少しずつ回復しているとは言え、ハジメよりも日色の方が重傷で危険な状態なのでユエは反対したのだが日色はハジメやユエが休める場所を優先するため（日色は否定している）に確かめずにはいられなかったのだ。

そして日色が奥に進んだ部屋で見つけた先は――

「――この反逆者の住処、というわけだ」

中は広大な空間に住み心地の良さそうな住居があったというのだ。そのあと、危険がないことを確認して、ベッドルームを確認した日色はハジメを背負ってベッドに寝かせ看病していたのだという。日色は文字魔法で文字通り魔力が尽きるまで回復させ続け、遂に極光の毒素に神水の効果が勝ったのか、通常通りの回復を見せたところで日色は力尽き、ユエはそれをなんとかベットに寝かせたあと続くように力尽きたようだ。

「――そして、目が覚めてみればお前ら金口りとハジメが喧嘩していたわけだ」

「……………(スツ)」

そう冷たい瞳で呟く日色の言葉に少女二人は気まずそうに顔を背けるのだった。

その後、正座をしばらくしたハジメとユエは足が痺れるという地味にキツイものを味わっていると日色がどこから見つけてきたのか大量に上質な服を持つてくる。どうやら男物の服しかなかったようなので片っ端から着れるものを探っていくつもりなのだろう。男物しかないあたりどうやら反逆者は男のようだ。

日色やハジメの服も既にほぼポロ布なため、服を着替えることにした。

途中、ユエのサイズに合う服がなかったためカッターシャツ一枚だけになりそれなりの膨らみが覗く胸元やスラリと伸びた真つ白な脚線が、ユエの纏う雰囲気のせいか見た目の幼さに反して何とも扇情的な雰囲気になってしまったり、ハジメが着た服はサイズが合わないのか口元が隠れるほどの高い襟がついてある白い長袖の服にホットパンツとい服を着ることになったのでユエとはまた違う萌え要素が生まれてしまい、中の人ハッチャケていたがそこまで重要なことではないので割愛する。

ポロポロになった日色とハジメの服は日色が預かり、文字魔法で直すことにした。

日色は人差し指に魔力を集めると普段の蒼い魔力が灯る、どうやらあの金色の文字を書けたのはあのヒュドラ戦だけだったようだ。

日色はそう思いながら服に『修復』の文字を書こうとし——書けなかった。

「……？日色、どうかしたの？」

「……………いや、何でもない」

『あるえ？二文字が書けなくなってる？え？もしかして期間限定？ゲームのシナリオでよくある特殊な必殺技的な扱いなの？』

そう、書けなかったのだ。

何度試しても『修復』の文字が書けず、『修』で文字が止まってしまいそこから先は指が動かない。

まるで、それは例えるならば噛み合っていた歯車の一部が突如消えてしまったかのよう。

あの時の金色の炎を纏った時に書いた二文字魔法が書く事ができない。

日色はハジメに疑問の声を掛けられたことで素早く『直』の文字を書き手早く修復させる、ボロ布だった服が中古で売られているようなマシな服へと瞬く間に『直』される。

日色は一文字を書いている途中も何かが抜けていったような喪失感をかすかに感じたのでおそらく多重書き解放も今は使えないのだろう。

(……………まさか、文字魔法にはまだ俺が知らない秘密があるのか……………)

日色は今予想と思考を打ち切り、直った服を片手に持ち、先にベットルームから出



て行つたユエを追うようにハジメと共にベッドルームを出るのだった。

ベッドルームから出たハジメは、周囲の光景に圧倒され呆然とした。

まず、目に入つたのは太陽だ。いや正確には違うここは地下迷宮であり為本物ではない。頭上には円錐状の物体が天井高く浮いており、その底面に煌々と輝く球体が浮いていたのである。僅かに温かみを感じる上、蛍光灯のような無機質さを感じないため、思わず『太陽』と称したのである。

「夜になると月みたいになるらしい」

「……………本当？」

次に、注目するのは耳に心地良い水の音。扉の奥のこの部屋はちよつとした球場くらいの大ききがあるのだが、その部屋の奥の壁は一面が滝になつていた。天井近くの壁から大量の水が流れ落ち、川に合流して奥の洞窟へと流れ込んでいく。滝の傍特有のマイナスイオン溢れる清涼な風が心地いい。よく見れば魚も泳いでいるようだ。もしかすると地上の川から魚も一緒に流れ込んでいるのかもしれない。

川から少し離れたところには大きな畑もあるようである。今は何も植えられていないようだが……その周囲に広がっているのは、もしかしなくても家畜小屋である。動物の気配はしないのだが、そこには種やら野菜やらが保存されていた。水、魚、肉、野菜

と素があれば、ここだけでなんでも自炊できそうだ。緑も豊かで、あちこちに様々な種類の樹が生えている。

そして三人は川や畑とは逆方向、ベッドルームに隣接した建築物の方へ歩を勧めた。建築したというより岩壁をそのまま加工して住居にした感じだ。

「……少し調べたけど、開かない部屋も多かった……」

「ん？ユエ、俺がハジメを看病している間にそんなことをしていたのか」

「ん……」

石造りの住居は全体的に清潔感のある白く石灰のような手触りだ。エントランスには、温かみのある光球が天井から突き出す台座の先端に灯っていた。薄暗いところに長くいたハジメ達には少し眩しいくらいだ。どうやら三階建てらしく、上まで吹き抜けになっている。

取り敢えず一階から見て回る。暖炉や柔らかな絨毯、ソファのあるリビングらしき場所、台所、トイレを発見した。どれも長年放置されていたような気配はない。人の気配は感じないのだが……言ってみれば旅行から帰った時の家の様と言えはわかるだろうか。しばらく人が使っていないなかったんだなとわかる、あの空気だ。まるで、人は住んでいないが管理維持だけはしているような不思議な光景だった。

三人はより警戒しながら進む。更に奥へ行くと再び外に出た。更に奥へ行くと再び

外に出た。其処には大きな円状の穴があり、その淵には魔法陣の彫刻が刻まれておりその隣にはライオンっぽい動物の彫刻が口を開いた状態で鎮座している。試しに日色が魔力を注いでみると、ライオンモドキの口から勢いよく温水が飛び出した。どうやら水を吐くのはライオンというのがお約束という決まりらしい。

「これは……風呂か？」

「え？本当に!？」

日色の言葉に思わずといった感じで頬を緩めるハジメ。最初の頃は日色のことで頭がいっぱいだった為体の汚れなど全く気にしていなかったがハジメも一応、日本人であり年頃の女の子である。余裕が出来た時にそういえば体に痒みを感じるようになったかと思っているとわざわざ日色が体を水で拭くために文字魔法で水を用意してくれたことで赤面したのはいい思い出である。

その為、日本人であるハジメは例に漏れず風呂は大好き人間である。安全確認が終わったなら堪能しようと頬を緩めてしまうのは仕方ないことだろう。

「ハジメ、嬉しいのはわかるが後にしろよ」

「う、うん。わ、わかってる……」

そう言いながらも風呂から目を逸らさないハジメ。

そんな彼女にハアと小さくため息を吐く日色にユエが一言。

「……日色、入る？ 一緒に……」  
「なっ!!」

バツ、と一瞬で風呂の未練を断ち切り背後を振り返りユエを睨むハジメ。どうやら風呂より日色の方が優先度は高いらしい。

「…断る、久しぶりの風呂だ。一人でゆっくり入りたい」  
「むう……」

不満げに素足でパシャパシャと温水を蹴るユエを小さく嘲笑うような表情で見るハジメ。

どうやら彼女達の仲は現在でも悪いままらしい、ヒュドラ戦で協力していたので仲は友好になったと思っただろうやらそれは日色の思い違いのようだった。

それから、二階で書斎や工房らしき部屋を発見した。しかし、書棚も工房の中の扉も封印がされているらしく開けることはできなかった。文字魔法で強制的に開けようと思っただけ一度全て部屋を回ることを優先しようとハジメに言われたため諦めることにした。

三人は三階の奥の部屋に向かった。三階は一部屋しかないようだ。奥の扉を開けると、そこには直径七、八メートルの今まで見たこともないほど精緻で繊細な魔法陣が部屋の中央の床に刻まれていた。いつそ一つの芸術といってもいいほど見事な幾何学模

様である。

しかし、それよりも注目すべきなのは、その魔法陣の向こう側、豪華な椅子に座った人影である。その人影は——骸だった。既に白骨化しており黒に金の刺繍が施された見事なローブを羽織っている。薄汚れた印象はなく、お化け屋敷などにあるそういうオブリエと言われれば納得してしまいそうだ。

その骸は椅子にもたれかかりながら俯いている。その姿勢のまま朽ちて白骨化したのだろう。魔法陣しかないこの部屋で骸は何を思っていたのか。寝室やリビングではなく、この場所を選んで果てた意図はなんなのか……その理由を薄れている知識から知っている日色は心の中で冥福を祈った。

「……怪しい……どうする？」

ユエもこの骸に疑問を抱いたようだ。おそらく反逆者と言われる者達の一人なのだろうが、苦しんだ様子もなく座ったまま果てたその姿は、まるで誰かを待っているようである。

「……まあ、調べたほうがいいんだろうな。地上への道を調べるには、この部屋がカギなんだろうしな。ハジメの錬成を受け付けない倉庫に工房の封印……調べるしかないだろう。俺が——」

「——日色、私が行くわ」

日色が自分が行こうと呟こうとするとその言葉を遮るかのようにハジメが一步前に出た。

日色が視線を向けると決意が籠った瞳で日色を見つめるハジメがいた。

「——いいのかわ？」

「——ええ、私だったら咄嗟に錬成で魔法陣を壊すことができるから。ユエもいい？」

「……ん」

「……気をつけろよ」

日色はハジメの決意の籠った瞳を見ると説得は無理かと悟り、了承すると共に一步下がる。

日色の言葉にハジメは頷き、警戒を行いながら魔法陣へ向けて踏み出した。そして、ハジメが魔法陣の中央に足を踏み込んだ瞬間、カツと純白の光が爆ぜ部屋を真っ白に染め上げる。

まぶしさに目を閉じるハジメ。直後、何かが頭の中に侵入し、まるで走馬灯のように奈落到落ちてからのことが駆け巡った。やがて光が収まり、目を開けたハジメの目の前には、魔法陣が淡く輝き、部屋を神秘的な光で満たす中、黒衣の青年が立っていた。

中央に立つハジメの眼前に立つ青年は、よく見れば後ろの骸と同じローブを着ていた。

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えばわかるかな？」

話し始めた彼はオスカー・オルクスというらしい。「オルクス大迷宮」の創造者のようだ。一瞬で戦闘態勢に入っていた三人は驚きながらも無言で話を聞く。

「ああ、質問は許して欲しい。これは唯の記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メツセージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい。……我々は反逆者であつて反逆者ではないということ」

そうして始まったオスカーの話は、ハジメが聖教教会で教わった歴史やユエに聞かされた反逆者の話とは大きく異なつた驚愕すべきものだった。

それは狂つた神とその子孫達の戦いの物語。

神代の少し後の時代、世界は争いで満たされていた。人間と魔人、様々な亜人達が絶えず戦争を続けていた。争う理由は様々だ。領土拡大、種族的価値観、支配欲、他にも色々あるが、その一番は「神敵」だから。今よりずっと種族も国も細かく分かれていた時代、それぞれの種族、国がそれぞれに神を祭っていた。その神からの神託で人々は争い続けていたのだ。

だが、そんな何百年と続く争いに終止符を討たんとする者達が現れた。それが当時、【解放者】と呼ばれた集団である。

彼らには共通する繋がりがあつた。それは全員が神代から続く神々の直系の子孫であつたということだ。そのためか【解放者】のリーダーは、ある時偶然にも神々の真意を知つてしまった。何と神々は、人々を駒に遊戯のつもりで戦争を促していたのだ。【解放者】のリーダーは、神々が裏で人々を巧みに操り戦争へと駆り立てていることに耐えられなくなり志を同じくするものを集めたのだ。

彼等は、【神界】と呼ばれる神々がいると言われている場所を突き止めた。【解放者】のメンバーでも先祖返りと言われる強力な力を持つた七人を中心に、彼等は神々に戦いを挑んだ。

しかし、その目論見は戦う前に破綻してしまう。何と、神は人々を巧みに操り、【解放者】達を世界に破滅をもたらそうとする神敵であると認識させて人々自身に相手をさせたのである。その過程にも紆余曲折はあつたのだが、結局、守るべき人々に力を振るう訳にもいかず、神の恩恵も忘れて世界を滅ぼさんと神に仇なした【反逆者】のレットルを貼られ【解放者】達は討たれていった。

最後まで残つたのは中心の八人だけだつた。

「——何……!?!」



そのオスカーの言葉に日色は驚愕の声をあげる。

そう可笑しいのだ、何故なら己が知っている原作知識では反逆者は七人だった、つまり自分が知っている原作とは違ってきているから——ではない。

世界を敵に回し、もはや自分達では神を討つことはできないと判断した彼等は、バラバラに大陸の果てに迷宮を創り潜伏することにしたのだ。試練を用意し、それを突破した強者に自分達の力を譲り、いつの日か神の遊戯を終わらせる者が現れることを願つて。

語るオスカーの話聞きながら日色は高速で思考を回し続ける。

日色が驚愕の声を上げたのは原作知識と違うからではない。そう問題なのは、反逆者達が作ったものが「七大迷宮」だと言うならば、最後の一人はどうして迷宮を作っていない!?

途中で人々に殺されてしまった?——いや、違う。そんなことはありえない。何故なら信仰が高すぎるこの世界だ、仕留めてしまえば見せしめとして世界に公表するはずである。ならばこの解放者、オスカーは八人とは言わないはずだ。

だとすれば、一体——!?

そんな日色の考えを無視してオスカーの長い話は終わり、オスカーは穏やかに微笑む。

「君が何者で何の目的でここにたどり着いたのかはわからない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいて欲しかった。我々が何のために立ち上がったのか。……君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

「——ッ!?!」

そう話を締めくくり、オスカーの記録映像はスッと消えた。同時に、ハジメの脳裏に何かが入り込んでくる。ズキズキと痛むが、それがとある魔法を刷り込んでいるためと理解できたので大人しく耐えた。

やがて、痛みも収まり魔法陣の光も収まる。ハジメはゆっくり息を吐いた。日色は一息思考を止め、ハジメへと声をかける。

「ハジメ……大丈夫か？」

「う、うん、私は大丈夫。……にしても、何か壮大な話を聞いてしまったわね」

「……ん……日色……どうするの？」

ユエがオスカーの話を聞いてどうするのかと日色に尋ねる。

「いや、別に特に俺は興味が無いな。元々、勝手に召喚して戦争しろとかいう神なんて迷惑としか思っていないからな、関わるだけ時間の無駄だ。ハジメはどうだ？」

「私は日色についていく。元々私はこの世界に興味なんてないから、日色がこの世界の人を助けようとするなら私も手伝う」

「……そうか」

淡々と日色の疑問に言い返すハジメに日色は小さく返した。元々ハジメにはこの世界どころか本当なら地球にすら興味が無いのだ、ハジメが地球に帰ろうとしている理由は日色が最も傷つく場所じゃない平穏な場所が地球だったというだけである。だからハジメは日色がこの世界を救おうとすれば日色が傷つかないように全力で守ろうと日色の敵を容赦なく殺し尽くすだろう。

日色はユエにも聞こうと目を向けるとユエも首を躊躇なく首を振った。

「私の居場所は……他は知らない」

そう言つて、日色に寄り添いその手を取る。ギユと握られた手が本心であることを如実に語っているだろう。ユエは、過去、自分の国のために己の全てを捧げてきた。それを信頼していた者たちに裏切られ、誰も助けてはくれなかった。ユエにとって、長い幽閉の中で既にこの世界は牢獄だったのだ

その牢獄から救い出してくれたのは日色だ。だからこそ日色の傍こそがユエの全て



日色は小さくため息を吐き、取りあえず謎の喧嘩を止めさせる為に話を変えることにした。

「——お前から戯れ合うのはいいが後にしろ。」「戯れ合っていない!」……そんなことよ  
り、ハジメ。頭を擧げていたが何かあったのか?」

「え?う、うん。あそこの魔法陣に立つたら新しい魔法……神代魔法つての覚えたみた  
い」

「……本当?」

日色の言葉にびたりと喧嘩を止め、ハジメの話した内容にユエが信じられないといつた表情を取る。それも仕方ないだろう。何せ神代魔法とは文字通り神代に使われていた現代では失伝した魔法である。ハジメ達をこの世界に召喚した転移魔法も同じ神代魔法である。

「確か何かこの床の魔法陣が、神代魔法を使えるように頭を弄る?みたいな」

「……大丈夫なのか?それ」

「ええ、私は大丈夫。しかもこの魔法……私のためにあるような魔法ね」

「……どんな魔法?」

「えっと、生成魔法。魔法を鉱物に付加して、特殊な性質を持った鉱物を生成出来る魔法  
……らしい」

ハジメの言葉にポカンと口を開いて驚愕を表にするユエ。日色も少なからず驚いている。

「……アーティファクト作れる？」

「——多分、可能だと思う」

そう、生成魔法は神代においてアーティファクトを作るための魔法だったのだ。まさに【錬成師】のためにある魔法である。実を言うとオスカーの天職も【錬成師】だったりする。

「……ねえ、日色。もしかしてコレって……」

そう言っただけ探るかのように聞いてくるハジメに日色はハジメが何を聞こうとしているかを察し言い返した。

「ああ、もしかしたら文字魔法も付与できるかもしれないな」

「それなら——ツ!!」

ハジメが日色の言葉に表情を明るくする。そう、文字魔法が付与できるならばもしかすればこのまま地球に帰ることができるかもしれないのだ。

それに対して日色は難しい表情で答える

「だがあくまで可能性だ、しかも仮に付与できたとしても帰れるかはわからないしな」

「……………そう」

「——すまん」

「ううん、気にしないで。私は大丈夫だから」

そう笑うハジメに日色はすまなさそうに優しくハジメの頭を軽く撫でた、突然撫でられたことでハジメは驚きの表情を取るもすぐさま気持ちよさそうに目を細める。ハジメは日色が自分の頭から手を離すと名残惜しそうにしながらも二人に声をかけた。

「それで、二人も神代魔法覚えたら？何か、魔法陣に入ると記憶を探られるみたいなの、オスカーも試練がどうのって言ってたし、試練を突破したと判断されれば覚えられると思うから」

「……錬成使わない……」

「だが、せっかくの神代魔法だぞ？取っついておいて損はないだろ」

「……ん……日色が言うなら」

ハジメに誘われたときは少し渋っていたが日色の誘いにより二人で魔法陣の中央に入ることにした。

魔法陣が輝くと共に日色の記憶が探られ視界が閃光に包まれると同時にそして、試練をクリアしたものと判断されたのか……

「試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスry……」

またオスカーが現れた。記録映像だから何度も出てくるのは当たり前なのだろうが





——瞬間、日色の頭にさっきの何倍もの激痛が奔り意識が消し飛んだ。

平衡感覚が狂い、五感が喪失し、己という存在がバラバラに分解されたような感覚が襲う。

誰かが何かを叫ぶような声が聞こえた気がするがその前に日色の思考は闇に包まれた。



『……』

それは、とても美しくも悲しい旋律。

『~~~~~』

この夢のような瞬ひととききが永とわ遠わに続いて欲しいというエゴじみた悲哀の歌。

『~~~~~』

気がつけば日色は立った状態で目を覚ました。





そこで日色の視界は反転した。



「——ッ!!!?」

「日色ッ!?!」

気がつけば日色は地面に片足を付いた状態で目を覚ましていた。

どうやらさつきまでの出来事は日色は長く感じたが一瞬の出来事だったらしく、さつき見た映像が脳裏に何度もしフレインされ、ズキズキと頭を押しつぶされ続けているような激痛が頭に駆け巡り続けている。

(……………何……だ……………?今の映像は……………?あの女……………は……………?)

痛みで思考が錯乱しそうになっているがどうか思考を回転させながら心配そうに此方を見やる二人に視線を向ける。

「どうして!?!私の時は日色みたいにならなかったのにッ!ユエは!?!」

「んっ……………私も、痛みは走った……………けど、日色みたいにはならなかったっ」

そう言つて必死に日色が突然倒れかけた原因を考え、日色を助けようとする。日色は頬を伝う一筋の汗を拭うとゆっくりと立ち上がった。

「日色、大丈夫なの!?!」

「……………ああ、大丈夫だ。すこしめまいがしたただけだ、気にするほどでもない」

「……本当？」

「ああ」

心配そうに日色を見やる二人に日色は大丈夫ということを伝えるためにポンポンと二人の頭を優しく撫でた。既に日色の頭をズキズキと駆け巡っていた頭痛は最初からなかったかのように静まり返っており、むしろ痛みどころか身体は万全といった調子だった。

二人は日色の心配4割と撫でてくれた嬉しき6割というなんとも複雑な表情を取ったが日色が「ほら、探索を続けるぞ」と呟いた事で渋々コクリと頷き、取りあえず死体であるオスカーの骸を片付けるため二人はオスカーの骸を担いで部屋を出て行った。ちなみにハジメとユエは砕いて畑の肥料にしようという慈悲が一欠片もないことを行おうとしていたが日色の反対で却下となった。

結果、畑の端に埋め一応墓石を立てることとなった。……心なしか骸の表情が嬉し泣きしているように見えるのは幻覚だろう。

日色は先に出て行った二人を追うため自分も魔法陣の部屋から出ようとしたが途中、自分のステータスプレートが落ちていることに気づき慌てて拾い上げた。

日色は、立ち上がった時に落としたのか？と思いつながらステータスプレートを見て――

——一瞬、瞠目し言葉を失った。

が、それは一瞬のことですぐに元の無表情に戻った日色はステータスプレートを自分のポーチにしまい、二人を追いかけるため部屋から出て行くのだった。

日色が仕舞ったステータスプレートには新たな派生技能が刻まれていた。

その新たに刻まれた派生技能は日色の力を示すかのように蒼い光でこのように書かれている。

技能：文字魔法「十一文字解放」「十空中文字解放」——

——「十多重書き解放」「十二文字解放」

新たな力と共に新たな謎が生まれた瞬間だった。

## 日色君のギリギリ一線を越えないお仕置き!?(白目)

「ふう……ようやく落ち着ける……」

三人が反逆者の住処を探索した日の晩、日色は風呂に浸かり天井の太陽が月に変わり淡い光を放つ様をぼんやりと眺めながら、日色が何故か新たに文字魔法の力を手に入れた後のことを回想していた。

三人は反逆者の一人、オスカーの骸を畑の端に埋め、一応墓石を置き埋葬が終わると封印されていた場所へ向かった。次いでにオスカーが嵌めていたと思われる指輪も頂いておいた。……え?墓荒らし?違うよ?必要なものを物色しているだけだよ?

その指輪には十字に円が重った文様が刻まれており、それが書斎や工房にあった封印の文様と同じだったのだ。

まずは書斎である。

一番の目的である地上への道を探らなければならない。三人は書棚にかけられた封印に近づくと指輪が光った、かと思うとパンツという音と共に封印が解かれていた。おそらくこの指輪が封印の鍵なのだろうと思いつながらめぼしいものを調べていく。する

と、この住居の施設設計図らしきものを発見した。通常の青写真ほどしつかりしたものではないが、どこに何を作るのか、どのような構造にするのかということメモのように綴られたものだ。

「当たり！日色、あつたよっ！」

「よし！よくやったハジメ！」

「んっ！」

ハジメの歓喜の声に二人も声を上げる。設計図によれば、どうやら先ほどの三階にある魔法陣がそのまま地上に施した魔法陣と繋がっているらしい。やはりオルクスの指輪を持っていないと起動しないようだ。盗ん……貰っておいてよかった。その気になれば文字魔法で解くことはできるが。

更に設計図を調べていると、どうやら一定期間ごとに清掃をする自立型ゴーレムが工房の小部屋の一つにあつたり、天上の球体が太陽光と同じ性質を持ち作物の育成が可能などということもわかった。おそらく人の気配がないのに清潔感があつたのは清掃ゴーレムのおかげなのだろう。

工房には、生前オスカーが作成したアーティファクトや素材類が保管されているらしい。これは盗ん……譲ってもらふべきだろう。道具は使つてなんぼである。

「日色……これ」



「ん?何だ?」

日色が他に何か調べるものがないか本棚の資料をあさっているところユエが一冊の本を持ってきた。どうやらオスカーの手記のようだ。かつての仲間、特に中心の七人との何気ない日常について書いたものようである。

日色は設計図をチェックしているハジメを呼び、共に内容を確認めるとその内容の一節に他の六人の迷宮に関することが書かれていた。

「えっと、つまり他の迷宮も攻略すると、創設者の神代魔法が手に入るということ?」  
「ああ、おそらくその認識で間違いないだろう」

「……ん、帰る方法見つかるかも」

手記によれば、オスカーと同様に六人の『解放者』達も迷宮の最深部で攻略者に神代魔法を教授する用意をしているようだ。残念ながらどんな魔法かまでは書かれていなかったがユエが言ったように地球に帰る神代魔法がある可能性が高いだろう、日色でも解読できなかったあの世界を超える召喚魔法による転移も神代魔法なのだから。

「よし、行動の指針ができた。地上に出たら七大迷宮に、か……」

明確な指針ができたことに感慨深そうに頬を微かに緩ませる日色、帰る方法が見つかる可能性が生まれたことにハジメとユエも嬉しそうだった。

それから暫く資料を探したが、正確な迷宮の場所を示すような資料は発見できなかった

た。とりあえずは現在、確認されている「グリューエン大砂漠の大火山」「ハルツィナ樹海」、ある程度目星をつけられている「ライセン大峽谷」「シュネー雪原の氷雪洞窟」辺りから調べていくしかないだろう。

未だ見たことのない本の数々に日色は未練を残していたがまたあとで読みにくければいいかと思ひ二人を連れて今度は工房へと移動した。

工房には封印された小部屋が幾つもあつたが、その全てをオルクスの指輪で開くことができた。中には、様々な鉱石や見たこともない作業道具、理論書などが所狭しと保管されていた。ハジメが目を輝かせ、縦横無尽に高速で小部屋を片っ端から搜索し始めたのは言うまでもない。

その姿に二人は呆れたように見ているといきなりピタリと止まったハジメがおずおずと日色へお願いをした。

「……えつと、ねえ、日色。暫くここに留まっていいていい？ さ、さつさと地上に出たいのはわかるけどせつかく学べるものも多いし、ここは拠点としては最高だと思ふの！ 他の迷宮攻略のことを考えても、新たな装備を作っておいたほうがいいと思ふし……そうしたら、これまで以上に手札も増えるし、日色のの気に入らない存在も簡単に屠れるから……時間かかっちゃうかもしれないけど、どうしても作りたくて……」

『グハツ!!効果は抜群だッ!……無念(ドサツ)』

一緒に行動しているのであれば私用で時間を潰す……だがそのせいで日色の時間を潰し、迷惑をかけてしまうのではないかと不安になり、作ることにするメリットや理由を一生懸命訴えながらもハジメは上目遣い気味にお願いをする。

ハジメにとつて日色第一であるからこそ自分の時間よりも日色の時間や興味のあることに時間を費やしたいが、先のことや素材のあるメリットを考えれば、この先の迷宮を攻略するにしても、日色の敵になりうる存在を始末するにしても武器を作るのは必要だと考えた。

その上目遣いに裾が長いことで口元が隠れ、顔を恥ずかしそうにしどろもどろと言葉を零すハジメに日色の中の人があまりの可愛さで流れるようにクリーンヒットからのノックアウトされた。

そんなことはいざ知らず日色はさつきとは別の意味で呆れたように、しかし小さく微笑みながらハジメの頭を撫でた。

「構わない、ちょうど俺も刀が壊れているからな。ちょうどいい機会だ。ユエもそれでいいか?」

「んっ、日色といっしょなら構わない」

ユエも若干ハジメが撫でられていることに嫉妬するようにジト目をハジメに向けな

がらもコクリと頷いた。日色はユエは三百年も地下深くに封印されていたのだから一秒でも早く外に出たいだろうと思っただがどうやら構わないらしい。しかしなぜ俺と一緒にないんだ？と不思議に思ったが特に気にするようなことでもなかったのだから問うことはなかった。

◆  
そして現在に至る。

一応探索を終えた三人は疲れた体を休めさせるため、それぞれの自由行動となったため日色は一足早く風呂に入ることにしたのだ。

素早く服を脱ぎ、魔法陣を起動させ約ひと月ぶりの風呂を味わうために、湯船へと入水した。

「……ふう、久しぶりの風呂だ……」

『あ、気持ちよ→やっぱり仕事あとの風呂はいいねえ、ユ○モ村が温泉に入ってから狩りに行くのも納得だぜ☆』

久しぶりの風呂のせいか中の人のハイテンションの方向性もかなり歪んできている、それ程の気持ちよさなのだろう、風呂は心の洗濯とはよく言ったものだ。体を包み込み、温める液体は日色の筋肉を徐々に解きほぐしていく。

体を洗うタオルを頭に乗せた状態で日色は、そういえば……と己の人差し指を見つめ

る。

(……文字魔法は一体なんなんだ?)

ヒュドラ戦で金色の炎を纏った時、神代魔法を手に入れた時に手に入れた新たな文字魔法の力、そして――

(――あの記憶にいた女は間違いなく俺を転生させたクソ神だ。だが、どうしてあそこでクソ神が出てくる? 神代魔法を手に入れた時に見たということはあのクソ神は何か神代魔法と関係があるのか?)

数えればきりが無い程、無数に疑問の蕾が膨らんでいく。どれもどれほど思考を回転させても出てくるのは可能性の推測でしかないため答えは一向に出てくることはない。

そもそも――

(――この世界にとって文字魔法とは一体なんなんだ?)

かつて日色はハジメに自分の文字魔法を一種の固有魔法と話していたが、ヒュドラ戦で纏った黄金の炎の件で違うのではないかと思っている。

そもそも日色が知っている文字魔法とは『ありふれた職業で世界最強』という小説とはまた別の小説『金色の文字使い』という本に出てくる能力だ。

その能力とは指で文字を書くとその文字に書かれた意味が現実で発揮される、世界そ

のものである神の力の一端である。

日色は転生する時に貰った力もあの女神は文字魔法と言っていた。だからこそ日色は今まで『金色の文字使い』の能力と思っていたのだが今ではこう日色は思ってしまうのだ。

この『文字魔法』は本当に俺の知っている文字魔法なのか？と。

確かにあの女神はこの力を文字魔法と確かに言っていた、その言っていた光景は今でも日色の脳裏にこびり付いている。

だが、一度も『金色の文字使い』の文字魔法とは言っていない。

だからこそその疑問。だからこそその不安。

己の力がおぞましい何かに変わりそうな気がするから。

(……………いや、待て。ということば——)

日色はそこまで考えてからあるひとつの考えに辿り着く。

そう、もし仮に文字魔法が文字通り書いた文字の意味を現実に発揮させるといふのならば——

日色は空中に蒼く輝く『浮遊』の文字を書き、桶に掬っておいた湯船のお湯めがけて文字魔法を射出する。

『浮遊』の文字は空中を駆け、空中で一回転した後急降下し、桶に入っているお湯へと直

撃した。

瞬間、お湯に『浮遊』の文字が浮かび上がると同時に桶に入っていたお湯がまるで宇宙で水を零した時のように球体となってなんの支えも無く浮かび上がる。

そう、まるで水のみが重力が働いていないかのよう。

——それはつまり、自分は神代魔法を再現できるということではないか？

——だとすれば、自分の文字魔法と神代魔法は何か繋がりがあるのではないか？

(まさか……な)

そんなふと思考によぎった考えをありえないと日色は切り捨てる。

文字魔法は万能であるが神代魔法程強力なものではないだろう、必ず制限が存在するはずだ。だが、文字魔法に未だ自分も知らない謎があるのもまた事実だ、迷宮を攻略していくついでに調べていかななくてはならないだろう。

そう結論づけていると突如日色の聴覚にヒタヒタと足音が聞こえ始めた。

聞こえる足音はおそらく二つ、確実に此方へと向かってきている、おそらくハジメとユエだろう。その事実の日色は一人で入るといったはずだが……とこめかみを揉みながらため息を吐く。

そして、ガラツと風呂場の扉を開ける音が聞こえてくる。日色は二人にもう暫く風呂に浸かりたいから待っていてくれと伝えるために風呂場の扉の方へと振り向き——

「すまん、もう暫く——」

——そう言おうとした日色の言葉は風呂場に現れた彼女達の姿によつて日色の心の奥に引つ込んでしまった。

彼女達の姿は、全裸だった。

もう一度言おう、全裸だった。

英語で言えば、フル・フロンタルだった。

いや、ここまではいい。いや、良くないけども、日色が風呂に入っている事を知らなければ全裸できたのも可能性としては仕方がないかもしれない。

当然無表情がデフォルトの日色には僅かに目を剥いただけで終わっただろう、中の人も仰天はしたものの眼福ですなあ、と老人的な思考でそこまで驚愕するほどでもなかった。

問題はその眼である。

彼女達の瞳には、驚愕や羞恥心などは一欠片もない。

あるのは一つの決意、そう——



——獲物日色を(性的に)仕留めるといふ、捕食者のような瞳だった。

「……おい、お前ら——」

日色が言葉をかける暇もない、瞬間——彼女達の姿は消えた。

ユエは風魔法で、ハジメは「瞬光」と「縮地」を併用して瞬く間に日色の死角である日色の後方へと左右に別れ、確実に獲物を仕留める体勢へと移行する。

おそらく、突然に起こる驚愕の数々に日色は思考が追いついていないだろう。全く動くことができていない。

その隙を逃さないとばかりに二人は後方左右から同時に日色の背後へと襲い掛かる。性的に。

(——もらったッ!)

そして二人が加速された時間の中、日色を押さえつける為に日色の体へと手を伸ばし

「——風呂場では……」

——瞬間、日色が消えた。

二人は驚愕した、まるで空気に溶けてしまったかのように日色は忽然と姿を消してし

まったのだ。そして、気がつくとも日色は襲い掛かる二人の上空へと移動していた。

——文字魔法『加速』

文字魔法によって劇的に敏捷性を上昇させた日色は瞬間的に【縮地】と併用させて空中へと回避したのである。

そして二人が驚きの声を上げる暇も無く、いつ書いたのか次々と日色の文字魔法が発動される。

「……騒ぐなッ!!」

——文字魔法『布』＋文字魔法『拘束』×2

突如、空間から現れた布が空中にいるハジメとユエに覆いかぶさり、その上から光の鎖が幾重にも巻きついていく。当然、布越しに拘束された二人には逃げるどころか着地することすらできず——

「ヒャブツ!!」

「ニユア!?!」

——湯船に着水し、見事捕獲されるのだった。



数分後、バッチリ全裸からタオルの代わりとなる布を巻かれ、その上に光の鎖で固定されるといふ状況で正座をさせられたハジメとユエの前に、大事な部分をタオルで隠し

冷め切った体と冷たい瞳で見つめている日色が重たい沈黙の中、口を開く。

「——それで、言い訳は?」

「ムラツとしたからついやった、後悔はしているけど反省はしていない」

「……ん、右に同じく」

『これが本当の強姦ならぬ強漢ってか? やかましいわっ!』

若干恥ずかしそうにしながらもさらっととんでもないことを呟くハジメとユエに日色は頭を抱えたため息を吐いた。

中の人も、育て方を間違えたっ!?!と頭を抱えている。

というかそもそも花ある女の子の年頃に(吸血姫の場合封印されていた期間を除外する)こうも容易く男性に裸を見せる彼女達に日色は本気で彼女達の将来が心配になった。

……本当は日色だからこそ見せるのだが自己評価が基本的に低い日色には一切理解ができなかった。

「……………ハア、何故全裸で襲いかかって来たのかは聞かないで置いてやる。だが、前達には俺の入浴を邪魔したお仕置きを受けてもらう」

そう言つて瞳に微かに怒りを宿し、立ち上がった日色の言葉に二人は「お仕置き?」と首を傾げた。

「ああ」

「お仕置きって……日色、何するつもりなの？」

「ん、もしかして性的なイタズラ？……むしろバツチコイ」

「……………なぜそのネタを知っている？……まあいい、安心しろ。すぐ終わる」

そう言つてユエの言葉に頭が痛いとしても言うように片手で頭を押さえながら日色は人差し指を立て、瞬く間に二つの単語を書いていく。ユエには日本語はわからないため、何の文字を書いているかはわからないが隣のハジメが日色の書いている文字を見て、目を剥いている為何か恐ろしい意味を持つ文字なのかと不安になった。

「……………ね、ねえ、日色？そ、それって……………」

「……………」

日色は答えない。

だが、ハジメの推測を肯定するかのように表情を笑顔に変え、笑つていた。それはもう、ゾツとするほど素晴らしい笑顔で――

――瞳以外は笑つていた。

そして、日色の書いた二つの言葉がハジメに触れると共にハジメは日色が行おうとしているのを察したのか顔色が真っ青に染め上がる。

「ひ、日色っ、ちょっと待——ツツ!!!??」

瞬間——ズドンツツツ!!?!という日色のデコピンがハジメの制止の言葉をかき消すように放たれ、そのデコピンの直撃を受けたハジメはまるで糸の切れた人形のようにドサリと倒れた。

そう、痛みに悶えることなく文字通り受身ひとつ取れず倒れたのだ。

「……………ハジメ?」

返事はない、ただの屍のようだ。

ハジメの白の長髪は顔が疎らに覆われるほど乱れており、そこから見られるハジメの紅の瞳は虚ろに揺れ、その表情はお見せできない程の恍惚の様相となっている。倒れているハジメに巻かれているタオルはどうしてか尻の部分が濡れて……………いや、これ以上はやめておこう。

日色がハジメに書いた文字は以下の単語である。

『感度』『二倍』

……………その効果は既にお察しだろう。文字通り日色はハジメの感度を『二倍』に上昇させたのである。

だが、ここで補足説明をするが文字魔法『感度』の効果は何も敏感にさせるだけではない、一度だけだが外部から与えられる感覚を快感に変えてしまうのである。

つまりハジメは化物のようなステータスを持つていたとしても激痛に感じてしまう程の威力を持ったデコピン分の快感の二倍を喰らってしまったというわけである。

当然、未だ恋する少女であるハジメは急激に押し寄せた快樂に耐え切れるはずもなく現在に至っている。

そのいけない頂にイってしまったハジメの姿にユエは瞠目し、引き攣った表情でハジメに向けていた顔をギギギと油を差し忘れた機械のように回し、瞳以外は笑っている日色へと向けた。

「……………ごめんなさい?」

「許すと思うのか?」

数秒後、可愛らしさの中に妖艶さを秘めた女の子の悲鳴の混じった嬌声が聞こえてきたのは言うまでもない。

## 旅立ち

「ハジメ、気持ちいいか？」

「フニヤア、気持ちいい……」

「そうか……それは良かった」

「……日色、私も……」

「——わかった、もう少し待ってろ」

日色がハジメとユエにお仕置きをしてから約一ヶ月半が経過した。三人が拠点をつル活用して現在、日色が風呂上がりからのハジメの長い白髪をドライヤーモドキの温風と冷風が切り替えられるアーティファクトで乾かしながら優しく整えていた。ユエもタオルで髪を拭いているが日色にドライヤーモドキで整えて欲しいのかム、と不満をこぼしている。

日色のお仕置き以来、二人は懲りることなくむしろ更に頻繁に風呂場に入り込んできたので流石の日色も疲れたのか、前回のようにな襲わないこととタオルを巻くことを条件に一緒に入ることを許可したのだ。

そのせいか彼女達のアプローチも積極性を増し、胸板を撫でてきたり胸を押し付けて

きたりと完全に誘いに来ていたが日色の息子は『我が秘剣未だ見せず<sup>に</sup>及ばず』と言わんばかりにナニとは言わなかったが大きくはならなかった。

しかし、通常時でもユエですらゴクリと喉を鳴らしてしまう程のモノだったと言っておこう。

風呂を出てからは女の子である以上髪を整えなければならぬが元々地味な短髪で過ごしてきたハジメには長髪の髪をとかし方など知らないため、代わりに日色がとかすこととなったのだ。……ちなみにユエ曰くとかさされている最中は大変気持ちいいらしく二人は例外なく可愛らしい声を零してしまいうらしい。

「それで、ハジメのソレは馴染んできているのか？」

「——ん、まだ……無理ね、ある程度は一緒になってきているけどやっぱり、しばらく無くなっていたから……」

「……すまん」

「日色が気にすることじゃないわ」

ハジメの髪をとかし終わり今度はユエの髪をとかしながら質問した日色にハジメは己の左腕へと目を向ける。

反逆者の住処を終えて数日後、日色はハジメの左腕を治すために文字魔法『復元』を使った。



結果——成功。

いや、違う。正確には成功したが故に失敗した。

文字魔法によりハジメの左腕は文字通り嘗ての姿に『復元』した。そう、してしまったのだ。

現在の魔物の肉を喰らった肉体から生まれた左腕ではなく、嘗ての豹変前の左腕に。

結果、ハジメの左腕はハジメの変質した魔力に内側から破壊していき、再度ハジメに激痛を味あわせてしまった。そして、ハジメの肉体のように徐々に強い魔物の肉を喰らい続け徐々に強くしてきたのではなく、一気に左腕は強靱な肉体に強化させてしまったせい、僅かだが左腕の方が右腕より筋力が低くなってしまっている。

その為、左腕の欠点を補うために左腕に取り付ける義手アーティファクトを作らなければならなくなってしまったのである。

幸いにも工房の宝物庫にオスカー作の義手を基盤に日色の文字魔法を【生成魔法】で付与させた特殊な鉱石を山ほど使い生み出した逸品であり、世に出れば間違いなくこれ一つで各国が共同で禁忌として厳重に保管される程のものである。

まあ、もつとも魔力の直接操作ができないと全く動かせないので常人には使い道がないだろうが……

この一ヶ月半で三人の実力も装備も以前とは比べ物にならないほど充実している。

現在の景色とハジメのステータスはこういった感じだ。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 女 レベル：???

天職：錬成師

筋力：20860

体力：23910

耐性：21050

敏捷：26720

魔力：24750

魔耐：24690

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+高速錬成」「+精密錬成」「+鉱物系探查」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複製錬成」「+圧縮錬成」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+重縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪・集中「+超集中持続」・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」「+精密感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治癒力」・限界突破・生成魔法・言語理解



属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復・魔力変換「+体力」「+治癒力」・生成魔法・言語理解

レベルは100を成長限度とするその人物の現在の成長度合いを示す。しかし、魔物の肉を喰いすぎて体が変質し過ぎたのか、ある時期からステータスは上がれどレベルは変動しなくなり、遂には非表示になってしまった。

魔物の肉を喰った日色とハジメの成長は、初期値と成長率から考えれば明らかに異常な上がり方だった。ステータスが上がりると同時に肉体の変質に伴って成長限界も上昇していったと推測するなら遂にステータスプレートを以てしても日色とハジメの限界というものが計測できなくなったのかもしれない。

とは言っても二人は暇な時間があればどうやら一定時間が経過すると復活するらしいあのヒュドラに喧嘩を売りにいき、殺しては食っていたのだから当然といえば当然か。

ちなみに、勇者である天之河光輝の限界は全ステータス1500といったところである。限界突破の技能で更に三倍に上昇させることができるが、それでも約五倍の開きがある。しかも、ハジメも日色も魔力の直接操作や技能で現在のステータスの三倍から五倍の上昇を図ることが可能であり、その上に「瞬光」と「超集中持続」の重ねがけが可

能なのだ。彼らが如何にチートな存在になってしまったかが分かるだろう。

一応、比較すると通常の人族の限界が100から200、天職持ちで300から400、魔族や亜人族は種族特性から一部のステータスで300から600辺りが限度である。勇者がチートなら、日色とハジメは化物としか言い様がない。どちらも肉体も精神もイカれて変わっているのではあながち間違いでもないが……

新装備についても少し紹介しておこう。

まず、ハジメは「宝物庫」という便利道具を手に入れた

これはオスカーが保管していた指輪型アーティファクトで、指輪に取り付けられている一センチ程の紅い寶石の中に創られた空間に物を保管して置けるというものだ。要は、勇者の道具袋みたいなものである。空間の大きさは、正確には分からないが相当なものだと推測している。あらゆる装備や道具、素材や資料を片っ端から詰め込んでも、まだまだ余裕がありそうだからだ。そして、この指輪に刻まれた魔法陣に魔力を流し込むだけで物の出し入れが可能だ。半径一メートル以内なら任意の場所に出すことができる。おそらくこれも神代魔法の一つである転移と同系統の空間を操る魔法が付与されているのだろう。

物凄く便利なアーティファクトなのだが、ハジメにとっては特に、武装の一つとして非常に役に立っている。というのも、任意の場所に任意の物を転送してくれるという点

から、ハジメはリロードに使えないかと思索したので。

結果は成功だった、最初は空中に転送した弾丸を己の技術によって弾倉に装填出来るように——要は、空中リロードを行おうとスイングアウト式（シリンダーが左に外れるタイプ）のリボルバーであるドンナーを改良し、シリンダーの部分だけを飛び出させるという変則型の振出方式に改良した。

魔力の直接操作によりギミックを動かし同時に排莖を行う、あとはガンスピンの要領で空中に転送した弾丸を装填するという方法だ。

結論を言うとハジメはたった二週間で空中リロードを会得した。なぜたった二週間で神業を会得したのかというと【瞬光】の知覚能力向上と【集中】の技能及び技量向上である。この二つの技能により遅くなった世界で空中リロードを瞬く間に会得したのだがここで思わぬ誤算が生まれた。

なんと【超集中持続】を発動した時、空中リロードをせずそのまま弾倉に弾丸を転送させることに成功したのだ。

現在はコツをある程度掴んだせいか【瞬光】を発動した状態でも弾丸を転送できるようになってしまっている。

……この場合はハジメの集中力に驚愕するべきなのだろうか？

次に、ハジメは【魔力駆動二輪と四輪】を製造した。

これは文字通り、魔力を動力とする二輪と四輪である。二輪の方はアメリカンタイプ、四輪は軍用車両のハマータイプを意識してデザインした。車輪には弾力性抜群のタールザメの革を用い、各パーツはタウル鉱石を基礎に、工房に保管されていたアザンチウム鉱石というオスカーの書物曰く、この世界最高硬度の鉱石で表面をコーティングしてある。おそらくドンナーの最大出力でも貫けないだろう耐久性だ。エンジンのような複雑な構造のものは一切なく、ハジメ自身の魔力か神結晶の欠片に蓄えられた魔力を直接操作して駆動する。速度は魔力量に比例する。

更に、この二つの魔力駆動車は車底に仕掛けがしており、魔力を注いで魔法を起動する地面を錬成し整地することで、ほとんどの悪路を走破することもできる。また日色の文字魔法も付与させられているためどこかのスパイのように文字魔法『投影』と『隠蔽』により姿を完全に消す〔メタマテリアル光歪曲迷彩〕<sup>オプチカル・カモ</sup>や文字魔法『索敵』と〔気配感知〕を付与させた〔リーダー機能〕も搭載されている。

『死銃<sup>デス・ガン</sup>じゃないですかやだあ!』

流石の日色もハジメがそれほど高性能の乗り物を作るとは思っていなかったため軽く引いていたのは言うまでもない。ちなみに出来上がったときハジメは日色に褒めて褒めてと言わんばかりに透明な尻尾を振っていたとか。

その他にも左腕が復活したのでドンナーと対をなすりボルバー式電磁加速銃剣：シユ

ラークも開発し、ドンナー・シユラークの二丁の電磁加速銃によるガンIIカタ（銃による近接格闘術のようなもの）を習得したり、強化した対物ライフル：シユラーゲン、対軍用電磁加速式機関砲：メツエライ、ロケット&ミサイルランチャー：オルカン等を作ったがそれらの説明は割愛しよう。

そしてハジメの装備として最後に説明するのは「魔光眼」である。

ハジメはヒュドラとの戦いで右目を失っている。極光の熱で眼球の水分が蒸発してしまい、神水を使う前に『欠損』してしまっていたので治癒しなかったのだ。その為こちららも日色の文字魔法で『復元』させようとしたのだがハジメがそれを止め、神結晶に「魔力感知」「先読」を付与することで通常とは異なる特殊な視界を得ることができ「魔眼石」を作ることを提案したのだ。義手にも使われていた擬似的な神経を作る仕組みを取り入れ、魔眼が捉えた映像を脳に送ることができるようにしたのである。

神結晶を使用したのは、複数付与が神結晶以外の鉱物では出来なかったからだ。莫大な魔力を内包できるという性質が原因だと、日色は推測している。未だ、生成魔法の扱いは未熟の域を出ないので、三つ以上の同時付与は出来なかったが、習熟すれば、神結晶のポテンシャルならもつと多くの同時付与が可能となるかもしれない、とハジメは期待しているようだ。

だが、その提案に日色は反対した。元の眼球に戻したほうがいいと主張したのであ



る。おそらくそれはハジメを思いやっての言葉なのだろうが日色を守る為にさらに力が必要なハジメはそれを受け入れることができず討論となった。

最終的にユエが提案した文字魔法でハジメの元の右眼とその魔眼石を『融合』させる案に日色は渋々同意し、文字魔法で復元させた右眼を「魔眼石」と『融合』させた。

結果は成功だった。

融合させる最中にハジメが痛みに襲われるという事故があつたもののハジメの右眼は魔眼石と融合し、ハジメ命名【魔光眼】となった。

【魔光眼】は通常は左眼と同じ紅の瞳で通常の視界が見えるのだが右眼に魔力を流すと瞳の色が変わり、虹彩は薄い水色に瞳孔は紅色の円が覆いその円の中には神結晶のように深い青色になってしまふのである。

『あの、ハジメしゃん？もしかして死の線とか見えてたりしないよね？神様ぶつころとか言ったりしないよね？原作でも殺しているけどなッ!？』

そんな叫びをしていたバカが一名いたとか。

この状態になったハジメの右眼の視界は通常の時とは違い魔力の流れや強弱、属性を色で認識できるようになった上、発動した魔法の核が見えるようになるのである。

魔法の核とは、魔法の発動を維持・操作するためのもの……のようだ。発動した後の魔法の操作は魔法陣の式によるということは知っていたが、では、その式は遠隔の魔法

とどうやってリンクしているのかは考えたこともなかった。実際、ハジメが利用した書物や教官の教えに、その辺りの話しは一切出てきていない。おそらく、新発見なのではないだろうか。魔法のエキスパートたるユエも知らなかったことから、その可能性が高い。……文字魔法にも核が見えるのだろうか？と日色が疑問を抱いたのは余談である。

通常の「魔力感知」では、「気配感知」などと同じく、漠然とどれくらいの位置に何体いるかという事しかわからなかった。気配を隠せる魔物に有効といった程度のものだ。しかし、この魔眼により、相手がどんな魔法を、どれくらいの威力で放つかを事前に行うことができる上、発動されても核を撃ち抜くことで魔法を破壊することができるようになった。核を狙い撃つのは針の穴を通すような精密射撃が必要ではあるがハジメならば問題はないだろう。

と、ここまでである程度装備の解説をしたがここでハジメの姿を見てみよう。

美しい長い白髪に、左腕に装着する義手、紅色の左眼と右眼の赤青く輝く魔眼のオツドアイ、もはやハジメの面影など殆どない、完全にラノベのヒロインなどで出てきそうな厨二キャラである。

その事実には気づいた途端日色に泣きつき慰めてもらったのは言うまでもない。

次は日色の装備の説明をしよう。

ヒュドラ戦で日色の刀は溶けてしまった為、新たに製作することになった。





神結晶の魔力が尽きれば二度と手に入ることができない、その為文字魔法で蓄えられている魔力がもうすぐ尽きることを知った日色はどうかしてこの神水を補充できないか文字魔法を使って試行錯誤していた。

一度は文字魔法『複製』を使えば神水を尽きないようにできるんじゃないかと考え、複製を行ったが結果は失敗、魔力が一切内包されていない神結晶が生まれただけであった。

そして、その後もハジメの手を借りながらも何度も試行錯誤を繰り返し——試行錯誤を始めて3週間後、ようやく神結晶の問題を解決させることに成功した。

さつきも話したと思うが神結晶は膨大な魔力を内包できるが故にハジメの生成魔法を複数付与できることが可能だった、その仕組みを逆手に取り、かつて日色が作ったオリジナルの魔法『反鏡』の効果の一つである触れた対象の魔力を強制的に剥奪する『魔力吸収』を改良し、外界の魔力を自動的に吸収する『魔素吸収』の魔法陣をハジメに付与させ、そして日色の文字魔法『凝縮』を付与させることで見事、半永久的に神水を流してくれる神結晶を作り上げることに成功したのだ。

ただし、神水が生み出せれる飽和量が予想以上に大きいのかただ大気の魔素を吸っていても2週間に試験管型保管容器一本分の比率で生まれるといふ非効率さだったが、無いよりはマシである、ちなみに現在持っている神水は試験管型保管容器十五本分であ

る。

もう一つの複製によって生み出された神結晶は膨大な魔力を内包するという特性を利用し、一部を錬成でネックレスやイヤリング、指輪などのアクセサリーに加工することにした。そしてその一つをユエに贈ったのである。ユエは強力な魔法を行使できるが、最上級魔法等は魔力消費が激しく、一発で魔力枯渇に追い込まれる。しかし、電池のように外部に魔力をストックしておけば、最上級魔法でも連発出来るし、魔力枯渇で動けなくなるということもなくなる。

その為、一度日色がそのハジメ命名『魔晶石シリーズ』と名づけたアクセサリー一式を渡すと何故かプロポーズと間違えられ一悶着あったが割愛する。

それから五日後、遂に三人は地上へ出る事になった。

三階の魔法陣を起動させながら、日色は二人に静かな声で告げた。

「ハジメ、金口リ、俺達は異端だ。地上に出れば必ず聖教教会や各国が黙っていないだろう」

「ええ……」

「ん……」

「文字通り世界を敵に回す旅だ、わざわざついてくる必要なんてないぞ?」

その日色の言葉に二人は呆れるように微笑した。

「今更……日色の隣が私の居場所……他に、行くところなんてない」

「……私は、日色を守るのなら世界を敵に回したって構わない」

そう告げる彼女たちに日色は小さく嘆息する。

「——ハツ、好きにしろ。言っておくが足手纏いは見捨てるからな」

そうして三人は地上へと歩みだす。

一人は大切な人を守る為に

一人は自分の居場所を離れたくない為に

そして最後の一人は元の世界に帰る方法を探すために。



「——ほう、オスカー君の迷宮を攻略しましたか……」

晴れ渡る青空の下、「トータス」のどこかで20代中盤のどちらかといえば男よりの男性的な青年は己の白金色の短髪をいじりながらそう呟いた。

その男の服装は青紫色を基調とした衣服の上にその一体化したかのような白い肩から上が無いローブのような服を着い、まるで貴族を彷彿とさせている。

「既に私の望み通り流れは始まっている、今は大丈夫ですが神の使徒達が動くのならば私も動かなければなりませんエ」

ケラケラと笑う青年は「オルクス大迷宮」がある方向へと何やら思いを馳せるように

こう呟いた。

「せいぜい、私の期待を裏切らないでくださいネ？ワード・マスター文字使い君？」

そう呟くと共に青年は歩き出した。

謎は、更に深まるばかり。



## ▼やせい の ウサ耳 が 現れた !

僅かな光もない暗闇に包まれた洞窟の中。

小さな虫の這いずる音すら感じないひっそりとしたその無音の空間は人の手が入っているようには見えず、凹凸とした極めて自然的な様子だった。

ただし、それは自然的でありながらも出入り口が存在しない閉ざされた空間であるという点を除けば、だが。

しかし、偶然的に地中にエアポケットができるということはありえないというわけではない、幾つかの条件を満たせば確かにエアポケットは存在する、だが、その地面に刻まれた複雑にして精緻な、円陣に囲われた幾何学模様の魔法陣の存在がこの閉ざされた洞窟を不自然だと決定づけていた。

その3メートル程の魔法陣を現代に携わる者が見たのなら、きつと驚愕に目を剥き、最悪卒倒するのは必至だろう。そこまで極まった魔法陣だったのだ。

もつとも王国などが知れば国宝として扱われそうだが、現在は埃に塗れて薄汚れている為、なんと物悲しそうな雰囲気を漂わせている。

そんな魔法陣が、突如変化が現れた。

魔法陣の溝に沿って僅かに蒼色の光が奔り始めたのだ。最初は螢火のように儂く灰かに輝き、次第にその輝きが強まり、増していく。

そして、一拍。

光が爆ぜた。

蒼色の鮮やかな蒼色の魔法陣を燦然と輝かせ、洞窟の暗闇をなぎ払っていく。それは正しく神秘的とも言うべき壮麗な光景、きつとこの場に立ち会う者がいたのなら超常的存在が顕現したのだと、身を震わせて瞠目するだろう。

そして、光が宙に溶けるように霧散していき、魔法陣の上に三人の人影が見え始めてきた頃、洞窟に木霊したのは……

「……なんでやねん」

男達を文字通り声だけで見惚れさせてしまうような声で雰囲気を完全に粉々に粉碎するツツコミだった。

完全に光が収まり暗闇が戻った洞窟内で、僅かにがっかりしたような表情で目を伏せたツツコミの主。数ヶ月前、「オルクス大迷宮」の奈落に落とされ、ありふれた少女からあらゆる美少女からすら妬まれるようなスタイル抜群の超絶美少女にフォルムチェンジした、異世界【地球】からの来訪者、南雲ハジメだった。

奈落に落ちて以来、ずっと生死を変えたサバイバルを繰り返してきたハジメは、よう

やく地上に出られると心を逸らせ、魔法陣の向こう側は地上だと、目を開ければ降り注ぐ陽の光や自然の風を目一杯浴びれると無条件で信じていた。

よつて、目を開けた視界に映ったのは代わり映えのない岩壁だったのでガツカリしてしまったのである。

そのハジメの表情を若干呆れた視線で見ながら、同じく共に魔法陣からここに転移してきたハジメと同年齢の少年が言葉を零す。

「ハア……あのなあ、ハジメ。陽のあたる地上なんかにおいたら魔法陣の存在がバレて壊されるかもしれないだろうが……」

美しい艶やかな黒髪に黒曜石のように刃の如く鋭い瞳を持ち、まるで物語の登場人物かと思わせるような整った顔の少年——神代日色はそう呆れたように呟いた。

「……秘密の通路……隠すのが普通」

それに同じくゆるふわな黄金の髪に月と思わせる紅い瞳、白磁色の肌に桃色の薄い唇のビスクドールのような美貌を持った日色の鳩尾くらいまでしかない小柄な少女——ユエが、呆れの色を瞳に灯らせてつぶやいていた。

その二人の言葉にハジメはうつつ、と自分がそんな簡単なことにも頭が回らない程浮かれていたらしいことに羞恥心が駆け巡るが、気を取り直すように物体を亜空間に保存できるアーティファクト【宝物庫】に魔力を注いで起動し、緑光石を用いたマグライトを

取り出した。別に自分たちには「夜目」があるので本来はいらないのだが自分を誤魔化す意味合いも兼ねての使用である。

そうして、淡い緑の混じる光が洞窟の奥にある綺麗な縦線の刻まれた壁を見つけた。壁には日色の目線くらいの高さに手のひら大の七角形が書かれていたのだ。各頂点には異なる文様が描かれ、その一つにオスカー・オルクスの紋章を見つけた。ハジメはその壁に歩み寄り、「オルクス大迷宮」を攻略した証である指輪をかざすと、直後。

ゴゴゴツと雰囲気たつぷりに音を響かせて壁が左右に開かれ、その奥に通路を晒した。

三人は顔を見合わせ、小さく頷くとその通路へと歩みだした。分かれ道は見当たらないので道なりに進んでいく。

途中、幾つか封印が施された扉やトラップがあったが、オルクスの指輪が反応して早く勝手に解除されていった。三人は一応警戒していたのだが、拍子抜けするほど何事もなく洞窟内を進み、遂に光を見つけた。外の光である。日色とハジメは数ヶ月、ユエに至っては三百年間、求めてやまなかつた光。

それを見た途端、ユエとハジメは同時に笑みを浮かべ、徐々に光に向かう速度を上げ、駆け出していく。日色はそんな二人に小さく苦笑しながらついていく。

近づくとつれ徐々に大きくなる光。外から風も吹き込んでくる。奈落のような激ん

だ空気では無い。ずっと清涼で爽やかである、新鮮な風だ。ハジメは『空気が美味しい』という感覚をこの時ほど実感したことはなかった。

そして、ハジメとユエは同時に光へと飛び込み――  
遂に待ち望んでいた地上へと出た。

こうして漸く出た場所は地上の人間にとっては地獄の処刑場、「ライセン大峡谷」である。深さは平均1、2キロメートル、幅は九百メートルから最大八キロメートルの西の「グリュューエン大砂漠」から東の「ハルツィナ樹海」まで大陸を南北に分断する広大な峡谷である。

ハジメとユエが出た場所はその「ライセン大峡谷」の谷底にある洞窟の入り口だった。地の底とはいえ、頭上の太陽からは燦々と光が降り注ぎ、風は大地の匂いを交えて鼻腔をくすぐる。

そこは例え地上の人々に恐れられている場所だとしても、確かにそこは地上だった。  
「……やれやれ……ようやく……戻ってこれたな……」

遅れて洞窟から現れた日色が地上に降り注ぐ太陽の光を眩しそうに隠しながら感慨深そうに呟く言葉に呆然と頭上の太陽を仰ぎ見ていたハジメとユエの表情が次第に笑みを作る。無表情がデフォルトのユエでさえ誰が見てもわかるほど頬がほころんでいく。

二人は、ようやく実感が湧いたのか、太陽から視線を逸らし日色に視線を向け——そして思いつきり抱きついた。

「やったあああああああアツ!! ようやく戻って来れたあ!!」

「んっ——!!」

「——ちよっ! おい……ッ! 締まつ……苦し——」

突然の二人の抱きつきに日色は目を剥き、流されるように後ろへと転倒してしまふ。しかも彼女達が日色を抱きしめる力が強いため、日色の表情はかなり苦しそうである。

そして、暫く経った頃遂に日色の堪忍袋の緒的なものがブチツと切れた。

「——いい加減にしろー!」

「にゃ!?!」

「——にゅ!?!」

苛立ったように日色は覆いかぶさったハジメとユエを一人ずつ片手で掴み、ソオイ! と放り投げる。突然の浮遊感に二人は驚き、尻餅をつく。ムー、と二人からの非難の視線を無視しながら日色は立ち上がり、オスカーの宝物庫で見つけた自動洗浄機能等の機能を兼ね備えた眼鏡をクイツ、と人差し指で上げながら呆れたように呟いた。

「……全く、いつまでふざけているつもりだ。そのせいでこいつ等に囲まれてしまっただろうが!」

おそらく地上に出たことではしやぎ過ぎたのだろう、あまりの騒がしさに既に三人は魔物達に囲まれていた。完全に自業自得である。

魔物達の唸り声が四方八方から響く中、むくりと盛り上がったハジメは溜息とともに愚痴を吐く。

「はあ、全く無粋な奴ら。もう少し余韻に浸らせてくれないじゃない」

瞬間——【宝物庫】から取り出された義手にハジメの左腕から左肩が覆われ、紅色の筋が奔る鋼鉄の黒腕と化す。

そして、双銃剣ドンナー&シユラークを抜きながら「そういえば、ここつて魔法は使えなかつたけ」と首を傾げる。

そう思いユエを見るとどうやら同じ疑問を抱いた日色がユエに質問していた。

「……分解される。でも問題ない」

ライセン大峡谷で魔法が使えない理由は、発動した魔法に込められた魔力が分解され散らされてしまうからである。もちろん、ユエの魔法も例外ではない。しかし、ユエはかつての吸血姫であり、内包魔力は相当なものであるうえ、今は外付け魔力タンクである魔晶石シリーズを所持している。

つまり、大峡谷の特性を持ってしても、瞬時には分解しきれないほどの大威力を持つて魔法を放ち殲滅すればいいというわけだ。

そうふんすつ、と鼻息を荒げながら豪快な発想をするユエに日色は、少し引き気味に尋ねる。

「ちなみに……効率は？」

「……十倍くらい？」

「どうやら、初級魔法を放つのに上級レベルの魔力が必要らしい。射程も相当短くなるようだ。」

「……そうか。なら、俺とハジメが始末する。金ロリは自分の身を守る程度にしておけ」「うっ……でも」

「いいから。ここで金ロリに魔力を大量に消費されて倒れられても迷惑だ」  
「……ん……わかった」

ユエが渋々といった感じで引き下がる。せっかく地上に出たのに、最初の戦いで戦力外とは納得し難いのだろう。少し矜持が傷ついたようだ。唇を尖らせて拗ねている。……視界の端でハジメがいい気味だとも言うような視線を向けているのが気になったが無視である。

そして、二人の会話が終わったと同時にハジメはおもむろにドンナーを発砲した。殺意を出さず相手の方をも見もせず、ごくごく自然な動作でスッと銃口を魔物の一体に向けると、これまた自然に引き金を引いたのだ。



あまりに自然すぎて攻撃をされると気がつけなかったようで、取り囲んでいた魔物の一体が何の抵抗もできずに、その頭部を爆散させ死に至った。辺りに銃声の余韻だけが残り、魔物達は何が起こったのかわからないというように凍り付いている。確かに、十倍近い魔力を使えば、ここでも「纏雷」は使えるようだ。問題なくレールガンは発射できた。

「さてと、奈落の魔物とどっちが強いのか試させてね。……あまり期待してないけど」

そう言つて、ハジメは右足を引いて半身となりながら腰を落とす、胸の前でクロスさせるように二つの銃剣を構えるハジメ。義手をつけた左肘を突き出し、その手に握られているシュラークは僅かにドンナーの下の位置にある。これがハジメが編み出した両の銃で前後をカバーしつつ、左腕のギミックをあらゆる状況で対応させやすいようにしたガン⇨カタの構えである。

戦闘態勢を整えたハジメの眼に永久凍土のように冷たく、深淵のように深い瞳が魔物達を睥睨する。

その眼を見た周囲の魔物達は気がつけば一步後退っていた。しかも、そのことに気がついてすらいらない。本能で感じたのだろう。自分達が敵対してはいけないう化物を相手にしてしまったことを。

そして、次に常人ならば文字通り意識を失いそうな壮絶なプレッシャーを撒き散らす

もう一人の化け物がハジメの隣に立った。

「…さっさと片付けるぞ、ハジメ」

日色のその言葉にハジメが頷くと同時に、遂に魔物の一体が緊張感に耐え切れず咆哮を上げながら飛び出した。

「ガアアアアア!!」

しかし、ドパンツと、ほぼ同時に響き渡った銃声と共に一条の紅の閃光が走り、その魔物は避けるどころか反応すら許されず頭部を吹き飛ばされた。消失した頭部をそのままに、ズザザザと力なく地面を滑る魔物の骸。白煙を上げながら一瞬にして魔物を葬ったハジメの瞳には何の感情も浮いておらず、興味すら湧いていない。

その一体の魔物の死に連動するようにまた一体の魔物を飛び出したが、今度はいつから現れたのか重力を無視するかのように宙に浮いている無数の蒼色の剣が、魔物の体を瞬く間に幾重にも突き刺し、切り裂いて絶命させた。

——【念糸】の派生技能【瞬間構築】

日色が奈落で手に入れた【念糸】の能力は簡単に『魔力を消費して魔力の糸を生み出す』という平凡なものである。

だが、魔力を生み出された糸は一つの性質を持っていた。

それは『魔力の糸には質量は存在するが重さが存在しない』という性質である。

魔力とは人や魔物の体内に存在する重さや質量がなく、決められた形の無い極めて不思議な物体である……いや、物体という定義すら怪しいかもしれない。

とまあ、少し話がそれたが人の体内や魔物の体内にある魔力には質量や重さは存在しない、何故ならばもし仮に重さがあるというのなら魔法を使うたびに体重や質量が減っていくからである。

では、もし仮にその魔力に質量を、形を与えることができるのなら？

それを実行したのが日色である。

空中にいくつもの光の十字架を生み出す光属性の魔法【縛光刃】のように【念糸】によつて生み出した幾つもの魔力の糸を、束ね、捻り、形を変え、一本の剣へと形作らせる。

魔力の糸は魔力を込めても一本の糸を鋼鉄のように強靱にすることは不可能だが限りなく細くすることは可能である、限界まで硬度を上げた糸を文字通り髪の毛以下まで細くし、束ねて捻じればそれを容易く切り裂くことは難しい。しかも、【瞬間構成】の派生技能を手に入れた為、一瞬にして魔力の糸を剣に形作ることが可能だ。

そして、魔力の糸で出来上がった剣は質量は存在するものの重さは存在しないため、結果文字通り空中に浮く、飛剣が出来たというわけだ。

しかし、ここで問題が発生した。せつかく宙に浮く【縛光刃】のような剣を作る事に

成功したもののあくまで浮いているだけなので「縛光刃」のように自分の意思で動かすことは出来ないのである。

だが、そこで断念しないのがこの男、厨二病ミヤハコ病神は止まらないのである。

幾度も試行錯誤を行い、どうにか己の意思で動くファンタジー溢れる空翔ける剣を出さないか考え、遂にある名案を思いつく。

『……あ、魔法使えばいいんじゃないかね？』

日色には、魔法の適性は無い。火属性の初級魔法である「火種」ですら魔法を使うには複雑な式が必要な為、一メートル半程の魔法陣が必要であり、到底使い物にはならぬいだろう。

だが、ここで一つ思い出して欲しい。

魔法とは、魔法陣に属性・威力・射程・範囲・魔力吸収 e t c、 e t c ……と言ったような式が必要であり、その式を書くために自然と魔法陣は大きくなってしまふ。

つまり——式を書けさえすれば魔法陣の大きさは自由なのである。

わかっただろうか？

そう、【念糸】の魔力の糸である。

日色は出来上がった糸の剣にマイクロレベルの細さの糸で魔法陣を描いたのである。

当然、マイクロレベルの糸で編まれた魔法陣の大きさは小さく半径3ミリの超小型に

なっている。その魔法陣の効果は『50グラム以下の物を己の意思に従い操る』というもの、要は念力である。持てるものは50グラムとショボイが糸の剣には重さが無いため十分だ。

こうして出来上がったのは現在最高八本同時に操ることができる遠距離専用の念糸剣【蒼影剣】である。【蒼影剣】を生み出し、操るのに必要な魔力は少なく、それは例え魔力分解効果を持つ【ライセン大峽谷】であろうとも中級魔法程度の魔力で抑えることができる為、大変効率

……ちなみに三徹し、【蒼影剣】が完成した時に内心呟いた彼の一言は――

『……あいにもあばわー（掠れ声）』

――らしい、かなり思考が壊れていたのはいうまでも無いだろう。

そこから先は、もはや戦いではなく蹂躪。魔物達は、唯の一匹すら逃げることも叶わず、まるでそうあることが当然の如く頭部を吹き飛ばされ、又は斬り飛ばされ骸を晒していく。辺り一面が魔物の屍で埋め尽くされるのに3分もかからなかった。

ドンナー&シュラクをガンस्पインさせて大腿部のホルスターにしまったハジメを横目に日色は首を僅かに傾げながら周囲の死体の山を見やる。

その傍に、トコトコとユエが寄って来た。

「……………どうしたの？」

「……いや、あまりに弱すぎると思っただけだ」

「それは……多分、私達が戦ってきた相手が比較にならないほど強かったからじゃないの？」

「…そんなものか」

ハジメの言葉に納得したのか小さく頷いた日色は、もう興味がないという様に魔物の死体から視線を変え、峡谷の絶壁を見上げ、フムと小さく頷いた。

「さてと、この崖を登ろうと思えば登れるだろうが……ハジメ、【シユタイプ】を出してくれ樹海側に向けて探索するぞ」

「……なぜ、樹海側？」

「流石に峡谷を抜けて砂漠横断は手を焼くからな、だったら樹海側に向かった方がマシだろう、どこかの町にも近そうだしな」

「……ん、確かに」

「日色、準備できたよ」

そう説明する日色の提案にユエは納得したように頷いた。魔物の強さからして峡谷自体が迷宮という可能性はゼロに近い。ならば別に迷宮の入り口が存在する筈だ、【空力】などで絶壁を超えることは不可能では無いが、元々【ライセン大峡谷】を探索するつもりなのだから効率としても樹海側の方がいいのである。

ハジメは〔宝物庫〕に魔力を注ぎ、魔力駆動二輪〔シユタイプ〕を取り出した。アメリカンタイプの黒いボディにかなり大型である。燃料は魔力を直接流すことで直接車輪関係の機構を動かし、静かな駆動音で移動するのである。

速度調整は魔力量次第な為、〔ライセン大峡谷〕では魔力効率が悪く〔シユタイプ〕より燃費の悪い魔力駆動四輪は使わず本来は二人用なのだが三人乗れるように取り外し可能なサイドカーを搭載している。

日色が颯爽とシユタイプに跨る。シユタイプの操作はハジメも行えるのだが基本的には日色が操作することとなっている。

『未成年が車に乗っちゃいけません!!大型二輪は18歳からです! (追真)』

そんなことを叫ぶバカがいたとかいかなかったとか。

ハジメとユエはどっちが日色の後ろに横乗りするか揉めそうになったものの日色が提案したジャンケンの一発勝負よりハジメが勝利したのでハジメが日色の後ろにユエがサイドカーに乗ることとなった。……ユエが不満げだったのと言うまでもない。

横乗りをしたハジメの手が日色の腰にしがみつくのを確認すると日色は魔力を流し込みシユタイプを発進させた。

ライセン大峡谷は基本的に東西に真っ直ぐ伸びた断崖だ。そのため脇道などはほとんどなく道なりに進めば迷うことなく樹海に到着する。ハジメもユエも、迷う心配が無

いので、迷宮への入口らしき場所がないか注意しつつ、軽快に魔力駆動二輪を走らせていく。

シユタイプには車体底部に錬成機構が存在し、どんな悪路だろうと整地しながらの走行が可能であるため本来ならばアメリカンタイプのバイクには辛いであろう谷底の道も実に軽快な道のりに変貌するのだ。

「気持ちいいね、日色」

「……ああ、そうだな。金ロリはどうだ？」

「……ん、いい……すく」

風を切りながら太陽の光と土の匂いの混じった爽やかな空気を堪能しながら三人は久しぶりの外の景色でのドライブを楽しんでいく。最も、その間にも襲い来る魔物の群れを日色の「蒼影剣」が切り刻み、ハジメも日色の背中に寄りかかりながらも手だけは忙しなく動き続けドンナーを魔物めがけて発砲し、一匹残らず蹴散らし尽くしていく。

暫くシユタイプを走らせていると、それほど遠くない場所で魔物の咆哮が聞こえてきた。中々の威圧である。少なくとも今まで相対した谷底の魔物とは一線を画すようだ。もう三十秒もしない内に会敵するだろう。

シユタイプを走らせ、大きくカーブした崖を回り込むと、その向こう側に大型の魔物が現れた。かつて見たティラノモドキに似ているが頭が二つある。双頭のティラノサ



ウルスモドキだ。

だが、真に注目すべきは双頭ティラノではなく、その足元をびよんぴよんと跳ね回りながら半泣きで逃げ惑うウサミミを生やした少女だろう。

「……………あれはなんだ？」

「……………兎人族、亜人族の一人」

「……………なんで兎人族が谷底にいるの？住処ってわけではないんでしょ？」

「……………ん、亜人族は樹海に住んでる。谷底に住処は……………聞いたことがない……………あるとすれば……………」

「犯罪者として……………か……………」

『てか、アレってバグウサギじゃね？』というかあの動き完全にドウエリス……………うん！やめよう！（真顔）』

等と逃げ惑うウサミミ少女を尻目に悠長に会話を興じる三人。助けるという発想はないようだ。それは別にウサミミ少女が犯罪者であることを考慮したわけは無い、単に興味がないだけである。

日色は単純に助けるメリットも借りもない見知らぬ少女を助けるような優しい性格などしていないし、ハジメは豹変する前ならばまだしも今のハジメには日色は一切関係ないので無視、ユエも単純に他人なので興味がないようだ。

しかし、そんな呑気な三人をウサミミ少女の方が発見したらしい。双頭ティラノに吹き飛ばされ岩陰に落ちたあと、四つん這いになりながらほうほうのていで逃げ出し、その格好のまま日色達を凝視している。

そして、再び双頭ティラノが爪を振り隠れた岩ごと吹き飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がると、その勢いを殺さず猛然と逃げ出した。……日色達の方へ。

それなりの距離があるのだが、ウサミミ少女の必死の叫びが峡谷に木霊し日色達に届く。

「みづけだあー！ やつとみづけましたよおー！ だずげでぐだざーい！ ひっー、死んじやう！ 死んじやうよお！ だずけてえ、おねがいしますうー！」

滂沱の涙と大量の汗が混ざりおそらく綺麗な顔つきであろう顔をぐしゃぐしゃにして必死に駆けてくる。そのすぐ後ろには双頭ティラノが迫っていて今にもウサミミ少女に食らいつこうとしていた。このままでは、ハジメ達の下にたどり着く前にウサミミ少女は喰われてしまうだろう。

その光景を見た三人は――

「……………『やつと見つけた』…か」

「…どうでもいい。日色、早く行こう。モンスタートレインよ、関わったらロクなことがなさそう」

「ん……同感」

——無慈悲にもそのままシユタイプに乗り、その場から離れようとしていた。しかも迷惑そうな表情付きで。

ハジメとユエがウサミミ少女から視線を逸らすと助ける気がないことを悟ったのか少女の目から涙がさらに溢れ出し、グシャグシャの表情が更にしわくちやになっていく。

「まつでえ、みすでないでござい！ おねがいですう！！」

ウサミミ少女が更に声を張り上げる。が、日色達は助ける気が全くないのでこのままいけばウサミミ少女は間違ひなく食われてしまうだろう。

ただし、それは双頭ティラノがウサミミ少女の向こう側に見えた日色達に殺意を向けさえしなければ。

双頭ティラノが逃げるウサミミ少女の向かう先に日色達を見つけ、殺意と食欲を乗せた咆哮を上げた。

「グウルアアアア!!」

それが、化け物を呼び覚ますきつかけとなった。

双頭ティラノは殺意向けた、向けてしまったのである。

三人を、いや、正確にはその中にいる日色の存在を否定し、捕食の対象として認識した。してしまった。

「あ？」

当然、それを彼女が容認できるわけではない。

双頭ティラノが、ウサミミ少女に追いつき、片方の頭がガパツと顎門を開く。ウサミミ少女はその気配にチラリと後ろを見て目前に鋭い無数の牙が迫っているのを認識し、「ああ、ここで終わりなのかな……」とその瞳に絶望を写した。が、次の瞬間――

ドパンツ!!

聞いたことのない乾いた破裂音が峡谷に響き渡り、恐怖にピンと立った二本のウサミミの間を一条の閃光が通り抜けた。そして、目前に迫っていた双頭ティラノの口内を突き破り後頭部を粉碎しながら貫通し、空へと駆け抜けていく。

力を失った片方の頭が地面に激突、慣性の法則に従い地を滑る。双頭ティラノはバランスを崩して地響きを立てながらその場にひっくり返った。

その衝撃で、ウサミミ少女は再び吹き飛ばす。まるでB級ギャグアニメのように狙いすましたように日色の下へと。

「きやああああー！ た、助けてくださいー！」

『シャッターチャンスッ!!カメラカメラ!!』

そう内心呟く日色へとその格好はボロボロで女の子としては見えてはいけない場所が盛大に見えてしまっている。例えば酷い泣き顔でも男なら迷いなく受け止める場面だ。

それを察しているのか日色は呆れたように小さく微笑する。受け止めてくれるのか、そう思ったウサミミの少女は安堵の表情を取り――

「断る」

――瞬間、日色が生み出した念糸がウサミミ少女の体に絡みつき、地面に振り下ろす事で落下速度が更に加速された状態で叩き落とされた。流星は我らの日色様だけ☆

「え――エブツ?!」

ベシヤ、とインクを撒き散らしたような音と共に日色の眼前の地面に着地――もとい着弾したウサミミ少女は両手両足を広げうつ伏せのままピクピクと痙攣している。気は失っていないが痛みを堪えて動けないようだ。

「……なんて残念なウサギさん」

「なんか……一周回って面白く感じる」

ウサミミ少女の醜態を見て、それぞれがさらりと酷い感想を述べるハジメとユエ。そうこうしている内に双頭ティラノが絶命している片方の頭を、何と自分で喰い千切りバ

ランス悪目な普通のティラノになっていた。正直言つて食われた跡から骨が見えている為、少しグロイ事になっている。

普通ティラノがその眼に激烈な怒りを宿して咆哮を上げると、その叫びに痙攣していたウサミミ少女が跳ね起きた。意外に頑丈というか……いや、この場合はしぶといと行つたほうがいだろう。

あたふたと立ち上がったウサミミ少女は、再び涙目になりながら、これまた意外に素早い動きで日色の後ろに隠れる。あくまで日色に頼る気のようにだ。まあ、自分だけだとあつさり死ぬし、日色達が何かして片方の頭を倒したのも理解していたので当然といえば当然の行動なのだが、正直言つて汗や涙でぐちゃぐちゃな顔で近づかれるのは気持ち悪いのだ。

「おい、お前。さも当然のように俺を盾にするな、というか離れる鬱陶しい」

日色のローブの裾をギュツと掴み、絶対に離しません！ としがみつくとウサミミ少女を冷め切つた瞳で睨む日色。サイドカーに乗っているユエが離せと言わんばかりに足を小突き、後ろの席にいるハジメがドンナーに手を伸ばしかけているため大変不味いことになりそうだ。

「い、いやです！ 今、離したら見捨てるつもりですよね！」

「ああ」

「そ、即答!? あなたにも善意の心はありますでしょう! いたいけな美少女を見捨てて良心は痛まないんですか!」

「ああ、一欠片も痛まん」

「こ、これも即答! そ、それならた、助けてくれるなら……そ、その貴方のお願いを、な、何でも一つ「結構だ」——せめて最後まで言わせてくださいよッ!!」

頬を染めて上目遣いで迫るウサミミ少女。あざとい、実にあざとい仕草だ。涙とか鼻水とかで汚れてなければ、さぞ魅力的だっただろう。実際に、近くで見れば汚れてはいるものの自分で美少女と言うだけあって、かなり整った容姿をしているようだ。白髪——というよりも水色に近い髪を持った碧眼の美少女である。並みの男なら、例え汚れていても堕ちたかもしれない——

——が、その程度の美少女ならば数人不本意なことに現在進行形で知り合いであり、その少女達のスキンシップを受けてなお無表情でいるこの朴念仁に通じるはずがない。どこまでも日色の在り方は冷め切っている。社畜道を舐めてはいけないのである。

「ひ、酷いっ! 酷すぎます!! あんまりです! 断固抗議しまッ「グウガアアア!」——ヒィー! お助けえ〜!」

日色の辛辣な言葉に反論しようと声を張り上げた瞬間、ためえら無視してんじやねえ! とでも言うようにテイラノが咆哮を上げて突進しようと身をたわめた。……か

まっつてちゃんなのだろうか。

ウサミミ少女は情けない悲鳴を上げて必死に日色の背後に隠れようとし、一応殺さなように手加減はされているだろうがハジメの蹴りを受け、頬に靴跡を刻まれながら「絶対に離しませえ〜ん！」と死に物狂いですがみつき引き離せない。

そんな様子を見てコケにされていると感じたのか、より一層怒りを宿した眼光でハジメ達を睨み、遂にテイラノが突進を開始した。

そんな様子を見てコケにされていると感じたのか、より一層怒りを宿した眼光でハジメ達を睨み、遂にテイラノが突進を開始するために一步踏み出し――

――瞬間、いつ現れたのか頭上から現れた蒼影剣に頭蓋を貫かれ一瞬、ビクンと痙攣した後、前倒れに倒れ伏し絶命した。

ウサミミ少女と会話している間に日色がこっさり糸を双頭テイラノの周りに張り巡らし、一步踏み出しただけで頭上から蒼影剣が襲いかかるように罫を作っていたのである。

その振動と音にウサミミ少女が思わず「へっ?」と間拔けな声を出し、おそろおそろ日色の脇の下から顔を出してテイラノの末路を確認する。

「し、死んでます…:そんなダイヘドアが一撃なんて…」

ウサミミ少女は驚愕も表に目を見開いている。どうやらあの双頭テイラノは「ダイヘ



ドア」というらしい。

呆然としたままダイヘドアの死骸を見つめ硬直しているウサミミ少女だが、未だ日色にしがみついたままである。流星に鬱陶しくなってきたのでウサミミ少女の脳天にデコピンを叩き込んだ。

「へふう!!」

ズドンツツ!!?!という衝撃とともに呻き声を上げ、「頭があゝ、頭があゝ」と叫びながら両手で頭を抱えて地面をのたうち回るウサミミ少女。その隙に日色はシユタイフを発進させようとしたのだがウサミミ少女は物凄い勢いで跳ね起きて、「逃がすかあゝ!」と再び日色の腰に抱きつこうとして——これ以上汚い顔で服を汚されてたまあるかとサツ、とシユタイフに乗った状態で予備動作なく軽く跳躍した日色に避けられ、再び地面にダイブすることになった。

しかしすぐさま立ち上がると顔に涙や汗のせいで土や砂や石が付いた状態で足にしがみつかれてしまった。なかなかの打たれ強さである。

「先程は助けて頂きありがとうございました! 私は兎人族ハウリアの一人、シアといえますです! 取り敢えず私の仲間も助けてください!」

しかも随分図太かった。

日色は瞬く間に再度出会ってしまった災難に、めんどくさそうにため息をつくのだつ

た。

## シアの事情と帝国兵

「私の家族も助けて下さい！」

峡谷にウサミミ少女改めシア・ハウリアの声が響く。どうやら、このウサギ一人ではないらしい。仲間も同じ様な窮地にあるようだ。よほど必死なのか、先程から相当強くハジメに蹴りを食らっているのだが、頬に靴をめり込ませながらも離す気配がない。

それを理解したのか日色は仕方がないとも言おうように――

――シアに文字魔法『衝』の文字を飛ばし、吹き飛ばした。

「ギャフンっ!？」

突然の衝撃がシアの腹部を襲い、間拔けな悲鳴を上げながら強制的に日色から手を離させる。スライディングするが如く地面を滑り、ようやく止まったかと思うとピクツピクツとあまりの衝撃のせいかわ若干痙攣している。

「断る、わざわざ助ける必要のないお前を助けてやったんだぞ？これ以上面倒事に関わりたくないんでな。ハジメ、金ロリ、行くぞ」

「ええ」

「ん……」

『今気づいたけど、そういえばコイツバグうさぎじゃんツ！ヤバイって、関わったらダメだって!!星にされちやうって!』

そんな淡々と言葉を零した日色は内心そんな言葉を零しながら再びバイクに魔力を注ぎ込み発進させようとした。

しかし……

「に、にがじませんよ〜」

「……………」

ゾンビの如く起き上がり再度日色の脚にしがみつくシア。流石の日色もこれには無視できなくなってきたのか僅かに眉を上げ、無表情で何かを観察するかのようシアを見る。

「……………お前、気持ち悪いな」

「——ゾンビみたいね」

「……………不気味」

「うう〜何ですか! その物言いは! さつきから、デコピンとか足蹴とか、ちよつと酷すぎると思います! 断固抗議しますよ! お詫びに家族を助けて下さい!」

ぶんすかと怒りながら、さらりと要求を突きつけるシア。案外余裕そうである。ここまで来ると流石に頑丈の一言では説明できないだろう。懇願しながらも「ここで間違え

たら未来が変わつちやいますう」と小さく涙声で呟いているところも怪しい。

「チツ………面倒くさい奴だな。取り敢えず話聞いてやるから離せ」

「ほ、本当ですか!？」

話を聞いてやると言われペアアと笑顔になったシアは、これまたさり気なく日色のローブで拭こうとしたのでデコピンを叩き込んだ後、一瞬にして念糸で編んだタオルを被せてやる。

シアは「はぎゅん!」と額に襲い掛かる痛みに悶え、タオルで顔を拭きながら文句を言い始めた。

「ま、またやりましたね! 父様にもされたことないのに! よく私のような美少女を、そうポンポンと……もしや殿方同士の恋愛にご興味が……だから先も私の誘惑をあっさり拒否したんですね! そうでツ——ああ! 待つてくださいいっ! 冗談です! 冗談ですから行かないでくださいいっ!」

なにやら不穏当な発言が聞こえたので日色はそのまま発進しようとしたのだが再びシアに涙たらたらでしがみつかれてしまった。

「……ハア、どうしてお前はそのネタを知っているんだ?……まあいい、誘惑だかなんだか知らんが誘いに乗らないのはお前の性格があまりにも残念すぎるからだ」

「それに、容姿だってアイツ等の方も引けをとっていないしな」と言いながら日色はチラ

リとハジメとユエを見る。

ユエは日色の言葉に赤く染まった頬を両手で挟み、体をくねらせてイヤンイヤンし、ハジメは頬を赤らめ恥ずかしながらも日色に笑顔を向けている。

ユエの腰辺りまで伸びたゆるふわの金髪が太陽の光に反射してキラキラと輝き、ビスクドールの様に整った容姿が今は照れでほんのり赤く染まっていて、見る者を例外なく虜にする魅力を放っている。

格好も、日色達と出会ったばかりの頃の様なみすぼらしい物ではない。前面にフリルのあしらわれた純白のドレスシャツに、これまたフリル付きの黒色ミニスカート、その上から純白に青のラインが入ったロングコートを羽織っている。足元はショートブーツにニーソだ。

対してハジメの艶やかでありながらもなめらかな銀髪は鏡のように太陽の光を照り返し、辺りを煌めかせる。ユエとはまた別の空想のキャラクターが現実に現れたかのような整った容姿がほんのり赤く染まり、正しく女神と言わせる如きの魅力を放っている。

格好も、奈落に落ちた時とは違い幾重にも鎖に似ている黒い紋様が奔る白を基調とした衣服に下は黒いショートパンツ。その上から藍色に近い黒を基調としたロングコートを纏っている。しかも左袖の部分から肩口あたりまで吸着性のある魔物の皮が使わ

れており、いつでも着脱可能だ。戦闘時には義手を露出することも可能な力作である。

足元はニーソと紅と黒を基調とした蹴り技などで使うギミックをつけたアーティファクトであるロングブーツである。

ハジメの服もユエの服もオスカーの服を魔物の素材に合わせて、日色とユエが仕立て直した逸品である。高い耐久力を有する防具としてもとても役に立つ衣服なのだ。

ちなみに日色の服装は黒を基調とした衣服に下は青いラインの入った黒いズボンにハジメと色違いのブーツを履き、その上から金色の刺繍が施されている衣服をスッポリと覆うような赤色のローブを被っている。

そんな二人の可憐な少女達の姿を見て、さすがのシアも「うっ」と僅かに怯む。とは言ってもシアも少し青みがかかったロングストレートの白髪に、蒼穹の瞳。眉やまつ毛まで白く、肌の白さとも相まって黙っていれば神秘的な容姿を持っているため決して二人に負けず劣らずではないだろう。手足もスラリと長く、ウサミミやウサ尻尾がふりふりと揺れる様は何とも愛らしい。ケモナー達が見れば感動して思わず滂沱の涙を流すに違いない。

しかも、シアは大変な巨乳の持ち主だった。ハジメよりも大きいそれはボロボロの布切れのような物を纏っているだけなので固定すらされず殊更強調されてしまっている。彼女が動くたびにぶるんぶるんと揺れ、激しく自己を主張している。

要は、彼女が自分の容姿やスタイルに自信を持っていても何らおかしくないのである。ただ、相手が悪かった。相手はこれほどの抜群のスタイルを持つ二人に強烈なスキャンシップをされても眉をひそめる程度で済ますあの神代日色なのだから。

ああ、だからだろうか？ 矜持を傷つけられたシアは遂に言つてはならない言葉を言つてしまったのである。

「で、でも！ 胸なら私が勝つてます！ そつちの女の子はペツタンコじゃないですか！」

——ペツタンコじゃないですか

——ペツタンコじゃないですか

——ペツタンコじゃないですか

ユエへと指を指し、峡谷に命知らずなウサミミ少女の叫びが木霊する。恥ずかしげに身をくねらせていたユエがピタリと止まり、前髪で表情を隠したままユラリとシユタイフのサイドカーから降りた。

そう、シアは言つてしまったのである。最近ではハジメと比べて自分が着痩せするタイプである事実を気にしていたユエへと。

日色がハア、とため息を吐き、ハジメが「あくあ」と天を仰ぎ、無言で合掌する。



小便は済ませたか？

神様にお祈りは？

部屋のスミでガタガタ震えて

命ごいをする心の準備はOK？

一歩一歩歩くたびに圧力が増していくユエに、流石にまずいと思ったのかシアは周りに助けを求めようとするがハジメが合掌しているし、日色は既に興味がなくなっているのかオスカアの住処から持ってきた本を読んでいる。

「……………」

「あ、あのー、…………謝ったら許してくれたら」

【嵐帝】

アツーーーーー!!

大峽谷に哀れな犠牲者の悲鳴が響き渡り、きっかり十秒後、グシャ!という音と共に日色達の眼前に墜落した。

ユエは「いい仕事した!」と言う様に、掻いてもいない汗を拭うフリをするとトコトコと日色の下へ戻り、シユタイプに腰掛け、本を読む日色に下からジツと見上げた。

「…………おつきい方が好き?」

その言葉に日色は一瞬も躊躇せずこう一言。  
「それよりも本だ」

知ってた。



「え……それじゃあ、皆さんも魔力を直接操れたり、固有魔法が使えると……」

「まあ、な」

「ええ」

「……ん」

現在、日色達はシアをシユタイフのサイドカーに、ユエを日色の前に乗せて悪路をものともせず「ライセン大峽谷」を爆走していた。

最初は谷底では有り得ない速度に目を瞑っていたシアも暫くして慣れてきたのか、次第に興奮して来たようだ。日色がカーブを曲がったり、大きめの岩を避けたりする度にきやつきやつと騒いでいる。

何故、日色達がシアを連れて峽谷を爆走しているのか？

それは数分前に遡る。

数分前、シアは己の自己紹介を行った後、日色達の意味を無視して助けを求めた理由を説明した。

兎人族ハウリアの長の娘シア・ハウリアを含めハウリアと名乗る兎人族達は「ハルツィナ樹海」にて数百人規模の集落を作りひっそりと暮らしていた。兎人族は、聴覚や隠密行動に優れているものの、他の亜人族に比べればスペックは低いらしく、突出したものが無いので亜人族の中でも格下と見られる傾向が強いらしい。性格は総じて濃厚で争いを嫌い、一つの集落全体を家族として扱う仲間同士の絆が深い種族だ。また、総じて容姿に優れており、エルフのような美しさとは異なつた、可愛らしさがあるので、帝国などに捕まり奴隷にされたときは愛玩用として人気の商品となる。

そんな兎人族の一つ、ハウリア族に、ある日異常な女の子が生まれた。

兎人族は基本的に濃紺の髪をしているのだが、その子の髪は青みがかつた白髪だったのである。彼女は亜人族には無いはずの魔力まで有しており、直接魔力を操る術と、とある固有魔法まで使えたのだ。

それがシアが言っていた『やつと見つけた』という言葉に関係するものである。

その固有魔法は「未来視」、その能力は任意で発動する場合仮定した選択の結果としての未来が見えるというものだ。しかし、当然のように対価は存在し一回の使用で枯渇し

てしまうほどの莫大な魔力を消費してしまうのである。また、自動で発動する場合もあり、これは直接・間接を問わず、シアにとつて危険と思える状況が急迫している場合に発動する。これも多大な魔力を消費するが、任意発動程ではなく三分の一程消費するらしい。

話を戻そう、そんな魔力を操作する力を持った少女に対し一族は大いに困惑した。当然だ、兎人族として、いや、亜人族として有り得ない子が生まれたのだ。魔物と同様の力を持っているなど、普通なら迫害の対象となるだろう。しかし、彼女が生まれたのは亜人族一、家族の情が深い種族である兎人族だ。百数十人全員を一つの家族と称する種族なのだ。ハウリア族は女の子を見捨てるという選択肢を持たなかった。

しかし、樹海深部に存在する亜人族の国「フェアベルゲン」に女の子の存在がばれれば間違いなく処刑される。魔物とはそれだけ忌み嫌われており、不倶戴天の敵なのである。国の規律にも魔物を見つけ次第、できる限り殲滅しなければならぬと有り、過去にわざと魔物を逃がした人物が追放処分を受けたという記録もある。

また、被差別種族ということもあり、魔法を振りかざして自分達亜人族を迫害する人間族や魔人族に対してもいい感情など持っていない。樹海に侵入した魔力を持つ他種族は、総じて即殺が暗黙の了解となっているほどだ。

故に、ハウリア族は女の子を隠し、十六年もの間ひっそりと育ててきた。だが、先日

とうとう彼女の存在がばれてしまった。その為、ハウリア族はフェアベルゲンに捕まる前に一族ごと樹海を出たのだ。……ちなみに「未来視」を持つていながらもなぜバレてしまったのか疑問に思ったハジメが質問すると友人の恋路が気になり使ってしまったことでバレてしまったというなんとも悲しい理由だった。三人の目が冷めたのは言うまでもない。

行く宛もない彼等は、一先ず北の山脈地帯を目指すことにした。山の幸があれば生きていけるかもしれないと考えたからだ。未開地ではあるが、帝国や奴隷商に捕まり奴隷に墮とされてしまうよりはマシだ。

しかし、彼等の試みは、その帝国により潰えた。樹海を出て直ぐに運悪く帝国兵に見つかってしまったのだ。巡回中だったのか訓練だったのかは分からないが、一個中隊規模と出くわしたハウリア族は南に逃げるしかなかった。

女子供を逃がすため男達が追っ手の妨害を試みるが、元々温厚で平和的な兎人族と魔法を使える訓練された帝国兵では比べるまでもない歴然とした戦力差が存在し、どうか「ライセン大峡谷」に逃げ込めたものの全員が捕らえられてしまうのは時間の問題だった。

そんな危機的な状況にまるで天啓であるかのようにシアの「未来視」が発動し、一つの未来を映したのだ。そう、自分達を助け出してくれる日色達の姿が。

それを見た途端、シアの行動は速かった。魔力が回復するたびに「未来視」を使用し、日色達に出会える場所を探し一人で探しに行ったのである。

そうして魔物に何度も追われ、命からがら日色達と出会い現在に至っているらしい。だからこそ、自分の家族を助けて欲しいとシアは説明した。

その言葉に日色の返答はこう一言。

「断る」

「」

知ってた。

が、結論を言えばシアの頼みを受けることとなった。

面倒事（というか死亡フラグ）に巻き込まれないように日色は断つたのだが、ユエが「…樹海の案内に丁度いい」とシアに賛成の意を示してしまい、ハジメも「日色がいいなら構わない」と言ってしまったので結局は樹海に行かないといけないし……となったので樹海の案内を代価にシアの頼みを引き受けることとなったのだ……ちなみにユエがシアに賛成の意を示した時に再び『ペッターンコ』の言葉を言ってしまったのでピンタを食らったというのは余談である。

(とはいっても……)

と、日色はどうしてこうなったと心の中で嘆きながらも思考を切り替えるように思案する。

シアの聞いた話を日色の知っているもはや臚げな原作知識と対照させてもおそらくは相違点はないだろう、確か原作では既に傭人族は半分程度捕らえられていたような気がするが気のせいかと思い、思考を打ち切る。

ただ、日色が気になったのはどうして傭人族はシアを忌み子として樹海から追い出したのか？ということだ。

シアは魔物と同じく魔力を操作することができるので傭人族にとって不倶戴天の敵として忌み嫌われていると言っていたが、それ自体おかしい。

そもそも傭人族が虐げられている理由は人族の場合は、聖教教会が魔力を持たぬ種族は神に愛されていない故に魔法が使えない種族である傭人族は神から見放された悪しき種族と主張されているからだ。

逆に言えばシアという存在が生まれてしまえば正教教会の虐げる言い訳は使えなくなる。むしろ、手厚く保護され今の現状を変えることが可能なのだ。

その前例が海人族だ。

海人族は、傭人族としてはかなり特殊な地位にある種族である。西大陸の果、〔グ

リューエン大砂漠」を超えた先の海、その沖合にある「海上の町エリセン」で生活しているのだが、彼等は、その種族の特性を生かして大陸に出回る海産物の八割を採って送り出しているのだ。そのため、なんとも現金な話だが亜人族でありながらハイリヒ王国から公に保護されている種族なのである。

もちろん、普通に教会に訴えたところでもみ消されて秘密裏に暗殺されるのがオチだろうがシアの固有魔法は未来視、多くの運命を予言し続けて民衆を味方に付けるなんて簡単だろう。使い勝手は悪いが予知を続け、その未来を亜人族に伝え続ければいずれば噂になり、最終的には民衆を仲間にすることができるともいえる。民衆を味方に付けた後異端とすれば多くの反感を買うのは当然だ。

ましてや同じ亜人族同士のくせに忌み子として虐げるのなど日色からすれば論外である。普通に考えればむしろ好意的に接し、出来るだけ距離を縮めようとするだろう。

何故ならばシアはこんな家族のために命を顧みず一人で助けを呼びに行こうとするほどのお人好しな性格だ。これが演技ならば驚きだがおそらくそれはないだろう、何よりそんな軽い演技で日色やハジメが誤魔化せられるわけがない。

シアと距離を縮めれば、人族からの迫害もなくなる可能性も生まれ、仮に命の危険にさらされようとも魔力操作を使えるシアが助けてくれるだろう。

だからこそ、日色にはシアを差別した理由が理解できない。虐げることで何のメリッ



トがあるのか疑問符を上げるばかりである。

そう思っていると横のサイドカーで何故か顔を填めて泣きべそをかいていた。

「……いきなりどうした？情緒不安定なのか？」

「壊れたんじゃないの？」

「ん、……手遅れ」

「手遅れって何ですか！それに壊れてません！

私は至って正常です！……ただ、一人じゃなかつたんだなつと思つたら……何だか

嬉しくなつてしまつて……」

「……………」

どうやらシアは魔物と同じ性質や能力を有するという事、この世界で自分があまりに特異な存在である事に孤独を感じていたようだ。家族だと言つて十六年もの間危険を背負つてくれた一族、シアのために故郷である樹海までも捨てて共にいてくれる家族、きつと多くの愛情を感じていたはずだ。それでも、いやそれ故に、『他とは異なる自分に余計孤独を感じていたのかもしれない。』

おそらくユエがシアを助けようとしたのもユエは意識的か無意識的に自分とシアの境遇を重ねているからなのだろう。共に、魔力の直接操作や固有魔法という異質な力を持ち、その時代において『同胞』というべき存在は居なかつた。故にユエはシアを助け

ようとしたのだろう。

日色は何も言わない。何も行動に起こさない。

何故なら彼女達の辛さを自分は体感していないから。

生半可な慰めや行動は今の彼女達にとって失礼だから。

一見血も涙もないように見えるがこれも彼なりの不器用な優しさだった。

ちなみにハジメからすれば「あつそ」と言えるレベルで興味がないことだった為話を聞いていなかったのは余談である。

暫く走り続けていると突然サイドカーから此方に顔を向けたシアが不安そうに話しかけてきた。

「そ、そういえばあの……日色さんは私達の家族を守ってくれるん……ですよね」

「ああ、それが依頼内容だからな。それがどうした？」

「そ、その……もし、帝国兵と出会ったら……日色さん……どうするのですか？」

「……………何が言いたい？」

質問の意図がわからず聞き返す日色に意を決したようにシアが尋ねる。その瞳は揺れていて真実を答えて欲しいという気持ちが目も伝わってくる。

「今まで倒した魔物と違って、相手は帝国兵……人間族です。日色さんと同じ。……敵対できますか？」

「……………未来を見たのか？」

「はい……………帝国兵と相對する日色さん達の姿を……………」

「だったら何故聞く？何の疑問もないはずだ」

「疑問というより確認です。帝国兵から私達を守るということは、人間族と敵対することと言つても過言じゃありません。同族と敵対しても本当にいいのかと……………」

その言葉に辺りの空気が空気が少し重くなつたように感じた。おそらく、シアは不安なのだろう。未来を見たとしても目の前の日色達が本当に守つてくるのか？と本当に彼らを巻き込ませていいのか？という二つの矛盾する不安を抱えているのだ。前者はまだしも後者を気にするということはきつと彼女は余程のお人好しなのだろう。

しかし、日色はその不安をあつさりとは拭き去るようになつて言った。

「それがどうかしたのか？」

「えっ？」

疑問顔を浮かべるシアに日色は心底興味がないように言葉を告げる。

「人間族と敵対することが何か問題なのか？」

「え？だ、だつて同族じゃないですか……………」

「お前だつて同族に追い出されてるだろうが」

「それは、まあ、そうなんです……………」

「ハア……俺達はお前が樹海探索に詳しいというからそれを対価に樹海までの護衛という依頼を受けたただけだ。護衛はあくまで樹海までだそこから先は知らん。忘れたわけじゃないだろう?」

「うつ、はい……覚えてます……」

「だから樹海案内の仕事が終わるまでは守る、それが仕事だ。人間族だろうが亜人族だろうが知ったことか。依頼は果たす、それだけだ」

「な、なるほど……」

淡々という日色の言葉にシアはほぼ無意識に首を縦に振りながら納得するシア。あまりにもあつさりと言ってしまうので反応に困りシアには頷くことしか出来なかった。

すると日色とハジメの感知系の技能に幾つもの反応と同時に悲鳴や高揚した叫び声  
が聞こえてきた。

「——ツ!日色さん!もう直ぐ皆がいる場所です!それにこの声……人間族、おそろく帝国兵です!!」

「くくっ!わざわざ大声で怒鳴らなくても聞こえているツ!近道するから全員振り落とされるなよ!!」

日色はシュタイフに更に魔力を注ぎ、さらに速度を加速させる。壁や地面をが物凄い勢いで後ろへ流れていく。

多大な魔力供給によりシユタイフが蒼い燐光を放ちながら走ることに30秒ほど。

最後の大岩を迂回するのではなく直進し、シユタイフの錬成機構により瞬く間にジャンプ台に変形させスピードを一切減速させないままシユタイフは空を駆ける。

そして、大岩の先に今まさに捕らわれようとしている兎人族と帝国兵達の間ギャリツ！ギャリツ！と地面を削りながら着地した。

兎人族たちを捕らえるのを敢えて楽しむように追っていた帝国兵が操る馬は突如落下してきたシユタイフに驚き、立ち上がったせいで背中に乗っていた帝国兵達が落ちてしまう。

「う、ぐ……なんだあ……」

「……おい、さっさと家族の下に行つて来い」

「ああん!?何だてめえ!」

後頭部や尻をさすりながら起き上がった帝国兵達は偉そうな言葉に叫ぶ声を日色は無視して、シアへと視線を向け帝国兵と同じく突然の出来事に困惑している兎人族達への説明をして来いと日色はシアに指示し、シアは「は、はい!」と頷き、謎の男女と共に現れた愛しの娘の姿を見て「シア!無事だったのか!」と名を叫んでいる家族の元へと走っていった。

それを横目に日色はカーキ色の軍服らしき衣服を纏った30人程の帝国兵達へと

淡々と告げる。

「此奴等は貰つていく、異論は認めないからさつきと失せろ」

「……………は？何だよお前。人間だろ？なんで人間が兎人族と一緒にいるんだ？しかも峡谷から。ああ、もしかして奴隷商か？情報掴んで追っかけたとか？そいつあまた商売魂がたくましいねえ。まあ、いいや。そいつら皆、国で引き取るから置いていけ」

勝手に推測し、勝手に結論づけた小隊長は、さも自分の言う事を聞いて当たり前、断られることなど有り得ないと信じきった様子で、そう日色に命令した。おそらく背後にいるハジメとユエはお金で傍に侍らしていると思われたらしく、奴隷商人という単語に兎人族達がビクツツと震えた。

「断る」

当然、日色が従うはずがない。

「……………今、何て言いつた？」

「——なんだ？言葉の意味が理解できないほど脳が退化した馬鹿なのか？こいつらは今は俺のものだ、あんたらには一人として渡すつもりはない。諦めてさつきと国に帰るんだな」

ほかんとした小隊長らしき帝国兵の男は聞き間違いかと問い返し、返つて来たのは不遜な物言い。小隊長の額に青筋が浮かぶ。

「……小僧、口の利き方には気をつける。俺達が誰かわからないほど頭が悪いのか？」  
「——なんだ？もしかして理解していることがわからないほど馬鹿だったのか？それはすまなかつたな、失礼なことをした。なら今から理解が出来ないお前に理解できるように懇切丁寧に説明してやろう」

その言葉を日色が零した瞬間、青筋を浮かばせ怒りを漲らせた瞳で日色を睨んでいた表情がスッと無表情へと変化する小隊長。周囲の兵士達も剣呑な雰囲気で日色を睨んでいる。

そして、視線はユエとハジメへと移り、二人のえもいわれぬ魅力を放っている美貌に一瞬呆けるものの、よほど近い存在なのだろうと当たりをつけ、再び下碑た笑みを浮かべた。

「ああなるほど、よおくわかった。てめえが唯の世間知らず糞ガキだつてことがな。ちよいと世の中の厳しさつてヤツを教えてやる。くつくつく、そっちの嬢ちゃん達はえらい別嬪じゃねえか。てめえの四肢を切り落とした後、目の前で犯して、奴隷商に売っぱらつてやるよ」

その言葉に日色は僅かに眉をぴくりと動かし、ユエは無表情でありながら誰でも分かるほど嫌悪感を丸出しにして、目を細めたハジメの瞳には既に彼らの姿は映っていない。

もはや。目の前の男が存在すること自体が許せないと言わんばかり、ユエが右手を掲げようとし、ハジメはホルスターへと手を触れた。

だが、日色は彼女達を制止し、小隊長の男へとため息を吐いて問いかける。

「——ハア、敵ということでもいいんだな？」

そんな日色の言葉に想像した通りにハジメが怯えないことに苛立ちを表にした小隊長が恫喝の言葉を叫び——

「ああ!?! まだ状況が理解できてねえのか! てめえは、震えながら許しをこつ——  
——あ?！」

——瞬間、怒鳴るように恫喝の言葉を叫ぶ小隊長の言葉が止まった。

そう、止められたのだ。いつの間にか口から脳へかけて突き刺さった刀、「刺刀・ツラヌキ」によって。

己の身に何が起こったか一切理解が及ばぬまま小隊長の男は数瞬、全身が脱力し日色が抵抗なく刀を抜くと共に後ろに倒れ、死後硬直による痙攣を起こした。

何が起きたのかも分からず、呆然と倒れた小隊長を見ることしかできない兵士達を睥睨しながら日色はツラヌキを振るい血を刀身から飛ばした後、カシヤンと鞆に収める。

「しよ、小隊長!?! 貴様——」

どうにか現実をいち早く理解したのか副長らしき男が怒声を叫びながら己の獲物を



抜こうと劍の柄に触れ――

――瞬間、七つの蒼き閃光が空中を翔ける。

七つの閃光は副長を含めた七人の帝国兵の頭を同時に胴体から分離させ、一瞬遅れて血飛沫の華を咲かせた。

――我流刀術【七閃】

それは某墮天使エロメイドが使う相手の意表をついて攻撃する刀術だ。鞘内に収めた刀身に日色の【念糸】を巻きつけ外へと伸ばすことで僅かな鞘を動かす動作で七つの斬撃を同時に放つ技である。日色の化け物じみた身体能力で動かされた【念糸】は瞬間に対象を物言わぬ肉片へと変えるだろう。

突然、小隊長を含め仲間の頭部が裂け飛ぶという異常事態に兵士達が半ばパニックになりながらも、武器を日色達に向ける。過程はわからなくても原因はわかっているが故の、中々に迅速な行動だ。人格面は褒められたものではないが、流星は帝国兵。実力は本物らしい。

「奴を殺せ！」

「詠唱を始めろっ！」

「……………」

早速、帝国兵の前衛が飛び出し、後衛が詠唱を開始する。だが、そのような行動も全

て日色の前では全くの無駄と化す。

——念系派生技能【瞬間構築】『蒼影剣』

——我流刀術【七閃】

空を翔ける蒼影剣が後衛の帝国兵達を無残に切り裂き、一瞬で絶命させ、帝国兵の前衛は同時に【七閃】によって胴体が斜めに両断される。もはや戦闘時間など5秒も必要ない、文字道理三十人ほどいた帝国兵は日色に秒殺された。

あまりにもあつげなく、ほんの一瞬で仲間が殲滅されたことで仲間の血飛沫を浴び力を失ったように、その場にへたり込んだ最後の生き残りの一人は悪い夢でも見ているのでは？と呆然としながら視線を彷徨させた。

無理もない。彼等は決して弱い部隊ではない。むしろ、帝国の中では上位に勘定しても文句が出ないくらいには精鋭だ。

そんな中、これほどの惨状を作り出した者が返り血を浴びることはなく柄から手を離してゆつくりと兵士に歩み寄る。赤いローブを靡かせて此方へと歩いてくる姿はもはや死神としか言い様がない。

「ひい、く、来るなあーい、嫌だ。し、死にたくない。だ、誰か！助けてくれ！」

命乞いをしながら這いずるように後退る兵士。その顔は恐怖に歪み、股間からは液体が漏れてしまっている。しかし兵士の声に応じるものはどこにもいない、なぜなら既に

ただ一つの例外もなくその兵士以外は絶命しているからだ。それを理解したと同時に兵士の首元にツラヌキが添えられた。

再び、ビクツと体を震わせた兵士は、醜く歪んだ顔で再び命乞いを始めた。

「た、頼む！殺さないでくれ！な、何でもするから！頼む！」

「……この兎人族達はこれで全部か？」

「質問に答えろ」

「……………」、答えたら殺さないか？」

「——今すぐ死ぬか？」

「ま、待つてくれ！ 話す！ 話すから！ ……多分、全部移送済みだと思う。人数は

絞ったから……」

『人数を絞った』それは、つまり老人など売れそうにない兎人族は殺したということだろう。兵士の言葉に、悲痛な表情を浮かべる兎人族達。

その言葉に日色は小さく舌打ちすると、もう用済みとばかりに深淵のような冷たい瞳がさらに冷たい絶対零度へと変わる。そう瞳に殺意を宿したのだ。

「待て！待つてくれ！他にも何でも話すから！帝国のでも何でも！だから！」

日色の殺意に気づいたのか兵士が再び必死に命乞いする。しかしその返答を無視するかのよう日色は柄を握り——

——ドパンツと一発の銃弾が最後の生き残りの頭を吹き飛ばした。

ドサリと脱力するように仰向けに倒れる首から上がない兵士を横目に日色は背後の少女——右手のドンナーから硝煙を昇らせながら此方を見やるハジメへと視線を見やる。

「……ハジメ、何故撃った」

「——ドンナーの威力検査、どっちにしても殺すんだから別に構わないよね？」

「……………チツ、まあいい」

淡々と答えるハジメは何かを諦めたように小さく舌打ちを行った後、兎人族達の方を見ると兎人族達はあまりにも容赦がない日色とハジメに完全に引いているようでその瞳には若干の恐怖が宿っていた。それはシアも同じだったのか、おずおずと日色に尋ねてきた。

「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは……」

その言葉に何の感情も浮かんでいない無表情で冷たい視線を向ける日色に「うつ」と唸るシア。自分達の同胞を殺し、奴隷にしようとした相手にも慈悲を持つようで、兎人族とはとことん温厚というか平和主義らしい。日色からすれば目撃者を残してしまえば自分達や兎人族の情報が帝国に知られるのを避けるために助ける気は元からなかったので文字通り何言ってんだお前？といった感じだ。

日色は口を開こうとしたがその機先を制するようにユエが反論した。

「……一度、剣を抜いた者が、結果、相手の方が強かったからと言って見逃してもらおうなんて都合が良すぎ」

「そ、それは……」

「そもそも守られているだけのあなた達がそんな目を向けること自体お門違いよ」

「……」

ハジメとユエが兎人族達を不機嫌そうに睨む。守られておきながら、日色に向ける視線に負の感情を宿すなど許さないと言わんばかりである。当然といえば当然なので、兎人族達もバツ悪そうな表情をしている。

それを代表するかのようにはシアのお父さんらしい濃紺の短髪にウサミミを生やした初老の男性が代表するかのように出て謝罪をした。

「日色殿で宜しいか？私はカム・ハウリア。シアの父であり、ハウリアの族長をしております。この度はシアのみならず我が一族の窮地を救っていただき、脱出までご助力くださるといふのにこの仕打ち、大変申し訳ない。別に、貴方に含むところがあるわけではないのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらんので……少々、驚いただけなのです」

その言葉に日色は気にしてないという様に手をヒラヒラと振るい、「気にするな、ただ

し代わりに樹海の案内を忘れるなよ」と呟いてハジメとユエを連れて無傷の馬車や馬のところへ行き、兎人族達を手招きする。樹海まで徒歩で半日くらいかかりそうなので、せつかくの馬と馬車を有効活用しようというわけだ。

シユタイプを馬車に連結させ、馬に乗る者と分けて一行は樹海へと進路をとることにした。

「……ハジメ、どうして最後撃つたの？」

「何？」

無残な帝国兵の死体を風の魔法で吹き飛ばして処理をしながらユエがシユタイプの連結部位に万が一の事故が起こらないように点検を行っているハジメへと声をかけた。

ユエが言っているのは帝国兵との戦いのことだ。あの時、日色が一人で戦っていたが途中までハジメは静かに見守っていたのにどうして最後の生き残りの兵士を撃つたのかユエは気になったのだ。

何故ならあの時ハジメはドンナーの威力検査などと言ったが本当にドンナーの威力を試すのならわざわざ頭を狙う必要はないむしろ鎧部分を狙うべきだろう。

だからこそユエは聞いているのだ、どうして撃つたのか？と

「ああ、アレ？日色の考えがわかったから……かな」

「日色の考え？」

作業を続けながら返すハジメの返答にユエは疑問符を上げた。

そんなユエを見ずに作業を続けながらハジメは言葉が続ける。

「……………多分日色は、私達に殺しをして欲しくなかったと思う」

「……………殺し？」

「……………ええ」

ハジメは作業を一旦止め、顔を上げた視界の先にいる兎人族へと指示を行っている日色へと目を向ける。さつき初めて魔物ではなく人を殺したというのに日色の表情には無理をしているようには感じられずいつものような無表情であり続けている、だがハジメにはさつきまでの違いに気づいていた。

日色の手——いや、正確には右手が極僅かに震えていたのだ、その震えは決して止まることがなく震え続けている。

ハジメの推測では、日色はハジメ達に殺人をさせたくなかったのだ。だからこそハジメやユエを制止し、己が一人で戦った。ハジメ達が殺人を行い、人を殺したことがトラウマにならないように。彼の優しさがそうさせたのだ。

だからこそハジメは最後の生き残りを自らの手で殺した、日色だけが殺し続けられないように。あの優しい日色が自分だけを責めないように。

現在のハジメには敵であれば容赦なく殺すという価値観が強固に染み付いているせ

いか、殺す前だろうと殺す後だろうと動揺するどころか何も感じなかった。いやもしかしたら、日色と出会った最初から他人を殺しても『何も感じなかった』のかもしれない。そう説明するとユエも日色を心配そうに見つめた、異世界は常に命と隣り合わせの世界だ。これからも生きるためには、地球に帰る方法を探すためには殺人はこれつきりにはならないだろう。

初めて行った殺人を日色はどう思っているのかとハジメとユエは心配するように思った。

『……………言えない、帝国兵たちの目が完全に野獣○輩の目だったからつい斬ってしまっただなんて言えない……………あれは正当防衛だよね!? 自分のケツを守るためにやったんだから正当防衛だよね!!?』というかなんで俺は野郎なのにケツを狙われてんの? ホモなの!? もしかして帝国はホモの国なの!!?』

そして何も知らず、勝手にケツが掘られる恐怖に怯えている馬鹿が一名。



## ハルツエナ樹海

炎が舞う。

浅黄色の髪を持った兔人族の少女が呆然と眺める光景は正しく地獄の世界だった。

樹海からまるで水が紙に染み渡るように炎が放射状に広がり、火の粉が暗がりの空を照らす中、悲鳴の声や高揚した野太い男達の声が聞こえてくる。

自分達の住処が炎によって音を立てて、炭化し瞬く間に崩れていく。

己が育った住処がこうも容易く壊れていくことに少女は瞳に涙を浮かべ呆然と眺め続ける。

「——ッ!!」

そして、何を思ったのか立ち上がり、未だ悲鳴が聞こえる炎が燃え盛る森の中へと己の体力など気にせず全速力で駆けていく。

少女は走る、燃え盛る故郷の森を。

涙を拭うこともなく、草木が炎に照らされた肌を切り裂き所々に切り傷をも気にすることなく。

走って、走って、走り続けて。

そして遂に、人族に襲われている己の家族を視認し――

「――ツ!!!」

――少女は、己の腕に嵌めてある腕輪を輝かせながら喉が張り裂けるような絶叫に近い声で何かを叫んだのだった。



七大迷宮の一つにして、深部に亜人族の国フェアベルゲンを抱える「ハルツィナ樹海」を目指して日色が運転するシュタイフとそれに牽引される大型馬車二台、そして数十頭の馬がかなり速いペースで平原を進んでいた。

シュタイフには日色の他に日色の腕にスッポリと収まるようにユエが前に座り、後ろにはシアが、そしてサイドカーにハジメが乗っている。当初、シアには馬車に乗るようになっていたのだが、断固として二輪に乗る旨を主張し言う事を聞かなかった。ハジメやユエが何度も蹴落としたのだがその度に「あゝ」とゾンビのように復活してくるので仕方なく乗ることを許可したのだ。ちなみにハジメがサイドカーなのは座る場所を公平にするためらしい。

「あの、あの！皆さんのこと、教えてくれませんか？」

そうして、暫く走り続けていると突然、シアがそのようなことを言い出した。そのような言葉に日色は疑問符を上げて安全運転のためにシアに視線を向けないまま聞き返した。

「？……俺達の話しただろう？」

「いえ、能力とかそういうことではなくて、なぜ、奈落？ という場所にいたのかとか、旅の目的って何なのかとか、今まで何をしていたのかとか、お三人自身のことを知りたいです」

「……聞いてどうするの？」

「どうするというわけではなく、ただ知りたいだけです。……私、この体質のせいで家族には沢山迷惑をかけました。小さい時はそれがすごく嫌で……もちろん、皆はそんな事ないって言うてくれましたし、今は、自分を嫌ってはいませんが……それでも、やつぱり、この世界のはみだし者のような気がして……だから、私、嬉しかったのです。皆さんに会って、私みたいな存在は他にもいるのだと知って、一人じゃない、はみだし者なんかじゃないって思えて……勝手ながら、そ、その、な、仲間みたいに思えて……だから、その、もっとお三人のことを知りたいといいますか……何といいますか……」

話の途中で恥ずかしくなってきたのか、シアは次第に小声になって日色の背に隠れる

ように身を縮こまらせた。出会った当初も、そう言えば随分嬉しそうにしていたと、三人は思い出し、シアの様子に何とも言えない表情をする。おそらく、シアは気になるのだろう。

この世界で、魔物と同じ体質を持った人など受け入れがたい存在であるシアにとって、自分と同じ体質を持つ同士、仲間意識を感じ、どう生きてきたのか知りたいのかもしれない。

その言葉に、日色を少し考えた後、樹海までまだ時間がかかるだろうなと判断すると同時にハジメへと視線を向ける。

「……ハジメ、話してやれ」

「——え、私が言うの？ まあ……いいけど」

ハジメは日色の言葉に僅かに眉をひそめるが暇つぶしにいいと思ってこれまでの経緯を語り始めた。

結果……

「うえ、ぐすつ……ひどい、ひどすぎますう、日色さんもハジメさんもユエさんもがわいぞうですう。そ、それ比べたら、私はなんでめぐまれて……うう、自分がなげけないですう」

何故か号泣した。

滂沱の涙を流しながら「私は、甘ちゃんですう」とか「もう、弱音は吐かないですう」と呟いている。そして、さり気なく、日色の外套で顔を拭こうとして手を叩かれている。どうやら、自分は大変な境遇だと思っていたら、三人が自分以上に大変な思いをしていることを知り、不幸顔していた自分が情けなくなったらしい。

暫くメソメソしていたシアだが、突如、決然とした表情でガバツと顔を上げると拳を握り元氣よく宣言した。

「皆さん！私、決めました！私、皆さんの旅に着いていきます！　これからは、このシア・ハウリアが陰に日向にお三人方を助けて差し上げます！　遠慮なんて必要ありませんよ。私達はたった四人の仲間。共に苦難を乗り越え、望みを果たしましょう！」

その言葉に三人の冷めた視線が送られる。

「現在進行形で守られている脆弱ウサギが何言ってるの？足手纏いでしょうに」

「……さり気なく『仲間みたい』から『仲間』に格上げしている……厚皮ウサギ」

「ありがた迷惑って言葉知ってるか、青リボン」

「予想以上に辛辣!？」

あまりにも悲しい答えにシアは涙した。



それから数時間して、遂に一行は「ハルツエナ樹海」と平原の境界に到着した。樹海

の外から見る限り、ただの鬱蒼とした森にしか見えないのだが、一度中に入ると直ぐさま霧に覆われるらしい。

「それでは、ハジメ殿、ユエ殿、そして日色殿。中に入ったら決して我らから離れないで下さい。お二人を中心にして進みますが、万一はぐれると厄介ですから。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのですな？」

「ええ、聞いた限りそこが本当の迷宮と関係してそうだから」

カムが、日色達に対して樹海での注意と行き先の確認をする。カムが言った【大樹】とは、【ハルツィナ樹海】の最深部にある巨大な一本樹木で、亜人達には『大樹ウー・アルト』と呼ばれており、神聖な場所として滅多に近づくものはいないらしい。峡谷脱出時にカムから聞いた話だ。

当初、ハジメは【ハルツィナ樹海】そのものが大迷宮かと思っていたのだが、よく考えれば、それなら奈落の底の魔物と同レベルの魔物が彷徨っている魔境ということになり、もしそうならばこの星は亜人族が支配していたはずだ。なので、【オルクス大迷宮】のように真の迷宮の入口が何処かにあるのだろうと推測し、カムから聞いた【大樹】が怪しいと踏んだのである。

カムは、ハジメの言葉に頷くと、周囲の亜人族に合図をして日色達の周りを固めた。

「日色殿、できる限り気配は消しもらえますかな。大樹は、神聖な場所とされております

から、あまり近づくものはおりませんが、特別禁止されているわけでもないのです、フェアベルゲンや、他の集落の者達と遭遇してしまうかもしれません。我々は、お尋ね者なので見つかるかと厄介です」

「ああ、承知している。俺達はある程度、隠密行動はできるから大丈夫だ」

そう言うと共にハジメと日色は【気配遮断】を使用し、ユエも、奈落で培った方法で気配を薄くした。

「ッ!? これは、また……日色殿、ハジメ殿、できればユエ殿くらいにしてもらえますかな?」

「ん?……こんな感じ?」

「はい、結構です。さっきのレベルで気配を殺されては、我々でも見失いかねませんからな。いや、全く、流石ですな!」

そう言うって感嘆の混じった言葉を零すカム。

元々、兎人族は全体的にスペックが低い分、聴覚による索敵や気配を断つ隠密行動に秀でている。地上にいながら、奈落で鍛えたユエと同レベルと言えば、その優秀さが分かるだろうか。それは正しく気配を絶つことに関しては達人級と言えるだろう。だが、日色とハジメが持っている【気配遮断】はさらにその上を行く。普通の場合なら、一度認識すればそうそう見失うことはないが、樹海の中では、兎人族の索敵能力を以てして

も見失いかねないハイレベルなものだった。日色に至っては嘗て幼少期に雫から気配を薄くする方法を併用しているので既に視界から消え失せてしまっているほどだ。

カムは、人間族でありながら自分達の唯一の強みを凌駕され、もはや苦笑いだ。隣では、何故かハジメとユエが自慢げに胸を張っている。シアは、どこか複雑そうだった。おそらく己と三人の実力差を改めて理解してしまったからだろう。

「それでは、行きましようか」

カムの号令と共に準備を整えた一行は、カムとシアを先頭に樹海へと踏み込んだ。

暫く、道ならぬ道突き進む。直ぐに濃い霧が発生し視界を塞いでくる。しかし、カムの足取りに迷いは全くなかった。現在位置も方角も完全に把握しているようだ。理由は分かっているが、亜人族は、亜人族であるというだけで、樹海の中でも正確に現在地も方角も把握できるらしい。

途中、何回か魔物に出会うこともあったが三人が瞬く間に片付けていく。樹海の魔物は、一般的には相当厄介なものとして認識されているのだが、三人からすればただの雑魚である。何の問題もなかった。

しかし、樹海に入って数時間が過ぎた頃、今までにない無数の気配に囲まれ、日色達は歩みを止めざるを得なくなった。数も殺気も、連携の練度も、今までの魔物とは比べ物にならない。カム達は忙しなくウサミミを動かし索敵をしている。そして、何かを掴



んだのか苦虫を嘔み潰したような表情を見せた。シアに至つては、その顔を青ざめさせている。

「……………見つかったな」

無表情で呆れたように呟く日色にハジメとユエも相手の正体に気がつき、面倒そうな表情になった。

その相手の正体は……

「お前達……何故人間という！種族と族名を名乗れ！」

虎模様の耳と尻尾を付けた、筋骨隆々の亜人だった。

樹海の中で人間族と亜人族が共に歩いている。

その有り得ない光景に、目の前の虎の亜人と思しき人物はカム達を裏切り者を見るような眼差しを向けた。その手には両刃の剣が抜身の状態で握られている。周囲にも数十人の亜人が殺気を滾らせながら包囲網を敷いているようだ。

「あ、あの私達は……」

カムが何とか誤魔化そうと額に冷汗を流しながら弁明を試みるが、その前に虎の亜人の視線がシアを捉え、その眼が大きく見開かれる。

「白い髪の兎人族……だと？ ……貴様ら……報告のあつたハウリア族か……亜人族の面

汚し共め！ 長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入

れるとは！ 反逆罪だ！ もはや弁明など聞く必要もない！ 全員この場で処刑する！ 総員か——」

そう告げながら虎の亜人がカムの弁明を聞かず、問答無用と言わんばかりに攻撃命令を下そうとし——

「——吼えるな、静かにしろ」

——天が落ちた。

否、日色の言葉と共に天から落ちるように威圧が敵対者へと平等に重圧のように襲ったのだ。

【威圧】という魔力を直接放出することで相手に物理的な圧力を加える固有魔法である。あまりの威圧に虎の亜人は声を紡ぎ出すことができず口をパクパクと閉口してしま

う。「俺はお前達亜人族とハウリア族に何があつたかは知らないし、興味もないが生憎と仕事でな。こいつらの命は約束が果たされるまで保証しているんでな。殺るといふのなら来るがいい………ただし、一人も生き残れると思うなよ」

そして、同時にハジメやユエも日色と同じように威圧感を出したことで遂に腰が抜け

たのか霧に姿を隠している亜人族達が動揺し、霧の奥から草木が擦れる音が聞こえてきた。

（冗談だろ！こゝ、こんな、こんなものが人間だということのか！まるつきり化物じゃないか！）

虎の亜人は冷や汗を大量に流しながら、ヘタをすれば恐慌に陥って意味もなく喚いてしまいそうな自分を必死に押さえ込み代わりに内心で盛大に喚く。とは言っても日色達からすればわざわざ手加減して威圧しているのだが。

「俺はお前達がこの場を引くというのなら追いはしない。さあ、選べ。敵対して無意味に全滅するか、大人しく家に帰るか。俺はどちらでも構わないが？」

無表情のまま感情のこもっていない声で告げる日色の言葉には誇張や嘘は見受けられず、事実を淡々と語っているように見える。

その背筋に寒気が走るような表情に虎の亜人は確信した。確信せざる負えなかった。此奴は無理だ、と。

もし仮に攻撃命令を下し、自分だけ全力で逃走を図ろうとしても生き残れる景色が想像できない、文字通り一瞬で肉塊に変えられるだろう。

だが、例えそうだとしても虎の亜人はこのまま尻尾巻いて逃げるわけにはいけなかった。虎の亜人は、フェアベルゲンの第二警備隊長だった。フェアベルゲンと周辺の集

落間における警備が主な仕事で、魔物や侵入者から同胞を守るといふこの仕事に誇りと覚悟を持っている。故に、同胞に危害が及ぶ可能性がある目の前の化物達を、例えば部下共々全滅を確信していても安易に引くことなど出来なかつた。

「……その前に、一つ聞きたい」

全身から冷や汗を流し、今にも屈しそうになる体を支えながら絞り切るような声で必死に冷静を装いながら日色へと尋ねる。その声に日色の鋭く冷たい瞳が虎の亜人を映す。

「……何が目的だ？」

端的な質問。しかし、返答次第では、ここを死地と定めて身命を賭す覚悟があると言外に込めた覚悟の質問だ。虎の亜人は、フェアベルゲンや集落の亜人達を傷つけるつもりなら、自分達が引くことは有り得ないと不退転の意志を眼に込めて気丈に日色を睨みつけた。

「樹海の深部、大樹ウーア・アルトの下へ行きたい」

「大樹の下へ……だど？ 何のために？」

てつきり亜人を奴隷にするため等という自分達を害する目的なのかと思つていたら、神聖視はされているもの大して重要視はされていない【大樹】が目的と言われ若干困惑する虎の亜人。【大樹】は、亜人達にしてみれば、言わば樹海の名所のような場所に過

ぎないのだ。

日色は少し躊躇するようにチラリとハジメとユエを見て、小さく頷くとさらに言葉も紡ぎ出した。

「そこに、本当の大迷宮への入口があるかもしれないからだ。俺達は七大迷宮の攻略を目指して旅をしている。ハウリアがいるのは俺たちが案内のために雇ったからだ」

「本当の迷宮？何を言っている？七大迷宮とは、この樹海そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外には決して進むことも帰る事も叶わない天然の迷宮だ」

「ありえないな」

「なんだと？」

「ここが本当に七大迷宮だというのなら魔物が弱すぎる。何より解放者達の試練の場だというのに亜人が平然と進めるのは可笑しい。仮に進める程の実力を持っているなら話は別だがもしそうならそもそも亜人族がここまで人間族に虐げられるわけがない。

その旨を伝えると虎の亜人は困惑した。

当然だ、樹海の魔物を弱いと断じることや、【オルクス大迷宮】の奈落や解放者、迷宮の試練などといった聞きなれない未知の単語。普段なら、『戯言』と切って捨てていただろうが現状それをしてしまえば同胞に危害が加わる可能性がある。

つまり、虎の亜人には目の前の化物達が機嫌を損ねて同胞へと矛を向けさせないよう

にしなからも、その化物達の目的が自分達が害になるかどうかを未知の単語を必死に噛み砕き、理解しなければならぬのだ。

それを瞬時に思考し、日色達の言葉を必死に理解しながら出した答えは――

「……お前が、国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと、俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな」

その言葉に、周囲の亜人達が動揺する気配が広がった。樹海の中で、侵入して来た人間族を見逃すということが異例だからだろう。

「だが、一警備隊長の私ごときが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぐ。お前の話も、長老方なら知っている方もおられるかもしれない。お前に、本当に含むところがないというのなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機しろ」

――上にポイ投げすることだった。

これはある意味当然の結論だろう。目の前の日色達程の驚異を自分の一存で野放しにするわけには行かず、だからといって戦闘すれば自分を含めて瞬く間に全滅だ。

ならばこそ、樹海に侵入した他種族は問答無用で処刑するといふ掟を破り、上に指示を仰ぎながらも日色達から目を離さないように監視することで被害を自分だけの最小限にする。

つまり、これは日色達が自分達を害さないことを前提に提案された部下の命を守りな

がらも日色達の監視を行うという一つの賭けであった。

それを理解した日色は感心した。この緊迫した状況で瞬時に状況を理解する冷静さがあり、プライドを捨てても部下の命を守りながらも傭人族の同胞を守ろうとする行動力があり、そしてその命懸けの綱渡りに等しい行為を行う度胸がある。

『なんでこんな優秀な奴が警備してんの？もつと昇格しそうな気がするけどなあ、あつ……………（察し）』

日色の中の人はどうしてこんな奴が未だ警備の位についてるのか考え、ブラック企業にいた上司を思い出して理解した。

あ、此奴俺と一緒に苦労人だ、と。

日色の視線に同情の視線が含まれたのは言うまでもない。

日色は少しハジメとユエに目を向けた後、二人が了承したのを見て日色の同情の視線など知らない虎の傭人へと返答する。

「……………いいだろう。さっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えろ」

「無論だ。ザム！ 聞こえていたな！ 長老方に余さず伝える！」

「了解！」

虎の巫人の言葉と共に、気配が一つ遠ざかっていった。ハジメは、それを確認するといつでも抜けるようにと柄に置いた左手を離し、「威圧」を解いた。空気が一気に弛緩する。それに、ホツとすると共に、あつさり警戒を解いた日色に訝しそうな眼差しを向ける虎の巫人。部下達が「今なら！」と臨戦態勢を取り、隊長の制止を振り切り一人飛び出し、最初の一步を踏み出した瞬間――

ドパンツ!!

――つと、ハジメの右腕がいつの間にか跳ね上がり銃声と共に一条の閃光が飛び出した兵士の頬を掠めて背後の樹を抉り飛ばし樹海の奥へと消えていった。

理解不能な攻撃に凍りつく兵士の頬に擦過傷が出来る。もし人間のようには横についていけば、確実に弾け飛んでいただろう。聞いたこともない炸裂音と反応を許さない超速の攻撃に誰もが硬直している。

「今の攻撃は、刹那の間に数十発単位で連射出来るわ。どっちが早く攻撃できるか………試してみる？」

「な、なっ………詠唱がっ………」

そのハジメの銃弾に飛び出した兵士は腰が抜けたのか崩れるように座り込んだ。

虎の巫人は飛び出した兵士を背負い、仲間に預けた後小さく頭を下げた。

「部下が迷惑をかけてすまなかった。だが、下手な動きはあまりしないでくれ。我らも



動かざるを得ない」

「安心しろ、お前達が手を出さない限りは攻撃はしない」

そう返答する日色の言葉に虎の亜人は小さく頷いた。他の部下たちも警戒はしているものの動くことはないようだ。包囲はそのままだが、漸く一段落着いたと分かり、カム達にもホツと安堵の吐息が漏れた。だが、彼等に向けられる視線は、日色やハジメに向けられるものより厳しいものがあり居心地は相当悪そうである。

暫く、重苦しい雰囲気周囲が周囲を満たしていたが、そんな空気なんて知らんとばかりに足を崩して座り本を読んでいる日色にその雰囲気飽きたのか日色の膝に膝枕とばかりに頭に乘坐横になるハジメに、日色の横で日色の肩に体重を預けるようにもたれかかるとユエ。それを見たシアが場を和ませるためか、単に雰囲気耐えられなくなったのか「私も」と参戦し、敵地のど真ん中で、いきなりイチャつき始めた（亜人達にはそう見えた）日色に呆れの視線が突き刺さる。

時間にして一時間と言ったところか。調子に乗ったシアが、ユエに関節を極められて「ギブツ！ ギブツですう！」と必死にタツプし、それを周囲の亜人達が呆れを半分含ませた生暖かな視線で見つめていると、ハジメが何か近づいてくることに気がついたのか半目の状態で起き上がると同時に、急速に近づいてくる気配を感じた。

場に再び緊張が走る。シアの関節には痛みが走る。

霧の奥からは、数人の新たな亜人達が現れた。彼等の中央にいる初老の男が特に目を引く。流れる美しい金髪に深い知性を備える碧眼、その身は細く、吹けば飛んで行きそうな軽さを感じさせるも、その肉体は苛め抜いたかのように鍛えられた痕が確かにあり、全身から溢れ出る気配オーラは他の亜人族とは隔絶している。威厳に満ちた容貌は、幾分シワが刻まれているものの、逆にそれがアクセントとなって美しさを引き上げていた。何より特徴的なのが、その尖った長耳だ。彼は、「森人族」いわゆるエルフの……大方長老なのだろう。

「ふむ、お前さんが問題の人間族かね？ 名は何という？」

「……日色だ。神代日色。お前は？」

日色の言葉遣いに周囲の亜人が長老に何て態度を！と憤りを見せるが日色は無視した。亜人達を、片手で制すると、森人族の男性も名乗り返した。

「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらっている。さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。【解放者】とは何処で知った？」

「……………オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の一人、オスカー・オルクスの隠れ家だ」  
目的などではなく、解放者の単語に興味を示すアルフレリックは表情には出さないものの内心は驚愕していた。なぜなら、解放者という単語と、その一人が『オスカー・オ

ルクス』という名であることは、長老達と極僅かな側近しか知らない事だからだ。日色は目的などではなく、解放者の単語に興味を示すアルフレリックの極僅かな表情の変化を見て当たりだと確信した。

「ふむ、奈落の底か……聞いたことがないがな……証明できるか？」

「これだ」

あるいは亜人族の上層に情報を漏らしている者がいる可能性を考えて、日色に尋ねるアルフレリック。それに対し日色は「宝物庫」から地上の魔物では有り得ないほどの質を誇る魔石をいくつか取り出し、アルフレリックに渡す。

「こ、これは……こんな純度の魔石、見たことがないぞ……」

虎の亜人が驚愕の面持ちで思わず声を上げ、アルフレリックも眉をピクリと動かして内心驚愕を漏らしていた。

「そして、これ。オスカー・オルクスが付けていた指輪だ」

そう言つて、日色が見せたのはオルクスの指輪だ。アルフレリックは、その指輪に刻まれた紋章を見て今度こそ内心の驚愕を隠しきれず目を見開いた。そして、気持ちを落ち付かせるようにゆっくり息を吐く。

「なるほど……確かに、お前さんはオスカー・オルクスの隠れ家にたどり着いたようだ。他にも色々気になるころはあるが……よかろう。取り敢えずフェアベルゲンに来る

がいい。私の名で滞在を許そう。ああ、もちろんハウリア族も一緒にな」

アルフレリックの言葉に、周囲の亜人族達だけでなく、カム達ハウリア族も驚愕の表情を浮かべた。虎の亜人を筆頭に、猛烈に抗議の声があがる。それも当然だろう。かつて、フェアベルゲンに人間族が招かれたことなど無かったのだから。

「彼等は、客人として扱わねばならん。その資格を持つているのでな。それが、長老の座に就いた者にもみ伝えられる掟の一つなのだ」

アルフレリックが厳しい表情で周囲の亜人達を宥める。しかし、今度はハジメの方が抗議の声を上げた。

「待って、なんで勝手に私達の予定を決めてるのよ？ 私達は大樹に用があるのであって、フェアベルゲンに興味はないの。問題ないなら、このまま大樹に向かわせてもらう」

「いや、お前さん。それは無理だ」

「何……？」

邪魔をするの……と左腕に黒腕の義手を一瞬で装着し、臨戦態勢を取るハジメにむしろアルフレリックの方が困惑したように返した。

「大樹の周囲は特に霧が濃くてな、亜人族でも方角を見失う。一定周期で、霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるようになるのは十日後だ。……亜人族なら、というか大樹付近に住んでいる兎人族ならば誰でも知っているは

ずだが……」

アルフレリツクは、「今すぐ行ってどうする気だ？」とハジメを見たあと、案内役のカムを見た。ハジメは、聞かされた事実にはポカンとした後、アルフレリツクと同じようにカムを見た。そのカムとは言えば……

「あつ」

まさに、今思い出したという表情をしていた。ハジメの額から青筋が浮かび瞳からハイライトが消える。

「カム？」

「あつ、いや、その何といますか……ほら、色々ありましたから、つい忘れていたといえますか……周期のことは意識してなかったといえますか……」

しどろもどろになって必死に言い訳するカムだったが、ハジメとユエのジト目に耐えられなくなったのか逆ギレしだした。

「ええい、シア、それにお前達も！なぜ、途中で教えてくれなかったのだ！お前達も周期のことは知っているだろ！」

「なつ、父様、逆ギレですかっ！私は、父様が自信たっぷりな請け負うから、てつきりちようど周期だったのかと思って……つまり、父様が悪いですう！」

「そうですよ、僕たちも、あれ？おかしいな？とは思ったけど、族長があまりに自信

たつぷりだったから、僕たちの勘違いかなって……」

「族長、何かやたら張り切ってたから……」

逆ギレするカムに、シアが更に逆ギレし、他の兎人族達も目を逸らしながら、さり気なく責任を擦り付けける。あまりの醜さに日色は呆れたようにため息を吐いた。

「お、お前達！ それでも家族か！ これは、あれだ、そう！ 連帯責任だ！ 連帯責任！ ハジメ殿、罰するなら私だけでなく一族皆にお願いします！」

「あつ、汚い！ お父様汚いですよお！ 一人でお仕置きされるのが怖いからって、道連れなんてえ！」

「族長！ 私達まで巻き込まないで下さい！」

「バカモン！ 道中の、ハジメ殿の容赦のなさを見ていただろう！ 一人でバツを受けるなんて絶対に嫌だ！」

「あんた、それでも族長ですか！」

亜人族の中でも情の深さは随一の種族といわれる兎人族。彼等は、ぎやあぎやあと騒ぎながら互いに責任を擦り付け合っていた。情の深さは何処に行ったのだろうか……流石、シアの家族である。総じて、残念なウサギばかりだった。

青筋を浮かべたハジメが、一言、ポツリと呟く。

「……………ユエ」

「ん」

いつも喧嘩し合うユエですらもここではハジメと意見が一致したのか一歩前に出たユエがスッと右手を掲げた。それに気がついたハウリア達の表情が引き曇る。

「まつ、待つてください、ユエさん！ やるなら父様だけを！」

「はっはっは、何時までも皆一緒だ！」

「何が一緒だあ！」

「ユエ殿、族長だけにして下さい！」

「僕は悪くない、僕は悪くない、悪いのは族長なんだ！」

喧々囂々に騒ぐハウリア達に薄く笑い、ユエは静かに呟いた。

「【嵐帝】」

——アツ——!!!

天高く舞い上がるウサミミ達。樹海に彼等の悲鳴が木霊する。同胞が攻撃を受けたはずなのに、アルフレリックを含む周囲の巫人達の表情に敵意はなかった。むしろ、呆れた表情で天を仰いでいる。彼等の表情が、何より雄弁にハウリア族の残念さを示していた。

その光景を見ながら日色はため息を吐く。

「蛙の子は蛙………か」

その声に含まれている感情が『呆れ』だったのは言うまでもない。



## 長老会議と交渉（脅迫）

ハウリア族をユエによるお仕置きで痛めつけた後、現在日色一行は濃霧の中を虎の亜人ギルの先導で進んでいた。

行き先はフェアベルゲンだ。日色達、ハウリア族、そしてアルフレリツクを中心に周囲を亜人達で固めて既に一時間ほど歩いている。どうやら、先のザムと呼ばれていた伝令は相当な駿足だったようだ。とハジメは少し関心を覚えた。

そうして、暫く歩いていると、突如、霧が晴れた場所に出た。晴れたといっても全ての霧が無くなったのではなく、一本真っ直ぐな道が出来ているだけで、まるで霧のトンネルのような場所だ。よく見れば、道の端に誘導灯のように青い光を放つ拳大の結晶が地面に半分埋められている。そこを境界線に霧の侵入を防いでいるようだ。

ハジメと日色が、青い結晶に注目していることに気が付いたのかアルフレリツクが解説を買って出てくれた。

「あれは、フェアアドレン水晶というものだ。あれの周囲には、何故か霧や魔物が寄り付かない。フェアベルゲンも近辺の集落も、この水晶で囲んでいる。まあ、魔物の方は『比較的』という程度だが」

「なるほどね、流石に四六時中霧の中じゃあ気も滅入るだろうし、住んでる場所くらい霧は晴らしたいものね」

どうやら樹海の中であっても街の中は霧がないようだ。十日は樹海の中にいなければならなかったので朗報である。ユエも、霧が鬱陶しそうだったので、二人の会話を聞いてどこことなく嬉しそうだ。

そんな中、日色は文字魔法『覗』をこっそり使用し、フェアドレン水晶を鑑定した。

フェアドレン水晶

漂う魔力を一定方向へと押し流す水晶。魔物にもある程度作用し寄せ付けなくさせる効果がある。

ハルツエナ樹海でよく採取されている。

(……………どういうことだ?)

瞳に表れた情報に日色は普段通りにしながら内心で疑問符を付ける。

フェアドレン水晶は魔力を指定の方向に押し流す特性を持っているのは理解した。だが、だとすればどうしてフェアドレン水晶には霧が寄ってこない?

霧はあくまで水蒸気を含んだ大気の温度が何らかの理由で下がり露点温度に達した

際に、含まれていた水蒸気が小さな水粒となつて空中に浮かんだ状態である自然現象だ。それならば当然フェアドレン結晶の効果を受けるはずがない。文字魔法で記された情報が嘘の可能性もあるといえればあるが……

日色が思考を回していると眼前に巨大な門が見えてきたので思考を一度打ち切る。太い樹と樹が絡み合つてアーチを作っており、其処に木製の十メートルはある両開きの扉が鎮座していた。天然の樹で作られた防壁は高さが最低でも三十メートルはありそうでまさしく亜人の【国】というに相応しい威容を感じる。

ギルが門番と思しき亜人に合図を送ると、ゴゴゴと重そうな音を立てて門が僅かに開いた。周囲の樹の上から、日色達に視線が突き刺さっているのがわかる。いや、それも当然か人間が招かれているのだ、亜人達が動揺してしまうのも当然だろう。アルフレリックがいなければ、ギルがいても一悶着あつたかもしれない。おそらく、その辺りも予測して長老自ら出てきたのだろう。

門をくぐつた先は、別世界だった。直径数十メートル級の巨大な樹が乱立しており、その樹の中に住居があるようで、ランプの明かりが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れている。木と木の間には人が優に数十人規模で渡れるであろう極太の樹の枝が絡み合い空中回廊を形成している。樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物や樹と樹の間を縫う様に設置された木製の巨大な空中水路まであるようだ。樹の

高さはどれも二十階くらいありそうである。

ハジメとユエがポカンと口を開け、日色でさえも眼を見開き、その幻想的な街並みに見惚れてしまっているとゴホンツと咳払いが聞こえた。どうやら、気がつかない内に立ち止まっていたらしくアルフレリックが正気に戻してくれたようだ。

「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」

アルフレリックの表情が嬉しげに緩んでいる。周囲の亜人達やハウリア族の者達も、どこか得意げな表情だ。日色は、そんな彼等の様子を見つつ、素直に称賛した。

「ああ、まさかここまで美しいとは思わなかった。これほど綺麗な街は初めて見る。すごいな、亜人族は」

「そうね、空気も美味しいし私もこんなに自然と調和した街だなんて思わなかった」

「ん……綺麗」

掛け値なしのストレートな称賛に、流石に、そこまで褒められるとは思っていないかったのか少し驚いた様子の亜人達。だが、やはり故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きながらもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしている。

日色達はフェアベルゲンの住人に好奇と忌避、あるいは困惑と憎悪といった様々な視線を向けられながら、アルフレリックが用意した場所に向かった。



「……なるほど。試練に神代魔法、それに神の盤上か……」

現在、日色、ハジメ、ユエの三人はアルフレリックと向かい合って話をしていた。内容は、日色がオスカー・オルクスに聞いた「解放者」のことや神代魔法のこと、自分達は異世界の人間であり七大迷宮を攻略すれば故郷へ帰るための神代魔法が手に入るかもしれないこと等だ。

アルフレリックは、この世界の神の話しを聞いても顔色を変えたりはしなかった。不思議に思つてユエが尋ねると、「この世界は亜人族に優しくはない、今更だ」らしい。

神が狂つていようがまいが、亜人族の現状は変わらないということらしい。聖教会の権威もないこの場所では信仰心もないようだ。あるとすれば自然への感謝の念だけという。

日色達の話聞いたアルフレリックは、フェアベルゲンの長老の座に就いた者に伝えられる掟を話した。それは、この樹海の地に七大迷宮を示す紋章を持つのが現れたらそれがどのような者であれ敵対しないこと、そして、その者を気に入つたのなら望む場所に連れて行くことという何とも抽象的な口伝だった。

【ハルツィナ樹海】の大迷宮の創始者リユーティリス・ハルツィナが、自分が【解放者】という存在である事（解放者が何者かは伝えなかつた）と、仲間の名前と共に伝えたものなのだという。フェアベルゲンという国ができる前からこの地に住んでいた一族が

延々と伝えてきたのだとか。最初の敵対せずというのは、大迷宮の試練を越えた者の実力が途轍もないことを知っているからこそその忠告によるものらしい。

そして、オルクスの指輪の紋章にアルフレリックが反応したのは、大樹の根元に七つの紋章が刻まれた石碑があり、その内の一つと同じだったからだそうだ。

「それで、俺は資格を持っているというわけか……」

アルフレリックの説明により、人間を亜人族の本拠地に招き入れた理由が判明した。だが招き入れられた以上亜人族達一人ひとりがそんな掟を知っている訳が無い。だからこそ、今後のフェアベルゲンでの身の振り方について更に話をする必要があった。

故に日色とアルフレリックが更に話を進めようと口を開こうとしたその時、何やら階下が騒がしくなった。日色達のいる場所は、最上階にあたり、階下にはシア達ハウリア族が待機している。どうやら、彼女達が誰かと争っているようだ。日色とアルフレリックは顔を見合わせ、同時に立ち上がった。

階下では、大柄な熊の亜人族や虎の亜人族、狐の亜人族、背中から羽を生やした亜人族、小さく毛むくじやらのドワーフらしき亜人族が剣呑な眼差しで、ハウリア族を睨みつけていた。部屋の隅で縮こまり、カムが必死にシアを庇っている。シアもカムも頬が腫れている事から既に殴られた後のようだ。

日色とハジメ、ユエが階段から降りてくると、彼等は一斉に鋭い視線を送った。熊の

亜人が剣呑さを声に乗せて発言する。

「アルフレリック……貴様、どういうつもりだ。なぜ人間を招き入れた？ こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によつては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

おそらく怒りの激情を必死に抑えているのだろう。その証拠に拳は力強く握られわなわなと震えている。

やはり、亜人族にとつて人間族は魔物と同じように不倶戴天の敵なのだ。ましてや忌み子であるシアやそれを庇ったハウリア族まで招き入れた事実には熊の亜人だけでなく他の亜人達もアルフレリックを睨んでいる。

そんな怒りの眼光を一身に受けながらもアルフレリックはどの吹く風といった様子で答える。

「なに、口伝に従つたまでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できずは？」

「何が口伝だ！ そんなもの眉唾物ではないか！ フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老ならば口伝には従え。掟とはそういうものだろう。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうす

る」

「ならば、こんな人間族の小僧が資格者だとしても言うのか！敵対してはならない強者だと！」

「そうだ」

あくまで淡々と返すアルフレリック。熊の亜人は日色に指を指しながらも信じられないという表情でアルフレリックを、そして日色を睨む。

日色の中の人が『なんで俺!?!』と叫ぶ。

日色達は知らないことだがフェアベルゲンには、種族的に能力の高い幾つかの各種族を代表する者が長老となり、長老会議という合議制の集会で国の方針などを決められる。裁判的な判断も長老衆が行う。今、この場に集まっている亜人達が、どうやら当代の長老達らしい。だが、口伝に対する認識には差があるようだ。

いや、それも当然か。アルフレリックは森人族であり、亜人族の中でも特に長命種だ。二百年くらいが平均寿命だったと日色とハジメは記憶している。故に眼前の長老達とアルフレリックでは年齢が大分異なっているからこそその価値観の差が生じているのかもしれない。例えるならば現代の日本人と戦前の日本人のように、価値観も時代によって変化する。寿命に違いがある亜人族だからこそ年齢の差による認識の違い、というわけだ。



そんなわけで、アルフレリック以外の長老衆は、この場に人間族や罪人がいることに我慢ならないようだ。

「……ならば、今、この場で試してやろう！」

いきり立った熊の亜人が突如、日色に向かって突進した。あまりに突然のことで周囲は反応できていない。アルフレリックも、まさかいきなり襲いかかるとは思っていなかったのか、驚愕に目を見開いている。

そして、一瞬で間合いを詰め、身長二メートル半はある脂肪と筋肉の塊の様な男の豪腕が、日色に向かって振り下ろされた。

亜人の中でも、熊人族は特に耐久力と腕力に優れた種族だ。その豪腕は、一撃で野太い樹をへし折る程で、種族代表ともなれば他と一線を画す破壊力を持っている。常人が食らえば肉塊に早変わりだ。

ハイリア族を除いた亜人族達は皆一様に日色が肉塊になる姿を幻視した。

しかし、次の瞬間には、有り得ない光景に凍りついた。

ズドンッ！という衝撃音と共に振り下ろされた拳はさもあつさりと日色の前に割り込んだ。ハジメの右手に掴み止められてしまったからだ。

「……私達に、殺意を持って攻撃したなら覚悟は出来てるわね」

「……………ハジメ、手加減しろよ」

「ええ」

日色の言葉にそう言うと共に右手の握力を徐々に高める。熊の亜人の腕からメキツと骨が軋みをあげるような音が響いた。驚愕の表情を浮かべながらも危機感を覚え、必死に距離を取ろうとする熊の亜人。

「ぐうツッ・離せー！」

しかしどうしたことだろうか熊の亜人が必死に腕を引き戻そうとするが、体長が半分程度しかないにもかかわらず、ハジメはビクともしない。実は、この時、靴に仕込んだ金属板を錬成してスパイク状にし足元を固定していたりするのだが、そんなことは知らない熊の亜人からすれば、ハジメを不動の大樹の様に感じただろう。

「――」

そして無言で一気に強まる握力にバキッ！という腕からなつてはいけない破壊音が響く。それでも悲鳴を上げなかったのは流石は長老といったところか。だが、痛みと驚愕に硬直した隙をハジメは逃さない。

熊の亜人が飛び出した時点で【宝物庫】から直接左腕に装着していた黒腕の義手に魔力を流し紅色の筋を光らせて、後退る熊の亜人の懐へ半身の体制で一気に踏み込んだ。

「ふッ!!」

【豪腕】を発動しながら半身の状態で引き絞った黒腕の突きを放つと同時に肘の部分に

内蔵されている簡易ショットガン（文字魔法を付与させて大きさを無理やり縮小している）を発射し、その反動を推進力として使用して唯でさえ強力な力が宿った拳が更に加速を得て破壊力を増大させた。

ゴキユンツツ!!?という絶大な威力を込められた鋼鉄の拳が遠慮や容赦一切なく熊の亜人族の腹に突き刺さり、衝撃は正確に腹を貫き背中に抜けていった。

衝撃と言う物は基本的に分散する。空中であろうが、拳で殴られた場合後方へ吹き飛ばす事で身体は多少衝撃を分散させるのだ。だが今回は違う。ハジメは衝撃によつて後方へ吹き飛ばすのではなく、体内で正確に爆発させたのだ。故に吹き飛ばす、その場で100%のダメージを受けたのである。要は発勁と一緒だ。

当然、それを本気で行えば文字通り熊の亜人は肉片となつて爆裂四散するため、せいぜい骨が粉碎し内蔵がシエイクされる程度にハジメは手加減していた。

しかし、ハジメはそれだけでは止まらない。

体を内側から破裂するような衝撃に血反吐を吐きながら蹲る熊の亜人へと追撃とばかりに流れるように宙返りを行い、あまりにも冷たく深淵のように昏い瞳で前屈みになった熊の亜人の頭部へと踵落としを放った。

ドゴツ!!という鈍い音が響き、ハジメの初撃の力が体から抜けていない状態で熊の亜人は地面に叩き落とされ、地面に小さなクレーターを作った。

もはや熊の亜人は骨が砕け皮膚は剥き出しになった骨に突き破れ、筋肉はグチャグチャに千切れてしまい、全身がまるで肉塊のように血だらけに染まりまるで死後硬直のようにピクリと痙攣するばかりである。

「手加減しろといっただろうに……………」

ため息を吐く日色の呆れたような声と共にガシユンという無機質な黒腕のギミックの作動音が辺りに響いていく。

手加減の方向性を完全に間違ったせいでもはや生きているのか死んでいるのかわからない熊の亜人の頭を足蹴にしてハジメは氷のような殺意の視線を誰もが言葉を失い硬直している長老たちへと向ける。

「——で？まだやるの？」

◆ その言葉に、頷けるものはいなかった。

◆ ハジメが熊の亜人を手加減(?)して瞬殺した後、アルフレリックが何とか執り成し、ハジメによる蹂躪劇は回避された。熊の亜人は内蔵は9割破裂、ほぼ全身の骨が粉砕骨折、大動脈破裂による大量出血等のもはや文字通りの死に体だったのだが日色の文字魔法『完治』により傷はほとんど治され、現在は医療室らしき場所で安静になっている。

…………手加減とは何だったのだろうか？

現在、当代の長老衆である虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族（俗に言うドワーフ）のグゼ、そして森人族のアルフレリックが、日色と向かい合つて座っていた。日色の傍らにはハジメ、ユエとカム、シアが座り、その後ろにハウリア族が固まって座っている。

長老衆の表情は、アルフレリックを除いて緊張感で強ばっていた。まあ、それも当然か戦闘力では一、二を争う程の手練だった熊の亜人（名前はジン）が、文字通り手も足も出ず手加減されて瞬殺されたのだ、警戒して当然である。

………もつともアレを手加減と言えるのかは別の話だが。

ハジメにとつて手加減というのは即殺しないことだけであつて、致命傷は別に構わないのだろうか。

### 閑話休題

「それで？お前達は俺等をどうしたいんだ？俺は大樹の下へ行きたいだけで、邪魔しなければ敵対することもないんだが……亜人族としての意思を統一してくれないと、いざつて時、何処までやっていいかわからないのは不味いだろう？ あんた達的に。殺し合いの最中、敵味方の区別に配慮する程、俺はお人好しじゃないぞ」

その日色の言葉に身を強ばらせる長老衆。日色の言葉の意味に亜人族全体との戦争も辞さないという意志が込められていること察したのだろう。

要求を飲むか、全面戦争か。

そんな選択肢を躊躇なく突きつけることができる目の前の化物達に長老達は身体を震わせてしまう。

「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるとでも?」

土人族のグゼが苦虫を噛み潰したような表情で呻くように呟いた。その言葉に日色の隣にいたハジメが心底不思議な表情で「はあ?」と首を傾げた。

「はあ? 友好的? 何を言ってるの? 先に日色に殺意を向けたのはあの塵芥ごみだよ? むしろ殺意を向けられて殺さないどころか殺意を向けられた日色が治療までしてくれたのに友好的になれるか、だって? 馬鹿なの? お前はハウリア族とは違ってあの塵芥と同じく義も恩もない獣なの?」

「き、貴様! ジンはな! ジンは、いつも国のことを思つて!」

あの熊の巫人を塵芥扱いし、心底不思議そうに言葉を零すハジメにグゼはテーブルを叩くように立ち上がった。おそらくグゼはジンと仲が良かったのだろう、故にこうしてハジメがジンを塵芥扱いするしたことに憤怒しているのだろう。

その言葉にハジメは「そう、じゃあ——」と呟き、

「——今ここで、その国を大切に思った塵芥の為に死んでみる？」

——立ち上がりいつ取り出したのか分からない程の速度でドンナーを抜き放ち、グゼの眉間へと狙いを定めた。

そして、遅れてやってくる死神のような冷たくおぞましい殺意。

当然、その殺意に当てられた亜人族達の長老は呼吸すら忘れて、彫像のように凍りついてしまう。グゼも腰が抜けたのか崩れるように椅子にもたれかかり、呼吸をしようとして口を閉開させるが一向に口から酸素が供給されることはない。

そんな一秒が数分にも引き伸ばされたような圧迫されたおぞましい殺意の空間は——

「止めろ、ハジメ」

——まるで鶴の一声のように日色の言葉でまるで夢であったかのように霧散した。

日色の言葉に殺意を収めたハジメが不満そうにドンナーを収め、席に座り直した。

同時にハジメが「威圧」を解いたことで呼吸ができるようになり、長老達は必死に呼吸を整えようと荒い息を吐いた

「悪いな、さっきのハジメの行動は謝罪する。だがハジメが言った通り俺達はお前達と友好的になりたいわけでもないし、なる必要性もない。さっきも言ったように俺は大樹

の下に行きたいだけだ、お前達が大樹の下に行かせることを拒否しようが関係がない。最悪お前達亜人族を塵殺しても大樹の下に行かせてもらおう」

そう淡々と宣言する日色に土人族のグゼはぐっ、と小さく苦悶を上げる。

取引とはあくまで互いがある程度対等な時にしかできないものである。亜人族との友好など日色達からすればメリットでもなく、むしろ掟とやらに縛られる可能性によって「七大迷宮」の攻略に遅れてしまう可能性がある以上受ける意味がない。

端から交渉どころか取引の意味がないのだ。

「グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼らの言い分は正論だ」

唯一ハジメの殺意に直接受けていなかったアルフレリックの諫めの言葉に、グゼは表情を歪めてむっつりと黙り込んだ。

「確かに、この少年は、紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言っただけのことはあるね。僕は、彼を口伝の資格者と認めるよ」

そう言ったのは狐人族の長老ルアだ。糸のように細めた目で日色を見た後、他の長老はどうするのかと周囲を見渡す。

その視線を受けて、翼人族のマオ、虎人族のゼルも相当思うところはあるようだが、同意を示した。代表して、アルフレリックが日色に伝える。

「神代日色。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんを口伝の資格者として認める。



故に、お前さんと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える。……しかし……」

「絶対じゃない……か……」

「ああ。知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回再起不能にされたジンの種族、熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アイツは人望があつたからな……」

「それで、何だ？」

アルフレリックの話しを聞いても日色の表情は変わらない。一切変化しない表情に黒水晶のように冷たく鋭い無機質な瞳が眼鏡のレンズ越しにアルフレリックを覗いてくるので、アルフレリックはやはりやりづらいなと内心苦笑した。人間族でまだ成人にもなっていないのに目の前の少年はまるでこの手の交渉に手馴れているかのようだ。

『だから手加減しろつて言つたのにさあ!!こんな相手には下手に恨みをかられたら面倒くさくなつて後で何されるかわからないつていうのにツ!!』

日色の内心はどんな要求をされるか頭を抱えてヒヤヒヤしているのは内緒である。

「お前さんを襲つた者達を殺さないで欲しい」

「……つまり耳長。殺意を向けてくる相手に手加減しろと？」

「そうだ。お前さんの実力なら可能だろう?」

「あの茶熊程なら不可能ではない……が。それはつまりわざわざ此方の命を狙ってあの手この手で殺しに来る奴らを。わざわざつ、ご丁寧につ、気絶させると?」

「……そうだ」

「——断る。一手間違えれば死ぬかもしれない殺し合いで手加減する余裕などあるわけではないだろう。あくまであの茶熊を殺さなかつたのはこの話し合いで追求されないためだ。お前の気持ちをはわかるがそちらの事情は俺にとつて関係のないものだ。同胞を死なせたくなければ死ぬ気で止めるんだな」

『技能に【手加減】とかあつたら了承したんだけどねえ、まあわざわざHP1残るような技能があつたら物理法則息してる?状態になるんだけど』

あの召喚された日の夜決意した殺しを行うことは奈落の底で更に培われ、もはや害意を持つて敵対した者は例外がない限り殺すという価値観となつて日色にしつかりと根付いてしまつてゐる。殺し合いでは何が起こるかわからない、『もしも』の可能性が有る以上そんな驕りを持つていればまたたく間に死んでしまふだろう。

ましてや、己の驕りでハジメやユエにも危険が及ぶと考えればこの考えはある意味当然だと言える。だが、もし、自分が仲間などおらず一人だったのなら……

(……………いや、そんなことを考えても意味はない)

そう思い傾いた思考を元に戻していると虎人族のゼルが口を挟んできた。

「ならば、我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はないとあるからな」

「……………」

その言葉に日色はふむ、と考えるように顎に手を置いた。ハジメを見るとハジメは訝しそうな表情をしていた。もとより、案内はハウリア族に任せるつもりで、フェアベルゲンの手の手を借りるつもりはなかった。そのことは、彼等も知っているはずなのだ。しかし、それを知ってもなお余裕そうにしているということは――

『……………いいいやいやまさか、そんなことはないよね。流星にそんなに頭がプリンなわけないって！』

日色の中の人が思い当たる可能性にありえないとH A H A H A H Aと笑う。

そうするはずなのだ、何故ならそれを選択しても何の意味もなく、むしろあちららにとってはデメリットしかないのだから……………

そう思っているとゼルが余裕そうな表情で言い――

「ハウリア族に案内してもらえとは思わないことだ。そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。何があつて同道していたのか知らんが、ここでお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒し

たも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下っている」

『コイツ馬鹿だあああああああああッ!!』

——日色の内心が呆れたように絶叫した。

そんな日色を放っておいてゼルの言葉に、シアは泣きそうな表情で震え、カム達は一様に諦めたような表情をしている。この期に及んで、誰もシアを責めないのだから情の深さは折紙付きだ。地球ではバツシングが必ずシアめがけて飛ぶだろう。

「長老様方！どうか、どうか一族だけはご寛恕を！どうか！」

「シアー！止めなさい！皆、覚悟は出来ている。お前には何の落ち度もないのだ。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わない。ハウリア族の皆で何度も話しかつて決めたことなのだ。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様！」

土下座しながら必死に寛恕を請うシアだったが、ゼルの言葉に容赦はなかった。

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。フェアベルゲンを謀らなければ忌み子の追放だけで済んだかもしれない」

ワツと泣き出すシア。それをカム達は優しく慰めた。長老会議で決定したというのは本当なのだろう。他の長老達も何も言わなかった。おそらく、忌み子であるということよりも、そのような危険因子をフェアベルゲンの傍に隠し続けたという事実が罪を重

くしたのだろう。ハウリア族の家族を想う気持ちが悪態の悪化を招いたとも言える。何とも皮肉な話だ。

ただしそれは、あるひとつの不確定要素があるせいで瞬く間に瓦解するのだが。

その証拠にアルフレリックのポーカーフェイスが崩れかけ、冷や汗をかいてしまっている。

「そういうわけだ。これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだが？ どうする？ 運良くたどり着く可能性に賭けてみるか？」

それが嫌なら、こちらの要求を飲めと言外に伝えてくるゼル。他の長老衆も異論はないようだがアルフレリックのみ一人額に手を当てて例えるならばチエスでチエックメイトを受けてしまったような表情をしていた。

その言葉に顔を僅かに俯けていた日色が「そうか………」と呟いた。

「なるほど、つまり俺達はハウリア族の案内ができない以上お前等の要求を呑め、とお前達はそういうわけだ」

「そうだ、貴様らが大樹の下に行きたければな」

「それを変える気はないと」

「当然だ」

「なるほど……」

まるで機械のようになるほど、なるほど、と何度も頷いた日色にゼルは訝し気な表情になった。何故ならその日色の表情には特に焦りを浮かべることも苦い表情を見せることもなく、何でもないうつものような無表情だったからだ。

故に、何かあるのか？とゼルは疑問を抱いたのだがもう遅い、既に言質はとつてある。そして日色の考えを察したハジメとユエは訝し気な表情からすまし顔へと変化した。

そして、「仕方がない——」と、日色の淡々と呟いた次の言葉にゼルの目論見は瞬く間に瓦解した。

「——なら、樹海を燃やすしかないな」

「.....は？」

長老達からや、泣き崩れていたシアやハウリア族達からのも啞然とした声が無意識に呟かれた。アルフレリツクは「——やはり、か」と諦観に満ちたような呟きを行い、ルアからも「……やられた」と驚愕の声が聞こえてくる。

そんな長老達をいざ知らず、日色はヨイシヨとばかりに立ち上がりハジメとユエに声をかける。

「さて行くぞ、ハジメ、金ロリ。交渉は決裂だ、さつさと樹海を取り除いて大樹の下に行くぞ」

「……ん」

「わかった」

「——ま、待て貴様らっ!!な、何をする気だ!!?」

そう言つて大木の下の際に繋がる階段へと降りようとすると日色達にいち早く硬直から復歸したゼルが叫ぶように日色へと訪ねてきた。その言葉に日色は鬱陶しそうに返答した。

「何を……だと? さつき言つただろう、樹海の木を取り除いて行きやすくするんだよ。霧も樹海のせいで生まれているのなら取り除けば晴れるだろう?」

「い、一体何故?」

目の前の化物が何を考えているのかわからない、何をしようとしているのかわからな

い、分かりたくない、ゼルの心境は正しくこのような困惑と恐怖だった。

そんなゼルに日色は心底不思議そうに言葉を返した。

「——？決まっているだろう？案内役がいなくなつたからだ、案内役を了承したハウリア族は処刑扱い、亜人族からは案内役を拒否された以上自力で行くしかないだろう？ああ、気にするな。お前達にも事情があるからな、武力で案内を強要したりはしない」

この男、外道である。

こうなつた以上、亜人族はある一つの選択肢を行う以外残されていない。

それを理解しているからこそアルフレリックは乾いた笑みしかすることができないのだ。

「や、止めてくれ!?!」

流石に樹海を燃やされてしまうわけにはいかないと翼人族のマオが叫ぶがその言葉に対する返答は日色の狙いを理解したハジメによる殺意と共に向けられるドンナーとシユラークの銃口だった。

「なら、私達の行く道を阻む以上殺される覚悟は出来てる?」

「——ツ!!?!」

ハジメの返答に身体を凍らせてしまうマオ、そう、日色達が樹海を取り除いて大樹の下に行こうとする以上、亜人族が止めようとすれば当然日色達の道を阻むこととなり全



面戦争が始まってしまふ。

故に日色達を止めることは不可能だ。

ならばと狐人族のルアが冷や汗をだらだらとかきながら提案を行う。

「なら、先程ゼルの言葉を撤回して亜人族が無償で案内役を出すのはどうだい？」

「なっ！ルア！貴様！」

「そうじゃないと少年達に本当に樹海を燃やされてしまふよ。彼ら多分本当にその気だろうし」

「——うぐっ」

ルアの提案にゼルが反発するがルゼの言葉に返す言葉が見つからず言葉が詰まってしまふ。これ以上ゼルにはこの状況を打開する案がない以上ルアの案に賛成するしかないのだ。

だが——

「断る」

「なッ——！！」

——その提案に対し日色の回答は否、だった。

何故、という驚愕と疑念の混じったアルフレリックを除いた長老達の視線が日色を貫くが日色は無表情ながら若干呆れたようにゼルに指を指して返答した。

「理由は亜人族の要求はその黄虎が変える気はないと言ったこと、その事にお前達長老は否定しなかった。つまりその黄虎が言ったことはお前達長老達の総意なんだろう？ 当然言質は取つてあるから忘れたとは言わせないぞ」

「そ、それは……………ッ」

そう言つて「証拠を見せてやろうか？」と尋ねる日色に本当に証拠がある事を悟つたのだろう。

思わず呻くように声を零してしまふゼルに長老達が余計な事をツ！とでも言うように非難の目を向ける。

そんな長老達を呆れたように見つめながら日色は僅かに口を避けたような笑みを浮かべながら尋ねた。

「それで、どうする？ お前達にできる選択肢は三つだ。俺の道を阻んで全滅するか、ハウリア族を処刑して樹海を燃やし尽くされるか、それともハウリア族を見逃すか、好きに選べ」

それはもはや、選択の余地すら与えない選択肢だった。

日色の道を阻めば即座に塵殺されるだけだし、ハウリア族を処刑してしまえば樹海が火の海に早変わり、例えば亜人族の住処に被害がなかったとしても霧がなくなる可能性や、住処が見つかりやすくなり見つかつてしまえば魔人族と人間族の進行によるダブル

パンチで全滅だ。

亜人族が案内人を出そうにも長老の一人であるゼルがうっかりにも言葉を言ってしまったため、容易に撤回することはできず、仮に撤回したとしても日色が拒否してしまえばそれも意味がなくなる。

つまり、ハウリア族の処刑を取り止め、案内を頼むことでしか亜人族には選択肢がないのだ。

詰みである。

というものの日色からすればまともに取引できると思えること自体理解不能だった。そもそも自分達の一、二を争う手練を瞬殺された時点でその気になれば全滅させられる以上、メリットを求めてはいけななのだ。日色達からすれば亜人族が全滅しようがメリットが無い以上、亜人族が対価を出していうことを聞かせようとしても全滅というちやぶ台返しができるためまともな取引になるわけがない。

故に亜人族達は舐められない程度でなおかつ機嫌を損なわない取引で出来るだけ亜人族側のデメリットを小さくさせなければならなかったのだ。おそらく、アルフレリツクはそれを理解していたからこそ国の威信に関わらないラインから気分が損ねない限りなくギリギリなラインまで交渉しようとしていたのだ。さすがにルアはここまで読まれるとは予想していなかったが。

当然、それすら理解ができない長老達が調子に乗ってそのラインを超えるようなことを言ってきたからこそ日色の思い通り誘導され、アルフレリックが使えるカードが封じられ、カモになったのだが。

「……………お前さん、ひとつ聞かせてくれ」

「何だ」

すると亜人族総意の回答が出る前に今まで黙っていたアルフレリックが誤魔化しは許さないとばかりに鋭い眼光で日色を射貫く。

「ハウリア族を処刑するならば本当に樹海を燃やすのかね？」

「ああ」

それほどの鋭い眼光を受けても日色は少しの波の揺らぎも無かった。そこに不退転の決意が見て取れる。

「例えゼルの言葉に対する謝罪と撤回を行い、フェアベルゲンから案内を出すと言っても？」

ハウリア族の処刑は、長老会議で決定したことであるため脅しに屈して覆すことは国の威信に関わる。だからこそできる限りハウリア族を処刑しなければならない。故に例え日色達に謝罪を行い、何かを要求されたとしても長老会議の決定を覆すわけにはいかない。故にアルフレリックは提案した。しかし、日色は交渉の余地などないと言わん

ばかりにはつきりと告げる。

「何度も言わせるな、断ると言っているだろう」

「なぜ、彼等にこだわる。大樹に行きたいだけなら案内人は誰でもよからう」

アルフレリックの言葉に日色は鼻で笑い、スッと伸ばした手を泣き崩れていた涙も乾きかけていたシアの頭の上に乗せた。ピクツと体を震わせ、日色を見上げるシア。

「あの虎の亜人から聞かなかつたのか？俺はコイツらの命の保証を対価に大樹の案内で雇っている。約束した以上約束は守るさ」

「日色さん……」

日色にとつて今の言葉は単純に自分の邪魔をすることは許さないという意味で、それ以上ではないだろう。しかし、それでも、ハウリア族を死なせないために亜人族の本拠地フェアベルゲンとの戦争も辞さないという言葉は、その意志は、絶望に沈むシアの心を真っ直ぐに貫いた。

「……約束か。それならもう果たしたと考えるでもいいのではないか？峡谷の魔物からも、帝国兵からも守つたのだろう？ なら、あとは報酬として案内を受けるだけだ。報酬を渡す者が変わるだけで問題なからう。」

「大アりに決まっているだろう。案内するまで身の安全を確保するつてのが約束だ。それ——」

日色は一度言葉を言葉を切つて、シアをチラリと見た。先程から、ずっと日色を見ていたシアはその視線に気がつき、一瞬目が合う。すると僅かに心臓が跳ねたのを感じた。視線は直ぐに逸れたが、シアの鼓動だけは高まり続ける。

そして——睨むように長老達を睥睨し、ハジメとはまた一色違う天から振り落ちるような【威圧】の波動が長老達を襲った。

「——俺はお前達を信用できない」

三度目の殺意が長老達を襲い、強制的に二の句を告げなくしてしまう。

硬直してしまう長老達を冷たい瞳で睥睨しながら日色は言葉を紡ぐ。

「片や家族の為に命を賭けて行動する少女とその少女を見捨てず、恩を返そうとするその家族に対し、その少女を忌み子として庇った家族諸共処刑しようとする義も何もない亜人族。一体どちらを信用できると思う？」

そんなもの、当然前者だ。

ろくに掟を守ろうとしないのにいざという時に掟を頼りにしようとする亜人族を信用できるわけがない。

そんな奴らに命を預けるぐらいならば、最悪亜人族との全面戦争をして全滅させたあ

とハウリア族に案内させたほうがマシだ。

そう告げる日色の透き通った黒い瞳に気圧されて長老達は言い返すことなどできな  
かった。

## 忌み子の謎

「むしろ、俺からすればお前達がこの青リボンを忌み子として扱う意味がわからない」

そう言いながらビシツとシアに指を差す日色。その言葉に困惑し訝しむ長老達の中でアルフレリックとルアだけは表情を変えず沈黙を保っていた。おそらくこの中でほとんどがジンとかいう文字通り義も恩も無い獣みたいな奴と同じように個人の實力でのし上がった脳筋達以外で彼らだけが本当の意味でこの国の将来のために行動できるのだろう。

先ほどの日色との交渉で既に日色はある程度二人が切れ者だと認識していた。………というか仮にも国のトップ達なのに大半が脳筋とはどういうことなのだろう？大丈夫かこの国。

「はっ、何を言うかと思えば。決まっているだろう、そこの忌み子は魔物と同様の力を持っているのだ。魔物は処刑する、当然のことだろう」

「……………お前、馬鹿か？」

「な、なんだとツ!？」

自信満々に胸を張って語るグゼの言葉に日色を呆れどころか本当になんで滅ばない



んだこの国?、と心底考えながらグゼへと心底馬鹿にしたような目線を向けた。

「忘れたのか? お前達が迫害される原因を。人族の聖教教会の主張は『魔力を持たぬ種族は神に愛されていない』、だぞ? ならばこの魔力を持った青リボンが存在する以上、奴らは亜人族を虐げる主張を使えないはずだ。だというのに何故、忌み子として扱う? 亜人族の現状を変えられる可能性があるんだ、寧ろ神子として扱うべきだろう?」

その日色の言葉の意味が理解できたのかアルフレリックとルアを除いて、「あつ」と腑に落ちたように啞然とした表情を取った。

そう、シアが魔力を持つていっているという事実は教会の主張を論破する決定的な切り札である。もちろん普通に教会に訴えたところでほぼ確実に裏で謀殺され、もみ消されてしまっただろうがシアの固有魔法『未来視』を使えば話は別だ。なにせ、多くの運命を予言し続けるだけで魔力持ちであることが証明でき、その力を使って人族を助ければ当然噂になり、徐々に民衆を味方につけることができるようになり、民衆を味方につければ教会は民衆から反感を買ってしまう為、シアを異端認定することもできなくなる。なにせ、海人族を保護してしまった実績があるのだ、他のシア達も保護せざる負えなくなるはずだ。

「しかも可能性の話でしかないが魔力を持つ性質が子供に遺伝しないとも限らない、遺伝したなら、魔法を使うというアドバンテージは消えるんだぞ? 身体能力と合わせれば

人族も魔人族もお前達を蔑ろにすることは叶わなくなるはずだ」

「な、な……………」

その言葉に開いた口が塞がらないといったように言葉を詰まらせる長老達。

表情に変化がないのはおそらくこの可能性を予想していたルアと何か思うことがあるのか一瞬僅かに表情に影の射したアルフレリックだけだった。

その二人の様子に二人はその可能性を理解していたことに気づいたゼルが怒鳴るよ  
うに問い詰めた。

「ルア・アルフレリックツ！ 貴様ら、その可能性がわかっていながら何故黙っていたツ  
！」

「あくまで可能性の話だ、ましてや、言ったところでお主等は止まるか？」

「寧ろ僕らの地位を悪くするだけだろうからね。なら代わりに気づいてくれた者に言っ  
てくれた方がこつちに被害はこないだろうし。どうだい？ 人間に指摘されるのは？ な  
かなか効くだろう？」

『やばい、このごん狐予想以上にイイ性格してる……………ツ！』

目を細めたままニヤニヤと笑うルアの表情は正直言つて日色の中の人を引かせるに  
は十分すぎるほどイイ笑顔だった。しかも、口出した時に自分達の地位が危ぶまない  
ように口を出さず、誰かに言わせようとさせるあたり実にいやらしい。おそらく、日色

達が来なければ己の手下たちを使い、他の長老達が自然と気づいたと錯覚するように根回ししようとしたのではないだろうか？

「し、しかし……話してくれば——」

「当然、お前達は聞き入れるはずがないだろうな。なにせ、魔力を持っている少女を庇った家族でさえお前達は処刑しようとするんだからな。それにどうしたんだ？ 規律では魔物は不倶戴天の敵、故に魔力を持った青リボンは処刑するんだろう？ 散々虐げておいていざとなつたら手のひら返しか？ まさか本当に義も恩もない獣だったのか？」

「だ、黙れっ！ 貴様と我らとは違うッ！ 我らは——」

日色の呆れた表情で紡ぎだされる嘲笑うような声にグゼは怒り心頭といった様子で叫ぶがその言葉に日色はスツと表情を無表情へと変えて、グゼの言葉を遮り淡々と言葉を叩きつけていく。

「——そうだな、獣でさえ子は守る。ましてや、他の種族に迫害されている中、亜人族の現状を変えられる可能性を持った青リボンを一族もろとも迫害するお前達はただの獣以下だ」

「あ、うあ……」

敵の敵は味方

人は共通の敵を見つけると例外もあるものの自然と団結しようとする生き物だ。

利害の一致というべきか、例で言えば江戸時代で起こっていた農民の一揆や反乱と  
いったように。

リーダーは決めたりはするものの共通の敵を見つけた人々は迫害することは極少数  
である。

ましてや、その共通の敵に渡り合える可能性を持った少女をどうして忌み子として迫  
害したのか？

それは――

日色の言葉に呆然と返す言葉もなく聞くことしか出来ない長老達へと日色は決定的  
な一言を叩きつけた。

「認めたくなかったんだらう？」

「――ツ!!？」

日色の言葉にアルフレリック達以外の例外を除いた全員が言葉を失った。

「魔力持ちは魔法が使えるアドバンテージがある以上ほとんどの亜人族よりも強いはず  
だ、だからお前達は認められなかった。最弱の兎人族が持っていることに。未知は恐怖

だ。だからお前達は恐怖し、青リボンを処刑しようとしたんだろう？ 最弱の兎人族が最強になることを認められなかったから、今まで兎人族の迫害した分の報復が来るのが怖いから」

その言葉に言い返す言葉を長老達は持ち合わせていない。

何故なら本当は理解していたから。十数年隠してたのだ、今更引き渡せという要求に従わないのは解りきっていた。だがそれでも亜人族達は認めたくなかったのだ、最弱と言われたハウリア族の少女が最強になれる可能性があることに。迫害する側からされる側になることを亜人族は無意識的に忌避していたのである。

ガタンツという音とともにグゼは茫然自失といったばかりに床へと膝をついた。

すると、パンという手を叩く音が聞こえてきた。アルフレリックである。

「申し訳ないがお前さん、そこまでにして頂きたい。彼らはまだ若い、若さゆえの暴走なのだ。どうか彼らに己を見直す時間をくれまいか？」

「それは言う相手が違うだろうに……」

「本当に……申し訳ない」

そう呆れたように呟く日色の視線は己が忌み子扱いされたのは嫉妬に過ぎなかったという事実で怒りと困惑がまじったような表情を取るシアへと向けられていた。

アルフレリックはゆっくりと、しかし丁寧に頭をシアへと下げた。ルアも続いて頭を

下げる。

「——それで？こいつらの処遇はどうなる？」

「……ハウリア族の処刑は既に決まっちゃったこと。掟のせいでものを変えることはもはや出来ない。だが掟には奴隷として捕まり樹海の外へ出て行つた者は死んだものとしても扱っている。故にハウリア族はお前さんの奴隷にさせてもらおう」

「魔法を使える相手にほぼ勝機なんてないからね。そのシアちゃんの魔力が遺伝したなら話は別だけど今は確かめる方法はないし」

「……………屁理屈だな」

「仕方あるまい、お前さんの要求を満たしながらも掟に触れないようにする方法はこれしかなかった。皆も異論はないな」

結果的に言えば死んだものは処刑できないから大丈夫という結論になったことに日色はいつものような呆れた溜息を吐いた。

アルフレリックの言葉にルアはニコニコと笑顔で了承したがのそれ以外の長老は返事をする気力がないようで、沈黙を保ったまま一向に返事が来ないのでアルフレリックは了承ということにしておいた。

「それでは纏めよう。ハウリア族は忌み子シア・ハウリアを筆頭に、神代日色の奴隷——つまり身内とみなす。そして、資格者神代日色に対しては、敵対はしないが、フェアベ

ルゲンや周辺の集落への立ち入りを禁ずる。以降、神代日色の一族に手を出した場合は全て自己責任とする……以上だ。何かあるか？」

「そうだな……あの茶熊の傷を治した対価としてひとつ要求がある」

今、思い出しましたと言わんばかりにジンのことを思い出して手のひらにポンツと手を置き、日色は一つ要求しようとする。アルフレリックは心底嫌そうに顔を顰めた。

「……………なんだね」

「……そんなに嫌な顔をする程なのか——耳長、お前に聞きたいことがある。個人でな」その日色の言葉にアルフレリックは僅かに目を細め、少し熟慮した後「——よかろう」と何かたまったものを吐き出すかのようにため息を吐き、ルアへと目を向けた。

「——ルアよ、すまないがジン達を連れて一足先に戻ってくれんか」

「構わないよ、でも——いいのかい？ここを二人だけにしたら彼に殺される可能性があるよ……」

「神代殿はその気になれば我ら全員を殺すことは容易い、今更のことだろうに」

ルアの疑問の声にアルフレリックは答えるとルアは「ハハッ、そうだね」と胡散臭い笑みを浮かべた後、他の意気消沈した長老達を立ち上がらせていく。

日色もハジメに目を向けると、ハジメは少し不満そうにしながらもユエやシア達を促して立ち上がった。ハジメの目が「後で頭撫でてね」というワンコのような訴えをして

きたので日色は呆れながら了承の意とばかりに片眼を一度だけ瞬きさせた。

ユエは終始ボーとしていたが、話は聞いていたのか特に意見を口にすることもなくハジメに合わせて立ち上がった。

しかし、シア達ハウリア族は、一向に呆然としたまま立ち上がる気配がない。未だ現実を認識しきれていないのだろうか。いや、それも当然かさつきまで死を覚悟していたのに、気がつけば追放で済んでいるという現実離れした事実。例えるならば死刑判決だった者が突然死刑判決を取り下げられ、荷物やパスポートを用意された挙句、「お前国外追放な。人生やり直してこいや」と言われているようなものだ。

彼らの心境は「えっ、このまま本当に行っちゃっていいの?」という感じで動揺しているのだろうか。

「ねえ、何時まで呆けてるの? さつきと立って」

ハジメの言葉に、ようやく我を取り戻したのかあたふたと立ち上がり、さつきと出て行くハジメの後を追うシア達。ルア達もハジメ達を門まで送るようだ。

そろそろと木の扉から出て行く亜人族達の中、未だオロオロとしているシアが日色に尋ねた。

「あ、あの、私達……死ななくていいんですか?」

「? さつきの話、聞いてなかったのか?」



「い、いえ、聞いてはいましたが……その、何と申しますか……いつの間にかトントン拍子で窮地を脱してしまったので実感が湧かないといえますか……信じられない状況と  
いいですか……」

周りのハウリア族も同様なのか困惑したような表情だ。それだけ、長老会議の決定と  
いうのは巫人にとって絶対的なものなのだろう。どう処理していいのか分からず困惑  
するシアにユエが呟くように話しかけた。

「……素直に喜べばいい」

「ユエさん？」

「……日色に救われた。それが事実。受け入れて喜べばいい」

「……………」

ユエの言葉に、シアはそつと隣にいる席に座った日色に視線をやると、日色は僅かに  
口角を上げて小さく微笑した。

「報酬、忘れるなよ？」

「——ッ」

その日色の言葉にシアは、肩を震わせる。樹海の案内と引き換えにシアと彼女の家族  
の命を守る。

確かにそれはシアが必死に取り付けた日色との約束だ。

確かにシアは「未来視」によって日色が守ってくれる未来は見えていた。だが、あくまでシアが見ることができるのは未来という名の『可能性の一つ』でしかない。故にシアの選択一つでいくらでも変わってしまうものなのだ。

だからこそ、シアは日色の協力を取り付けるのに『必死』だった。相手は、亜人族に差別的な人間で、シア自身は何も持たない身の上だ。交渉の材料など、自分の『女』か『固有能力』しかない。故に日色にあっさりスルーされた時のシアの絶望は押しして叱るべしである。

どうにか約束を取り付けて、道中積極的に話しかけたのもそれが理由だ。「約束は守る人だ」と口に出してみたり「人間相手でも戦う」などという言葉を使ってしまったものも『本当は助けたくないのではないか?』という内心の不安が溢れ出した故の本音だったのである。実際に、何の躊躇いもなく帝国兵と戦ってくれた時、シアはどれほど安堵したことか。

ましてや今回の長老会議では帝国兵の時とはわけが違う。言ってみれば、帝国の皇帝陛下の前で宣戦布告するに等しいのだ。にもかかわらず一步も引かずに約束を守り通してくれた。例えそれが、日色自身の為であっても、ユエの言う通り、シアと大切な家族は確かに守られたのだ。

一体どこにいるだろうか。本来蔑まれるはずの亜人族、ましてや出会って一日も経つ



——知っているシアの表情に何を思ったのか、何も喋らずしばらく口を閉じたままだったものの絞り出すように鬱陶しそうな声を零し、シアを引き剥がそうとする。

それと同時に、ハウリア族の皆もようやく命拾いしたことを実感したのか、隣同士で喜びを分かち始めた。

ハジメはそれらを不機嫌そうに見つめながら先に扉に出た長老衆の中で日色へと不快感や憎悪の視線を向けていた者がいたことやこれから新たにユエと同じく厄介な敵が現れそうなことに久しぶりに憂鬱なため息をつくのだった。

◆ 「さてと、すまん。時間を取らせて」

「仕方あるまい。お前さんにはジンの傷を治してもらった恩がある。恩は返さなければなるまいて」

ハジメ達にハウリア族を任せ、連れてってもらった日色はアルフレリツクと二人きりで対面していた。

こうなったのも日色が要求したからなのだがさつきまで長老達がいた時とは違い、外からの活気のある騒音が聞こえてくるもののある程度落ち着く雰囲気を保っている。

「それで、お前さんの質問とは一体何かね？」

「ああ、別に大したことじゃない。少し気になったという疑問というだけなんだがな――

「  
そうやって日色は一旦ひと呼吸おいて、アルフレリックへと質問を投げかけた。

「——青リボンのような魔力持ちの亜人族、これが初めてじゃないだろ」

その日色の言葉に外の騒音が場違いに静まり返った。

音のない世界の中で、アルフレリックがゆっくりと真剣な表情で日色を見つめた。

「……………どうしてそう思うね？」

「最初に抱いた疑問は初めて青リボンに出会った時だ」

そう呟きながら日色が思い出すのは助けを求めるシアの話聞いたときのことだ。

ハウリア族はフェアベルゲンに捕まる前に一族ごと樹海を出て、途中帝国軍とばつたり出会うことがなければ北の山脈地帯を目指すことにしたい。

だが、ちよつと待つて欲しい。ここでひとつの疑問が生まれまいだろうか？

「そう——」

「——樹海から出たことのないハウリア族がどうして北の山脈を目指すことができる？」

「そう、そうなのだ。」

本来ならば樹海から出たことのないはずのハウリア族が樹海の外をある程度知識と知っていても正確な道などわかるはずがない、例えるならば外国の地名を知っていたとしても正確な住所はわからないことと同じように。

ハウリア族が方位磁石や地図を自前で用意したのなら話は別だが、主に方位磁石が売られているのは人族の領土だ。ましてや同じ亜人族に虐げられているハウリア族が手に入れられることはほぼありえない。

誰かが逃走を手助けしなければ。

「次に疑問を抱いたのは長老会議の時だ」

「ほう……？」

「長老というのは一族の代表者、つまり一族ごとに意見を纏めそれを長老が提示するんだろう？だが、満場一致で青リボンの判決が処刑になるのは都合が良さくないか？あの黄虎のような脳筋一族ではなく、ましてやもつとも長命の森人族が、だぞ？いくら掟や誇りを大切にするとしても少なくとも青リボンの亜人族に対する恩恵程度気づくだろうに」

あの頭が脳筋だった力でのし上がってきた者たちとは違いアルフレリックは頭脳や知識で長老の座に居座った者である。ならば当然、同じ種族である森人族は決して『魔物と同じ力を持っているから』という理由だけで殺そうとはしないはずだ。

だからこそ、日色は考えたのだ。

もし、仮にシアを森人族が『魔物と同じ力を持っているから』という理由で処刑を決めたのではなかったとしたら？

他に理由があつたとすれば？

だとすればそれは――

「……………故に、過去に彼女のような忌み子がいたのではないかと推測した、という訳か」

「そしてお前は、その忌み子と何ら関係を持っていたんじゃないかと俺は予想している」  
――シアが生まれる前の過去に何かがあつたということだ。

そして、その忌み子とアルフレリックが何ら関係を持っていたのならばハウリア族が北の山脈に行くこうとすることができたことが繋がり、ある事実が浮かびあがるはずだ。

アルフレリックがハウリア族の逃走を陰ながら支援していたという事実が。

アルフレリックは深く、深く、ため息を吐き、再度鋭い視線を日色へと向ける。

「それで、お前さんは何を聞きたいのかね？」

「青リボンが生まれる前の過去、あいつが森人族にさえ処刑と言われる本当の理由が知りたい」

「お前さんには何の関係もないのかね？」

「言つただろう？単純な興味、好奇心の質問だと」

アルフレリックはその日色の言葉に半ば、観念したように「……………よかろう」と呟いた。

そして、少しずつ、過去をかき集め、滴り落とすかのように言葉を紡いでいった。

「お前さんの言う推測は半分正解でもう半分は間違っている」

「——何？」

アルフレリックは語っていく。嘗ての出来事を思い出すように。

懐かしそうに、僅かに目を細めながら。

「確かに嘗て忌み子と呼ばれた者はいた、しかしその者はシア・ハウリアとは違い魔力を持っていなかったのだ」

「……………」

沈黙する日色にアルフレリックは実に懐かしそうに一人の人物の名を紡いだ。

「——その者の名をララシーク・ハウリア、シア・ハウリアの曾祖母にあたる者だ」



## ララシーク・ハウリア①

アルフレリック・ハイピストは自他共に天才だと思っていた。

幼き頃から人一倍成熟していたアルフレリックは両親に「フエアベルゲン」の掟や座学を学び、魔族や人族の恐ろしさを学び、その為に自分達がどう生きていくべきかという両親の持論を聞いて、常日頃から知識を学んでは覚えることを繰り返していた。

別にアルフレリックには何かしらの目標があるわけではない、亜人族の中で最も戦力の高い「熊人族」に並ぶ程の戦士になりたいわけでもなく、ましてや長老になりたいわけでもなかった。

ただ、そうしたいと思ったから。

それをやってみたいと思ったから。

そんな子供らしい好奇心の赴くままに生まれながら優れた頭脳を生かし、周囲の人々から天才だ、彼は必ず長老になる、と持て囃されて生きていた。

だが、幾ら大人に褒められたとしてもアルフレリックは内心何も思わなかった。

大人の賞賛の言葉が右耳から左耳に流れていくように、幾ら賞賛されようともアルフレリックは外面は喜ぶように装っても心はどうしようもなく冷め切っており、決して満

たされることはなかった。

そう——

『あー、わりい。まさかこんなところに亜人がいるとは思わなかったんだ。——つて、お前。森人族じゃねえか、幼いくせになんでこんな所にいんだよ?』

——その日、あの森で彼女に出会うまでは。



日が地上と直角となる正午、樹海の隙間を通り抜けるように煌々と日光が照らす中、いつもより一段と霧の濃度が薄い日、当時10歳のアルフレリックは一人、こっそり「フェアベルゲン」の外へと足を踏み入れていた。

というものの、本来樹海の外は魔物が彷徨っているため当時10歳なアルフレリックには「フェアベルゲン」の門を通ることは当然できない。故に通常の方法で門の外に出ることができないアルフレリックは通常の方法で門の外に出ず、いつもある方法で門の外に出て行っている。

「——よつこいしよ……つと。ふう……まさかこんなところに外に繋がる隠し通路があるとは思いませんでしたね……」

そう、隠し通路である。

「フェアベルゲン」の門から十数メートル離れた直径1メートル程度の一本の大樹、その

周りに生えている草むらに隠れるように「フェアベルゲン」へとつながる子供がたやすく通れる地下通路が作られているのである。しかもその通路は普段小さな扉が閉じており、その上を草が覆っているために綺麗に隠蔽されており子供ならばいざ知らず大人ですら見つけることは難しいだろう。

この外に繋がる隠し通路はアルフレリックが作ったわけではなく、数週間前に見つけた経緯はある種の偶然のようなものだ。

ある日、人族が書いたらしい本を一箇所に集めた亜人族達の図書館のような場所から本を借りてきたアルフレリックの耳に突如聞きなれない風切り音が聞こえ、音の場所に向かつてみるとこの隠し部屋を見つけた、というものだ。

隠し通路からコツソリと門の外に顔を出して、辺りに亜人族がいなかったことを確認するとアルフレリックは急ぎ足で物音を出るだけ出さないようにしながら草木をかき分けて、門の外から距離を広げていく。

一応、15歳以下の亜人族は護衛のできる大人無しで外に繋がる門をくぐってはいけないという掟は存在しており、当時10歳のアルフレリックもそれは理解しているが外に繋がる門をくぐってははいないのでアルフレリックは躊躇なくこの隠し通路を利用していった。

しかし何故アルフレリックが、魔物の危険性のある外の樹海に出ようとしたのか？と

いう疑問が生まれるがその答えは単純にアルフレリックは興味があるからと答えるだろう。

今までにアルフレリックは二回程一人で出たことがあるがそれらはあくまで隠し通路の周りを軽く探索する程度であつた、故に今度は少し離れた場所を探索し、本に書かれてあつた植物を探してみたいという理由でアルフレリックはその日、樹海の外に出ていたのである。

「さん：カナメ草、日光の当たらぬ場所に育つ青紫色の植物。日光が当たらない樹海によく群生しており、寒くなると白色の小さな華を咲かす。……よし、本との相違点はありませんね、念の為に模写しておきましょうか」

己の知識の中に存在する植物の姿、特徴と現在自分が観察している植物とに相違点が無いか調べ、肩に担いでいる皮で作られた荷物から紙を取り出して、植物の絵を書いていく。

樹海に入ってから50分弱、アルフレリックはこの作業を少しずつ樹海の奥に進んでいきながら繰り返していた。

いつ、霧が深くなり辺りが見えなくなるのかもわからない。だからこそアルフレリックは霧に迷わないようにこまめに目印を付けている為、現在も帰り道を迷うことなく順調に進んできている。これまでの探索は確実に順調だといつていいだろう。

しかし、アルフレリックはひとつの不安要素を忘れていた。

それは――

「――ふむ、ここから先は霧が深くなっていますね。ここは一旦帰――」

「――グルルア!!」

「――ッ!?!」

そう、魔物である。

幾ら聡いアルフレリックでもあくまで「フェアベルゲン」の中で安全に過ごしていた子供の一人、魔物の危険性は理解は出来ていたものの体験したことはなかったのである。二回程、外の樹海に出たことはあるものあくまでそれは亜人族のテリトリーだと理解しているため滅多に魔物が近づかない「フェアベルゲン」だけだった。

故に、アルフレリックが魔物に襲われるのはある意味当然の結果だっただろう。

突如、霧から1メートル大の大型の狼のような魔物が現れ、一息でアルフレリックへと接近し、襲い掛かる。アルフレリックは顔に驚愕と恐怖を浮かべ、条件反射で横に転がることで間一髪避けることはできることができたものの避けることができたのは一種の偶然に近い。

「ひっ――」

恐怖に急かされるように転がった状態から立ち上がって魔物から必死に逃げようと

するがアルフレリックは亜人族の中で基礎身体能力が低い部類に入る森人族。当然逃げられるわけがない。

「ガルア!!」

「グギツ!!?——ヒ、ヒイツ?!?」

魔物から背を向けて全速力で逃げるアルフレリックに魔物の牙が襲い掛かり、左足を切り裂いた。突如左足にぐんと力が抜けたことで膝をついてゴロゴロと地面を転がり、木の幹にぶつかってしまった。だが幹にぶつかった痛みよりも魔物が徐々に近づいてくる恐怖が増したせいかアルフレリックは無理しても逃げようとするが左足が切り裂かれたせいか左足に力が入らずうまく逃げることができない。

徐々に牙を見せつけるように口を開けながら近づいてくる魔物にアルフレリックは引き攣った笑みを涙混じりに浮かべるしかできず、そのまま魔物によってあつけなく命を散らすことになった。

その瞬間<sup>とき</sup>、一人の少女に救われなければ。

苦悶をあげるアルフレリックに魔物の牙が振るわれる刹那——魔物と足を傷つけられ動けなくなったアルフレリックの中心に紫色に煌めく石のような物体が明後日の方向から飛んできた。

コンツと地面に落下し、小さく跳ねるその物体をアルフレリックは本の知識で魔石だ

と理解すると同時に魔石が炸裂する。

「——ッ!!?」

「キャンッ!?!」

瞬間、視界が閃光に包まれた。

魔石が割れるように炸裂すると同時にまるで魔法のように周囲の樹海を閃光で満たしてしまう。

突然の閃光に目が焼かれ、眼蓋を閉じて目を抑え、悶えてしまうアルフレリックに次の瞬間、ピシヤツと生暖かい鉄臭い何かの液体がアルフレリックの顔に濡れた。

「な、何がッ——」

慌てて生暖かい何かを拭って眼蓋を開くと、次の視界に入った光景にアルフレリックは言葉を失った。

それは己の顔に触れたせいで手に付着した赤黒い血——ではなく。

その先のさつきまで魔物がいた場所へと、アルフレリックは呆然と見つめていた。

少女が、いた。

喉元を切断され、倒れ伏した魔物を足蹴にして、ウサミミを生やしたアルフレリックと同年代に見える右腕に金属色の腕輪を付けた一人の少女が血に濡れた魔物の牙を研

いで作ったナイフを片手に、悠々とアルフレリックへと視線を向けていた。少し血が付着した髪はその汚れさえも一層美しさを湧きたてるような鮮やかな浅黄色をしており、瞳は太陽の光を反射している水のように美しい水色の瞳をしている。顔つきは大変整えられておりもし仮に少女が人族だったのならどこかの貴族の娘だと思われるだろう。

……もつともそれらの美しさは少女の着ている最低限しか隠していない布のせい directions を変え、アマゾネスを彷彿とさせるのだが。

アルフレリックは突然現れた少女に驚きを隠せず口をパクパクと閉開するのだがうまく言葉が出てこない、そんなアルフレリックを少女は若干気まずそうにしながら「……あー」と言葉を零した。

「わりい。まさかこんなところに亜人がいるとは思わなかったんだ——って、お前。森人族だろ？まだ幼いくせにこんなところにいるんだ？」

「うツ、そ、それはですね……痛ッ!？」

男寄りの言葉遣いに反して可愛らしい高音の言葉が少女の口から疑問として紡がれた。

アルフレリックは何故自分が樹海にいるのか説明しようとするや命の危機が去ったからか左足の傷が今更ながらに痛み出し、痛みに悶えてしまう。少女は「まずは治療が



先か……」と眩きながらがみ込み、自分の腰回りに巻いてあるベルトに括りつけた試験管のようなものの中から澄んだ緑色の液体を取り出すと――

「ほらよっ」

「えっ？な、ギイツ――!!？」

――緑色の液体をアルフレリックの左足にぶっかけた。

瞬間――緑色の液体が傷口に触れた途端、ジュワツ！と焦げたような音と蒸気のような煙が生まれ、アルフレリックにさつきまでの痛みとは比べ物にならないほどの激痛が襲い掛かる。悲鳴を上げなかつたのは奇跡に近い。

アルフレリックは無言のまま痛み悶え、恨めしそうに少女を睨みつけようと顔を上げるが煙が晴れた左足が瞳に映ると次の瞬間――目を剥く光景に少女への怒りを忘れて去った。

「き、傷が、治ってる……ッ!？」

「動かすなよ？あくまで応急処置だ、血が外に出ないようにしているだけで別に傷が治ってるわけじゃない。本格的な治療は家に帰らないと無理だ、運ばせて貰うからな」そうさつきまで血が止まることなく出血を続けていた左足の切り傷はさつきの緑色の液体によるものか傷口は茶色に変色した瘡蓋に変化していた。

そう告げる少女の言葉に半ば相槌を打つように頷いてしまったアルフレリックは次

の瞬間、グインツ!とどういった術か自分と同年代らしい少女は軽々と自分の身体を持ち上げ、歩くどころかかなりのスピードで走り出した。

「え、あつ、ちよつ!待ってくださあああああああああああああああッ!!?」

「あん?風でよく聞こえねえぞー!」

突然の加速による衝撃と前から後方へ一気に抜けていく景色、身体能力が隔てておらず且つ子供であるアルフレリツクにはその衝撃はあまりにもキツイものであり――

「――う、おうえ……吐きそう――」

「ギヤアアアアアアアアア!!?てめえ、命の恩人になんてことしようとしてんだ!!?吐くなよつ!絶対になつ!」

「も、もう少し速度を落としてください……オエエ――」

「あああああああつ!!落とす!落とすから絶対に吐くなよつ!」

――途中、そんな一幕が会ったりもしたらしいが割愛させてもらおう。



「――よし、これで治療完了だ。軽い運動までなら大丈夫だが激しい運動は避けてくれよ」

場所が変わって外から家の中へ。

アルフレリツクは少女に背負われて現在、「フェアベルゲン」内部の兎人族の集落――

ではなく外部の少し外れた一本の大木から内部をくり抜くように作り出された二階建ての少女の家らしき場所で少女に治療をしてもらっていた。

少女が言っていたように本格的な治療は住処に帰らないとできないということは本当だったようで少女の家にはアルフレリックが見たことも聞いたこともない液体や植物がたくさん鎮座しており、外とは全くの別世界と化していた。

「……すみません、助けていただけるところかわざわざ治療して頂きありがとうございます。この恩はいつか返します。僕は森人族のアルフレリック・ハイピスト、アルフレリックと呼んでください。貴女はお名前は？」

「ララシーク・ハウリア……だ。こちららもララシークでいい。気にすんな、別に恩というほどじゃねえよ。此方しても都合が良かったからな」

「都合？」

少女——ララシークの言葉にアルフレリックは首を傾げて聞き返すとララシークは「なんでもねえよ」と返答した。途中アルフレリックの耳に「試作薬を使う機会ができてラッキーだな。効果は上々、副作用は今のところなし……と」という不穏な言葉が聞こえてきたが聞かなかつたことにする。

紙にメモをとるように何やら書いたララシークは部屋の端にかけてある布に手を取り、いつかいたのか大量の汗を布で拭い、崩れ落ちるように近くの椅子に座り込んだ。

さつきまでの飄々とした表情とは違い、息は荒く表情も苦しそうだ。

「ちよつ、大丈夫ですか!？」

「……………あー、気にすんな……………ちよつと疲労が溜まっているだけだ……………チツ、疲労時間を遅らせるだけか……………また作り直しか……………」

慌ててアルフレリックが駆け寄ろうとするもララシークは疲労した体に鞭を打つかのように手をヒラヒラとさせ、止めた後、ゆつくりと右腕に付けていた腕輪を外し、近くの木の机へと置いた。

フウと荒い息を吐きながらララシークは今更ながら、とでも言うようにアルフレリックへと視線を向けた。

「……………そういえばアルフレリック、お前は どうして樹海にいたんだよ? 詳しくは知らねえけど、確か掟では「フェアベルゲン」には子供は出られないんじゃないかなかったか?」

「……………それは」

ララシークの言葉にアルフレリックは僅かに顔に影が差した。

なんともないようにララシークは「フェアベルゲン」の掟を知らないと言ったがそれは本来はありえないことである。亜人族は基本的に「フェアベルゲン」に住んでいるため、当然「フェアベルゲン」の掟を知らない者はいない。何故なら掟を守れない者はいかなる理由でさえ罰則を受けるし、最悪追放処分になるからだ。

では何故、ララシークが掟を知らないのか？、という疑問はある一点の答えが出てくる。

それはつまり――

(……………兎人族に対する亜人族の差別、ですか)

おそらく、考えられるのはそれだろう。

兎人族は聴覚や隠密行動に優れているものの、他の亜人族に比べればスペックは低く、突出したものが無いので亜人族の中でも格下と見られる傾向が強い、その認識はすべての亜人族共通認識であり、性格も温厚で争いを嫌っているので熊人族を主に様々な種族に軽蔑されているのだ。

……………もつともアルフレリックにはその認識をララシークと出会って数刻も経っていないが変更せざるをえなくなっているが。

アルフレリックは此処に連れてきてもらう時の熊人族を超えた身体能力に頭痛を覚えながら、ララシークへと自分がなぜ樹海にいるのかを説明していく。

本来ならば嘘をでっち上げたりするがララシークは自分を魔物から助けてくれたばかりか治療までしてくれたのだ。流石にアルフレリックは彼女に嘘をつきたくはなかった。

しかしどうしたことだろうか、アルフレリックが説明し始めると時間が経つたびにラ

ラシックは今にも吹き出すのを堪えるかのようにバンバンと机を叩き出すではないか。  
「……………何ですか、さつきからそんな笑い堪えるのが限界だみたいな顔をして。何かおかしいことがありましたか？」

「——ふ、フフツ！——も、もうダメだ。アハツ！アツハハハハツ!!お、お腹がつ、お腹が痛いツ！馬鹿だツ、バカすぎる！草を見つげるためだけに樹海に出かけるツ!?!しかも武器を持たずに!!ヒツ！ヒヒヒツ！アーハツハツハツ!!」

何度も笑い転がるかのように笑いで悶絶するラシックにアルフレリックはムウと不満そうに口を尖らせた。確かに武器を持たずに樹海に出たのは迂闊だと思うが流石に笑いすぎじゃないか、と思うアルフレリックだが人族が未だに侵略することができない樹海に武器なしで動くのは完全に自殺行為なのでラシックが笑うのは当然である。

「——あー、笑った笑った。わりいな、まさか好奇心だけで樹海に入る奴なんて初めて見たんだ」

「……………ソウデスカ」

「おいおい、拗ねてるのか？」

「拗ねてないです」

ケラケラと笑うラシックにアルフレリックは仏頂面で言い返すがあまり効果が無いようだ。するとラシックはふと笑いを止め、少し考え込むような仕草をした後、チ

ラリとアルフレリックへと視線を向けた。

「なあ、アルフレリック。お前さつき私に恩を返してくれると言つてたよな……?」

「……………ええ、まあ。自分ができることならば」

アルフレリックはそう返答したが十人中全員が振り向いてしまうような美しい顔つきをしたララシークの表情の変化を見て、「あ、選択肢間違えましたね」と即座に理解した。何故ならララシークの表情は——いや、正確には彼女の瞳が爛々と輝いていたから。

そう、それは例えるならば——

——活きのいい実験体モルモットを見つけたような瞳で。

「よしーじゃあ明日からここに来い。まさか誇りを大切にする森人族が来ないわけがないよなあ?」

そう言つて美しい容姿が台無しになるレベルで実にイイ笑顔を浮かべるララシークにアルフレリックは「ハイ、ワカリマシタ……」とがつくりと肩を落とすのだった。

これが彼らの始まりの出会い。その日、ララシークが行方不明になるまで続いた異なる亜人族同士の実に珍しい関係。

そんな彼らの関係は――

――世間一般では雑用と主の関係といふなんとも日常にありふれた関係だった。



## ララシーク・ハウリア②

翌日。

動きやすい手軽な服装に着替えたアルフレリツクは革靴を履きながら自分の母親へと遊びに行くことを伝えた。

「それじゃあ、行つてきます。お母さん」

「ああ、待ちなさいアルフ。遊びに行く時、間違つても防壁付近には近づかないようにしなさい」

「……どうしてですか？」

貴方のことだから大丈夫でしょうけど、と付け加える母親にアルフレリツクは疑問符を上げて聞き返した。「フェアベルゲン」は魔物からの侵入を防ぐために天然の樹木の防壁に取り囲まれている、過去に一度も魔物からその防壁が破られたことはないため唯一の安全地帯となっているというのに一体どうしてだろうか？

「お父さんが言っていたわ。最近では樹海の魔物の様子がおかしいんですって」

曰く樹海調査団の調べによると最近の魔物の生息地域が変化しているらしい。ある

地域には生息していた魔物が消え、ある地域には生息していなかった魔物が新たに巣を作っていたことが確認されたらしい。

何故そんな情報をアルフレリックの両親が知っているかというのと彼の親は一族の中でも高い地位に就いており、中でも父親は族長直々の部下の地位に就いているため、内部事情に詳しいのだ。アルフレリックが座学や知識を積極的に学ぶことができたのは両親のおかげでもあるだろう。

「最近、アルフが外に出てくれるようになったのは嬉しいけれどもお母さん万が一怪我しないか考えると心配なのよ——あなたは特別なんだから」

「……………はい、分かりました母さん。それじゃあ、いつてきます」

我が子を心配するようにアルフレリックへと言葉をかける母にアルフレリックはいつものように返答して自宅を出て行くのだった。

◆ 涼しい風が森を駆け抜け、アルフレリックの肌を撫でていく。

その風は樹海特有の青臭い匂いではなく、爽やかな空気となつてアルフレリックの心を穏やかにさせていく。

しかし、風が感じなくなれば再びアルフレリックの心は騒ぎ出し、僅かだが手も貧乏揺すりのようにカタカタと震えてしまう。

そんな暗い表情をしたアルフレリックは一度深呼吸をした後、ゆっくりと目の前に鎮座する大樹の中に作られた扉をコンコンとノックした。

すると数秒後、ガチャリという音と共にゆっくりと覗き込むようにボサボサな浅黄色の髪を持ったララシークが扉から現れ、此方へと視線を向けると心底驚いたように目を瞬かせた。

「……………マジか、本当に来たのかよ」

「……………森人族は恩を大切にしますから」

そう言つて半ば諦めたように呟くアルフレリックにララシークは暫く推し量るような視線を向けるものの、ま、ちょうどいいか！とでも言うようにアルフレリックを室内に招き入れるのだった。

昨日訪れた木を切り取るように作られたこの部屋は改めて見ても一人暮らしをするにしてもかなり広い。内装は簡易的なベットに木造の椅子や机、それだけ見れば質素な部屋だが、未だに慣れない謎の液体が入った幾つもの容器や、何の機能があるかさっぱりわからない設備のせいで不気味さが際立ってしまふ。

「それで、来たからには後は付けられてないだろうな？」

「ええ、親にも遊びに行くと言つておりますし、貴女に教えてもらつた隠し通路を通りましたから」

椅子に座りながら確認するように尋ねるララシックにアルフレリックはコクリと頷きながら答える。前回説明したアルフレリックが通っていた隠し通路はなんと嘗てララシックが一人で作り、使用していたものらしい。現在は他の隠し通路を通っているため使っていないものの、まさかアルフレリックがそれを利用して出入りしているとは思わなかったらしい。

しかしアルフレリックが使用していた隠し通路は掘った土の強度が月が経つほどに弱くなっているらしく、それが原因でララシックは使用するのを止めたらしい。しかしその隠し通路が使えないのであればアルフレリックは「フェアベルゲン」に帰ることができなくなってしまう。そんな時、ララシックが隠し通路を見つけたご褒美とでもいうかのように三つほどの隠し通路を教えて貰ったのである。今回アルフレリックがララシックの下に来たのもその隠し通路の一つを使ったからなのだ。

アルフレリックは隠し通路なのにそう容易く教えて構わないのか？と質問すると「別に構わねえよ、あと50個以上「フェアベルゲン」に侵入できる隠し通路はあるしな」という恐ろしい返答が帰ってきたので何も言えなくなったそうだ。

ちなみに母親に巨大樹の防壁に近づくなど言われたアルフレリックは防壁に近づかず樹海へと迎える隠し通路を使用して「フェアベルゲン」の外へと足を踏み入れていた。……なんという屁理屈だろうか。

「……それで、僕に手伝って欲しいことはなんですか？」

「——ああ、これだ」

ララシークはそう言つて木材で作られた紙に細長い炭を筒状の容器で覆つた鉛筆モドキでババツと文字を書き、アルフレリックへと放り投げた。慌てて紙を何度も空中に浮かび上がらせながらもなんとかキャッチしたアルフレリックはララシークへと非難の目を向けながらも紙に書かれた内容を——正確には書かれていた単語を見て、目を見開いた。

「そこに書かれてあるすべての物を採取してきてくれ」

「これつて……」

紙に書かれてのは、植物名。樹海に生息していると云われている数種類の植物だつた。中には樹海の中ならばどこにでも生えていそうな植物も今の季節でしか生えず且つ数の少ない植物も存在する。

だが、それらは全てアルフレリックが知識として知っているものだった。

「ああ、ここの樹海に生息している植物だ。だが私はそれほど植物の原生地に詳しくないんだ、だから——」

「——僕が代わりに採取するというわけですか」

「ああ、わざわざ植物の観察のために一人で樹海に出るお前なら植物を間違つたりしな

いし、場所も知っているはずだろ？」

そう言つてニヤリと笑うララシックにアルフレリックは、うえーと引き攣るような表情を取りながら声を震わせながら確認するように喉を絞るかのよう尋ねた。

「……まさか、一人で探しに行けと言うわけではないでしょうね？」

「流石にそんなことはしねえよ。私もちゃんといつていく」

そう口の弧を上げながら返答するララシックにアルフレリックはホツと小さくため息を吐いた。樹海は凶暴な魔物が跋扈する場所だ、先日襲われたことがトラウマになっているアルフレリックには一人はかなり辛いことであるため、前回の化け物地味た……華麗な動きを行ったララシックが来てくれることはアルフレリック的にも大変ありがたかった。

そう心の中でため息を吐いたアルフレリックを差し置いてララシックは「まあ——」と言葉を続けた。

「——手伝つてもらおう以上集め終えるまで返さないけどな♪」

◆ アルフレリックは泣いた。

「……ひーまーだー」

青草色の小さな蕾を携えた目的の植物をララシークからもらった刃物によって優しく傷つけ、採取していく。この植物は蕾の時に刃物などで一気に強い衝撃を与えてしまうと破裂してしまい、紙に書かれてあるこの植物の蕾が採取できなくなってしまう。だからといって弱い衝撃を与え、時間をかけすぎると今度は蕾の保存性が急激に下がってしまう。

つまりこの蕾を採取するためには適切な力加減が必要であり、そこは採取する者の腕次第によって蕾の利用性が変わっていくというわけだ。

「ひーまーだー」

蕾を採取すれば今度は朱色の葉を携えた全体的に赤色一色の植物を採取する。この植物は目立ってそうな色をしているのだが他の植物の影に隠れて群生するという習性がある。植物の高さも数センチ程度なので大変見分けづらい。自分も最初はいくら探してもなかったのでよく困ったものだ。

「ひーまーだー」

ブチッ！

「ひーーーーー……ま……」 「うるさいですツツ!! 黙って周囲の警戒を  
してください!! というか貴女が頼んできたのに自分はだらけてるってどういうこと  
ですか!? 自分で採取すればいいじゃないですか!!」

アルフレリックの絶叫に満ちた怒号が平らな石らしき上でだらだらと寝っ転がつて  
いるララシックへと向けられる。アルフレリックはふざけんなーと表情に一面怒りを  
染め上げてビシッとララシックへと指を指した。

採取を行って約2時間が経過した、既に採取する植物の名称が書かれてある紙は残り  
一つを除いて採取完了しており、全ての植物が採取完了するのもはや数分も掛からな  
いであろう。

だというのにアルフレリックが怒り心頭になっているのは自分が魔獣に怯えながら  
も必死に集めているのに当の護衛は警戒をしてくれないどころか現在ほだらけ始め  
ているララシックの態度が原因だった。

「といつてもなあ……近くに魔物はいない以上無駄に警戒してどうするんだよ? 無駄な  
体力を使うだけだろ?」

「どうしていないとわかるんですか! 近くの草陰に潜んでいるかもしれないじゃないで



すか!」

「それはねえよ——」

——何年、樹海こゝろを歩き来したと思ってる?

そう告げるララシークの言葉に気圧されてアルフレリックは息を呑む。

ララシークは「フェアベルゲン」の兎人族の集落から離れた場所に小さな家らしきものを立てていた。だが、ここで疑問に思わないだろうか?

ララシークはどうやって集落から離れた場所に拠点を作ることができたのだろうか?と

最初、アルフレリックは同じ兎人族に手伝ってもらったのかと思ったのだがすぐにそれは無いと否定した。兎人族の中でも確かハウリア族は元々優しく家族思いの温厚な種族である、わざわざそんな場所に拠点を作ろうものならば即座に家族に止められるだろう。

ならば考える可能性は一つ、信じられないことだがおそらく彼女は自分ひとりでの拠点を作つたのだ。

魔物達が跋扈する樹海の中、あの家を作るのには膨大な時間と材料、そして知識が必要なはずだ。それらを彼女はたった一人で行つたのだ。これはもはや、才能などというものではない、『異常』だ。

そんな彼女の言葉の重みを知っているアルフレリックは黙るしかなかった。数度来たことしかないアルフレリックと数年も樹海を行き来していたララシークとは経験が圧倒的に違う、樹海を何度も行き来しているララシークにとってここは自分の庭のようなものだろう。

そう、納得するようにしたアルフレリックは「……わかりました」と呟き再度採取へと行動を移そうとして――

「――つ、やべ。化粧術けそうじゆつ【魔装転化『壺式』】」

――ふと、己の耳に入ってきた彼女の言葉に耳を疑った。

えっ、という言葉をアルフレリックが紡ぐ間も無く、刹那――背後から引き寄せられる感触と共に世界が回る。

聞きなれない甲高い音を聞き、自分がララシークに放り投げられたという事実をアルフレリックは他人事のように感じながら――地面に頭から着地ならぬ着弾した。

「おいッ!？」

「あ、悪い。ちよつと力みすぎた」

眩む視界と着弾時の頭痛にアルフレリックは頭を抱えて蹲り痛みで悶絶してしまう。

「い、いきなり何をッ――ヒイツ!？」

一体何が……と未だに痛みが残る頭を摩りながら突然ララシークに放り投げられた

ことを恨めしそうに顔を上げると瞬間、アルフレリックは視界の先に見えたものを見て一瞬にして恐怖と驚愕の混じった表情へと早変わりすることとなる。

そんなアルフレリックを差し置いて此方の視界の先でララシークはくるりと此方へと振り向いた。

「おっ！よかつたつ、案外大丈夫そうだな」

「——え…………いや…………ソレツ………………！」

「——ん？…………ああ、コレのことか」

ララシークはそう言いながら今にも彼女の首に噛み付こうとする狐型の魔物を片手で魔物の口元を掴み押さえつけていた。

言葉が出ないとは、まさにこの事だ。目の前で起きたことが信じられないとアルフレリックは啞然としてしまう。

さも当然のようにララシークは魔物を片手で押さえつけ、現在手持ちのナイフで喉元を切り裂き魔物の息の根を止めたが本来魔物は亜人族ひとりで仕留めることは行われられない。

何故なら亜人族は身体能力が秀でているものの人族や魔族のように魔法を使うことができないという欠点が他種族とは違って魔物を仕留めることが難しい要因となっていた。

魔法が使うことができないということは魔物を仕留める時、必然的に接近して剣や槍などで仕留めなければならなくなる。もちろん弓という武器もあるにはあるが『地球』とは違い『トータス』にとって弓の有効性は魔法が使えてこそである。

『トータス』に存在する人族や魔族が製作する弓は「技能」と共に併用することで力を発揮するように作られているため、自ずと『地球』とは違い弓の耐久力を上げていく方向へと作られてきた。当たり前だ、例えば矢の威力を上げる「強射」や狙った場所へとある程度精密に飛ばすことができる「精密射撃」等の技能があれば弓に求められるのは耐久力だけだ、ましてや魔法がある以上わざわざ弓で射る必要性があまり無い。

故に亜人族は人族や亜人族から技術を盗むことはできず手探りで弓製作を行っており、ましてや材料は樹海からしか取る必要がある以上ほとんど木材である。

結果として亜人族が作れる弓は射程距離は良くて50メートル前後しかない単弓セルフボウやそこから派生した短弓ショートボウや長弓《ロングボウ》が限界だった。

地球のように複数の素材を組み合わせ、より威力を！より遠くへ！を目指した中には最高射程距離600メートルの頭のおかしい……ピーキーなモノも存在する複合弓コンボジットボウやモ〇ハンに登場するような素材にカーボンを使う等近代的な弓、洋弓コンパウンドボウ、クロスボウクロスボウ、弩などは一切存在しないのである。

## 閑話休題

話を戻すが亜人族が単独で魔物を狩ろうとしないのは魔法のように殺傷性の高い戦闘手段を持つていないため、安全を顧慮してのことである。単独でも中型魔物を軽傷未満で狩ることができるのは最も身体能力が高い大人の熊人族ぐらいだろう。対して人族や魔人族には「身体強化」等といった技能も使用することで亜人族と近い身体能力を手に入れることができるのである、その辺りも亜人族が虐げられる理由の一つとなっている。

つまり、結論からララシークは未だ子供と言える年でありながら大人の熊人族と同じ身体能力を持った兎人族ということになるのだ。空いた口が塞がらないとは正にこのことだろう、一体どんな芸当だろうか。

アルフレリックはララシークの異常性を目の当たりにする度に胃が痛む幻痛を感じた。

「———とかッ、やっぱり魔物が近づいてきてたじゃないですか！ちゃんと警戒しててくださいよ、ララシークさん！」

物言わぬ肉塊となった狐の魔物を端から端まで観察するララシークへとアルフレリックは体を震わせるように言葉を投げかけるがララシークに心底アホを見るような

視線を返される。

「……あのなあ、魔物に襲われたのはお前が大声を上げたせいじゃねえか。むしろ助けてやっただけ感謝しろよ」

その正論に流石にアルフレリックも「うぐっ……」とたじろいでしまう。確かに魔物が近づいてきた可能性はララシークが警戒をしていなかったので接近を許してしまったというより圧倒的にアルフレリックがあれほど叫んでしまったせいだ。魔物を呼んでしまった可能性の方が高い。つまりアルフレリックの自業自得である、ララシークを責めるのは完全にお門違いというものだった。

「それになあ——」

瞬間、アルフレリックの頬を掠める閃光。

ララシークはため息を吐きながら太ももに巻かれた紐に幾つか取り付けた小型のナイフを投げたということ。アルフレリックは背後から獣の悲鳴が聞こえた時に理解した。

「キャイン!?!」

「うえっ!?!ハヒッ!?!な、なな何が……!」

無意識にアルフレリックが振り向けばそこにはララシークが投げた小型ナイフが片足に深々と突き刺さった先程襲いかかってきた魔物と同じ同族が此方を睨めつけてい

た。

否、それだけでは留まらない。

先程までアルフレリックが採取していた草影から、木の陰から、蔓の隙間から、十を超える魔物の紅の眼光が幾つもアルフレリック達を囲みこんでいた。

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「——魔物が単独で出るわけ無いだろ？群れだよ、群れ。私らはとづくに囲まれてるんだよ」

「……そんなんっ……前回は一匹しか出てこなかったでしょう！」

「ありやあ、例外だ、群れから追い出されたはぐれだよ。つまりアルフレリック、前回の前はツイてたってことさ」

アルフレリックは絶句した。

あれほどアルフレリックに恐怖を植え付けた魔物がはぐれ？

それはつまり、あの狼の魔物やこの狐の魔物は群れでなければ生きていくことが難しい生態系でも下のほうに位置する部類だということになる。

アルフレリックが襲われたということを認識できていない程の身体能力を持つ魔物が？

(……………そこまで、なんですか……………?)

この樹海は。

この生態系は。

そこまでも、厳しい場所なのか？

アルフレリックは今更ながらに「フェアベルゲン」の掟で15歳以下の亜人族が「フェアベルゲン」の外に出てはいけない理由を理解した。これだったのだ、恐るべき魔物達の脅威から子ども達を近づけさせない気休めの優しさだったのだ。

ああ、だがしかし。

なぜこれほどの絶体絶命な危機に対し――

「――んじゃ、さっさと片付けて植物を集めるぞー。アルフレリック、せっかく集めたモノを落としても困るから動くなよ。集めた植物を一つでも落としたら回収し直す時に手助けはしないからな」

――彼女はそうやって自然体のままでこちらに笑いかけることができのだろうか？

そう告げながら大型ナイフを片手にアルフレリックの前方へと魔物達から立ち塞がった。

怯えもなく、恐怖もなく。

さも当然のように、ララシークはアルフレリックの目の前に魔物達へ立ちふさがった。



そんな彼女の行動にアルフレリックは目を疑った。

「まさか……戦うんですか!? 無茶です! こんな数じゃあ大の大人ですら一人では闘り殺しに——」  
「だったらなおさら逃げられないだろ、バーカ。いいからそこを動くなよ、勝手に動いたら守ってやらないからな」

「うぐっ……死なないでくださいよ」

「安心しな、そうなったらアルフレリックも死ぬことになるだけさ」

そのララシークの言葉にそれも嫌だ!、とアルフレリックが嘆いた瞬間。偶然かそれとも隙を突いたのかはわからないがアルフレリックが頭を抱えて嘆くと同時に魔物の群れが一気に二人めがけて襲いかかってきた。

ひっ! と悲鳴を上げるアルフレリックを差し置いてララシークが握っている大型ナイフを器用に手で回転させながら前傾姿勢となり最も接近している魔物へと足を踏み出した。

瞬間、彼女の姿がぶれる。

魔物とララシークの両者の距離が瞬きの間にゼロとなり、交差。鉄臭い紅い軌跡が刹那のうちに描かれ再度離れると同時に嘗て魔物だった肉塊は草木を血で彩りながら倒れ伏す。

肉塊へと成り果てた魔物には目もくれずララシークは次の獲物へと加速する。

二匹目の魔物はララシークの首元へと噛み付こうとするがララシークは滑り込むように体勢を下げ、飛びかかった二匹目の魔物の下へと潜り込み、さながら撫でるように魔物の喉元へとナイフを添えて搔つ切った。

体勢を崩したララシークへと好機とばかりに三、四匹目の魔物が飛びかかるがそうすることを予想していたのかララシークの口元が歪んだような笑みを浮かべる。

シャキンという金属が擦れるような音が響き渡り、樹海に吸い込まれていく。

その発生源はララシークの太ももに幾つも取り付けられている小型のナイフだ。ララシークは刹那の内に小型ナイフを抜き放ち、三匹目の魔物へと投擲する。

風切り音に紛れて小型ナイフに喉元を突き破られ、空気音に似た断末魔をあげる三匹目の魔物を無視して四匹目の魔物がララシークの喉笛に噛み付こうと飛びかかるが遅い、遅すぎる。

仲間が目の前で死んだことで動揺し、僅かに挙動が遅れている時点で喉元に噛み付くどころかララシークに触れることはあり得ない。

ララシークは四匹目の魔物がララシークの肌に触れるよりも先に両手を地面につけて体を旋回。

鋭い回し蹴りが弧を描いて四匹目の魔物の胴体へと直撃し、メシメシといった骨の軋むような音が魔物の胴体からララシークの足を通じて響き渡る。

さつきまで生きていた肉塊が吹き飛ばされ近くの木へと激突し、木の幹へと血の跡がへばりつく。

たった数十秒も経つ前に四体の仲間が死骸へと変貌したことに流石の魔物達も動揺が奔り、未だララシーク達の周りを取り囲んではいらぬものものそう簡単に襲い掛かることはできず、魔物達は躊躇した膠着状態に陥ってしまう。

アルフレリックを守っているために動けないララシークと。

隙がないため攻めることができない魔物の群れ。

どちらも攻めることができずジリジリと間合いを図るその膠着状態が崩れたのは周りを囲う魔物達の中でも一際大きな狐の魔物があげる一声だった。

「ウオオン!!」

その一声に魔物達の群れは唸り声をアルフレリック達へと向けるもの徐々にアルフレリック達から離れていく。おそらくあの一際大きい狐の魔物が群れの主なのだろう。

ガサガサと音を立てて草むらへと去っていく魔物の群れ、その音が聞こえづらくなってきたほどでララシークがゆっくりと血を拭いた大型ナイフを皮鞘に戻し、呟いた。

「……………引いた、か」

「いやー、優秀な長でよかったよかった」と気楽に言うララシークの言葉にアルフレリックは漸くピンツと張っていた緊張の糸が緩んでいくのを感じた。意図せずに深いため

息が溢れ、恐怖で固まっていた筋肉が緩んで力が抜けていくのを感じる。

「……おいおい、アルフレリック。まさかもうへばったのか？ いくらもやしても体力なさすぎじゃないか？」

「……………」

ケラケラと煽ってくる彼女の言葉にアルフレリックは言葉を返す体力は無かった。肉体の疲労は少ないが精神的疲労はアルフレリックの体を重くさせていた。

なにせアルフレリックは魔物に遭遇して命に危険にさらされるのは今回で二回目なのだ、いくらアルフレリックが早熟していたとしても精神的疲労は決して少なくはないのだ。10歳を舐めないで欲しい。

「ほら、さっさと立ち上がれ。あと一つなんだろう？」

「……………ツ！……………ええ、そうですね」

そう言つてガシツと軽く蹴つてくるララシークに、鬼だ。借りなんか返そうとしなければよかつた。いや、でも森人族の矜持として借りは返さないと……うぐぐ……と内心毒づきながらも自分の一族の誇りのせいで後悔することすらできないアルフレリックは一息を入れて再び立ち上がり、採取行動を開始した。

「ところで最後のひとつは何処にあるのか目処は立っているのか？」

「ええ、まあ……最後のは前回一度採取したことがありまして、大体ここの辺りに――

あ、ありましたっ」

「え、本当か!」

アルフレリツクは最後の一つの植物である茎は緑色だというのに葉は紫色をした植物を採取して、驚愕の表情を浮かべてこちらに駆け寄ってくるララシークへと見えるように掲げた。

「はい、これで必要なものは最後ですよね?」

「ああ! いやー助かったぜ本当に! 森林の中で大声を挙げるわ、魔物に襲われているのに尻餅をついたまんま動こうとしないわと何がしたいのかわからなかったが、植物採取には居てくれて本当に助かったッ!」

▼ アルフレリツク は 50ダメージ を 食らった 。

ざつくりと心に傷をつけてくるララシークの言葉にアルフレリツクの精神は綺麗にノックアウトされた。もちろん力尽きる方のノックアウトで。しかもそれは顔つきは森人族でも敵わない程整っているララシークの満面の笑顔でのアタックだ、おそらくララシークにとっては悪気はないんだろうが……結局アルフレリツクの心がえぐられたことには変わりない。

やったやった、と喜ぶララシークの隣で地面に手をつけて落ち込むアルフレリツク。

これらの光景は樹海で起こるにはあまりにシニールだった。

そんな中、どうにかララシークよりいち早く復活したアルフレリックはふとララシークのことで疑問を抱いた。

「……………—そういえば、ララシークさん」

「これでようやくアレの制作にまた一歩すすめ——ん？どうした？」

「ずつと気になっていたんですが…今回採取した植物を一体何に使うんですか？」

「……………それは」

それはララシークが採取した植物を何に使うかということ。

ララシークが依頼した植物にはすり潰して傷を治す傷薬に使われる薬草や腹の痛みを整えさせる草、中には食べればしばらくの間、体の感覚が鈍くなり痛みなどを感じない草等と一貫性があまり無い。強いて言うならば食べれば致死となる毒草がないぐらいいだろうか。

傷薬？いや、だったら毒草はいらないはずだ。

ならばララシークはいったい何を作ろうとしている？

アルフレリックの言葉にララシークは虚を突かれたかのように驚いて、ピタツとまるで蛇口の水を止められたかのように口を閉じた。

アルフレリックには表情が見えないほどに顔を俯かせ、沈黙を保ったままだ。

……………マズかった、のだろうか？

一向に返答がないララシークにアルフレリックは聞かなかった方が良かったのだらうかと思ひ始める。

「——す、すいません、ララシークさん。僕が知る必要ありませんよね、さっきの言葉はなかったことに——」「……いや、いい」——え?」

慌てて撤回しようとしたアルフレリックの言葉を小さな、しかしハッキリとしたララシークの言葉が遮り、ララシークの顔が僅かに上がる。彼女に浮かぶ表情の色は戸惑い、不安そして——

(……怯えている?)

何故? いったい何に?

アルフレリックにはいくつもの疑問が浮かび上がるがそれらの疑問が解消される前にララシークが言葉を紡ぐ。

「……手伝ってくれたついでだ。どうせ減るものじゃないしな」

そう呟いてララシークは右腕に着けてある腕輪を左手で撫でるように触って、微笑した。少し悲しそうに、儂く印象づける笑みを浮かべて。

「今回採った植物はな、あるものを作るのに使う予定なんだ」

「あるもの……ですか……?」

「まあ、な……それは——」

そう一拍を置いてララシックはアルフレリックへと言葉を紡ぎ――

――ぐちゃりと、腐った果実が握り潰されたような粘着質の籠った音がアルフレリックの耳を埋め尽くした。

「……………え？」

何かが、落ちた。

アルフレリックとララシックの間に。

撒き散らされる真っ赤に染まった液体と、鼻を塞ぎたくなるような鉄臭い匂い。

「こい、つは……………」

首だ。

魔物の、首だ。

見たことのある、魔物の首。そう、この首はアルフレリック達を襲った魔物の長――

――ッ!!

「なん、で……………？」

引きちぎられたような魔物の長の首の傷痕。



先程魔物達を退けてから数分も経っていないのに、この惨状。あまりにも予想外な事態にアルフレリックの脳は断片的な情報を取り入れようと高速で回り出す。

殺された？ どうして——？ 襲われた？ 何に——？ 首を捻じ切るように切断されている？ 一撃で殺した——？ 群れの長が死んだ？ つまり長すら逃げる事が出来なかった——？

本来魔物達の群れの長とは最も強い魔物になるわけではない。強さと同時に危機察知能力、即ち臆病であればあるほど群れの長になり得るのだ。だが、そんな群れの長ですら死んでいるということは——ッ！

いうことは——ッ！！

「——アルフレリック………！今すぐ此処を離れ——」

同じ結論に至ったのだろう。ララシークがアルフレリックの身体を掴み、今すぐ此処から離れようとして——

——グチュリ、となにかを踏み潰したような音がした。

何度も、何度でも何かを潰して、音を立てて、こちらへと近づいてくる『何か』。

二人の理性が逃げると肉体へ命令し、同時に本能が今逃げれば殺されると叫びあがる。

矛盾した二つの命令、足音のする度上がる呼吸数。

そして、ついにその『何か』が森林から姿を現した。

『遊びに行く時、間違っても防壁付近には近づかないようにしなさい』

一言で言えばそれは『黒』だった。

全身を蒼黒の鱗とそこから生えた黒い体毛で覆う四足歩行の目測6メートル程の化け物。

前脚には透き通った黒水晶のような各三本鉤爪と滅びた竜人族の竜化形態で見られたといわれる前脚と繋がった双翼。

後ろには同じく蒼黒の鱗と体毛に覆われた二メートル台の長い尻尾が重力など知らぬとばかりにピシッ、ピシッと何度も地面を叩き、紙面に亀裂を生み出す。

頭部には暗がりの中でもわかるような紅玉の双眸に、発達した大きな耳と小さなしかり鋭い牙がアルフレリック達を覗かせる。

『最近では樹海の魔物の様子がおかしいんですって』

目の前の存在と樹海の魔物達となんて比べることにすら値しない。

威圧が違う。

怖気が違う。

存在感がまるで違う。

今朝の母親の言葉が無意識にアルフレリックの脳内に反芻する。

ああ、分かる。理解わかつてしまう。

コイツだ、この化け物だ。

樹海に異変が起きているのも、先程二人に襲い掛かった魔物の群れを殺したのも。

目の前の化け物に付着している赤い返り血がそれを証明してしまっている。

「ガルルルウ………」

見定めるかのように呻き声を零す化け物に対しアルフレリックは動けない。

あまりの恐怖に目の前の化け物から目を逸らすことも、声を出すことすら敵わない。

しかしそんなアルフレリックの状態など知らんとばかりに化け物の赤い瞳が二人を

写し――

――色が、変わった。警戒から捕食対象へと。

「あ

」

刹那、アルフレリックは死を確信した。

何か前兆があつたわけではない、なにか異常が起こつたわけではない。

ただ漠然と、そう理解したのだ。

その証拠に、あれほど緑一面だつた森林の視界が黒く染まり――

「――【魔装転化『弑式』】 ツ!!」

――瞬間、金属音と同時に目の前で火花が弾け、腹の圧迫感と共に先程の視界が嘘だつたかのように元の明るい視界へと変化した。

まるで空へと落ちていくかの如く急速に離れてゆく地面と、そのさつきまでいた地面を黒い影が踏み締めて粉碎し、陥没させる。

「――は……………!!?」

「喋るなツ！舌噛むぞ！」

「ガルアアア!!」

心身を震えさせる咆哮を上げ、此方を睨み付ける化け物を見下ろし、且つ急速に遠ざかる姿と後ろから前へと駆けてゆく景色を認識して、アルフレリックは漸くララシーク

が自分を担いで現在木の枝を足場に逃走してくれたのだということを認識した。

瞬間、強烈な空気抵抗により起こる吐き気が込み上げてくる。

「んぐツ——！」

「悪いッ！今は我慢してくれ！割と余裕がないんだ！」

「だ、大丈夫です。僕のことは気にしないで——て、ララシークさん!?!そ、それ……!?!」  
ララシークの心底辛そうな声にアルフレリックは内側から込み上げていくものを必死に両手で口を塞いで気合で押し返し、無事だということを返答しようとして——気づく。

己を担ぐララシークの腕にハッキリ見える程の青紫色に染まった痣がいくつも浮かび上がっていることを。

その現象をアルフレリックは知識として知っていた。

それは地球では『内出血』といわれるもの。

転倒や衝突などによる打撲が原因で体内の血管が破裂などを起こし、皮膚下で出血する現象。アルフレリックにも同年代の子供や大人の身体にポツリと小さな青紫色の痣があつたことを何度か見たことがある。

だが、ララシークの痣は幾ら何でもおかしい。異常だ。

慌ててララシークの方を見ればその異常性がハッキリとアルフレリックは分かつて



だが、言葉にすればそれだけだが、その行動を行うのに一体どれ程の身体能力があれば可能なのか。異常にも程がある。

恐怖と驚愕が混ざったララシークの言葉がアルフレリックの耳に聴こえてくるがアルフレリックは急な方向転換による反動で肺の中の空気が全て吐き出され酸欠になりかけているためララシークの言葉すら理解することができなかった。

なにせ先程ララシークが行った急な方向転換によりアルフレリックの身体に一瞬6Gに等しい力が襲いかかったのだ。当然、アルフレリックの肺の空気は瞬く間に吐き出され、呼吸することすら忘れ、一瞬意識が飛びかけた。

だが、そんなアルフレリックの状態など化け物からすれば格好の的、好機でしかない。大木のみを挟り取り二人を逃したということを確認した化け物は爪を振りきった状態から空中で一回転、尻尾を幹に突き刺し身体を固定、重力に逆らうが如く尻尾の筋力のみで全身を引き寄せ、四肢を大木の幹へと掴ませた。

同時に、森林に響く破砕音。

幹しか残っていない大木を残骸へと変貌させて、化け物はララシーク達へと飛びかかった。

「はや——ッ!!?」

そのあまりの速度にララシークは息を呑んだ。

何故なら、化け物の速度が文字通り常軌を逸していたから。先に地面へと跳躍したのはララシークだというのに、尻尾に突き刺し、四肢で幹を掴み、跳躍という手順を行った化け物の方がアルフレリックを担いでいるとはいえ、ララシークの跳躍速度についてきているのである。

先程まで跳躍までに十メートルの距離は離していたというのにもはや化け物が振るった爪とララシークの肌の距離は目と鼻の先だ。ララシークが地面に触れるよりも化け物の爪がララシークの肌を触れる方がコンマ速いだろう。

「——ッ——」

結論から言えば、ララシークは化け物の攻撃を凌ぐことは出来た。

刹那——ララシークが行ったことは三つ。

一つ、担いでいたアルフレリックを上空へ投擲。

二つ、振るわれた化け物の爪が己の体に触れる前に左脚で化け物の脚を蹴ることで軌道逸らすと同時に後方宙返りを行うサマーソルトキック。

そして三つ、二つ目のサマーソルトキックを行うと同時に両手を地面に着け、化け物が襲いかかってきた方向とは逆——即ち後方へと腕を足代わりに押し、跳躍。

まさに神技と云える行動により化け物の一撃をララシークは食らうことはなかった。

空を切った一撃が地面を打ち、大地が陥没し、ひび割れ、周囲を隆起させる。



「ガアアアアアアアア!!」

しかしその地形すら変貌させる化け物の一撃はララシークには掠りもしておらず、後方へと逃れたことで粉碎された地面の破片すら掠ってすらいらない。

二度も攻撃が掠りすらしなかった、その事実には化け物は目の前の存在に対する警戒度を一層上昇させた。

一方ララシークに空中に放り投げられたアルフレリックは恐怖どころか軽く意識が飛びかけていた。なにせ先程まで意識が飛びかけるほどの圧力が全身にかかったと思っただらララシークに放り投げられ空を飛んでいるのだ。アルフレリックの胃の中身は胃を縦横無尽に駆け巡っている。

臍げにしかも混乱する意識の中、霞む視界に写る地面が近くなってくることをアルフレリックは理解して、咄嗟に頭を庇い数瞬後襲いかかる痛みを備えた。

しかし数瞬後、身体に襲いかかった衝撃は硬い地面による痛み——ではなく、アルフレリックの体を支える人の手による優しい衝撃だった。

「うっし、ギリギリだがなんとか受け止められたな!」

「——」。

慌てて目を見開けばそこにいるのは荒い息をしながらも此方へと笑いかけるララシークの姿。目の前の光景にアルフレリックは言葉を失うが、ララシークはそんな彼の

氣を知らず、アルフレリックが無事だということを確認すると、ゆつくりと立ち上がった。

「早速で悪いいがアルフレリック、此処からは別行動だ。流石にお前を担いだままじゃ逃げきれなそうだしな。コレを渡しておくから私がコイツを相手している間にあつちの方向へ走つてくれ、その先には私の家がある。そこで落ち合おう、お前なら途中まで行つたら分かるだろ？ ああ、言い忘れてたが今日採取した植物を途中落したりすんなよ？」

「——いや——ララシック——さん——？——何を——言つて——るんですか——？」

二の句を告げさせないように矢継ぎ早に言葉を出したララシックは足腰に巻きつけていた小型ナイフの一つをアルフレリックへと押しつけて、アルフレリックの呆然としたまま紡ぎ出される言葉を無視したまま、大型ナイフを片手に立ち上がった時と同じようにゆつくり化け物へと歩いてゆく。

その行動に、アルフレリックは耐えきれず——

「——無茶、だ。ララシックさん、止めてください！ 死ぬ気ですか!? そんな身体で!!?」  
——叫んだ。叫ばずにはいられなかつた。

何故なら、目の前の彼女の身体は——もはや、瀕死といつてもいいようなものだった

のだから。

両腕、両足に大きく広がった青紫色の痣、一部の肌は青紫色ではなく赤黒い色に染め上がっている。息は荒く、体勢は乱れ、何より彼女の左足は――

――ぷらんとまるで吊り下げられているかのように折れていたのだから。

先程の化け物の一撃。ララシークは神技によって凌ぐことはできた。

そう、凌ぐことは出来たのだ。

あの一瞬。あの刹那。

ララシークは左足で化け物の前脚を蹴ることで化け物の軌道を僅かにずらし避けることに成功した。

逆にいえばそれはララシークは僅かに化け物を動かすほどの力をぶつけたということ。

ならばこの代償は当然の結果だった。

(――そうだ、少し考えれば分かったじゃないですか……………!)

兎人族であるララシークがアルフレリツクが何一つ反応できない化け物に追いつくような身体能力を持っている訳がない。

ならば当然、仕組みがあるはずなのだ。

なんらかの今のような超人的な身体能力を發揮させる仕組みが。その対価として何

かを失う仕組みが。

ああ、今思い返せばきつかけはあったはずだ。

初めて出会った時に兎人族ではありえない身体能力を發揮していた彼女が自分の家で、まるで全力疾走を行ったかのように疲労していたのも。

ありえない身体能力を引き出していながらも、今のように青紫色の痣が身体に出現していたのも。

（——全部、なんらかの形で超人的な身体能力に対する対価を払っていたから出来るものだったんだッ！）

植物採取の時、ララシークが平らの石で休んでいたのは自分の疲労を出来る限り溜めない為だったのだ。

もしもの時にアルフレリックを守る為に。

「ああ……ああああ………ッ！」

なんで、どうして、こんな昨日知り合ったばかりの自分の為に……！などと後悔しても、もう遅い。時間は決して戻ることとはなく、今ここで化け物が襲いかかってくる事実は変わらない。

アルフレリックは何も出来ない。

アルフレリックが出来ることはただ逃げることだけだ。



とする。その叫びは獲物が逃げていくことに對する悔しさによるものか、はたまた化け物の襲撃を幾度も凌いだ少女を置いて自分だけ逃げようとする行動に對する怒りか。

どちらであるうともアルフレリックを襲いかかろうとする化け物にララシークが立ち塞がることは変わらない。

化け物は全身に、ララシークは右足に、渾身の力を込めて。

飛び出したのは同時、両者の踏み締めた大地は悲鳴をあげ、多少差異はあれど地面が割れて陥没する。

両者の距離は瞬く間にゼロとなり——アルフレリックが認識できない速度で攻防が繰り広げられた。

攻防は一瞬、ならば当然決着も一瞬にして決定する。

まるで肉を裂くような不快感に満ちた音が重なり合ったかのような謎の異音が背後からアルフレリックの聴覚へ響き渡る。あまりにも聞き慣れないその音に、アルフレリックは足を止めなかつたものの、咄嗟に振り向いてしまった。

「……………あ」

振り向いてはいけなかつた。

無視して走らなければならなかつた。

そうでなければ、今のようになつたのだから。

宙に舞い散る鮮血と、翼と繋がった前脚のある場所には幾重にも斬り裂かれ、ある場所にはララシークが投げつけていた小型ナイフが突き刺さり、生み出された決して浅くない傷に痛み悶える化け物。

そして――

――まるで糸の切れた人形の如くゆっくりと四肢という四肢から溢れたように鮮血を吹き出して崩れ落ちるララシークの姿。

「……………ああ」

わかっていた、筈だ。

理解していた、筈だ。

あの状態であの化け物と戦えば、いくらララシークでも死は免れないということ。ララシーク自身、何よりわかっていたはずだ。

動け。

止まるな。

走り出せ。

彼女は文字通り命をかけてあの化け物の足に傷をつけ、時間を稼いだ。

『素晴らしいわ！アルフレリック！あなたは天才よ！』

なら、今ここで逃げなければ彼女の命を無駄にすることになる。

『ああ！流石私達の子だ！お前ならば必ず長老になれる!!』

優秀な自分ならそれくらいわかっているはずだ、アルフレリック・ハイピスト。

動け。

動けッ

動けッ！

『あなたは他の子より特別なんだから』

アルフレリックは再び走り出した。

迷いはない。躊躇はない。

何があろうと決して止まりはしないと云わんばかりに――

――化け物があるララシークの方向へ。

「そんなこと、出来るわけがないでしょうがああああああ!!」  
走る。



駆ける。

疾走する。

此方に気づいた化け物が咆哮を浴びせるがアルフレリックは無視をする。ララシークを助ける為に足を決して止めるわけには行かないから。

助ける

死なせない。

化け物なんかに殺させてたまるものか。

考えろ、思考しろ、化け物から彼女を救う方法をッ！

予測して、算出し、実行しろッ！

アルフレリックとララシークとの距離は三メートル、化け物とララシークとの距離は目測で見ても一メートル未満だ。此方が辿り着くよりも先に化け物がララシークの元に向かう方が圧倒的に早いだろう。

(なら、化け物が次に行う行動は——ッ!!)

「ガアアア………!」

化け物がアルフレリックが此方へと向かってくることに気づくと、ララシークへと向かってくるアルフレリックの行動を嘲笑うかのように口を開き、ララシークへと噛みつきこうとした。即ち、捕食行動。確実に現在生死不明のララシークの息を止め、喰らおう

としたのだ。

しかし――

「そう来ると、思っていました…よッ!!」

「グッ?――ガアア……………!!」

――ララシックへと牙を突き立てようとする前に、弧を描き化け物へと飛んでくる光を反射するものを見て、化け物は目を剥き、咄嗟に後退してしまう。その光景にアルフレリックは内心笑った。

アルフレリックが投げた物、それはララシックに渡されていた小型ナイフだ。

ララシックが投げた時は最も容易く狼の魔物の肌を貫き、息の根を止めることができ、切れ味の良い鋭いナイフ。しかし、それはあくまでララシックが投げた場合の話だ、身体能力が大してあるわけでも無いアルフレリックが投げたとしても限度がある。

例え物に当たったとしても突き刺さるどころか投げた時に空中で不規則にクルクルと回転しているのでぶつかっても切れることすらないだろう。

だが、化け物にとっては意味が変わる。

アルフレリックは化け物の存在にある仮説を立てていた。

それは、この化け物は一度も重傷を受けたことが無いのではないか?ということ。

少なくともアルフレリックは今まで襲われてきた魔物の中でも目の前の化け物ほど

身体能力が桁違いな魔物は見たことも訊いたことも、噂になったことすらない。

なにせ目の前の化け物の身体能力は文字通り化け物だ。視認できず、認識できず、アルフレリツクには何をされたのかすらもわからない。

唯一反応できたのはおそらくララシークだけだろう。

考えてみて欲しい、どんな魔物だろうと生まれながらに持った超越した身体能力と、大木すら抉り取る最強の爪。そして体毛に覆われた鱗の鎧。

そんな力を持ったものが自分よりも圧倒的に遅い存在の攻撃を食らうだろうか？

相手よりも先に攻撃し出来る敏捷性、相手を一撃で仕留める殺傷力。生まれながらにこの二つを行うことができている化け物はララシークというイレギュラーな存在の攻撃に痛み慣れていないのだ。

（——だからあなたは恐怖するッ！激痛というものを味わったことが化け物には無いから！あの時、あなたが痛み悶えていたのをみて確信したッ！あなたは——）

ララシークから化け物が離れた隙にアルフレリツクは遂にララシークの元へたどり着く。

そのままララシークを担ぎ——否、ここで担いでも助けることはできない。いずれ目の前の化け物に追いつかれて終わりだ。

故に、アルフレリツクは手を伸ばした。ララシークの腰——正確には足腰に括り付け

られている小型ナイフへと。

魔物に襲われた時、ララシークが持っていた小型ナイフは全て足腰に取り付けていた筈だ。

片足に五本ずつ、計十本。一本は先程アルフレリックが投げ、化け物には7本突き刺さっている。

ならば彼女の足腰には、小型ナイフが二本残っている！

「——ララシークを恐れているツ!!」

アルフレリックはそう叫び、彼女の足腰から残りの小型ナイフを引き抜くと同時に投擲する。当然化け物へ狙ったもののロクに構えもせず投じたナイフがまともに飛んでいくわけもなく。一本は化け物へと飛んでいったがもう一本はよその草原へと飛んでいく始末。

「ガルアアツ!!」

しかも残りの化け物へ向かっていった一本も、ララシークが投擲したほどの威力はないと理解したのだろう。今度は容易く前脚を振るわれ弾かれてしまう。

もはやララシークが持っている小型ナイフは全て使い果たした。今から逃げようとしても間に合わない。まさに絶体絶命。

だが——

「ええ、そうするだろう予想していましたよ」

——小型ナイフを打ち払った化け物の前脚、そこから生えた翼の影へと既にアルフレリックは潜り込んでいた。

わかっていた。予想していたとも。

化け物がアルフレリックが投げた小型ナイフを必ず弾こうとすることを。

何故なら——

(——不安だったんですよね？僕程度に筋力で投げても所詮たかが知れているというのに、ララシークとは威力も速度も桁が違うというのに、それでも無視しなかったのはツ！！)

最初にアルフレリックの投擲に、ララシークの投擲の威力を思い出し、化け物はい後退してしまった。同時に化け物は理解した、目の前の存在は先程の敵とは違って取るに足らない存在だと。

だが、それでも万が一、己の肉体に傷をつける威力がある可能性があったとしたら——  
？

アルフレリックは目の前の存在が少なくとも魔物よりも知性があると考えていた。なにせ、初めて出会った時は地面を駆けていたというのに逃走する二人を追いかけていく終盤、化け物は木々を足場にするという方法を取り始めたのだから。

少なくとも他の魔物よりも『学習』する速度は速いと考えていた。だからこそ、この作戦に踏み切ったのだ。

迷いを捨てて、躊躇無く。

アルフレリックは命を曝け出し、そうするだろうと賭けたのだ。

化け物が己の身体に傷をつけられる可能性を考えて、油断なく対処するという行動を取ることを。

全ては、ララシークを助ける為に。

化け物との距離を詰める。

化け物との距離は僅か二歩、アルフレリックが構えるはララシークが使っていた大型ナイフ。

それを逆手に持ち、もう片方の手で柄頭を握る。

狙いは化け物の目。唯一柔らかさそうで、かつ追跡を阻害させ易い器官。相手は未だ動揺している、その隙にコレで瞳に傷をつける。

それ一点のみ狙ってアルフレリックは更に一步距離を詰め――

(しまッ――!?)

――無意識にこのままでは傷をつけるどころか、化け物に触れることすら不可能だと

いうことを理解した。

急激に遅くなる時間の流れ、肉体は指一本、視線すら変えられずまるで意識のみが時間置いていかれたような感覚。

アルフレリックは俗に言う走馬灯というものを味わっていた。

そうだ、化け物はアルフレリックがロクに反応できないほどの速度で行動する存在。

例え動揺していたとしても。例え後一步で届きそうだとしても。

化け物にとっては余裕で対処出来る範囲に過ぎない。

化け物の前脚がゆっくりと視界の端で動き出す。目の前のアルフレリックという存在を虫を潰すかのように殺す為に。

(どうすれば……!?)

考えろ、考えろつ、考えろツ!

この状況を打開する方法を見つけ出せ。

思考を止めるな、今日のことを全て思い返せ——ツ!!

停滞する時間の中、アルフレリックの脳は今までの記憶が電流に如く駆け巡り——

「あ

——無意識に口から音が洩れた。

「あ  
あああ  
あ  
ア  
ア  
ああア  
ア  
」





いや、否。

これは偶然でもなければ奇跡でもない。れっきとした必然の現象。

化け物には生まれながらに持っている圧倒的な力がある、超越した身体能力、大木すら挟り取る最強の爪、体毛に覆われた鱗の鎧。

そして、発達した大きな耳。

アルフレリックは刹那の走馬灯の中、化け物の特徴を思い出したのだ。化け物はララシークのような兎人族と同じ大きな耳を持っていたということ。故に、選択した。大声を上げるといふ選択肢を。

この一歩で触れられるほどの近距離でアルフレリックですらこの大声を上げられたのなら間違いなく耳を塞ごうと蹲ってしまいか、最低でも怯んでしまいうだろう。ましてや聴覚が発達した相手に大声を上げればどうなるかなど一目瞭然。

あくまでアルフレリックにとって、それは化け物の動きがほんの一瞬止まってくれることに一縷の望みを賭けて行った悪足掻きに過ぎないことだったが、これほど効果があつたことは不幸中の幸いだった。

そして、たつた一つの選択ミスすら許されない命懸けの賭けを乗り越えて。

一歩、進む。

ナイフを振り上げると同時に化け物の瞳に音の衝撃から正気に戻ったことをアルフ

レリックは理解した。

化け物が見開き、息を呑んだような音が聞こえた。錯覚した。

だけど、アルフレリックは止まらなかった。躊躇はなかった。

迷いなく、躊躇無く、渾身の力を振り絞り――

「たああアアアッ!!」

――化け物の血のように赤く染まった瞳へと大型ナイフを突き刺し、引き裂いた。

◆◆

その後は、無我夢中になってララシークを背負い逃走したため臆げにしか覚えていない。

ただ、鼓膜が破れそうになるほどの絶叫満ちた咆哮を放ち、痛み悶え暴れ回る化け物から大型ナイフを引き抜いて、ララシークを背負い、一目散に逃げたことは覚えている。

そして現在、アルフレリックはララシークが指した、彼女の家がある方向へと走っていた。

走る。

駆ける。

疾走する。

ペース配分などは考えない、ただ全力で彼女が指した方向へと走り続ける。

「ハア……………ハア……………ララシークさんッ！生きてますか……………ララシークさんッ！」

「……………っ……………あ……………」

呼吸が辛い。

肺が苦しい。

足が軋んで、痛みを感じる。

幾ら声を掛けようとも背負ったララシークから返事はない。

火傷しそうなほど熱い血液がララシークから流れ、アルフレリックの肌に触れるのを

背中越しに感じた。

だが微かに呼吸はしている、まだ生きている。

なら、アルフレリックは止まるわけにはいかなかった。

「……………貴女が、初めてだったんだ…っ…ハア……………ハア……………初めて……………僕を対等に見てくれたんだ……………ッ！」

アルフレリックは、昔から他の子供よりも聡明だった。

思考も、考察も、行動力も、他の子供達から飛び抜けて優れており、何よりも知識では他の子供達とは比べものにならなかった。

水を吸う綿の如く、一を知れば十を知り、十を知れば百を知る。

まさにアルフレリックは天才と言われる部類だったのだろう。

だが他の子供達よりも優れているということは同時に孤立してしまうということ。

子供というのは親に自慢し褒めて貰いたいものであり、それ故に子供達は遊びや知識で優劣を競い合う。

だがアルフレリックは天才だった。

誰も子供達は彼には敵わなかった、知識も運動も考えも誰も勝つことはできなかったのだ。

これがもし、種族内で身体能力が優れた熊人族などとアルフレリックが交流してれば話は別だったのかも知れない。だが獣人族が住む「フェアベルゲン」は種族によって領地や集落が異なっている。森人族は森人族の領地で住んでいる為、大人にならなければ他の種族との交流が少ないのだ。

だから、徐々に子供達は誰も彼もがアルフレリックから離れ始めた。子供であるが故に誰もが褒めて貰いたから、誰も勝つことができないアルフレリックを遠ざけ始めたのだ。

子供達のその行動に対しアルフレリックは思うことはない。

同年齢の子供たちにとってそれらの行動は決して別におかしなものではないのだから。

褒めて欲しい。喜んで欲しい。可愛がって欲しい。

差異はあれどそんな彼らの心情もアルフレリックは理解できたからだ。だが、同時に悲しかった。

自分と対等に向き合える友人が、アルフレリックは欲しかった。

だけど、大人達は誰もアルフレリックの心情を理解してはくれなかった。

素晴らしいと、天才だ、この子は将来族長になると大人達はアルフレリックを特別扱いしてもてはやし、アルフレリックの気持ちなど察することもなく称賛し続ける。

喜びはなかった、嬉しさもなかった。

ただ、ぽっかりと胸に空虚な穴が空いた気がして、ただただ、虚しかった。

気がつけばアルフレリックの周りには対等に接してくれるような存在はいなくなっていた。

大人も、子供も、同年齢の子供達も誰も彼もがアルフレリックを特別扱いし、誰もアルフレリックの内面を見てくれるものなどいなかった。

ララシークという、自分を対等に見てくれる相手と出会うまでは。

久しぶりの感覚だった。

馬鹿にされて、笑われて、笑って、怒って、毒吐いて、怖がって。

出会ってたった2日しか経っていないというのに、アルフレリックは近所の子供のようになんか笑うことができたのだ。

だから――

「――死なせません……………！ハア…ハア…貴女を……………死なせたりするものか……………ツ！」

既に方向感覚すら怪しくなってきたきっており、意識すら混濁してきた。

落ちた枝を踏んだ。落ちている小石を飛ばした。

でも、止まらない。

アルフレリックは止まることはできない。

死なせてたまるかと道無き道を走り続ける。

だが、いくら気力を振り絞って走り続けても当然限界は存在する、アルフレリックの体力は既に限界に近い。走る速度すら徐々に低下し、足取りすら徐々に不安定になってしまう。

大樹に空を覆われた樹海は日が落ちるのも早い、既に辺りは暗くなっており、このまま「フェアベルゲン」に辿り着けなければ間違いなく二人とも餓死か魔物の餌に成り果てるだろう。いや、ララシークの場合はその前に出血で死んでしまうだろうが。

「……………助けて、ください……………」

アルフレリックが出したその声は本人が思っているよりもあまりにも小さく、そして掠れていた。

それでも、その言葉に血が滲むほど切実さを乗せて、アルフレリックは前へ前へと進みながら誰かへと助けを求めた。

「誰か………ツ!? 誰かいませんか………ツ!!? 助けてください………ツ!! 重傷者がいるんですっ!」

アルフレリックのこの行動は一種の賭けだ。近くに獣人族が居ないのならば、逆に魔物呼び寄せてしまう一種の賭けの手。

だが、もう時間がないのだ。あれほど熱を持っていたララシークの身体は徐々に冷たくなっており、息すら既に聞き取ることすら難しくなるほど小さくなってきている。

すぐにも治療しなければ助からないと素人であるアルフレリックですらわかるほどに弱っているのだ。

だから、どうか、お願いです。

アルフレリックは願う。

「どうかッ! 誰でもいいつ、彼女を………ツ!! ララシークを誰か助けてください——ツ!!」

叫んだ。

喉が張り裂けても構わないと、残りの気力を振り絞りアルフレリックは叫んだ。

声が樹海に響き渡り、そして呑み込まれるように吸い込まれていく。

残ったのは、静寂。

無音の闇が覆う暗がりの樹海。

ただ、そこにはアルフレリックの荒い息と今にも途切れそうな、か細いララシークの呼吸音のみがその空間に響いていた。

「……………ああ」

絶望に満ちた悲痛な息がアルフレリックの口から無意識に溢れた。

もはやアルフレリックは走れなかった、溜まりに溜まった疲労に身体はもはや限界だった。

それはつまり――

（――終わり、ですか……………）

――ララシークはもう、救うことができないうこと。

その事実には、アルフレリックは堪らず地面へと座り込んでしまい、背負っていたララシークを地面に下ろしてしまふ。

死ぬ。終わりだ。ララシークも、自分も。

このまま動けないまま、魔物の餌になるか餓死するかの二択のどちらかが自分たちの末路なのだと、どうしようもなく理解してしまった。

はっきりと穴の空いたような空虚な無力感がアルフレリックの胸を満たしていく。



アルフレリツクは座り込んだまま、ただ茫然と失意の底へと沈んでいき——  
「おいつー！そこに誰かいるのかっ?!」

——突如、ガサガサと草むらを掻き分けて聞こえてくる男の声に耳を疑った。

「——ツ!!ここです！助けてくださいッ！怪我人がいるんですッ！」

聞き間違いじゃない。

男だ。男性の声だ。

少し老いたことを感じさせる、子供のようない高音さがない大人の声だ！

咄嗟にアルフレリツクは叫んだ。自分たちの場所が分かる様に大声で、全力で叫び続けた。

此方へと近づいてくる音が徐々に大きくなってきている、それは即ち——自分達は助かったのだ。

「……………ああ、よかった……………」

アルフレリツクの胸中は瞬く間に安心へと包まれた。

これでララシークを助けることができる。そう安心したアルフレリツクは安堵のため息を溢し——

「……………なっ?!おいつ?!小僧ツ?!何があつた?!なんで樹海に——っ、ララシーク?!?どうしてお前がこんな傷を……………?!」

——最後に一瞬、恐怖を抱いてしまう顔つきに野生的な髭を生やした、ララシークと同じ兎耳を持った男の姿を見て、アルフレリックは緊張が緩んだことで意識を失った。

◆◆

身体全体が何か暖かで柔らかなものに包まれた様な不思議な感触の中、薬品特有の眩暈がする様な匂いを嗅ぎとってアルフレリックの意識は急浮上した。

「——ツ……は——痛ッ!!」

慌てて上体を起き上げらせると同時に全身から感じる燃える様な激痛と重みの様な倦怠感、突然の痛みにアルフレリックの意識は覚醒するも、あまりの痛さに悶絶してしまふ。おそらくこれは体を酷使し過ぎた時に起こる痛みだろうかとどこか冷静にそう考察しながら、辺りを見渡した。

家だ。木造の、アルフレリックが住んでいる家のように大樹から空間を切り抜いたような、獣人族特有の家。

「——家? どうして……そ、そうでした! 確か僕達はあの後大人の人に助けられて——」  
「目が覚めた様だな? 全く……日も跨がずに起きるとは……案外、丈夫だな小僧……」

「——ッ!!」

——突然の声にアルフレリックは心が驚掴みにされ、停止した様に感じた。

慌てて声の発生源へと振り向けば、「……まあ、あやつに付き合える時点で当然か」と

一人納得したかの様に眩く、ララシークと同じ兎人族の男がいた。

誰だろうか？兎人族？それらの疑問が次々と現れるが、同時に何よりも重要な疑問がアルフレリツクの脳内を埋め尽くした。

「ララシークはツ！？僕と一緒にいた彼女は……………!?」

「安心しろ、ララシークは無事だ。今は隣の部屋で安静にしているが命に別状はないだろうよ」

その言葉にはアルフレリツクは無意識に「良かった……………ツ！」と安堵の息を溢してしまふ。

そのアルフレリツクの行動に男は一体どうしたのか少し驚いたような表情を取っていた。

そのことに疑問が再度浮かび上がるが、まずは最初に礼を言わなければならないとアルフレリツクは男へと言葉を溢した。

「すみません。あの時、助けていただきありがとうございます。僕の名はアルフレリツク・ハイピストです」

「アルフレリツク……………なるほど、森人族の神童、か。……………なるほどその歳で、その礼儀の良さと状況把握の速さ……………神童と言われるのも納得できる」

「僕のことを……………知っているんですか……………?」

## 森人族の神童。

なんで不名誉で要らない名前だろうとアルフレリックは内心毒吐く。自分はそんなものなど求めてなどいかなかったし、言いふらしたこともない。大方両親が自慢でもしてそれが風の噂として広がったのだろうか？

そう思ったアルフレリックだがそのことに男は小さく首を振って否定した。

「……………聞いているのはあくまで風の噂に過ぎん。内容は知らんよ、他種族の噂など知っても意味がないだろうに」

「そうですか……………」

その言葉にアルフレリックは安堵した。

ララシックとの出会いが初めての他の種族との交流だがいくらなんでも他の種族ですら此方に対し特別扱いされてしまえばたまったものではなかった。

「ああ、自己紹介がまだだったな。私の名はウエル、ウエル・ハウリア。ハウリアの族長にして、小僧と共にいたララシック・ハウリアの父親だ」

濃紺色に染まった短髪に、強面の顔つき、だからといって恐ろしいかといえばそうではなくどちらかといえば厳しそうだがカッコいいと思わせるような端正な容姿、そして頭にピョコピョコと動く兔耳を持った男、ウエルはそう言って小さく笑ったのだった。



「なるほど……助けてもらったお札に手伝いを、か。あやつが迷惑をかけたようだな、娘の代わりに謝罪と礼を。アルフレリツクよ、すまなかつた」

「いえ、そんな！それに……」

自己紹介の後、アルフレリツクはララシークの父ウエルへとどうして壁外に出ることになった経緯を説明していた。

無断で好奇心に負け外に出たこと、魔物に襲われたそこでララシークに出会い助けられたこと、その恩義を返す為彼女の手伝いをしようとしたこと。

今ここで大人であるウエルに話すことは両親に伝わることになり、そのことに対しきつく言われたりするかもしれない可能性を考えて、少し嫌になるが同時に自分はそれとそれで構わないかとアルフレリツクは開きなかつた。それよりも助けてくれたウエルに対し、礼儀を尽くす方が大切だと思つたのだ。

「……それに彼女が怪我をしたのは、魔物から僕を庇ってくれたお陰なんですから……ララシークの怪我は、僕のせいなんです……」

アルフレリツクはそう呟いて、あの時化け物から自分を庇ってくれたララシークのことを想起し、同時に後悔した。あの、化け物に襲われた時、アルフレリツクは完全に足手纏いだつた。動けず、逃れず、戦えず、きつとアルフレリツクがいなければきつとララシークはあんな傷を負うことはなかつただろうと思えるほどに。

「僕は、彼女の何の役にも立たなかった……」

結局アルフレリックはララシークの何の手助けにも立つてはいなかった。なつてはいなかったのだ。

「いいや、違うぞアルフレリックよ」

だが、アルフレリックの言葉を、その懺悔をウエルは否定した。

容易く、そしてあっさりとは

「……………え？」

「小僧とララシークに何があったのかは私には分からん、どこで、何をして、あれほどの重傷になったのかも深く訊く気はない」

ウエルは呆然とするアルフレリックへと小さく笑いかけ「だが——」と言葉を続けた。

「——小僧は、ララシークを助けようとしたのだろうか？」

一呼吸置いて告げられた言葉にアルフレリックは息を忘れた。

「小僧がいなければ私はあそこで小僧たちを見つけることは出来なかった。ララシークを助けることもできなかつただろう。ならば、小僧はしっかりあやつ役に立つただろうに」

私の娘を助けてくれたことに感謝を。

そう告げたウエルの言葉にアルフレリックはようやく自分がちゃんとララシークの手伝いが出来ていたのだということを理解して。

「……………そう、ですか」

小さく、しかし安心したように笑ったのだった。

数分後、アルフレリックは未だ痛みを残る身体を駆使してどうにか立ち上がり、ウエルへとお礼を言っていた。というのも本音をいえばもう少し休んでいきたくないものだが既に「フェアベルゲン」から見た空は既に日が沈みかけており、辺りが暗くなっている以上後何時間もしれば両親が搜索願いを出す可能性があるからだ。流石にウエルもハウリア族の族長である以上、アルフレリックを匿っていたことや治療していたことがバレるのは立場上面倒なことが起こるのでそこは避けたいのだと申し訳なさそうに言っていた。

樹海では大樹に日が遮られ既に沈んでいるように感じたが「フェアベルゲン」ではこうして未だ明るいという明るさの明確な違いにアルフレリックが内心驚いたのは余談である。

「しかし、本当にいいんですか？治療してもらえばかりか樹海に出たことすら内密にしてくれるなんて……………何か礼を——」

「いらんよ、私は小僧達が倒れていたのを助けただけだ。どこで助けたかはとうに忘れてしまったがな」

アルフレリックの身体は重度の疲労や擦り傷の軽傷を負っていたがウエルによって回復薬で治してもらっている。そんな高価なものを使わせたとなれば当然アルフレリックも何か礼を………ツ！と思うのだがウエルはララシークに数本使ったのだから今更一本増えても構わんよとその礼を断られるという太っ腹な態度にアルフレリックは頭が下がるばかりだった。

「——ですがッ、いくらなんでも僕はあなたに恩を掛けすぎですつ。森人族は恩を大切にしている種族です！何か、僕がウエルさんに手伝えることはありませんか!？」

現在もこうして詭弁じみた言葉を呟いて笑うウエルにアルフレリックは感謝の意念しかなかない、だからこそこうして何か恩を返せることはないかとウエルへと退かず聞き返しているのだが。

その一步も引かないアルフレリックの態度にウエルは小さく苦笑して、「なら——」と言葉を紡いだ。

「あやつの、ララシークの友達になってくれんか？」

「……………え？」

友達？ララシークと？



あまりにも簡単なその願いにアルフレリックは一瞬思考が空白となった。

「……………友達、ですか？」

「ああ、とはいっても別に毎日接してほしいというわけではない。数日に一回で良い、あやつに…会いにきてくれんか？」

「それは別に構いませんが…一体どうして…………？」

いまいちウエルの話の意図が見えないとアルフレリックは首を傾げた。

会って欲しい？何故？何の為に？次々と疑問符を浮かべるアルフレリックにウエルは近くの木の椅子へと座りこみ、「……………少し、昔話をしよう」そうポツリと呟き、静かに話し始めた。

——昔、ひとりの兎人族の少女がいた。

少女は兎人族特有の優れた容姿を持った中でも幼い歳でありながら軒並み優れた容姿を持っており、大層両親に可愛がられていたという。

幼い時から聡明だった少女は他の子供達よりも物心がつくのが早かったものの、少女には家族がいて、一族も両親もみんなに愛されていたから、同年代との違いに不満は抱くことはなかった。

少女は幸せだった。

そう、幸せだったのだ。

7歳になった時、少女の一族が帝国の兵隊に襲われるまでは、結論から言えば少女は生き残った。

偶然か、それとも意図的か、少女は帝国兵から逃げ延び、生き延びて、力尽き、意識を失うその時まで逃げて、逃げて、逃げ続けた。

そして運良く通りかかった兎人族の男に拾われ、生き延びる事が出来たのだ。

だが、決してそれは幸運であつたとしても幸福には決してなりえない。

少女と共に逃げ切る事ができた一族はいなかった、後に捜索隊が出されたものの誰も、たった一人でさえも少女以外に少女の一族は見つからなかつたのである。

正に喪失。

少女を残して一族はまるで煙のように消え失せてしまった。

当然、そうなれば少女をどうするかという問題が兎人族の中で浮上する。

何せ家族どころか一族諸共消え失せてしまったのである、当然身寄りのない少女を気安く迎え入れようと手を挙げるような者などそう簡単にいるものではない。

が、そこで手を挙げたのは少女を拾った男率いる一族だった。誰も手を上げないというのならば我らが、と元より温厚である兎人族の中でも人一倍仲間思いであつた一族が少女を迎え入れたのである。

その後家族を、そして抛り所を失つた少女は、拾われた男の元で住むこととなった。

というのは少女を拾った男は族長という地位についていながら若い時に子を産む前に妻が死んだが故に一人で暮らしていたのだが少女を助けた責任として少女を引き取ったのである。

だが、新たな家族として受け入れられた少女はどこかおかしかった。

一族が幾ら少女との心の距離を詰めようとしても少女は決してそれを許すことはなく、未だ子供といえる年齢でありながら子供同士遊ぶことはせず、それどころか誰かと関わろうとしないまま日が落ちる時まで姿を消してしまうのだ。

最初、男は少女の行動は心の傷が原因によるものだと思っていた。

なにせ少女は未だ子供であり、幼い時でありながら家族諸共と突然の別れとなってしまうていたのだ、当然そのことが少女にとって心の傷になつていないはずがない。そのことが原因で皆と馴染めていないのだろうと、真意に接し続けていればいずれ心を開いてくれるはずだと、そう推測していたのだ。

だが少女を一族が受け入れてからある日、兎人族の中である噂が流れ始めた。

兎人族のある集落には浅黄色の兎人族の形をした化け物があると、その子は生まれた一族を全て殺した忌み子であり、忌み子と共にいる者は一族諸共無残な死を遂げてしまふだろうと。

それは少女の一族が音沙汰も無く消失してしまったということが兎人族の中で知ら

れて以来、同族達の間でポツリと生まれた噂話だった。ちよつとした都市伝説のような、暇潰しのタネに使われるような、そんな些細な話題である。

だが、それが広まった時期が悪かった。なにせ兎人族の一部族が行方不明になっていた事件を未だ覚えている時期であり、少女の異常性に男の一族は薄寒い何かを感じてしまった時期なのだから。

しかも、一部は真実であるのだから余計に夕チが悪い。

その噂を聞いた途端、男は族長として噂がハウリアの集落に広まらないように奔走した。何故なら噂を噂と気にしないでいられるのはある程度年を経た子供からである。噂が広まってしまえば未だ幼い子供達は噂を容易く信じてしまう可能性があり、もしそうなってしまうえば子供達は幼い正義感で少女を悪者として虐げてしまう。

男は動いた。奔走した。男の集落に噂が広まらないように。少女がこの集落で孤立したりしないように。

どうか一刻も早くこの噂が消えるように願い、同時に微かに少女が本当に化け物なのではないか？とどこか思ってしまったている自分に目を背けながら。

だが、そんな男の思いに反して状況は日に日に悪化していった。まるで増殖するよう少女に関する噂が増えていったのだ。

曰く、人の形をした化け物が樹海の魔物達を殺している。

曰く、死んだ魔物は尽く身体を抉られている。

曰く、忌み子はいずれ亜人族へと牙を向けるだろう。

なんだそれは？

一体誰がそんな噂を流したというのだ？

消えない噂にそんな疑問が幾つも浮かび上がるがそのことに意味はない。重要なのはこれからどうするべきか、ということだった。

兎人族は他の種族よりも仲間思いであり絆を大切に、逆に言えば仲間を失いたくないために危害を及ぼすものを排斥してしまうという面を持っているのだ。

もつとも温厚な種族であるがゆえに殺しなどを行うことはないが噂が特定されれば確実に少女を孤立させるだろう。

だからこそ男たちは少女を守らなければならなかった。

だがいくら守ろうという気概があろうとも実際問題どうすればいいか、男達はわからなかった。何せ、元凶は噂である。いくら一集落の中で黙秘令を敷いて噂を広げないようにしてもあくまで出来るのはその集落のみ、しかもそれは噂の主である少女が特定されるまでの時間稼ぎであり、問題の解決にはなっていないのだ。

一部の案では他の兎人族の集落へと助力を願い、噂をなくすことへの協力を乞おうという案があったもののそれをしてしまえば噂の少女のことがばれてしまう可能性があ

る。今、こうして噂の主が特定されていないのも他の集落の族長が少女のことを広めていないが故のものなのだから。

何の解決策も生まれないままただ時が過ぎていき、ついに恐れていた事態が巻き起こった。

それは偶然だった。

——いたっ！浅黄色の化け物だ！

男の一族が住む集落、その最も近い集落の兎人族の子供達が男の集落へと入ってきたのだ。

それは運が悪かった。

子供特有の好奇心のままに噂の存在を探して子供達は外へ飛び出し、たまたま辿り着いた場所に少女がいたという、ただそれだけの話。

ただ、運が悪かった。本当にそれだけだったのだ。

石を投げられた。

杖を投げられた。

化け物だと少女は子供達の幼い正義感によって罵られた。

それに対し、少女がどう思ったかはわからない。

ただ、一族の者が子供達を追い払った時にはすべてはもう、手遅れだった。

その日から少女は男の元に帰ってこなかった。

いくら探しても、いくら少女を守れなかったことに男が後悔しても、少女は男の元に帰ってくることはなかった。

これは、ただそれだけの昔話。

族長ウエルは、少女ララシークを家族として迎え入れておきながら家族を守れなかったというただの昔話である。

◇◆◇

現在、アルフレリックは木製の扉の前に立っていた。……といつても扉どころか通路や床も木製なのだが。

扉の先にはアルフレリックが今何よりも容体がどうなっているか気になっている少女がいるはずなのだがアルフレリックの足取りは両脚に鉄球がつけられたかのように重い。

「……………ふう」

重たい息を吐きだしてアルフレリックは鬱方面へと向かいそうになる思考をどうか打ち切ることに成功するも先ほどのウエルの話を思い出して、大気が重くなったように感じた。

ウエルが話してくれたララシークの過去、気になっていなかったといえれば嘘になる。

なぜララシークがわざわざ集落から離れたところにわざわざ家を作って拠点にしたのか？などと浮かび上がる疑問は確かにアルフレリックの中に存在していた。

ララシークの過去を聞いてしまえば確かに理解はできるのだが……

(……それだけでは説得力が少ないような気がします)

そう、それだけではアルフレリックは納得できなかった。

なぜならそれだけではララシークの手伝いをしたとき、彼女は何のために植物を集めていた？

『今回採った植物はな、あるものを作るのに使う予定なんだ』

あるもの？あるものとはいったいなんだ？

いや、そもそもウエルが話してくれた過去だけではララシークがあのような身体能力を持つていたことが説明できない。

「……まあ、直接彼女に聞けばわかることですな」

もつとも、それはララシークの容態が会話ができるほど安定していればの話だが。

現在こうしてララシークが寝ている場所へと向かうのは質問するためではなく彼女の見舞いのためのからだから。

ウエルはララシークの過去を話しながらも嘆いていた。

守れなかった。



私達はあやつを守るができなかった、と。

『怪我をしていたあやつと小僧を見たとき、私は不謹慎ながら安堵した』

『あやつが生きていたことにはない、あやつが一人ではなかったことに小僧がいてくれたことに安堵したのだ』

『きつとあやつは私のことを恨んでいるだろう。私の願いはあやつにとつては迷惑なのかもしれないし、小僧のこともララシークがどう思っているかなど私にはわからない。だが、どうか頼む。守れなかった私たちでは駄目なのだ——』

——あやつを、ララシークを一人にしないでやってくれ。

まるで楔のごとくアルフレリックの心に残り続けるウエルの願いを脳内に反芻しながらアルフレリックはゆっくりとドアを開けた。

扉を開けた先の部屋は一言でいえば使わなくなった子供の部屋、だろうか。

僅かに埃が残った本棚と、片づけられた子供用の木製のおもちや、その先に人特有の膨らみを持ったベットが存在し、その布団から突き出た頭と見たことのある長いウサギ耳がそこに彼女がいるということを示してくれていた。

「——っ」

声は出さない。

大声を出せば、ララシックの傷に障る可能性がある。彼女が重傷である以上、彼女に触れることも、大声をあげることも避けるべきだ。

ゆつくりと、動く。

少しずつ、少しずつ進み、ようやくララシックが寝ているベッドの隣へと来たところ  
で――

「……………何の、用だ。アルフレリック」

「――ツ!?……………起きてたん、ですか？」

「まっ……………なんとか、な……………痛っ……………」

「……………ッ!!無理しないでくださいっ!」

――突然の彼女の声にアルフレリックは驚愕の声を出しそうになった。

慌てて声押し殺し、心を冷静しようとするが上体を起こし、露わとなったララシックの姿を一目見ればその行動すら難しくなってしまう。

全身のあらゆる個所に巻き付けられた包帯、しかも四肢付近に巻き付けられた包帯は大きくそして濃い赤黒い染みが広がっている。顔色は青白く変化しており、ララシックの瞳は揺らいで、焦点がうまく合っていない。

おそらく今でも激痛を味わっているはずだというのにわざわざ上体を起き上がり

せようとするのは彼女の優しさか。

アルフレリックは起き上がらせようとすると彼女を優しく抑え、再び横に寝かさせた。

「……ああ、手間取らせてしまって……わりいな……」

「まったく……怪我人が何を言っているんですか？ いいからさっさと寝ていてください」

アルフレリックのため息の混じった言葉にララシークはそれもそうだな……と苦笑し、起き上がるの諦めたのを見てアルフレリックはようやく胸を撫で下ろしたようにため息をついた。

「傷のほうは大丈夫ですか？」

「……まあ、な。それよりもあのクソ爺ジジイの世話になるなんて……チツ……」

そう心底悔しそうに毒吐くララシーク。どうやら恨んでいるかはわからないもののララシークはウエルにいい感情は抱いていないようだった。

「ですが、ウエルさんは今にも死にそうだったララシークさんや僕までも助けてくれたんですよ？ ララシークさんはお父さんのこと、嫌いなんですか？」

「——ッ！ お前なんで知ってッ……ああ、そうか。あのクソ爺が話したのか」

「……ええ」

知らないはずの父親の存在がアルフレリックの口から出たことにララシークは驚愕

で目が剥くものの、すぐさまアルフレリックの表情からウエルからララシークの過去を聞いたことを察して、目を伏せた。

「……まあいい、私の過去なんてどうでもいいことだしな。「そんなこと——っ!」——それよりも、だ。アルフレリック、今日採取した植物はどこにある?」

「……それは、(トトト)」

けろりと自分自身の悲惨な過去をどうでもいいことだと断じたララシークにアルフレリックは声を上げて否定しようとするが有無を言わせないと見据える瞳にアルフレリックは二の口を告げなくさせられる。

そのまま彼女の命令に従って今日、アルフレリックが採取した植物がすべて納められた籠をベットの近くに鎮座している小さな机へと置いてしまう。

しばし、沈黙。

先ほどまで少年少女の声が響いていたというのにまるで無人のように無音の空間が形成された。

アルフレリックは喋らない。

いや、喋れない。

先ほどのララシークの言葉を否定しようとしたことが彼女にとっては何れほど侮辱する言葉だったかを言った後理解したから。

ララシークの過去をアルフレリックが悲惨だろうと思おうが真相がどうであるかは関係なくララシーク自身納得している過去なのだ。それを過去を聞いただけの部外者であるアルフレリックが否定するという行動は、傷口を広げるような行為であり彼女に對する侮辱なのだ。

それを理解し後悔してもすでに言葉はアルフレリックの口から飛び出した後なので止めようがない。

となれば今の自分にできることは彼女に謝罪することだと結論に至ったアルフレリックは謝罪の言葉を紡ごうと口を開き――

「凶々し過ぎましたね。先程の失礼な言葉、すみませ――」……が使いたかった――  
「え？」

――突如、アルフレリックの言葉を被せるように零したララシークの言葉を聞いて、アルフレリックはたまらず疑問の言葉を零してしまう。

聞き取れなかった。

先ほどララシークが呟いた言葉を今度こそ聞き取ろうとアルフレリックは無意識に聞き耳を立てて、今度は逃さなかつた彼女の言葉を理解して、アルフレリックの思考が停止した。

「魔法が、使いたかつたんだ……」

「……………は？」

思考に空白が生まれた。

ララシークの言葉を理解することができなかつた。

魔法？使いたい？誰が？ララシークが？

——亜人族であるララシークが？

彼女が呟くにしてはあまりに突拍子ななさすぎる言葉にアルフレリツクは二の口を告げれず口を数度。パクパクと開閉してしまう。

当たり前だ、そもそも『魔法』とは魔法陣へ詠唱により魔力を流し発動する秘儀。体内に魔力を持った人族や魔人族が使えるものであり、身体能力は高いものの体内に魔力を持たない亜人族が魔法を使うことができないうことなど亜人族のだけれどもが知っている一般常識である。

ララシークがそんな一般常識を知らないはずがない。つまり彼女はそれを知っている。てなお魔法を使いたいと思つていうことにアルフレリツクは愕然としてしまう。

そんなアルフレリツクの様子など気にせずララシークはアルフレリツクがいらない方向へ横向きになりながら独白を続ける。

「クソ爺に聞いたとは思いますが私は七歳の頃、帝国の人族に一族諸共襲われた。その時の光景は今でもハッキリと思い出される。家族の悲鳴、人族の嘲笑、宙に舞う赤い血。そして——鮮やかに輝き彩る魔法」

そして一拍おき、彼女は言葉に溢れんばかりの憧憬の念を込めて、告げた。

「それに——私は見惚れとれたんだ」

それがララシークという少女の原点。

ララシークはその時の光景を忘れない。

響き渡る家族の悲鳴と地面に飛び散る赤い液体、しかし当時のララシークはそんなことなど気に留めず。帝国兵の手から射出され宙を翔ける魔法へと夢中になっていた。

綺麗だった。

美しかった。

友人も家族も襲われているというのに胸が高鳴り、高揚した。

だからその時にまるで天命の如くララシークにはある一つの目標ゆめが生まれたのだ。

すなわち、それは魔法の使用。

亜人族が魔力を持たないことは知っている。

亜人族が魔法を使うことができないことは理解している。

だが、それがどうした？

巫人族には魔法は使えない？

ならば作ればいいではないか。

巫人族でも魔法が使える装アーティファクト置を——ツ!!

「クソ爺に迎え入れられた時も私の頭には魔法を使うことしかなかった。魔石が必要になつたら一人集落から抜け出して躊躇なく魔物を殺してはぎ取つたし、一族の奴らにも時間の無駄と思つて馴染もうとしなかつた」

ララシークはウエル達に馴染めなかつたのではない。馴染まなかつたのだ。彼等と関わるよりも魔法を使うことができるアーティファクトの研究を優先した為に。

「狂つてるだろ？ 私だつて自覚はある。だけど止められない。どうやったら魔法を使うことができるのかつて、私は好奇心が抑えきれない、抑えられないんだ」

それがララシーク・ハウリアという少女。

魔法という存在に囚われ、執着した夢を叶えるがために行動する求道者。

それ故に兎人族特有の仲間意識や絆の深さを大切にしない異端児。

それがララシーク・ハウリアの本性さがだった。

「忌み子、鬼子、私のことを噂ではそう広まつてたらしいが実際に得ているとは思わな  
いか？ 他の兎人族が持つてる仲間意識が薄く、狂つた夢を持つてる私にびつたり言葉  
じゃないか」



合う。彼女の行動とウエルの話に辻褃が合ってしまう。

ララシークが一人姿を日が暮れる時まで隠してしまったのは、魔法を使うために動いていたから。

今回アルフレリックが行ったように樹海へと飛び出して行ってたからだ。

一族の者と馴染もうとしなかったのはアーティファクトを作るにあたって邪魔になるからだ。

ララシークの目的を知ればウエル達は集落の外へ向かおうとする彼女の行動を止めようとするだろうと思ったから。

おそらく兎人族の間で広まっていた噂も本当のことなのだろう。

魔物の胸が抉られて死んでいたという噂はララシークが魔石を剥ぎ取った結果によるもの。

忌み子が魔物を殺しまわっているという噂は彼女が魔物を狩る姿を誰かに見られてしまったのだろう。

考えれば考えるほどウエルの話でララシークの行動の意味が理解できたことにアルフレリックは背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。一体彼女はそのアーティファクトを作るためにどれほどの試行錯誤を行い、そして今もしているのだろうか？、と考えるだけでも眩暈がしてくる。

「……何故、それを僕に教えてくれたんですか？」

「ん？ああ、今日お前が言つてただろ『採取した植物を何に使うか？』つてな。言いそびれてたから伝えただけさ」

そう言つてララシークは此方へと体の向きを変え、わずかに微笑する。

「今日はありがとな、アルフレリック。ぶつちやけお前がいなければ私は死んでたと思う」

「……………」

そう言つて感謝するララシークの言葉にアルフレリックは顔を俯かせて何も言わなかった。それはララシークの本性に恐怖を抱いたせいか、それともまた別の理由か。

ララシークはどうでもいいかと内心そう思いながら「けど——」と一拍を置いて言葉を紡いだ。

「——もう、私に関わらないほうがいい」

でなければ、最悪お前は死ぬぞ。

言外にそう告げるララシークの言葉、それはきつと彼女なりの思いやりなのだろう。

自分を産んだ一族は、皆煙のように喪失した。

自分も受け入れてくれた一族は、彼女の噂に翻弄された。

そして、アルフレリックは今日、化け物に襲われた。

今までの経験からララシークは自分と関わった者に碌なことが起こらないと理解していた。

他の兎人族とあまりにズレて、狂っている自分に関わっても不幸なことになるだけなのだ、と。

そのララシークが思いやりから来たその拒絶の言葉についてアルフレリックは顔をあげ――

「――お断りします。僕も、その亜人族でも魔法を使うことが出来るようになる研究を手伝いますよ」

――さも当然のように拒否し、同時に爆弾を投下した。

余りにも自然に投下されたにララシークは一瞬思考が停止したかの如く間抜けな顔を晒すこととなった。

「……………はあ!?!お前、人の話を聞いていたのか――痛ッ!!?」

そして、再起動。さも当然のように呟いたアルフレリックの言葉を理解して、さすがのララシークも目を見開き、己の傷すら忘れるほどの驚愕だったらしく、ベットから乗り出そうとして奔った痛みで悶絶する。

だが痛みにも悶えようともしらしくは、瞳は困惑と驚愕の二色に支配されたまま訳がわからないとばかりにアルフレリックを射抜いていた。

「つう……アルフレリック、お前なんで……？」

「と言われましても僕が何をしようとしらしくは、何か言われる筋合いはないですし、それよりもあまり大声を出すと傷口に障りま——」そうじゃないだろ……!? 何言ってるんだお前……!! 私は家族の死に何も感じなかった忌み子なんだぞ……!? なのになんで……」

わからない。

理解不能だ。

彼女の今している表情はまさにその一言で表せられるだろう。

彼女はアルフレリックの意図が理解できなかった。今回のように恩を返す為に手伝うのならばまだ理解できた。森人族は恩や誇りを大切にする種族だ。きつとそういった者もいるのだろうと納得できる。

だが、彼女の性を理解して、彼女と共にいることの危険性を理解して、それでなお、彼女の馬鹿げた夢を手伝う?

なんだそれは? 嘘ならばもつとマシな嘘をつけとララシークは罵ってしまいそうになる。

しかしアルフレリックの瞳は真剣そのもの、嘘の気配など微塵もない。だから、わからない。と彼女は困惑する。

なにせ自分には異質だ、兎人族特有の仲間思いは薄く、邪魔だからと一人で行動し、家族が襲われた時も魔法に夢中になって何の感情も浮かばなかった。

そんな兎人族にいったい誰が手伝いたいと、近づきたいと思うのだろうか。

だが、だからこそアルフレリックは彼女の夢を手伝いたいと思った。

なるほど、確かに彼女は異質だ。兎人族特有の仲間思いは薄く、邪魔だからと一人で行動し、家族が襲われた時も魔法に夢中になって何の感情も浮かばない兎人族彼女以外存在しないだろう。

彼女は言った。自分は忌み子だと、狂った馬鹿らしい夢を抱き、同族を何とも思わない悪鬼だと。

だがそれではララシークのことで説明が出来ないことがある。

「なら、どうしてララシークさんはわざわざ集落から離れて外に新たに拠点を作ったんですか？」

「……………え？」

間の抜けた空気が漏れたような声が彼女の口から聞こえてきた。

そうだ、それだけが理解できない。ウエルが語った過去ではララシークが孤立しない

ように噂を自分の集落には伝わらないように尽力したものの、偶然通りかかった隣の集落の子供達と出くわし、化け物と罵られ、石や枝を投げられたという。

なるほど、確かに理解できる。出会ったばかりの子供達に化け物と罵られ、石を投げられ、枝を投げられ、淘汰し、拒絶させられたのならば彼女が集落を抜けたということを一応理解はできるだろう。

だがそれはララシーク以外だった場合の話だ。

ウエルは言った。自分を守れなかったことをララシークは恨んでいるだろう、と。

だが、彼女の言動や声色を見る限りそれは無さそうだ。彼女の声に含まれる殆どの感情が自嘲だ、ウエル達に対する恨みや怒りどころか蓋を開けてみれば己の夢の為に馴染むつもりもなかったという有様である。

ならば、何故ララシークは集落を抜けた？せつかくの衣食住を捨てるデメリットよりも遥かにマシなメリットが外には存在したか？なにせ相手は仲間思いの兎人族である、幾らララシークが異質であったとしても兎人族は、ましてやウエルほどの人格者は決してララシークを見捨てたりしないはずなのだ。

ならば、何故？

「そ、それは………っ」

その問いかけにララシークはなぜか言葉を詰まらせた。

そんな彼女の異変にアルフレリックは苦笑して、「これは僕の安易な考察ですが………」と小さく、しかし確かな確信を込めて己の考察を口にした。

「ララシークさんは当時、偶然出会った隣の集落の子達に出会うまで噂のことが知らなかったのではありませんか？」

「……………」

その言葉にララシークは応えない。

アルフレリックの言葉に肯定をしてはいないが同時に否定もしていなかった。ただ顔を俯かせてアルフレリックの言葉を聞き入っている

その様子にアルフレリックは自分の考察が決して的外れではないことを確信する。

「当然です、何故ならウエルさんが集落に広まらないようにしてくれましたから。貴女が隣の集落の子と出会うまで噂の欠片も知らなかったでしょう。集落の外でも無断で「フェアベルゲン」から樹海に向かうことは掟に反してしまう以上ほかの人にも見つかるわけにいけませんからね」

ウエルがララシークを思つて彼女が迫害や孤立しないように尽力した噂の蔓延防止。集落に噂が広まることがないということは逆に言えば中に住むララシークも噂のことを知らないということなのだ。

故に彼女は知らなかった。他の集落の者と出会うまで、ウエル達が一体どれほど尽力

していたかを。

噂を広まらせないようにするということは決して簡単な行為ではない。

何故ならば他の集落と交流する時点で高確率で噂は広まってしまふからだ。故に噂を広まらせないようにするには限りなく他の集落との交流をなくさなければならぬ。だが、それを行うことはその他大勢の兎人族の迷惑を掛け、他の兎人族たちの苦情や敵意を受ける行為となるのか。

「ララシークさんはそれを止めたかったんじゃないですか？」

だから、そのことを理解したララシークは集落から去った。

これ以上他の兎人族への苦情を受けることがないように、再び、他の兎人族達と交流できるようにするために。

自分という存在を集落から離れさせることで。

それがアルフレリックが至った考察だった。そうでなければ辻褃が合わないだろうとそう意を込めて説明したアルフレリックの言葉にララシークは小さく、「馬鹿馬鹿しい……」と呆れた声色で呟いた。

「アルフレリック、お前は私を美化させすぎだ。私は家族の死に何も感じなかった忌み子だぞ？ そんな女がわざわざそんなことをすると思うのか？」

「ええ、しますよ。貴女なら」



「——なっ……!?!」

呆れたように否定するララシークの言葉、それをアルフレリックはララシークならばすると即答した。

まさか即答してくるとは思わなかったのだろう、再度彼女の表情が驚愕へと染まる。「だって、ララシークさんは優しいですから」

「——」

そして、続くアルフレリックの言葉に今度こそ言葉を失った。

そんな彼女を尻目にアルフレリックはそうだ、と自分で口にした言葉を再度内心で肯定した。

ララシークが本当に心を持たない化物ならば今アルフレリックはここにいない。今頃あの化け物の腹の中だ。

あの時、二人が出会った化け物は最初、間違いなくアルフレリックを狙っていた。つまりあの時ララシークは化け物から一人で逃げる事が可能だったはずなのだ。だが、ララシークはアルフレリックを助けた。

あの時はアルフレリックが夢に近づくために必要な植物を持っていたから?——いや、違ったらわざわざアルフレリックを抱えて逃げる必要はなかったはずだ。自分から植物を奪い取り、化け物の時間稼ぎの餌にしまえばいい。

だが、彼女はそれをしなかった。アルフレリックを見捨てず逃げ、己の命を犠牲にアルフレリックを助けようとした。

なるほど、確かにララシークは異端だ。

兎人族特有の仲間思いは薄く、邪魔だからと一人で行動し、家族が襲われた時も魔法に夢中になって何の感情も浮かばない兎人族彼女以外存在しないだろう。

だが、それでも彼女は優しいのだ。

アルフレリックを決して見捨てず、ウエル達にこれ以上の負担がかからないように躊躇なく己の居場所を捨ててしまえるほどに。

ララシーク・ハウリアという少女は他の兎人族とは仲間への思い方が違うだけの心優しい少女なのだ。

「だから、僕にもララシークさんの夢を手伝わせてください」

だから、アルフレリックは彼女の夢の手伝いをしたいと思ったのだ。

初めて出会った自分と対等に見られ見ることができながら、自分とは対極の境遇を受けた少女のことを。

その言葉にララシークはどう思ったのだろうか。

ただ、顔を伏せたまま小さく、ポツリと呟いた。

「……………バカだよ、お前」

ポツリと、しかし堪えていた思いを滲み出したかのように思いを込めたまま、彼女は言葉を零した。

「……………何が……………優しいだよ……………っ、知った風に、言うくせに……………頼んでもないのに、勝手に関わって……………勝手に…傷つき…やがって……………クソ爺も、お前も……………どいつも、こいつも……………っ、馬鹿ばっかりだ……………っ!」

「……………」

彼女の嗚咽のこもった言葉に、アルフレリックは何も言わない。

彼女が今零す言葉、それはきつと、長年溜まった彼女が奥深くに眠らせていたものだろう。

だが、その長年溜めてきた思いをアルフレリックはあくまで聞いただけで体感してはいないから、何も言えないし、言うべきではないのだ。

だから、アルフレリックはゆっくりと立ち上がり部屋を出るべく扉へと向かった。

嗚咽を漏らし続ける彼女を見て、今は一人にしておくべきだと、そう思ったからだ。

今、彼女は初めて胸に溜まっていた思いを発散させているのだから。

「……………アルフレリック」

「なんですか?」

だが、扉へと手を掛けるその直前でララシークがアルフレリックを呼び止めた。

アルフレリックは振り向かない、ララシークも寝たままで視線を此方へと向けたりはしていなかった。

「———ありがとな」

だが、それでも彼女の言葉に秘められた感謝の思いは確かに真摯で本物だったから。

「———どういたしまして。ララシークさんに助けられたお礼ですよ」

アルフレリックは彼女の為に取ったこの行動が間違いではなかったと確信し、誇らしげな気持ちでララシークの眠る部屋から出て行ったのだった。